

世界樹の迷宮 光求めし者達

鞍馬山のカブトムシ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界樹を守る偉大なる三体の龍が倒れて千年。龍が倒れてすぐに来た滅びた王国の子孫たちの手により、世界樹を中心に街は建てられて、「エトリア」は繁栄した。

そこへ、かつては世界を席卷した遊牧民族の末裔である者が来た。一人の武者の下で数年の厳しい修行の末、一人前と認められたその者は更に数年をかけて、苦楽を共にする、自身を含めた立派な六人の冒険者パーティを結成。

この物語は迷宮攻略が半分辺りに差し掛かる頃ところから始まる。そして——そこから、彼ら六人を含む数多の冒険者。冒険者で成り立つ自由の国エトリアは数々の大いなる嵐に立ち向かわなければならなくなる。

*ご意見・感想・誤字脱字などの指摘お願いします(こういったキャラを出せ、○○活躍させろなどは承りません)。

目次

到着編

序章 エトリア伝承 | 1

一話 斃れて後、已む。それぞれの旅立ち | 9

第三階層攻略編

二話 きばらし（ついで過去語り） | 31

三話 傍観者 | 44

四話 休暇 | 54

第四階層攻略編

五話 地底決起集会 | 66

六話 枯れた世界 | 76

七話 詰所の若者二人 | 93

八話 案内 | 110

九話 再び三階層 | 127

十話 ああ、不運 | 136

十一話 第四階層探索開始 | 149

十二話 軍事演習 | 165

十三話 急接近 | 183

十四話 交渉決裂済み | 190

十五話 第四次地下大戦 | 206

一六話 生け贄 | 245

登場人物一覧 | 278

十七話 決断と抵抗 | 285

十八話 新たなる階層へ | 315

第五階層攻略編

一九話	超古代文明	343
二十話	浅く潜る	355
二一話	深く潜る	371
二二話	会合	388
二三話	巨人討伐	404
二四話	再会	436
二五話	試験	450
二六話	短い余暇	466
二七話	エトリア生誕祭	482
二八話	犯罪者	507

探索番外編

二九話	白き姫君は終末の夢を見るか	522
三十話	絶望のさなか	542
三一話	暴露	555
三二話	レンとツスクルの仲間	577
三三話	エドワード、発つ	603
三四話	不在期間	638
三五話	近寄る嵐	652
三六話	さらば、こきようよ	671
三七話	大いなる影	697
三八話	攻防戦	710
三九話	抵抗	740
四十話	決死隊	755
四一話	広沃ヶ原の合戦	775

到着編

序章・エトリア伝承

かの地にあるどこの国にも属さぬ中立独立都市・エトリアには、大きなとぐろを巻いた蛇の骨がある。実はその骨は蛇ではなく、大空を飛翔する龍であつたと伝えられている。

これから語られるのは、約一千年前にエトリアが誕生した伝承の省略版である。

ここが「エトリア」と名付けられる何万年も前。天を突かんばかりの大樹が聳えていた。その大樹の周りには、三頭の龍がいた。

一頭は、一吹きで大地を燃やし尽くす赤い龍。

一頭は、海をも凍らせるほどの冷気の力を抱く蒼き龍。

一頭は、雨雲と雷を支配する黄金に輝く龍。

三頭の龍は喉の乾きや餓えを満たす時以外は、片時たりとも大樹から離れず、大樹を守り続けた。まるで母にでも寄り添うかのように。

・赤い龍の顛末——

だが、長い歳月で人も動物も変わるもの。龍として例外ではなかった。

長い寒波の時代が訪れた。蒼き龍と金色の龍は耐ええたが、赤い龍は耐え切れず。また、永きに渡る歳月で芽生えた好奇心と知識が抑えきれず、赤い龍は大樹から飛び去り、広大な大海原へと飛翔した。

赤い龍は自身の力に多大な自身を抱き、自身に敵なしと考えていた。現実には残酷なものであつた。一部例外があつた。この赤い龍の眼下にある大海原には、赤い龍ほどではないが力を持った伝説上の怪物が存在していた。

赤い龍は海上でそれらの怪物達と戦いを繰り広げた。しかし、赤い龍は長い旅で疲れはて、長きに渡る寒波のせいで本来の力が失われていた。赤い龍は半数の怪物たちを殺したところで逃げ去つたが、いつ

果ててもおかしくなくなった。

赤い龍はどこかの海岸に着地し、眠るように息を引き取った。

その海岸には既に人間が住んでおり、人間たちは赤い竜の存在に畏怖したが、死んでいると知るや、人間たちの中でも勇敢な者が赤い龍の遺骸に触れ、「見よ！　これは偉大なる者の思し召しに違いない！　我らはこの龍の遺骸を礎にして、ここを開拓して繁栄するのだ」と宣言した。

後に、この海岸は海都アールモードという都市が建てられる。現在でも海都には龍の骨の一部が展示されている。

・蒼き龍の顛末――

長い寒波の次は、長い乾きの時代が訪れた。黄金の龍は蒼き龍を愛おしく想い、懸命に雨を降らせて乾いた自身の鱗と蒼き龍の鱗を癒そうとしたが、蒼き龍も黄金の龍も力は衰える一方だった。

蒼き龍も永きに渡る歳月で好奇心と独立心が芽生え、黄金の龍の忠言も聞かず、安穩の地を求めて大樹から飛び去っていった。

蒼き龍は北へ北へと向かい、飛び続けた。だが、どこもかしこも早魘で大地は枯れ果て、蒼き龍が定住できそうな土地は見つけられなかった。蒼き龍はめげずに北へと飛び続け、ある緑豊かな高地を見つけた。

蒼き龍は喜んでその土地へ飛んだ。しかし、そこにも蒼き龍と同様、安住の地を求めておぞましい獣^{けだもの}たちが待ち構えていた。

蒼き龍は最後の力を振り絞っておぞましい獣たちを冷気の力で打ち砕き、安住の地へ足を降ろした。龍が胸を撫で下ろしたのも束の間、けだものたちとは別の勢力が蒼き龍を襲った。

それは人間たちであった。この人間たちは戦い方や武具の鍛え方を心得ており、人間たちは突然の来訪者を刃を持って歓迎した。

おぞましい獣たちの戦いで力を使い果たした龍はいとも容易く人間たちに討たれた。

人間たちはおぞましい獣たちを砕いた龍を倒した。これはきつと、我らが今後も脅威を退け、繁栄と栄光の証となるであろうと喜んだ。

事実、この高地に住む者たちは繁栄を極めた。龍がおぞましい獣たちを全滅してくれたお陰でもあるが、人間たちにとって龍も同じおぞましい者たちの一種であり、人間は獣同士で殺し合いでもしたのだからうとしか思い至らなかった。

後に、大陸の遙か北方にあるこの高地はハイ・ラガード公国として栄える。言い伝えでは、蒼き龍の骨は王家の地下の奥底に眠っていると噂される。

・黄金の龍の顛末――

赤い龍と蒼き龍が去ったあとも、黄金の龍だけは大樹を守り続けた。

寒波と旱魃の時代も去り、四季が普通に移り変わる安定した時代へ突入した。同時に、以前は生態系の支配者層の人間も力を付け始めた。

大樹より離れて一千里先に、科学と錬金術が発達した国が誕生した。

彼らは錬金籠手と呼ばれる物を媒介とし、魔法使いのように火・雷・氷・毒などを創り出せた。そのほか、様々な建築技術や武器の製造法を編み出した。現代でも近隣諸国やエトリアでは、建築様式の技術の一部にその国の技術が用いられている。この国はエトリアが誕生してから百年後、大戦火と大災害に遭い消滅した。一部の子孫が兄弟都市であるエトリアへ難を逃れた。

彼らは「アルケミスト」と呼ばれる一党となり、世界を放浪した。

この時代、一千年前はエトリアにはエトリアという名前はない。大樹から二百里離れた先に、名も無き集落が点在するのみだった。ここにアーサー率いる子孫の一部が難を逃れ、定住した。アーサーは一番若く、優秀な末息子アルソールに如何の言葉を遺した。そして、彼らは王の血を受け継ぐ者でもあった。

「我ら錬金術師たちはかの大樹を解き明かしたかった。あの大樹にこ

そ、世界の神秘と理ことわりが眠っているに違いない。押しくらむは、あの忌まわしき邪龍の存在。そして、我らの国を滅ぼした国の存在。この二つの障壁があり、手をこまねいているうちに我らの夢は潰えた。だが、アルソール。今我らの子孫は一応は自由の身。かの国も滅び、残る障がいはその金色の邪龍のみ。

頼む、アルソールよ。私の生涯最期の願いを聞いてくれ。あの邪龍を討ち、我らの代わりに、あの大樹の下に横たわるはずの理を見届け
てくれ」

「ですが、父上……」

アルソールは言葉を迷った。

「父上のお気持ちは痛いほどわかりますが、私には武器といえるもの
といえば、錬金籠手しかありません。私は匠の錬金術師なみの強力な
術式は使えますが、恐らく、あの龍には通じないでしょう」

すると、アーサーはにっこりと微笑み。ベッドの下へそろそろと手を伸ばし、なんの変哲もない長方形の鉄の箱を五つ取り出して蓋を開いた。中には、普通より太く長い矢が五本収められていた。矢には複雑な紋様が施され、掴みの部分はねじ巻いていた。

「これは、サジタリウスの矢。これがあれば、千の軍勢でも恐るるに足らん」

アルソールは震える手で五本の矢を手にとった。見目の割には矢は軽かった。

サジタリウスの矢。錬金術の国でもごく一部の者にしか伝えられなかった、兵器。錬金籠手と異なり、これは一回使ったらそれっきり。だが、威力は錬金籠手を上回っている。

矢は匠の錬金術師が放つ術式数十発分を込め、それを圧縮して放つことができる。その威力は凄まじく、例えば、炎であれば空をも焦がすと伝えられている。あまりの威力に国は矢の製造法を隠したが、国が滅んだ際に製造法を知る術師は死に絶え、矢は幾つかに別れたその子孫が持ち出した物しかもう残っていない。アーサーはその術師の一人と懇意の仲で、戦乱の最中、その者から五本の矢を預かっていたのだ。

「私にこれを使い。龍を討てと?」

アーサーは幾重にも皺が刻まれた顔をほころばし、頷いた。

「そうだ。一本だけでも事足りるかもしれないが、用心を期して三本持っていけ。無事にかえってこれたら、一本は家宝に。一本は後世の研究の材料として残すがよい」

遺言を伝えてから六日後、アーサーは天寿をまっとうした。生没年に詳細はないが、少なくとも八十歳は越していた。

父が亡くなる前も後も、アルソールは部屋に閉じこもった。人々は彼が亡き父を偲んでいると思っただが、そうではない。アルソールは日夜、サジタリウスの矢に術式の力を込め続けていたのだ。

アルソールは仕事にも手を付けず、矢に力を注ぎ込んだ。一本には毒の力を。一本には氷の力を。一本には、彼が最も得意とする炎の力を注いだ。龍は雨雲と雷を操ると伝えられているので、雷の術式は避けた。

彼は親戚に、短い旅に出るとだけ告げると、彼は馬に乗って大樹へ向かった。その際、兜様式の宝石を散りばめた豪華な王冠を被った。細工を得意とした錬金術師たちの意匠が施された、立派な王冠兜だ。「決戦の場での衣装ぐらい、好きに決めさせてくれ」

大樹が視界に入り、更に近づくと、馬は怯えいななき逃げ出した。とぐろを巻く龍の姿が見えたからだ。

勇んできたものの、彼は龍を前にしてその勇気がしぼんだ。帰ろうとしたとき、大樹から一人の老人が彼に近づいた。老人は自らを大樹に住まう賢者と名乗り、彼にこう告げた。

「やはり、いくら力を与えても、単なる空飛ぶ蛇では大樹を守るのは無理であったのだろう。そこでじゃ。もしお前さんがあの龍を討ち取れば、大樹の奥底は見せられぬが、大樹の浅い世界にある物を持ち帰るがよい。それらは富に替わり、きつと街をも建てられるであろう」「なぜそのような申し出を私に?」

賢者は意味ありげな笑みを浮かべた。

「大したことはない。人間が成り代わって支配してくれたほうが、こちらとしても都合が良いだけじゃ。一つ、協力してやろう。今日一日

かけて、わしはあの龍の力を弱らせ目を潰す。お前さんはその背に背負った毒の矢を使い、龍の力をさらに弱らせ、氷の矢で龍の尾を地に引き止め、残る炎の矢で龍の頭を射抜くのだ」

アルソールはこの賢者の助言と協力を受け入れた。

翌日。アルソールは窪に隠れ、龍の様子を窺った。龍はいつもと変わらぬが、息遣いが荒々しかった。アルソールは正面から龍に近づいた。百歩ほどで触れる位置にいるのに、龍はアルソールに無関心だった。

アルソールは賢者の助言どおり、早速毒の矢を射た。もくもくと真つ黒な毒煙がたちこめ、龍を苦しめた。次にアルソールは氷の矢で龍の尾を地面に引き止め、慎重に狙いを定め、炎の矢で頭部を射抜いた。

こうして、大樹を守る最後の龍は途絶えた。

炎が消え、毒が風で薄れたとき、賢者が現れ、アルソールについてくるよう示した。

賢者は一カ月かけてアルソールに英知と力を授けると言い、アルソールは喜んでこの賢者に教えを請うた。

一カ月半後、アルソールが帰還した。帰ってきたアルソールは人が変わったようであり、まるで何者かが乗り移ったかのようなだった。

アルソールの頭上にあの美しい王冠は無かった。彼は告げた。

「必要ない。あれは、そう、エトリアの王冠とでも名付ければよいか。地の底に置いてきた。これからは、この地、エトリアに君主や王は要らぬ。民自らの手で全てを治めるのだ。ただ一つ、そのようなものがあるとするれば、偉大なる世界樹を崇めればよいのだ」

アルソールは龍を退治した証拠にと、龍の髭と牙の一つを背負っていた。アルソールは人に、大樹の下へ移り住まうことを提示した。

アルソールは変わった指導者選出方をも伝えた。

指導者は常に潔癖であらねばならず、指導者なる者は男女問わず、貞操を守り、夫や妻となる者は娶らぬこと。もし指導者たる資格があるにしても、その者が既に夫か妻を娶る、あるいは誰彼と契りを交わ

しているようならば資格なし。次代の指導者になる者は一カ月、密やかに現役の指導者の教えを請い、細かな役割と記憶を受け継ぐこと。指導者はその身を大樹に埋めること。現代でも、エトリアの執政院の長は選挙ではなく、この奇怪な方法で次代の長が選ばれている。

独裁者が生まれまいかと懸念の声もあるが、目下のところ、そのような人物は一度足りるとて誕生しなかった。

妻を娶らず、貞操を守り、龍を討ち取った勇敢な自分こそ相応しいとアルソールは推した。アルソールはさながら武勇に語られる勇士の威容を放っており、兄弟親戚一同に、傾聴していた全ての人々は彼が長になることを諸手をあげた。

住まわせて貰っていた村の者たちも付き従い、アルソール率いる集団は大樹に定住した。

アルソールはこの土地を、かれの国の言葉で冒険者や開拓者を意味する「エトリア」と命名した。更に、かれの兄弟が大樹に名を与えた。世界を見下ろす大樹、「世界樹」と。

彼らはアルソールの指導の下、世界樹に潜った。そこは驚異と驚異に満ち足りていた。明らかに地上に住まう生物とは異なる異形の生き物。地上にはない鉱物・植物の数々。かれらは危険を掻い潜ってこれらの富を得て、錬金し、それを各地方に卸した。この街の職業の一つ、「冒険者」は元はエトリアの住民が富を得て、街を発展させるためにあつた。

世界樹の迷宮は広大。一階層の一階ですら、今だ未開拓な場所が多々あり。現代の地図に記載された一階の全容は、実は全体の一割にも満たないと見解は一致している。

初代長アーサーは亡くなる前、遺産の全てを分配・処分した。その中にはなんとサジタリウスの矢も含まれていた。親類一同は猛反発したが、彼は「かのような兵器という負の遺産は遺さないことこそ後代の為」と跳ねのけた。

二本は処分されたはずであつたが、一本は彼の親類がこっそり抜き取り、隠した。彼はのこる一本をどこに隠したか固く口を閉ざし、病

没した。一本は確実に大陸のどこかにあるはずだが、隠された場所は判明してない。

アーサーは親族からは跡継ぎを選ばず、冒険者を止めて一介の市民として暮らす者を次代の長に選び。一カ月、誰にも明かされぬ大樹の秘密の地に潜り、アーサーの体は人知れずそこで葬られた。

アーサーが亡くなったのち、世界中からエトリアの世界樹の下に広がる御伽噺でしか存在しえない未知なる世界の噂を聞きつけ、各地から旅人、盗賊などのならず者、傭兵くずれ、そして純真な気持ちを抱いた冒険者が集った。

エトリアに住まう住民たちは生活できる程度に採取すれば問題なかったが、これは更なる繁栄を極める好機と考えた。エトリアの住民はいっしょか、自分たちが偉大な錬金術の国の子孫だということも忘れて、各地から集う冒険者たちを相手に商いの範囲を拡大させた。

かくして、現代に至るまで、エトリアは数多の冒険者と世界樹の下に住まう生物の血肉を糧とし、栄華を極めた。

*よく見れば、矛盾やあまりにも説明不足があるのは、これはあくまで大衆向けに発行されたエトリア伝承の“省略版”だからである。本当のエトリア伝承が記載された蔵書は厚さ二千ページにも及び、細かな文字が上下びつしりと詰められている。

時間があれば、是非とも図書館にも収められた正式なエトリア伝承を読んでもらいたい。

執政院ラーダ広報部よ

り

一話 斃れて後、已む。それぞれの旅立ち

千年の時を経た今もなお、エトリアの繁栄は衰えをみせない。

この物語は、そんなエトリアのある冒険者の一行にスポットを当てて、進められるお話である。

朝日で赤く燃ゆる草原に一人、一頭の黒い雌馬を近くに侍らせた少年がいた。短く刈った金髪が風で微かになびき、緑の衣装から覗かせる腕や首は太く、筋骨逞しい。鷹のように鋭い碧眼へきがんは静かに羊たちの動向を眺めていた。

東の方角。馬とは違う灰色の物体が列をなして近づいてくる。あれは――。

「狼だ！」

少年は叫んだ。急ぎ、口笛を吹き、家族に危機を伝えた。

少年は狼の群れを見やった。狼は疾駆している。身で風を切り、大地を駆け抜ける様は、ある昔話を思い出させた。

「蒼き狼！」

少年は歓喜した。

「蒼き狼だ！ 蒼き狼が来たぞ！」

危険なはずなのに、少年の顔は綻んでいた。二頭の馬が人を乗せて接近してくる。彼の父親と兄だ。少年も後に従おうとしたが、髭面の父親に母さんと妹を守れと命じられ、洩々母と妹の方に向かう。

狼たちは二頭の馬が接近してきたと見るや、呆気なく引き返した。賢い。恐らく、群れを率いるのは、“噛み砕き”に違いない。噛み砕きはここ最近、家畜ばかりか人も襲うようになり、騎馬民族エクウウスの悩みの種であった。

少年は被害に遭った者達に同情はしていたが、一方で、例の狼へ賞賛の気持ちも抱いていた。

先祖の蒼き狼と呼ばれた人物は、正にあの狼のように人々に畏れられ、敬われた。僅かにだが、その狼を見た少年の心に、失われた民族の誇りを思い出させた。

父と兄は悔しそうに引き返してきた。父の腕前をもってしても、あ

そこまで離れていては、大地を駆ける狼に矢をあてるのは無理である。

「口惜しいが、家族と家畜。どれひとつ欠けることが無かつただけでも幸いか」

仕事も終わり、ゲルの中で変わらぬ家族団欒。そのはずであったが、夜になると、戦える者達は皆集まり、会談を行っていた。子供は駄目で、少年は話に参加できないのが悔しかった。

「ああ。僕がもう二年早く産まれていたら、あの会談に参加できたのになあ」

大人たちが子供に聞かせたくない夜の会談。それは、戦である。

騎馬民族エクウウスはかつて、世界を席卷した騎馬大国に属する部族のひとつ。元からその騎馬大国に属するものではなく、征服された後、忠誠を誓った者達が部族として受け入れられ、繁栄した。

騎馬大国の者達の乗馬技術と馬の生産は世界一と謳われた。圧倒的な人数と機動力を用い、世界を一時的に支配した。そう、一時的に。王が亡くなると同時に部族間で、次代の王を巡る争いが勃発した。エクウウスは中立を保ったが、彼らも争いに巻き込まれてしまった。

人は減り、部族で袂を分かち、世界を席卷した大国は歴史の表舞台から消えた。

それでも、このエクウウスやもうひとつ、カルツバスという元の騎馬大国の血を色濃く受け継いだ者たちは今も生き残る。

もつとも、自由に放牧するカルツバスと違い、エクウウスは別の国に匿われ、土地を与えられた。以来、民族は国に忠誠を誓った。

そして、国が大国と一戦交えることになり、エクウウスも恩に応えるべく、参戦した。

大国が優に十万を越すの対し、こちらはエクウウスの五百騎を合わせても、たかが五千。国の者達は誇り高く、大国の無条件降伏を断じて拒んだ。この国以外にも、合わせて三ヶ国の国が参戦するが、ようやく二万余に達するぐらい。

一年後。三ヶ国は大国と干戈^{かんか}を交えた。

少年の父。名はゲロリオン。少年は父に憧れていた。父は民族の中でも一番の射手と名高い。

百メートル離れた動く鹿の心臓を射抜いたとも言われる。

彼と兄は父を敬い、いつか超えるべく、絶えず修練に励んだ。

特に、少年は凄かった。幼い頃から他の赤ん坊より一回り大きく、他の子供よりどんどん大きく成長した。ばねのような筋肉を持ち、目は鋭く、遠くまで見通せる。

また、喧嘩っ早く、度々他の子供に怪我を負わせたりもしたが、弱い者や臆病者には決して拳を振るったりせず、困っている者がいれば、例え気に食わないと思っても、助けた。

彼は仕事よりも、父や大人たちから教わる武器の扱いや乗馬術の方を好んだ。

彼は暇さえあれば、雨の日、風の日、雪の日、炎天下の日だろうと、武術の修練にひたすら励んだ。少年には夢があった。遙か遠方にある、騎馬大国の獲物から外れ、千年経った現在でも繁栄を続ける国・エトリア。

エトリアにある世界樹の迷宮へと、いつか行きたいと願っていた。

世界樹の迷宮には隠された財宝。太古の文明。この地上にいる怪物よりも手強い沢山の種類の怪物が生息すると聞く。誰一人、踏破をした者はいない。

ある日、少年は時折り訪れる旅人から話を伺い、こんなことを聞いてみた。

「もし、僕がその迷宮の謎を明かせば、僕と僕が産まれた民族はエトリア一有名になるかな？」

旅人は笑って答えた。

「ははは！ エトリアどころか、世界で一番有名になるだろうな。きつと、更なる繁栄をもたらしてくるに違いない」

座を共にした身内の者たちは一笑に付したが、少年は信じた。自分はいつかその地に赴き、必ずや、一族を独立させるきつかけと作り上げよう。

国の待遇は悪くないが、やはり、税を納めるなど制限がある。長ら

く居ついて不満を持つ者はいなかったが、少年は違うだろと考えていた。

我々は縛られる者ではない。もっと、自由に世界の草原を駆けてもいいはずだ。少年の願いも虚しく、戦火は国を襲った。

父など大人たちに戦う理由はと聞いた。皆、真面目な顔して、一様にこう答えた。

「恩義を果たすため。我らの先祖はこの国に住まわせてもらい、生き長らえた。恩義を果たすためにも、我らは勝てる見込みが薄くとも、戦わねばならん。不忠義が生き長らえることは無いのだ」

少年は反論する術を持たず、うんと頷く他なかない。それでも、こう思わざるを得なかった。

国の人たちには感謝してもしきれないが、もしも今頃、他国の民族として縛られていなければ、戦に参加する必要は無かったのだろうか？ 少年は戦い自体を拒んでいなかったが、この戦いが不利だというのは子供ながら理解していた。少年は戦に行きたかったが、生憎十六歳未満と大人と認められる年齢ではなかった。

大多数は男であるが、僅かに女性の騎手もいた。一人頭、馬二頭が宛がわれた。大国の最盛期には、一人頭馬数頭が宛がわれたというが、その栄光は遙か昔に潰えた。

総勢、五百騎と五百頭の馬が行軍する様は壮大である。あの中に、少年の父と兄もいる。

父は去り際、少年の顔を自身の眼に焼き付けようと、じっと覗き込んだ。父に肩を掴まれながら、言われた。

「だとな国が滅ぶことがあっても、生き残れ。何をしても生き残り、一族を再興してくれ。これは、私からお前への頼みであり、皆の願いでもある」

父は物を遺さず、言葉と願いを少年に託し、戦場へと赴いた。

母と妹のミラニイ、愛馬の黒い雌馬ブケファラスと共に五百人と千頭の背を見送った。一族の繁栄とか独立はどうでもいい。今はただ、あの五百人が無事、勝報を持って帰るのを祈った。

民族が住まう地には、たまに使いの者や戦えなくなった身の者が訪

れ、身内の安否を告げた。五百人いた者たちは、今や半数を下回るといふ。彼らは口を揃えて、手綱捌きもさることながら、あれほどの弓術がそうお目にかからないと褒め称えた。

エクウウスは軽装騎兵隊の主力として最前線で働き、敵を扇動したり、斥候に出て、夜襲をかけたたり、大将首を何個も討ち取るなど軽装騎兵隊は活躍していた。父と兄の悲報はまだ聞かない。何人かの話をまとめたら、黒曜石の如き黒い雄の悍馬に乗る偉丈夫はこれまで、三人の将校クラスを射殺したと聞かされ、少年はそれが父ゲロリリオンだと知った。

人は減ったが、勝利。悪くて引き分けに終わるのではないか？ そう考える者もいたが、甘くは無かった。

初めこそ善戦していたが、圧倒的な物量質量に押され、大国が要請して別の国から二万の援軍が来たことにより、戦況は敗色濃厚へ。

一年後。少年の十一歳の誕生日を迎えた日、大敗退の報が届いた。死者三千余名、一年間に亡くなった者の数を合わせれば、一万人を超す。

数日が経ち、片足と右目を失った一族の戦士の一人が帰還した。彼の口から、少年の父と兄が亡くなったことを告げられた。

一族の騎兵隊は敵に囲まれても、命乞いせず、最後まで戦った。時に黒い悍馬に乗った者は、敵の中でも高名な者と一騎打ちをして、見事に勝利した。しかし、勝利して束の間、大量の矢を浴びて死んだ。

息子は仇を討とうとしたが、どこからか強烈な槍の一撃を受けて落馬した。

少年は世界が停止したように思った。世界は自分を中心に回っており、その自分がこう思ったりすれば、その通りになる。だが、実際にそんなことは到底ありえず。少年の心が停止しても、世界は残酷なまでに時を刻んでいた。

その日、少年は久しぶりに泣いた。誰かの為、自分の為、月に向かって吠える狼のように泣き叫んだ。

民族は長老の弟を新たな指導者として、最後まで立ち向かうか、残るかを話し合った。彼らの多くは、去ることに決めた。

多大なる犠牲を払い、国に恩義は十分返せたはず。留まる意味は無い。しかし、一部の者は反対した。少年は、最後まで戦おうと呼びかけた。

独立を願いながら、最後まで残って戦う。矛盾してるのはわかってるが、死んだ者たちの事を想うと、国を見捨てるのはあまりにも身勝手だ。

大多数の意見に吞まれ、少年など一部の者の意見は封殺された。そうして、民族大移動を始めようとした日、敵国の兵士たちが領地の奥深くまで侵入してきた。

大国は他二国を見逃す代わりに、一番抵抗した中心的な存在であった国を滅ぼすことにした。

思ったよりも早い侵攻に、人々は恐怖で逃げ惑う。

家は焼かれ、家畜や作物は奪われ、男は殺され、子供は奴隷や召使として連れ去られ、乙女や艶が失われてない女たちは男たちの欲望に充ちた鞆丸で身を穢された。

逃亡中。山まで差し掛かった時、遂に敵国はエクウウスの民にも魔の手を伸ばした。分厚い鎧で身を固めた騎士団と歩兵隊が狂暴な人相を浮かべて襲ってくる。

少年は見た。

隣のゲルに住むおじいさんが捕まり、斧で首を切断されたのを。年上の友達であるお姉さんが押し倒され、服を引きはがされ、泣き叫びながら体を舐め回される光景を——。その様は、決して世に謳われる華やかな英雄伝とは異なる光景だった。

混乱のさなか、火矢で燃える馬が突進してきて、思わず母と妹の手を放してしまった。

「逃げろー！ いいから、俺のことはほっといて逃げろー！」

そう、叫んだ。母は手を伸ばそうとしたが、人波に吞まれ、手を握れなかった。少年は母の手を取らず、ブケフアラスに二人の下へ行くよう命じた。

が、馬はどこから飛んできた矢が首に当たり、少年に向かって倒れた。少年は慌てて身を翻し、馬の下敷きになるのを避けえた。

敵が迫ってくる。少年は二人の安否を確かめる間もなく、山へと逃げ込んだ。いつでも反撃できるよう、両手はしっかりと弓を弾ける準備をしておいた。

自分に向かつて、鎖帷子を来た兵士が斧を持って迫る。おじいさんの首を切断したものだ。躊躇いなく、矢を放つ。矢は見事に喉元に命中した。淡が詰まったような血混じりの咳を吐くと、兵士は膝を付き、どさりと樹に頭を打ちつけた。

敵を倒した感慨も、人を殺した悲しみや苦しみもない。ただ、襲ってきたから返り討ちにしてやった。それだけのこと。

更に山奥へ逃げる途中、小さな子供を抱えた親子連れを見かけた。親子は追われており、父親は片足を負傷していた。騎士と思しき者が手に剣を持ち、殺そうとしていた。騎士ではなく、傭兵の類かもしれないが、どちらでもいい。

少年は静かに弓弦を引き絞った。騎士が家族を逃がそうとする父親を捕まえた時、「おい」と一声かけ、注意を逸らした。騎士が少年を佇む方を見た瞬間、鎧通しは胃の隙間を潜り、額を貫いた。

礼を言われるまでもなく、少年はさっさとその場から立ち去った。男の子が父の下に駆け寄り、泣きながら行こう行こうと父親の袖を引っ張り、母親は父の肩を担いだ。

男は少年の名を呟き、感謝した。

「さあ、早く行こう。チノスよ。もう、泣き止め。泣くのは後だ、男だろ？」

チノスと呼ばれた幼子は口をきつく縛り、無理やり泣き止もうとしたが、えぐえぐとえづき、鼻水が止まらない。

大国による徹底的な搜索と殺戮は続いた。逃げのびるために、その国に居た者たちは身分を隠す他無く、乞食に身をやつす者もいた。

少年は山中でさまよった。声を潜め、母や妹の名を呼んだが、答えてくれる者はいない。少年はしばらく、山で一ヶ月の間、野生児の暮らしをした。元より、自然環境下に身を置いて暮らしてきた民族。山や厳しい自然で生き延びる術は身に付けていた。

眠るときは木の上で眠った。水を飲み、汚いと思えば水をこし、木ノ実食べ、リスやネズミに鳥などを捕え、餓えを凌いだ。

山から降りる前日。いや、山から降りるきつかけとなる生き物に出会った。

一年前、朝日で燃ゆる草原の下で見た狼、通称噛み砕き。噛み砕きは普通の狼より一回りもでかく、人間で、武器を持つ少年を前にしても臆さず、威風堂々としていた。

殺される。本能で悟った。少年は諦めてなるものかと、狼と睨み合った。どの位たつたのだろう。狼はぷいとそっぽを向き、少年から離れた。狼が離れた方向を見た。木々の隙間から、見渡す限りの草原が広がり、町も見えた。

そうだ、いつまでも山にいてもしようがない。人が居る場所に行つて、みんなを探さなければ。大国ももう、搜索を切り上げているだろう。

この時、凶暴と恐れられた狼が何故、自分を襲わなかったのか。今になつてもわからない。

きつと、馬の神様と先祖である蒼き狼と父さんたちの魂が狼に宿つて導いてくれたに違いない。少年はそう信じた。

人に話したら、馬鹿げている。満腹で、食う気が無かつただけだろうと言われたりしても、少年は狼に一族の魂が宿り、自分を導いたと頑なに信じた。少年は山を下り、ある目的を持って北西から東南へと旅をした。山を下りた少年の顔には、見る者をぞつとさせる並みならぬ迫力があつた。少年に一瞥された者は、彼をこう例えた。狼だと。

少年の目的。それは、世界樹の迷宮。母と妹を探すことも考えたが、あまりにも絶望的に思えた。そこで、ならば、どこかで名誉と金を得て、自分の噂を聞きつけた民族が集まれる場所を作ればいいのではないか。少年は旅人たちから聞いた世界樹の話思い出して、エトリアを目指し、旅をした。

行く先々で母や妹の消息を尋ねたが、少年が滅ぼされた国の者と知るや、口をつぐむか。胡散臭い目で見られたので、その国の出身であることは迂闊に口にしないよう心掛けた。

弓とナイフはある。少年は二つの道具を使い、生き抜いた。世界樹ではなくても、地上にも魔物と呼ぶに相応しい恐ろしい動植物が存在する。それらの存在を感知したときは、息を潜め、自らを死体と思いつまませて身を隠した。魔物以外にも、敵はいた。人間だ。

一度ならず二度も、盗賊と遭遇しかけた。ときは夜、一度目は襲撃の帰りを目撃。一人は馬に乗り、残りは徒歩。若い娘が一人、腕を縄で縛られていた。計十一人。

道を行くと、馬車が壊れ、馬は足や首の折れて、六人ぐらいの大人が倒れていた。金持ちだろう。雇った護衛は皆、息絶えていた。二人は矢で、一人は槍で貫かれて、一人は頸動脈をぎつくりと剣で切られ、吹き出した血が一面の草木を濡らしていた。

良い服を着た男女は、二人とも血塗れであった。斬り殺されたのだろう。普通に考えれば、先の若い女は二人の娘だと分かる。

気配を感じ、密集した針葉樹へと逃げた。十一人のうち、九人が戻ってきた。死体の処理を命じられた九人は、適当な穴を掘り始めた。運悪く、少年が隠れた樹の下に穴を掘った。死体は雑に積まれ、土を被せられた。

九人が去った後、少年はとつと逃げた。助けまい。あの女性には悪いが、自分にはどうしようもない。

それから三日後、またしても、例の一味に遭遇した。高い草むらに身を伏せたが、見つかるかもしれない。

盗賊たちが警戒の声を発した。見つかったか！

恐怖で身が縮まる。しかし、盗賊たちが見かけたのは少年ではなく、きこりであった。彼らはあのきこりを消すであろう。少年は心が疼いた。この前は助けられない状況であったが、今はどうだ、きこりは恐怖で泣き叫んでいる。少年は自身が兵士たちに追われ、同胞が殺される場面を思い出した。少年は自分を嘲笑った。何が誇り高き騎馬民族だ。小汚い馬乗り共相手にこそ隠れるのが戦士か。もしも、ここでまた盗賊風情に逃げ出したら、目的は到底果たせない気がした。そうだ。やるのだ。一矢だけでも射て、きこりが逃げる隙だけでも作るのだ。

少年は盗賊の最後列をこっそりと後を付けた。そして、二人がきこりを抑え、馬上の者が覆面の下で残忍な笑顔を浮かべてきこりを殺そうとした。少年は怯えた。盗賊への恐怖だけではなく、頭領の男から、人間とは掛け離れたぞつとする邪悪な気配が感じられたから。

少年はなげなしの勇気を振り絞り、貴重な矢を使った。見事、覆面の男の顔に命中した。

かしらあ！ という叫びに混じり、エトウという呼び名も聞こえた気がしたが、少年の耳にその名は届かなかった。

ここから先は覚えてない。盗賊は口々に、このクソガキが！ 止まれ、てめえのような屑はぶち殺す！ 盗賊は罵りながら少年を追いかけた。

とにかく、野を越え、山を越え、命からがら逃げおおせたことしか記憶にない。それほどまでに自分もまた、あの盗賊たちを恐れていたのだ。これ以外にも、自然の脅威。怪物の脅威にも何度か遭遇した。地下世界ほどではないが、現在でも地上の世界に怪物はいる。そういう時は、穴に隠れたウサギのように、ひたすら地面に身を伏せた。

食料が乏しくなる厳しい冬も、一期一会で心ある人達に助けってもらったりして、少年は何とかやり過ごした。

春が来た。疲れてゆつくりと歩む道中、農場に行き着いた。一日かけて観察して、ここの農場なら良い。ここで働かせてもらって、路銀を稼ぐことにした。

門を叩き、働かせてもらえるよう、過剰ともいえる馬鹿げた頼み方をした。剣と弓を捧げ、農場主を領主の奉るという頼み方だ。意外にも功を奏し、少年は一年間、農場で働いた。

農場での一年は緩やかなもので、少年はともすれば、自分の気持ち揺らぐのを感じた。そんなときは目を閉じ、自分が見たあの光景を思い出した。あまり思い出したくないが、迷いが生じた時に思い出せば、身が引き締まる。

一年後、少年は農場主と別れ、路銀と移動用の馬を貰い、旅を続けた。もう一回、小さな町の旅籠で五日間働いて多少の路銀を稼いだ。

そして、農場から一ヶ月と半月の旅。少年は苦難の末、エトリア領

内へ到着した。

だが、少年の心には迷いが生じていた。このまま行つて、本当に達成できるのだろうか？ 噂は所詮、噂でしかなく。実際はちよつとばかり大きい樹にしか過ぎないかもしれない。

エトリアにはエピザトーティとメティルリクとの国境線が集まる箇所。地上の樹海がある。迷路のように入り組み、少なからず怪物たちも生息し、危険な動植物がうようよしている。開拓しないのはリスクが大きいのも理由にあるが、万が一の防衛ライン。引いては逃げ場にもなりうると思えられて、地上の樹海は手付かずの状態だ。樹海を避けて通り、いよいよエトリアの街が間近に迫りつつある。

あくる朝、少年の迷いと疑問は全て吹っ飛んだ。

エトリア本都市から伸びる、世界樹の名を冠した大木。朝日で輝く天を貫かんばかりの大樹を見て、少年の心は感動で打ち震えた。

世界樹を見上げ、少年は固く決意した。

どんな辛いことが待っていようと、諦めない。地獄ならもう見てきた。ここまで来て、引き返せるもんか。

英雄になつてやる、必ず！ 世界樹の迷宮にどんな怪物が潜もうとも、返り討ちにしてくれる。世界樹の迷宮で人間を殺したとしても、涙は流さない。自分の目的を邪魔するものは、人や怪物、神や王であれ、容赦はしない。

少年の顔は、見る者をぞくりとさせる鬼気迫る凄さがあった。

エトリアの国旗が目につく。緑に黄色で染め抜かれた世界樹の旗がひるがえる門を通り、エトリア本都市に入門した。

少年が来た時にはまだ、脅威と呼べる存在はなく、エトリアには新米冒険者に課す試験を課す制度は制定されていなかった。一応、簡単な素行調査とか面接をして、ギルド長のもとで適当に登録を済ませば、簡単に冒険者になれた。

隻眼のギルド長は少年の無礼とも取られかねない態度をいたく気に入りに入り、ある武芸者へと少年を紹介した。

少年はその人種を初めて見た。東洋出身者と語る彼らの髪は黒く、

目も黒い。カルツバスの民を数名記憶しているが、彼らとどこことなく似ていた。

腰にはこれまた、見たことが無い剣を帯にぶら下げていた。刀という名称の片刃の武器で、彼ら東洋出身の武芸者の多くはこれを身に付けているようだ。

総髪頭と同じくらい逆立つように伸びた長い髭の男。落ち着いた物腰とは裏腹に、目付きや動作には油断というか、隙がない。

男性は源衛門げんえもんと名乗った。ゲンエモンの値踏みする視線にも、少年は負けじと睨み返したら、ゲンエモンはかつかと笑い、肩の力を抜けたと言った。

「ほれ、わしと彼も名乗ったのじゃ。あんたは人から自己紹介されたら、自分は黙っていると教えられたのか」

こう言われては、少年も名乗り上げるしかない。少年が素直に本名を明かすと、男性はまたかかと笑い、手を差し出した。少年は困ったように顔をきよきよと動かした。

やがて、男性の手を握り返した。男性は笑みを絶やさず、少年の頭をがしがしと撫でた。

ギルド長は意外と思った。少年は抵抗するかと思いきや、大人しくゲンエモンに頭を撫でられていたからだ。

少年はゲンエモンに、亡き父の面影を見た。

ゲンエモンには他にも弟子がいて、その弟子たちと共に、世界樹の浅い階で探索をしつつ、修練に励んだ。

彼は孤自戦流という、一対一を想定した剣術の師範代でもあった。真剣勝負という誰の助けもない孤独な中でも自らを律し、戦いの流れを制するの意から。

当たり前であるが、ゲンエモンの修行は相当厳しく、何名か脱落する者もいた。エドワードはめげずに修行をこなした。彼にとって、ゲンエモンの厳しきもまた、亡き父に通じるものがあつた。

「どうしようもない間違いをした者。愚かなことをした者がいれば、嫌われようとも、その者を強く叱れ。それはその者のため、引いてはお前自身のためにもなる」

こう言つて、ゲンエモンは世界樹の迷宮の冒険や日常生活に置いて、有頂天になった者や慢心した者を叱つた。

五年間の修行では、ただ武芸に打ち込むのではなく。礼儀作法、字の読み書き、算術や地理に歴史などの勉強、一般常識についても学んだ。ゲンエモンは侍だ。だからといって、剣術を強要したりしなかつた。極めたいと望む者がいれば喜んで教えたが、そうではないという者がいても、卒なくこなせる程度に扱えられて損は無いと剣術も教えた。

他、街で働いたりもした。何をするにも、まず金じゃ。修行とて、武器や道具を使う以上、金が入用になる。また、何を成すにも、人の繋がりが大切だ。

ゲンエモンのこの教えを嫌う者もいたが、少年は成る程、現実的だなど、素直にこの教えを飲んだ。

ゲンエモンは少年の乗馬の技術を素直に褒めた。これに関しては、ゲンエモンが逆に少年から教わることが多くあつた。共に学び、窯の飯を食らい、武芸に打ち込み、世界樹の迷宮に潜る。

悲しいことに、修行の一貫である迷宮の探索で命を落とす者が一人いた。ゲンエモンはその時、こう言つた。涙は地上が上がってから流せ。目を瞑るな。逸らすな。さもなくば、涙で視界が霞んでいる隙を突いて、樹海のけだもの共に喉笛を噛み切られるぞ。

月日は瞬く間に経ち、五年の歳月が過ぎた。

五年の歳月で少年は心身共に大人へと成長した。ただでさえ逞しい体はより強靱になり、顔付きも更に引き締まつた。見る者は彼を一目で偉丈夫と認めた。

夏の頃、ゲンエモンは弟子たちを一部屋に集めた。

二十人いた者は、四分の一の五人まで減つた。ゲンエモンは弟子たちに朴訥な調子で語つた。

「もう、わしから教えることは無い。一人立ちするのもよし。わしについていくのもよし。エトリアから離れ、新たなる新天地を目指すもよし。好きにせよ」

二人、禿げ頭のラクロワと女剣士のニツツアはゲンエモンにお供を

すると言つて、頭を下げた。

別の二人、若侍のコウシチと騎士の恰好をしたストレートロングの金髪の女性シショーは、独立すると言つた。彼は迷つた挙句、何事も区切りは大切だと、一人立ちを選んだ。

少年はゲンエモンに覚悟はあるかと問われた。

「英雄になるとは、生半可なことではゆかぬぞ。例え英雄への道を目指さなくても、一度滅んだ一族の復興は辛く険しい。何でも受け入れるというが、人は些細なことで手の平を返す。このエトリアとて、例外ではないとわしは思う」

「承知しています。しかし、俺がやらなくても誰かがやるだろうと能天気過ぎるのは御免被りたい」

およそ少年らしからぬ強固な意志にどこか怒りが同棲した表情。もしも、親がいて普通に暮らしていれば、こんな顔にはならなかつただろう。ゲンエモンは折れて、少年の行く道を見守ることにした。

有名な冒険者の下で修業したからつて、万事すぐに上手くゆく訳もなく。彼は二年間、一人で冒険者をした。誘いもあつたが、誰かの下に付いての成就是拒んだ。

二年の間、まるつきり一人ではなかつた。ゲンエモンや他のパーティに協力する形で、冒険や酒場からの依頼に付き合つたりした。

彼のパーティ、「ホープマンズ」。訳せば、希望を持つ者たち。彼のパーティが完成し、大成するのは実に数年も先の話。

—————

四角く突き出た鼻以外は、これといった特徴がない、樺色頭の背の大きな青年はぼーつと田畑を眺めていた。

ここは東山の村。本当は名など無いが、お情けで東山の村とでも名付けられた。

青年の名はコルトン。彼は村での生活にほとんど嫌気がさしていた。皆、毎日普通に暮らせればそれでいいじゃないかと言うけど。生活は豊かではないのに、普通も糞もあるか。

一通り仕事が澄んだら、ぼーつとする毎日。本も少なく、娯楽らしいものも殆ど無いこの村。もつとも、この時点では字は読めないが。

居座ろうという者たちの気持ちだがコルトンには分からず、逆に村の者や親戚にとつて、コルトンの考え方が異端であつた。

ある時、国が戦争すると聞いた。村の大半は関係無いものと決め込んでいた。何故なら、この村は国境にあり、統治者たちからも重要視されてなかつた。一人、コルトンは違つていた。村から出て行けるチャンスと喜んだ。親戚や友人たちの反対の声を押し切り、コルトンは傭兵として戦に参加した。

だが、夢と現実の違いを思い知らされただけであつた。戦は負けが込み、コルトンら傭兵たちは食うのにも困る毎日。傭兵は所詮、現物奪取。勝つて、敵兵の装備や敵国の物を奪つてなんぼである。

コルトンのような者は他にもおり、威勢良く鬨を叫んでも、戦場では及び腰で戦わせるとなると時間を要した。コルトンはそれほどでもないが、多少動ける兵なら沢山いたので、顔は覚えて貰えるはずもない。

戦の最中、コルトンは様々な者たちから話を聞いた。

そして、『世界樹の迷宮』の話を目にした。エトリアという、文化的にも発達していた国は知っていたが、世界樹は初耳だ。コルトンは、これこそ自分が求めていた物に違いない。そこで、『冒険者』という職業に就こう。

あくる日。軍が珍しく打ち勝ち、陣営は賑わつた。コルトンは体格の良さもさることながら、運も良く、無傷で陣営に帰つてこられた。

一時の勝利に過ぎないという意見の者もおり、コルトンもその意見に賛同した。

コルトンは運良く、貴族の身分の者が身に着けていた宝石など高価な物を奪えた。コルトンは軍を抜け出ようという者に声をかけられると、あっさり応じ、軍を抜けた。

彼らの予想は当たり、三ヶ国は次の戦いで述べ死者三千人を超す大敗退を喫した。村に帰ったコルトンんは幾らかの金や宝石を親や親戚たちの前に置くと、旅立たせてくれないかと頼んだ。

親戚一同はコルトンの旅立ちを許可した。そして、コルトンは意気揚々に村を出た。

コルトンは長い旅を続け、世界樹を目の当たりにしたとき、目的が変わった。

この世界樹の迷宮でなら、豊か生活ができるところか。俗に言う、英雄にすらなれるのではないか。

コルトンは世界樹を見て、そう思った。

高い水準の教育を受けた訳ではないが、それなりの礼儀を知っているコルトンは、ある事でギルド長に大変気に入られた。エトリアの冒険者としての試験期間も難なくパスして、晴れて冒険者になれた。

*

エトリアと海を隔てた大陸。その大陸の中央にある街は排他的で、肌の色で人を差別し、エトリアでは受け入れられる者たちはそこでは受け入れられなかった。

街の貴族の子供。正確には、貴族が召使いから孕ませた子供は、たまたま人とは異なる特別な力を持ったために、迫害された。家族も、母以外は庇ってくれなかった。

少女は負けずと、影口を叩く者や見下した目で見る者には、痛烈な嫌味を堂々と言ってやった。

十代の時。彼女の母が亡くなり、庇う者がいなくなり、困った彼女はある高名な錬金術師が街を訪れた。彼女は錬金術師に弟子入りを懇願し、錬金術師はかなり渋って承諾した。

見送る者もない。彼女は街から出て、振り返ると、人差し指をぐいと突き立てた。

そんな少女を、師は諫めた。

「これ、アクリヴィイ。そんなことをしても、お前という人間の価値が下がるだけ。およしなさい」

アクリヴィイと呼ばれた、グレイブロンドの少女は挑むように師の顔を見上げながら、分かったと大げさなまでに頭を縦に大きく動かし

た。
アクリヴィイはもう振り返らなかった。絶対に、立派なアルケミストになってやる！ そう、強く誓う。

*

*

牛が怒り心頭、唸りながら突進する。人々はこぞって身を避け、牛に道を譲った。牛の背には、青い髪の毛の子が乗ってた。男の子は悪戯っぽい興奮した笑みを浮かべて、牛の足が赴くままに走らせた。

大人たちは口々に男の子を糞ガキ。悪童悪鬼。人の皮を被った化け物、と野次した。

大人は自分の子供に、あのロデイムのようにだけはなるなよと言った。うんと心底そう思う子もいれば、憧れる子もいた。

青髪という珍しい髪の色に赤茶の瞳。常に不敵に微笑んだこの少年こそ、ロデイム。エトリアにほど近い、山間の寂れた村の生まれ。彼は希代の悪童と呼ばれ、牛の背に乗り、鞭打って暴れさせるなど日常茶飯事。悪いことは、大体ロデイムのせいにする。その癖、女の子に対しては異常に弱いという、何とも矛盾を抱えた少年である。

両親と周囲は、この子がまともで普通な人生を送るのは難しいだろうなど不安に思った。両親の不安は的中し、ロデイムは良い歳になっても、酒はがぶ飲みするわ。暴力沙汰を起こすわでやりたい放題。

ロデイムはどうとう、親兄弟から内心、てめえなんぞ死んじまえとなじられる始末。

ロデイムにも夢はある。世界樹の迷宮に行くという夢だ。御伽噺にしか無い、地上では今や滅多なことでは見かけなくなったドラゴンや魔物たちが沢山潜むと聞く。

これぞ、自分の求めていたもの。農夫になって一生を棒に振るもんか。俺はロマンを求めろぜ。

エトリアやエトリアと隣接する発達した国に行きたいと願う者は後を絶たない。ロデイムに限られた話ではない。

「俺さあ、世界樹に行つて、一旗揚げてくるわ」

ロデイムが気軽な感じにこう言ったら、両親は喜んで、ロデイムに路銀を渡した。態の良い厄介払いができたと喜ぶ反面、息子の旅立ちに僅かながら、母は涙を流した。

「しんぺえすんな。今に、斧と剣の両刀使いのソードマン・ロデイムの名が轟くって」

こうして、ロデイムは見送られて、村を後にした。

ロデームはギリギリ、二ヶ月の試験期間をクリアした。晴れて冒険者の身分になれたのは良いが、自分を受け入れてくれるパーティ。あるいは、新米同士で手を組むか。二つに一つ。ロデームは後者を選んだ。

野郎ばかりのむさ苦しいパーティ。初めこそ、探索は順調だったものの、一階層のスノードリフトの群れに敵わず、探索は行き詰まった。ロデームは倒すことを提案したが、パーティは無理をしないに限るでまとまった。

ロデームの所属するパーティは、ロデーム以外は途中から、冒険に乗り気では無くなってた。更に進み、二階層に到達したものの、ここでもまた、ケルヌンノス討伐は他に任せよう。あの怪物は他に任せようと危険を冒さず、金も思ったよりも集まらない。

夏の頃、泥酔したロデームは切れて、仲間たちと喧嘩した。きつかけはどうあれ、この喧嘩で冒険に乗り気では無くなっていったパーティのリーダーは解散を告げた。

行き場を失ったロデーム。しばらくは一階層の浅い階で日銭を稼ぐ日々。そんな日々が続いたある日、ロデームは弓を背負った大柄な金髪の男に誘われた。

ロデームは男の誘いに飛びついた。すると、男は仲間と共に、ロデームに礼儀や勉強を学ばせた。ロデームは男にこんなことをして何になると噛み付いたが、押し黙った。

男の恐ろしいほど冷たい、きらりと光る鋼のような目力に押されたのだ。裏街道を渡った人間など、良くない人間とも何度か会ったりしたが、男の怖さはそれらとは別次元であった。

どんな怪物にも恐れ知らずのロデームは、久々に人間を恐れた。ロデームは人生で二人目となる、自分に拳骨を振るう父親以外の存在に恐怖した。彼のパートナーだという、傭兵崩れの男も手強く一筋縄ではいきそうにない。諦めてロデームが大人しく学ぶと言ったら、男は相手を崩した。

以来、迷宮を行ったり来たりしながら、礼儀や勉強を学ぶ毎日。俺は、ここに加入して良かったのか？ そんな疑問も、半年後には

大いなる喜びへと変わる。

*

綺麗に掃き清められた町。その町に住む医家の家に、一人の珠のような女の子が産まれた。

女の子はマルシアと命名されて、大切に育てられた。

マルシアには不思議な力があり、マルシアが手を触れて、集中すれば、小さな傷ならあっという間に治せてしまう。

両親は、この子には錬金術師流派の「メディック」としての才能があると大層喜んだ。

マルシアは可愛らしく、成長するにつれて、可愛いという褒め言葉は美しいへと変わった。

十代の半ばを過ぎると益々容姿と才能に磨きがかかり、正に才色兼備。翠緑の眼はエメラルドのごとく。緩やかにウエーブとカールがかかったシルバードロンドは高級な絹糸のような柔らかさと艶がある。桃やサクラランボのように薄らと朱色がかかった唇は若い男の欲情をそそり、隙あらば、かぶりつくようにその唇を奪いたいと思わせた。

しかし、彼女はガードが固く。彼女自身、男の付き合いにそこまで興味が持てないため、二十代を過ぎても、色事に関する話は聞かない。

両親は嬉しくも思ったが、娘が行かず後家にならないかと心配した。

春先。彼女は突然、こんなことを切り出した。

「エトリアに行ってみたいと思います」

両親が訳を尋ねると、更なる医療を学び、世界樹の迷宮に潜って新薬を開発したいと語った。当初、両親は強く反対したが、娘が今までに無いくらい強く粘った。結局、両親は娘の人生だから、娘の自由にさせてやろうと折れて、マルシアが冒険者になるのを許可した。

マルシアはもう一つ、こんなことを付け加えた。

「大丈夫。診療所はちゃんと受け継ぐわ。ただし、戻ってくるときは、素敵な男性というおまけも連れててね」と、悪戯っぽく微笑んだ。

エトリアの二ヶ月に渡る試験期間も難なくクリアした彼女は、金鹿の酒場の女将さんやギルド長に勧められて、ある四人組のパーティに

加入した。四人は諸手上げて彼女の加入を歓迎した。
特に、青髪の男の歓喜は尋常ではなかった。

*

*

雑多な人通りで、二人の黒人の兄弟が演奏していた。兄はガラクタで作ったタンバリンを叩き、弟も同じくガラクタで作った弦楽器で演奏しながら歌った。兄妹の足元には蓋が無い木箱が置かれてた。素通りする者が大半であったが、たまにコインを木箱へ投げてくれる者もいた。兄弟は演奏以外でも稼いだが、上手くいけば、普通している仕事よりも稼げたので、演奏が主要の収入源だった。

兄の演奏も巧みであるが、弟の演奏は兄より優れ、歌声はどこまでも透き通る響きがあった。

兄弟は貧しい。幼い頃から二人で支え合い、生きてきた。親はいない。父親は病に罹って亡くなり、母親は山にまで出かけた際、山賊に襲われて死んだ。以来、二人きりで暮らしている。

仕事が終わったら、町外れにあるボロい掘っ立て小屋で寝床を共にする。雨風を凌げるだけでもましである。小屋どころか、上着すら無い浮浪者は大勢いる。

どんなことがあっても、兄弟で手を取り合って困難を乗り越えた。だが、少年二人が青年と呼べる年齢に達すると、あることが起きた。

彼の兄は、良い仕事に誘われたと言った。綺麗な女性と人の良さそうな老人は兄弟に食事を与え、二人は少しの間、お兄さんを借りていくと言った。本当は弟と誘われるはずであったが、兄は家（ボロ小屋）を開けるのは不安なので、弟は置いていくと言ったのだ。

後にこの判断は、ある意味正しかったことになる。
三ヶ月して、彼の兄が帰ってきた時、弟は驚いた。何故なら、兄はがりがりに痩せた栄養失調の状態で帰ってきたためだ。

兄は病気に罹り、衰弱していた。兄は息切れしながら、弟に真実を伝えた。兄は二人に連れられ、大きな馬車に乗せられた。この時点で嫌な予感がしたが、武器を持った者達が怖く、大人しく運ばれた。

連れてこられたのは奴隷農場で、そこではお金はおろか、休みらしい休みも殆どもらわず。鞭を持った人間とは思えない恐ろしい奴隷

監督官の監視下の下、働いた。

兄は親しくなった者達と脱走を企て、逃亡した。逃げる途中、何名か捕まった。恐らく、もう生きてはいまい。

兄と数名は非常に運良く逃げおおせたものの、人を人として扱わない奴隷生活ですつかり体を崩し、重い病に罹った。医師に見せる金も無く、医師に見せても、治る見込みは無いと断られた。

弟は必死に看病したが、日に日に兄の容態は悪化した。帰ってきて五日後。

激しくひきつけを起こし、痰混じりの咳を切った。兄はそのまま眠りにつき、静かに息を引き取った。亡くなった晩の夜。弟は一晚中泣き伏せた。体に死臭が付こうとお構いなく、疲れて地面に眠りこけた。

翌朝、近所でも親しい者達だけの間でひっそりと、葬儀が執り行われた。情けで、宗教家の者が来て、亡き兄の冥福を祈ってくれた。

途方に暮れた弟は、これからどうしようかと迷いつつ、港に向かうことにした。近所の人が、仕事を探すなら港町に限ると教えてくれたから。

彼はある船長のお眼鏡に適った。労働船の船長であり、演奏家兼船員として来ないかと誘った。彼は迷ったが、他に行く宛てや雇ってくれる宛ても無いので、この船長の船に雇われることにした。船は大陸を渡るという。

彼はチャンスと捉えた。どうせ、行く宛ても身寄りも無い。行けるとこまで行つて、自分の新たな道を探そうと考えた。

自分も、兄と同じ末路を辿るのだろうか。不安に思いつつ、一ヶ月に渡る船旅が始まった。厳しい生活環境で体力だけはあるので、彼は船上で懸命に働いた。仕事は辛く、厳しいが、少なくとも、兄のように奴隷として働かされている訳でもない。食事はちゃんと与えられて、たまに休憩を貰い、その合間に歌や演奏で船員や船長の心を弾ませた。

一ヶ月後、彼はソロール・エトリアという港に到着。船長の話しによれば、金を持っている国のようだ。彼は礼を言つて船を降り、この港

を自分の新たな人生の出発点にした。

港に着いて次の日。彼は運命というべき出会いをする。黒い立派な馬に乗った馬上の人から声をかけられたのだ。馬上の金髪の人も馬に劣らず立派な装いで、興味深そうに自分を眺めた。

彼は男に素性を聞かれ、仕方なく答えた。

「僕の名前はジャンベ。見てのとおり、しがない楽士ですよ。それで、僕の演奏を聞きにきたのでしょうか？」

ジャンベは次に、男の口から語られたことを聞いて、驚き警戒した。だが、結局は男の誘いを受けた。兄の前例があるにも関わらず。

今思っても、不思議だが、どう思おうとも、自分が今現在世界樹の迷宮にて、冒険者をしていることには変わりない。

彼を迎え入れてくれた男と彼の仲間は優しかった。もつとも、始めのうちは男以外の者からは信用されなかったが、言よりも行動で示すことにより、徐々に信頼を得られた。彼に多くの知恵と戦いの技術を教えてくれた。ここに来て、初めて他人に心を許すことができた。

エトリアの街は居心地良く、自分が今こうして、自分の故郷ふるさとでは金持ちと言われた人達の生活がエトリアでは「普通」と言われ、自分がその「普通」の生活をしていることに驚きを隠せないでいる。

命懸けではあるが、冒険者になれて良かったと思えた。

第三階層攻略編

二話 きばらし（ついで過去語り）

緑のマントを羽織り、機能重視の張りが強い短弓と背と腰に矢筒を背負い、刃渡り六十CMの三日月刀を携えた、流れるような淀みない金色の髪の毛が世界樹へと足を向ける。世界樹を囲む外壁の門に佇む衛兵に挨拶もそこそこに、世界樹の下の広大な地下迷宮へと向かう。階層や階の特徴にもよるが、地上から一階層一階へ降りるには三分もあれば着く。

男は心を落ち着かせるために、メンバーに今日は探索は中止だと言った。

男は探索を目的に来たのではない。男は気晴らしを目的に一階層へ降り立ったのだ。

二階層は湿度でジメジメした不快な鬱蒼とした密林。三階層は打って変わって、文字通り、樹も土も天井も青々と染まっており、小舟でもなければ移動できないような箇所がある水生林の世界。

楽に、とはいかないが、二階層は他のパーティがケルヌノスを片してくれたお陰で通れた。

三階層十二階は、自らが率いるパーティが二十年ぶりに復活したかのクイーンアントとその護衛の殲滅に成功。

冒険者たちは更に樹海の奥へと潜り込めるようになり、自からが率いるパーティ「ホープマンズ」は一躍その名をエトリアに轟かした。

まだだ。まだ、終わってはいない。自分の数ある目的達成の為に、エトリアに名が轟く程度では困る。もつと……奥へ行き。もつと、更なる発見と功績を立てて、この私……今は、俺でもよかろう。

この俺、偉大なる騎馬民族エクウウス出身であるエドワードの名を広範囲に知らしめねば。

馬鹿な奴だと思うだろうが、私はこれこそ目的を叶えるにはこれが一番だと考え、こここの探索に挑んでいる。

世界樹の概容は御伽噺おとぎばなしそのもの。

だが、一步を下へ降りれば、例えば地上のネズミの数倍大きい紫のネズミに、モグラのくせに地上を出歩き長い刃物のような鉤爪をぶらさげている。

地上にいる生物とは異なる異形の生物たちが襲いかかり、そいつらと殺し合つて自らの榮譽、あるいは金目になる物をつかむというサバイバル。噂と現実はこうも違うと、思い知らされるわかりやすい一例だ。

そんなところに富・名声・権威・権威・発見・興奮・夢を抱いて潜る連中はいかれている。かくいう俺も、それを求める口であるが。俺の場合は前三つ（富・名声・権威）を強く欲して潜る欲深野郎であるから、救いようがない人間の部類に入るだろう。

それでも、責められたり、安穩した地で暮らしている倫理観豊かな御方達に命の重さとかを説かれても、冒険者を止める気はさらさらないがね。

何百年も昔、世界を席卷した国が存在した。

その国は、国民全員が弓と乗馬の名手であり、数十万規模の騎兵軍勢で、エトリアや数えるほどの地域や国を除き、世界を蹂躪した。

エトリアは独立中立都市と世界に公言して憚らず。避難民受け入れ以外は一切の武力抗争には関わらないと強く宣言し、その時代のエトリア首脳陣の上手い交渉術で、騎馬大国の獲物から外れたのであった。大国は世界を席卷したが、王が死ぬと同時に残された者同士で醜い権力争いが勃発。騎馬大国は王の死後二十年で解体。その後、格部族は災難や戦火の嵐に巻き込まれてしまい、衰退の一途を辿った。

今や、部族として纏まったものは二つ。一つは先祖と変わらぬ放浪の民として生き続け、一つはある国の戦士として仕え、代わりに、広い放牧と農耕の地を与えられた。それが、騎馬民族エクウウス。

エドワードの年齢は二十七。逆算して、十六年前。エドワードの国と民族は大国に滅んだ。その大国も、エドワードが住まう国を滅ぼしてから二年後には権力争いが起こり、国は荒れに荒れていると聞く。

戦火でエドワードは父と兄を失い。母と妹とも生き別れた。

国が滅んでから一カ月、着の身着のままエドワードは北西から東南へと旅を続けた。

弓やナイフを持っていたので、食える野草をはみ、狩りをして餓えを凌いだ。彼はある町の農場にたどり着いた。

エドワードは遠目から農場主とその一家を観察して、身成と住民との接し方もよく見てから良しと判断した。

エドワードはそこでこう条件を出した。

「二年間。定期的に出される食事以外は何もいらぬ。ただし、俺が一年間ここで働いた暁には、遙か遠方にあるエトリアに行きつけるだけの最低限の旅費と馬を一頭貰いたい。俺を信ずる証として、俺はこの弓とナイフをあなたに献上する。今この場で弓を叩き折り、ナイフは包丁代わりにしてもよい」

農場主は、少年の自分への君主に仕えるような態度に自尊心をくすぐられ、彼を雇った。

とはいえ、その農場主は元よりお人好しな一面があり、エドワードの境遇にも同情して雇い入れた。エドワードは彼のそういう面も見抜き、あえて彼にかしずいた。エドワード流の処世術であった。

立場が上な相手には卑屈でなく、さも敬っているように見せればいい。

彼は部族にいた頃、世界樹とエトリアに関する話は旅人から聞いていた。そこに行く理由は特にない。しいていえば、生きる為、継げる物ならなんでも良かった。

付け加えれば、血塗られた御伽噺の世界とやらの興味を持ったただけだ。

目下のところ、エトリアへ行って事を成すには金が要り用だった。

エドワードは一年間その農場で働き続けた。農場主はいたく彼を気に入り、エドワードの待遇を良くした。

エドワードは少年ながら非常に逞しくて働き者で意外にも賢く、他の者が一をやる間に彼は二、三をやっていた。彼が弓矢でたまに持ち帰る肉は、大層農場主の家族を喜ばせた。

一年後、エドワードは約束どおり馬と最低限の旅費（ぎつと二千エ

ン)をいただき、旅立った。

彼はその時、非常に惜しんだが、目的の為にと齒を食い縛り、農場を後にした。昨年、その農場にはお礼に若くて馬刺しとしても食える農耕馬一頭、乳がよく出る雌牛、健康な雌鶏と雄鶏を二羽ずつ送った。道中、少々の路銀を稼いで五日ほど立ち止まり、一ヶ月と半月の旅でエトリアに到着した。

正直、彼は途中からエトリアを目指す旅が億劫になり、あの農場へと戻りたくなつた。

あくる朝、彼はしかと見た。

朝日で神々しく照らされたエトリアの天をも摩すばかりの大樹を目の当たりにして、彼の心は興奮で打ち震えた。

そして、少年らしからぬ、彼の内に秘められた、身を焦がしそうなありとあらゆる欲望が掻き立てられ、同時にありとあらゆる夢・目標・計画が彼の中を走馬灯のように駆け巡る。

エドワードは大人でも萎縮するような凄い目と表情で大樹を見上げた。狩人であり、青い狼の目を持つ金髪の少年はぐつと大樹に拳に向けて拳を握りしめ、地平線のかなた北にある世界樹へと高らかに宣言した。

「世界樹よ、感謝する。俺は決めたぞ。俺は冒険者になり、お前の中身を洗いざらい調べ上ることによって多数のものを勝ち得て、我の名と我を育んだ民の名を世界に知らしめ、ここをエクウウス繁栄の地にする。俺が今ここで誓ったことが成就すれば、我が家の材木としてお前の枝の一本を折らせてもらおう」

さわさわと遠方にある世界樹が揺らいだ。まるで、この卑小な存在へやってみると挑発しているようだ。

五時間後、エドワードは興奮冷めやらぬまま、エトリアの門を叩いた。

ここまで荷と自分を運んだ馬への別れを惜しみつつ、この街に身を置くには身軽なほうがいいと考えて、武器装備に宿賃の費用として馬を売った。

もはや行動あるのみ、その頃はまだ白髪が目立たないガンリユーが住まう冒険者ギルドで登録を済ませ、エドワードは齡一三で冒険者としてスタートした。

ギルド長はその時のエドワードを一言で表せば、「クソガキ」と答える。ギルド長の常に鋭い眼光は知らない者から見れば、どう見ても堅気の面構えではない。

「ありやあ、ほんとクソガキだよ！ なんせ、大概の奴あ、俺を見ただけでびびっちゃうのに、あの餓鬼ときたら歯牙にもかけなかった。しかも、登録のさいに俺が目的はなんだと聞くと。いつかは語つてもいいだろうが、今はあんたに語る義理はないと答えた。俺はその生意気な餓鬼を睨んでやったが、奴はまるで、獲物を狙う猛禽類のような目でがんつき返しやがったんだから大したクソガキだよ。でも、俺あ、それでその生意気な奴を気にいつちまったね。もしかたら、大化けするんじゃないかと思っていたが、その通りになっちまったよ。ほんと、エドワードは大したクソガキだったよ」

ギルド長ガンリユーは大抵の者を「あんた」「やつこさん」「奴」と呼ぶが、お気に召した者や心を許した者はよく名前で呼んだりする。

こんな年若い者を雇うようなパーティはそうないが、ガンリユーを含む眼力ある者はエドワードの実力と将来性を見抜き、ある冒険者は彼を見習い兼雑用として受け入れた。

少年エドワードを受け入れたのは、ギルド長の現役時代のライバルであり、東洋出身の剣術使い、ベテラン源衛門^{げんえもん}。

エドワードは彼の下で五年間、冒険者としての心構えと技術を学び、礼儀作法についても学んだ。苦難の時代を過ごしながら、彼が礼儀をわきまえているのは、記憶にある両親の教えとこのゲンエモンの教育が大きかった。

因みに、ゲンエモンは自分のパーティに名前をつけていない。パーティ名の有無は個々のパーティの自由なのだが、冒険者や市民の悩みを聞く執政院ラーダとしては帳簿にまとめやすいので、出来ればパーティ名をつけてくれた方がありがたい。

独立後。エドワードはまたしても二年間、日銭を稼ぐのに一階層を

うろついた。彼はどこへも属さず、自分がこれと思う人物を探した。彼は自分でパーティーを設立してこそ意味があり、属して従うのは拒んだ。

その二年後、コルトンというやや老け顔の傭兵崩れの大男と出会い、彼は直感した。

こいつを加えればいける、と。コルトンは別名「蠍殺し」の異名を持つ。

コルトンはエトリアに辿り着くや、ギルド長の話もろくすっぽ聞かず、シリカ商店で購入した「新米冒険者セット」の装備のみで三階の凶暴な人食い蠍を仕留めたからだ。

その根性がギルド長に気に入られて、二ヶ月の試験期間を一ヶ月短くしてもらえた。

一年後、貴族の召使いから生まれ、不思議な力を使うという理由で気味悪がられ、母親が死んで直ぐにある錬金術師の下で修行をしていた女。真っ直ぐに伸ばしたグレイブロンド、細い狐のような切れ目の女錬金術師アクリヴィを引き入れた。

もう二年後には、金と刺激を求めてエトリアに来たのが目的だと語る。エトリアにほど近い国で生まれ、その国の寂れた山間の村から訪れた男。パーティーが解散して行き場を失った荒くれた青髪の剣士ロディムを加入させた。

半年後、血塗れの御伽世界と新薬開発と新医療開拓を夢見てここに来たと語る、自分以上の変り種。たおやかに微笑む翠緑の眼、薄らと朱に染まった艶かしい唇、緩やかにウエーブとカールがかかったシルバードロンドが印象的な美女、女医師のマルシアが仲間になった。マルシア加入により一つのパーティーが完成。これを記念して、エドワードは「ホープマンズ」というパーティー名を命名した。

更に一年半後。低賃金の労働船で大陸を渡り、この大陸で一花咲かせに来たのが目的だと語る、綺麗な澄んだ高い歌唱力と、あらゆる楽器を奏でられる才能を持つ黒人の青年ジャンベを誘った。

彼ら冒険者の絆とは友情で結ばれたものではない（そういうのもあるにはあるが）。

利害関係が一致してパーティを組み、何だかんだでお互い協力し合って幾つもの死線を掻い潜ったその絆は、「友情」などの生半可で小奇麗な単語では表せない。奇妙で、だが、どんな絆よりも深く強く結ばれ、そして案外脆かったりもする。

季節は春。地上は新緑芽吹き、農夫たちは鋤で土地を耕している。が、迷宮世界の環境は四季を問わず変わらない。

ホープマンズはいよいよ三階層十五階へと到達間近である。では、どうしてさつきと降りずにこんなところで油を売っているかといえば、エドワードにとつてこの浅層での探索は気持ちを静めるための散歩に他ならないからだ。

二百年前、執政院ラーダに保管してあった第四階層以降の資料が全て盗み出された。以来、四階層への資料をまとめたくてもそこまで辿りつけるような冒険者はおらず。二百年の間、正確には三階層十二階以降のデータは空白のままであった。

実はホープマンズより一足早く降り立ったパーティが他二組いたが、一組は恐らく全滅。

一組は一人を残し、他は帰らぬ人となった。生存者の証言によれば、白いような青いような平べったいでかぶつが空から来襲してきて、為す術もないまま怪物にやられたと証言した。

生存者はショックでまともに語れず、どうも記憶がうやむやで怪しいところもあるが、ともかく、とんでもない怪物が待ち受けていることだけは分かった。三階層十五階に到達するだけあって、決して弱くはない二組のパーティ壊滅の噂は冒険者たちを震え上がらせ、彼らに三階層の奥底へ行くのを躊躇させた。四組を除き。

一組は、オールドリッチという珍しくメデイックの男が率いる六人組。

一組は、この街を建てた錬金術師の子孫である、うら若き乙女の錬金術師が率いるパーティ。

一組は、冒険者たちの尊敬の的であり、エドワードに冒険者と人としての道を教えた侍・源衛門率いるパーティ。

そして、最後の一組がホープマンズである。

明後日みようごにちの早朝、十五階に潜む怪物を退治しに出発する。

一階層に来たのは、原点に戻り、ともすれば荒ぶる心を抑えようとした。

深層へ辿り着ける腕前があるからといって、一階層や二階層の探索を疎かにする理由にはならない。一度通り過ぎたら、二度と通らないわけではない。原点回帰、新米の育成、新たな発見、街から冒険者への依頼で潜ることが多々ある。

探索に慣れて観察眼が優れた冒険者なら、生物を刺激せずに歩ける方法を知っている。エドワードは優秀な狩人であり、さとられずに樹海生物の背後に忍び寄ることもできる。

執政院リーダーの取り決めで、冒険者は以前のように「冒険者」ではない。

全てを挙げれば、レンジャー。ソードマン。カースメーカー。パラディン。メイディック。バード。アルケミスト。ブシドーのどれかを自分の冒険者の職業として記入しなければならなかった。

理由は単純、人口と冒険者の増加だ。

いつまでも冒険者の括りではわかりにくい。四百年ほど前から、執政院はギルドの記入欄に職業技能を記入するよう命じた。

弓、あるいは狩人の腕前が優れるようならレンジャー。医術の心得があるならメイディックという具合に、各々の得意とする技能を元に職業欄に記入する。初期は大半の冒険者は馬鹿馬鹿しいと突っぱねたが、段々とお飾りのはずだった規則が浸透していき、現在ではすっかり職業の肩書きを持つのが当たり前になっていった。

エドワードは自分はエクウウスの戦士だと反論したものの、「レンジャーは訓練を受けた特殊奇襲部隊の意味らしい。重要な立場の戦士だぞ。なお前さん、折角の戦士の地位を棒に振ろうとは……。馬鹿な奴だな」こんな感じに若い自分はまんまとギルド長に乗せられてしまい、渋々レンジャーの欄に記入したのは良い思い出である。全

くもって。

地下世界に巢食う者たちは、大概が地上の生物とは容姿や大きさが異なる。

ここでは、余程奇異な外見や大きさではない限り、蝶やネズミと表現する。

青い蝶が木々の間で戯れ、紫の森ネズミが毛づくろいしている隙に通る。…のどかだ。地上や深層での緊張や喧噪が嘘のようだ。今日は無駄な労力をつかうまい。

一階層は緑の樹海という呼称がある。ここの明るさは、地上の天候に影響を受ける。二階層以降になると、偽の光で地下世界は昼夜を問わず、明るい。

エドワードはふらふらと気ままに歩いた。だが、耳と目だけは警戒を怠らなかつた。一階層だから安心……なわけない。鋏を持った甲虫などなんのその、ときに、二階層や三階層の怪物が出現する事態もあるので油断できない。

エドワードの耳に声が届いた。声の数は四、冒険者だろう。大声を上げて喝を入れ、相手を驚かせる方法もあるにはあるが、どうもその類ではないらしい。声の大きさとあのはしやぎようといい、ピクニツク気分ではないか。

エドワードはここに入ってから足音はもちろん、一声すら発してない。移動は襲われないうに限る。それをこんな風に声を出して歩くとは、大方、カニのような甲虫や鉤爪モグラでも仕留めて鼻でも伸ばしているのだろう。

エドワードは足跡と声を頼りに四人を追跡した。どうも、胸騒ぎがする。四人が行き着いた先と思しきポイントは花畑。一階の要注意ポイントの一つに花畑が挙げられる。そのポイントでは、一階では本来出現しないはずの紫の毒蝶が度々出現する。稀に、深層の怪物が出現することもある。

エドワードは危険を調子で木々の間を抜けた。もしも、彼らの声の調子があまり変わらなかつたり、笑うようなら毒蝶だろう。見た目は青い蝶と特に変わらないから、油断してそういう態度に出る可能性が

ある。

エドワードの予想は外れ、恐怖のあまり先細った悲鳴と獣の威嚇が重なって聞こえた。エドワードはこの獣の声をよく知っている。

運が悪い奴らめと内心舌打ちして、エドワードは花畑のポイントへ向かった。

生い茂る木々と草の間からこっそりと花畑の様子に耳を立てる。声は聞こえずともわかる。

アルケミストがいるのだろう。炎か雷か。どちらかの術式で必死に草を燃やし、生草が燃えるツンとした臭いが鼻を突く。相手は次々と放たれる術式にびびり、一步下がって、四人を油断なく見つめていた。

相手は一声吠えた。重く唸るこの声。ここに居る訳は知らないが、実際いるのだからどうしようもない。四人の冒険者ははしやく気持ちも忘れ、この未知の怪物からどう戦うかではなく、どう生き延びられるかを考えた。

エドワードは草を掻き分け、一瞬だけ見た。赤い体。これで判明した。あれは、三階層に出現する狂暴な赤熊ではないか！ 最近になり、二階層で出没する森の破壊者と呼ばれる怪物は、熊に人の顔形を足したような外見をしている。三階層の名前のない赤熊は、森の破壊者と外見が酷似し、戦い方も似通っている。森の破壊者の近縁種であろう。

この二種類の怪物は共通して両腕に長い刃物のような爪を生やしている。これで引き裂かれれば、胃を被ってない者の首など簡単に千切れてしまう。

赤熊はアルケミストの炎と雷で二の足を踏んでいたが、アルケミストの力が尽きたら、彼らを襲うだろう。あの樹海での移動がなくなっていへっぽこパーティーでは、掠り傷をつけるのが関の山だな。エドワードはまたしても、今度は内心で溜め息をついた。乗りかかった船だ、助けてやるか。

アルケミストは今日で七発目となる初歩的な雷の術式を最後に弾切れ、怪物が飛び上がって襲い掛かろうとしたとき、尻に激痛が走っ

た。

赤熊の怪物は横を見た。ドン！ という衝撃と共に、自分の視界が揺らぎ、呼吸が苦しくなった。

怪物の首の横と尻に鉄製の矢が一本ずつ突き刺さっていた。赤熊は背後からの襲撃者を認めた途端、エドワードは分銅付きの矢で赤熊の眉間を砕いた。

赤熊は眉間を抑えて慟哭した。エドワードはぼけつと立ち尽くす一人から槍をひったくり、眉間を抑えたままの赤熊の胸に槍を投げつけた。穂先は鉄製なので威力はあるはず。穂先は堅そうな赤熊の胸板の奥に吸い込まれた。

赤熊は目をカツと見開き、天を仰いで倒れた。鉄がねじれる音が聞こえた。エドワードは今日で二度目となる舌打ちをした。今度は内心ではなく、四人組に聞こえるように。

四人のパーティ構成はアルケミスト、女レンジャー、ソードマン、バードだった。女レンジャーは恐怖と緊張の糸が途切れ、へなへなと腰を抜かしていた。

エドワードは赤熊のけつを見た。けつの隙間から、折れた鉄矢が顔を覗かせていた。短弓用のこの鉄の矢は品がよく、一本40エンもする。矢一本を犠牲にして、四人が救えた。安いものだ。

「あ。えつ……と、ありがとうございます」

若いソードマンが礼を述べた。物腰や三人の彼を見る目付きからして、このソードマンがリーダー格か。エドワードは一安心すると、直ぐに目をらんらんと輝かせた。

この得も言われぬ凄惨な目に睨まれたソードマンは、正に蛙に睨まれた蛇。エドワードは音量を調節して、口からがみがみと雷を飛ばした。

「お前たちはどうかしている！ ギルド長や衛兵からでもいい！ 一階のこのお花畑がどんな場所か聞かなかったのか！ ここは、稀にだが、こんな三階層に出現するような輩が出没する例もある。それだけではない。なんだ、あの大声は？ 歩き方は仕方ない。これは長い慣れを要するかな。だがな、せめてそのくつちやべく口を閉ざすぐらい

の賢さは身に付けろ！今日はたまたま気晴らしに俺が散歩でここを通りかかったからいいものの！俺や他のパーティが駆け付けなかったら、お前たちは今頃、あの赤熊の腹の中で顔を突き合わせていただろうよ」

四人はただ項垂れ、悔しい気持ちを噛み締めて、自分たちより年嵩としかさのこの救援者の説教を黙って聞いていた。命を助けられた相手が言う事はどれも正しいからだ。

中にはエドワードを睨める者もいたが、気にしなかった。むしろ、良いことだ。ここでは、仲間以外には気を向けないほうがいい。なんせ、昔ほどではないらしいが、世界樹の迷宮では時に、人間すら同じ人間に牙を向くことがあるため油断できない。

エドワードは説教をするのはあまり好きではないが、今回は違った。全てとまではいかないが、助けた以上、彼らの安全を確保しなければならぬ。自分に叱られたことで反省するのによし。頭ごなしに怒鳴りつけられたことに対する怒りと侮辱で、自分に敵意を向けるのによし。

要はしゃきんとしてくれればいい。そうなれば、さっきのちゃらんぼらんと気の抜けた状態よりかは幾分安心といえる。

エドワードは細々と注意したのち、無事な矢だけを拾って立ち去った。ソードマンの男が「これは」と赤熊を指した。エドワードは首を振った。

「要らん、お前たちにやる。爪は奇跡的にも折れてないし、皮もそんなに傷付いてない。綺麗に剥ぎ取れば、ネズミとモグラ十四分よりも得られる物は大きい」

若きソードマンは舌打ちを堪え、もう一度救援者に頭を下げたのち、救援者の名を尋ねた。

「俺は騎馬民族エクウウスの出身であり、ホープマンズ所属のレンジャー・エドワードでもある。それと、喋るにしても、ちゃんと潜めて喋れよ」

四人はアツと顔を見合わせた。自分たちのような新米の端くれでも名だけは聞き及んでいる。クイーンアントとかいうどえらい蟻

の怪物を討ち取った、あのホープマンズのリーダーに助けられるとは、彼らはずくづく自分たちの幸運を祝った。

エドワードは垂れ下がった若木の枝に小さなベルを吊るしていた。人間には聞こえない、樹海生息生物にだけ効果がある獣除けの鈴。深層では気休め程度にしかならないが、一階層では目に見える効果がある。エドワードは四人の足音を拾った。

もう、べちやくつてはない。歩き方からして、急いで帰途についていた。冷静な判断だ。一番の戦力であるアルケミストはあの様だ、次にまた強敵に襲われたら、助からまい。

若木からベルの紐をほどき、袋に入れた。地上へ戻ろうと出入り口付近まで来れば、例の鉤爪モグラが三体现れた。やれやれ、今日は極力血生臭さは避けたかったが、しょうがない。エドワードは鉤爪で切りかかった三体の攻撃を回避して、サツと左手で三日月刀を抜き払い、刀の横で鼻つ面をひっぱたき、怯んだところを返す刀で三体の喉仏を深く切り裂いた。横へ飛びのき、返り血を避けた。

エドワードは三日月刀で身悶える三体の頭を順に割った。モグラ共に止めをさした彼の目には僅かな情があった。

ふと、モグラ共の後ろに苔むしたかたっぽしかない長靴を発見した。用心してひっくり返すと、嬉しいことに、中から握りこぶし大の白石が転がり落ちてきた。

「矢の補充代金と酒代ぐらいにはなるか」

上を見上げた。世界樹の枝と葉が風に揺らいでいた。

太陽の栄養はたっぷりと貰ったが、肝心の人や生物たちの血肉の養分はたいして吸えなかった。エドワードは、少々ご機嫌を損ねた世界樹が貧乏揺すりしているかのように思えた。

あほらし。彼は自分のその幼稚な考えを鼻で笑った。白石を売り払うため、内壁の門を出てすぐ、大通りを真っ直ぐ南に下って左側にある冒険者ご用達の店シリカ商店へ直行した。

三話 傍観者

エドワードは、ジャンベに長鳴鶏の館の留守を任せた。

「大船に、とまではいきませんがお任せください。皆さんの吉報をお待ちしておりますよ」

青と緑のストライプ模様が組み込まれた機能と装飾を兼ね備えたベストにズボン、つばのない円筒形えんじ色の帽子、頭を短く刈り込み、肌と同じくらい艶やかに煌めく黒い眼、くるぶしはやや突き出て鼻は平たいが、どこかしら愛嬌がある顔付きであり、物腰柔らかい黒人の青年。

彼はホープマンズで年齢も経験も一番浅い。チーム内ではバードという職業柄、演奏や歌による戦闘補助、および荷運びなどで活躍している。

エドワードは彼を最後の一人。六人目の仲間として引き入れたのは戦術の幅を広げるためでもあり、預かり役の者が欲しくなったためでもある。

冒険者はその職業上、いついかなる命を落とすか知れたものではない。

特に、ホープマンズのように常に上を目指すパーティにとっては、いざというときは遺書や遺産を分配してくれるような者でもいれば、心置きなく地下迷宮へと挑戦できる。

もう一つは、エドワード自身がジャンベをお気に召したのだ。放浪の身で、しかも飢えに苦しんでいるような者の眼差しは殺意と不満と絶望で血走り、不用意に近寄るのは危険だ。昔の自分のみたいに。

あの戦火で宛なく彷徨う自分は獣同然で、人の死体さえ喰いかねなかった。結局、喰う機会は来なかったが。

ジャンベはどう見てもそういう立場の人間であるが、目からは今だ、活力と理性が失われていない。

エドワードは金鹿の酒場からの依頼で、エトリア第二都市ソロル・エトリア（ソロルとは、ラテン語で姉妹のこと）を馬で訪れた際、ギターという見慣れもしなければ聞き慣れもしない楽器で演奏する青

年を見つけた。彼は自らをジャンベと名乗り、新天地で一花咲かせるために低賃金の労働船に乗り込んだと話した。

理由はない。運命の糸というか、会うべくして出会ったというべきか。エドワードは直感した。ここで彼を誘っておかなければ、遅かれ早かれ、他の者が彼を引き入れるだろう。そのとき自分は、腕前の良い、将来性のある者を誘わなかったこと大後悔やむことになるだろう。バードが何となく欲しいと思っていた今、彼はピタリと条件に当て嵌まる。

彼の演奏の匠さと透き通るような歌声。厳しい生活の中でも失われてない瞳の光。青年の愛嬌ある顔付きと裏にある燃える欲の炎と堅固な意志を見てとり、彼を気に入る、冒険者にならないかと誘った。

甘い言葉で誘い出し、低賃金で働かせようという魂胆があるのではないかと。

むかし、彼の兄は美女と人の良い顔をしたお年寄りに騙されて酷い目に遭い、ボロボロになって帰ってきて、病気を患い亡くなった過去がある。ジャンベは初め、エドワードを警戒した。

エドワードはジャンベの猜疑心を感じとり、誠意に懸命な説得に当たった。

「ジャンベよ。あんたの演奏の腕前に、その透き通る歌声は素晴らしいが、ここではいくら歌っても、物好きで心優しい奴がコインを一枚投げ入れてくれりや上等だ。どうだ、ジャンベ。俺と共にエトリアに来て、冒険者として共に戦ってくれないか。俺はあんたに背中を任せられない。その代わり、俺があんたの背中を守る。私はジャンベその人が欲しくてたまらないのだ」

聞きようによつては、危ない発言にも聞こえる。馬から降りた当人は一切、周囲の好奇と変なものを見る訝しげな目など一向気にせず、ジャンベを説得しつづけた。

目の前の大きな体躯の黒馬の綱を携えた麦色頭の男は本当に堂々としており、説得のさなか、ちらと投げかけられた問いかける矢のよくな視線にジャンベは射竦められた。男の言葉や表情に嘘はなく、人の良さそうな笑顔を浮かべず、熱意ある真剣な眼差しで男は本気で自

分を冒険者として誘っていた。

ジャンベは男を一応信用して付いて行ってみることにした。都市部の外まで行くと、男は乗れど、ジャンベが馬に乗るのを手伝う。彼はジャンベの後ろに座った。

「彼はブケファラス。彼もまたメンバーの一人だ。重い鎧冑を身に付けていない痩せたあんた一人ぐらいなら楽に運べる」

ブケファラスの足は速く、ジャンベの顔に薄ら寒くなった風がまともにあたる。エドワードとジャンベはブケファラスに鞍に揺られて、マター・エトリア（ラテン語で、母を指す言葉）に到着した。二人は高さ三七フィート程度（十一メートルぐらい）もあるアジロナ外壁の門を潜り、エトリア本都市に入った。

宿に着くと、エドワードは歓迎されたが、マルシアを除く三名はジャンベに冷たい目を向けた。

利益配分と戦術と安全性。この三つの観点からして、冒険は五人で挑戦するのが最上とされている。ゆえに、六人目を受け入れるようなパーティはそうない。

それをこのリーダーは自分たちに断りもなく新顔を連れてきたのだから、ロディム、コルトン、アクリヴィがジャンベに良い顔をしないのも無理はない。

「あんたのしんぴ眼は信じているが、これは容赦できねえな。できることなら、一言相談してから連れてきてくれ。それとも、こいつはお馬屋の見習い小僧かい？」

赤茶けた眼に青髪の男が即刻、開口一番荒げた。

審美眼をしんぴと言い間違えたのは、ジャンベが来る前ではチーム内で一番若かった青髪の剣士ロディム。ロディムの審美眼という表現は間違っているが、突っ込むのも面倒臭く、誰も間違いを訂正しなかった。

エドワードはロディムの噛み付くような口調を気に留めず、こう返した。

「お前さん方の不安はおおいにわかる。だがな、俺がこれまで身勝手なことをそんなにしてきたか？ 数えるほどしかなかろう？ しか

も、それらの殆どはきちんと清算したつもりだし、後腐れもない。今回のこの判断、今はお前たちからすれば見る目も落ちたものよと思うかもしれないが、いつか、君たちはこの青年ジャンベの存在をありがたかるだろう。ほら、尽きぬ話は鳴きそうな胃を収めてからにしよう」

ジャンベは夕餉ゆうげの席でコルトン、ロデイルム以外の者に気に入られた。ロデイルムが意地悪して提案した即興の歌詞もアレンジしてこなし、長鳴鶏の館の夕餉の席を大変賑わいださせた。

その席で、マルシアはこっそりとロデイルムに審美眼の使い所が間違っていることを教えた。

ジャンベはメンバーに弓、剣術、冒険の心得や樹海物（じゅかいぶつ）の採取の仕方を学んだ。望めば、算術、字の読み書き、ついでに挨拶の仕方も教えられた。ジャンベは半年後、試験を与えられた。本人には内緒のうちに。

その試験は至って簡単なもの、五名が冒険に行っている間、ジャンベがちやんと預かりの役を果たしているかどうかだ。

六人目を雇い、その六人目を宿に残していたら、金目の物を取られてもぬけの殻だったという話はよく聞く。メンバーは探索中、怪物への恐怖よりも、築き上げた財産が根こそぎもっていかれやしないかと冷や冷やした。

一応、隠し財産の場所までは教えなかったが、エドワードとマルシア以外は、諦念の思いに駆られた。

期待しないまま宿へ直行すると、ジャンベが透き通るような声で五人を迎えた。エドワードは笑顔でジャンベの肩を叩き、「合格だ」と告げたが、ジャンベには何のことかわからず首を傾げた。

それ以降、二度ほど同じ試験を繰り返したが、ジャンベは勝手に金を持ち出さなかつたりしなかつたので、コルトンはもちろん、頑固なロデイルムもようやくジャンベを信用した。

今日もこうしてジャンベに留守を任すのは、彼を信頼している証でもあり、今日自分たちが行く三階層十五階に巣食うと噂される怪物は、最近になって三階層十一階に連れて行けるようになった程度の腕前のジャンベでは心許ない。

適度な緊張を保ち、意気揚々と出発する先輩メンバーの背をジャンベは見送った。

ジャンベは部屋に戻り、ベッドに腰掛けるとギターをつま弾いた。がさつで、欲深で、どこまでも冷酷であり、意外にも優しく、仲間思いの彼ら。血こそ繋がってないが、ここに来て心を許せる数少ない者たちである彼らの生還を祈り、ジャンベは静かな調べを弾いた。

この二年の間の蒼き樹海における探索を一言で表せば、労働。

断層と断層のずれにより地震は生じるが、ちょうどそれと同じように、樹海内でもずれが起こる。樹海の場合、揺れは世界樹の根っこ根っこの動きで生じる。それは毎年のことではなく、二十年から五十年に一度の間隔で揺れは生じる。

揺れ自体は大したことはなく、地上にさしたる被害はないが、地下では、主に冒険者たちにとっては大損壊だ。

この揺れで地形、要は今まで地図に記してきたことの大半が無駄になる。揺れが起きたのは五年前。

一階層はそこまで地形は変わらなかったが、二階層の変貌ぶりは酷く。当時、ホープマンズを含む二階層探索パーティは骨身を削って探索し、新たな地図を作成した。二階層でそれだから、三階層も当然そうということになる。

思った通り、三階層も以前の地図はあまり役に立たなくなり、先代の冒険者が築いた道の大半も泥と水の溜まりに化していた。

三階層自体はそんな複雑な地形ではないが、滔々とうとうと阻むように水がたたえられて、道はぬかるんだ。移動するには小舟か、冒険者たち自らの手で池や川や湖に橋をかけたリ一部を土で埋める必要に迫られた。

固まるとその分、樹海の生物が大挙して襲う可能性がある。このときにはそんなことをぬかしている場合ではなく、三階層探索組の冒険者たちの大半は探索よりも土木工事に時間を割いた。

また揺れがきて、工事するなんて御免こうむりたい。怪物がどんなものであれ、ホープマンズとしては今日の探索で四階層の樹海時軸を

開通させたかった。

縄で括られた巨大スイレンに頑丈な木の板をかけて渡り、アクリヴィが雷の術式で小島周辺の水生生物を追い払った短い隙に五名は小舟に乗り込み、十五階へと通じる固い土と石で固められた四角形の台地に足を下ろした。

「もう、小舟を運ぶのも漕ぐのも勘弁したいね」

小舟を地に降ろし、板金鎧と装備を外す守りの要であるコルトンがぼやいた。

エドワード、マルシア、アクリヴィの三名で手際よく小舟を解体して、五人で小舟の部品をそれぞれ分担して担ぐ。この小舟のせいで、持ち帰れる荷も一、二階層のそれよりも減少した。

今日は途中、二本足で立ちはだかる鰐を除けば、敵対視して襲ってくるような輩もたいして多くなかった。

こういう日の探索は案外いけるものだ。危険で見通しが利きにくい二階層とは異なり、三階層を満たす水の殆どは口にできる。五人はしばし、ここで休息した。

エドワードが青緑のマントを羽織って立った。それを合図に、他のメンバーも無言で装備と荷を背負い上げた。

暗黙のうちにコルトンとロディムが先頭、アクリヴィとマルシアが中間、エドワードがしんがりを務め、ホープマンズはいざ十五階へと降り立った。

今日こそは、この上も下も文字通り青々とした世界から脱け出したかった。

私の役目はここで奴らの動向を探り、必要とあらば、彼の力で不屈きを滅する。気持ちの良い事ではないが、一族の平和を守るには、こういう汚れ仕事も不可欠。実際に遂行するのは聖獣である。聖獣にこの言葉は失礼だな。私は見て、伝え、労い、世話をするだけで、自らの手は汚さないのだから。

ここ最近、計十人の不屈き者どもがこの地に立ち入った。私は彼らの力をもってして奴らを葬り、その一人をメツセンジャーとして生かし

た。が、どうやらメツセンジャーを生かす意味はなかったようだ。またしても、奴らは恥じることなくこの地まで降りてきた。

溜め息を吐いた。仕方ない。また一人だけ生かして、今度は私自身が生かした一人に直接我らの意志を伝えよう。一応、奴らと同じ言葉は僧侶殿から教えられたからな。話せないこともない。

この前とその前の不屈き者も先頭を行く者は鉄の着物で全身を覆いつくしてしていた。今回も動揺であり、鉄の着物で全身を覆う者は先頭を石橋を渡るような慎重な足取りで近づいてきた。彼の目に怒りが宿った。飽きもせず命を落としくるとは、忌まわしい太陽の光を浴びることができご身分でありながら、つくづく強欲な者どもよ。

「神鳥よ。神官よ。不死の巫女よ。どうか、一介の斥候役であり、蒼き聖獣の世話役を亡き父から継いだ私と聖獣に大地の幸が賜われんことを」

彼は笛を吹いた。その笛は犬笛のような作りであり、人間や他の生物には届かず、一定の対象にしかその笛の音は聞こえない。

今日も聖獣の腹に収められることにより、罪人の魂は清められるだろう。彼は知る術がなかった。

もしも、五人の一番の後ろを行く者が彼の同族として生まれれば、きつと名だたる伝説の狩人として伝えらるほどの実力を備えた生まれも育ちも生粋のレンジャーとは。

彼だけではない。

幾度の戦を生き抜いてきたしぶとき傭兵の男。斧と剣を棒切れのように振り回せる戦士。人に媚びない厳しい目付きの女錬金術師。柔和で、どこか油断ならぬ女医。あらゆる楽器を奏でられる美しい歌声を持つ黒人の青年。一人欠けているが、彼ら六人が揃えば、聖獣二体がかりだとしてもその陣形は崩せないだろう。

蒼き聖獣は天井の根っこからするすといおり、静かに宙を旋回しながら、蒼き樹海の同色に染まり、音も影もなく降りてきた。

しんがりを務めた者がシツ！ と鋭く小さな注意を呼びかけ、歩を止めた。彼はおやと思った。これまでの二組は彼の目から見てもすじは良かったが、聖獣の大胆不敵な接近には気づいていなかった。

「俺だけが目を動かすから、お前たちはきよろきよろせず、ナメクジのような速度で歩け。狙われている。こちらから攻撃して驚かしてやろう」

しんがりの者に小声でそう命じられた一行は、再び足を動かした。奴らがまた動き出した。だが、今度の足取りは相当に重たそうだ。まさか、気付かれたか！ 首を振った。聖獣の存在には勘付いたのだろうか、まだ完全に知られたわけではなさそうだ。

このまま、おめおめと奴らを見逃す義理立てはない。それに、奴らがいかな武器や腕前だとしても、聖獣の力と威容に前に怖気つくであらう。

彼は笛を吹き、聖獣に攻撃命令を下した。

聖獣よ。警告を与えよ。我らの領土に不法に侵入をしてきた者に對し、死の警告を与えるのだ。コロトラングル。

風と樹間に不穏な動き！ エドワードはさつと矢を引き抜き、迫りくる脅威目がけて引き絞られた長弓の弦が解き放たれた。

ぐおお！ 聖獣の呻きは十五階全体を轟かした。五人は十五階に張りつめる緊迫感の正体を見破った。

それは、さながらイトマキエイという海の生物と酷似していた。だが、イトマキエイは海を泳ぐのに、このエイは宙を泳ぎ、尻尾は茨のように刺々しく、伸びた触覚には円らな赤い瞳があるのが遠くからでも見て取れた。

「あの青っぽいような白い体色は景色と混じって厄介だな。その上、無音での移動が可能ときたものだ。前二つのパーティが抵抗しないうちにやられたのも納得できる」

エドワードは矢で狙いを定めながら、チーム内に説明した。

「丁寧に説明されてなくても、あれを見たら一発でそう理解できるわ」
橙色の色調の服で身を飾る、両手に奇妙な金と鉄でできた籠手を身につけた金髪の女が答える。コルトンとロディムは剣を抜き、ロディムが吠える。

「さあ、弔い合戦だ！」

彼と聖獣は始めての手痛い反撃に一瞬戸惑ったものの、気を静めて彼は笛を吹き、聖獣はすぐさま攻撃を再開した。

そこからは見るも凄まじい死闘、彼は目を見張った。前二組は決して弱くなかったが、奇襲が成功したのであえなく聖獣の腹に収められた。しかし、今度は相手はいち早く聖獣の接近に気付いたばかりか、前二組より明らかに実力は上であった。

何度も弦を弾く音、橙色の服を着た者の両腕から発される雷と炎。鉄を着た二人の雄叫びと振り下ろされる剣と斧の刃から反射される光。白衣の女人と思しき者から投げられた短い槍とナイフ。斧で両の尾がすっぱりと切断。聖獣は激痛のあまり呻き、宙で身をよじらす。

手に汗を握る激闘の末、ついに蒼き聖獣は地に臥した。先頭を歩いていた鉄を着込む者が大剣を頭上にかざし、聖獣に止めをさした。

彼は全ての世界が停まったかのように思えた。その彼の目を覚ましたものは、更に追い打ちをかけ、彼は嗚咽をもらすのを堪えた。

なんとたることだ！ こんなことが許されてもいいのか！

あろうことか、不屈き者共は聖獣を殺めたばかりか、聖獣の身を談笑しながらナイフで肉を削ぎ、聖獣の遺骸をバラバラに解体したのだ。

彼はできることなら、槍と棍棒を持って彼らを攻撃したかった。彼は拳を握りしめ、彼は零れ落ちそうになる目元の水を腕でこすってふき取り、彼らが発見するものとは別の十六階へと通じる秘密のルートを目指した。

彼の肌は死人のように青白くて、髪は新緑の緑で端だけ長さに関係なく朱しゆがかかり、目は見る者を震え上がらせるような真っ赤な色だった。ここは食うか食われるかの世界。下に降りれば、我らを恐れ、我らの友となる者も多いが、ここは我らの敵となる者が多い。

蒼き聖獣の存在に怯えて、ここを離れていた獣たちもそろそろ集まってくるかもしれない。せめて、その者らがあの者共を食い殺してくれることだけでも祈ろう。

いくら後悔してもしきれない。自分の浅はかさで、蒼き聖獣を死な

せてしまい、先祖代々継いできた成長した聖獣を育てる誉れ高き職務を与えられた一族の名に泥を塗ってしまった。

コロトラングル！ ああ、蒼き聖獣コロトラングル！ 我が物顔で宙を舞い、偉大な力と氷の息吹で我らの敵を砕き、我らの言葉はある程度理解できて、我らより長く生きる、血の繋がらぬ大切な同胞はらからよ！私を恨まないでくれ。恨むなら、地上ばかりでなく、地の下まで益を貪りにきた貪欲な者共を怨め！

コロトラングルとは、立派に成長した聖獣に与えられる名である。聖獣を仕留めた者たちは、その名を知る由もない。

「こいつの骨やヒレは大層立派だ。シリカの娘店主。おっと！ 俺が今ここで、娘店主と言ったことは口外しないでくれよ。これを見たら、シリカと鑑定職人の奴らは飛び上がるかもしれない」

ホープマンズの一行は小声で呑気に会話をして、水で綺麗にした戦利品を背負い、船を組み立て、新たな階層への一歩一歩を踏みしめた。

ホープマンズと彼らを見張る者が去って少しあと、残された無残な姿に成り果てた聖獣の死体には、沢山の生物たちが寄ってたかってその身を食した。

地上の世界樹はそこそこの流血に少しは満足したらしく、喜ばしげに葉を風が赴くままに揺らがせた。

四話 休暇

エトリアには街を広く大きく囲むアジロナ外壁、世界樹の周囲を高く狭く囲むトルヌウーア内壁が建つ。緑地に黄色く染め抜かれた大木が伸びた旗は街が建てられて、国としての体裁が整った頃から国旗はためいている。

遙か昔、世界樹から見ると恐ろしい怪物たちが出現したことがあった。その怪物たちを警戒し、対抗するためにトルヌウーアという錬金術師の子孫がエトリアのはるか内側に壁を建てた。

現代でもたまたま浅層の生物が地上に出没するときがある。内壁は、怪物を街へと侵入するのを拒むのに役立つていた。

三百年ほど前、アジロナ外壁が建てられる少し前の時代。エトリアは二年間、兵士崩れの千人の悪漢共に占領された冬の時代があった。悪漢共に対抗したのが、元冒険者であり、引退後は石工職人として生きた女傑アジロナ。

千人の悪漢を尽く討ち取り、首領の首を撥ねて、街の支配権は再びエトリア市民の手に還った。

アジロナは、エトリアは内敵と外敵の両方に用心する必要があると執政院ラーダに意見した。地上にも怪物はいる。滅多なことではないが、怪物がエトリア領内をうろつくこともあった。

壁は造らない。言葉の意味は、来る者拒まず。その姿勢を通してきたエトリアも、千人の悪漢に実質支配されたことを重く見て、より、安全性を高める為、執政院。もとい、市民や多くのアジロナを慕う冒険者たちがその意見に賛同し、アジロナが五十の時に着工。

着工から十八年の歳月を経て、頑丈な外壁と深い堀が完成した。外壁は斜め角度であり、遠くから見た形ではじぐざぐと星のような形をしていたことから星形城壁とも呼ばれた。この造りでは敵に侵入されやすいのではないかと危惧されたが、大砲など兵器の発達に伴い、崩れにくく、多角度からの三百年後には城壁の形は理想的と評されることになる。

堀は深さ14mもあるらしく、幅も30mと広大。簡単には侵入で

きない。

アジロナは自分一人ではなく皆の力があるからこそ出来たといい、自分の名前を付けることを拒否したため、数年間は「エトリア外壁」でも呼ばれていた。

アジロナが八十でこの世を去ったとき、外壁は正式に「アジロナ外壁」と改名された。世界樹の秘密を解明したわけではないが、アジロナの名は広く世に知られた。

今日、このアジロナ外壁に沿って歩くかばいろ樺色髪の男が一人いた。この男は、アジロナのような英雄になることを夢見ていた。もつとも、彼の目指す英雄は世界樹の迷宮踏破しか残されてないが。

日で焼けた作業用の白シャツに紺のズボンを履いたコルトンは、三角状に波打つ形のアジロナ外壁を沿うように歩いていた。アジロナ外壁には死角がなく、どの狭間からでも敵が攻撃できるように設計されている。

昨日の蒼き樹海で遭遇したあの化け物との戦闘で腕が鉛のように重く、自慢の盾もひしゃげてしまった。シリカ商店に鑑定してもらったら、あの怪物から取れたヒレや骨は一万エン以上の値が付き、差し引きで新しい盾も購入できたので損はしなかった。

エドワードの予想通り、シリカと鑑定職人は驚き、敬う手付きで骨やヒレを鑑定していた。シリカ商店の店主はシリカは、浅黒い肌色と危なっかしい赤い衣装で身を包んだ年端もゆかぬ少女。

小さいわりには度胸と声もでかく、舐めてかかると、間近で鐘を打つ音よりけたたましい大音量で怒鳴り散らしてくるのでおっかない。今日は骨休めならぬ腕安めのため、こうして足の赴くがまま気ままに歩んでいた。今日は夜までいたい、四年前から戒厳令を命じている街の規則があり、夕刻までには外壁内に戻らなければならない。

外壁の遠くで、放牧をする者たちが目に留まる。

エトリア在住の者もいれば、エドワードの噂を聞きつけて、戦火を逃れたエクウウスの生き残り、あるいは放浪の民である者たちのごく一部が街に来て、エトリアに広がる肥沃な土地でエトリアの者たちと

共に放牧と農業を生業に暮らしている。

エトリアの大地が肥沃なのは、選別した種類のミミズを使い、ミミズたちを各地にばら蒔いていると聞く。本当かどうかは定かではない。

エドワード・ウォルが世界樹の迷宮に来た目的は、ここで富・名誉を勝ち得て、母や妹などの生き残ったエクウス民族やその他の未裔たちを呼び寄せ庇護下に置き、自分達の子孫と伝承を後世に残すためである。

だが、それらを行うには時間も要るが、金や何らかの力（早い話が権力や権威の類）もいる。

因みにエドワードが名で、ウォルが性である。

「誇り高く意地っ張りだが、心中は誠実で、思うことも行うことも高潔。大胆ではあるが残忍ではない。賢明であるが学問はない。本を書くことはせぬが、たくさん之歌を作って子と孫に歴史を伝える。馬と弓を司る勇ましきあらゆる戦士たちの民。私はね、自分が生まれた育んでくれた民族を愛しており、また誇りにしている。そんな彼らが馬にも乗れず、徒歩で奴隷のように歩く様は我慢ならない」

と、こんな事を語っていた。コルトンや親しい者は、かつての騎馬民族大帝國を作り上げたかとは半ば冗談半ば本気で聞いたりした。この問いに、エドワードは一概に否定した。

「それはそれ、さ。後世の奴らが戦争をおっぱじめたいというのなら、俺には止めようがない、もう死んでいるからな。しかし俺の目が黒い（青い）うちは侵略の類や戦争には一切関わらせないよ。民族の流儀を守りつつ、この街と周辺地域の国や街のやり方にも従う。まあ、今噂の集団が来て、自衛のために街と共に戦うのなら話は別だが」

エドワードは更なる冒険を求めた。それらの危険を冒すたびに自分の名は広く世に知れ渡り、その名を聞きつけた民族が一箇所にこのエトリアの地に集う。

決して真心からきているのではない。エドワード自身がその事を正しいと思い、実行しているだけなのだ。

コルトンから見れば、エドワードは自身の名が広く知れ渡る事自体を喜んでるように思えた。

もつとも、名が知られることを喜んでるのは自分も同じだが。

コルトンは農村出身。その農村には名がなく、お情けで東山（ひがしやま）の村とでも呼ばれていた。

少年時代のコルトンはこのままここで埋もれることを嫌がった。エトリアは絵に描いたかのような牧歌的な農業が行われているが、自分が生まれた地には王という一首独裁政権だった。

王が善人で賢ければまだしも、自分の時代の王はちよつとおつむが足りなく、甘言しか言わない官僚が実質国を治めていたので、生活は豊かではなかった。前途に何が待ち構えていようが怖くはない。成功を収め、自分だけの居を構え、もつと良い暮らしがしたい。コルトンはその生活から抜け出したくて、青年時には村を飛び出し、一旗上げるために傭兵になった。だが、傭兵は所詮雇われの身。自慢の腕っ節と体格も、見る目がある者が見てくれなければ意味がない。

傭兵は戦地で奪う物が報酬であり、少量の食事が配られるだけだった。運が悪いことに、自分が傭兵として雇われた国は戦上手の者が一握りしかおらず、戦は負けがこんでいた。

あの戦いでよく生き延びれた者だと、よくよく自分の悪運に驚嘆する。傭兵の将来性を見切ったコルトンは、世界樹の噂を聞くと、早々に傭兵業をおさらばした。いざ、世界樹を目の当たりにしたら、目的が少し変わった。

自分はそのままでさといほうでもないし、薄っぺらな奴と言われようと気にしない。例えその先に何もなくても、普通の生活だけでは飽き足らず、コルトンは大きな物を掴んでみたい夢と欲が湧いてきた。

そして、エドワードと出会った。

コルトンが彼と出会った当初、彼の髪の毛は今よりずっと短かった。彼は金鹿の酒場で一人居座るコルトンに話しかけ、率直に組まないかと持ちかけた。

「あんたと私の目的は違えど、目指す高見。深見といったほうが正しいかな？ どちらでもよいか。あんたと私が目指す深見は一緒だ。

俺が将来描いたパーティの前面を守るのは、コルトンという人物しかない。ピンときたのだ。どうだ、コルトンさん。しばし、二人きりの期間は続くが、俺と組んでくれ。あんたとならやれる」

コルトンはこう口説かれた。あんたの目的はなんだ？ そう問えば、彼は自慢する風でも、ましてや待つてましたと興奮するわけでもなく、淡々と、真剣な眼差しで語った。

夢見がちの小僧かと思いきや、時折り見せるその眼に少なからず委縮させられた。

その眼は修羅場を潜ってきた者だけが見せる反射した鋼のような光であり、また、前途に夢と希望を想い抱く若者の眩しいぐらいの光にも充たされていた。

他からの誘いもあったが、彼はそれらの誘いを全て断り、自分より二歳年下のこの男と組むことにした。二年間、アクリヴィが来るまでは日銭稼ぎの日々も続いたが、コンビを解消する気になれなかった。

彼に魅かれたから、それだけが理由ではない。コルトンは、エドワードに申し訳ない気持ちを抱いていた。彼の参加していた戦は、実はエドワードの国と共に戦ったのだ。

コルトンの国は見逃されたが、エドワードの国は見せしめに滅ぼされた。

コルトンはエドワードの過去を聞いて、どきりとした。そして、何か罪の意識に襲われた。

自分一人が頑張ったところで、戦いが逆転するはずもなかったが、嫌気が差して逃げた自分と勇敢に戦ったエドワードの一族。コルトンは責められてる思いがした。自分のせいではないと理解していても、罪の意識に捕われた。

コンビを組んでから半年後、エクウウスの避難民の家族が一組、エトリアに訪れた。

避難民受け入れはそう容易い問題ではない。面倒な交渉に細々とした書類に何枚も向き合う必要がある。彼はその問題を面倒だとか言わず、当然の義務だと言って向き合い、対応した。

彼の師のような立場であるゲンエモンの協力もあって、一カ月後に

は難民受け入れが受理され、エドワードの目的第一段階がスタートした。あの日、あの時のことは今もよく覚えている。

エドワードの様子を近くで見ている、彼の夢と野望と目的は全て本気だと解り、彼は口調や言っていることに反し、意外に誠実な人物だとも理解しえた。

自分達二人は決して豊かではなく、あの一家もそうだったが、エドワードは個人の財産で立て直しに図った。コルトンも及ばずながら金を貸した。

お陰で金が足りず、ごく短期間、二人は冒険者兼牧人兼農夫として一家と共に汗水を流した。不思議と不満は感じなかった。

むしろ、心は幸福で充ちた。牧歌的に働けて笑顔になれる日が来るとは夢にも思わなかった。一家に感謝されるたび、むず痒いものが背中を走る。コルトンの最大の目的は世界樹を踏破して歴史に名を刻むこと。今もその夢は変わらない。

そのついでといつてはあれだが、自分以上に壮大な夢を描くこの馬鹿者に付いて行っても良こうと決めた。

そして、過去の馬鹿で臆病な自分の行いに対するせめてもの罪滅ぼしになると思った。

エドワードに自分がパーティに入った本当の理由はまだ明かしていない。

以来、コルトンはホープマンズのパラディン役として奮闘している。

こうして、コルトンはエトリアで冒険者家業で糧を得ることを選んだ。血肉を世界樹に吸わせて繁栄している点を除けば、この街の安穏な風土を気に入り、気心が知れた者たちとも知り合えて、エトリアに愛着も持てた。もう故郷に戻る気はないコルトンにとって、エトリアが第二の故郷になれた。

それだけに、このエトリアを含む周辺地域の街や国を悩ませるものは許しがたかった。コルトンだけではない。エトリア州に住まう者たちは皆、その者たちを嫌い、脅威と認識している。

エドワードも過去の苦い経験で、一部の同業者を除き、賊には嫌悪していた。他にも、同族であるカルツバスの一族が協力しているという噂もあり(エドワードたちは断固否定)、エドワードと避難民には一部から冷たい眼差しが寄せられてた。

八年前、山賊王エトウの子孫だと名乗る者が現れ、世直しと称し、各地で小さな村や町を襲った。

山賊王エトウは義賊として知られており、子孫もいるが、現在ではすっかり平凡な町人である。

だから、男が本物のエトウの子孫かどうか定かではない。

各地の山賊や海賊などのならず者たちは勝手にエトウ二世と名乗り上げる男の下に集い、大陸中を荒し回っている。

怪しい宗教紛いの手口による勧誘で、金が無い者や夢心地のぼんぼんを引き込み、他方と交流が薄い民族も騙し、世界各地におけるエトウの勢力は日に日に増している。

現在では調子に乗ってエトウ王賊連合おっせくとも名乗っているとか。

風の噂では、山賊連合の勢力は数千規模にも登ると聞く。その噂の真偽は定かではないが、エトリアから徒歩一ヶ月もかかるほど離れた所にある町村が千人の馬乗る盗賊に襲われて、壊滅した惨事を聞く限り、その噂も紛い物ではなさそうだ。

生存者の話によると、襲われた日。空はすつぽりと黒い翼に覆われた。巨大な黒い影なる存在は、町村の戦士や剛毅な者すらからも戦意を摘み取り、慄えさせたと聞く。推定では、翼竜・通称ワイヴァーンの可能性もあるようだ。

ワイヴァーンはあまり力のある竜ではないが、竜も従えたとすれば、山賊王エトウの力量はある意味底知れず。そのことが余計に彼への恐怖を増加させた。

彼は次にエトリアを狙っているらしいが、彼はエトリアとはある種の因縁があるらしい。その因縁がなんなのかまでは、誰も知る術がなかった。アジロナや多くの冒険者が立ち上がったのは、単に自分達の商売地が失われるからではなく、この街を自分の街と思えたからこそ戦えたのだろう。

コルトンも、いざ盗賊共がこの街にずかずかと乗り込んでこようものならば、エトリア流風に言えば「留まりたい者には我らの心遣いと土地で安らぎを与え、武器を向ける者には武器を」のつもりだ。

だが、盗賊共もこの街を攻めようとは思うまい。この街は頑丈な外壁で囲まれて、街を守る兵士も数百人。全土からかき集めれば、優に三千を超える。

最近開発されたマツチロック「火縄銃」なる新兵器や投石器に弩砲などの攻城用兵器も備え付けられている。新しい攻城用兵器の開発も進められている。海外が製造した大砲なる兵器も密かに導入された。時代は進むものだ。しかし、兵器が発展すれば、いずれ武芸者の行き場は無くなる。必然として世界樹のような場所にそういう者たちが集まるだろう。エトリアもしくはらくは稼ぎに困らないな。

これを機に外壁の再構築をもと思われたがさして変える必要性はなかった。アジロナが建てた外壁は現代の対攻城兵器に理想的な形であり、彼女の先見性と見識は改めて評価された。エトリアの執政院は外壁の整備と補強に終始するよう命じた。

ゲンエモンやガンリユーなど、一部に限り試射場見学を許された。その威力は聞きしに優るものであった。

エトリアはこの火縄銃に更なる改良を加えた。装填時間は相変わらずであるが、吐き出される煙を抑え、射程距離が伸び、狙いやすく扱いやすい構造。正に世界各国の軍隊にとっては垂涎物^{すいぜんもの}。もつとも、エトリアはこれらの存在を公にはしてない。

エトリアはあくまで世界樹が聳える本都市を含む州全体の繁栄維持が主眼であり、戦争道具を売りつけて、世界に禍根の種となるような物を売るのは拒んだ。目下、鉄砲は自衛用の為であり、売ることは視野に入れられてない。

しばらくは安全だろう。もしも、世界樹の地下から大挙して怪物が押し寄せるような事態でも起きれば、エトウ率いる方を越える賊連合襲来の可能性が多いにある。

そのため、内壁では常時六人、広い外壁では三十人の歩哨が目を光らせていた。

歩いているうちに夜通しまで歩こうという気持ちが薄れ、歩くだけでは手持ち無沙汰になってきたので、狭間にいる衛兵たちに会釈して、近くにある南門の橋を渡る。

環濠かんごうに水はなく、空堀である。非常時のみ、堀には満面と水が張られる。

草地の縦幅は百メートルもあり、外壁と街を隔てている。この草地を天然のベッドにして寝っ転がりたいが、それをすると、衛兵の叱責が飛ぶ。

暴漢共が出現する前の時代。ここでのんびりと寝転がる子供や老人をよく見かけたが、現代では衛兵の訓練場の一つに成り代わった。衛兵に混じって、青髪小僧ことロディムが剣を振るっていた。暇を持って余しているのだろう。

「今日は金鹿の酒場で一杯やろうや」

一声そうかけてやった。ロディムは左手で剣を握ったまま、小さく右手を挙げて応じた。

休日のおときは教養を深めるか、寝転がるの二択。ホープマンズが拠点とする長鳴鶏の館の宿賃は月額三千三百エン（団体と二部屋借りたサービスで七百エン値下げ）。

値は張るが、その分、サービスや施設は充実しており、数少ない湯治場付きの宿である。また、朝夕のみ一杯分のスープとパン一枚は無料で食えるので、金が無いうちはこれに助けられる。長鳴鶏は三階建ての長い二棟がくっついた建物、一階の右には食堂と湯治場に荷の預り所があり、寝室は計六十間近くある。

二階は女（マルシアとアクリヴィ）、階下は男が四人詰められている。詰めているといっても、装備を置いて、自分の服や持ち物を入れられるような小棚が置けるほどのスペースはある。

正午まで外壁と街を歩き回り、そのあとは夕刻までコルトンはベッドで寝転がった。

夕刻、コルトンは金鹿の酒場に立ち寄った。

艶つぽく濡れた感じの髪、白く柔らかそうな肌、寂しげに湛える青

い両眼と薄らと紅を塗った口元、思わず目がいつてしまう胸元が開いた栗色の服を着た、男の冒険者たちにとっては別の意味で憧れの的である麗しき酒場の女将が「ごきげんよう」と迎えてくれた。

ロデームはまだ来てない。まだ衛兵たちと一緒に剣で遊んでいるのだろうか。

明日は、ジャンベを四階の樹海時軸に連れて行くという厳しい目的があるので、あんまり飲めない。初めはパンと水をちびりと摂取する程度にとどめておいた。

仲間内で初めにきたのはエドワードであつた。満足そうな笑顔を浮かべていた。

馬屋から仔馬の時買い取り、黒曜石のような毛並を持つ立派な体躯の牡馬ブケフアラスにでも乗って気晴らしでもしたのでだろう。

背が大きく、武装したエドワードが乗ると一枚の絵になる。少し見たみたい気もしたが、残念手遅れだ。

「ロデームは？ 初めに誘ったのはあいつなんだけど」

「俺は奴に声をかけられたよ。で、そのついでにジャンベや図書館にいる婦人方も誘おうといっていた」

婦人方とはもちろん、アクリヴィとマルシアだ。

マルシアなら当て嵌まるかもしれないが、アクリヴィに夫人なる言葉が当て嵌まるのか首を傾げる。こんなことを口にしたら、レイピアを喉元に突きつけられるかもしれないので、面と向かつては言えない。

エドワードもちよびりちよびりと水割りを啜つた。陽がもう少し見えなくなる頃、ようやくロデームは三人を連れて到着した。

「すまねえな。街の片隅で子供に歌を教えていたジャンベを見つけるのに手間取っちゃまった。ささ！ ともかく飲もうぜ」

エドワードは女将に五人分のエール酒大ジョッキを注文した。すると、給仕のお皿にはつまみとなる物や小料理が盛られた皿があつた。

「話は他の方たちやギルド長とかから聞いているわ。あなたたち、うちとシリカ商店の常連さんたちの仇を取つてくれたしね。これは、彼

らの代わりに送る私からのせめてものお礼」

エドワードがジョッキを女将のほうに小さく掲げた。

「女将さん、痛み入るよ」

「いいってことよ。あつー！ でも、また食べたければ、そのときはちゃんとその分の代金を支払ってもらうからね」

そういう風に付け加えるあたり、さすが冒険者共を相手にする商売人であった。

エドワードは大きくジョッキを掲げ、他の者もそれに倣った。

「では、俺たちの勝利！ 生還！ 女将さんの心遣い！ 今後の探索が無事に成就することを願い：乾杯！」

銘々が互いのジョッキを軽く打ちあうと、グイとエール酒を喉に注ぎ込んだ。冷たい、燃えるような活力が全身に伝わる。ただ、マルシアとジャンベは一息で飲み干せず、ジョッキの底でエール酒がまだ波打っていた。

ロデームはそんなジャンベをからかい、ジャンベはお酒を一気飲みできないのが男らしさとは関係ないと反論した。女将の心遣いである、おつまみと果物が調理された皿を六人はあつという間に平らげた。

トウー&スリーの五人もいた。男子の双子と女子の三つ子という世にも珍しい組み合わせのパーティ。バードの長男ダルメオを筆頭に、パラディンの次男ダルカス。三つ子長女でメディツクのトルニャ。ソードマンの次女フィリ。三女のジョハンナ。腕と仲の良さで有名なパーティである。

六人は彼ら五人組と卓を寄せ合い、情報交換をしつつ、ダルメオとジャンベが演奏を競い合うことにより、食事は意外な盛り上がりを見せた。

ロデーム以外は中くらいのジョッキを一杯か二杯干すに止めた。明日、つまり留守役はロデームだ。

ロデームは遠慮なしに酒と食い物を飲み、酔った勢いで武勇伝を身振り手振りで酒場を訪れた冒険者や町民に語った。双子と三つ子はロデームをよいしよして、ちやつかりと奢ってもらった。ただし割り

勘でだ。全てを払わせる真似をするほど非道ではないし、第一、ロ
ディムもそこまで間抜けではない。

昔はそうでもなかったが、エドワードやコルトンにゲンエモンら年
上の冒険者の教育と、一番は医師でありお姫様でもあるマルシアのお
かげもあり、飲み食いを自制することを覚えたロディムは、思考を保
てる程度にできあがった状態で宿に戻った。

第四階層攻略編

五話 地底決起集会

どこもかしこも黄土色に枯れている。上の蒼い世界とは異なり、黒や茶色いもの、炭のように黒く振れた巨木など色が異なる植物が生えていた。

この世界の奥。人間が通るには長い歳月をかけて開拓する必要があるほど入り組んだ森の奥に、集落が存在した。

集落はくつきりと彫られた溝で囲まれ、溝には一定間隔で逆茂木が植えられていた。

石でできた鍬を降ろし、農耕に勤しむ者。

家畜である赤紫のモアを引いて、荷物を運び者。

植物の繊維や仕留めた獲物の皮で日用雑貨や服を編む女。

開けた場所、あるいは自らの手で開拓した土地の境界線を見回る者。その境界近くで遊ぶ幼子たち。一見、どこにでもある光景。

しかし、彼らの肌や髪、目の色は普通の人間とは異なっていた。彼らの肌は死人のように青白く、髪は若葉色で先端は薄らと朱に染まり、瞳は血のように真っ赤で、耳は異様に尖がっていた。

皮を重ねた物を着た戦士であり、狩人でもある一人が幼子たちの悲鳴を聞きつけた。彼は鋭く口笛を一吹き吹くと、石槍と黒く振れた巨木から削り出したブーメランを引っ掴んで、溝にかけられた橋を渡り、騒ぎの元に駆け付けた。

彼らの言語は地上で使われる言語とは異なるので、ここではそれを訳したという形で送ろう。

「どうした!?! 何があったというのだ」

武器を持った大人の問いに、子供たちは恐怖で怯えた眼差しをちらと背後の物にくれてやった。彼は林の中でこそこそと動く物を確認すると、もう一度幼子たちに問いかけた。

「怪我はないか? まさか、既に一人喰われたのか?」

一番年長の子がふるふると首を振った。それを知った彼は胸を撫で下ろした。

「そうか。ならとつと行つちまえ。戦いの邪魔になる」

戦士は子供たちに逃げろと命じた。子供たちは大人しく従い、村に戻った。しかし、戦いが気になるのか、振り返るたびに歩みを止めていた。今度はもう少しきつく幼子たちに行くよう命じた。

子供たちの横を通り過ぎ、赤く染まった服を着た鉄の剣を持った身分が上の戦士が四名を引き連れて、救援に來た。紅色服の戦士は手短かに状況を尋ねた。

「犠牲は？ 相手は？」

「なしです。早く発見したので怪我をした子はいませんでした。相手は白刀しろかたな共です。数は恐らく三、四匹程度かと」

「そうか」

林から、彼らが白刀と呼ぶ者たちが出現した。白刀と呼ばれた者たちは、一階層三階で重点的に出現するカマキリの亜種だった。

「二匹を盾にするように先に行かせ、自身は後ろに隠れている奴。あいつが一番賢くて強いだろう」

「いかがいたしましたしょう」事態をいの一に察した戦士。

「まずは石と臭い袋を投げよ。それで引かぬようなら、ブーメランで身の一部を砕いてやり、そこを一気に攻め込んで槍で頭と胸を刺してやる。あの奥の奴は、もっと賢ければ逃げるかもしれんが、そこそこ賢い程度なら、襲ってくるかもしれん。あいつの相手は私とお前がするのだ」

戦士であり、狩人である彼らは素早く行動を開始した。

まず、石と臭い袋を投げた。これで大抵の動物は逃げ出す。彼らの体臭は特別で、この地下世界に住まう多くの生物は彼らの体臭を酷く嫌う。臭い袋とは、彼らの糞尿を染み込ませて、乾かした布や皮をくしゃくしゃの玉に丸めて糸で雑に縫い合わせた物のことだ。

白刀とあだ名されたカマキリたちは一笑に付すように、投石も臭い袋も平然と払い除けた。

相当餓えているか、慣れたか、見下しているとみえる。どちらにせ

よ、生かすわけにはいかなかった。

「大地に幸あらんことを！ 行くぞ、戦士たちよ！」

紅服の戦士が鬨を上げると、六人の戦士は白刀なるカマキリに突進した。

カマキリが威嚇のため、両腕の鎌を広げ、羽を広げたところを狙い、一斉にブーメランを投げつけた。

ブーメランは二体のカマキリの瞳孔と羽を破り、右のカマキリは鎌で体液が迸る眼球を押さえた。

戦士は二人一組に別れ、一人は槍で右のカマキリの胸と頭を刺し、一人は石斧で果敢にカマキリに切りかかり、その身を深く切り裂いた。もう一組のほうは、石の鋏を付けた棍棒で左の白カマキリの頭を何度も叩き潰した。

このカマキリの鎌や体の一部は生活用品、装飾品、武器装備などに使えるが、肉は不味くて食えた物ではない。後は死体を処理するだけであるが、まだ戦いは終わっていない。

紅服の戦士と実態を早く察した戦士は、一番賢く強く、まだ無傷な白刀と対峙していた。

カマキリは逃げるどころが唸り声も上げて威嚇してきた。思った通り、かなり餓えている。だからといって、はいそうですかと自分たちの身や自分たちの食料を譲る義理はない。

戦士が軽くブーメランを投げた、カマキリは容易くそれを弾いた。だが、そのブーメランは囷だった。紅服の戦士は俊敏な動きでカマキリの死角に回り、大上段から振り下ろした鉄剣の一撃でカマキリの左の鎌を切り落とした。

悲鳴を上げる敵にも情け容赦なく、二人の戦士は槍の柄でカマキリをひっぱたき、刺した。カマキリは全身から青い血を垂れ流して倒れた。

一仕事が終わったと肩を下ろしたとき、またしても悲鳴が上がったが、今度はさきほどとは様子が違う。逃がした幼子たち、近くの女や農耕に勤しんでいた者たちが戦士たちの活躍を見て、溝の先から歓声を上げていたのだ。

カマキリの死体を引きずり、戦士たちが深く掘られた溝にかけられた橋を渡ると、鍬を持つ男の一人が声をかけた。

「子供たちを助けてくれてありがとう。俺も戦いたいところだったが、武器は倉庫に保管してあるのでな」

「気にすんな。今日のアんたは戦士ではなく、ただの農耕者だ。もし、また窮地が来て、そのとき俺がただの住民で、あんたが戦士の役割を請け負う日で、俺が危なくなったりでもしたら、その時にでも仮を返してくれればいいさ」

紅服の戦士は厳めしい口調から一転して、砕けた調子になった。戦士は子供たちを見て、にっこりと手招きした。

「そら、小僧つ子と娘たちや。良い機会だ。白刀の処理の仕方や、使える体の部位の綺麗な切り取り方を教えてやろう」

子供たちは目を輝かせて六人の戦士の周りに集った。特に、少年たちは紅服を着た鉄剣をたばさむ上位の戦士に尊敬の眼差しを送った。

殺伐とした光景と日々の裏には、触れ合いと温かみも存在した。

この日々がいつまでも続けば良いのに。そう思い、鍬を持つ彼は上を向くと険しい顔付きをした。彼は戦士であり、農夫でもあるが本職は僧侶でいくばくか他の者より事情に通じていた。

全くもって忌まわしい。神官殿の言った通り、奴らは約束を守れない。いや、守らないが正しかったかな。

此度の戦は起こるべくして起きたか。起こしたい者が意図して引いたか。その両方であるか。

彼は村の中を大声で村民たちへと呼び給う者の声を聞き、思考を切った。

モアに乗り、決まりとして緑の長い髪を綺麗に整えた、紫の法衣を着た僧侶が集会の報せを持ってこの村、二の林村りんそんに来た。

「今日、トル・ホイの樹が盛る時に集え！ 神官殿並びに各十二林村の代表しんちやうが神鳥の広場にて、決意を表明する！」

モアに乗ったこの村の僧侶の一人は繰り返し、集会の報せを村民に伝えた。

遂に来たぞと、恐れ混じりの興奮が人から人へと移る。

トル・ホイの樹とは、訳せば時折れ告の樹。時間ごとに枝が伸びたり萎れたりするとも変わった樹で、彼らはこの樹を時計代わりに重宝している。

トル・ホイの樹が盛る頃、地上だとちようど正午を回る頃だ。一度伸びたら昼、枝垂れたら夜近よきん。夜近とは地上の言い方で表せば夕方になる。

彼らは地下にいるため、そもそも「夕方」という単語や夕方自体を知らない。

全員行けば村は空っぽになってしまい、あの白刀共のような生物たちの侵入の恐れもあり、畑の手入れをする者もいなくなる。

二の林村の長は、二百名の老若男女に留守を守るようにと言い付け、他は出発することにした。

一刻判前、樹の枝が一番盛りにさしかかる少し前。全ての村民はモアに乗った白い法衣の僧正と紫の法衣の僧侶たちに先導され、広場へと行進した。この者たちの列には、奇怪極まりない者たちの姿も見受けられた。

真つ黒い巨大な体躯に両角を生やした鬼。異様に長い四肢と胴体に、鱗と羽が生えた緑の悪魔のような者。羽を生やした未熟児程度の大きさの妖精たち。腰回り意外には一糸纏わず、地面すれすれにまで伸ばした髪と美しい四肢を持つ、見目麗しき美女たちもいた。

美女の中にはアメジストのような髪色の者もいた。この者たちの身体的特徴にはある共通点があり、彼らの瞳も真紅の色である。

広場には、現神官出身の一の林村の者たちが既に集っていた。

他、四と九の林村の者たちもいた。広場の奥方にはテントが設営されていた。

一と二の林村は地上でいうところの二十階にあるからまだしも、それ以外の村は上に居住区を構えているので寝泊りする場所が必要だ。

その後、続々と全十二の林村の者たちが集結し、広場はさながら縁日騒ぎの態を催した。

不安な者、騒ぎに身を任せて楽しむ者、ついにこの日が来たと期待する者、様々な者たちが代表者たちの言を今か今かと心待ちにした。

祭事に使われる舞台の上、そこに置かれた銅鑼を一人に紅服の戦士が数回打ち鳴らした。広場の騒ぎが静まる。

掃き清められた舞台の後方から、神官「本当は大僧正長と呼ぶのが正しいが、神官と呼ぶのが一般的に普及してしまっている」以下、僧正たち、僧正たちと同じ白い衣を身にまとう十二の林村の村長たち、紫の法衣を着た幼い少女が登った。彼らの目と表情は厳しく、決然としたものが窺えた。

一際背が高い人、先端にほら貝のような物がついた杖を握った神官が一步前に進み出た。

成人男子と同じくその長髪は乱れていたが、どこか整然とした感じの乱れ方だった。

神官の服装は僧正と同じく白いが僧正とは異なるところもあり、服の裾や膝などには複雑な文様が織り込まれていた。胸部と腹部の間地点を中心に、翼を広げた鳥の柄が金色に染められ、額に位置する箇所には白い金属質の骨っぽい物が嵌め込まれた飾り気のない茨の冠のような物を被っていた。

神官は口を開き、詩を朗誦するように語り出した。

「このように集まってくれたことに、私は感謝したい。まずは一言、ありがとうと言わせてくれ。ところで、同胞（はらから）たちよ。地上には記録を残す手段の一つとして『紙』という物があるのは存じておるな？」

ざわざわと民は騒ぎ始めた。神官殿は何を伝えたいのだろうか？戦士が再び銅鑼を鳴らし、騒ぎはすぐに静まった。

神官は淡々と語りを続けた。気付く者は気付いた。神官のその語りは落ち着き払っているが、その目は見る者を圧倒させる怒りと決断に燃えていた。

「紙という物は便利だ。きちんと保管さえすれば、いつまでもその記憶は風化することなく子孫に確実に伝えられる。我らにも骨や木の板に墨で書き記すこともあるが、我らは口と頭で直接伝えることこそ大事と思ひ、千年も昔、地上に住まう者たちが来たその日のことも語り部たちが幼子へ、その幼子たちのまた子供へと歴史を伝え、その記

憶は正確だ。……………それなのにだ！」

ここで、神官は淡い語りから一変、荒々しく語り出した。

「二百年前、我らと地上の者たちによる三度目の大戦の年。その事を我らは歌として正確に現代に伝えていくというのに！ 地上の者らは紙というあれほど正確な情報記録媒体を使っておきながら、彼らは盟約をまたもや破り捨ててのこのこと礼儀も知らずに境界線に入り込んで来て！ 聖獣コロトラングルを殺め、その身をバラバラに引き裂いた！！ 恐らく、奴らの言い方に倣えば、蒼き樹海こと三階層十五階を守る番人を殺めた奴らが次にすることを君らは想像できるか？」

各林村の者たちは顔を会わせ、神官の問いに答えようとしたが、問いかけた本人が先に答えを叫んだ。神官は更に身振り手振りまで入れて演説した。

「侵略だ！ 彼らはまたしても、またしてもだ！！ 地上で益を貪ることに飽き足らず、我らが住まう世界にまで足を踏み入れて益を貪りにくる！ 二百年前交わした盟約では、地上の者たちは何人足りとも十五階には足を踏み入れない。もしも踏み入れれば、死を与える。仮に無事帰還しても、彼らはその者たちに相応しい罰を与えると紙に血印までして同意した。にも関わらず！ 彼らは懲りずに三度兵を送り、盟約を破り、境界線を越え、聖獣まで殺めた！ こんなことが許されていいのか!? 違うと言う者がいるなら今この場で答えよ」

怒りの化身に化した神官の問いかけに、その圧倒的な迫力を前にして答えられる者はなかった。だが、わなわなと震える幼き身が手を挙げた。男の子だ。

「し神官様」

手を挙げた男の子に対し、神官は怒りを潜め、年相応に落ち着いた人格者のように尋ねた。

「何を言いたいのだ？ ジェグの息子ジェルグよ」

ジェルグは態度を和らげた神官を見て安堵し、とつとつと聞いた。「も、も、もしも。地上の人たちがここまで来たら……ここはどうなるのでしょ……うか？」

ジェルグの問いに神官はすぐに答えず、上を少し向いて、ほんの一

時目を閉じると、ジェルグを含む同胞全員の耳にしかと聞かすような咆哮で答えた。

その声の響きたるや、遠く端っこ、心あらずに聞いていた者が驚きで飛び上がるほどだった。

「もしもそのようなことが起これば、この一帯を火が襲うであろう。戦えぬ者は恐怖で逃げまどい。戦える者は惨めに朽ちていくであろう。皆の物聞けい！　今や、嵐が迫っている。まだピンと来ぬ者もいるかもしれぬが、気付く者はこのジェルグのように年端がゆかぬ者でも気付いておる。事は急を要する！　我らは黙って惰眠を貪るか。平穩無事な生活と自由、我らがこれからも暮らしていくための『土地』、我らのルーツが築かれた世界を守るために戦うか！　二つに一つだ！

私の心はどうに決まっている、戦いだ！　生存権を勝ち得たい者はここに残れ！　戦いたくないという者は今すぐここを去り、家に籠もって呑気に惰眠を貪りそのまま滅びを待つがよい！！

私は戦う！　先祖の恨みつらみを晴らすためでもあるが、今を生きる我らが生き残るために戦うぞ！　さあ、立ち上がれ！　大地に育まれた森の民であるモリビトたちよ！！　此度の戦いも我らの勝利で収めるぞ！」

彼らの心は固まった。

彼らは離れて暮らしていても、厳しい環境で生きる為に互いに協力し合い、生きてきた。地上の者たちが頻繁に十五階を我が物顔で出入りをして、聖獣コロトラングルを殺めたと聞いたとき、彼らの心は悲しみ、当惑し、怒りを覚えた。

神官の演説により、彼らはいずれ降りかかる火の粉を恐れるのを止めて、反対に自らをその火の粉に変えて、地上の者たちと一戦交える事を決断した。

盟約を破った愚か者共を罰するため。聖獣の仇を取るため。一番は、自分達が生きていくための場所をこれ以上取られたくないがため、モリビトたちは戦う。神官は最後にもう一声告げた。

「さあ、今日は一晩出陣前の催しを行おうではないか。四から十二の

林村の方達はこの広場にてテントを張り、ここでお休みなされ。イワオロペネレプが我らの寝食を見守ってくださいる」

その言葉に応じたのか、突如として祭壇の更に後方から金色に輝く巨大な物が出でた。よく見れば、金に輝く巨大な物体は翼の形を象っていた。

くおおおおおおん！

その存在が一鳴きけたたましく鳴くと、地面が鼓動するように震える。二十階全域に潜む生物たちは恐怖に駆られ、生物たちにとっては臭いモリビトたちが集う場から逃げ去った。モリビト一同はひれ伏し、神官と鬼や悪魔のような姿をした長身の者たちも急に縮こまって見えた。

神官は畏怖すべき存在のほうへと杖を向けた。

「見よ！ 神鳥は我らのことを歓迎してくれた。そして来るべき嵐の前に興奮しておる」

神官の問いにただ一人答えたジェルグはちらりと面を上げて、入り組んだ木々の間から赤くて丸い大きな球体を一瞬見かけた。ジェルグは恐ろしさと同時に、不思議と安堵感も覚えた。

神鳥と呼ばれるイワオロペネレプの瞳はモリビトと同じ色しており、その眼には叡智が宿り、同類に属する者を見守る心も感じられた。

地上の者よ お前達の住処はどこだ？ それは地上だ

モリビトよ お前達の住処はどこだ？ それはここだ

ここは我らの楽園 我らを焼く光を遮り 永久の場として与えられた

地上の者よ お前達の好きな物は 地上に沢山ある

それに飽き足らず ここにまで押し入り 有る物を貪るお前達の心はなんだ？

地上に帰るがよい！さもなければ貴様等の身を槍で貫き 斧で頭皮を剥ぎとり 棍棒で骨を砕き 剣で頭首を落としてやろう！

我らは樹海に住む者 お前達は地上に住む者

モリビトよ お前達が欲するものはなんだ？

我らが欲するもの

それは 静かに暮らし たくましく生きて安らかさを与えられることだ

地上の者よ お前達が欲するものはなんだ？

石が欲しければ それをやろう 樹が欲しければ それもやろう

だが 我らの命 それに 我らの床は与えん

地上の者よ お前達の住処はどこだ？ それは地上だ

モリビトよ お前達の住処はどこだ？ それはここだ

これほど言ってもまだ解らぬというのか？ ならば、神鳥の鉤爪が驕る己らを引き裂くであろう

三度あつた大戦で、結果が一番酷い。大敗退を喫した二度目の大戦の年、今わの際にと、数人の大僧正と共にして神鳥の背に乗り、神鳥と共に命を散らした神官の一行が遺した辞世の詩だ。詩からは覚悟と想いがひしひしと伝わる。この詩は後世に伝えるべきとして、幾度となく骨や木の板に墨で書き記されてきた。

現神官はその神官がこの詩を謡ったときの想いへと馳せ、謡った。彼に倣い、大僧正も、僧侶も、巫女も、村長たちも、戦士と一般のモリビトたちも謡った。

露出が激しい乙女たちも朗唱した。その声は美しいが、魔力が秘められていた。

鬼と悪魔の姿をした者達も歌いだした。

歌の意味をわからなくても、二十階に潜む生物たちは歌を聞いて更に恐れ慄き、よほど餓えた生き物たちも隅に引っ込み、歌が鳴り止むのを待ち続けた。

六話 枯れた世界

俺達は冒険者は地上に出れば、非常時の時を除いて理性的であらねならん。そうして、余科の時間をいたずらに過ごすのではなく、知識を身に付け、人と交流するのだ。知識を身に付けければ、探索時以外に役立つだけでなく、冒険者を止めたとき、それらの知識を次なる人生の目標、あるいは何らかの家業にいかせるかもしれない。

人と交流することとは、すなわちコネ。聞こえは悪いかもしれないが、多くのコネを作っておけ。中には見捨てられることもあるだろうが、中にはきつと手を伸ばしてくる者もいる。今俺が言ったことは全て逃げ道だ。勝利や栄光のみ考えて突き進むときもいるが、そればかりでは無理だ。冒険者、危険を冒して道を進む者たちはただ危険ばかりを考えてはいけない。それらをいかに回避し、いざというときの事も考慮し、初めて冒険にいくのだ。

つまり、逃げ道を考えることとは、心置きなく危険を冒しに行くための準備のことを差す。

そして地下世界に行くときには非情な理性を持たねばいけない。非情な理性とは、仲間や同業者を見捨てる覚悟。もしも冒険者家業を今後も続けていきたいと思うのなら、どうしても助けられない場合は涙を呑んで見捨てる。

そして、邪魔をする者がいれば、相手が人であろうと容赦なく斬れ！自らの目標とすることを達成したければな。ここでは、身内同様に思っていた者や顔見知りが突如として牙を向くことがある。

……と、これが俺がゲンエモンさんに教えられた冒険者の教訓だ。ジャンベが冒険者になって間もないある頃、エドワードから耳にたごができるほど聞かされた、彼の師の教訓だ。

ゲンエモン。ジャンベは数度しか会ったことはない。ジャンベのゲンエモンの印象は、親切そうな年配者。

物腰柔らかく、動作ひとつひとつに風格と気品が漂う人物だった。とてもじゃないが、教訓に人を斬れ！ など、過激なことを教えとしてのたまう人には思えなかった。

髭や髪には既に白い物が混じる、とうに五十代に突入したベテラン冒険者であり、武術の達人でもある侍ことブシドー。

彼には弟子が数名おり、オルドリツチというメデイック率いるパーティ・グラディウスにそのうちの二人、白哲金髪で海のような深い青い瞳の女、パラディンのシショ。細く厳しい一重に黒い髪を一つに結んだ(ポニーテールっぽいと指摘したら怒る)髪型が特徴的な若侍、コウシチ(高志知)がいる。

エドワードは弟子に取られたつもりはないが、冒険者のイロハを教えられたので弟子のようなものだ。

もしも、ゲンエモンの言葉に従えば。相手が人に近い存在であろうと、道を塞ぐ植物を鉋で排するかのようにならなければならないのだろう。

ゲンエモンがこう語るのは彼の辛い過去の実態権に由来する。ゲンエモンはエドワードやごく一部に詳細を語ったのみで、エドワードもジャンベもそこは語らず、ジャンベも深く問い質すのを控えた。

……荣誉・権力・金・夢・目標・ロマン。自らの欲する物を手に入れたければ。

——それにしても、逃げ道を心置きなく冒険に出る為の準備とは、物は言いようだな。

湛えられた水ばかりか、木や土も青く同色に染まった世界樹の第三階層。所々にある目印の色塗られたロープ、時折出現する赤い熊や怪物蝙蝠(こうもり)に大トンボ、十四階の湖に浮かぶ蓮の花。

緑の帽子と緑青のマントを羽織り、弓矢と短槍を背負う、碧眼で金髪の偉丈夫の狩人。

その狩人なみに背が高い、鎧冑を着込む男。

長い金髪を団子状に太く幾重にも辮髪状に巻き、目付きは青く鋭く、橙色のコートを着て、変わった形の金の籠手と黒い手袋を嵌めた女。

亜麻色の緩やかなウェーブがかかった髪、ハシバミ色の柔軟な目と顔付きの白衣の美女。

この階層に合わせたかのような青いベストやズボンを履いた、楽器と矢筒を背負う黒い肌の青年。彼らもまた、この冷たく青い世界に色を添える役目を果たしていた。彼らは各自、太くごついナイフを携帯していた。

がさり！ 青い茨の茂みから、血に飢えた二頭の猛獣が行く手を阻んだ。二本足で立ち、よだれが滴る牙と長い爪がぎらぎらと照り映え、白く濁った瞳孔は歪められ、赤い硬質な感じの毛皮が打ち震えている。

「コルトンと俺は右を！ ピューリとマルシアは左を牽制！ アクリヴィはわかっているな？」

エドワードはさっと指示を飛ばすと矢をつがえ、コルトンは盾を掲げて右の赤熊に。ピューリとマルシアは左の赤熊に向かった。

赤い熊の丸太のように太い腕から繰り出された一撃を、コルトンは盾で受け流した。赤熊の態勢が崩れて瞬間、エドワードは眉間に分銅付きの鎧砕きの矢を放ち、赤熊は右目蓋の上の骨が砕けた。

眉間を抑えて地団駄を踏む赤熊へ、盾を捨てたコルトンは切れ味を重視した肉厚の片刃の剣を赤熊の心臓目がけ、一突き！

コルトンが蹴飛ばすと剣は抜け、赤熊はふらふらと酔っ払いのように足をもつれさせて、豪快な音と飛沫を立てて湖に没した。血の臭いを嗅ぎつけ、死体に凶暴な肉食性の魚の群れがたかった。

もう一体の赤熊は、ピューリは短弓で、マルシアは槍で牽制した。連続した小さな攻撃に赤熊は切れて、赤熊は腕を広げて胸部や腹部を露わにした。

そこをアクリヴィは自らの精神を媒体にして作り上げた雷を鍊金籠手を通じて発射！ 稲光は一筋の柱となって赤熊を襲う。あつという間に赤熊は生きたまま内部を焼かれてしまい、黒ずみ直立した熊の彫像が完成した。

三階層になると効果も薄れるが、特製の獣を除ける鈴を鳴らして行進した。

道中、女王蟻の残党に酒劇された三階層に降り立ったばかりの一行

を救出するための戦いを除けば、後の道中は一体や二体と、少数の生物が現れるだけで、まともに戦ったのは救出のための戦いと二体の赤熊との戦闘だけ。

殆どは脅かせば逃げたり、ちよつかいをかけなければ仕掛けてくることもない。

鈴の音を不愉快に思ったのか、足早に自らの縄張りから離れた。

冒険業の主なる稼ぎは発見と採取。無駄な戦闘を避けるには越したことはないが、鍛錬や金が入用となれば話は別。

相手にその気がなくとも殺す。それに、樹海の生物を殺す事は執政院と冒険者の間で暗黙の内に決められている。

これには、複雑な政治事情も絡んでいるのだが、目下の所は安全性のためである。エトリアは他国の約束の一つに、国外、ひいてはエトリアの街から樹海の生物を逃さないという取り決めがある。

トルヌウーア内壁が建つ前、世界樹の底から大挙して怪物が出現するという事態が一度あった。トルヌウーア内壁が作られたその後にも一度。

樹海の生物自体は金になるが、地上にまで這い出てくるのは困る。ために、街は冒険者に出来る限り生き物を殺して数を調整するよう求め、ときには街を守る兵士たちの良き実践相手としても戦わせたりした。

そんなことをしなくても、地上の生物とは異なり、樹海の生物はどれも奇異で狂暴。

執政院に頼まれなくても、冒険者たちは数多の道具と武器を使い、怪物との戦闘、樹海の特異な事情から生まれた天然の要害を潜り抜けるために仲間と助け合う情けと、そこに潜む者共には持ち合わせないほうがいい非情さを持って各々の目的を達成しなければならない。

「痺れるわよ」

四人が自分より一步後ろに下がったのを確かめたら、アクリヴィイはまたしても雷の術式で、水に没した赤熊の死体に続々とたかる肉食魚の群れを蹴散らした。

途中二回の小休止を挟み、武器装備や重い船のパーツを担いで五時

間歩き通しだが、休んでいる暇はない。

急ぎ、固い地面の上で二隻の小舟を組み立て、マルシアが刺激臭のする薬を船体に塗りたくる。この薬でしばらく魚や大ガなどは寄り付かない。

船は陸からでも水中が見えやすい、砂利が敷き詰められた箇所^に置いた。

守りの要であるパラデインのコルトンを先頭に、アクリヴィは背後に回り、余ったスペースに荷物を詰めた。ジャンベは二隻目の前、エドワードは船のしんがり、マルシアは二人の間に挟まれる形で乗船。

この列に意味はある。コルトンはアクリヴィを庇い、敵が宙や水から襲ってきても、アクリヴィの錬金術で掃討する。

二隻目は、二人の射手であるエドワードとジャンベの弓矢による支援。及びエドワードの鋭い視力と聴力、そのエドワードより更に広く音を聞き分けられるバードのジャンベが警戒にあたり、マルシアはいつでも治療に出られるよう待機。

小波を立てないよう慎重に、かつ素早く櫂を漕ぎ、付かず離れないよう気を付けた。

邪魔な巨大水連を槍や櫂で押しつけて、対岸の十五階に通じる道がある場所へと船を進める。

十五分後、段々と見えてきた。目印にと、ホープマンズとホープマンズ以外の冒険者一行が水から引き上げた巨大水連が道を飾り立てていた。

はばたく音が五人の耳に聞こえた。コルトンが敵はどこだと視線を彷徨わせる。ピューリが上方、東南東を指した。

「多分、四羽です！ 蝙蝠が四羽です」

エドワードは方向こそ判っていたが、まだ正確な数までは把握してなかった。透き通る歌、巧みな楽器の扱いもそうだが、ピューリの聴力の良さには驚かされる。

櫂を漕ぐ速度を落とす。血を求めてきたのではなく、移動のために接近しただけの可能性はあるが、警戒は怠らない。

五人はマントや布を被り、姿を消したが、その下ではエドワードと

ジャンベは矢をつがえ、コルトンとマルシアは剣と槍を握り締め、アクリヴィは雷の術式を構成し始めた。

赤い四つの点はこちらに接近し、高度を下げた。赤い円みがかった体型の蝙蝠たちは小舟を素通りして、青く聳え立つ樹の間を飛んで抜けた。

蝙蝠の羽音が遠ざかるの確認したジャンベは、「もう大丈夫ですよ」と安全を告げた。

アクリヴィは練った術式を打ち切り、二人の射手は矢を筒に戻し、コルトンと剣を鞘に納め、マルシアは槍を置いた。そこからは小波を立てるのも構わず船を進め、対岸の台地に辿り着いた。ここで小舟を引き上げ、最後の小休止を取った。

しかし、最後に湖の波を荒げたのが悪かったのか。水面から巨大な双眸が陸に上がった獲物に目を付けた。

水の中を歩き、固い台地まで差し迫り、豪快に水飛沫を飛ばして出現するやいなや、その者の全身に文字通り、電流が走った。エドワードはその者が水から上がる五メートル手前、水の揺れに不穏な物を感じて、アクリヴィに小声で術式を練るようを耳打ちしておいたのだ。

水から上がった者の正体はカニだ。

体は薄い灰色の殻に覆われ、子羊なら一飲みしかねないほど口は大きく横に裂けて、吊り上った双眸だけで人の頭よりでかく、二つの鋏はどんな物でも容易く切断できそうだ。

放った術式の威力は低いものの、効果は抜群。カニは地に顔を伏せて、息も絶え絶えだ。

コルトンは盾を持ち、鉄製のメイスを握り、カニの鋏が届かぬと思う範囲にゆき、カニの後頭部を叩き割った。

頭の殻は砕け、露になった暗い黄緑色の殻交じりのカニ味噌ならぬ脳味噌へと一撃を与えた。カニは数秒ほど痙攣けいれんを起こし、それつきり、二度と顔を上げなかった。

コルトンはメイスの汚れを布でぬぐい、どうするかと言った。

「最近こいつらのぶつを取れないから、今のエトリア市場じゃ、こいつの甲羅や足にかかった値段は九十エン上昇していたよな。取っつい

くか？」

今日の目的はジャンベに四階層十六階にある樹海時軸を通らせることにある。探索、階層慣れのための探索、依頼、報酬目当てではない。さりとて、無一文で帰るのも寂しい。エドワードはカニを捌くことにした。

マルシア、コルトンは見張りに立ち、三人がかりで皮剥ぎ用の頑丈でぎざぎざの歯が付いた太いナイフで関節の隙間を切り、甲羅を剥ぎ、余分な肉を削ぎ落した。

樹海の生物の中には人間が食べられるものもいる。一階層二階から出現するウサギなどは良い例だ。

あの丸っこく太ったウサギの肉は香ばしく、歯と皮も金にもなり、そんなに強くもないので、未熟な冒険者たちにとっては恰好の標的だ。

これで食えれば嬉しいが、残念、このカニは食せない。口にほやほやの便が入ったと書けば想像できるだろうか。毒はないが、恐ろしいほどこのカニは不味い。というより、一階層二階層に比べて、三階層は人間が食せるような動植物は意外にも少ない。

エドワードとジャンベは、縄で束ねた四本の脚と甲羅をコルトンらに乗る船のスペースに詰めた。

樹の根っこで覆われた道まで小舟を運び、最後に三分休憩したのち、五人は下へと降りた。四分で十五階に着いた。

林を出るまでは小舟を担ぎ、林を出た先にある見渡しがよい広場に出たら、船の底に小さな木製の車輪を付けて、舳に縄を結び付けて運んだ。前はコルトンとエドワード、二人の手にはそれぞれ縄が握られていた。数歩後ろでは、マルシアとジャンベが縄を引いていた。その縄と縄の間、パーティイの中間点をアクリヴィがいつでも対処できるように歩いた。

あのイトマキエイモドキの怪物が現れないか。全員目をこらし、耳をすました。

音は、ここにいる者の吐息と足音以外、船を引く車輪の音以外は聞こえなかった。船以上の重荷を抱えたように、パーティイの歩みは遅々

としていた。

ジャンベは成長したが、この場では存在的にロデイムのほうが安心できた。あの怪物との戦いで、ロデイムは厄介な棘棘だらけの二尾を切り落とす活躍をみせた。

背はメンバーの中では低い、なで肩に見えるほどがっちり鍛えられた体は逞しく、弓の扱いはジャンベより劣るが、その他の武器、特に剣や斧の扱いは慣れたものだ。

何より、あの果敢に巨体に挑む精神。怖い物知らずでもいえばいいの。度胸は人一倍あり、冒険歴もジャンベより長い。

が、無い者ねだりをしてもしようがない。なんせ、そのロデイムは今頃、地上で呑気に寝転がっているか、武器を持って余しているに違いないから。

彼らの予想は外れ、ロデイムはコネを作れという教えに従い、自分から内壁周りの歩哨の役割を買って出た。とはいえ、退屈そうに椅子に腰掛け半目で見張りをしていたので、五人の予想はあながち外れてなかった。

無事、岸边にまで到着。エドワードとコルトンは船の前を持ち上げて、その間にジャンベとマルシアは手早く車輪を外した。舳の縄を解き、いざ、最後の乗船。その前に、アクリヴィが十四階の時と同じく、雷の術式を川に向けて放った。

雷光が川を打ち鳴らし、水面を激しく泡立たせ、ばしゃばしゃと水中の生物たちは逃げ出した。

安全策も完了、乗員の構成はそのままに、今度は横並びに船を漕いだ。ここは川幅が狭く、三分もあれば、四階層十六階に通じる道がある対岸へと到着する。

この対岸は横十坪、縦一坪半もある固い地面。着くやすぐに小舟を解体、マルシアは今日の収穫や車輪など細々とした物を背負い、アクリヴィは櫂、男三人は解体した船のパーツを背負った。

「今日でこの重い船のパーツとも土木工事ともお別れだな。寂しい奴はいるか」

エドワードの言うことに答える者はいない。マルシアが答えてあ

げた。

「……私が皆の気持ちを代弁すれば、そうだなと答えてあげる」

胃を被り、道も薄暗いので顔は見えないものの、コルトンはじんと感動にも近い歓喜を噛み締めていた。コルトン以外の者も同様に。

二階層は不快な湿気と熱気で鎧を着る身には大分堪えたが、この三階層の苦勞に比べたら、熱でも湿気でもほとんどこいだ。地殻変動のせいで地形は変わり果て、古い地図は白紙同然となり、道を作るため、スコップやら余分な材木と縄を担ぐ日々、その次は、小舟のパーツを担いで三ヶ月の間、船を漕いで川を渡ったり道を探す日々。

清楚な青い森も、心を暗く鎮めるだけの忌むべき景色になった。

ようやく、そんな日々から解放される。下の世界は物寂しく枯れ果てているが、土木用具を運ぶ回数が減ることと、重い船のパーツとおさらばできると思えば、自然と浮き足立ってきた。

それだけではない。冒険者の一行は、二百年前の資料を失い、再び未開の地となった世界へ足を踏み入れることにも興奮していた。一步降りる度に薄暗い視界が明けてきた。ジャンベは初めて、他の四人には二度目となる新たな世界の光が差し込んできた。

「この辺一体にあるものは死んでいるのですか？」

ジャンベが誰にともなく問う。

「そんなことはないぞ」

エドワードは証明にと、ナイフで手近な炭のような樹に一筋の線を彫った。樹は炭のような樹皮とは異なる白い樹幹をみせた。すぐに、切られた箇所から甘い香りの樹液が染み出した。

「ここにはいないロディムを含め、俺たちも最初はお前と同じことを思った。そして、そのときは俺ではなくロディムが斧で一回、適当な樹を伐った。見えにくいのが、十メートル先右にある樹に斧で一回伐った跡があるはずだ」

ジャンベは一行から少し離れ、右の開けた道にある樹々をすかし見た。小豆色の草に隠れているが、エドワードがナイフで彫り跡を付けた同種の樹に、大きな伐った跡が確かめられた。

四階層の印象は全ての人が口を揃えて言うはず、枯れている、と。三階層が青一色なら、四階層は黒と黄と茶の三色のコントラバスで構成されていた。小豆色、海老茶など細かな色分けをできないわけではないが、どれも寂しいのや枯れた印象の色しかなく、そもそも分けるだけ無駄だった。

確認も済んでジャンベは一行に戻ると、これからの予定を聞いた。「このまま進むのですか？ それとも、戻るのですか？」

「戻る。今日はスムーズに進めたが、いつもこうとは限らん。三階層踏破で体力を結構使ったしな。さっさと目の前の樹海時軸を通り、今日の探索はこれまでとする」

ホープマンズの目の前、真四角に開かれた空間があつて、その中央から円状の淡い紫の光が立ち上っていた。光は十六階の天井にまで続き、その上へ上へと上り、遂には地上の世界樹の根元にまで上る。これこそがくだんの樹海時軸。

冒険者たちには身近なものであり、同時に一番の謎である。

地上の時軸には、太い棒杭に数字が刻まれている。この棒杭は材質は地上にあるいかなる物質とも異なる素材で作られている。円形の淡い光の中に入り、棒杭の数字を押すと、瞬時にその階層の一番浅い階に直行する。

便利ではあるが、一つ難点が。数字に刻まれた階層へ行くには、一度その階層にある時軸を通らなければいけない。例えば、二階層の時軸を通ったことがある者と無い者が光に入り、数字に触れても、二階層の時軸を通ったことがある者の姿が消えただけで、もう一人は地上に取り残された。

転送魔術。かの鍊金国家の子孫が創作した技術。世界樹の奥底にあるかもしれない古代文明の遺産の一つ。まことしやかに論議は交わされたが、真相は千年経た現代でも謎だ。

一行が通ろうとしたら、左の方の開けた道から輝く毛並みの生き物が現れた。立派な角を生やした黄金の角鹿だ。

目まで金色の輝きを放つ。こんな鹿は見たことがない。角と毛の黄金の輝きに五人は引き寄せられた。

その鹿の輝きは彼らの疲れた心をいたく刺激した。エドワードの狩人の誇りがこの角鹿を仕留めろと叫び、彼は程よいぐらいに心を自制して、角鹿を見据えて言った（潜めた声で）。

「当然のルールとして欲の皮を突っ走らしたまま潜ってはいけないが、どうしてもというのなら、俺はあれの角や毛皮を土産に持ち帰ってもいいと思う。どうだ？」

今日はジャンベを時軸まで連れて行く。それで終わり。しかし、せっかくここまで来て、ジャンベ以外の四人目は二度目、そろそろ、他のパーティよりも早く何かしら発見が欲しい。

暗黙を了解の合図と受け取ったエドワードは、肉の切れ端を鹿とパーティの中間に投げた。

角鹿は臭いを嗅ぎ、警戒の目を向けたまま、投げられたものに興味を持った。

空を裂く音。ぴくりと面を上げたら、自身の額に重く衝撃がのしかかり、視界が揺らぎ、倒れた。

角鹿は二対の角で抵抗する前に死んだ。額には一本の矢が刺さり、矢は三分の一まで角鹿の額に入り込んでいた。エドワードは、一瞬の隙に矢を放ったのだ。

「ロディムを驚かす土産ができたな」

淡い、無機質な声。今のエドワードは狩人であり、夢と計画やロマンや利益を求む冒険者であり、冷徹に戦うエクウウスの戦士でもあった。声はすぐに砕けた調子に替わった。

「案ずるな。この角鹿が十頭現れて、角と毛皮を差し出すと頭を垂れたとしても、もう余計に時間を食うような真似はせんよ」

「そうかな？ 俺なら喜んで角と毛皮をちょうだいするぞ」とコルトン。

「好きにしろ。あんたがそうしている間に、俺たちはこの一頭分の角と皮だけを持って地上に帰る」

冷たいなとコルトンは厳しい相好を崩した。腐るの遅らせなければ、エドワードはナイフで角鹿の頸動脈を斬って血を出した。

男三人で作業に当たり、幾重にも枝別れた金の角を取り、金の毛皮

を綺麗に剥いだ。この角鹿の肉を食べるか検討したいが、これ以上、欲の皮や好奇心を突っ走らせたら本当に良からぬことが起こりそうな気がするので、しまいにした。

最初にジャンベを帰らせようとしたとき、ジャンベは耳ざとく音を拾い、皆に注意した。短槍を構えたマルシアがジェンベを横目で見た。「ジャンベ、演奏してみたらどう？」

マルシアの案に一同は同意した。

危険な生物が単食う場所で音を立てるのはもつてのほかだが、バードの演奏は別だ。腕の良いバードの歌声と演奏は樹海の生物を大層驚かせる。

大きな音に怯える点では、地上の生物も人間も大差ない。

ジャンベを皮袋で覆ったギターを担ぎ、弦を盛大に弾き、よく通る済んだ声をわざとがならせた。雑な音が静かに枯れ果てた世界を賑わせた。アクリヴィはレイピアを抜き、オウ！ と気合一声、その方向に向かって剣を突き出した。

ききい！ 彼らの後方、入り組み絡み合ったくさむらと樹のほうから、猿と人間の悲鳴が混じったような声が二つ上がった。派手に草を掻き分け踏みつけて、二匹のなんらかの生物は逃げ去った。

「エドワードよ。俺は十頭どころか、百頭が頭を垂れても無視するぞ」とコルトンは、さきほど自分達が来た上を通じる道がある方を見ながら言った。コルトンの表情は厳しかった。

あの二匹の正体は不明だが、あれが何かの子供で何匹も大人たちや仲間を呼び寄せられたらたまらない。この四階層は圧倒的に知らないことが多く、今の一行の装備は三階層踏破用の物であって、四階層の探索を想定した装備ではない。

ホープマンズは慌てず、予定通りに最終行程をこなした。ジャンベが円に入り、姿を消した。次いで、マルシアとアクリヴィが行き、コルトンが後に続き、最後にエドワードは周囲をざっと見渡してから紫の光に身をゆだねた。

時刻は正午、朝の陽光はどこへやら、曇り空だった。

内壁の門まで来ると、門の狭間から見慣れた者が軽薄な調子で上か

ら話しかけた。

「皆さん、マルシアお疲れー。おおっ？ 随分と高そうな角飾りを持っていないか」

マルシアだけ名前を呼び、赤茶の瞳、青く短く刈られた頭髪をなびかせ、犬歯をのぞかせて顔を生意気そうににやつかせているがどこか憎めない感じの男、ロデイルだ。コルトンが笑顔で腕を振るって叫んだ。

「おい！ この青髪小僧めが！ 全く、お前が酒をかつくらったまま性行後のように服をはだけて寝ところがつていやあ、お前さんの顔を躊躇いなく蹴っ飛ばせるのに。今日は真面目にしやがつて。……お勤めご苦労歩哨殿！」

「俺はいつでも真面目だ」

ロデイルが右、歩哨の一人が左につき、開聞した。ロデイルは長柄の斧を背負い、腰のベルトには短い斧と剣をたばさんでいた。剽軽な態度だが、歩哨の任はぼちぼち真面目に務めていたらしい。

ロデイルは歩哨の五名に敬礼した。

「では、今日の任務はこれまでとさせてもらいます。また暇な日でも来るぜ」

五名はロデイルに敬礼を返した。

胃を目深に被っているのだからなかつたが、声からして、一人は若い女のような。エトリアと州域の都市や国では、普通は女性が就かないのが当たり前と思われる職に女性が就くのは当たり前である。女の人がこういう職に就くのが当たり前なことに、ロデイル、コルトン、アクリヴィ、ジャンベには驚異的であった。

内壁の門にて会したホープマンズは話もそこそこ、エドワードとマルシアが執政院への報告に行き、残る四人は今日の報酬を背負ってシリカ商店を目指した。

緑の屋根と赤く染めた煉瓦の店。中は木造造りで、所狭しに整然と物が置かれている。店は幾つかのランタンで照らされ、ランタンの光で武器の刃が何十も反射して店をより明るくみせていた。

肌は健康的に日焼けた褐色、黒い髪は白いリボンでポニーテイルに一括りされて、両の二重眼はぱつちりと開かれ、あどけなさを残す目鼻筋が通った顔はどこか油断なさがあり、ぎざぎざの白い石か骨のアクセサリーを首に巻き、赤い下着のような衣装を身に着け、腰回りに黄色い布だけを巻いた大胆不敵な恰好の少女・シリカ商店の現店主だ。

彼女の父は亡くなり、放浪癖がある母は娘を父方の祖父母に預けてどこかへ旅立った。多くの者は彼女の境遇に同情するが、彼女はおよそ少女らしからぬ口調で笑い返す。

「がはははははははは！ 僕は逆に感謝しているよ。なんせ、教育になるとことん駄目な母親じゃなくて、父方のおじい様とおばあ様に育てられたお陰でほらご覧！ 今はもう、お二方の店を継ぐ立派な店主になれたんだよ」

快活にそう話すが、強がっているだけだ。

彼女は荒くれの冒険者共に負けてなるものかと、口調から女を止めた（店主なりたての時は『俺』だったが、祖父母や店の職人たちにそこまでしなくていいと諭され、僕で妥協した）。

祖父母から女であることを忘れてはいけなと言われていたが、「じゃあ、ドレス着て。貴族のご婦人みたいによろしくいらつしやいあそばせませーお客様ー、とか。そんな風にしなくちやいけないの？ 僕はそんなん嫌だね。それなら、もっと育ちの良い親元で育った人を連れてくるべきだね。大丈夫！ 僕に任せてよ！ 店の評判は絶対落とさないよ！ 店の利益もね」

彼女は彼女なりの決意を固め、ある日、村娘の恰好から、今では見慣れた看板娘兼店主の破廉恥と言われてもしかたない服装をするようになった。初めははしたないと後ろ指も指されたが、意外にも効果があり、シリカは看板娘兼店主として名を馳せた。

エトリアで迷宮から持ち帰った商品を現金に換えられるのは、どこでも良いというわけにはいかない。商品の信用性、ブランド性を高める為に取り扱いを許されている店の数はエトリアでは現在、迷宮関連の取り扱い認可を貰った商店は六店舗しかない。一生迷宮商品取扱

の看板を掲げられるわけではない。十年に一度、厳しい審査をパスできたら、引き続き認可の看板を掲げられる。

大抵の者は拠点近くにある店舗を利用するが、シリカ商店では離れた拠点に住む冒険者たちも足繁く訪れる。

お陰で五店舗の中でも一番繁盛している。秘訣は四つある。

市場をよく見て適正な価格を決める点。先代の人柄と現店主の懸命さに魅かれた腕の良い職人たち。冒険者以外の一般人も訪れやすい内装と雰囲気。気風の良い店主の存在。この四つが上手く重なり、シリカ商店は他の五店舗を抑え、売り上げ高は毎年一位をキープする。

「いらっしやいませー。探索ありがとうございます！今日は随分と早いね？前みたい、良い物だけど、重くてかさ張るものでも採ってきたのかい？」

いらっしやいませは接客業の基本であるが、シリカは服装や雰囲気、相手がどんな仕事をしているか一発で見抜き、相手の商売柄に合わせて「〇〇ありがとうございます」と心を込めて礼をする。

どうしても判らなければ聞いてから言う。最初は戸惑うが、自分の仕事にありがとうございますと感謝されて、嫌な気分になる者はいない。挨拶一つ取っても、シリカ商店は他店と異なる。

コルトンとロディムは広い鑑定用の卓に代物を置いた。

「カニの甲羅と脚四本は見慣れているな。だが、これはどうだい？こんな角や毛皮、見たこともないだろう」コルトンがずいと角と毛皮を押し出す。

シリカと鑑定職人、二人の若い冒険者は金に染まった角と毛皮を見た。シリカは算盤でカニ関連の値段を弾きだした。

「えーと、つきましては、甲羅の価格は一四七エン、脚四本は計六二四エンになりやす。肝心の角と毛皮ですが、これは判別しかねますので、よければ今日の夕方か明日までお待ちいただけませんか？なんせ、二百年前の資料がごっそり無くなる事件のせいで、こういった生物がいて、こういった植物が生えて、それらはどの程度の価格が付けられていたか皆目検討がつかないもんでね。安心してくれ。君らが

満足に思う程度の値は付けるようにはするよ」

つまり、満足な値が付く保障は無いということか。言ったことに口出しはせず、四人はカニの代金だけを受け取って店を出た。

時間がかかる場合、客が住まう所に直接定員が代金や商品を受け渡しする。商品受け渡しはあるが、代金受け渡しはここ、シリカ商店の創設者が始めた。店の者が物や金をくすねる、こんなことはシリカ商店では一度もない。そこも長く迷宮商品取扱い店の老舗として繁盛してきた理由だ。

「ロデイルム、櫂を運んでちょうだい」

ロデイルムがなんでだよと突つかかるのをアクリヴィは制止した。

「もしも運んでくれたら、マルシアにあなたがこんな親切をしてくださいと言つてあげるけど。まあ、仕方ないわ」

ロデイルムは無言でアクリヴィが抱える櫂を取り、長鳴鶏の館に向かった。

「扱いがうまいものだ」

口元は引き締まっているが、コルトンは目が笑っていた。

「あなたはどう思ったか知らないけど、私は少し、あのお出迎え方をされてかちんときたからね。どうせ椅子に座って雑談でもしていただけだろうし、ちよつとぐらい働いてもらっても罰は当たりやしない」
「そうか！ そりゃいい。ジャンベよ、お前も遠慮なくロデイルムに船のパーツを持つよう言ってみろ。マルシアの名を付け加えるのを忘れずにな」

そんなとジャンベは言いながら、口元は笑っていた。二人はロデイルムが戻ったら、アクリヴィと同じ手口を使い、船のパーツを幾分持つてもらった。

血の気は多く、いつでも仕事人になれる冷徹さもあるが、単純で、根は優しく、こういう奥手な面が憎めない。その純粋な面を利用するのは申し訳ないと思うも。ともすれば、無垢な奴めと、馬鹿にする意味は含まれない笑い声を上げてしまっそうだ。

ロデイルムはアクリヴィの腕を掴み、「ちやんと言えよ」と釘を刺した。アクリヴィは意地悪そうに口端を歪め、本人が期待するような言

い方で適当にあしらいだ。

四人が着いて六分後、執政院ラーダの報告からエドワードとマルシアが帰ってきた。

夜、宿の食堂で一同会して食事をした。エドワードが決めたことであり、理由が無ければ、出来る限り卓を囲むようにしている。「俺の部族はそうして絆を深めていた」が理由に挙げられた。席でマルシアがロデイムの荷物運びについて言及し、褒められたわけでもないのに喜ぶロデイムを見て、マルシアとロデイム以外は笑いを堪えて食事した。

七話 詰所の若者二人

十六階の遙か奥。刃物のように深く剃りが彫られた幾本もの太い杭に囲まれた場所があり、そこに簡素な掘っ立て小屋が建てられている。小屋にはボサボサ伸ばした若葉色の髪と死人のような青白い肌、血の涙を流した跡のような赤い瞳の者ら、モリビトがいた。

小屋には赤い皮鎧と鉄製の穂先の槍を持つ高位の戦士が一人、その戦士より若い戦士と狩人が五人ずついた。外では、二人の若者が周囲に埋めた農作物の世話をしていた。

モリビトは日毎により役割が異なる。

農耕の役目の日は、ナイフ一本と農耕具以外、武器となる者は身に着けるの禁止で、戦うのも狩りに出るのもいけない。狩人の役目の日は、出来る限り身軽に動く必要があるため、必要最低限な装備しか身に着けない。

鎧を着るのは許されているが、獲物を追うのは身軽に限るので、鎧を着る者はあまりいない。

戦士の役目の日は、相手によってはナイフや槍一本だけでは不利なこともあるため、沢山の武器装備を携帯し、村の中と外の守備をする。

この十六階にある詰所は十七階の奥にある村から、遠く距離を於いている。村へ戻るには、最低でも丸一日の行程を要する。

この訳を知るには、モリビトの歴史を記す必要がある。

モリビトは十六階では村単位の住居を築かないと決めている。それには理由があり、一つは村同士が離れていると、いざという時の情報伝達や連携に支障が生じ、離れすぎていると火急の際に救援も遅れる。地下世界の環境は厳しく、モリビトであれ、おちおち胡坐を掻いては過ごせない。例を挙げれば、地上の人間が知らない、十七階の十八階に通じる別ルートの手すぐ近くに村と村がある。

もう一つは、動植物のため。

住居の拡大範囲を広げるには犠牲こそ伴うが、将来のモリビトの繁栄には繋がるだろう。

しかし、そうすれば、ここにある動植物の生息範囲が狭まり、自分

達が生きていく上で必要となる生物たちの数が減り、それらを求める争いが起きてしまう。

自分達が生きていく上で必要な者たちも守り、モリビトが生存していくためにも、十六階と十七階の大半は手付かずに残しておく。それに、村の範囲拡大には犠牲が伴うと記したが、モリビトたちは数と強さにおいて最盛期の時代であっても、四階層の隅から隅を支配するのはどだい無理な話だった。

この地下世界の樹海には、彼らが敬う神鳥と同等の力を持つ怪物が潜んでいる。

鍊金国家の生存者が世界樹に来る前、地上の人間の影響で墨を用いて骨や板に文字を記すようになる前のとても古い時代、モリビトの村は二つしかなかった。

古い時代、四階層にはもつと大きな河が流れていたが、現代では数多の小さな支流しかない。

その時代の河にはとても大きく恐ろしい力を秘めた怪物たちが住み、河から上がってモリビトを食すのもいた。いつまでも隅に縮こまった生活には耐えられないと、若い十二人のモリビトが立ち上がった。

伝承歌が正しければ、モリビトは八十三年の歳月をかけて小さな支流を大量に造り、河の範囲を狭めた。

河の範囲が縮小し、そこに住まう怪物たちは以前より激しい縄張り争いをするようになり、減少した。

十二人の孫の長男長女が役目を引き継ぎ、戦士を引き連れ、残る怪物たちと戦い、一年に渡る戦いの末、遂にモリビトは四階層の支配者の座に就けた。

怪物たちの中でも、河から出ても暮らせる者だけが生き残り、そこそが神鳥と同等の力を持つ怪物である。

その後、支配権を賭けた最終決戦でも運よく生き残った十二人の若者たちは自らを慕う者たちを導き、土地を開拓し、十二の村を築き上げた。そして、神鳥以外にもモリビトたちの心と村を一つに繋げられ

るような人物を立てたほうがいいと考え、最初に立ち上がり、率先して危険な事を引き受けた一の村の長を神官。正しくは大僧正長に指名された。

神官職の者は一つの村に定住せず、一年毎に移り住まなければならない。

一つに留まるということは、それだけそこに愛着を持ってしまい、指導者がその村だけを優先するような事態になるのを避けるためだ。神官職は同じ村から立て続けに選んではならない。

同じく、一つの村に権威集権を回避するため。

ほかにも規則があり、神官の職に就いた者は原則として子孫を残してはならない。

代わりに、一年毎に各村に移り住み、その中で才覚有りと思えた十歳に満たない子供を見つけ、その子を引き取り、独裁者にならぬよう厳しく教えを説き、老いか、臨終の間際に職をその子に譲るといった決まりが設けられた。

以後、紆余曲折を経て、モリビトのシステムも変わり、以前は僧侶も兼ねていた村長は村長。僧侶は僧侶と分けられた。

といっても、あくまで儀式に祭りや有事の際には村長や僧侶になるだけで、普段は長や僧の者たちも農耕者や戦士の役目を果たしており、モリビトの階級システムは地上世界とは異なる。

当初、十六階にある詰所は怪物たちの動向を探るためと、身内がここまで狩りに来ないか見張るためであったが、現在では地上の者たちの動向を探る偵察基地でもある。

なお、詰所に居る者たちに限り、一日一回の狩りが許されている。

この日、高位の戦士は、若い戦士と狩人で四人二組を組ませた。一組は偵察も兼ねた狩り、一組にはただの偵察に向かわせた。

狩り役は狩り役、戦士は戦士として詰所周辺の歩哨に当たるのが普通。

突如の変更の訳をいくら聞いても、高位の戦士は固く口を閉ざした。多分、昨日の事が関係しているのだろう。

昨日の夜、コロトラングル飼育係りの方が泣きじやくりながら惨めな姿で詰所に来た。

年上の戦士は十六階に降りて彼と密談した。

詰所に戻ってきた高位の戦士は怖いような深刻な表情で、明日の狩りと偵察には戦士と狩り役の者で組めと言い、今日見聞きしたことは私が良いと言うまで口外するなどと命じた。いくら訳を聞いても、ウォリアーは口を閉ざした。「ウォリアー」とは人名ではなく、高位の戦士を呼ぶときに使う呼称である。

高位の戦士は安全性も考慮し、戦士の役目の者にも狩りに同行させた。なんで今日に限って、あんな遠い所まで偵察に行くのだ。一人の戦士は、答えられなかったことと遠距離の偵察を面倒臭いと不満に思ったが、面には出さなかった。

高位の戦士が一本のゴムのように弛んだ樹を指した。

「時折れ告の樹が伸びて、再び枝垂れて半分ぐらいたまた伸びる頃には戻ってくるのだ」

狩り組の者は西北西へ向かい、偵察組の者は地上の者たちが使う道がある北へ向かう。

偵察組はすぐに出立した。

狩り組の二人は武器や体にペタペタと玉ねぎ状の袋をあてていた。これは、臭い袋とは反対の、通称薫り袋。臭い袋が外敵を除ける為に作られた物なら、薫り袋は逆に、獲物に対して警戒させない匂いが詰まった袋。

原料は樹液、火噴きネズミの血と脂肪（他の動物の血と脂肪でも代用可能）、その他の香料。薫り袋が無くても狩りはできるが、こちらの臭いで勘付かれることが多いので、薫り袋を付けたほうが狩りの成功率は上がる。

紅服のウォリアーを以外の戦士は、木製の鎧や白虎の皮を二重に縫い付けた皮鎧を着た。

地上の者たちが使う、唯一のルートがある道に行くまで直線にして六時間。

面倒くさいなと思う戦士は、狩り組の戦士を羨んだ。口を利くだけ

余計な体力を使い、注意力も散漫になる。

小一時間、休憩地に着くまで互いに何も喋らなかつた。

臭い袋と自身の種族特有の体臭のためか、獣たちは仕掛けるふりをすれば、逃げていった。樹が疎らで草を低く刈り、周りを警戒しやすくした場所を見つけ、背中合わせで地べたに座つた。

ふうと息を吐くと、相方のチエチエラが小馬鹿にしてきた。

「なんだその年寄り臭い溜め息は？随分と早い老いが訪れたもんだなパルツグ」

この挑発に戦士パルツグは乗つた。

「何が可笑しいチエチエラ。お前さんも戦士の格好で遠出したことあるだろうが！ なら、わかるだろ？ この鎧はともかくとして、槍や斧とナイフを一編に背負つて移動すんのがどんだけきついか。これ以上、余計な口聞くなら斧でその舌叩つ切つてやるぞ！」

チエチエラは小馬鹿にした笑みを止めず、わかつたわかつたとあしらうように手を振るつた。

この二人は人間で言うところの青年期を出たばかり。こんな退屈な見張り仕事よりも、狩りや農耕をしたり、村でまだ親しい者同士で馬鹿やつてはしやぎたい思いが強かつた。

やれやれとパルツグは肩をすくめた。チエチエラは良い奴だが、いかんせん、口が過ぎる。斧で舌を切ると言つたが本気ではない。仲間内の冗談の類だ。

いつかうっかり短気な奴にそんな口を利いてしまい、ばつさりやられないか心配だ。

二人は僅かに休み、今度は四時間ぶつ通しで歩き続けた。道まであと一時間程度、二人はさつきのような場所を自ら作り、そこで長く休憩を取つた。

パルツグは指で槍先をもてあそびながら、今日の夕飯はなにかなと思つた。今日の獲物はなんだろうか。鹿か、白虎か、鳥か。火噴きネズミだけは勘弁してほしい。美味いが、大きさからして肉付きが薄い。ネズミ一匹で腹を満たすのは無理だ。腹を満たすには詰所に居る八人分を狩らなければならぬが、十六階は一日一頭限りの狩りし

か許されない。

狩り組の奴らに大地の幸運が舞い降りてくることを祈ろう。近くの小川で空になった木の水筒に水を詰めて、二人の戦士と狩人は最後の行程に出た。

ざつと二十トルベイ（モリビトの距離の数え方、一トルベイをMに換算すれば、1.5M程度。彼らが使う一般的な狩猟戦闘用の槍の長さが基準）のところ、草が生い茂り、樹が密生して隠れやすい場所に隠れた。

地上の者たちが使う上と下を繋ぐ「道」は、モリビトの道と同じだった。

巨木ぐらいある太い根が何十もの螺旋を作り、大小様々な根っこが隙間なく張り巡らされた天井にまで続いていった。この道から少し逸れた場所にある樹に登り、彼らは見張りについた。

ここからでも、十分見える。天にまで立ち上る紫の淡い光が。

これで二度目となるが、不思議だ。ある見張りに付いた者の話によると、こつそり足を踏み入れてみたものの、光はその者を上の世界へと連れて行ってくれなかった。

初めは心を賑わせた光も、三十分としないうちに飽きた。

何か変化は起きないか。更に一時間近く経て、二人の望む変化が起きた。チエチエラが道に行き、根の細い部分に耳をあてる。

チエチエラの耳は僅かな音を拾い、上から侵入者が来たことを告げた。チエチエラはパルツグとすぐに相談した。

「正確な数まではわからなかったが、少なくとも俺らより人は多いと思う。どうする？ 戦るか？」

「早まるなよチエチエラ。俺たちの任務はあくまで見張りと報告だ。第一、上手く奇襲に成功したとして、残るもう一人から六人だか七人ぐらいの相手はどうする？ 数からして適うわけないだろう。ともかく、気付かれたら、いつでももばつくれる準備をしておけよ」

チエチエラは槍をつかみ、パルツグは石斧をつかんだ。

葉の隙間から見えた。相手は五人。全員、自分達より断然背が高い。中でも、青い服を着た黒肌、緑の帽子を被る金髪、鏡のように周

りの風景をぼんやりと反射する金属の服を身に付けた三名は、神官殿より大きかった。

特に金髪の方と、金属の服を着る者は巨人と見紛ってしまいそうだ。あれより、背の高い者たちといえば、普通のモリビトとは異なる体質の“地の戦士”たち以外は思い浮かばない。

二人は顔を見合わせ、目で互いの考えたことを理解しあつた。勝てない、と。

背と体格もそうだが、武装と人数においても差は絶望的だ。チエチエラに至っては、槍一本と臭い袋しかない。同数の味方がいたとしても、彼ら五人に勝てる見込みは低い。二人は気付かれる前に、ここから逃げ出したかったが、もうちよつと様子を見てから去ることにした。彼らは声の音量を聞き取れる限界まで下げた。

「どう思う？ 奴ら、気付いていると思うか？」とチエチエラ。

「多分、ない。地上の者たちの狩りのやり方は知らんが、気付いてないふりはしてなさそうだ。だからといって、安易な奇襲は止めたほうがよからう。後少し、様子を見たら行こう」

地上の者の一人、細くたわんだ木の棒を持つ金髪の男が何かを差した。男が指した方向には金の鹿がいた。モリビトから見ても、あれは立派な角鹿だ。額や体に目立つぶち模様がないところを見ると、雌鹿だ。あれほど立派なら、大層噛みごたえある肉だろう。と、男が糸を張った棒を引き絞るや、空を裂く男がし、鹿の額に細い木がめり込んでいた。

一瞬の早業。二人のモリビトは、あまりの早業に言葉、というより思考が停止した。チエチエラが足を動かすと、うっかり木肌をこすつた。

五人が鹿の皮と角を採り、それが済むと、死体はそのままにしておいた。

青服ベストの黒肌が淡い光にはいろうとした時、ピタリと足を止めて、後ろを向いた。

二人の鼓動がどきりと鳴った。見つかったか。しかし、五人の視線は定かではない。気配はしたが、場所まではまだ分かってないよう

だ。

二人は五人の動向を注意深く見張り、逃げられる姿勢を整えた。青服が何かを背中から降ろし、両腕で担いだ。

何をしようというのだ？

爆発するような何かを盛大に引つ掻くような音が辺りを襲った。激しくつんぎく音に、二人は耳を塞いだ。そして、パルツグとチエチエラは見た。橙色の服を着た、変った金色の装飾品を身に付けた者が剣を抜き、こちらに向かつて突き出したのを。

アクリヴィはその方向にモリビトがいるとは露知らなかったが、二人にはそうしたように見えた。

気付かれた！ 二人は木から飛び降りて、悲鳴を上げて逃げ出した。二人はこけつまろびつ、ぐんぐん元来たへと引き返した。しばらく、といっても、時間にして精々半時程度であるが、恐怖に駆られた二人にはそれ以上の時間が経過しているように感じた。

パルツグは頭を冷やし、先へ行こうとするチエチエラに一声かけて、葉と枝の間に白刀などの敵が隠れてないかよく確認してから登った。白刀は、普段なら臭い袋を投げつければ事足りるが、飢えていたら臭いなど物ともせずには襲いかかってくるため、よくよく樹やくさむらには注意を払わなければならない。チエチエラは腰に付けた布で汗を拭き、逃げた方向を何度もちら見した。その顔は焦りと恐れでしかめられていた。

「話をするにしても、もっと奥へ行つてからにしようぜー。ここじゃ、すぐ追いつかれちゃう」

「時間が経つごとくに記憶は薄れる。報告のためにも、今のうちに少し整理しといたほうがいい。お前は地上の奴らが追つかけてこないか不安に思っているようだが、多分、それはない。あいつらは、俺たちの存在に気付いてはいたが、俺たちが何なのかまでは判らないはずだ。大方、その辺の臆病な獣とも思っているだろう。それに、これで一つはつきりしたことがある」

「聖獣だな」チエチエラは言葉を継いだ。

「そうだ。昨日の今日で、もしかやと思っていたが、嫌な予想は的中しち

まったな！あいつらか、それとも、別の誰かまではわからんが、唯一つ言えるのは、コロトラングルは地上の者共に殺されたということだ。あいつらがどんなに強くても、聖獣と戦って、とてもじゃないがあんな無傷でいられるとは思えない。もっと、傷付いていたり、武器装備は壊れ、服は泥で汚れたりしていてもいいはずだ。なのに、あいつらはそうじゃなかった。ほぼ無傷だ。十五階には障壁となる存在、つまるところ、コロトラングルはもう死んじまったんだ」

パルツグは自分でコロトラングルが殺されたと言って、恐怖とは違う鼓動で胸がざわつき、自然とこぼれた一筋の粒が頬を濡らした。

昨日のウォリアーの態度は、やはりそうであった。

聖獣が怪我をして動けなくなった、せめてそうであってくれと願ったが、飼育係りの方の尋常ならざる嘆きからして、薄々そうではないかと思っていたが、現実のものになってしまおうとは。

ああ！彼は私の村に住まう聖獣とは異なるが、彼の宙を我が物で飛ぶ様。枯れた世界に、清楚で、どこか大胆な色を与えてくれた彼。モリビトには涼を与え、敵は凍りつかせるあの冷気。

我らと同じ赤い円らな眼を持つ、血は繋がらぬ同胞は死んでしまわれたのか！

そして、これが意味することは一つ。戦争だ。

地上は十五階には足を踏み入れないと固く誓い、踏み入った者はこちら側で処分をし、万一逃がした場合は、地上で然るべき処分を与えるという約束。

その約束は二百年の時を経て、聖獣を殺されたことにより破棄された。

パルツグとチエチエラは来るべき戦争を想像して、昂揚感と同時に恐怖も覚えた。

二人はもう一度、来た道を確認して、樹の下もようやく見てから降りた。途中、一回の小休止を挟んだだけで、心臓も破れよと二人は詰所まで懸命に走りつづけた。

詰所に居る者たちは、到着した二人を見て何があったのだと驚いた。二人の服や体には随所で樹や草で傷付いた痕があり、桶から水で

も被ったかのような汗を流し、ぜいぜいと激しく息を荒げ、まともに事を伝えるのに時間がかかった。

それから、時告げ折の樹。トル・ホイの樹枝がちょうど半分伸びる頃、狩り組の者たちは、ぶちがある雄の角鹿を抱えて帰還した。

帰還した二人は、ウオリアーと一人の戦士がいらない小屋を見回し、パルツグとチエチエラを介抱する二名から事情を聞かされて、衝撃を隠せなかった。

そのウオリアーと若手の戦士は、十七階にある、十二の林村りんそんとの中間にある見張り小屋にまで出向き、詰所の者は僧正でもある長に事を告げた。

長は羽と鱗を生やした足の速い地の戦士の二人に、それぞれ十一の林村、階下の十の林村に伝言を伝えるよう命じ、十の林村の者は同じく地の戦士に伝言を託した。

伝言は導火線のごとき勢いで四日以内に二十階最下層、一の林村に滞在中の神官こと大僧正の下にまで到着した。神官は事態を重く受け止め、ただちに集会の報せをと、二十階に来ていた四の林村出身の妖精モドキのモリビトに命じた。

十九階在沖の四の林村にしかない妖精のような姿をしたモリビトは、小柄なために一般のモリビトより狙われやすいが、空を飛べるので偵察や伝言役にはもってこいの人材である。また、不思議な術を使ったりもする。

四の林村、妖精モリビトの長は安全面を考慮して、必ず五人一組で行くよう命じた。

集会の詳細は長、僧侶と僧正のみに伝えられ、集会の真意は伏せておくように言われた。

六日以内で各林村は民を引き連れ、二十階の神鳥広場に集合した。

丸一日の宴会騒ぎのあと、各林村は半日ほど休んだ。

神官は大テント内で代表のみによる戦略会議を行うことにした。

そこで神官以下、各林村の長と僧正が一人ずつ、巫女の少女、各林村の高位の戦士が三名ずつ大テント周りの警備にあたり、民は村長代

理の僧正に先導されて各々の居住区域へと帰還して、留守を守る者たちに開戦の報をもたらしたのであった。

神官はまず、一から十二までである林村の戦力がどのぐらいのものかを提示するよう求めた。

村長と僧正の役目の一つに、自分の村の者たちの名前と顔を覚えることがある。

一の林村の長と僧正が発表しようとしたら、神官が制止した。

「待て。私はまだ半年しか滞在してないが、あなた方と外にいる戦士を含め、一の林村の者たちの顔と名前は全て記憶している。君ら二人の記憶が曖昧模糊だと言いたいのではないが、ここは是非この私に言わせてくれ」

自分が役割をちゃんと果たしていることを証明したいのだな。これに文句を言う者はいなかった。神官の役目の一つにも、全ての村の者の名前と顔を覚えることがある。

だから、きちんと名前を挙げられるということはその者が責務を果たしている証明に繋がり、こういう場で神官職の者が林村代表の者に代わって名前、もしくは人数をそらんじてみせるのはごく一般的である。

一の林村は、一般階級の戦士が228人。高位の戦士が43人。地の戦士が12人。僧侶が9人。戦乙女が6人。僧正が3人にいると神官は言った。神官の言ったことに、一の林村の長と僧正は無言で首肯した。

神官は勢力図に、林村の守り手である聖獣を省くようにとだけ付け加えた。

聖獣は彼らの言うところの宝の一つ、十五階の例を除けば、無闇に戦場に向かわせる真似をしてはいけない。聖獣は本来、村を守ることにこそ意義と意味がある。

それから、各林村の村長と僧正は戦力を伝えた。

二の林村は、戦士202人。高位の戦士33人。地の戦士8人。僧侶7人。戦乙女7人。僧正2人。

三の林村は、戦士197人。高位の戦士35人。地の戦士7人。僧

侶8人。戦乙女5人。僧正4人。

四の妖精モリビトの林村は、僧侶10人。僧正5人。その他、戦いに出向ける者が三百名近く。

五の林村は、戦士190人。高位の戦士41人。地の戦士6人。僧侶6人。戦乙女4人。僧正3人。

六の林村は、戦士153人。高位の戦士20人。地の戦士4人。僧侶5人。戦乙女3人。僧正1人。

七の林村は、戦士172人。高位の戦士31人。地の戦士6人。僧侶7人。戦乙女4人。僧正3人。

八の林村は、戦士166人。高位の戦士25人。地の戦士6人。僧侶6人。戦乙女3人。僧正2人。

九の林村は、戦士205人。高位の戦士39人。地の戦士9人。僧侶9人。戦乙女5人。僧正3人。

十の林村は最も人手が多い。戦士235人。高位の戦士46人。地の戦士5人。僧侶10人。戦乙女6人。僧正4人。

十一の林村は、戦士190人。高位の戦士28人。地の戦士8人。僧侶6人。戦乙女4人。僧正3人。

最後に十二の林村は、詰所在沖の者たちも数えて戦士183人。高位の戦士30人。地の戦士7人。僧侶7人。戦乙女4人。僧正3人。

次に各林村の合計。

一は301人。二は260人。三は256人。四は305人。五は250人。六は186人。七は223人。八は208人。九は270人。十は306人。十一は239人。十二は234人。神鳥もあえて「人」と数えたら、総戦力は3112人を超えたが、全ての者を出兵させるわけにはいかない。

地下世界には地上の者以外の脅威も存在し、多くを地上への戦力として連れていけば、人手不足で緊急時に対応できなくなる。

ために、神官は出撃総数と留守総数を分けることにした。

「私としては、出撃総数は最低でも千七百、最高で二千四百四十欲しい。つまり、留守総数は九六〇から千四百余名になる。あくまでこれは例えだ。五の林村のように、近頃禍があり、めつきり人が減った村の

ことも考慮した上で、出撃数を決めなければならん」

五の林村の代表が、やや困ったような険しい顔付きで、神官殿ほどの程度の人数を理想としていますか聞いた。

五の林村は二十一年前。かつて河に住まう怪物の生き残りが二匹もやってきて、その戦いで多くの者が命を落とした。五の林村は地上の者たちへの対抗心はあるにはあるが、現状では極力人員の排出を避けたいのが本音だった。

「さきほど言った例と矛盾するが、私の本心では、最低でも二千のモリビトが戦いへ出向く必要があると言おう。というのも、諸君等は先祖が歌い、書き記してきた歴史をよく知っておるであろう。平均して我らより大きく力のある地上の者らには対抗するにあたり、また戦うに然り、人数が多いのにこしたことはないのだ」

神官は流し目で巫女の少女を見て、不死殿と言った。神官の目が血で赤く染まった鉄剣のようにきらめいた。

この場にいる全ての者がその不気味で恐ろしいきらめきに気付き、二人を交互に見やったが、当の二人はそれらの視線を歯牙にもかけなかった。モリビトの少女は一見、どこにでもいそうな一般のモリビトとなんら変わらぬ姿をしているが、目付きが違う。

長い歳月を生きてきた者だけが見せる達観と、生きていくことに疲れを覚えたような、老いた者が発する雰囲気。そこに何とも言い表し難い深い叡智が宿りし不思議な瞳の少女。

この少女こそ、何千年も昔にはモリビトを導き、永久的に少女の姿でいてモリビトたちを見守り、その歴史を正確に記録する存在。

モリビトからは不死の巫女と呼ばれる者。彼女は必要なこと以外語らない。モリビトがいつ生まれたかは語るが、モリビトがどう生まれたとか、以前の時代はどんなものかを彼女は決して語ることがなかった。

一つ言えるのは、彼女は三度行われた大戦において、地上の者たちの武器をようやく知っていて、原則、地上の者たちの真似事は避けるようにだけと言いつけてきた。

しかし、黙認することも多々ある。

モリビトたちは弓矢の存在は知っている。知っているが、彼女という、神官とはまた別の権威ある者の発言により、地上の生活様式や武器を作るのは禁じてきた。

彼女はモリビトを地上の者たちの二の舞にさせないためだと言い、モリビトたちは地上の者を憎んでいるので彼女の言葉に大人しく従った。だがしかし、現神官の考えは違っていた。

先代の神官は七十代、モリビトにしては長く生きた方だ。彼女は臨終の間際に彼、現神官に職を譲り、崩御した。

神官になってからの彼は通常の職務を真面目にこなしつつ、暇があれば巫女の下へ訪れ、地上の武器製作許可を求めた。彼はモリビトの教育の賜物か、地上の者を人一倍憎み、また勝利するには、モリビトも地上の者と同じ武器を用いる必要もあると考えていた。

当然、神官が幾度なく訪れても、巫女はがんとして首を縦に振らなかった。彼女はどんな時代が進んでも、モリビトが地上の者と同じ道を歩むのを拒んだ。

「あなた言い分も十分理解できますが、これから我々が生きていくためには、どんなに憎くて汚らわしくても。地上の者共の武器を真似る必要性がある。ご安心なされ…」

「我々なら、間違った使い方をしない。地上の方達は新しい物を発明するたびにそう言つて、そして、数多の過ちを反省することなく繰り返してきた。私もあなたの言い分と心中をお察します。私もあなた、いえ、あなた以上にモリビトたちを心から愛しているからこそ、地上の者共と同じ過ちをしてほしくないという、私の願いもご理解いただきたく存じ上げます」

彼女の説得に神官は渋々応じたものの、彼女を見るその眼のゾツとするようなきらめきはいやました。

病氣と老いによる死は彼女に訪れないが、殺生による死は避けえない。

巫女は気付いた、彼は必要とあらば、この私をも殺しかねない。

それに、彼女の記憶が正しければ、前の大戦では地上の者は、モリビトから言わせれば棒投げ槍。彼女が言えば、「弩」なる武器を用いて

きた。地上の時代がどの程度進んだかは詳しく知らないが、もしかしたら、そろそろ「テツポウ」なる武器が開発されていてもおかしくない時期かもしれない。

そうしたら、今だブーメランと投石や投げ槍ぐらいしかかなモリビトは、益々苦しい戦いを強いられることになる。半永久的に結ばれた平和という名の冷戦条約が破られた今、四度目となる戦の火蓋が切つて落とされたようとしていた。

それでも、彼女は首を振らなかった。モリビトが人間と同じ歴史、過ちを繰り返すことを恐れていた。それゆえに、モリビトたちが何かしら新しいことをしようとしたら、尽く否定し、徹底的に潰して無かったことにしてきた。

しかし、彼女はこの執念深いある男と約束を交わしていた。彼女は、できればこの約束を果たしたくなかったが、血の契約まで結んだため、この戦略会議の場でその事を話さなければならぬ。

巫女はおもむろに立ち上がった。

「私はあなた方に話す事がある。が、その前に。一つ問いたい。あなた方は地上の武器を用いて戦いたいですか？」

いきなりの質問に、会議の場はざわめいた。我らには我らの埃がある。地上の猿真似で勝っても嬉しくない。幾星霜、我らの同胞を殺めてきた地上の者らの武器を用いるなどありえん。すぐに、神官を除く一同は憎々しく巫女の言葉を否定し、巫女を糾弾する者まで出た。神官は一声で騒ぎを治めた。

「会議の場を乱すぶしつけな質問を投げかけて、真に申し訳ございません。だが、私は良いと思います」

この言葉を聞いて、場に居る者たちは一様に沈黙した。今まで、一番の反対者だった者が何を。あからさまに非難がましく巫女を見る者がいても、巫女は平然として話をつづけた。

「思えば、私はこれまで、あなた方の為と思ひ。例えば、弓矢などの地上の武器や道具を真似る事を禁じてきましたが。モリビトが地上の者と同じ武器を作ったら、地上の者の二の舞になる。そう思つて私は今日まで反対してきましたが、今思えば、それは願ひというより、単

に私があなた方を信頼していないだけだったのかもしれない」

非難がましく見ていた者も。困惑していた者も。冷静に見ていた者も。ただ、巫女の一言一言に静かに耳を傾けた。巫女はきつぱりと胸を張った。

「ですから、私は今日から改めて。神官殿の血の契約の下、あなた方を信頼してここでお伝えします。これより先、現神官殿が崩御されたら、あなた方に地上の刃を造ることを許します。これは、神官殿が神官職に就いて崩御されたときに限り、この約束は有効とする。もう一つ、武器とは別に、あなた方に話すべき事柄があります。これもその約束が有効な時に限り、お話致しますよう。この場では、我らの歴史に関する事としてつもなく重要な事であると言っておきましょう」

もう一つの話すべき事柄はいかなようなもので。そう問う者はいなかった。小柄ながら、彼女の厳粛な佇まいが見る者に畏怖を与え、彼女に詳細を尋ねるのを拒ませた。

神官が神官職に就いて崩御されたときに限り。崩御されたときに限りとは。この言外の含みに、反応する者は多くいたものの。

神官の有無を言わせぬ並ならぬ威圧感で、意見を封じられた。

彼女は言った。神官が崩御されたら、許すと。裏を返せば、神官が神官でなくなれば、約束は無効になるということだ。彼女は信じられないことに、今回の大戦があまり芳しくない結果に終わることを願った。そうして、神官は民からの信頼を失い、彼に付いていこうとする者はいなくなるだろう。

そんな彼が後何年も神官職に居座るのを我慢できる者はいるだろうか。彼女は予感した。今回の大戦は犠牲はどうあれ、負ける。

彼女にはそんな気がしてならなかった。いや、そうなってほしいと願っているのかもしれない。

大戦終了後、彼女は頃合いを見て言うだろう。神官の跡継ぎの方法を変えるべきだ、と。神官は職を降ろされ、新たな方法で選ばれた神官が誕生したことにより、約束は破棄される。彼女はモリビトを愛しておきながら、モリビトが死ぬことも願う。何とも矛盾した思いを抱え、本人もそのことを理解していた。

世の中には癌細胞という死なない細胞がある。例えれば、私はその癌細胞なのであろう。この癌細胞である私が生きることによってモリビトが生き永らえられるのならば、私は幾らでも毒にも薬にでもなろう。

神官よ。まだ早い。まだ早いのだよ。モリビトが地上の者らの武器を使うには時は熟してない。また、彼らに真実を告げるのもな。

もう少し年月をかけて見極めてから、許し、教えよう。会議は夜まで行われた。

「始めに挙げた人数はあくまで理想であり、各林村から進んで戦いに参加する者だけを連れてここに来てくれ。十日後に再び同じメンバーが集い、この大テントに来て結果を報告するように。では、一次会議は終了だ」

簡単な別れの挨拶を済ましたのち、会議は終了した。各林村の代表が高位の戦士を連れて帰る中、神官と巫女だけは幕内に居残る。しばらくして、巫女だけが出てきて、神官殿はテント内で休まれると戦士に言った。二人はテント内でどんな密談を交わしたのだろうか。一方、その頃の地上では執政院ラーダから冒険者たちへある任務が与えられた。

八話 案内

ホープマンズが十五階に巣食う怪物を討ち取ったことにより、二の足を踏んでいた冒険者たちは活気づいた。二階層の者達は三階層へ、三階層の者達は続々と四階層へなだれ込んだ。

当のホープマンズの六人はその日、エドワード以外のメンバーは今週三日目となる休暇を満喫していた。

冒険者業は体が資本。余裕が無い四、五人構成のパーティの場合は週六日潜るのが普通。

ホープマンズは六人いるので、特殊な事情が無い限り全員週二日休める計算となる。月曜日から土曜日は迷宮に潜り、日曜日は一斉休暇。こんな感じのローテーションである。

四階層到着から一週間過ぎた。辿り着けたのは良いものの、ほぼ白紙の状態でのスタートだった。どここのパーティも様子見で十六階近辺を探るだけで、奥へ行こうとするパーティはまだいなかった。

ローテーションが正しければ、今日ホープマンズは一斉休暇の日はずだったが、エドワードは完全武装した格好で五人を連れて世界樹を目指して歩いていた。その五人はいつもの顔触れではない。一人は脛や頭、肘と腕など一部に防具を付けて、矢筒と弓を背負う若い男。後の四人は、エトリアの衛兵に支給される鎧兜を身に付けていた。

ホープマンズが四階層に到達してから五日後のこと。執政院ラーダ長ヴィズル直案の公案が街全体に発布された。

内容を要約すれば、街の一部の衛兵を四階層にまで連れて行けという依頼だった。

ヴィズルは冒険者たちが十四階に到達したときからこのことを計画していたようであり、執政院の役員達から反対の聲が上がらないところを見ると、既に根回しはしていたようだ。だが、市民からは大いに不満の聲が上がった。何故なのだ？

我々は何も聞かされてないぞ。衛兵も市民の一人なんだぞ？ 軍事政権を打ち立てようと目論んでいるのか？ 市民と一部の冒険者

の間で今回の公案は論争を生んだ。

皺寄せはいつも現場にくる。細面の眼鏡をかけた温厚そうな人物、冒険者窓口室長オルレスの担当部署にまで、市民が押しかけ抗議してくる始末。当のエドワードは仕事柄、オルレスとは顔見知りで、それとなく訪ねてみたが、オルレスも詳細は知らないと言を振った。

「君と同じことを聞いてくる輩は何人目になるかね。：失礼、最近自宅にまで押しかけて文句を言う輩がいる者で、あまり眠れてないのだ。君らや市民の方々の言い分はよく分かるが、詳細を知りたいのは私も同じなのだよ。私もヴィズル様に聞いても、ヴィズル様は『嫌な予感がするからだ』と答えにならない答えしか言ってくれないのだ」ふうと一息入れたら、オルレスは質問を挟ませないよう一気に話した。

「出来ればいいから執政院のミッションを受理してくれないか、エドワードさん。長の真意は不明であるが、長は決してふざけたり、あてずっぽうに言ったり、ましてや戦争しようという魂胆があつて公案したわけではないはずだ。もちろん報酬は弾むよ」

報酬金は衛兵一人連れていけば六百エン。最大数の五人を連れていけば三千エンも支払われる。

案内の間に採集した収集品の類も全て案内者に贈与するという破格の報酬。ホープマンズは最近になって勢いに乗り始めて金銭的にも余裕はあるが、まだまだ楽とはいえない。

エドワードにとって、今回の仕事はただ、金を稼ぐ以外にもある。エトリア市民と衛兵の、無用な疑いを避ける目的もある。

どこからか。カルツバスの者達が盗賊の手先になったというたわけた噂。疑いを晴らすためにも、エドワードが二部族の代表として余計に頑張らなければならぬ。今回の依頼は、衛兵たちに顔売ると同時に、少しでも疑いを晴らす目論見もあつた。

冒険者家業はハイリスク・スローハイリターンの日もあれば、ハイリスク・ノーリターンの日もある。

冒険者家業の引退の目安の一つに、一人頭三十万エンのお金を分配できるほど金を貯める例がある。エトリアと周辺地域や国において、

三十万エンもあれば、ギャンブルで全額を賭けるなどよほど大馬鹿な使い方をしない限り、半生を働かずに細々と暮らしていける額である。

ホープマンズの個人財産と全体共有財産を合計した場合、ようやくと三十万を越すぐらい。一人頭三十万の金額を稼ぐのは、いかに大変なのかがわかる。

冒険者は金が稼げるチャンスならどんな仕事でも引き受ける。冒険者はある意味では街の何でも屋家業の側面もあった。トルヌウア内壁の門を潜ると、ばったり顔見知り三人と出会った。

「よう、おはようさん」

明るいオレンジの髪をきつく後頭部で縛り、白衣を着て、どこか飄々と抜けた挨拶をしてきたのは、グラデイウスのリーダーでメデイックのオルドリッチ。

隣の羽根つきの三角帽を被った寡黙なレンジャーの男、カールロも微かに会釈した。エドワードも二人に無言で会釈した。

オルドリッチはエトリアから北西に位置する国にある小さな町の出身者。

賢く医術にも興味があつたので、両親は医術が進んだエトリアに彼を奉公人として送り、しばらくは施薬院の見習い医師として働いたが、薬の材料となる物を採集するため樹海に何度も足を運ぶ内に冒険者稼業に興味を覚え、今や街でも名が知れた冒険者の一人に成長した。

樹海を探索するには当然、何かしら武術の心得はあつたほうがいい。エトリアの医師に課せられた義務の一つに、槍術・剣術・棒術など武術を学ぶことが必須に入る。

彼は棒術を選んだ。理由は、剣と違って扱いやすそうで、うっかり刃で手や体が傷付くこともなさそうだから。

ホープマンズはグラデイウスと一度、女王蟻殲滅作戦のときに共同戦線を張ったことがある。そのときの蟻共と対するオルドリッチの昆掘きは中々の物であり、接近戦なら一筋縄ではいかなそうな相手だとエドワードは思った。因みにエドワードより一つ年下だ。

カール口はよく分からない。どこぞの山奥にある狩猟民族の生まれらしいが、それ以外の詳細は語らない。一回、カール口は金鹿の酒場でこう語った。

「私の遠い先祖もかつて冒険者だった。どうやら、私の先祖は二階層で何かを見たらしく、以来、私の家では『時至れるとき、禍き花を摘み取れ』という言い伝えがある。私自身が冒険者になりたい憧れもあったが、どうも言い伝えでは、例の花とやらはそろそろ開花する時期らしい。私が冒険者になったもう一つの目的はその花を摘み取るためだな」

語りすぎたと思ったのか、彼はそこでぶつとりと言葉を切った。二階層の花とは一体？ 少なくとも、あのよく見る食人植物の類ではないだろう。

真偽の程はともかく、狩猟民族の生まれだけあって、カール口は弓の扱いに慣れていた。もつとも、エドワードは射撃精度に関しては自分の方が上だと自負していた。

もう一人。顔は見えず、樹海時軸の間近で四人の衛兵と和気藹々に会話している者。団子状に結って縛った赤茶色い後頭部、グリーンのコートを羽織り、両腕に錬金術師共通の籠手と手袋を嵌めた背の高い女、ドナ・A・トルヌウーアだ。

名前から察するとおり、彼女はこの内壁を造った人物の子孫だ。

そして、名前に一文字入った「A」のイニシャルは、アジロナの「A」を指す。いわば、彼女は街の歴史教科書に掲載された二人の偉人の血を受け継いでいるのだ。

彼女はエトリア州内の宿場町で生まれた。幼い頃から世界樹の秘密を解き明かすと公言して憚らず、元気というよりもお転婆で、少女ながらガキ大将もやっていた。エトリアにも度々訪れ、街を歩き回っては多くの人々に声をかけた。そのため、エトリアにおいて彼女の名前を知らない者はいない。

十八歳の時、三百年前頃から執政院が新米冒険者に課す一カ月に及ぶ受講を受けて、晴れて冒険者になった。

エトリア州出身の冒険者自体は珍しくないが、大半の者は小銭を稼

ぐ程度に稀に浅い層を探るだけで終わり、彼女のように奥へ奥へと進むようなエトリア出身の冒険者は非常に少ない。ドナは快活で口調もハキハキとしており、友人知人も多く、その上偉人二人の血を受け継いだエトリア州出身の冒険者。街で一番期待されて人気と知名度もあるパーティーといえば、彼女が率いるパーティーこそそうであろう。遅れたメンバーの一人が来るや、ドナたち一行は樹海時軸の光の輪に入った。

自分達のように、あくまで仕事上の関係で探索を共にするだけの仲間意識はないパーティーとは違い。あちらは本当のパーティーのようだ。では、お先にと、二十秒後にはオルドリッチの一行も樹海時軸を通った。

ルールブックには無い冒険者同士の暗黙の決まりに、別のパーティーが時軸を通った跡は最低でも二〜三十秒程度間を開けてから通るルールがある。

樹海では多く行けば、その分危険と安全の両方が増す。人数が多ければ危険にも対処しやすいが、危険自体も多く呼び寄せてもしまふ。長い研究の結果、特殊な事情で他のパーティーと手を組むに限り、最大探索人数は六人までと決められている。

であるが、どういうわけか五人のラインを超えると、明らかに五人探索時よりも怪物が襲うケースが増加するので、実際の限度は五人が正しい。

「俺とあんた方は仲間でもなんでもないが、五体満足で帰りたいければ、今日だけは俺をあんた方の隊長と思つて大人しく指示を聞いてもらおう。それが、あんた方の案内を任せられた俺に課せられた責任でもあるしな」

年上の衛兵も年下の衛兵も何も言わず、整列した。エドワードはそれが彼らの返事だと知った。あなたに従おうと。三十秒間を開けて、装備の最終確認が終えたエドワード率いる衛兵の一行も時軸を通り、二階層に降りた。エドワードが案内する五人は三階層にはまだ到達していなかった。

ムツとした熱気と不愉快極まりない湿気が同時に襲ってきた。地

面は奇妙に柔らかく、植物が鬱蒼と生い茂り、いるだけで気分まで落ち込んできそうな暗い密林。久しぶりの二階層だが、感慨とかは一切湧かない。むしろ、すぐにでも地上、あるいは日が差す上の緑の樹海や三階層に行きたくなった。

先には、五人の冒険者がいた。先の二組とは違う一行だ。どうやら、ドナとグラデイウス率いる衛兵たちは、全員三階層に辿り着けるような強者揃いのようだ。先に見える一行が左に曲がったのを見て、一行は出発した。この中でもエドワードが一際大きい、エドワードは自分より少し小さい、大盾を持つ衛兵を歩かせた。

最後尾は大盾を持つ衛兵が二名、真ん中は軽装備で矢筒を背負った若者と、ソードマンのような出で立ちの衛兵がいた。この一行を冒険者の職で表せば、パラディン三人、レンジャー二人、ソードマン一人という偏った構成になる。

彼らには背負うべきある物がなかった。小舟のパーツだ。

とてもじゃないが、小舟のパーツを背負つての二階層横断は無理と無茶がある。ケルヌンノスという三階層への道を守るかのように立ちはだかる怪物もいるが、所詮、あんなのは氷山の一角にしか過ぎない。

二階層は湿度と熱気が非常に高く、何もしなくても体力が奪われていく。

毒ガス漂う沼などがあちこちに点在し、悪い虫や小さな植物が知らぬ間に体に引っ付き、病気や熱にうなされる。

おまけに、二階層は他の階層の怪物が出現する例が多々ある。他にも二階層は恐るべき脅威が間断なく冒険者を襲う。二階層は大半の冒険者が命を落とす修羅場であり、冒険者たちに退くか進むかの選択肢を迫る階層でもある。

ごく一部、二階層に留まる選択肢を選ぶ者もいるにはいるが、エドワードは絶対進むを選んだ。退くなんてもつてのほかだが、留まるのはもつとあり得ない。体がぶっ壊れるのが目に見える。

二階層は十階を除き、六階から九階まで道は複雑にくねり曲がつて

いる。地図だけ見ていたら確実に迷う。目で冒険者たちが付けた印を見落とさないよう注意深く見て、道無き道と記憶を慎重に辿らなければならぬ。

半時過ぎたか。運よく怪物とは戦闘にならずに済んだ。更に半時が過ぎて、七階層まで残すところ四分の一の地点に差しかかり、遂に戦闘の時が来た。

「盾三列！^{たてさんれつ} 他待機」

エドワードは素早く指示を出して、陣形を作った。盾三裂と指示すれば、大盾持ちは線で結ばば三角形の陣を作り、盾ツーと叫べば、前の盾持ちはそのまま、後列にいた盾持ち二名が槍で止めを刺すなど、エドワードは地上で簡単な戦術の合図を取り決めていた。

少し開けた場所に居る一行。その一行を挟む形で、右からは青と黄赤の羽を持つモア。左からは黒熊の獣人、別名“森の破壊者”が出現した。

前盾左と言い、前列の盾役は左に回った。エドワードは森の破壊者が攻撃するよりも早く、弓ワンと叫び、横へずれた盾役二人の隙間から射かけた。

三人張りの張力が強い弓から放たれた矢は見事、森の破壊者の心臓に当たり、森の破壊者は膝を付いた。エドワードが盾ツーと指示を出すや、二人は槍で怪物の喉と胸元を突き刺し、押し倒した。森の破壊者が槍で刺された瞬間、モアが跳躍して、右の盾役目がけて鋭く太い爪が生えた脚を伸ばした。右の衛兵はかろうじて攻撃を受け止めた。若い射手は怯えた様子で立ち尽くしていた。

「盾ツー囲め。剣後方。弓矢は援護射撃」

盾役二名がモアを囲んだ。モアが最初の盾役を攻撃しようとした身構えたとき、エドワードの矢がモアの右目を抉った。バランスを崩して倒れたモアに三本の槍が一斉に襲いかかり、モアは喘ぐような断末魔を上げて死んだ。

息を付く暇もなく、戦闘は続いた。後方に回った衛兵と射手が、新たに出現したサソリを相手に苦戦を強いられていた。更に、これから行こうする道からは緑と紫のぶよぶよした丸っこい液体の塊が幾つ

もやってきた。

「サンダオイル！ 盾ワンはサソリ！」

エドワードは声を張り上げた。サンダオイルとは渾名で、正式名称はシヨックオイルである。説明は後述で。

盾持ち役とエドワードは急ぎ、ポーチに括った黄色い瓶を引っ掴み、刃や鎌に塗りたくった。

サソリと戦うよう言われた一人は、二人に気を惹きつけてくれと言った。射手役は早いとはいえない速度で矢を引き絞り、サソリの顔を狙った。しかし、ハサミで弾かれた。

もう一人が振り下ろした剣も同じく。サソリは剣を握る一人を毒針で刺そうとしたが、剣を挟むハサミを放し、突如として駄々こねる子供のように暴れた。

サソリの開いた口に槍が突っ立っており、穂先からバチバチと電流が音を立てて爆せていた。しばらくして、サソリの見開かれた双眸から光が失われた。電流が上手いことサソリの大事な神経や器官を焼いたようだ。

反対側も決着が着いた。形が崩れた緑と紫の液体たちは、さながら陸が上がったクラゲのような状態になっていた。

手始めに、シヨックオイルを塗ったエドワードの矢が二つの緑の液体の動きを止めた。盾役二名が槍で薙ぎ払い、叩き、エドワードは横様から矢を射かけ、液体の進撃を懸命に食い止めたのだ。

液体の正体は生物だった。

これがなんで、何をもつてして生まれ、何を考えて行動しているのか現代においても解明されてない。一応、判っていることもあって、この液体共は毒液を吐き出し、それで獲物を捕らえて食い、人間もその獲物に含まれている。

エドワードは死体を捨て置いた。今回はこの五人を三階層に連れて行くだけ、余計な労力は避けたかった。

何より、一度戦っただけで流れるこの汗の量。持ってきたタオルの一つがもうぐしょぐしょになっていた。久々の二階層での戦いは予想以上に体力を消耗した。一行は道を急いだ。

幸い、六階では一度の戦闘で済んだ。

「ほら！ 走れ走れ走れ！ 心臓破れようと走れ！」

「心臓破れたら死にますよ！」

「黙れ！ 走れ！」

エドワードは口答えした者を声をからして一喝した。

六人構成の一行は、いつの間にか十一人の所帯に膨れ上がっていた。彼らは沼を越え、汗を撒き散らしながら走り続けた。彼らの背後には、ぶんぶんとやかましい羽音が何百も重なり、下からは六階で遭遇した何倍もの数の液体生物が押し寄せてきた。

一行に交じった五人に原因がある。エドワードたちが毒沼の地点を通り過ぎたら、怒ったような羽音が背後から聞こえて、振り返ると、必死な形相の男女五人が巨大な蜂と液体共に追われていた。

その五人はこちらに来たので、自然と一行も逃げる破目になった。蜂とは軍隊バチのこと。軍隊バチは一匹や二匹なら大したことはないが、集団となれば別。何百何千と群れなして襲ってくる軍団バチの強さは、ケルヌノスをも上回る。

恐らく、五人は軍団バチの巣があるとも知らずに攻撃してしまい、誰かが放ったオイル付きの矢だか術式でもうっかり当たってしまったのかも知れない。液体共とハチは、天敵と共存という複雑な関係を築き、ハチの巣が攻撃されたら液体生物共も追っかけてくる。エドワードは遅れそうになる者がいたら叱咤激励を飛ばし、背や頭を小突いて走らせた。

アルケミストが術式を放ち、レンジャーたちはオイルを塗った矢で時折り応戦したが、数が膨大すぎて矢では足止めにもならない。

八階へ降りる通路百メートル手前で別のパーティと合流して、一六人の大所帯に膨れ上がった。

降りる直前、例のパーティのアルケミストとついさつき合流したパーティのアルケミストが出入り口付近で立ち止り、特大の雷の術式を放った。

つんぎくばかりの轟音が通路内を揺るがし、追手の二割を亡き者に

した。

錬金術師たちも降りたのを確認して、一六人は戦闘態勢を取った。が、ごく少数の追手のみに来て、上に居るもつと多くのハチと液体生物は八階にまで来なかった。

天然の通路は冒険者たちが手入れしている。とはいえ、暗く、狭いので、樹海の生物は人間が通る生物を滅多に利用しない。

追手の大半は敵がいなくなったのを見て諦めたが、執念深い奴はわざわざこうして下まで降りて、大所帯に膨れ上がった一行の餌食にされた。しばらくして、襲撃が止んだ。五分経つて上からも降りてこないのがわかると、一行は三組に別れて息を付いた。

樹海ではどんな事態に見舞われても不思議ではないが、これは完全に想定外だった。

ズボンは汗でぐしょぐしょになっていた、泥で塗れるのも構わず尻餅をつけた。矢筒が空っぽになったので、エドワードと若い射手は盾持ちが担いだ荷から矢を補給した。あの五人組を責める気力も起きなかった。

「私が一言言ってやるから、あんたたちは休んでくれ」

エドワードは余計な争いを避けようと、遠回しに抑えてくれと言ったが、例の五人組の一人はそう望まなかったようだ。

矢筒と弓を背負う若い一人がエドワードの一行を指して、別のパーティに何かを言った。呆れを通り越して怒りが頭を駆け巡った。トブルに巻き込んでおきながら、こちらに罪をなすりつけようとするとは、随分と大した性根の奴だ。

しかし、一行が彼を殴る必要は無かった。彼より十歳ぐらい年上の先輩格が、恥を知れと彼を殴った。青年は涙目で男を見上げたが、男は非情な手で青年の頭を鷲掴み、一緒に頭を下げた。

「すまん！俺の注意と教育が至らなかったために、とんでもない目に遭わせてしまった。俺たちが言えた立場ではないが、どうか今回の事は免じてほしい！」

彼は次に、別のパーティにも同じように頭を下げた。途中で巻き込まれたパーティに顔見知りはあるが、あのパーティには一人もいな

い。住まいも利用する酒場も異なるのだろう。ともかく、リーダー格の咄嗟の判断のお陰で最悪な事態は免れた。

どうでもいいが、最悪な事態とは流血沙汰だ。

青年は先輩に殴られたショックと緊張が切れたことにより、ぐじゅぐじゅと涙と鼻水を垂らした。

ここまでされて、あんな顔を見せられたら、怒りが引いた。そのパーティは責任をと、変位磁石を使い、地上に帰らないかと提案した。だが、エドワードの一行はこれを断った。変位磁石とは一時的に樹海時軸を発生させる物。大変希少で高価な品で、一回の予約につき一点しか買えない。

男が地面に石を投げると、紫の光の輪が発生した。そこに十人の人間が飛び込んだ。磁石による時軸発生時間は短く、一分と経たないうちに光は焼失した。

もうその石を拾って地面に叩きつけても、光は生じない。使用は一回こつきり。この石が光を放つようになるには、十年間樹海の地面に埋めなければいけない。一人がそつと土を添えた。

取り残された一行は、八階にある水場へ向かった。この水場には人工物の壁跡が遺されて、周りは開けて見やすく、二階層でも数少ない安全な場所であった。

壁跡の十メートル前に骨やら武器やらが散乱していた。臭い。骨に残った腐肉の状況から推し量るに、死後一週間以内かもしれない。エドワードはそれに見覚えがあった。街角の食堂でたまたま同席した冒険者の男だ。男の青い泥草に塗れたバンダナがその証拠。べつとりとした液体が付いているところを見ると、液体生物たちの毒にやられたのだろうか。仲間はどうしているのか。ここではないどこかで死んだか。それとも、彼一人を置いて逃げたか。

先頭を歩む衛兵に知り合いかと問われ、無言で首を振った。

死体をわざとらしく置き、同情した仲間を狙って襲いかかる狡賢い奴がいるのをエドワードは知っていた。

第四階層の金の鹿を首尾よく仕留められたときのような運が今回もあるとは限らない。

「あのような末路を避けたければ、黙って指示に俺の指示に従うように」

改めてそう言うと、心の中で彼の冥福を祈った。許せよ。仮にあんたと私の立場が逆転したとしても、あんたは私と同じ判断をしただろう。

「……あの」一人、弓を持つ、茶髪で糸目の衛兵が手を挙げた。名はアレイ。若そうだが、エドワードより四歳も年上だ。

「あなたは……その……」

「王賊だか盗賊だか知らんが、何の関わりもない。カルツバスの彼らも同様に。くだらない質問をするな」

エドワードはびしゃりと冷たく言い放つ。この話題を口にするのは不味いと知り、弓兵アレイは口を閉ざした。

壁に阻まれているので、死体を眺めて休憩をせずにすんだ。水場でじっくりと休憩した後、一行は探索を再開した。もったないと渋るのはやめて、用心して獣を除ける鈴を二つ鳴らした。九階で鈴の糸が千切れる頃には鈴を捨てて、新たな鈴を二つ鳴らした。

道中、蜘蛛と食人花（しよくじんか）が一体ずつ襲ってきた以外は、奇跡的に無傷で通り過ぎた。

十階。三分の一まで来たとき、遂に鈴の糸が切れた。本来の予定では九階に入った時点で二つ使い、残る二つを十階で使い切る予定だったが、いた仕方がない。

鈴の音が切れて間もないうちに、軍隊バチ狩りを目的に潜るパーティに会った。パスカルという三十代半ばの毛深い男が率いる四人組で、二階層に留まり軍隊バチを相手に金を稼いでいる。白い鎧を着た褐色の美女剣士ダマラス。小ぢんまりした、楽器を抱えたバードのヤルヴィネン。丸丸太った金髪坊ちゃん刈りのパラデイン兼メディック、ふとつちよティッグロ。

メンバーの顔触れからしてかなりの個性派揃いで、冒険者たちの間でも変り種と噂されるパーティ。

軍隊バチの蜜や花粉は需要が広く、パスカルは幾つかの商店と契約を交わし、日々軍団バチを求めて二階層歩き回っている。彼らは二階

層の事ならどのパーティよりも詳しく、エドワードは彼らとは親しく、よく金鹿の酒場で席を共にする。パスカルから今日の十階の様子を伺った。

「やあ、パスカルの旦那。今日は三階層から来たのか？」

「ああ、そうだ。エドワードよ、俺も全てを知っているわけではないが、今日の十階はいつも通りだと言っておこう。あの角を生やした化け物もまだいない。代わりに赤い象さんが居る」

パスカルは語らずとも、事情を察して情報を提供した。エドワードも今日の六階から九階で起きたことを語った。

「そうかい、そりゃ災難だな。俺たちも今日と明日は七階は避けよう。じゃ、また地下と地上で会おうぜ」

また地下と地上で会おうとエドワードも返した。この挨拶は、親しいパーティの間でのみ交わされる。

もうどのくらい時間が経ったのかわからない。彼らは怪物の襲来を押しつけて、ひたすら三階層の樹海時軸を目指した。

ここに来て若い射手の五感が鋭敏になったのか。

エドワードが矢を番えた。彼も遅れながら矢を番え、樹から舞い降りた二匹の怪鳥を同時に仕留めた。道を進める。エドワードが弓ワゴンと火噴きフクロウの喉元を射抜いて火噴き攻撃を封じ、盾ワン剣と叫ぶや、二人の衛兵が剣で胸と脇腹を刺した。

疲れているはずなのに、衛兵たちの動きは良くなっているように思えた。アレイの弓の引きも良い。

生きて安全な地上へ帰ろうとする切実まなで強い思いと、敵に食われまいとする本能に闘争心も加わり、彼らの動きを良くした。

十階まで目前。二階層の王者ケルヌノスが居る箇所、そこには王者の代わりに別のものが王室でのさばっていた。

口紅を粗雑に塗りたくったような色、牙が生え、長い鼻と体を横たえた巨象。

森の破壊者、モアと並び、この象は二階層でも五指に入る強敵。残りはケルヌノスとサソリだ（六階で戦ったサソリよりも一回り大きい種類）。普通に見かける赤象より大きい。主人がいないのを良いこ

とに、ここを縄張りになっているようだ。意図してか、巨象は十一階へ通じる道の前で寝転がっていた。

巨象は眠りについていようだ。安らかに、鼻息を洩らしている。元気であれば戦いたいが、生憎もう彼らの体力、特に衛兵五人の疲れと緊張は限界まで達していた。エドワードはファイアオイルの瓶と三日月刀を両手に持ち、しんがりを務めた。

抜き足、差し足。五人の衛兵は慎重に歩き、音を出しそうになれば、エドワードがシツと小さな舌打ちで注意した。巨象は足元の伸びた鼻から規則的な呼吸をして、吹き出すたびに気持ち悪い生温かな風が髪を揺らがした。一人ずつ、十メートル間隔で降りさせた。四人は物音を立てずに降りれたが、五人目の盾持ちがバランスを崩し、なんと象の耳の端を踏ん付けてしまった。

その衛兵は恐怖で硬直した。その衛兵の腕をエドワードは掴み、一目散に彼を通路に押し込んだ。

象が異変に気付き、立ち上がろうとした。象が起き上がると、目の前の草が燃え上がった。

いきなり草が燃えたのを見て、驚きのあまりはおお——ん：と象は泣き叫び、どすどすと地鳴りを上げて逃げ出した。エドワードがファイアオイルの液を草にぶちまけ、三日月刀にも液をぶっかけて、燃える刀で草を引火したのだ。

オイルにはこのほか、相手を凍らせるフリーズオイルという物もあり、オイルは三種類存在する。オイルは十字の種子という地下世界原産の植物を材料を元に作られ、百年前から地上での栽培も試みられている。

この種子は青・赤・黄ととても判りやすい色彩に分けられ、この種子を潰し、その他樹海で取れた材料と水を混ぜて完成する。オイルは表面に引火物質が浮上し、張り付いた面には引火を防ぐ物質が張り付き、武器が痛むことは滅多にない。

素手や木製の武器に塗るのは危険だが、鉄製や鋼でできた武器になる問題は無い。また、エドワードが逃亡の際にした方法もある。

息も切れ切れに降りた六人はやがて、涼やかな冷気が充満した蒼く爽快な世界に入り、心を落ち着かせた。

コルトンは忌まわしいとさえ言っていたが、きつと今日のような探索を終えた後だと、この三階層の環境が天国に思えてくるかもしれない。

決して安全とは言い難い場所だが、ああ、この爽快感！ 初めて三階層に降り立った興奮を思い出した。

どろどろと流れる汗と疲れ、陰気な密林、絶え間なく迫る脅威のせいで希望を失いかけていた衛兵たちの瞳にも灯が宿り、彼らは幾分調子を取り戻した。このまま探索を続けてもいいが、道具も殆ど二階層突破の際に使い切り、装備品にも著しい損傷が目立つ。長居は無用。これを最後と、エドワードは五人を歩かせて、近くにある樹海時軸を潜らせた。

やはり、地上が一番だ。夕日がこんなにも眩しいとは。地下に入ってから半日も過ぎていた。

安堵感のあまり、五名の衛兵はへなへなとくずおれた。一応は心得てはいるらしく、疲れていても装備を地面には投げ捨てず、きちんと並べて置いた。地上に戻り、気持ちが悪く落ち着いた状態で自分達の有様を見た。服やマントがあちこちほつれ、革靴には穴が開き、泥と大量の汗でべちよべちよに濡れ汚れていた。

内壁の歩哨の一人が駆け寄り、彼らを労った。

「お疲れ様です。ではお手数ですが、内壁詰所のリストに名前と宿場名を明記してください。衛兵に聞かしましては、私が直接伺います。後日、報酬は役員がお届けに参ります。配送を希望しない場合、『N』のマークを丸で囲み、直接受け取りに来てください」

エドワードは詰所内で記入を済まし、Nのマークを丸で囲んだ。エドワードは用心して、役員に五人の名前を告げて、その場で一度目の確認をさせた。内壁を出て、遅々とした足取りで長鳴鶏の館へ向かう。さしものエドワードも、一週間分の疲れと今日の依頼で大分参った。長鳴鶏の館前で、同じ宿内の冒険者数名に、ロデイルとアクリ

ヴィの二人が出迎えてくれた。エドワードは武器装備を二人に預け、ジャンベから五十エン借りて、宿の番頭に風呂代を支払った。

長鳴鶏の館は週に三日、火曜日と金曜日と日曜日で風呂を沸かす。疲れていてもエドワードはべちよ濡れの服を折り畳み、一度湯を全身にかけてから、湯船に体を沈めた。

心地よい暖かさでつい眠りそうになる睡魔を払い、じつくりと湯に浸り、三九分後には風呂から上がった。二五エンで二十分、五十エンで四十分まで風呂につかれる。籠には汚れた服やマントがなく、新しい服が畳まれていた。

「あの青年が置いていかれたましたよ」と風呂担当係りの従業員が言った。

ジャンベか。気の利く奴だ。エドワードは白い長袖シャツを着て、茶色い柔らかなズボンを履いた。ボロボロの革靴の代わりに、東洋の侍たちが持ってきたワラジという履物を宿から借りた。部屋ではコルトンが一人、パイプをくわえていた。

「お疲れさん。あなたの服ならジャンベがロディムを連れて、外の井戸に洗いに行った。今すぐ飯を食うか？」

「……そうだな。風呂にゆつくり浸かったから疲れはまあまあ取れたしな。二人が帰ってきたら夕飯を頼もう。ところで、ご婦人二人は下か」

コルトンはああとだけ頷いた。エドワードは少しの間、仮眠を取った。仲間が眠らせておこうと気を利かせたらしく、起きた頃にはすっかり陽が落ちたあとだった。

エドワードは宿内の同業者と食事を共にしたのち、もう一度食卓にメンバーを集め、明日の予定を話した。

「すまんが、明日のローテーションでは俺は休ませてもらいたい。金を受け取るためでもあるが、何より、疲れた。このまま行けば明日の探索に支障が出ると思う」

「そうしたほうがいいわね。あなたがあの姿で帰ってきたのを見たしね。もし、あなたが明日も探索に出たら、本当に死んでしまいそう」
アクリヴィは冗談めかして言ったが、冗談では済まされなさそう

だ。

明日は一つか二つ依頼を受けて、明後日はジャンベに替わってエドワードが加わった本格的な四階層探索の決行が決まった。軽く雑談を交わたら、男四人は一階、女二人は二階の部屋に戻った。

「コルトン、ジャンベ、ロディム。この部屋には居ないアクリヴィとマルシア。お前たちの明日に幸運が舞い降りることを願う」

それだけ言うと、溜まっていた一週間分の疲れにどっと襲われ、エドワードは泥のように眠った。

九話 再び三階層

今日は二つの依頼を金鹿の酒場から承った。

冒険者と市民の間には僅かながら隔たりがあり、冒険者の大半は遠方の地の出身者で、彼らの堅気とは言い難い雰囲気は自然と冒険者と市民が集う場所を自然と分ける。例を挙げれば、シリカ商店がその代表になるだろう。

そんななか、金鹿の酒場は数少ない市民と冒険者が集う憩^{いこいどころ}所。

多くの市民はこの店で、執政院などには頼めないような事柄を女将に話し、女将は内容を帳簿にまとめる。女将は仲介人としてこれとを思う冒険者に帳簿に記した頼み事を明かし、冒険者はその頼みを引き受ける。

一つはシリカ商店からの依頼で、大亀の甲羅を所望。二つ目は高級服飾店からの依頼で、鱈皮を所望。いずれも原価に千エン足した報酬金が支払われる。今日請けた依頼品の持ち主たちは、いずれも三階層における強敵として挙げられる。農耕牛より一回りでかい大亀は、口から身を凍らせる冷気を吹き付ける。鱈は四本足と二本足でも恐るべき速度で迫り、獲物を大顎と爪でズタズタに引き裂く。

その恐ろしさたるや、体験した者にしか分かり得ない。これらの強敵と対峙するにあたり、接近戦を得意とする者のみでは勝率は低い。腕利きのレンジャー・アルケミスト・カースメーカーの誰か一人は必要不可欠である。

樹海生物とは基本。戦いを避けるのが前提であるが、冒険者とエトリア人には付き合いという物があり、他国人である自分達が食う物や寝床はエトリアが提供しなければ野垂れ死に、武器装備も得られない。エトリアも彼らの稼ぎが無ければ、経済が滞る。切っても切れぬ関係。

今日はレンジャーが欠けているが、若くして匠の腕前を持つアルケミストがいるので安心だ。

「さあ行くう」

コルトンが号した。彼とアクリヴィは今日、二人で一行の代理リーダーを務める。

小舟のパーツを持たずの探索で、その点は楽だった。

コルトンは顔を覗かせた胄を被り、大盾を背負う。ロデイムは背に長柄の斧を、腰のベルトには短い柄の片刃の斧と両刃の剣をたばさみ。ジャンベはいつもの青いベストと楽器、短弓と矢筒。アクリヴィとマルシアは普段通り。そして、各自太いナイフを携帯した。

時軸を通り、いざ三階層へ。

もう何十回目になる蒼い世界が視界に飛び込んできた。安定した涼やかな冷気が身を包む。

コルトンが先頭に立ち、二番目に重装備のロデイムはしんがりへ、ジャンベは後列から二番目、マルシアは真ん中に行き、アクリヴィはコルトンの背後を歩いた。パーティーは整ったように見えるが、当人たちの感想は違った。完成間近のジグソーパズルの残り一ピースが欠けて、いくら探しても見つからなくて落ち着けない感覚。

そのピースとは、エドワードであろう。

ジャンベは耳がいいし、ロデイムも決して目は悪くないが、しんがりを務めるのはエドワードこそ一番の適任者だと理解していた。ロデイムも肌でそれを感じ、何糞負けてたまるものかと目を凝らした。

げーこお！ げーこお！ 喉を震わせて鳴く声。カエルだ。

始めはゆつくりと間を開けて鳴き、次第に一行を包围するようにげこげこことやかましい大合唱と化した。各自の獲物を手に取る。アクリヴィの籠手から錬金術の薄い光が洩れる。

カエルたちの大合唱が止んだが、周りの草や樹の裏からはひしひしと気配を感じる。

「どつちに集まっているかわかる？」

アクリヴィはロデイムとジャンベに聞いた。

「ここの音が反響しては、何匹いるのか検討がつきません。少なくとも、コルトンさんが歩いて十歩先の左の居丈草からは五匹います。後は判じかねます。多分、何十匹いるでしょう」

ジャンベが声を潜めて答えた。アクリヴィはロデイムを見た。ア

クリヴィと視線が合ったロデイムは無言で首を振った。視力が良くても観察眼が無ければ意味がない。ロデイムにはその観察眼がやや欠けていた。

カエルはあまり強敵の部類ではないが、こども数が多ければ厄介だ。

アクリヴィがコルトンより前へ出て、ジャンベの指示した箇所へと氷の術式を放った。三階層を包む冷気を超える、極めて寒冷の強い風が居丈草を直撃。げえ！ という小さな声が重なり、居丈草と地面の一部は氷で覆われた。

この寒さでカエルの群れは逃げるか。決意改めて襲いかかってくるか。

あちこちで慌しく草を踏み付けたら掻き分ける音がした。カエルの群れは急激な気温低下に驚き逃げ出した。

カエルの群れが去ったあと、コルトンはメイスで草をかち割り、草越しを覗いた。ジャンベの言った通り、子牛ほどもある五匹のカエルが固まり、薄く氷で覆われて灰色の体は白くなっていた。

五人はカエルを草から引きずり出し、コルトンとロデイムがナイフでそつと頭を刺して息の根を止めた。

五人で作業に当たり、凍りついた岩サンゴや頬の皮などをナイフで剥ぎ取った。その後、続々と樹海生物が出現した。クイーンアントの残党、一つ目の全身が粘液で覆われた青や赤のワーム、例のカエル。コルトンは剣で蟻の頭部を貫き、盾でもう一匹の頭を砕いた。アクリヴィは氷の術式で蟻を氷漬け。マルシアは短槍でカエルを刺し、ジャンベの矢はカエルの眉間に当たる。ロデイムは両手に剣と斧を持ち、二匹のワームをそれぞれ一太刀で屠る。

三度に渡って樹海生物の襲撃は行われたが、ホープマンズの堅固な陣形の前に、尽く返り討ちに遭った。

歩き続けて一時間、一つ目の依頼の品物を持つ怪物が現れた。

それが一步踏む度、地面にはくつきりと足跡が刻まれる。のんびり、気怠そうに棘を生やした岩が揺れる。

岩からは太く長い四肢が伸び、同じく太く長い首を伸ばし、唇の上顎に位置する部分は尖がっていた。あの口で挟まれたら腕など簡単に千切れてしまいそうだ。

コルトンとジャンベが囫として大亀の気を惹き付けている間、物陰に隠れたアクリヴィが大亀の首を凍らせ、一時的に身動きが取れなくなった大亀の首目がけてロディムが長柄戦斧を振り下ろす。マルシアは後方で待機。大亀が縄張りを一周する頃を見計らい、コルトンとジャンベが飛び出した。大亀は歩を止め、二人をじつと見下ろす。

大亀は野太い咆哮を上げた。腹と喉が膨れる。来る！

刹那。膨らんだ大亀の喉腹が縮んだ。大亀の後ろ左足に槍が突き立っていた。マルシアが投げつけたのだ。

背後を取られた大亀は首を右、アクリヴィとロディムが隠れた切り立った丘の方に首を曲げたとき……身を切るような冷風が大亀の首を襲う。コルトンとジャンベは薄目を開けて、大亀の首右半分が凍りついたのを見届けた。

ロディムが躍り出て、長柄戦斧の刃広い刃が頭を抉り、抜き払った長剣で首の凍った側面を深々と刺した。

これで最期かと思いきや、大亀は右足でロディムを蹴飛ばすという抵抗を見せて事切れた。蹴飛ばされたロディムは切り立った丘に叩きつけられ、鎧ががしやりと盛大に音を立て、丘の一部が崩れた。

四人は大亀に目もくれず、真つ先にロディムに駆け寄り、コルトンやアクリヴィが手を貸そうとしたら、手を払って立ち上がり、ロディムは胃を外して目を眩ませながら後頭部をさすった。

「あつっ……あんにやろ。思いつき蹴りいれやがって。鎧が無きや危なかった」

「ほかに痛みはないのか」とコルトン。

「ん？ ああ、まあ、痛いといえば痛い。動けないほど痛いというわけでもねえぜ」

「でも、万が一という場合もあるし、ちよつと鎧を脱いでみて」

マルシアの言うことにロディムは素直に従い、鎧を脱いだ。コルトンはアクリヴィを見て、アクリヴィは肩を小さくすくめた。私たちの

手は払うが、お姫様の意見には従うか。二人の考えていることを読み取ったのか、ロデームは言い訳した。

「勘違いするなよ。俺は別に意図してしたわけじゃない。てつきり、野郎がまた生きていて、脚を伸ばしたように見えたんだ。ほんとだぜ？」

コルトンは片手をひらひらさせて「わかったわかった、ほら診察してもらえ」と苦笑混じりに言った。

ロデームがマルシアに診察されている間、アクリヴィが見張りに立ち、コルトンとジャンベは作業にあたった。コルトンは右、ジャンベは左に回り、甲羅の隙間にナイフを差し込み、刃を小刻みに何度も上下させて少しづつ甲羅と甲羅を繋ぐ肉と骨を絶った。

途中から診察を終えたロデームとマルシアも加わった。ロデームは腹に僅かな痣を除き、致命傷になるような傷は無かった。

二人は大亀の尻尾側から作業を始めた。適当な木の棒で大亀の甲羅の裏側に引っ付く余分な肉を落とし、土をスコップで投げて血肉で濡れた部分を固め、三十分で作業は終了。戦闘自体はあっさり済んだが、後処理に時間を要した。アクリヴィとマルシアの二人が甲羅を縄で括り、甲羅の裏側を背負う。甲羅はごつい見かけに反して意外に軽く、二人は普通の女性より鍛えているためこの程度の重さは苦にならなかった。

配列は変更無し、一行は十二階に降りた。

鱈は太古の時代のいつか、三龍の目を監視を運よく掻い潜って樹海に移り住み、たった数千年の歳月で樹海の環境に適応して巨大に進化した。

全長十メートル近くの鱈が大口を開けて接近してくる様は、探索に慣れた者でも例えようがない恐怖に陥れる。

また、非常に狡賢く、眠っていると見せて襲いかかったり。一頭が水面から尻尾を出して引き付けているうちに、もう一頭が獲物の息の根を止めるといった連携プレイもみせる。

「でも、私たちは背後に關しては安全ね。これ背負っているしね」
アクリヴィは自らの背後を歩くマルシアを茶化した。マルシアは、

ええそうねと軽く微笑んでみせた。

アクリヴィの腹側の甲羅で、マルシアは背中側の尖った部分がある甲羅を背負っていた。マルシアの背はメンバーの中では一番低く、いざという時は背負った甲羅ですっぽり身を覆い隠せそうだ。樹に止まっただけの一行を見下ろすヤンマをアクリヴィが電撃で脅すと、ヤンマは右方向へと飛び去った。それ以外、特に敵らしいのは見当たらなかった。他のパーティとも一回しか会わなかった。

そのパーティはホープマンズより平均年齢は上で、彼らのリーダーが言うには、今日は厄日だと。

何を根拠に厄日なのかはまでは語らず、今日の三階層は奥まったところに行くのは避けたほうが賢明だと忠告した。

彼らは彼の忠告に一応耳を傾けて、鰐の目撃例が多い十三階に降りた。地図からして、四分の一まで進んだとき、コルトンは前を睨んだままジャンベに話しかけた。

「ジャンベ、何か気付くか？」

「いいえ、何も」

「お前はどうか、ロディムよ」

ロディムも何もと答えた。何回も怪物と戦うこともあれば、一回も怪物と戦わずに階下へ行けることもある。なのにどうであろう、十三階では一度たりとも、生き物の影も形を見てない。

コルトンは見えない誰かに背中を押されたような衝撃が走った。冷や汗。

鰐は巨体のくせして、意外にも音を立てずに移動する。エドワードが一番目がよく、レンジャーとして気配を感知する能力にも長けているが今はいいない。ジャンベはエドワードより耳はいい。今は彼の探知能力に頼るしかない。

何かがいる。だが、その何かはとはなんだ。そもそもいるのかどうかさえ分からないが、彼らの長年築き上げた冒険者の勘が危険を知らせていた。コルトンとロディムが右を何となく見た時、ジャンベが正しい方向を告げた。

「音がしました。左です。小枝を踏みしめる音です。小枝全体を踏み

締める感じの音だったので、多分、人間ではありません」

小枝全体を踏み締めるぐらいの巨体。その情報だけで十分だった。一行は先を急ぎ、浅瀬がある視界が遮る物がない道にまで進んだ。小さな支流が流れ、全体的に道はぬかるんでいる。十二階は運が良かっただけであろうが、十三階は異なる。十三階で他の生物と遭遇しなかった訳は単純明快、自分たちを位が上の捕食者が狙っているからだ。

鰐は決して諦めない。こちらの忍耐力が確かめられる。

アクリヴィが誘いをかけようと提案し、一行はアクリヴィの案に乗った。甲羅を木の棒で立てかけ、一行は比較的固い場所に座った。肉を取り出し、棒切れに刺したらアクリヴィの火の術式で焼いた。肉の焼ける良い匂いが漂う。

うめえうめえと、ロディムはがははと笑いながら肉を頬張る。

のそりのそり。樹を押しつけ、薄紫の二対の小山が地面を這いつくばる。一つは甲羅の腹側、一つが甲羅の背後に回ろうとした時、攻撃が開始された。

甲羅を左右に押し倒し、アクリヴィの両籠手から今日一番の威力の氷の術式が形を伴い放たれた。術式は白いもやつとした球体状の塊となって鰐に向かった。鰐は身を捻ったが、横腹から足の付け根にかけて凍りついた。

もう一体の鰐は、甲羅が押し倒されたと同時にファイアオイルの瓶を幾つも投げつけられた。

鰐は不愉快そうに頭を振り、無駄な足掻きをする獲物を一飲みしようとした。マルシアは点火しておいたマッチで火薬を詰めた小瓶の布に火を灯し、迫る鰐の大口へと果敢に瓶を放り投げた。毒を塗ったナイフもくれてやった。

鰐が吐き出そうとした瞬間、火薬が炸裂し、体にかかったファイアオイルにも引火した。鰐は呻き、泥を跳ねあげ、体を激しく回転させて火を消そうとした。泥の飛沫が一行と相方の鰐にも降りかかる。

一行の行動は早かった。マルシアが小瓶を投げたのを確認すると、一行は前に回ろうとした鰐から離れ、アクリヴィが凍りつかせた鰐と

対峙した。

白く濁った鰐の目は怒りで不気味な光を湛えていた。小細工なしで真つ向から大口を開けて接近してくる鰐に、またしてもアクリヴィの術式が炸裂！ 鰐の右目や下顎と舌が凍り、鰐が苦しげに口を動かしたら、舌がぼきりと折れた。凍った舌肉の断面がうかがえる。

苦しげに喘ぐ鰐の背に盾を捨てたコルトンが素早く飛び乗り、振り落とされまいと体にしがみつき、必死に脳天に剣を何度も突き立てた。そのうち、鰐は淡が詰まったような咳を出して、横たわった。コルトンは頭から降りて、念には念を入れて最後にもう一突き、剣の柄に達するまで深く刺し入れた。

一方、もう一体の鰐は問題なかった。何故なら、最初の奇襲で目や舌に鼻など五感機能の大半を奪うのに成功して、鰐は瀕死に陥っていた。

泥塗れの顔を所在無げに動かし、鰐は哀れっぽくか細い声を上げた。アクリヴィが介錯に、先ほど放った特大氷の術式で頭部を凍りつかせ、今度はロデームが頭に上り、斧で頭を砕いた。

粉雪と化した頭部の一部が地面に飛散した。いずれ、泥の一部になるだろう。

泥で汚れた一行は作業に移った。

マルシアとアクリヴィは甲羅の回収と点検。男三人は鰐皮の採取。残念ながらアクリヴィの背負っていた甲羅はひび割れていたが、マルシアの甲羅は泥を被っただけで、無傷で済んだ。男三人は要所要所で鰐皮を切り取り、一人頭一メートル分、計三メートル分の鰐皮を背負った。

「あの。今度は私から提案があるのだけど。いいかしら？」

マルシアがおずおずと手を挙げた。アクリヴィが先を話すよう促した。

「ほら、さつき会った方達のリーダーの男ひとが言っていたでしょ。厄日だと。あの人の言うことを鵜呑みにするわけじゃないけど、最後にあの鰐さんが出した声」焼け爛れて凍りついた鰐を指して「どうも危ない予感がするのよね」

「危ない予感？ それは何なんだい？」

ロディムが幾分礼儀正しく聞いた。ロディムの問いに、マルシアは頬に人差し指をつんと当てて首を傾げた。アクリヴィはこういう女らしさを強調した動作は嫌うが、マルシアや金鹿の酒場の女将、シリカ商店の店長娘など一部に限り許せた。

「さあね。ただ、もったいないと渋ったら、後で後悔するところか、最悪死ぬかもしれないわね。あの人の勘、それと、私の女としての勘と言えよよろしい」

最後の台詞を悪戯っぽく言った。ロディムはにやけ、ジャンベは半ば呆れ半ば面白がるように微笑んだ。

反して、アクリヴィは右手を顎に当てて探るように周りを見やり、コルトンは真剣な面差しでマルシアを見た。コルトンは腰に付けた袋をまさぐり、変位磁石を取り出した。

「そうだな。あんたの言う通りだ。渋って死ぬぐらいなら、使った方がずつとましだ。では、皆集まれ」

コルトンは石を地面に投げた。石はぬかるんだ地面に食い込み、周囲に円形の紫の光が立ち昇った。一行が去り、光の輪が消えて少し経った後、ぞろぞろと三体の元気な鰐たちが現れた。

鰐たちは悲しむ風でもなく、仲間の死体を貪り喰った。その死体を狙い、木々の間からも沢山の樹海生物たちが鰐のおこぼれをいただこうとしていた。

男の忠告、マルシアの女としての勘は的中していた。

十話。 ああ、不運

地上にいるエドワードはお昼前には起床した。のんびりとはできない、細々とした雑用をこなさなければ。

朝食兼昼食を取ると、動き始めた。まずは溜まった洗濯物。宿の女性従業員に女二人の着物の洗いを任せ、自身は男所帯の選択物を一時間で洗え終えた。室内に戻るとペンを手に取り、帳簿の計算を始めた。

計算もゲンエモンに教えられた。計算をすれば頭の回転が早くなり、冒険者を辞めることになっても、商人や計算を必要とする職に就ける。昼過ぎにはシリカ商店の使いが来て、例の黄金の角鹿の代金を手渡した。角は百エン、皮は百二十エンの値が付いた。ただし、今後史上価格が下がる可能性は十分にあると、渡される際に要らぬことを告げられた。先週の出費と儲けの比較と合計、考察記の推敲をして終了。考察記とは、エドワードが自らに課したこと。

樹海の状況、各階層の樹海生物の特徴、マッピング用の地図の走り書き、今後の探索に置けるデータや対策を細々と記した日記のようなものである。いま持っているので八冊目、一冊に付き大体二百頁程度ある。

エドワードが記すこの考察記のような類は、なにも彼に限ったことではない。大抵のパーティの誰か一人や二人、もしくは全員が付いている。

ホープマンズの場合は、エドワードがやれと命じてないにも関わらず、仲間が各自日記を付けている。

とはいえ、日々の出来事を簡単に綴ったロデイムのようなものもあれば、ジャンベのように思いついた歌や詩を書くなど、冒険とは直接関係ない事を書く者もいるが、そこは個人の自由である。

なお、ホープマンズの金額管理はエドワード・アクリヴィ・マルシアの三人で行う。

次に、執政院ラーダで昨日の案内料金をいただいた。昨日までとは打って変わって、役所は静かだった。

陳情を述べることを悪いとは言わないが、文句ばつか垂れていては金も稼げず、食うに困る。陳情者たちも今日は労働にいそしんでいるのだろう。

オルレスから代金を頂いた。エトリアが発行した数字が書かれた金券なる紙幣。

この金券制度は今後世界の主流になるだろうと噂され、事実、エトリアに近い所に位置する国や地域ではこの金券が使用可能である。金や銀は尽きるが、紙なら樹を植えれば幾らでも増やせる。

金であることには変わらないが、どうも金を受け取った実感が無い。

エドワードは1000と書かれた三枚の金券と500と書かれた一枚の金券に、純度の高い銀貨と金貨を数枚手渡された。やはり、こちらの方が実感が湧く。三階層から四階層の衛兵一人頭の案内報酬は五百エン、二階層から三階層へ連れていけばもう三百エン金額が上乘せされる。五人で計千五百エン。執政院もどの階層の探索が困難を極めるかある程度は理解していた。

エドワードは占めて四千五百エンの稼ぎを得た。一回の任務や依頼で得られる報酬としては破格であるが、エドワードはそんなに喜ばなかった。

彼は金を得ても、単純にそうかと思わなかった（十万エンくらいであれば口笛の一つも吹いていたかもしれない）。

彼にとって金を稼ぐことは最大の目的ではない。それよりも、今回のことで妙な疑いや緩和されたのが一番の喜びであった。完全に払拭しきれたわけではないが、少なくとも、衛兵間の評価は上がったようだ。と、オルレスから聞いた。

コルトン同様、栄誉を勝ち得ること。勝ち得た栄誉に付いてくる権利と金で一族を復興し、その一族出身である自らと自らを育んだ一族の存在と優秀さを世界に知らしめることこそ彼の目的である。

金は間違いないが、金を稼ぐ事自体を目標にしてはいない。できれば、金を気にせず突き進みたいところだが、太古より人間は現物のついでに金で世界を回しているの、それもゆかないのが辛い。

昼の二時頃、メンバーが帰還した。既に報告を済ませ、報酬金も受け取ったようだ。

エドワードはコルトンとロディムが鎧を外すのを手伝い、荷物と装備を一階と二階の部屋に仲間と共に運んだ。

一行が汗を拭き、一休みして少し経つと、従業員が来て、彼らに食事の用意はできていることを伝えた。エドワードが宿に話を通しておいたのだ。

当のエドワードがどこに行つたか、コルトンやジャンベが聞く。従業員は困惑した様子で、「お外に用がある、こう言えば通じると言っておりまして」

それを聞いて、一行はああそうかと納得したように食事を始めた。宿の男はなんの意味があるのだと首を傾げたが、余程のことが無ければ、客の事情を根掘り葉掘り尋ねるのは御法度。深くは聞かなかった。

一通りの雑務と雑用をこなしたエドワードはブケフアラスに乗って外壁に出た。エトリアは緩やかな丘に囲まれ、南門を基準に測れば、西南三キロに森と山がある。

南門の丘を越えた先には牧草地が広がり、西門の先には広大な田畑、東門の近くには共同墓地が並び、共同墓地の先にも農作地と牧草地の一部がある。川が流れ、大地はよく肥え、この肥沃な土地自体がエトリアの財産でもある。

かのエトウ王賊連合が付け狙っていると聞くと、賊軍でなくともこの土地と土地に住まう者たち、つまり人的資源も喉から手が出るほど欲しいだろう。エトリアは教育と技術が発達しているから。

どこかでエトウの名を一度聞いたことがある気がするが、きのせいであろう。

自分が戦好きの帝国の王であったなら、何がなんでもエトリアを傘下に入れておきたいと考える。その上、世界樹と世界樹の下から取れる珍品というおまけ付き。狙われないほうがおかしい。

エドワードは丘を越え、森から出てきたばかりの金髪の青年に一声

かけた。

縁の円形がくつきりと上に折れた三角帽子を被り、緑のデールという民族衣装をまとい、手には薪割りを持って、粗朶そだを背負い、エドワードと同じ金髪の若者が振り返り、齒の抜けた顔でにこやかに挨拶をしてきた。

彼はエクウスのチノス。エドワードより九歳年下の同族の青年。二年前に流れ着いた一家の一人。

その頃にはホープマンズはそれなり名の通ったパーティと知られて、それなりに顔を利かせることができた。

エドワードは街と交渉して彼らの受け入れ許可を貰い、金を工面して一家の生活立て直しに協力した。

「エドワードさん。今日はご用があつてここに？」

「今日は特別用があつたきたわけではない。君と君の家族に、他の方達はどうしているかなと様子を見に來ただけだよ」

「僭越ながら僕の口から申し上げれば、別段代わり映えしませんよ。例の盗賊らしき怪しい輩も見ませんでしたし。そうだし、用が無いと言つていましたよね？ では、ぜひ家に来てください。僕も父も母も兄妹もあなたのことは歓迎しますよ」

「二通り見回つた後に訪れよう」

エドワードはそこでチノスと別れた。農耕をする二組の家族と出会つた。一組は皆黒い髪、淀みがない綺麗な黒い瞳、ゲンエモンやコウシチらとよく似た顔の者達。

現代は放浪の民であり、かつての騎馬大国の先祖の血を最も色濃く受け継いでいるカルツバスの部族出身者たちである。彼らは一族と別れ、新天地を目指してエトリアに流れ着いた。もう一組の金髪の者らはエクウスの一家だ。南側に行くと、エトリア市民と協力して放牧をする三家族とも出会つた。その内 一家族はチノスの身内の者たちであつた。

背後から自分の名前を呼ぶ者がいた。声でわかったが、振り返るとチノスがいた。

エドワードはチノスに案内されて、住居であるゲルの隣にブケファ

ラスを繋ぎ、中で寛いだ。予定ではすぐにお暇するつもりだったが、ちょうど仕事が終わったらしく、チノスの一家が帰ってきた。

一家はエドワードを歓迎し、彼をもてなした。一家の主、茶色のデールを着たティノフェが始めに挨拶をした。髭と髪をざんばらに伸ばしているものの、無骨さを感じさせなかった。瞳はエドワードとは異なり、澄んだ緑色だった。

「ゲロリリオンの倅か。こんにちわ。今日は何の用じやい？」

「いえ、私はただ様子を見にただけなのですが、あなたの息子のチノスに來ないかと誘われてな。こうしてお邪魔させてもらっています」
今更であるが、エドワードの父の名はゲロリリオンという。ティノフェに習い、妻と子供たちも膝を折って一礼した。

互いに一礼を交わすと、ティノフェが話を始めた。

「おんしには感謝しておるよ。あの戦火の後、我らは一族の残された者は離れ離れになり、寄る場所を失った。そんなとき、元冒険者の男とばったり出くわし、おんしがそこで避難民受け入れの為に冒険者としてのちゅう噂を聞いた。おんしは何年間もよう顔を合わさんかったわしらに金を貸してくれて、代わりに街と交渉してくれて、こうして生きていける場所をわしらは再び得れた。ゲロリリオンが生きとつたら、こんな家宝な息子を持ってて光榮に思っていたことじゃろうて」
「お褒めの言葉預り大変恐縮ですが、果たして私の父が生きていたら、きつとこう言うでしょうね。まだ爪が甘いと」

二人はふつと言葉を切り、ゲロリリオンの姿を思い浮かべた。ゲロリリオンは平民階級の戦士であるが、男と戦士としての誇りは気高く、弓と馬の扱いは誰もが認める腕前だった。

また、誰よりも家族想いでもあった。尊敬すべき父に肩を掴まれ、真剣な面差しで少年エドワードは家族を任された。いつかはお前が一族の者達を率いていけるぐらい、強くなれと言われた。父のあの日の顔と言葉は、記憶にしかと刻み込んである。

エドワードは自身の野心家的側面を認めていたが、一族再興と存続は彼自身の願いであり、戦火で亡くなった者たちの祈りでもある。

「お話に水を差して申し訳ありませんが。エドワードさん、また世界

樹でのお話を聞かせてくれませんか?」

エドワードとティノフェはちらと目を合わせた。ティノフェの目は明らかに余計なことは言わないでくれと訴えていた。エドワードは分かっていると、ティノフェとその妻以外には気付かれないような目配せをした。

「……そうだな。ほんのちよつとだけならば、な。私はそろそろ街に戻るから」

エドワードは簡潔に昨日の依頼に関する出来事を少しだけ話した。語りに抑揚をきかせず、ごく一部を掻い摘んだ程度で細かなことは判らない。

そんな内容でも、チノスは目を輝かせてエドワードの語りに耳を傾けた。チノスは冒険者とエドワードに憧れている。

彼自身は覚えてないが、父親と母親から、山中に逃げているときに自分の父と母を敵から救ったのはエドワードと聞いているため、エドワードに尊敬と恩義の念を抱いていた。

傍目から見てもそれはわかるが、彼の両親がなるのを許さないだろうし、エドワード自身もお薦めしたくなかった。

ティノフェにもう一人、チノスに近い年齢の息子でも入れれば少しは考えてもよいが、いま泥を被るエクウウスの民は自分一人だけよかった。この世界のどこかで本当に泥を被って暮らしている者もいるであろうし、まだ生きているかもしれない母と妹が、そういう生活を強いられている可能性が大いに有りうる。

エドワードは家に入ってから、気になっていた。家族の末の弟の姿が顔を隠しているのだ。悪いことでもしたように、こそこそと。「どうしたのだ?」

エドワードは優しく尋ねたが、出てこない。母親は気になさらないでと言う。母の顔は暗い。エドワードは立って、その子の顔を見た。「これは……」

エドワードは呻いた。子供の右目蓋に、はつきりと石をぶつけられた痕があった。

「苛められたのか?」

子供は答えず、傷付いた表情でエドワードを見上げた。カルツバスが王賊連合の手先になった噂。真実か定かではないが、まさか、こんな事態に発展するとは。

自分たちと関わりのある者たちが悪事に関与している。確証は無くとも、たつたそれだけで、どんなに心が広い者たちだとしても、疑いの眼差しや色眼鏡で自分たちを見るようになる。母はどうか気になさらないでと手を振るが、彼女も子供と同じくらい傷付いた顔をしていた。

「どうしたこうなったのかのう」ティノフェがぼやく。

「遙か昔、エクウウスとカルツバスは偉大な騎馬の戦士だった。それが方や、滅亡間近。片や、ごろつき共の下っ端……。終わりは近いかな」

「終わりではない！」エドワードは目を吊り上げた。全体から怒気が滲んでる。

「そして、彼らは悪党共の下っ端でもない。それは、あたなご自身が一番理解しているはず。我らと、散らばった同胞が生きている限り、決して滅びぬ！」

ゲル内に静寂が訪れた。ティノフェは夢から覚めたように、ぱしりと自らの額を叩いた。

「一家の主がこう、弱きになつてはいかんな。すまん。あんたが一番、骨身を削っていたのを忘れてた。どうか、許してくれ」

「気にすることはない。苦労しているのは、あなた方と世界に散らばった者たちも同じこと」

エドワードは末弟の子に来るよう、促した。おずおずと近寄った小さな子の頭を、エドワードはくしゃくしゃと撫でた。

「泣けるときは泣け。人はそうして、強くなるものだ。家族を大切に
するのだぞ」

逞しく、力強い手。厳しい世界に身を投じる者の内側にある優しさ。それに触れた少年の表情から悲しみが消え、代わりに生きる希望の灯りが少年の眼に宿った。夕陽が大地を染める頃、エドワードはゲルを出た。泊まらないかと勧められたが丁重にお断りした。

住んでから僅かの期間、一家はまだそんなに余裕はなく。自分とメンバーが泊まれるほど中も広くない。とにかく、余計な世話をかけたくなかった。

一見、安定しているように見えるが、生活は以前ほど豊かではない。今は復興の途上。このままエトリア周辺に永住するにしろ。いつかは移動するにしろ。人数と財産（主に家畜）が一定数に達するまでは、冒険者を続けなければさそうだ。

エドワードは予定していたよりも遅く門を潜り、宿に戻った。

のどかに時が過ぎる地上。一方、地下世界では、あるパーティが憂慮すべき深刻な事態に直面していた。

*

*

あの報告をしてからすぐ、二十階で宴会が催された次の日には詰所の人員が増加された。詰所の者たちには非常時に備えてとしか伝えられず、チエチエラとパルッグはまたしても長い行程を踏破する羽目になった。二人は平気そうに、素足で針のように尖った植物を踏み締めながら歩んだ。モリビトの足の裏は人間よりずっと硬い。

「全く！ 何となく想像は付くけど、もう少し教えてくれたっていいのよ」

「まあ、憤るなよパルッグ。俺は少し、例の地上の奴らに興味があるし、俺はむしろ良い機会を与えられたと思ってるぐらいだ」

「ほう、そうか。そんな殊勝な心がけの奴あお前だけだと思うぜ。俺は真つ平ごめんだね！ そもそも、ここは俺らが住む世界だというのに、あの者たちはこのこ礼儀も弁えずどかどか入ってきて、俺たちは背が低く、言葉もあまり通じないのいいことに、地上の者たちは良い人のふりして騙し討ちを幾度なく繰り返してきた。長い歴史が語っているよ、話すだけ無駄な相手だったね。だからこそ、十五階に来たら聖獣コロトラングルをけしかけるなんて荒っぽい対策を講じずいられなかったんだ。それが！この様だよ。この前のあいつらといい、聖獣を殺めてまで来るとは。一体何をしたいのやら、ほんと、理解しかねる。」

チエチエラよ、お前さんの話好きはある意味では美点かもしれん

が、地上の者たちとは話をしようとは思うな。良い人のふりして、こつちが気を許して背中を向けた途端、ばつさりやられねかねん」

チエチエラは適当な返事で濁した。パルツグは念押ししたが、難しいだろう。チエチエラは好奇心ある話好きときたまもんだ。好奇心あるお喋り者、これほどよくある悪い組み合わせもないだろう。

チエチエラの場合は話すべきでない事柄は話さない心構えがある分ましに思えるが、地上の者たちとの接触は絶対に回避しなければ。

なんせ、我ら二人を含む詰所の者たちは殆ど、地上の言語を話せない。

二人。正確にはチエチエラとパルツグの二人と、彼らとは別行動の二人一組の偵察もいた。

二人は慎重に慎重を重ねて歩いた。しかし、いくら慎重を期しても、上手くいかないときはよくある。

運悪く、二人は腹を空かした二匹の白カマキリこと白刀共と出会ってしまふ。樹上から豪快に羽音を立て、鎌をかざして降りてきた白刀の攻撃を間一髪で避けた二人は、助けを求め、大声で吠えながら偵察ルートから外れた方向へと逃げた。

赤髭の三人と黒髭の二人、むさくるしい五人の冒険者が新たに四階層に降り立った。

豊かなな赤髭を蓄え、タル体型のわりにがっちり締まった強健な男が盾を構え、我が物顔で大股に前を歩いた。この男がリーダーで、名は赤髭のモンパツイオ。

数年前までは盗賊を生業にしていたので、エトウ王賊連合との関わりを疑われ、最近では機嫌が悪い。

エトリアの主要都市で世界樹があるマター・エトリアには売春宿の類がないため、姉妹都市である海洋都市ソロール・エトリアにて、稀に女を買ったりもしているが、弁えているところもあり、売女以外の女。金鹿の酒場の女将や女性冒険者に手を出すような行為は一度たりともしていない。

モンパツイオの仲間、弓矢を背負い、片目の眼窩が窪み、いかにも

荒んだ人生を送った風体の男が右を指した。

「来るかもしれん」

彼らは退き、身構えた。数体分、何か草を掻き分け接近してくる。飛び出したものを見て、大抵の物事において驚くことは無い彼らは、この日、久しぶりに驚愕した。

先端がほんのり朱に染まった若葉色ざんばら髪を振り回す、死人のような青白い肌と鼻梁とは言い難い面、紅の瞳を持つ人の形をした何かが二体も出現した。

二体の手にはそれぞれ武器が握られていた。背後には、一階層三階に出没する例のカマキリの近縁種と思われる二匹もいた。迷信深い仲間の一人が恐怖で叫んだ。

「し、し、死人だ！ 世界樹で死んだ冒険者が怪物になって蘇ったにちがいない！」

「何を馬鹿な」

モンパツイオはそう一喝したものの、彼の言ったことを信じてしまっいそうになる自分もいた。

あの二体はもしかたら本当に、過去この世界樹で命を落とした者たちの亡霊が肉体を持って実体化した超自然的存在かもしれない。だからといって、むぎむぎと自分達の命をくれてやる道理も義理もない。死人は死人らしく、大人しく墓穴にでも眠っている。

モンパツイオとその子分は戦闘態勢を取った。

人の姿をした怪物か亡霊は武器を持った手を挙げて、振り返りながら叫ぶ。その顔は半狂判嬉で歪められていた。恐らく、あの白カマキリに指示を出しているのだろう。モンパツイオたちの想像は間違っていた。その人の姿をした者たちが、助けを求めているとは思っても寄らなかった。

チエチエラは手を振り、地上の者たちに助けを求めた。

「頼む！ 助けてくれ」

「チエチエラ！ 駄目だ！ 何とか上手く横へ飛び退きあいつらと戦わよう」

「見ろ、武器を構えた！ 戦ってくれるぞ！」

違う！ 地上の奴らから見れば、きつと俺たちがこいつらを連れて襲いかかったようにしか見えないはず。そう言う前に、事は起きた。チエチエラが後ろへ、仰向きに倒れた。何を馬鹿な真似をと叱咤しようとした口を閉じた。チエチエラの頭には何か細い棒が突っ立ち、ぶるぶると震えていた。

眼窩が窪んだ男は弓で射ったのだ。

あれほど、余計な口を利くなと言ったのに。幼い頃の思い出がよぎる。大胆ではあるが、奴はどうしてこう、抜けているのだ。だからこそ、今日まででこぼこコンビとしてやってこれたのかもな。

パルツグはチエチエラの死をすぐに理解し、白刀を無視して奇声を上げて、モンパツイオに突進した。

モンパツイオは盾で軽く石槍の一突きを受け止め、剣でパルツグの頭を真っ直ぐに切断した。二人は苦しむ間もなく、地上の五人によって殺された。

一行は二人の死体を踏み付け、白カマキリたちと戦い、勝利を収めた。一行は早速、四体から取れる物を取って帰ることにした。

そして、一行が四体から採集する光景をじつと眺める者がいた。二人と共に偵察の任務に向かった、チエチエラとパルツグより数歳年上の二人。彼らはしかと見た。手強そうな白刀を強力な武器で倒した五人。倒した後、二匹の白刀の鎌を切り落とした。それだけならいざ知らず。あろうことか、死者の二人から身ぐるみを剥がすという、卑劣かつ、侮辱極まる凌辱行為も平然にやってのけた。

二人は煮え返る怒りを鎮め、五人を監視した。それしか術はない。彼らの二倍いれば、あるいは勝機があつたやもしれぬが、たつた二人ではまず勝てない。

二人は五人の動向を静かに見た。地上の者たちの行為と残虐性を詰所に報せるため。ひいてはモリビト全体に知らせることこそ、彼ら二人の役割であり、後輩二人が無し得なかつた任務を、せめて代わりに成すことしかできない。

五人の地上の者らが帰りを密かに見届けた二人は、狩り組の者とも

合流し、四人で詰所に急行した。

電光石火。油を得た火のような勢いで伝令は各林村に詳細が飛ばされた。

三日で全階層のモリビトたちに詳細は伝わり、戦いを拒む者、出兵を渋る六の林村の者たちにも戦いを決意させた。

神官は十日で戦う覚悟がある者がどれだけいるかを報告するようにとの旨を伝えていたが、五日以内には全林村の代表が来た。

その中でも、例の若者二人、チエチエラとパルツグが出身の、十二の林村の代表二人の到着は早かった。

同族であり、同林村出身者が殺された十二の林村の代表二人には同情の眼差しが向けられた。

各林村で戦いを決意した者は全員。文字通り、老若男女、戦える者、戦い参加できない者問わず、全ての者が戦いを決意した。神官はこの報告に歓びを禁じ得なかった。その場で会議が行われた。予定していた通り、出兵人数は百名増員して二千百余名で決定した。内百名は斥候・伝令役に回されることになる。

「こたびの君らの決断に私は真に感銘している。しかし、水を差すように申し訳ないが、私は地上に対し使者を立てることにする。そして、その使者の最後通告すら無視してくるようであるなら……徹底抗戦だ！」

神官が鉄製の穂の槍を掲げる。各代表たちは壁にもたせかけた槍、腰に挟んだ拔身の剣を頭上高く掲げた。

神官は槍先でそれらの刃先を軽く小突き回り、神官が一周し終わると、全員一斉におうと声を張り上げた。

新たに決意と団結力が固まり、モリビトたちは大いに盛り上がった。

普通のモリビトたちとは別に、この報告は巫女であるモリビトのあらぬ決意を揺らがせた。

まさか。千年経っても相も変わらず、地上のやつばらは変わってないようだな。

どうする？ 教えるか？ 駄目だ、やはり地上の者たちの二の舞を

踏む可能性が。しかし、勝てる保証も無ければ、負ける可能性もどこにあるというのだ？ このままむざむざと今を生きるモリビトを犠牲にしてまで、私の守ろうとする秘密には価値があるのか？

長い歳月を生き抜いてきた所存か。彼女は悶々と黒雲渦巻く暗い思考に囚われていた。

十一話 第四階層探索開始

オルレスはヴィズルに報告をまとめた。例の出兵問題に関する件だ。

「四階層到達冒険者数百三十名。四階層到達衛兵数九十四名。今後、冒険者はあと三十余名到達すると予想。衛兵は最低ラインの百二十名まで二六名です。内、鉄砲の扱いを心得ている者は四十三名にまで登ります」

「そうか、ご苦労だった。下がってよろしい」

オルレスは扉の前で一礼して執政院総合室、別名“執務室”を出た。

ヴィズルは執政院リーダーの窓から街を眺めていた。長い髪と長く蓄えられた髭には白髪が混じっていた。今年で齢六十を迎える。

前長であるバルドーから執政院の長職を引き継ぎ三十年。三十七ちよほどの時に選ばれた。

その頃のヴィズルはうだつの上がらぬ靴職人で、身辺に色事に関する噂もなく、本人も結婚願望は無かったらしく、そこを齢九七のバルドーに目を付けられて次期執政院リーダー長に選ばれた。

ヴィズルを知る者たちは口を揃えてこう言う。人が変わった。

以来、気弱な靴職人ヴィズルは厳格なエトリアの執政院リーダー長として働き続けた。

オルレスはこの選出方法に前から疑問を感じていたが口には出さなかつた。みょうちきりんな選出方法ではあるが、この方法でエトリアは長を選び続け、一度たりとて独裁者の排出は無かつた。

だが、今回の提案はどうであろう。例のエトリアを次なるターゲットに狙う噂されるエトウの存在がある。対抗するためには少しでも戦力の削減も大事であるが、市民や市民の一人である兵士たちに余計な混乱を招く案。

ヴィズルはただ一言、地下世界で嵐が吹き荒れるような気がしてならないと、理由にならない理由しかいわず。反対意見を容赦なく摘んだ。ヴィズル長は繁栄維持の為としか言わない。しかし、悪戯に兵

力、引いてはエトリア中立独立州の市民でもある兵士たちの犠牲を強いることになんのメリットがあるというのだ。

オルレスは心中で悶々と思考するも、やはり口には出さない。平和であれ、どんな所にも汚い面はある。

この威容を称える世界樹こそエトリアの象徴であり、エトリアの最も根深く暗い一面でもある。

そして、自分のように役所で生き残るため、余計な口を出さないことを覚えた自分もその汚い一面の一つに挙げられるだろう。冒険者窓口室長室の椅子に腰掛けたオルレスは、賢く生きる術を身に付けた自分を嘲笑うかのような冷笑をこっそり浮かべた。

室長室のドアがノックされる。オルレスは感情を殺し、すぐに冒険者窓口室長オルレスの柔和な顔を自然と作り上げた。

「どうぞ、お入りください」

「やあ、失礼。今日もちよいと兵士さん方の案内の件について来たよ」
入ってきたのはオレンジの髪をきつく後頭部で縛り上げた白衣の男、成長株の冒険者一行・グラディウスを率いるメディックのオルドリッチである。

オルドリッチは相も変わらず、実にへらへら飄々とした態度で椅子に腰掛けた。

オルレスは彼に案内予定の兵士四名の名前や報酬案内について書類を渡し、オルドリッチは碌に話もせず室長室を出て行った。無作法。そう言いたいところであるが、冒険者にああいう類の者は多い。オルドリッチは少々行き過ぎているように思えるが、不思議と腹立たしい気持ちにはならず、まあいいかと許せてしまう。

冒険者。市民以上に個性豊かで一物どころか二物三物ある者もいるが、役所仕事では中々お目にかかれない素直な連中も多い。

自由で、厳しく、誰よりも仲間想いの者達。オルレスはそんな彼らを羨ましいと思うも、自らが冒険者になりたいかと問われれば、間違いなくノーと答える。

四月十一日。今日から本格的な四階層探索を行うことにした。

ローテーションの関係もあるが、先週はほぼ出っ張なしだったコルトンに変わってジャンベが交代した。武装を整えた一行はトルヌウアー内壁の門を潜り、見知った顔の五人が樹海時軸を通ったのを見届けてから四階層に降りた。

四階層はいつもどおり枯れた有様が広がっていた。右も左もわからないが、一行は左に進んで適当な枝に白い布っぱしを括りつけた。新階層の探索は慎重に慎重を重ねて行われるが今回は事情が異なる。何故、多くの冒険者たちが四階層の探索を躊躇い続けたか、彼らの前で蠢くものに理由があった。

一行の前にはさらさらとした砂が川の流れのように流れていた。流砂のごとく吸い込まれているようにも見えるが、そうではなく、この砂の川は本当に何処へと流れているのだ。

底で水や泥が混じって流れているのかと思ひ、槍や長い木の棒で底を突いてみても、先端に砂が僅かにまとわりついただけで水は流れていないことが判明した。

エドワードは足跡を確かめた。何人もの人間の足跡が右を向いていた。先の一行は右の道を選んだようだ。一行は左の道を選んだ。少しでも荒らされてないほうに新発見の可能性があるかもしれない。その分、危険も増すが。

樹海時軸と同じくらい常識を超えたこの流れる砂の川の存在に多くの冒険者たちは大変気味悪がり、一週間以上経ても様子見程度の探索に留めた。煮え切らぬ冒険者たちを先導するように、ゲンエモン率いる一行が新生物発見報告並びに空白の箇所を幾つか地図に記した。ゲンエモンの現状打破の為に取った行動はいたく同業者たちを刺激し、ホープマンズよりも一足早く、既に二組のパーティが朝日も昇らやめうちに出立していた。

ホープマンズの一行が通った次には、オールドリッチ、カールロ、そして足軽具足を身に付けた黒髪の三白眼の男、彼がゲンエモンの弟子の一人で名はコウシチ（耕志知）。

彼らの背後には盾を持つ兵士二名、黒く細い筒を持つ兵士が一人いた。細く黒い筒は例の改良式火縄銃で、彼は火縄銃の扱いを心得てい

た。

グラディウスは今日で二度目となる案内依頼を引き受けた。だが、オールドリッチは実の所、好奇心から新兵器の威力を拝んでみたいというのが本音だった。

迷宮の探索においてどれほど役に立つか。つまり実用性があるかはともかく、時折遠くから響く幾重もの轟音。外れたとしても、一発撃てば音だけで大抵の樹海生物は泡食って逃げ出すかもしれない。

ゲンエモンから聞かされていた以上に砂の流れは思った以上に強く、足腰が強健なエドワードとロディムでさえ一步を踏み出すのに大変な労力を強いられた。普通に歩くだけで体力が著しく消耗する。

いざ敵が来たとして、こう足が取られてはおちおち満足に獲物を振り回すこともできず、味方に刃先が当たる恐れがある。一行は視界が開けたこのこの流れる砂から一旦身を引き、危険を承知で林の方を選んだ。

流れる砂よりみしたが、樹や植物が絡み合うように群生していた。エドワードとロディムは三日月刀と斧で道を開き、アクリヴィとマルシア、ジャンベはナイフで余計な物をナイフで軽く切り払った。

「ここは獣道ではないな。通った痕跡もなく、何よりこう植物が群生してはよほどのデカ物か小物でない限り、ここを通ることは無いだろう」

エドワードが三日月刀を振るいながら言う。ロディムも斧で作業の手を止めずに話した。

「じゃあ、俺らが切り開いたせいで怪物共も通りやすくなっちゃったな」

「そうだが、遅かれ早かれ結局は誰かがこうしていただろう。危険でも道を開かないことには進めん。たまたま、俺たちがやる機会が訪れただけだ」

ゲンエモンが地図を埋めたとと言っても、全体の一パーセント程度ぐらいである。

四階層一六階の地図はまだまだ完成には程遠い。一行は十メートル

ル道を切り開く度に手を止め、エドワードとマルシアとアクリヴィ、この三人で厚い羊皮紙に地図を道や注意点などを書き記した。ロデームとジャンベは地図を描かない。ジャンベ、特にロデームの絵心や文字はお世辞にも綺麗とは言い難い。ジャンベは上手くなってきているが、ロデームはミミズが少しはのたうつのを控えた程度だろうか。

エドワードの推察どおり、一匹足りとも怪物は出現しなかった。五十メートルぐらい進んだ辺りで、ようやく開けた場所に出られた。

道は前後で砂の川に阻まれていた。長年実践方式で鍛えられただけあって、一行はそこまで疲れていなかった。引き続き、探索を続行した。

エドワードは自分から見て左を進むことにした。さきほど、開拓した側とは異なり、根つこもそんなになく、左の方は比較的樹や植物がばらけた感じに伸びていた。その分、獣たちも通ることになり、襲われる可能性も増すが。

程よく保たれた緊張と好奇心と警戒心を持って進んだ。中でも、アクリヴィの目の輝きは違った。

彼女の目は正に、純粋な探究心で輝く学士の目だった。

彼女は下級貴族出身であり、本来ならばこんなところに冒険しにくるような身分ではないはずだが、彼女の親族が彼女の能力を許さなかった。アクリヴィの出身地地域はアルケミストやカースメーカーのような、常人とは異なる能力を有する人間は一般的に認知されておらず。宗教的観念から先述の力を有する人間は悪魔の申し子と見なされ、迫害された。召使いに孕ませた子供という立場がより一層彼女に対する視線を冷たくした。

奥方からは男子が生まれず、病で子供が産めなくなった。

期待をかけた召使いとこの交わりも、女兒が産まれたことでもろくも夢は崩れ去り、父親である人もアクリヴィには温かい目を向けなかった。父親はろくでなしというほどではないが、高潔とは言い難い人物だった。

彼女は幸い、下級であろうと貴族の娘なので表立って悪口を言う者はいなかったが、裏では大層有ること無いことが色々と吹聴された。そういう時、彼女は決して錬金術や両親には頼らず、胸を張り、実に堂々と毅然とした態度で影口を叩く者を本当に叩き、大人には子供らしくない嫌な顔で痛烈な皮肉を叩きつけてやった。

上から相手をねめる顔は子供らしくなく、可愛げがない。幼い頃のこの経験が現在のアクリヴィの口調と顔付きを形成した。

十歳の頃、母親が病を患い死んだ。性病の類ではないのは、せめてもの幸運であった。庇う者がいなくなったアクリヴィは偶然、高名な錬金術師が下町の宿に泊まっていることを聞きつけた。

錬金術師の名はヘルメスという。

実父と親戚、町衆の者たちに殆ど愛着も無かったアクリヴィは、その宿に居るヘルメス錬金術師の下へと飛び込み、弟子にしてくれと懇願した。

薄汚れてくたびれた白いターバンとマントを羽織り、褐色の肌は陽にさらされて黒ずみ、深く刻まれた皺が幾重にも鉤鼻の筋や目尻に沿って通り、どこか知性を感じさせる円らかな黒い両眼には冷たさと温かさも鋭さも感じられず、例えようもなく捉えどころがない老境の男。これがヘルメスだった。丸卓には、複雑な紋様が縫いこまれた黒い手袋と、金に染められた奇妙な丸っこい籠手が二つ置かれていた。

アクリヴィの必死の懇願を、ヘルメスは断った。

「余所をあたつとくれ。私は人に教授できるタイプの人間ではないし、わざわざこんな流れ者を頼るのはちと性急な選択じゃて」

「お願いします！ 雑用でも何でもやります！ 私は自分の道は自分で開きたいのです」

「……お嬢さん。母親が亡くなり、嘆き、焦燥する気持ちは理解できる。しかしだ。あんたの家庭の事情はよく分かったが、自分の道を開く方法なら他に幾らでもあるだろ？ 私はあんたよりずっと不幸な者たちを見てきた。這い上がれない者もいれば、地獄から奇跡的に這い上がる者たちも多かったです。それに、あんたは強い」

「何が言いたいのか？」

「言葉通りだよ。あんたは賢く強い。だから、自分の境遇を利用して親類一同を手駒にするなり、あるいは、素直に自分を受け入れてくれと説得することに努めるのだ。わしとしては後者の方をお勧めしたいがの」

あなたは父と姉二人、親戚の奴らを知らないからそう言えるのよ。そう叫びたくなる自分を抑えた。アクリヴィは全てを話したわけではなかった。母親が死に、能力を有する故に親を含む親戚の態度が冷たいというぐらいにしか話さなかった。

アクリヴィは床からすつくと立ち上がり、スカート汚れを払った。

「明日までお待ちください」

ヘルメスはそうかと、素つ気なく答えた。去り際、「あんたの現在（いま）と明日への道が切り開けることを願うよ」と一声かけた。

アクリヴィは心の奥底では父と姉への愛情を完全に捨ててなかった。

もしも、私が行くと言ったら、すぐにではないが、いざ行く段階となったら行くなど止めたり、悲しい顔の一つでも見せるのではないかという期待が大きかった。が、少女の胸中に秘めた想いは脆くも崩れ去った。父に錬金術師弟子入りの件を告げると、やっと自分の将来を見つけたかと父は喜んだ。

乳の喜びは、将来を語る子供を温かく見守る親の目ではなく、体よく邪魔者を厄介払いできる喜び。敏感なアクリヴィはそう気付いた。近い内、身分も高ければ、お金もある貴族様との婚約の予定が姉にはあった。そこに、悪魔の力を持つ妹がいるのは良くないわけか。成る程、とても賢い選択ね。反吐が出るぐらい。

金の切れ目は縁の切れ目というが、この場合は逆で、金の贈りは縁の切れ目。ようは手切れ金というわけだ。すぐさまヘルメスの居る宿に使者が送られ、旅費も持たすから是非とも娘を連れて行って欲しいとの旨を伝えた。返事はすぐに返ってきた。ヘルメスは了承したらしい。

あの男も所詮、金目当てか。アクリヴィはそう思った。

父が旅費を渡すのは体面を保つでもあり、娘を心から心配してのことではないだろう。しかし、父は決して自分を慰めものにはしなかった。今思えば、旅費などを出すあたり、父にも少しは罪悪感があったのだろうが、もうどうでもよいことだ。

急ピツチで旅支度が済まされた後日。

アクリヴィは馬に揺られて使者をお供に連れて宿へ行つた。父と姉は来なかった。館の前で客人に対する儀礼的な挨拶で別れは済まされた。

現実は何んと残酷であろう。アクリヴィにはお涙頂戴の小説のような展開は訪れず、日が経てば本人以外は忘れてしまうような、取るに足らぬ日常の茶飯事の内に終わってしまった。

使者とも別れ、町から物見高い連中がいなくなった頃を見計らい、アクリヴィは自分を受け入れた理由をヘルメスに問い質した。

すると、ヘルメスは怒りに満ちた目でアクリヴィを見下ろした。その怒気の凄まじさに、アクリヴィは言葉を失った。すぐに、ヘルメスはアクリヴィを安心させるように柔和な目を見せた。

「やれやれ。あんたの父親も随分としたたかな奴だな。娘を連れて行かなければ、付近に私の手配書を貼るなり、通行を禁ずると脅してきおった。むしろ、アルケミストを嫌う地域はあるが、ここまで閉鎖的な所も珍しいかもな。……こうなった以上、私はあんたを連れて行く。何より、私には権力を覆せるほど力はなく、もう旅費も受け取ってしまったしな。そして、昨日は深く理解せずに安い言葉を言ってしまった非を詫びよう」

「いいよ。私も昨日は礼も何もあつたもんじやないし、ずかずかとヘルメスさんのところに乗り込んだじゃったし」

アクリヴィは子供らしい満面な無垢な笑みを浮かべた。普通、大抵の大人ならここは絶対に誤魔化すはずなのに、ヘルメスは綺麗事や言い訳は一切抜かさず正直に話した。

ヘルメスは改めてアクリヴィと向き直った。子供を見る目から、アクリヴィを大人として扱うものだった。

「アクリヴィよ。わしが教えられることはそうない。錬金術のイロハ

や拙い知識なら教えられるが、基本はお主自らが考えるのじや。また、わしの旅は根無し草であり、一箇所に永らく移住することはない」「どうして？　一箇所に留まったほうが研究に没頭できるんじゃないの」

ヘルメスは町にいる時とは打って変わって、饒舌に語り出した。

「そうだな。普通の学士ならそうであろう。だがな、わしら錬金術師は人間の魂と肉体をより完全な存在への昇華を試みる学問である。また、これは全ての研究に繋がるかもしれないが、全ての物事の循環や理を知る為に錬金術師はおる。アルケミストと呼ばれる者たちが自然界の要素を司れるのも謎の一つだ。それらを知る為には狭い研究室で籠もって没頭するよりも、旅に出て、じかにこの目で世界に於けるあらゆる事象や文化を見るからこそ研究になる。いわば、わしにとっては旅こそ研究みたいなものだよ」

ヘルメスは言葉を切り、もう一度、アクリヴィと向き合った。

「アクリヴィよ。今語ったことはあくまで私のしてきたことであり、お主にこの道を進んで貰いたいと思つとるわけでもない。最初に述べたとおり、わしが教えられるのは錬金術のイロハと生きる為の知恵。お主が望めば、わしが今まで体験してきたことを語る。それくらいだ。そこから、どう生きるかはお主に任せる。ああ、それと。最後にもう一つ。お主を弟子として受け入れたのは……人を受け入れ、育てる。そういう経験はどんなものかなという好奇心も理由だ」

アクリヴィは何も言わず、無言でうんと頷き続けた。

嘆き、興奮、恐怖、絶望、感動、希望。ありとあらゆる想いを抱えてアクリヴィの第二の人生はスタートした。

九年間。二人は荒野を彷徨い、野山を越え、平原を渡った。様々な世界を歩き渡り、多くの言語、人種、文化に触れた。そして、世界はいかに広大で、いかに自分がちっぽけな存在かが身に染みだ。それでも、上手くは語れないが、自分がこの世界で生きていけることを喜んだ。辛いと思い、何度も帰りたいと思ったり、人間の善と許されざる悪も見えてきた。止めとけば良かったと思つたことも少なからずあったが、アクリヴィは絶対に弱音を吐かず、前進を続けた。

ヘルメスは貞潔な人物で、旅の最中、一度としてアクリヴィイや余所の女に手を出す行為はしなかった。

その度の最中、アクリヴィイはエトリアのことと世界樹の話を幾度も耳にした。エトリアでは肌の色、人種、宗教、アルケミストやカーズメーカーだろうと関係なく受け入れられ、日夜、冒険者たちが地下世界に身を投じていると聞く。

ヘルメスは一度、世界樹があるエトリア本都市を訪れたことがあると言った。

「驚いたよ。あの天をも磨さん大樹に私は度胆を抜かれた。あそこなら、全てとまではいかなくとも、多くの謎やこの世界を築いた理が眠っていると思えた。結局、噂の地下世界には潜らなかつたがね」

「どうしてなの？」

「アクリヴィイ、お前さんは本当に知りたがりだな。生物は好奇心により進化するが、それには大きな犠牲を伴うことも忘れるな」

アクリヴィイが何故、どうしてと尋ねると、答える前にヘルメスはいつもこのような言葉を置く。

「まず、そこには地上の生物とは異なる異形の生物がひしめき、地上では中々人前では姿を見せない怪物たちも潜んでいる。つまり、わしがあそこにある謎を解くには、殺生を強いられることになるのだ。アルケミストは学士であつて、戦士ではない。私は無益な殺生を好まん」

アクリヴィイは人生の師であるヘルメスの顔をじつと窺った。近くにいれば気付くにくいだが、一步離れた感じで見れば、ヘルメスが非常に年老いたことに気が付かされる。

十年の歳月は幼いアクリヴィイを逞しくしたが、反対に、老いたヘルメスは残酷な時の流れに襲われた。

この人を置いて、冒険者になりたいとは切り出せない。

十年の歳月はアクリヴィイのヘルメスへの想いを単に、師に対する敬愛以上の念を抱かせた。例えれば、祖父や父へ抱く想いに近かった。

一年後、アクリヴィイ二十の歳。エトリア州の領域に入った。遠い山と森を超えた先からでも僅かに見える、雲の隙間から見え隠れする緑色。一步一步近づくとつれて緑の色は形を成し、いつしか、はつきり

と噂の大樹の木の葉だと知った。

エトリア本都市まで残り一日。部屋に入り、聞き耳を立てる者がいないのを確認したら、師は静かに口を開いた。

「アクリヴィよ、本音を明かしたらどうだ。お主は冒険者になりたいのであろう」

アクリヴィは答えない。ヘルメスは話を続けた。

「大分前にわしが言ったことを気にしておるのか？　だとすれば、そりやせつかちじゃ。この命、残り十年かもしれんし、二十年先かもしれぬし、もしかたら明日かもしれん。ただな、わしはお前さんの若い人生の時間をこの老体を労わることに注ぐのはだけは止めてくれ。これはお前さんの為でもあり、わしからの頼みでもある。わしは自らが冒険者になるのは厭うが、お主が冒険者になるのは反対せん。それは、アクリヴィその人が決めた道。わしがとやかく言う筋合いは無い」

師は何でもお見通しのようなだ。

アクリヴィが旅立って間もない頃、ベッドで寝れないことを不満に思ったら、「その程度の覚悟なら引き返せ。わしはここらの境界線超えて、そこでお前さんを返せば、あんたの父親がしでかしてくれた余計なこと避けられるしな」と冷たく言い放った。

この人の前では隠せない。彼女は心中を吐露した。アルケミストである自身の実力を確かめたい思い。師が行くのを避けた世界樹の迷宮への挑戦。師・ヘルメスへの敬愛の念などを伝えた。

アクリヴィは全てを言い切った。二人の間に沈黙が降りる。その日、二人は特に会話を交えず、就寝した。

翌日。夕刻にはエトリア本都市が目前にまで迫った。夕日で照らされた威容なる大木・世界樹は赤々と照り映え、見る者の気持ちに神々しい印象を与えた。アクリヴィは感動の面持ちで大樹を見上げ、師もまた、感慨深い目で見上げていた。

そうして眺めていたら、蹄の音が耳に届いた。方向は東、見ると、猛々しき黒き悍馬草原を駆け巡っていた。

悍馬の背には御者がいて、黒馬に負けず劣らず壮健な若者が巧みな

綱捌きで馬を思うがままに司る。

馬の黒い鬣に混じり、若者の金髪も風になびく。その髪の美しさといったら、不毛の黒い大地から生え伸びた麦穂かと思われた。青年と馬には一切の束縛や気負いが感じられず、ただ、子供のように自由に楽しく駆けつっこをしている感じだ。

二人の存在を認めたのか。馬首を転じ、青年は二人に近づいた。青年は馬上から二人に話しかけた。鷹のような目付きの青い瞳の青年だ。

「馬上の上から失礼。こんな時間帯に來客は珍し……おや？ その籠手は？」

青年は籠手を見つめた。錬金術師専用の籠手だ。一般人には珍しいであろう。説明しようかと口を開きかけたら、彼が先に答えた。

「あんたらはアルケミストだな。ということは、冒険者になるためエトリアへ？」

「いや、わしらはまずこの街で泊まり、それから進路を決めるつもりだ。冒険者は気が向いたらなるよ」

アクリヴィの代わりに、ヘルメスが答えた。馬上から見下ろして話しかけられているのに、不愉快には感じなかった。多分、本人の内から漂う気風が不快さを打ち消しているのだろう。

「そうか。では、どちらでもいいから冒険者になりたいと気が向いたら、冒険者ギルドのガンリユーというおっさんか。もしくはこの俺、エドワード・ウォルの下に来てほしい。俺ともう一人の仲間は『猫の木天蓼亭』という宿に居る。それでは、またの縁があることを願う」
またたび

馬上の青年は橋を渡り、外壁を通った。エドワード・ウォル。名前しか分からぬが、大胆で、逞しく、意志の強い目を持つ青年だった。彼は間違いなく戦士と呼べる人間だった。

少し遅れて、二人もエトリア本都市に入った。二人が通ると、橋が上がり、門は閉じられた。長鳴鶏の館という宿を宿泊先に決めた。部屋に入り、ヘルメスは聞き耳を立てる者がいないか確認すると、すつくと身を起こした。アクリヴィもつられて立った。ヘルメスは、静かにこう告げた。

「アクリヴィ・トレネ・マグヌソン。たつたいまより、お主の弟子としての立場を無きものとする」

アクリヴィは目を見開いた「そ…それは…破門ということでしょうか」

「話を最後まで聞くのだ。お主はこれより、ヘルメスの門下生ではない。お主は今から、アルケミストのアクリヴィとして生きるがよい」
アクリヴィはしばし、黙考したのち、師と目を合わせた。

「つまり私を一人前に認めると…一人で生きていけど。そう解釈してよろしいのですか？」

「一人でここやここ以外の土地で生きてければ、そうするがよい。全てはお主が決めること」

師は道こそ示すが、決して安易な答えは示さない。いつも、最後の判断は自分で決めなければならない。アクリヴィは時間がほしいと言い、師は黙って小さく首を動かした。

朝方、アクリヴィはこつそりとベッドを抜け出し、冒険者ギルドにて仮登録を済ませた。用を済まし、宿に引き返すと、ベッドはもぬけの殻だった。

従業員に聞くと、ついさつきには一人分の食事代込みの宿賃を支払って出て行ったようだ。アクリヴィは血相を変えて、南の門に向かった。

開け放たれた門の向こうに、薄汚れた白いマントとターバンを羽織る小さな背中があった。

アクリヴィは師に追いついた。朝日でくつきりと顔に陰影を作るヘルメスの顔は、この世ならざる人の顔に見えた。だが、そこには包み込む優しさも感じられた。アクリヴィはそのままヘルメスに抱き着いた。ヘルメスは祖父が孫娘を抱擁するようにアクリヴィを抱きしめ、耳元でそつと呟いた。

「お前を育てることは人生で一番苦勞した。そして、一番かけがえない経験であった。さらばだ、アクリヴィ。お主の前途がいつまでも開かれていることを祈る。恙無行かれよ」

実の親や身内から聞きたかった言葉を聞いて、アクリヴィの瞳から

涙が毀れた。こぼ

「私もあなたの行く道を祈ります」わたくし

別れ際、アクリヴィは無駄だと知りつつ、ここで余生を過ごさないかと提案したが、ヘルメスは笑顔で断った。師もまた譲れぬ一線がある。彼の歩みが止まるのは、彼の命が尽き果てる日だろう。

アクリヴィは一カ月に及ぶ試験や関門をパスし、晴れて冒険者となった。

その間、何かと世話を焼いてくれて、初めにアクリヴィを誘ったエドワードの下へ訪れ、「ホープマンズ」と命名される前、クイーンアントを討ち取り名声を轟かす前の、まだ未熟なパーティに加入した。

アクリヴィは開けっ広げな二人をいたく気に入り、二人もまたアクリヴィの気品ある素行。それでいて、貴族らしからぬ勝気な態度と博識な一面を気に入った。マルシア、ロディムが入るまでは、三人で力を合わせて二階層六階にまで到達したのも良い思い出の一つ。

我ながら、よくぞここまで成長したパーティに成れたものだ。

今日は運が良くも、残念な結果に終わった。地図の空白箇所はそこそこ埋められて、怪物の出現は一回もなかったが、既に発見済みの鉱石が四個見つかったのみで、新発見や大量採集も無かった。

落胆はしなかった。長い冒険者家業で、こういう日は月に何度もある。

「もう、こんなちよつとのお金ならパーっと使いましょー！」

マルシアの案にロディムは喜んで賛成した。他三人はそんなロディムを見て呆れつつ、今日のみみっちい収入を全て使い切ることにした。

金鹿の酒場にて一同は集い、先に代金分の料理や蜂蜜水を頼んだ。

蜂蜜とはもちろん、軍団バチかれ採れた物である。一時間後には他のパーティとも卓を交え、盛り上がった。アクリヴィは一人、卓から離れ、カウンターで物思いに耽った。

一人、騒ぎから離れて腰掛けるアクリヴィの背に声をかける者がいた。ゲンエモンだった。ゲンエモンから仄かに酒気が漂う。ゲンエ

モンは師ではないが、新米の冒険者時代の自分を色々と助けてくれた、アクリヴィの頭が上がらない人物の一人。もう一人は、この金鹿の酒場の女将だ。その女将は空気を読んで、二人をそつとしておいた。

「ヘルメス殿のことを考えておるのか」

アクリヴィは口元を緩めた。ヘルメスと同じく、ゲンエモンも人の考えることをよく読む。裏を返せば、人の機微を読むのに長けた人なのだろう。ゲンエモンは一度、といっても、ヘルメスがアクリヴィを伴ってくる前の時に、ヘルメスと話したことがあるらしい。

ゲンエモンはアクリヴィの隣に座した。

「あのお方の言葉は今もよう覚えておるよ。どんな秘密や謎も、いつかは明るみに出さなければならぬ。世界樹にも同じことが言えるとな。わしは、その秘密や謎を知っておられるのですかと聞いてみたが、ヘルメス殿は快活な口調で知らぬと返答した。素晴らしく良識に溢れたお方だった。また、ゆうもあらすもある方だった」

ゲンエモンの「ユーモラス」の言い方があまりにもたどたどしくて、アクリヴィはぷつと、吹いてしまった。ゲンエモンも微笑んだ。

「はっはっは！　ようやく笑ったか。気休めかもしれんが、ヘルメス殿は意志も肉体も強いお方。そうそう、野晒しになることはあるまい」

「ええ、わかっています。曲りなりにも十年付き添った仲でしたからね」

「その言い方だと、夫婦のようだな。おっと、失礼。酒が入っているためか、いつもよりつい口が軽くなってしまふ。気を付けなければ、とんでもないことを滑らせてしまいそうだ」

そういう割りには、ゲンエモンの目は据わってなかった。

アクリヴィは気にしていませんと言った。すると、ゲンエモンは急に語り始めた。やはり、酒がかなり入っているのだろうか。

「ふむ。アクリヴィ、全てを明かせるわけではなからうが、自力でできることは自力でやり、頼れるときに頼るのは悪いことではないぞ。人は孤独だと思ふのも悟りなら、人は一人で生きていけないと思ふのも

また悟り。お前さんには少なからず、腹の内を明かせる者がいる。氣負いすぎることはないぞ」

「ええ、わかつています」

アクリヴィも笑顔で返した。氣負ってはいない。そう、何と云えばいいのか。ふと、昔を思い出し、ヘルメスのことを想った。それだけのこと。

エドワードは自らと自らを育んだ一族の名を残し、生き残りを集めて繁栄するのが目的だと豪語していた。

アクリヴィは世界樹の奥底に眠るやもしれぬ世界の理を見るのが目的であり、大人になった自分が持つ夢のひとつである。名声は欲してない。しかし、自分の名が世に知れるということは、ヘルメスにも伝わるかもしれない。

世界樹で名声を轟かすことこそ、アクリヴィにとって唯一、世界を放浪する師ヘルメスへ送れるメッセージであった。マルシアがもう食べないのと呼ぶかける。アクリヴィはカウンター席を立ち、卓に戻り、注がれた蜂蜜水を一飲みし、ご機嫌な酔客がもつと飲めえと手を叩いてはしゃいだ。

十二話 軍事演習

「いつごろだろうか。我々がこの世界を『土地』と表現するようになったのは」

卓に置いた木の板に墨で文字を書く紫の法衣を着た若いモリビトの女。彼女は四歳の時に神官に才覚ありと認められ、以来、神官のもので日々厳しい修行の毎日を送っている。

「おつしやる意味がわかりません。我らの住まう世界を『土地』と言いつたことに問題がありませんか？」

「おおありだ。我らの生活を乱し、地上の者と戦う原因を生み出した、我らを墮落せしめたあれと比べたらましかもしれないが、わしは地上の者たちの世界を『土地』と表現するのを好かぬ。この世界は誰彼の土地ではなく、我らモリビトを含む全ての者達の為にある世界だ。……とはいえ、どんなに厳しく言い渡して律しても、一度根付き、広まったものを完全に省くのは難しいな。かくいう私も、この前の演説のように、興奮すればつい使ってしまうから気を付けねばならぬな」

神官は普段、「私」という一人称を使うが、親しい者に限り、こういう密かな日常においての一人称は自らを「わし」という。樹皮を編み合わせた暖簾の向こうで、ウオリアーの一人が跪いた。

「神官殿。準備が整いました。皆、あなた様の号令をお待ちしております」

「うむ、すぐ行こう」

神官が立つと、弟子である彼女は神官の杖、武器、黒い丈夫な皮鎧、見栄えも良く丈夫な頭飾りを運んで来て、彼女は神官がそれらの物を身に着ける手伝いをした。

あの会議の後、細々としたことを取り決めた。

まず、本格的な戦場は十八階の広場からそれ以降の階と決定された。十六階は緊急の時の狩場であり、また、彼らの支配域から外れていて、物資と人員の輸送もままならない。十六階は最初から交戦区画から外されていた。

十七階の半分はモリビトの支配域に入るが、あそこで戦闘を起こせ

ば彼らにとつても危険極まりない存在がいるため、そのことを考慮して、十七階も交戦区画から外された。

かくして、彼ら自身にとつて危険が少なく、尚且つ彼らの支配域が広く及んだ十八階にて本格的な戦闘が行われる。斥候たちの報告によると、地上の者たちの歩みは緩慢で、十八階に到達するまで早くとも一カ月、遅くて四カ月もかかると斥候たちは推定した。二人の若者が惨殺された事件以来、チエチエラとパルツグの二人には失礼だが、モリビトたちの敵愾心が向上したのは喜ばしいことだった。

ただ、二人の若者が出身した村と隣り合う村は良いとして、他の村は時が経てば、血気盛んに燃え立つ心も消えていくことだろう。同胞を疑いたくないが、神官は演習で戦意の維持・向上を図った。

十の林村より歩いて二時間。神官の一行は広場に到着した。

青や紅や青、時折り、白の法衣や角を生やした者や鱗と羽毛で覆われた者も目に付く。今日の演習に集まった者だけでも千人を上回る。明日はまた、別の千人がこの広場に集う。

この広場を完全に埋め尽くすには、ここに居るモリビトの十倍の数があつても足りない。

神官は号令を叫び、木製の大きな角笛の形を取った笛が吹き鳴らされた。

初めは戦士たちによる素手の取っ組み合い。体格的に差がある地上の者に対する格闘術が行われた。

若くてまだ不慣れな者は相手を蹴っ飛ばしたり、振り上げた拳を止められなかつたするが、慣れた者はどんなに勢いをつけても直前で止めることが出来た。即ち、槍の寸止めをきちんと習得していることに繋がる。

神官は一刻内に組分けを行った。重点的に慣れた者同士を取っ組み合いをする組、指導する者とされる者たちの二組に分けた。

「斥候の報告は諸君らも聞いているだろう。少なく見積もつて、開戦まで残り一カ月に迫る。だが、罨を張り、細かに作戦を練れ、戦いに慣れておらぬ者を育成する期間として一カ月もあれば十分だ。さあ、乱取りを続けたまえ」

戦士たちが乱取りを行う中、地の戦士は地の戦士の訓練を行っていた。地の戦士同士の取っ組み合いは激しく、見物であり、ついつい手を止めて見る者にはすぐ叱責が飛んだ。彼ら、黒く二対の角を生やした鬼、鱗と羽毛が生えた悪魔めいた外見のモリビトたちは地の戦士と呼称される。

彼らは普通のモリビトより遥かに優れた身体能力を持ち、大地より力と恩恵を賜われた者の称号として「地の戦士」の呼称が与えられた。鬼の容姿の者は類稀なる怪力を。悪魔の容姿の者は火を噴き、高い跳躍力と瞬発力を誇る。

しかし、地の戦士たちはその強力な能力と引き換えに、涙を流せない。また、彼らには生殖機能が無く、次代の子孫を残すことが叶わない。

幼い頃は他のモリビトと全く同じ容姿をしているが、産まれた頃から頭には小さな二つの瘤、あるいは羽毛が生えている。そして、成長するにつれてどんどん通常のモリビトとは異なる姿が形成されていく。優れているも、呪わしい体でもある。そんな彼らを少しでも慰めるため、彼らは地の戦士という称号が与えられた。

取っ組み合いを始めて四刻、半時ほど休憩を挟んだ。時折り、小休止を挟みつつ、演習は順調に行われた。

槍と槍が打ちあわれた次は、斧が空を切り、剣とナイフで切り結び、棍棒を振るう。何百もの槍が何度も宙を飛び交い、石が投げられ、ブーメランの合唱が鳴らされ、吹き矢が吹かれる。

地の戦士は角と角を重ね、張り手をし、専用の大きな獲物を振り回し、火が盛大に噴かれる。

初日の演習は終了した。次も日も、別の千人がここで演習を行う。毎日行うわけではない。

次の日は別の千人がここに来て、次の日は休み、その次の日で今日の千人がまたここに集う。二日間は演習を続け、三日目は休み。この繰り返しである。

不慣れな者は一部であり、多くの者は既に一定の技量に達している。大事なのはいかに戦意を高揚し、維持するかだった。一日目の滑

りは順調。各林村の長とも相談を重ね、非戦闘員の者らの演習見学も考えた。間近で見ることにより、直接戦うことはなくても影響を与えらるはず。

—————

多くの兵士と冒険者が広沃ヶ原こうよくがはらに集う。アジロナ外壁、外壁外では物見高い民衆や他国からの視察も来ていた。

広沃ヶ原とはエトリア本都市を囲む牧草地帯と耕作地帯の総称である。

単純であるが、エトリアの人や文化を受け入れる風土、エトリアの「冒険者」という意味を思い出せば、このどこにでも当て嵌まりそうな総称はある意味エトリアらしい。

周辺諸国からの招待客を歓迎するファンファーレが吹かれて、華やかな演奏が催される。演者にはジャンベもいた。エトリア市内と外では屋台が立ち並び、物珍しい品には人がこぞって集う。

高価な銀織物の外套を羽織る長身の黒人は、採掘が盛んな国であり、エトリア同様多民族国家であるメティリルク国の将軍閣下ディアドルゴ・パッチュリオ。

派手な毛皮の服を着るのは、エピザ・トーティ国の王子ヘイノオン。隣に付き従う二人の偉丈夫は、大戦士と名高いエキアロモとその息子のエキモロノ。国王から国民まで、殆どが白人であり、大半が金髪や赤髪、黒髪と茶髪の者は一部と民族的に統一された国。王子と付き添いの者は全員、豊かな金髪だが、エキアロモとエキモロノの肌は日に焼けて髪の毛は麦茶の色をしている。

白い純白の肌と絹のドレス、煌めく黒髪の清楚な美女がテントの上級席に腰掛けている。その美女が年老いたような女と、その女と同年ぐらいで金細工の冠を被った髭を蓄え長い茶髪を編んだ男性は、小国アライランスの王イツフエ。二人の女は彼の娘と妻である。

平原は兵士たちで埋め尽くされていた。明らかにエトリアの兵士たちとは異なる風体の兵士たちも混じっていた。一昔前まで、エトリアにとって年二回の大々的な軍事演習は一種のお祭り騒ぎ。日常に退屈した市民の刺激であり、兵士には実践に備えた訓練も兼ねられて

いたが、エトウ王賊連合の出現から事情が変わった。

今の所、エトリアの周囲三ヶ国のアライランス・エピザ・メテイルクに実害はない。だが、一ヶ月前、エトリアと交流がある小国の村々が千騎の賊に村が襲われて壊滅する惨事が起きた。

近隣諸国で起きたこの惨事に近い国の民は怯え、各国の政府首脳陣は被害に遭った小国を同情し、自分たちの国も襲われやしないかと不安を募らせた。

単体で見れば、かの賊連合はどの国よりも兵力を保有していた。

これら、小国中国はエトリアを中心として連携を図っている。万が一にもエトリアが倒れるような事態が発生すれば、各地で戦の火種が広がり、大国に付け入る隙を与えてしまうことにほかならない。また、かの大国が賊共のいわば後ろ盾になっているのではないかという可能性も示唆された。海賊を使い、あるいは協力し、他国の商船を襲わせるというのは密かな侵略や戦の常套手段の一つ。無論、盗賊もだ。もつとも、当の国は知らぬ存ぜぬの主張を貫き通していた。

現状では各国は自分の国を守備するのが手一杯。エピザ・トーティ、メテイルクのような、中規模ながら万近くの兵力を有するような国は精々二ヶ国程度。

他は、千あるか無いかである。これらの力が無い国々は、自由平和連合と銘打って、エトリアを主軸として昨今の厳しい戦火の状況を生き延びてきた。因みに、エピザ・トーティとアライランスの二国は王政で、メテイルクは議会と民の投票で首脳が決められる。

エトリアは警戒を強め、このような大規模な演習を年二回から四回に増加。更に、隣国との連携強化を図り、こうして年二回に渡り、他国や周辺地域を招いた合同軍事演習を行っていた。

兵力はメテイルク。個々の兵士の精度と団結力、戦に対する意欲はエピザ・トーティ。エトリアが誇れるのは兵器力と武器製造ライン。物資の輸送、すなわち兵站である。

小国アライランスはどれにも当て嵌らないが、エトリアと隣接する国の中では最も近い。

税関をかけない代わりに、アライランスは通常より安い値段で作物

やエトリア生産の品を手に入れている。逼迫ひつぱくした状況では互いに協力し合い、持ちつ持たれつの関係を築いてきた。

兵士たちの中にはホープマンズなど、冒険者たちの姿も見受けられた。エトリアの冒険者といえば、基本、樹海探索や街からの依頼で金を稼ぐ何でも屋に近い立ち位置。軍事演習に参加しても、報酬金は得られやしないが、彼らもそれを理解した上でこの演習に参加している。

この演習に参加した冒険者たちの目的は主に三つに分かれていた。一つ目は顔を売ること。多くの人々がこぞって見物に来る演習で人々に顔を覚えてもらい、少しでも名声を得て、あわよくば、国やエトリアのお偉いさんのお眼鏡に適おうとする者。

二つ目は鍛錬。軍事演習を機会に、ベテランの冒険者や他国の兵士から戦闘技術を盗みとろうとする者。他国の武芸者たちと手合せを望む者。

三つ目は、暇つぶしである。

若手のパーティやいまいち成果の上がないパーティは、一つ目の分類に入る。

パスカルたち、ホープマンズと宿を共にする赤髪の女剣士アデラのパーティもこの口である。

二つ目は、コウシチやゲンエモンなどのブシドーたちがこれに分類される。そして、三つ目はホープマンズやグラディウスがこの分類に入るが、エドワードやコルトンの場合は一と二も足した感じになる。

エドワードやカールロ、ゲンエモンと共に冒険者としての道を歩む若禿げ頭の大柄なレンジャー・ラクロワは弓隊。

アデラの一行で働く女黒人パラディンのブルーナ。金髪で、サファリア色の聡明さを感じられる瞳の女はグラディウスのシシヨー。赤髭のモンパツィオ。樺色髪の大男コルトン。彼らパラディンはフアランクスの陣形に組み込まれた。

ロディムやアデラ。ゲンエモンパーティの女ソードマン・ニッツア。グラディウスのダークハンター・ベルナルド。ゲンエモンやコウシチなどのブシドーたちは混成部隊の歩兵として扱われた。

マルシア、オールドリッチらメディックは当然、医療班である。

また、これらの部隊とは別に、アクリヴィやドナ。ゲンエモンパーティのアルケミスト・嫌味屋ブレンダン。グラディウス所属で、淡いバイオレットの瞳、魔女を連想させる黒っぽいローブを身に付けている割には、いやに足の部分が裂けて太腿辺りの露出が目立つ、二つの三つ編みをぶら下げた紫髪の幼い外見をした女カースメーカー・キアラなどは、魔術部隊の一員に組み込まれた。

「……ガキっぽいネーミング……」魔術「はないわ……。安っぽくないで」

小柄なキアラのひそやかな呟きに、隣のアクリヴィは心の中で同調した。

演習が始まる前から汗を流す者もいた。暦は五月。日差しは思いの外強く、鎧を着込む者には辛かった。

ジャンベらバードは雑用兼演奏家の役割が与えられた。

ヴィズルが壇上に登り、賓客に歓迎の意を述べ、兵士たちと見物客にも挨拶を述べた。

エトリア自衛軍総轄隊長ミルティユーゴ。メテイルリクのディアドルゴ。エピザのエキアロモ。アライランス騎士団長モルゴンドは号令を発した。

喇叭が吹かれ、何十もの角笛が高々と吹き鳴らされる。

一糸乱れぬ隊列で歩兵部隊の隊列が組まれる。

元傭兵だけあって、コルトンの兵士姿は中々様になっていた。兵士たちは号令が叫ばれば陣形を組み換え、喇叭と角笛が吹かれれば、槍で壁を作り上げ、一斉に槍を繰り出し、盾で仮想の攻撃を防いだ。

お次は弓隊の演習。鉄砲は開発されて間もなく、現在でも弓は主流の遠隔武器である。ロングボウ、短弓、弩の弦が引き絞られ、何千もの弦から矢が解き放たれ、雲霞の群れの如く、矢は空を覆い尽くした。百発百中というわけにもいかず、藁人形の的から外れる矢も多くあった。

「俺の矢は肩口に当たったぞ」ラクロワは近くのカールロにそう言うと、カールロは平素な声で「俺の矢は頭の天辺に刺さった」と返した。

もう一度、一斉射をやつて、弓隊の全体訓練は終了した。優秀な弓兵の育成には時間を要し、こんな全体演習では育つはずがない。

いわば、弓隊の一斉射はある意味では祝砲に近いものだった。

その後、混成部隊の歩兵による模擬戦が始まった。模擬戦は盛り上がりを見せて、賓客たちと見物客を大いに賑わせた。

ブシドーたちの刀が陽で煌めき、ソードマンの斧と剣士が振り上げられ、ダークハンターの鞭が空気を弾くように鋭く打つ。ロディムとアデラが打ち合う。技量・力は共にロディムが上だが、センスがアデラが上であり、中々に良い接戦をしていたが、最後はロディムの渾身の斧の一撃でアデラは剣をはたき落された。

一方、コウシチとゲンエモンも睨み合っていた。互いに刀の柄に手をかけ、立ち尽くしていた。ベルナルドなど、腕の良い者は邪魔をしないようすぐに離れた。孤自戦流現役と次代跡目の対決に注目が集まる。

「こりや、面白いもんが見られそうだ」ベルナルドは軽く口笛を吹くと、自分に斬りかかってきたダークハンターの木剣をさつといなし、木剣を持つ相手の伸びきった手を蹴っ飛ばした。

真剣の範囲に自分達以外の者が入ってこないのを認識した瞬間、柄からきらりと光が現れた。師と弟子の直接対決。光は互いの首に向かい合う。ぴたりと、首を落とす前に刀が止められる。引き分けに見えたが、先に刀を収めたのはゲンエモンだった。

「参った。三センチ分、わしの刀が遅かった」

「いや、若い頃のあなたなら、拙者の方が三センチ斬られていました。それにしても、まだまだ未熟ですな。三センチも猶予与えるとは。せめて、半分なら、敵に抵抗されることもないでしょうに」

コウシチは冗談とも本気ともつかないことを言うと、三白眼を更に細め、ゲンエモンに微笑んだ。ただでさえ鋭い目が細まり、半目を開いているようだ。親しい者ならともかく、知らない者にはコウシチの笑みは近寄りがたいところがあった。

「師に対して、なんとという口の聞き方だ。調子づいておれ。次はわしが倍の六センチ分、早くお主の首に刀をかけてくれようぞ」

コウシチは言葉には出さず、無言の会釈でこちらこそ負けませんと答えた。

お次はアルケミストたちによる術式の披露。威力を抑えた氷の術式が放たれ、辺り一体を涼しくした。正午を過ぎる頃、今日一番の催しに人々が注目した。またしても、ファンファーレが吹き鳴らされる。

鎧を身にまとう兵士たちが馬に乗り、騎士と化した。騎兵隊の演習だ。騎兵隊には弓を装備した軽装騎兵の部隊もいて、エドワードと愛馬のブケフアラスも混じっていた。

各国の騎兵隊の様子はどれも異なる装いだった。アライランスは馬にも重い防具を着せて、旧い時代の騎士を思い起こさせた。

メテイルリクも近いところにあるが、こちらはまだ、軽装・重装に分けられ、近代的な軍容だった。エトリアも軽装・重装に分けられ、近代的な軍容である。エピザ・トーティは重い鎧に身を包む騎兵は少数派で、軽装でやや古めかしく、アライランスと似たような感じであるが、アライランスよりは頼もしさがあった。

本来なら、ひとつにまとめた方がいいが、その国はその国のやり方がある。エトリアとしては実際の戦闘できちんと連携さえ取れば良いので、騎兵の恰好に文句をつけなかった。戦士の誇りは尊重すべきである。というより、余計な口出しをして、外交関係にひびが入るのを避けたいのが本音であった。

ただ、何度か重ねた近隣諸国合同軍事演習により、二国は自国の軍備が遅れていることに身を以て知らせたことにより、少しずつ変格が起きている。

初期は少々の喧噪もあり、特にメテイルリクとエピザは酷かった。この二国、今でこそ同盟を結んでいるが、遥か昔は敵対していた。エトリアは何としても戦火を避けたく、二国の仲介役として仲立ちを図り、二国に同盟関係を結ばせるまで至った。

各国とエトリアの騎兵隊は息の合った連係をみせた。縦横無尽に平原を駆ける騎兵隊を見て、興奮した観衆から拍手喝采が湧き起こった。槍を構えて突撃をかまし、馬上の鎧武者が弓を弾く。蹄鉄が架空

の敵を容赦なく蹂躪する。ホープマンズと彼らと親しい者たちは、エドワードとブケファラスが一心同体に動き、誰よりも上手く手綱を捌き、どの馬よりも力強く駆け、どんな角度からでも矢を的に当てるのを見て、神話に出てくる半人半馬のケンタウロスを連想した。地下にいるときよきよりも遙かに、エドワードは輝いており、楽しそうである。

騎兵隊の訓練を閉めに、合同軍事演習は終了した。ヴィズル、オルレスは賓客と忙しく別れの握手と挨拶を述べた。

演習が終了した後、人々は屋台や見世物小屋に足を運んだ。様々な人種が歩き、売り言葉と買い言葉が飛び交い、大声で威勢のいい啖呵が切られる。ヴィズルは賓客の見送りに行っていた。

はしやぐ人々、遠ざかる賓客と近隣諸国の兵士たちを尻目に、エトリアの南西にある森の奥へ、密かに人が集められた。森の奥深くに続々と冒険者とエトリアの兵士が集まる。兵士の中には、見慣れぬ筒を抱えた者もいた。

そう、それは、さきほどの軍事演習ではお目にかかれなかった新式の火縄銃。集まった兵士と冒険者は二百名余りもいた。ホープマンズ。グラデイウス。アデラ率いるレッドユニティ。双子と三つ子のトウ&スリー。ドナの一行、モンパツイオ一行。いずれも、四階層探索組と彼らに案内された兵士たちの姿があった。

高い樹の根に登るのは、ゲンエモンと冒険者窓口室長オルレスの二人。話し声がピタリと止む。二人に注目の視線が注がれる。

始めにオルレスが語った。

「我が街の勇士の方々と冒険者の方達にこうして集ってもらい、感謝しております。では、前にも述べたとおり、今日から本格的な第四階層攻略会議を実施致します。一回目二回目と同じく、引き続きゲンエモンに議長長をしてもらい、私めも引き続き進行役に徹します。では、議長長から今日の議題の提示をお願いします」

話を振られたゲンエモンはいつもどおりの前口上を述べるかと思いきや、予想外のことを言ってきた。

「そのとおり。会議をするには人もいるが、議題も必要だ。だがな、才

ルレス殿、もう隠し事はよそうや。こんな会議、目的が明かされなければ無意味に等しい。今まで、オルレス殿の顔を立てて、穩便に話を済ませてきたが、わしにも限度がある。オルレス殿、正直に話してくれ。一体、ヴィズル長は如何な目的を持ってわしら冒険者と街の兵士たちを四階層攻略にあたらせようとするのだ？

エトリアはエトリアの住民、及びわしのような異国から来た者たちを世界樹の迷宮に潜らせることによって成り立ってきた。わしはその事に関して言うことはない。潜るのも勝手に、来るのも勝手に。わしは来たいと思つてここに来て、潜つとる。冒険者は持ち帰った物を金に替え、街はそれを更なる富へと費やす。多少、異なることはあつても、エトリアを含む世界樹がある国と冒険者の関係はそんなものだ。

それなのに、今度のはなんだ。こんなにも人を集め、おまけに兵士まで潜らせる。これじゃあ、まるで戦争ではないか。悪行三昧を犯すどこの馬の骨とも知れぬあほ盗賊共を相手にするのなら人肌脱いでもいいが、意図も明かされぬまま、死地に送られるなどたまつたものではない。

オルレス殿、街と人を思うお主のが気持ちが悪くもものであるならば、せめて、エトリア出身の兵士たちを助けると思つて明かしてくれ。何故、これまでどおりの少数精鋭ではなく、無用に大勢で危険を冒す羽目になるかを」

ゲンエモンはオルレスに反論の余地を与える暇なく一氣にまくしたてた。これまで、ヴィズルの目と口があり、どんなに問い質しても、老獪なヴィズルに上手くはぐらかされてきた。

冒険者たちはオルレスが何やら事情を知っていると睨み、今日、ヴィズルの監視が無いこの演習の日を狙い、ゲンエモンが代表してオルレスに問い質した。当のオルレスは動揺こそしているが、どこか観念しているような、平然とした装いだつた。

「……話したらどうだ。ヴィズル長は、わしらがこうしてあなたに詰め寄ることも予想していたのではないか？　そして、あんたは話すよう命じられたのであろう？」

「ゲンエモンさん、あなたの言うとおりですよ」

オルレスにはあまり驚いた様子は見られない。

「あの方には先を見通す目があります。それも、過去賢人と呼ばれた者達より優れた先見の目をお持ちです」オルレスは眼鏡をくいとかけ直した。

「長は私が追求されることを予め予想し、今日、この日を通じ、私にあなた方のみ事情を話すよう命じられました。これから話すことは他言無用です。もしも情報が漏れた場合、罰則者にはエトリアから半永久的に追放されます。……今から、数えて六十以内にこの会議の場から出ていけば、話を聞かずに済みます。その間、退出の方法は個人に任せます」

オルレスはゆったりと、六十を数えた。キョロキョロと探るように視線を送る者もいた。やがて、七名の衛兵と二組の冒険者たちが無言で退出した。オルレスは六十を数え終えた。周囲を何度か見回し、最後にもう一度、退出の意思が有るか無いかを確認した。

一人もいなかった。ここにいる者は皆、周りの目を気にしたのではない。出ていくのも自らの意思であれば、残るのもまた自らの意思。ここにいる者たちは、自らの意思で残った者だけであった。

オルレスはひとつ、会釈した。そして、オルレスはヴィズルの意図を伝えた。

「私も、恐らくですが、長も全てを知っている訳ではありません。ひとつ言い訳すれば、私も昨日、初めて長から真相を知らされました。これから話すことをよく記憶に留め、絶対に口外しないことをお約束してください。これを」

オルレスは一振りのナイフと羊皮紙を取り出した。

「古臭い方法ですが、血印状というものです。最後の証明として、ここに印を押してください。こんなことで傷付くのが嫌という方はどうぞお帰りください」

「舐めるなよ」

誰よりも早く、オルレスの隣のゲンエモンよりも早く、樹にもたれかけていたエドワードが動いた。エドワードは人と人の間を音もなく潜り、ナイフで親指を小さく切りつけ、血が流れる親指をオルレス

が持つぎらつく羊皮紙に押しつけた。

さつと、布きれを親指に巻き付けた。

「これで満足か？ 残った奴らはどいつも大きな危険が伴うでかい山だと理解し、覚悟を承知で残った者ばかり。その上、こんなことまでさせる必要があるのか」

「二応、規則ですの」

オルレスは役所勤めの特徴的な平坦な声で返した。エドワードはその答えを聞いて、微笑した。

「そう、それがあんたららしいな」

エドワードに触発されたように次々と冒険者たちと兵士たちが殺到し、主に親指を切りつけ、羊皮紙に血印を残した。

二百六十名余りの血印が羊皮紙に刻まれた。それではと、オルレスは血染めのナイフで自らの親指を切りつけ、最後に自分の血印も羊皮紙に押しつけた。

「今、二百六十名余りの勇士の方々が集まり、私は感激しています。それでは、明かしましょう。その前に、現在地上のエトリアでは目下、エトウ王賊連合が最大の脅威ですが、彼らとは別に、かの地下世界にも脅威が存在します。今宵、あなた方を収集した訳はその地下世界の脅威からこのエトリア本都市を守ってもらうことです。これは兵士たちに課せられた義務であり、執政院ラーダから冒険者へと課す任務ミッションでもある」

オルレスは言葉を切り、静かに一人一人の顔を窺った。帰ろうとする者はいない。安堵したオルレスは小さく納得したように頷き、昨日、ヴィズルから知らされた真相と執政院からの任務を伝えた。

「第四階層にはモリビトという人種がいる。死人の如き青白い肌、若葉色の髪の毛、血のような真っ赤な眼。それがモリビトの外見的特徴。モンパツイオ、できれば、あなたからの証言もお願いしたい」

指定された赤髭のモンパツイオはすつくと立ち上がり、一カ月も前に遭遇した人の姿をした二体のことを語った。

「おれはびつくらこいたよ。世界樹で死んだ死人が怪物となって甦つたに違いないと思った。だが、奴らの内一体は俺の一太刀であつさり

くたばり、もう一体は又ナの矢であっけなくくたばってしまった。ああそれと、あの二体だけかもしれないが、背は普通の大人よりずつとちつこかったぞ。十歳から十三歳ぐらいのガキかな？」

又ナとは、隻眼のレンジャーの男だ。又ナはモンパツイオの証言に一言「そうだ」と添えた。

「ありがとう、モンパツイオ。よし、では今度こそ、私が明かす番が来たようだ。モリビトとは、先ほども言った通り、世界樹の迷宮第四階層に住まう人種だ。彼らがいつそこに住み、いつそこに来たのかは知る由もない。だがそんなことはどうでもいい。問題なのは、彼が虎視眈々と地上進出を狙っていることだ。

二百年前、四階層以降の事を記した関連書物紛失により、執政院ラーダも詳しい事情を把握してない。残り少ない資料を確かめたところ、我らが腰を低くし、交渉しようとしたにも関わらず、彼らはその交渉を断り、彼らの方から戦いを仕掛けてきたという記載が残されていた。

他にも、彼らの口に出すのを躊躇う残忍なやり口を記した記載も僅かに残されていた。残された文献と資料を解読した結果、モリビトはとてつもなく残忍極まりなく、その容姿は御伽噺に登場する怪物オークやウルクⅡハイの如く醜悪で、古代より地上のエトリアを制圧せんとしている、と」

オルレスは様子見のため、一息入れた。

皆、語られた内容が遙かに想像を超えていて、ゲンエモンやエドワードやオールドリツチのような者でさえ、言葉を失っていた。反応に満足したようにオルレスは頷き、先を進めた。

おずおずとロデイルムが手を挙げて、オルレスの語りを遮った。

「つもり、なんだ、その。モリビトとやらがまた性懲りもなく動き出してえ……ええと、まあ、あれだ。そいつらをまたとつちめて、ビビらせて地上に来ないようにすりゃいいってことだろ」

「ご理解頂きありがとうございます、ロデイルム君。ロデイルム君風の要約で君らが任務を理解できたら幸いです」

「お前にしてはえらく的を射たな」とコルトン。

コルトンの言ったことを褒め言葉と好意的に解釈し、ロディムは鼻を擦ってへへと笑った。こういう、歳の割りに子供っぽい面がある分可愛らしい。

「モリビトは普段、十八階付近と十八階以降に暮らしているらしい。残された少ない資料の記述が現在でも正しければの話だがな。モンパツイオ君の証言が正しければ、十六階にモリビトが出たということは、彼らの侵略の前触れかもしれない。

諸君、私は何としてもこの街を守りたいと想う。この気持ちに嘘偽りは無い。だから、君たちエトリアの兵士並びに冒険者にモリビトと戦い、エトリアを守ってほしい。もちろん、すぐではないが、それなりの見返りも用意している」

「見返りとはなんだい」

口を挟んだのは、赤いマントを羽織り、黒茶のロングヘア、右手で鞭を退屈そうに弄びながら地面に寝っ転がって話を聞くのはグラデイウスの一員のダークハンター・ベルナルド。ベルナルドの言い分に何人がもつともだと同調した。

「まだ検討中だ。しかし、君の望む物は概ね想像できる。そこは私も長ときちんと相談するから、安心したまえ」

「安心ねえ」

オルレスの返答に、ベルナルドは不遜な笑みを浮かべた。オルドリッチがベルナルドを注意した。といっても、本人の語気からして本気で注意してないことがわかる。相も変わらず飄々としている。

「おい、ベル。あんまり室長さんを困らすなよ。変に目え付けられたら、仕事に差し支える」

「へいへい」

「諸君、私から語るべきことは以上だ」

オルレスは二人を無視して半ば強制的に話を終わらせた。オルレスはゲンエモンに議題を提示するよう求めたが、ゲンエモンはもう要らぬと言う。

「お主の語りで十分だ。最早この場で語るべきことはない。これにて、会議を解散とする！」

会議は終了した。宿に直行する者たちもいれば、祭りの輪に加わるもいた。

ホープマンズもしばし、祭りの輪に加わった。と、エドワードの肩を掴む者がいた。エドワードはゲンエモンだと察した。仲間たちは気を利かせ、エドワードとゲンエモンを二人にした。

二人は着物を売る幕屋の裏側に回った。

「何か御用で？」

「おおありだ。お主はさきの会議をどう思う」

「気になる点があることは間違いない。第一に、何故エトウに関してはあれほど騒いでいるのに対し、モリビトに関しては一切情報を明かさないのでか」

ランタンやカンテラがぶら下がり、人々がごったえす。この大賑わいの中、たかだか二人の男がこっそりと密談していても、誰も注目する者はいなかった。

「お前さんは呑み込み込みが早くて助かる。そう、正にそのとおり。悪戯に不安を与えぬ配慮は解るが、何故、住民には一切地下からの脅威を一言も注意しないのか。そこが疑問だ。といつても、仮想も必要であるが、要らぬ空想は却つて余計な焦りや不安を生むだけ。わしらが四階層に潜り、地下世界に潜むかの者共の脅威からエトリアを守るのは決定事項。今更それに関してはがたがた言わぬ。とはいえ、オルレスはともかく、ヴィズルの動向にはよく注意しておくのだ。わしは、あの男を好かぬ。わしの話はこれだけだ。仲間との憩を邪魔して済まぬ、さあ戻られよ」

「そうそう、わしの言ったことを覚えるのも忘れるのも自由だと言っておこう。では、興を楽しめ」ゲンエモンは片目をつむった。

そうして、ゲンエモンは人の波へ紛れた。エドワードは一人残された。所在無げに首を動かし、ふと、大樹が目に入る。月明かりと祭りの灯で照らされた世界樹は神秘的だった。

この街は良い街ではあるが、その下では数えきれないほどの軀むくろが横たわる。エトリアは人々を世界樹に向かわせ、繁栄した。どんなに良

いところだとしても、掘り下げれば、過去に必ずどす黒い秘密の一つや二つはあるはず。エトリアはそのどす黒い秘密を公然と明かし、人々は自らの得たい者を得るため世界樹に集う。

秘密とすべき事を公然と明かし、人を地下世界に送り込む。どうも、どこかが矛盾しているような気がする。

エドワードはたまに疑問に思うこともあったが、いつもはここまで考えなかった。ただ、今日オルレスの口から明かされたモリビトの存在を知り、疑問に拍車がかけられた。

ここまで長い歳月をかけて明かされないのは変だ。一人や二人ぐらい、最下層に辿り着いても良い筈。明かされない地下世界の謎。隠されるモリビトの存在。ラーダ長の奇妙な選出方法。自らの頭をぱんと叩く。何を迷う。俺はエクウウスの一族を復興し、俺と俺を生み育てた一族の優秀さを世界に知らしめるためにここに来た。

その土地にはその土地ならではの文化と風習がある。第一、好き勝手ここにきた俺に、エトリアのやり方にけちをつける謂れはない。

表からアクリヴィイがエドワードの名前を呼んでいた。

エドワードは幕屋の裏から再び表に回り、アクリヴィイと合流した。

「どうだったの?」というアクリヴィイの問いに、エドワードは「宿で明かそう」と言った。

アクリヴィイはそれ以上の追及をせず。エドワードを仮設の大幕酒場に連れれた。白い大幕内には、ホープマンズのメンバー他、ゲンエモンを除くゲンエモン一行の四人、アデラー一行、グラデイウスの面子が勢揃いしていた。

エドワードは禿げ頭のラクロワにゲンエモンはどこかと聞いた。ラクロワは呂律の回らぬ声で答えた。顔は赤みがかかっていて、もう酒が回ってるのだろう。

「んー? あー、おおよつさんなら、ひちよりで散歩したいいうから、どうつかいっちゃったよー」

エドワードはそうかと言い、アクリヴィイとジャンベの間に座った。あの人も落ち着かないのだろう。アクリヴィイが酒壺を掴み、エドワードのグラスに水割りを注いだ。

エドワードたちが大幕内でお祭り騒ぎに興じている頃、ゲンエモンはある者たちと出会った。一人は背が高く、一人は背が小さい。二人して漆黒のマントと仮面を身に着けている。彩色豊かな仮面は不気味にほくそえんでいた。

「ひさかただな。前おうたときはわしの膝元ぐらいだったのに、年月が過ぎるのは早いな。親父は元気にしておるか？」

背の高い者が答えた。仮面で声がかくぐもり、果たして男なのか女なのか判別し難い。

「年寄りの世間話を聞きにここに来たのではない。野暮用があつて訪れただけだ」

実に素っ気ない。これで良いと思つたのか、二人はゲンエモンに緑に挨拶もせずに通り過ぎた。ゲンエモンもその二人を引き留めなかつた。

迷いのない、年老いてもなお澄んだ黒い瞳でゲンエモンも世界樹を見上げた。その表情はどこか悲しげだった。ゲンエモンは世界樹目がけて拳を高々と突き上げた。

「見ておれよ。必ずやお前の根つこの端から端まで洗いざらい探つてやるぞ」

十三話・急接近

モンパツイオの一件以来、モリビトは警戒したのか。モリビトに関する報告例はもたらされなかった。それに関し、冒険者たちは特に思うところはなく、むしろ、戦争などの厄介事を回避できるかもしれないと安堵していた。

ホープマンズは順調に探索を進め、エドワードは前回と同じ顔触れの衛兵たちを四階層に連れた。これが最後に、総勢二百六十名余りの人間が四階層に降り立った。

この二百六十名の者たちが地下世界の悪しきモリビトと戦うことになる。

モリビトとは別に、近頃四階層で不穏な気配がする。モリビトかと思われたが、モリビトとよりもっと大きく、禍々しい気を発していた。四階層探索組の冒険者たちは目下の所、モリビトよりもその怪物たちの方を警戒しつつ、探索を進めた。

そして、昨日。遂に一組のパーティが一七階への道を発見した。

その頃には一六階の全容図（といっても、実際は十分の一にも満たないが）が出来上がり、冒険者たちの冒険への意気込みは増した。

「赤髭のおっさんらが仕留めたのが実は最後の二匹で、もうモリビトなんていねえんじゃないのか？」

このロデイムのような、楽観視した発言をする者まで出る始末。それでも、ゲンエモンやエドワードなど、一部の冒険者は気を緩めなかった。

地下と地上。それぞれの舞台で水面下に現れない状況が進行しているのではないか。

十七階は十六階ほどでないが、決して楽な道のリではない。

樹に紛れて毒の息を吹きつける、毒々しい色合いの一つ目の樹の怪物。

赤い火噴きネズミの群れ。スノードリフトそっくりの白虎^{びやっし}。一階層三階で頻繁に出現するカマキリの亜種と思しき、神出鬼没の白いカマキリ。ホープマンズが四階層にて初めて遭遇したあの黄金の角鹿。

続々と現れる新種の怪物たちが冒険者たちの命を狙った。

残念なことに、モリビトと戦う前に、既に二二名の者が亡くなった。幸いというべきか、その中にホープマンズのメンバーの者が見知っている顔はなかった。

執政院ラーダはそこで、その間新たに降りてきた五組の内、四組の冒険者たちが戦力に加えられた。あの胡散臭い契約を済ましてからだ。

*
—
*

「神官殿。地上の奴らが一七階に到達しました」

「して、お主とお主の仲間はどうか見る?」

「はつきりとは申せませぬが、この分だと、早くて十四日。遅くとも一ヶ月過ぎには一八階には到達するものと思われませぬ」

「そうか」

神官が退出の旨を告げる前、斥候の者はお待ちを止めた。

「……実は、地上の奴らとは別件でお伝えしたいことがあります。もう少し、お時間をいただけないでしょうか」

「許す、申せ」

「はっ! 地上の奴らと別にお伝えしたいことは、怪物共の事でございます。近頃、地上の者共の活動がいや増すにつれ、あの河から這い上がったおぞましき者たちが一族郎党と手下を引き連れ活発に動いているということです。目撃情報も多々あり、先ほど述べた我ら斥候が曖昧な推測と比べたら、こちらは確かです。今の所、被害はありません」

「……分かった、下がってよろしい。各林村の者たちには、警戒を怠らぬよう伝えておけ……」

斥候の者が退室したあと、神官は一人、黙考した。

長い歴史。いつも必ず、地上の者たちが先に攻撃を仕掛けた。

今は道がわからずとも、いずれ我らの村へと道を見つけ、新兵器を引っ提げて大挙してやってくる恐れがある。

そして、地上の者たちとは異なる脅威。河から這い上がったおぞましい獣たちの子孫。

長らく目立った動きもなく、安心していましたが、よりにもよってこの大事な時期に活動を再開するとは。しかも、一族郎党と手下となる生物たちまで連れて動いていようとは、何たる不運。

おぞましい獣たちは地上の者たちより高い頻度でモリビトに戦いを挑んできた。

ある意味、地上の者より恐ろしいモリビトの天敵だった。

もし、あれらと地上の者と同時に戦うことになったら、さながら、諺で言う所の“吹き矢を背に斧を前にした獣”か（地上で言う。前門の虎、後門の狼に相当）。更に言えば、諺とは違い。吹き矢か斧、どちらが先に来るか判らぬ。

動向の分からない敵の動きを悩んでいても仕方ない。此度の戦いで、我らは地上の者とおぞましき獣の群れ、二つの勢力を打ち破り、永らく平和を手に入れるのだ。

ともかく、獣共にまださしたる動きがない以上、警戒すべきは地上の奴ら。

我らモリビトの魂と力をとくと見よ！ お前らがどんなに逞しい戦士を送り込み、どんなに優れた武器を使おうとも、我らは決して退かぬ。

地下世界のとある納屋。

この納屋はいわばモリビトたちの博物館。納屋には物がひしめいていた。

功績を上げた戦士の名前を刻んだ板、大敗した神官一団の遺品、最高の歌い手と称された戦乙女の髪飾りなど、あらゆる物が置かれていた。その中で、異色な物が数点あった。

多くが円い形で、金もあれば、銀に銅、鉄でできた物もあり、長方形の数字が書かれた薄っぺらい紙もある。これら物が置かれた小さな卓には落書きのような物が描かれていた。モリビトの文字である。非常に複雑なこの文字は呪詛を意味する。

昔、モリビトと地上にも少なからず交流があった。

その際、地上の人間が持ち込んだこの道具と文化のせいで、モリビ

トは世界と「土地」と呼ぶようになり、モリビトの間で「貧富」の差が生まれるという有り得ない事態にまで発展した。

モリビトたちはこの小さな物を貪欲に欲し、そのために、モリビトの間で諍いが頻発に発生した。以前も諍いはあるにはあったが、大体平和的に解決してきた。この地下世界の環境は非情。一人ではとても生きていけない。それなのに、地上から持ち込まれた小さなこの道具のせいでモリビトの生活や関係にひびが生じ始めた。

時の神官はモリビト同士で諍いを起こす源となったこの道具を即刻回収し、処分したが、後世に伝えるべきとして数点ほど遺した。その後、地上との交流は断絶。以来、度重なる小競り合いの末、モリビトと地上の人間の間には深い溝ができた。

モリビトが最も憎む。地上の忌むべき穢らわしい道具。

——それは、「お金」である。

この納屋でそれら、歴史ある品々を眺める者たちがいた。一人は納屋の管理人、一人は巫女の少女、もう一人は神官である。

二人は連れだつて来たのではなく、たまたま、ばつたりと出会つたに過ぎない。

神官は金貨をつまみ、しばし眺めてから置くと、汚い物でも触つたかのように、服で金貨を掴まんだ指先をこすつた。

不思議な光だ。成る程。これを求めてモリビトたちの間に争いの火種が撒かれたのも理解できる。それ故に、穢らわしい。逆に言えば、我らの文明はそれほどまでに劣ることを証明しているのかもしれない。だが、奴らもこれを求め、常日頃争い、人生をこんな小さな物を集める為だけに生きている。我ら自身に争いをもたらした物を今でも持ち続けているようなら、おかしい話だ。

地上の厄介の種は地上のみで撒けばいいものを、わざわざこのような場所にまで持ち込んでくるとは——つぐつぐ罪深き奴らよ。

地下にまで争いの種を持ち込むとは何のう。神官はこうして、自らの敵愾心が廃れぬよう、暇があればこの納屋へ訪れていた。

今日ここへ訪れたのは、今朝方幾人も占い師に聞かされた予測を聞いて、そのせいで不安になったため。ここへ来たのは、心を落ち

つけようとする所為によるものであった。

占い師が言霊を告げる場所は灯りが差さない洞窟の奥で行われる。占い師のおばばは静かに眼を閉じ、瞑想した。占い師は僧侶たちとは異なる方法で大地の精から力を賜り、頭に直接断片的かつ抽象的なイメージを思い浮かべる。

占い師のおばばは静かに言霊を告げた。暗い洞窟内でもはつきりとおばばの陰影が確かめられる。

深い闇に水が滴り、四方八方から数えきれない槍が降り注ぎ、その多くが折れる。

この占いの意味は子供でも知っている。

すなわち、戦争。深い闇はいつ終わるかも知れぬ焦燥や亡くなった者への嘆きを意味する。闇に滴る水とは血。四方八方から降り注ぐ槍とは戦を意味し、その多くが折れるとは、双方甚大なる被害が出ることに他ならない。ここまでは普通。幾度も繰り返し聞かされてきたであろう言霊。その先が問題だった。

無垢なる魂が繋がりを生み 二つは一つに重なる。

幾多の罅あぎとが森の民に牙を剥き、光明の兆しは行方が知れず。

聞いたことがない言霊。通常なら、光明が右ならモリビト。

左に向かうなら地上側に利があることを示すが、光明の兆しが行方知れずとは？ 二つが一つに重なるとは？ どうも分からないことだらけだ。

「どのような意味でしょうか？ また、幾多の牙とはいかような？」

占い師は首を振った。年長者であり、歴代の占い師でも術が長けた彼女をもつてしても分からないことに、彼女自身は非常に悔しいような歯痒い思いを抱いた。

「罅は分かる。これは、けだもの 獣 共を指す言魂じゃ。あやつらめ、きつと性懲りもなくまたきよるぞい。だが、光明の方はわからぬ。わしの頭に浮かべたことを告げれば、光明はゆらゆらと中央で定まりなく動いておった。占いも、そしてわしがこれから述べることも推測にしか過ぎませぬが、此度の戦の未来。つまり勝利する勢力は不明というわけじゃ。神官様、これは一波乱ありますぞ」

「戦が起こる事自体が既に一波乱ですよ。戦に不測の事態は付き物。我ら、いや、私は迷わず民と戦士を正しき道に導くのみ」

神官はまだ何か言いたげな占い師に礼を述べると、洞窟の奥の隅っこから出てきた。短い時間だというのに、外の光が随分眩しく感じた。神官は一八階の小屋へ戻る途中、妖精モリビトの斥候から急報をもたらされた。妖精モリビトは神官の肩に留まり、耳元でこそこそと話した。

「有り難くないことに、信じられないくらい早いです。このままだと、遅くて四日。早二日以内には一八階に着きましよう」

神官は慌てることなく、ただちに僧たちを集めるよう命じた。

集まった者から使者として三名の大僧正、大僧正一人に付き二人を付け、護衛に戦士三十名の同行も任じた。交渉の間、戦士たちは遠からず、近からずのところで隠れているようにとも命じた。

開戦前、作法に則り、必ず使者を立てる。

もつとも、今まで使者が地上からの和議申立の一報を持ち帰った例はないが。

かといって、地上の者のように、こちらが使者も立てずにいきなり攻撃を仕掛けたら、向こうはこちらを言葉の通じぬ程度の低い野蛮人と見なし、大方、我らを人の姿をした血も涙もない冷徹な怪物と決めつけ、英雄気取りで嬉々としてモリビトを殺しにかかるだろう。

神官だけではないが、大半の者は戦を望んでいない。しかし、最早引き返せない。

恐らく、今回も使者は開戦の報を持ち帰るだろう。ひよつとして思う者もいるが、神官はあまり淡い期待は抱かぬよう説いた。できれば、避けたいが、過去の事例が彼の期待を揺らがせていた。

僧侶と戦士のうちには十二の林村も一人ずついる。

同村の者が二人殺されただけあって、並みならぬ敵意を抱き、申し立ての場に参加させるべきではないが、どうしてもという十二の林村の長とその村民たちのたつての願いに、神官は渋々と承諾した。

ただし、同行する十二の林村と僧侶と戦士は後方に控えさせ、自らを制せよときつく言い渡した。

「よいか。刃を交える事になるまでは、決して愚拳を犯すな。もし、交渉中に行為に及び、そなたらのせいで和議が完全に断たれば、死罪は免れぬぞ」

「御意」

僧侶と戦士は膝を地に付けて頭を下げ、忠誠と承諾の意を示した。神官は使者の一団を祝福した。一団は赤紫のモアの背に乗り、ささやかな見送りのもと、出発した。

地上の者は信用できないが、神官は彼らを信用した。今、私にできることはない。せめて、彼らの内誰一人として欠けることなく無事帰還するのを祈ろう。

ああ、それにしても、この胸騒ぎの正体はなんだ？ 占い師が最後に告げようとした言霊を彼は聞いていた。

森に住まう民の頂きに立つ者、全てを導き、崩れる。

これの意味するところは単純明快。自分は死ぬということだ。それはどうでもよかった。

この命、同胞たちが救えるのなら惜しくない。それよりも、胸の妙なもやもや感が気になる。

そう、まるで、後ろから常に見えない誰かに後押しされている感覚。もつとわかりやすく例えれば、歯の間に肉が挟まり、いくらなにをやってもその肉が取れずに焦燥感を募らせる。そんな感じ。

杞憂だな。多分、占い師が予測した未来の結果の一つに私が死ぬことが予知されたのを聞いて、自分でも気づかぬうちに死への恐怖を抱き、怯えているだけだろう。

全く情けない！ 万物にいずれは訪れる至極当然の摂理に怯えるとはな。

神官は瞑想をするため、緊急時以外、誰にも小屋に入らぬよう言った。

自らを無理に納得させたが、過去の事例に全くない占いの結果と自らが死ぬという予言は少なからず、彼の心に揺さぶりをかけた。

十四話 交渉決裂済み

真夜中。

トルヌウーア内壁の見張りが少ない時間帯に怪しい人影が三つ。背丈からして、親子連れと思しき三人は衛兵の目を盗み、縄で壁を越え、密かに樹海時軸から地下迷宮第四階層へと降りた。四階層の生物たちは、不思議なことに三人を襲わなかった。

約一名。ふらふらと千鳥足で歩く男は隙だらけで、恰好の標的だったが、その男を守るように寄り添う二人にはただならぬ殺気を感じ、特に小さい背の者からは大変不気味な気配が発せられていた。

樹海の生物たちはこの珍妙な三人組を無視するか。危険と判断して見て見ぬふりをした。たまにはやって襲うのもいたが、その牙が届く前に、石像のように動きが硬直した。三人組は襲ってきたのが道を塞いでしまわない限り、止めを刺さずに放置した。

三人組は一糸乱れぬ歩調で一六階を過ぎ、一七階まで無傷で降りた。

不審者だ！ 侵入だ！ 侵略だ！ おっばじまるぞ！ 地上の者らだ！ 武器を取れ！

斥候組の報告で、モリビトたちが騒ぎ出した。一団の指揮を任された齢の大僧正は一声で彼らを鎮め、自らともう一人の大僧正に僧侶四人を連れ、残りの者は付かず離れずの位置、距離にして平均四十メートルぐらい離れて隠れた。

十八階へ通じる道の手前、三人組が接近してきた。使者の六人は、わざとらしく微かに音を立てて姿を表した。三人が身構える。

大僧正が驚かさぬよう、静かに口を開いた。そのモリビトの特徴か。それとも、モリビトの男共通なのか。大僧正の声はやや野太く、滑舌が悪い。

「待て。我らに敵意はない。話し合いをしにきただけだ」

文字で書けば明瞭だが、実際は「あ」や「い」など濁点が付くべきではない箇所に変に濁点が付いたり、「し」が「ち、ぢ」とかになっている。

そのため、声だけ聞けば、あたかもト田舎上がりの田夫野人でんぶやしんが喋っているように聞こえる。モリビトの言葉だと流暢な彼も、地上の言葉となれば、さすがにそう上手く喋れない。

「早速だが、地上の者らよ。お主らが盟約を覚えているならば、既に知っておるだろう？ お主らの誰かが既に我らの同胞を殺めた。本来、この時点で争いが起きてもおかしくないが、懸命なる我らが指導者は私に使者を任じられた。そこもとは使者か？」

「二応、そうだと申し上げておこう。して、何が望みだ？」一番背の高い黒づくめの者が答えた。

「至って単純、平和だ。我らが必要とあらば戦うことは辞さないが、一番は平穩無事に暮らすこと。この望みはそのほうらにも理解できるだろう？」

そなたらの言葉で言えば、我らが居るこの世界を『第四階層枯れ森』と呼んでいるのか。はつきり申す。二度とここに立ち入るな。しかし、それはこの『第四階層』に限った話であり、『第四階層』より上の世界に関しては、出入りはそなたらの自由だ。そのほうらにも事情があるだろうから今すぐこの場で申せとは言わぬが、出来る限り早い返答を望みたい」

「しばし待たれ」

背の高い者はこぢんまりとした黒づくめの者と顔を突き合わせた。モリビトの僧たちは小さい者を警戒した。

彼らは戦士とはまた異なる厳しい修行の末、自然界のエネルギーを实体に変えて攻撃する術を身に付けた。

だからこそ、同じ不思議な力を持つ者がわかり、そのこぢんまりとした者から妖異ならざる気をひしと感じ取っていた。背の高い黒づくめがこちらを向いた。仮面をしているので表情や性別まではわからない。

「待たせたな。まずは、彼のメッセージを受け取ってくれ」

唯一。黒づくめではない男がふらりと前に出た。冑を被っているので、やはり表情は見えないが、どうも歩き方が不自然である。嫌な気配が漂う。

使者役の大僧正の部下が一人、彼の身を案じて前に出て、声を荒らげて言った。

「待て!?! もう少し離れて申せ! そんなに近づくと必要がどこにある?」

男は答えず、ぴたりと足を止めた。と、次の瞬間。男は目にも止まらぬ速さでナイフを抜き、両手でナイフをがっちりと掴んで刺しかかった。声を上げる間もなく、大僧正の前に立つ僧侶は胸を一突きされた。瞬時の出来事に誰もが停止した。

だが、使者役の大僧正はすぐに男を杖で殴りつけた。男と僧侶、二人して倒れた。他の僧たちが男を押さえた。

傍らの大僧正が身を挺して使者を守った僧侶を抱きかかえたが、がつくりと首が項垂れ、紫の衣と大僧正の白い衣は赤緑の血で汚れた。

一拍遅れ、戦士たちも物陰から飛び出し、僧たちの代わりに男を押さえた。

使者の者は杖でどんと地面を突き、怒りに満ちた顔で黒づくめの二人に向かって叫んだ。

「始めに申したことが聞こえなかったのか? 我らは話し合いのため、ここに参じたのだ。今すぐ殺し合いを始めるためではない! これが、そなたらの返答だと申すのか?」

背の高い者がくくと笑った。人を小馬鹿にしたようなその潜めた笑いに、大僧正は激昂のあまり飛びかかりそうになった。大僧正はすんでのところまで自らを律し、今にも飛びかからんばかりの戦士たちを抑えた。彼は男を放すよう命じ、加えてあの二人も見逃すよう言った。

一人のモリビトが、モリビト言語を喋る。戦士は大僧正に掴みかからん剣幕だ。

「なぜです! あ……あの者どもは一度ばかりか、二度も我らの仲間を……!」

「構わぬ。我らが一斉にかかれば、この三人程度などどうともなるが、それではあの暴虐な奴らとなんら変わらない。この男もあの二人

も殺す価値はない。もしも、またこの三人がこのこと顔を出すようなら……」大僧正は男と二人をそれぞれ鋭く一瞥し「その時に殺せ！」と言った。

「地上の者らよ。そなたらの返答とやり口しかと理解した。もう、お前たちとの交渉は叶わぬ。今日、お前たちがしでかしたこの残虐非道なる行為は未代まで語り継ごう。もつとも、お前たちはすぐに忘れてしまうのだろうか……。今は見逃してやる。さあ、私の気が変わらぬうちにとつとへ行け！　そして、のちのち自らの行いを後悔するがいい！」

戦士たちは口惜しそうに、男の体と喉元に突きつけた刃を外し、男を開放した。

背の高い者は形だけ腰を下げ、男を引き取った。

三人が引き返そうとしたとき、一人、他の目を逃れてこつそりと気付かれないよう移動した戦士が、槍を構えて突進した。大僧正が静止する前、目にも止まらぬ速さで背の高い者は鯉口を切り、槍の穂先を切り落とし、返す刀でその戦士の首を薙いだ。鈍い音を立てて首が落ち、遅れて胴体から赤緑の血が勢い良く噴き出した。殺せ！　大僧正が叫ぶ。

戦士たちが一斉に動き出す。しかし、背の低い者が腰から縄が付いた丸包みを取り出し、火を点火して、足元に投げた。

小さな破裂音とともに、煙幕が辺りを覆った。煙が晴れると、当然だが、三人組はとうに姿を消していた。三人の逃走を阻もうとしたしたのか。煙が現れた辺りでは一人の戦士が倒れ、一人はかつと目を見開いたまま、事切れていた。

うおおおおおおおん！　獣のような咆哮。

目の前で仲間を殺され、その仇を討てなかつた者達が怒りと死んだ者の悔しさを思い、慟哭した。大僧正は再び杖を鋭く付き、自らも叫んだ。

「これが！　これが！　我らより文明が進んだ者のやることだということか!?　我らの天敵であるあのおぞましい獣となんら変わりないではないか！　神官殿も、我らも間違っていた。彼らのような人種と対

話を望むのは無理だったのだ。こんな……行為を平然とやる連中などど」

大僧正は足元に転がる赤緑の血で汚れたナイフを蹴飛ばした。ナイフを弧を描いて宙を回り、木に弾かれた。大僧正の行動か。ナイフが弾かれた音のせいか。一団は水を打ったように静かになった。そうして、大僧正は冷静な面持ちで、武装した妖精モリビトに伝令を託した。

妖精モリビトが飛び立つと、大僧正はただちに十八階手前のここに臨戦態勢を敷いた。

「交渉が決裂した場合。万が一に備え、我らにここで奴らを足止めするよう命じられた。交渉に乗ったふりをして騙し討ちをしたり、武器を捨てれば命を助けると言っておきながら、皆殺しにするのは奴らがよく使う手だと聞く。あの三人は囷で、本隊が待機しているかもしれない」

妖精モリビトは烈火の勢いで報せを各林村にもたらした。

報せは、今まで戦いに乗り気ではなかったモリビトの心も戦いに向かわせ、地上の者に対する恐怖と敵愾心はより一層増した。そのモリビトたちとの交渉にあたった三人は地上に帰ると、二人と一人に別れた。そして、交渉相手の一人を刺した男は交渉時に着ていた服を路地裏のごみ置き場に脱ぎ捨てると、がくりと糸が切れた人形のように倒れた。

—————

五月一二日、早朝。人々の目が覚める前、朝靄がかかった時間帯。二十名余りの冒険者と十名ほどの衛兵が内壁の内側に集合した。冒険者の面子は、ホープマンズ、グラディウス、ドナー一行、ゲンエモン一行とそうそうたる顔触れ。

内一人は丸腰で、眼鏡をかけたどこにでもいそうな男だった。彼は雑貨商イアンの店主イアン。

樹海の生態や物に興味を持ち、金鹿の酒場を通じて、度々冒険者に樹海のデータを取るよう依頼して、自らも冒険者に付き添う形で何度か降りた。知識だけなら、並の冒険者より詳しい。

地下世界部隊の中で唯一、あの契約をしていない人物。

今回、オルレスとゲンエモンがヴィズルに直談判し（オルレスを押ししたのはゲンエモン）、ヴィズルは渋々とモリビトと交渉することを許した。

ヴィズルは条件として、部隊以外の人員から選ぶよう言った。そして、樹海に詳しく、肝っ玉が据わり、口が堅くて信頼が置ける人物にイアンが挙げられた。執政院としてはエトリア全土の利益が一番であり、野蛮と決めつけたモリビトに対し強攻策も辞さない構えであるが平和裏に事が運べるなら、その方法を望んだ。

「可能性は低いが、わしはまだ見ぬ彼らが本当に野蛮なだけかそうではないのか知りたいのじゃ。それを知るには、まず話し合いからじゃ。彼らがただの野蛮人なら、問答無用で攻撃してくるだろう」

三十一人は四階層へと降りた。さすがにこれほどの人数なので、怪物の出現回数も増したが、ここで新式火縄銃が活躍した。火縄銃は防衛向きで、このような進軍や攻撃にはどちらかといえば不向きだが、脅しには効果的。大拳して押し寄せれば、五つの筒が豪快に火と煙を吹き上げ、怪物は算を乱して逃げた。

鈴を鳴らし、時には火縄銃を撃ち、一同は進んだ。

数時間後。一人として欠けることなく一八階に通じる道の付近に到達した。

道は広く、木も疎らであるが、道の付近はごちゃごちゃと植物が伸び放題で、奇襲をかけるにはもってこいの場所だった。

ここで、レンジャーであるエドワードや、キアラのようなカーズメーカーたちが、周囲に隠れている者たちがいることを告げた。

「微かだが、獣以外の何かを通った跡がある。もしかしたら、かのモリビトか。はたまた、俺たち冒険者の誰かが通った跡かもしれん」とエドワード。

三つ編みを手で払い、キアラが胡散臭そうに前方の木々を見た。「私は彼のように五感で見分ける力はないけど、感じ取ることではできる。そうね…多分、私たちに向けられている敵意は二十から三十ぐらいね。ついでに、なんか凄いやましい嫌な気配がする」

「敵意とな？ まあ、当然であろう。彼らにとって、わしらは侵入者以外の何者でもないしな。では、出番じゃぞ。イアン殿」

コルトン。シショール。ドナ一行のメンバーで、優男という言葉がよく似合う金髪白皙のパーヴォ。三人のパラデインがイアンの護衛として横に付いた。

三人はそぞろ歩み、道の手前二十メートルで停まった。イアンが一步前に出て、声を上げた。

「そこに居ることは知っています。我々は戦うためではなく、話し合いをしにきた。誰か、あなた方の中から私の言葉を解する者がいれば、どうか返事をしてほしい」

返事もなく。姿も見せない。ただ、イアンを除く者は、明らかに気配を感じていた。しばらくして、相手は姿を見せずに応じた。

「よかろう。我らの返事を聞かせよう」

ざわと後方に控えた一同は騒いだ。

やや聞き取りづらいが、モリビトが人の言葉を解したことに、冒険者に衛兵、当のイアンも驚きを隠せなかった。モリビトは話を続けた。

「我らがそなたらの言葉を解して驚きを隠せぬようだな。白々しい真似は寄せ。そなたらは、我らがそなたらの言葉を解することを知っているのだろうか？」

「どういう意味でしょうか!? 私の言い方が礼を損じていたのならば、詫びます」

「ええい！ いつまでしらばつくれておるのだ！ 一度ならず、二度も我らの同胞を新たに二人も殺した奴らの話に傾ける耳など持たん！」

コルトンはイアンを下がらせようとしたが、イアンはコルトンの手を払い、更に一步前に出た。

「我々が誤解してあなた方の同胞二人を殺したことはお詫びします。虫が良すぎるとは理解できませんが、どうか話を」

間を置いて、物陰のモリビトは問うた。

「そなたの名は何と言う？ ここに来た目的は何だ？」

「雑貨商を経営するイアンと申します。私がここに来た目的は、あなた方を含めた樹海に住まうものを知りたいがため。どうか穏便に。私と私をここに連れてきてくれた彼らに、あなた方も無用の流血は避けたいはずです」

「……確かにそうだ。だがな、イアンよ。これだけは言うておこう。もしも、最初にそなたのような者がくれば、まだ道は開けたかもしれないが、もう遅い。それと、最後に一言。新たに殺された我らの仲間は二人ではなく四人だ！ この嘔吐きめ！」

イアンが口を開こうとしたら、小さな物体がイアンに飛んだ。三人のパラデインは急いで、盾でイアンを覆ったが、手遅れだった。

イアンの喉には棘が突き刺さっていた。せいぜいとイアンは呼吸を荒げる。パーヴォが盾を構えて後ずさり、コルトンとシシヨの二人でイアンが運ばれた。

「救護班！」

マルシアとオルドリッチが至急、イアンの処置にあたった。二人の手が微かに光る。

メイックの一部には魔法のような力を者もいて、軽い傷ならすぐに癒し、解毒もできるが、イアンの喉に刺さった吹き矢はほんの少しであるが動脈を傷つけ、見た目以上に傷は深かった。他の者はモリビトを迎え撃つべく、臨戦態勢に出た。

「信じられぬ。まさか、このようなことが。文献に記されたとおり、彼らはただの野蛮人だったのか」

ゲンエモンがぼやきながら、眼光鋭く前方の道を睨み、槍を手にした。と、モリビトが隠れている方向から、大量の石とブーメランが降ってきた。殆どは盾で弾き返された。今度は衛兵たちが筒を真っ直ぐに構え、エドワードや弓の扱いを心得た者は、ファイアオイルを塗った矢を放った。

倒すことは期待していない。相手の動きを止められればと考えるのこと。

向こうから悲鳴が上がった。当たったのか、それとも、単に鉄砲の音に驚いただけなのかわからない。

ゲンエモンが喉を震わせ、腹の底から絞り出しすように大声でやめいと怒鳴った。その雷の大きさに、近くにいる者は耳を塞いだ。

「やめい!! この万全ではない状態で戦って勝つ見込みは薄い。モリビトよ。ここは一旦、大人しく引き下がろう」

これを聞いて、モリビトの戦士は叩くべきだと意気込んだが、大僧正は彼らを帰すことにした。さつきとは違い、相手は三十人。こちらも三十人程度。援軍もまだ来るあてがない状態で、このまま戦えば、最悪全滅も免れない。向こうも正確にはこちらの数を把握しきれてない。

こちらが積極的に戦う姿勢を見せたことにより、こちらに戦う決意があることと、こちらの方が数に置いて優位だと錯覚させたかもしれない。あちら側は攻め入ろうという気にはならないはず。

それよりも、あの派手な音を立てた筒が気になる。この状態での正面衝突は無謀だと大僧正は判断した。といっても、口頭では決して低姿勢な態度には出なかった。

「戦わぬというのか？ 臆病者め！ なら、帰るがよい！ 我らは臆病なやつばらのけつを追うほど暇ではない」

衛兵たちが懐から変位磁石を取り出した。紫の淡い光が一分間の間立ち上り、彼らを地上へと連れ戻した。

地上の者たちが帰ったあと、戦士たちは指示を仰いだ。

「引き続き、待機。あれとは別の一団がここに来ない可能性は捨てきれん。何か報せが来るまで、もうしばらく待機だ」

衛兵はトルヌウーア内壁に留まった。冒険者たちのうち、ドナ一行とゲンエモン、マルシアとオルドリツチの二人がイアンをケフト施薬院へと運んだ。マルシアとオルドリツチの応急処置の甲斐あり、イアンは一命を取り留めた。それでも、数日は施薬院のベッドで安静するよう言われた。何があったのですかという院長の問いに、答えられる者はいない。

使節団の報告を受けて、ヴィズルを含む執政院エトリア上層部の面々は、凶悪非道なモリビトとの一戦を決断。速やかに、ミルティ

ユーゴ総轄隊長と副隊長に出撃の準備を整えるよう命じた。

この一件に関して、ミルティユーゴはエトリア防衛の責任もある為、ヴィズル以下。ミルティユーゴらが副隊長ともう一人、冒険者の長とも言うべき人物にモリビト討伐の指揮権を与えることにした。人物の名を聞いて、プライドの高い副隊長の男は露骨に顔を歪めた。「そのような人物に任せて大丈夫なのですか？ エトリア出身者に指揮を任せるべきでしょう」

「彼が大きな失態を犯した場合はそうなるかもな。決定事項だ。彼と協力して、モリビトからエトリアを守るのだ」

副隊長は頷き、ミルティユーゴに敬礼した。だが、やはり不満だ。見ず知らずの黄色い肌の人種。流れ者の侍じじいとこの私が同格だとしても!?

副隊長の父は執政院でも高い階級役職に就いていた人物。彼の地位は父親の働きかけによる物が大きい。自力で四階層に到達するなど、生き残る手段。実力は備わっている。

それはあくまで冒険者としてであり、軍人の彼が優秀かと問われれば……多くの者は不安に思っている。金持ちや貴族でも良い人物、高潔な人物は数多い。その逆も然り。残念ながら、彼は真逆をゆく性格であった。

彼は使命達成に燃えていたが、それもまた、不安要素。坊ちゃん育ちで、いい目で見られない副隊長。やる気があるのは良いことであるが、認められようとするあまり、下手な指示を出さないか心配である。

しかし、現状では、この副隊長の他、四階層に辿り着いた隊長クラスの衛兵はミルティユーゴと彼の二人しかいないのも事実。

総隊長はきたる王賊連合の対策や他の仕事で手一杯。手の空いている人物はエトリア首都防衛担当の副隊長しかいない。執政院にとって、ある意味では重く、難しい選択だった。

モリビトは世界樹の下に住む野蛮人。文明の違いを見せつけてやれば、おのずから頭を下げにくるだろう。日の浅い副隊長でもどうにでもなるはずだ。執政院以下、衛兵に冒険者の一部もこう考える始末。エトリア勢はとてつもなく、モリビトという人種に対し、傲慢と

もいべき油断を抱いてた。

ジャンベは震えていた。地下では身を守ろうという思いで必死だったが、地上に戻ると、体が震えて停まらない。

人が人が白目を剥いて倒れた。ここに入った以上、命の危険が奪われることは百も承知していたが、人に近い者たちと相対すると、自らの死に対する恐怖とは異なるものが押し寄せてくる。間近で人が死ぬのを見たことはあるが、決して良い気持ちになれない。その光景を良いと思えたりしたら、人として終わりだろう。

人を殺すことの恐怖。人と人との争い。

決して身近な生活にそういうのが無かったわけではないが、戦争のような規模の大きいものは始めて。いざ自分が大きな戦に参加するのを思うと、どうにも体の震えが止まらない。現実とは思えない。

自分がこの街のために、街の人々に変わってモリビトと戦う義理がどこにあるというのだ？ 震えるジャンベを見て、彼の思うことを用意に知れるが、声をかける者はいなかった。

やがて、部屋で二人きりになったとき、エドワードがそつと話しかけた。

「ジャンベよ。お前のその気持ちは分からないこともない。どうしてもというのなら、今回の任務。お前だけ外れてもいい」

ジャンベはその言葉にホツとした反面。自分を情けなく思い、罵り、エドワードに役立たずめと言われたような気がした。

「す、少し待ってください。自分の気持ちの整理が付かないだけです。ですから、明日まで少しお待ちを」

そうかと言って、部屋を出て行こうとするエドワードの背に、ジャンベは遠慮がちに呼び止めた。

「エドワードさん。エドワードさんは躊躇いは無いのですか？ ぶしつけというか……なんというか。エドワードさんは、その、人を殺した経験がある……んですか？ 今日、下での戦い方を見たら、あまり躊躇っているようには見えなくて」

エドワードはジャンベの目を見据えて言った。あの初めて会った

日と同じ、矢のような鋭い視線。ただ、昔と違うのは、その眼には情も宿っていた。

「ある。言っただろう？ 戦火に巻き込まれて、ちりぢりばらばらになったと。運よく逃げられた者たちもいれば、逃げ遅れた者たちもいた。俺の家族は逃げ遅れた方だ。その際、追ってきた奴らに向かつて矢を放った。何人に当たったか知れたもんじゃないが、確実に二人仕留めたはず。一人は喉に、一人は脳天。暗闇で顔がよく見えなかったことは、運がいいのか。悪いのか……」

エドワードは言葉を切り、遠くを見るような目付きで窓を少し見やった。ジャンベもちらと窓の外を窺う。

地下世界とは打って変わって、静かで、満天の星空が街と大樹を照らした。エドワードはジャンベに視線を戻した。

「綺麗事は言わないでおこう。ジャンベ、俺はモリビトと戦うことを躊躇わん。俺の目的はもう語らずとも良いだろう。俺の目的はどこぞの国に仕え、戦功を挙げればすぐに済む話かもしれない。俺はそれが嫌なんだ。少し話は逸れるが、俺は最初、一族を復興し、ここで身を立てて、俺の国を滅ぼし家族を裂いた奴らを滅ぼそうと考えたが、その気は失せた。何故なら、その国はかつての騎馬大国と同じく、家督争いで分裂していると耳にしたからだ。自分の先祖たちと同じ過去の過ちで滅びかけている国。そんなのを聞いたら、復讐しようと考えた事自体が馬鹿馬鹿しく思えてきた。

だが、俺は却って気が楽になったよ。これで、ひとつに集中できるのだからな。俺はまだまだ迷宮の奥深くに潜らねばならん。俺はここで名を挙げ、力を得て、金を稼ぎ、世界に散らばった同胞たちを呼び寄せ、一族を復興する。

俺を生み育んだ、今にも、人々から忘れられそうになっている死にかけて彼らを救いたい。その俺を生み育んだ一族は決して落ちぶれ馬盗賊のような輩ではなく、こんなにも凄いんだと証明したいのだ。

自分のしたいことや思い通りに動いて、咎められない者は稀有だ。このエトリアでは、他の地と比べ、ある程度は自分のしたいことをしても許される。俺はこのエトリアというチャンスに出会えたことに

感謝したい。

馬鹿げているだと思っただろう？ 供じみた理想だと思っただろう？ もしも、これが物語の登場人物なら、俺はつまらん理想にしがみついた道化かもしれない。それでも、俺は今更、人にどう後ろ指指されようとも、この歩みを止める気はない。これは俺の目的であり、俺の信念だ。だから、相手がモリビトであれ、エトウであれ。俺は、俺の歩みを邪魔すると言った奴らを容赦しない」

ジャンベは生唾をぐくりと飲み込んだ。エドワードは身勝手だ。人によつては、そんな厚かましくて押し付けがましいとも言っただろう。だがしかし、この惹かれる感じはなんでなんだ。扉にじつと立ち尽くすエドワードから視線を逸らし、ジャンベは考えてみた。

少し考えて、その意味が分かった。ああ、そうか。覚悟が違うからだ。

片や、日銭を稼ぎ、目的もなく金さえ稼げばそれで良いと思ひ、心のどこかでいつでも抜けられるだろうと思っている者。

片や、馬鹿げた大きな理想を掲げ、命を賭して、時間をかけて実行している者。

では、僕はどうなのだ？ ここで逃げることは簡単だろう。

でも、そのあとどこに行く？ 国に帰って、こんな冒険してきたんだよと自慢するのか？ 短い期間、エトリアで冒険してきたことを一生の酒の話として、ボロい酒屋で過去の体験を語るだけで終わるのか？ 煮え切らない自分に、ジャンベは頭をガリガリと搔いた。見かねて、エドワードはさつきより優しい声で言った。

「ジャンベよ。俺は別に、お前に冒険者を止めろと言っているのではないし、どうしろと言っているのでもない。人殺しの覚悟など、たわけた頭の悪いことを言っている訳でもない。モリビトとの戦いが嫌というのなら、今回の事が一段落するまでは、四階層に潜らなくては良いというだけだ」

「でも、仮にそうなったとして、僕はどうすれば」

「簡単さ。今のお前の実力なら、一人で一階層の浅いところ探索する位はできる。新しい発見もあるだろうし、そうすれば、その間、ホー

「ブマンズの稼ぎ頭はお前になる」

「一番はマルシアさんでしょう」

そうだなと、エドワードは否定しなかった。マルシアは血と御伽噺の世界に新医療開発を夢見てここに来たという、どこか矛盾している、変わった動機の冒険者。

彼女は二年前、足の病気の一種である水虫を治す薬を樹海の素材を使って開発することに成功した。

ぼろ儲けとまではいかないが、少なくとも一定の収入を得られるようになった。その新薬開発による一定収入源の確保と彼女の性格も相まって、パーティ内では彼女に頭が上がる者はいない。

もつとも、彼女は自分の功績を鼻にかけて、偉そうにしたりしないが。

「まあ、とにかく。まだ昼をちよつと過ぎた時間だ。一日使つてじっくり考えろ。ああ、それと……」

エドワードはまた、問いかけるような真剣な眼差しでジャンベを見た。

「俺はまだ、冒険者ジャンベを信頼しきつてない」

ジャンベはそれを聞いて、落ち込んだ。わかつてはいたが、面と向かつて言われると辛い。エドワードはすぐに言葉をついだ。

「冒険者としてのジャンベなら信頼してないが、ジャンベその人なら信用し、信頼している。言っておくが、こんな言葉を聞かされたからって犬のように喜んで、ああ、この人はやっぱり僕をここまで頼りにしてくれているんだと思うなよ。決めるのはあくまでお前だ。他人の上っ面を取り繕ったかのような安っぽい言動で決めるな。最後に」

エドワードは改めて、怖いような顔付きでジャンベに向かった。

「俺自身は直接戦に参加したわけではないが、身近でそれを見た。気になるなら、コルトンにも聞かがいい。世に語られるような華やかな武勇伝と現実とは異なる。首が落ち、目を矢で抜かれ、血飛沫が飛ぶ。その現場に華やかさなは見られない。ジャンベ、戦争に恐怖心を抱くのは決して愚かではない」

そう言つて、エドワードはジャンベを一人部屋に残した。最初の冒険者ジャンベのくだりの一行だけで良かったのに。そこがあの人らしいが。そして、思い起こした。エドワードと彼の一族にかけられたあらぬ疑いを。エドワードにとつて、これはチャンスでもあった。自分が代表としてモリビト討伐の戦に参加することで、疑いを晴らす好機が来た、と。

エドワードの意気込みが並ならぬ物であるのは、むしろ当然であることを。

エドワードに心酔しているわけでないし、彼の言に心を完全に動かされたわけでもないが、何故だか不思議と心が軽くなった。客観的に考えられるようになったというべきかな。

ジャンベは自分がこの先何をして、第四階層で為すべきことを自問自答した。

*
—
*

「迷うべきことなどない。あれらが戦いを臨んだのなら、我らは一致団結してあれらの侵入を防ぐことに専念する」

神官は集まった戦士と民衆に、きつぱりとこう宣言した。

「私はモリビトである自らを誇りに思う。であるからこそ、地上の者らに知らしめてやろうではないか！ 我らは森の野蛮人などではない！ 森と共に生きる、逞しく、誇り高き森の民の一族であることを！ 残忍なる地上からの侵略者共に我らの生き様をしかと刻みつけてやれ！ —— さあ、吠えよモリビトよ！ そして、轟け神鳥よ！」

全モリビトが吠え声を上げると、豪風が発生し、もうもうと土煙が巻き上がった。

土煙が晴れると、金色に輝く鳥が広場を旋回していた。モリビトたちは自然と中央から離れ、神鳥が降りるための場所を作った。

イワオロペネレプは一鳴き、前回の集会の時よりも更に大きな声で鳴いた。四階層二十階が震えた。両翼を広げ、天を見上げる姿は正に、生ける神としての神々しさを放っていた。

モリビトたちは畏怖に打たれ、ひれ伏した。虎視眈々とそのモリビ

トを狙っていたけどものたちは、神鳥イワオロペネレプの恐ろしさに身を翻した。さしもの神官も。隣の巫女も。この神鳥には頭を下げるしかなかった。

神官は表には出さなかったが、内心では、地上側が二度も使者を送り、一度目と二度目で発言と態度が大きく異なるのが気がかりであった。

十五話 第四次地下大戦

気持ちが悪く落ち着いたジャンベは、宿に居たロデームに相談してみた。

自由行動が与えられた今、ロデームは一人、食堂の卓で物も頼まずテーブルを一人で占拠して、宿にとつてはいい迷惑であった。

ジャンベは少し腹が空いたので、パンと水二杯分を頼んだ。パンと水が入った飾り気のない長方形の土器二つが二人の座るテーブルに置かれた。ジャンベはロデームの真向かいに座り、相談があると明かした。

「お前が俺に相談とは珍しいな。言いたいことはわかるけどな。モリビトとの戦いについてだろう?」

「はい、お察しのとおりです」

「先に俺自身の答えをいやあ、躊躇いはない。俺はゲンさんやエドワードのように、難しい事情を抱えているわけじゃねえ。俺がここへ来たのは単純に金と冒険による刺激を求めてのことだしな。モリビトがどのと言われようと、道を邪魔しないのなら戦わない。道を邪魔するとうんなら、容赦しない。俺が言えるのはそれだけだ」

ロデームのこの竹を割ったような判りやすい性格にはある意味脱帽した。ロデームは自分のすべきことを理解している。そこに迷いはない。

いつぞや、コルトンはこう言っていた。もし、ロデームが兵士として然るべき訓練を受けていれば、負け続きの戦場が嫌で傭兵を辞めた中途半端で臆病な自分より、ずっと優秀な兵士になっていただろうと言っていた。今なら、コルトンのその言葉にも納得がゆく。

ロデームは土器の水を口にした。

ジャンベは何となく、ロデームの顔や体をじつと見てみた。体はごつく、腕や手甲には所々古傷がみられる。髪を掻き分けないと見えないうが、右頭頂部には森の破壊者に傷つけられた傷痕が今もある。エドワードやコルトンも、風呂に入ると体のあちこちに傷痕があるのがわかる。ジャンベには足の腿などに、僅かに痕があるぐらいだ。傷跡の

多さで立派だとは言わない。これほどの傷を負いながら、心が折れず、今もこうして元気でいられるというのは尊敬に値する。

人間相手ではないが、皆歴戦の勇士といっても差し支えない。ロデイルに何だよと問われる前に、ジャンベは目で追うのを止めた。

ジャンベの気持ちを知ってか知らずか、ロデイルがわざとらしく笑った。

「ははは！ ジャンベよう、お前がここに来たのも俺と似たようなもんだろ。人間と似た相手と戦うのが怖いというのか？ そんなら、てめえが今まで仕留めてきた怪物たちは、人間ぼくない姿をしているから、殺しても良いというのか？」

「……僕が言いたいのはそのじゃなくて」

「エドワードがどう言ったかは知らんが、要はびびっちゃまっただけだろう？ だが、綺麗事は言わせないぜ。ここに来たということは、相手がモリビトじゃなくても、人同士が金目になる物を求めて争ったりすることがある。お前一人が嫌なら嫌と言えればいいさ。戦う気力が無い奴を連れていっても足でまといになるだけで、そんな奴を庇う余裕なんぞない。さつきも言ったが、俺はあの連中が探索を邪魔するんなら、戦うだけだ」

自身の言いたいことを言い切ったロデイルは、土器の残りの水を飲み干した。

ロデイルに相談したのは間違いだったかもしれない。

しかし、びびっちゃまったという言葉は否定しない。人と似た者たちと戦うことへの恐怖はあるが、ジャンベは腑に落ちない点もあった。

隠れた場所から交渉してきたモリビトは、最後に「殺されたのは四人だ！」と言った。——四人？

モンパツイオは二人殺したと言った。それなのに、あのモリビトは四人と言った。

モンパツイオが嘘を付いたとは思えないし、地上に帰還した後、ゲンエモンが問い質したところ、疑われた彼らは怒って二人しかやっつてないと答えた。モリビトたちとの戦いには、裏があるのではないか？

自分達は無駄に戦わせられる為だけに戦うのではないか？ その疑いも、ジャンベの戦意を失わせていた。

それでも、退けない。エドワードとロデイムの言う通り、ここまで来てしまった以上、後戻りするのはあまりにも惜しい。何よりも、他のメンバーが街のため、自分の目的のために命を賭して戦っている間、自分一人が安全なところに居て、帰ってきたメンバーに笑顔で苦勞さんなんて、どの顔して言うのだ。

ジャンベの心は決まった。違う、始めから決まっていたのかもしれない。ただ、後押しが欲しかっただけなのだ。ここで自分一人が引き下がれば、彼らはもちろん、死んだ兄にも顔向けができない。

一年半。厳しく育てられ、未熟な自分を張って守ってくれた五人。その五人に、おめおめと背を向ける耻ずべき行為は許されない。第一、自分には帰る場所が無い。ここで人肌脱がず、一体いつ脱ぐのだ！

ジャンベの心に、めらめらと燃え立つ闘志が湧いてきた。ジャンベはロデイムに一礼し、部屋に戻ると、ギターを爪弾いた。

色々な曲が頭を駆け巡ったが、自分の気分に添い、尚且つ酒場にも合いそうな曲があった。そして、夜。

行くのを断ったアクリヴィ意外のメンバーが金鹿こんろくの酒場に集うと、ジャンベは席から立ち上がり、突如、「一曲歌います！」と宣言した。ジャンベはギターを軽やかに爪弾き、子気味よく体を揺らして陽気に歌いだした。

さあ、臆病者よ。いまぞ立て。頭かくして、尻かくさず。敵さんそれに向かつて、槍抱えてえんやあつと、えんやあつと。おいらあ、びっくりど天井。おつかさん！ おつとさん！ 早う、助けて酒飲み飲み、しなびリンゴぱくぱく。呑気に飲み食いする暇があるんなら、とつと刃毀れ直せ！偉ぶる兵士、てめえも同じ立場だろ不満と恐れ。そんな足枷投げ捨てる。その足枷と足元の石投げつけろ

そうれ、ほーらほら！ そうれ、ほーらほら！ 敵さん泡こいて

びつから退散

夜明けが明けりや、鍬でほーりほり。そい、ほーりほり。そい、ほーりほり。

だけど、軍馬がきて全て台無し。役所と領主にしがみついても、逆に毛穴まで糞り取られる始末。ええい、てめえらそれでも人の子かとうそぶきや、こう抜かしたとよ

おいらたち、人の子じゃねえ。偉い人の子だとよ

やってらんねえ、やってらんねえ！ 案山子偉い人に見立てて、槍ぶすぶす剣きりきり斧ぎくぎく！

ああ、すつきりするはずんなわけねえ！ ただただ、虚しさ増すばかり 頭の一つ下げやがれってんだ

やってらんねえ、やってらんねえ！ でもでも、耕さなきや食えない食えない、女房泣いて餓鬼わんわん！ ああ、うるさい。

それでも、なにくそ、へこたれず！

今宵も、明日も、雨の日も、雷様荒ぶる日も、軍馬と徒歩（かち）共に荒らされても、めげずにほーりほり！

そい、ほーりほり！ そい、ほーりほり！ 人が死にや良い肥料と埋められる

うちの畑で死んどくれ そうすれば、ほい。そこには綺麗な緑がてんこ盛り

そい、ほーりほり！ そい、ほーりほり！ もういつちよお！ そい、ほーりほり！ そい、ほーりほり！

雨除け、風除け、草刈り、種植え、収穫。全て終わりだ。さて、豪快エール酒どーんと一杯もってこい！ みんなあ、酒飲めはしやげ。そうれ、そい！

常連客はいつものことかと、曲に合わせて踊ったり、手拍子する者もいれば、精神を集中させるための雑音として聞き流す者もいた。一見の客。冒険者ご用達の店と化し、その独特な雰囲気のために、普段はあまり金鹿の酒場に来ないような市民は、ジャンベのこの行動に驚いていた。

ジャンベは時に、事前に女将の了承を得た上で、演奏をすることがある。店にとっては店内の雰囲気盛り上げる演奏。ジャンベにとっては溜まった鬱憤などを晴らすための演奏でもある。

この歌は、ある国の元農夫の道化師が遺した歌。横暴な領主に、道化師の男はこのような際どい歌を聞かせたために処刑された。男は領主に聞かせる前に、多くの人々にもこの歌を聞かせていたので、アクリヴィの師匠のような、旅の歴史家や知識人の手によって詩編に記され、いつしかエトリアの大図書館に渡った。ジャンベは偶然その本を手にし、歌詞の調子や曲自体を一部変えて、今日初めてその歌をお披露目した。

曲の内容はあまり明るいものではないが、そこは吟遊詩人パードの腕の見せ所。

ジャンベの巧みな演奏の腕と、どんな風にも変えられる透き通る歌声で場を盛り上げた。

そのうち、バジリオなど顔見知りのパードや知らない者も加わり、更に盛り上がった。

コウシチのような雑音として聞き流す者、エドワードのように黙って聞くだけ者も、魂の籠もった熱い曲の勢いと場の雰囲気呑まれ、勝手に「そい、ほーりほーり！」と口ずさんでいた。今日のジャンベは、油がのりにのっている。

仲間を亡くして悲観に暮れる者。探索が空振り続きの者。今日も生きて帰れたことを喜ぶ者。

明後日には地下で見知らぬ種族と事を構える者たちも皆、この瞬間だけは全ての暗い感情を追いやり、最後の興に浸った。

しかし、戦いの前夜。覚悟を改めたのはジャンベだけではない。

人の形をした者達であれ、道を邪魔する者は容赦はしない。一族再興の為だ。エドワードはぐつとジョッキを握り締めた。

今度こそ、逃げない。戦い抜く。コルトンは窓の外から世界樹を見上げた。

高揚か、恐怖か。定かではない。なるようにしかならないと言わない。自分の身は自分で守る。アクリヴィはジョッキの水割りを飲み

干した。

アクリヴィとは反対に、マルシアはなるようになるでしょ。私は自分の仕事に勤めるだけと思ひ、ロディムは相も変わらず呑気に談笑していた。

メンバーの中で、ロディムは一切気負いが無い。

戦って、蹴散らす。戦いが終われば、刃を向けない。命じられれば、出来る限りその通りに動く。ロディムは至ってシンプルな結論を導き出していった。

一日で準備を整え、体を十分に休めた。いざ、討伐隊の一団が行く。その数は、百余名。部隊は三つに分けられた。ゲンエモン率いる先発隊。翌日には潜る、エトリア近衛副隊長率いる二番隊。失った人員の補充、並びに決戦の場や窮地に陥ったときに出撃するための五十余名の待機。

敵の戦力や拠点となる場所も分からず、かといって、相手の本拠地でもある地下世界に偵察を送っても無駄な犠牲を出すだけだろうということ、まずは相手の出方を窺うことにした。要は威力偵察である。

大勢がどやどやと地下迷宮に降りることに、市民の反応は意外にも薄かった。

執政院ラーダは名目上、街の安全のため、大繁殖した怪物たちの掃討を図ると市民にはこうのたまっている。

エトリアは二十年に一回、衛兵の訓練も兼ねて大規模な掃討が行われる。掃討作戦に冒険者たちが報酬付きで参加するのもごく普通であり、市民は市民は掃討作戦に参加する者達（主に衛兵たち）の無事を祈りつつ、通常の業務をこなし、いつもと変わらぬ日常を送った。前にその掃討作戦が行われたのは十三年ぐらい前で、早すぎやしないかという意見もあった。

そこはあしらいに慣れたラーダ役員が対応に出て、冒険者の報告から想像以上に増えているため、早急に対処しなければならぬ。こう言えば、大抵の市民は大人しく引き下がった。

「わしらとしては好都合だ。市民への対応は執政院の彼らがしてくれるしな。では、出発だ」

百名は順に四階層を降りた。ホープマンズやドナの一行、ゲンエモンの一行は前列を進む。

直前、アクリヴィはエドワードに首当てを渡した。首輪のようなもので、馬の浮き彫りが彫られた防具だ。馬は前と後ろ、真横を跳ねるように駆けていた。

「これはどうした？」

「気にしないで、昨日の夜、旅の行商人とのちよつとした賭けに勝って貰ったものよ。私より、あなたの方が似合うかなと思って。まっ、私からのお守りと思ってちょうだい。要らないなら、私が着けるけど」

「いや、ありがたく貰おう」

エドワードはアクリヴィの贈り物である、首当てを着けた。

ゲンエモンは腰に刀を、手には小槍を持った。ロディムのように、拘っていつもどおりの装備の者もいたが、大抵の者は小槍など程々にリーチの長めな武器を持った。植物が生い茂る地下世界では、長すぎる武器はよく引つ掛かるため、長槍や長柄戦斧のような武器は役に立たないことが多い。そう分かっていても、ぎりぎりの長めの武器をもちたがるのは、相手と少しでも間を置いて戦たいという心理であろう。

ゲンエモンは部隊を走らせたり、全くの無策で人を降ろすような愚行には出なかった。大盾持ちの衛兵、パラデイン、ソードマンたちを最前列と最後列及び等間隔で両横に並ばせた。

他の衛兵や冒険者たちはその間を歩いた。また、アルケミスト・カースメーカー・鉄砲兵も同じ要領で歩み、盾持ちが守りやすく、かつ、攻撃しやすい位置に置いた。相手の出方と正体も祿に分からず、その上、怪物の襲撃も考えられる。ゲンエモンは重装備の者たちで囲ませて守るように配置し、慎重に移動した。

この隊形には三つの問題がみられた。ひとつ、安全ではあるが歩みが遅い。

二つ、狭い道や曲がり角が多く、どうしても一度、隊形を崩さなけ

ればならない時がある。

そんなときは、鉄砲兵・レンジャー・アルケミストがいつでも応射できるように控えた。

三つ、用を足す場所。これだけいると、用を足す地点の確保も苦勞する。ただ、これは事前に調査をしていたお陰もあり、そこまで問題にならなかつた。集団が用を足したあとは、早く離れなければいけない。臭いを嗅ぎつけ、怪物が大挙して押し寄せる恐れがあるからだ。

怪物が群れをなして襲ってくるかと思いきや、たまに前を横切るぐらいだった。

十六階ではさしたる戦鬪もなく、ほぼ無傷で十七階に降りられた。

十七階は十六階ほどではないが、どうしても隊形を崩さなければ通れない場所が多々あり、部隊にとつては鬼門である。この状況で一斉に襲われたら、ひとたまりもない。

カースメーカーでも感知能力がある者や、目の良い者が動きがあることを告げた。

百余名の歩みは遅々として進まなくなり、進行が滞つた。

「いつそのこと攻撃してくれりゃいいのに」

ロデームはこつそりと呟いた。彼の言葉に応じたのか、頭上すれすれを石がかすめ飛んだ。樹や叢、四方八方から大小様々な石が飛んできた。

敵襲だ！ モリビトだ！ ただちに盾を持つ者達が両横に並び、モリビトの投石攻撃。またの名を印字打ちを防いだ。相手の態勢が整うや、モリビトの投石は止んだ。味方側から僅かながら呻き声が上がった。死傷者は出なかつたが、さきの投石で数名ほど怪我を負つた。マルシアやオールドリツチら、メディックがすぐに治療に当たる。傷はどれも浅く、動けなくなるようなものでもなかつた。

用心を期して、二名を残し、頭に傷を負った他四名はこの場で変位磁石を使って帰らせた。

エドワードは全神経を尖らせて、周囲を睥んだ。少しでも姿を見せれば、射ってやる。

突然の襲撃で、しかも姿が見えないとあつては、いくら優秀な戦士

や武器があつたとしても、反撃するのは不可能であつた。彼らには決定的に足りないものが幾つもあった。彼らはそれら理解した上でここに来たが、ここになつてその問題が如実に表れた。情報だ。彼らだけではないが、討伐隊と執政院リーダーも含め、モリビトとこの第四階層の構造や生態についてあまりに知らなさすぎる。

未踏破の地に来て、未踏破の地に長らく住まう者たちと戦う。

たとえ文明に差があれど、これは大変不利である。一八階へ向かう道中、再び、姿無きモリビトたちによる投石とブーメランによる攻撃がきた。

この攻撃では負傷者と死傷者ともに零だったが、二度の襲撃に歩みはとてつもなく鈍った。全速力で駆けてもいいが、そうすると、罠に嵌まる恐れもあり、何より恰好の的である。

それに、他の生物も刺激して、モリビト以外の生物に襲われる可能性も出てくる。

「これならナメクジのほうがまだ早いぜ。ヌメヌメと陰気臭く進むのは嫌なもんだ」誰かがが小声でそうぼやく。

真つ直ぐに開けた一八階へ通じる道へ来ても、ゲンエモンは部隊を急いで行かせなかつた。偵察を出す事も考えたが、敵のホームタウンのような世界に、偵察を送るなど生贄を送るも同然だと考え、偵察を出すのは止めた。部隊は盾で囲んだ陣形を敷き、慎重に進んだ。

ここにまた、情報という最大の問題が関わる。彼らは全く知らないの対し、モリビトは彼らのことをよく知っているというのは、全く予想せぬことである。モリビトたちの二度の襲撃は、全てはここに寄せるための罠。最初の交戦で決定打を与えようというモリビトたちの作戦であつた。地上部隊はまんまと蜘蛛の巣に引つかかつた。

四百メートルの半分、二百メートル地点まで部隊が進行したとき、最前列から悲鳴が上がつた。

最前列にいた兵士たちが突如、地の下へ吸い込まれた。落とし穴に落ちたのだ。穴には杭があり、二名ほど串刺しになつて事切れていた。悲鳴を合図に、聞いたこともないような何らかの楽器の音が幾重にも鳴り、モリビトがどつと攻め寄せてきた。

「慌てるな！ 位置につけえ!!」

ゲンエモンは負けじと法螺貝を吹き鳴らし、混乱に陥りそうになる部隊を鎮めようとした。

ゲンエモンは潜る前、作戦の一つに、万が一にもモリビトの襲撃で部隊が混乱した場合、法螺貝の音を合図に鉄砲を発射するよう命じておいた。今ここで、鉄砲が役立った。耳を聳さんばかりの轟音が空を切り裂く。あまりの轟音に、モリビトたちの動きが停まった。脅しの発砲は想像以上の効果をもたらした。

「位置につけえ！」

モリビトが動き出すよりも早く、ゲンエモンと小隊長たちは号令を飛ばした。

衛兵と冒険者たちは何とか隊形を整えようとしたが、一箇所、最前列近くは持ち直しに時間がかかり、モリビトたちはそこを集中攻撃した。

ブーメランと石と投げ槍で攻撃して、立て直す隙を与えない。見計らって、モリビトたちは一斉に白兵戦に切り替えた。

モリビトたちはモンパツイオたちの証言したとおり、概ね人より背は低い、その動きは馬より早く、猿の如く身軽である。モリビトたちは凄まじい勢いで接近した。投石などの攻撃もあり、破れ口を立て直せなかった。それ以上に、部隊の者たちはモリビト自体を恐怖した。

若葉色の髪をゆらがし、赤い両眼をきらきらと光らせてやってくる死人のような肌色の者たちが迫ってくる。恐怖が動きを遅らした。もとい、いざ人の姿をした者達を目の当たりにし、躊躇する者も僅かにいた。

モリビトたちは身軽に落とし穴を飛び越した。エドワードは毒矢を放った。飛び越えようとした一体の喉元に矢はあたり、モリビトは一回転して穴に転げ落ちた。最前列近くのアクリヴィイや他のアルケミスは術式での攻撃を試みたができなかった。敵が間近で、味方にも被害が及ぶと思ひ、術式中断せざるをえない。

「破れ口を守れ！」エドワードが果敢に叫ぶ。

コルトンとロデイムが前に回り込み、一本を矢を放ち、エドワードも小槍を持って、背後のジャンベと穴から引き上げた衛兵を庇う。ジャンベは一言断って、衛兵を安全な場所まで担いだ。他数名の者が立ちほだかる。

剣戟の音。金属と金属が衝突する音。弦を弾く音と石やブーメランが弾かれる音が響く。

モリビトの大半は素足であるが、訳はすぐに知った。彼らの足の裏は石より堅いのだ。証拠に、鉄の盾を蹴っ飛ばした音はまるでハンマーで叩いたかのような音がした。あれで頭を蹴られたら、兜を被つていても危うく、脳震盪を起こすかもしれない。

ロデイムは長柄戦斧を振るい、コルトンは盾から剣を突出し、エドワードは懸命に槍で薙ぎ払い、他の冒険者も必死に応戦する。

しかし、破れ口へ来る敵は多く、既に何名か倒れた。ジャンベはこっそりギターをつま弾き、歌った。

こんなときに何をと思うが、一部のバードには魔法に近い力があり、歌と音で人の傷を癒し、歌と音で武器に別の力を付すことができる。

エドワードは槍を持って飛びかかってきたモリビトに、小槍を投げつけた。小槍はすっぽりとモリビトの胸に吸い込まれ、突き立った瞬間そこから電流が迸った。ジャンベの音の力により、エドワードの武器には雷の力が宿っていた。

エドワードはジャンベを見ずに「サンキュ」と言い、三日月刀を抜き払った。

仲間の死体を越え、一人のモリビトがエドワードに向かって突進してきた。

攻撃を回避し、態勢を整えようと後ろへ飛び退いたエドワードであったが、後頭部を強い衝撃が襲う。目から火花が弾け飛ぶ。

馬鹿な？ 背後に敵の気配は無かったはず。エドワードは尻餅をついた。

コルトンとロデイムはエドワードを助けに行こうとしたが、ロデイムがコルトンにもたれるように倒れた。コルトンは訳も分からず、エ

ドワードよりも先に、ロデイムの両脇に手を突っ込み、安全に置ける場所を探した。アクリヴィも騒ぎに吞まれ、エドワードから離れていた。

鉄砲の音が数発分轟いた。

走馬灯というやつだろうか。迫るモリビトの槍が随分遅く感じる。と、モリビトの動きが僅かに緩んだ。何かに驚いたようだが、モリビトの彼も戦士であった。

すぐに勢いをつけ、エドワードに向かって槍を突き出した。槍はエドワードの首を捉えた。エドワードは自分の首筋から、生暖かいものが流れるのを肌身で感じた。

第二撃が来る。首を傾けて回避しようとしたが、またしても、後頭部に強い衝撃が走った。誰かに頭を蹴っ飛ばされてしまったようだ。岩みみたいに堅い。

防具はあてにならなかったか。そんなことを考えた。いやいや、彼女のせいにはすまい。戦場で背後の敵の気配すら気付けなかったお前の間抜け加減のためよ。モリビトがエドワードに止めを刺そうと迫る。視界がぼやけ、脳も揺らぎ、まともなものも考えられないが、エドワードは本能で死を覚悟した。

耳元で雷鳴の音が轟く、眼前のモリビトは胸から血を噴き出した。その音があまりに間近だったので、遂にエドワードはぼったりと倒れてしまった。

薄れゆく意識の中、誰かに乱暴な手付きで体を掴まれた。

—————

目を覚ました。白い布で顔を覆われている。体がどこかふわりとした感覚。死に近づいているのか。

指を動かす。動く。段々と夢うつつの状態から抜け出せてきたような気がする。

———ここは。

布を払うと、そこが一目で病院。正しくは、ケフト施薬院の病室だと分かった。

質素な木製の部屋で、青と赤、二輪の花を挿した花瓶のほかは飾り

気がない。窓の高さと他の建物の大きさから比較して、三階に居ることともわかった。後頭部に違和感を覚え、さすると、布が貼つてある。首を触つてみたら、包帯が巻かれていた。声を出そうにも、喉が渴いている。

「どうやら、自分は助かったようだ。そして、アクリヴィには感謝しなければならぬ。」

頭はまだ少し重い、他は特に違和感を感じられない。他に、自分を含めて五名ほど居た。ベッドの一つは空だった。

自分の現状が分かって安心した今、次にメンバーや他の連中がどうなったのか気になる。

立ち上がろうとしたら、看護婦の方から部屋に来た。看護婦から濡れタオルを受け取り、顔を拭き、水の入ったコップを受け取った。エドワードはすぐにコップを空にした。

「お目覚めになったようですね。動きたい気持ちは分かりますけど、もうしばらく安静してもらいますよ。ですが、あなたのお仲間さんなら居ますので、御用があるなら呼んできましようか？」

エドワードは看護婦にお仲間を呼んでもらった。

「よう。気分はどうだ？」

病室を訪れたのは、農夫姿のコルトンだった。

「残念だが、幽体離脱体験すらなかったよ。それよりも、他の奴らはどうした？ 戦況は？ 俺はどのくらい眠っていた？」

コルトンはエドワードが冗談を言うほど元気になったことに安堵した。

「いきなり質問攻めだな。あんたの質問に答えるには、少々時間を要する。この部屋の中は関係者ばかりだが、込み入った話をするには狭い。あんたが質問してくるのは大体予想できたし、看護婦には許可を貰った。という訳で、天気も良いし、屋上に行って話そう」

肩を貸そうかと言われ、素直にその申し出を受け入れた。立つと、軽い目眩がした。

体がやや強張っているものの、少し体を動かせば、体内を血流が駆け巡り、体がほぐれてきた。

階段を上る前に体を伸ばし、エドワードはコルトンの介添えなしで屋上まで上った。屋上には患者の洗濯やらシーツなどがはためいていた。自分達二人以外にも、数えるぐらいの者が屋上に居た。エドワードとコルトンは、腰掛けるにはちようどいい隅っこの壁の煉瓦に座った。

コルトンはさつと辺りを見回した。一応の確認であるが、聞き耳を立てるような者はいなかった。

ある程度周りから離れているので、声を潜めれば、聞かれる心配はないだろう。

「最初に述べれば、あんたは丸一日寝ていたと言おう。では、あんたが一番始めに聞いた、仲間の状態について語ろう。まず、俺とジャンベにマルシアは無傷だ。アクリヴィは戦闘中、運悪く味方の肘鉄をまともに腹に食らったが、大事に至らなかった。マルシアはロデウムや他の連中の治療につきつきりで、今は寝ているところだ」

「ロデウムはどうした？　俺は意識が飛ぶ前に、倒れるあいつを見たぞ」

「ロデウムはあんた以上にやばかった。至近距離でモリビトの吹き矢を喉に食らってしまった。俺は奴を安全なところへ運ぼうとしたとき、偶然にもマルシアと出会った。奴はマルシアに感謝するべきだな。」

マルシアや他のメイックが言うには、ほら、前のイアンのように、見かけ以上に危険な容態だったらしい。即効性の毒で、十分もしないうちにお陀仏しちまう強力な毒だと聞いたよ。もう、峠は越したから、今日か明日には目を覚ますようだ。始めの質問の回答としては満足がゆくものだったか？」

エドワードは頷いてみせた。コルトンはほかに、エドワードは二人、自分は一人、ロデウムは一人のモリビトを倒したことも教えた。

「ああ、満足だ。俺がどのくらい眠っていたかも知れたしな。どうやら、初っ端から気絶した俺が一番役立たずだったようだ。ジャンベに会わせる顔がないよ」

「気にするな。あの状況では、誰もが仕方ないと言える。あんたが率

いるホープマンズは一人として欠ける者がいなかった。その幸運を喜べ」

エドワードは深く頷いてみせた。

「そうだな。では次に、どんな些細な事でもいいから現在の戦況を語ってくれ。ついでに、俺が気絶した原因も知っているようなら教えてくれ」

コルトンは微笑した。

「おいおい！ 質問が一つ増えたぞ。まあいいけど、少し長くなるぞ」
コルトンはエドワードが倒れた原因について、面白可笑しく喋った。

若い女性衛兵の一人が飛びかかってきたモリビトに対し、剣で対応できなかったので真四角の盾を振るって対抗したが、彼女はうっかり盾を握る手を放してしまった。集めた目撃者の証言から、盾の勢いはかなりのものだった。

盾の距離からエドワードの位置は五メートル。体の弱い者が四角の尖がった部分に当たれば、死ぬ可能性もありうる。そこは運よく、エドワードは角に当たらずに済んだものの、痛いことに変わらない。エドワードは乱戦の最中でも周囲を警戒していたが、無意識に投げつけられた盾にはさしもの彼も気付かず、その盾はもろにエドワードの後頭部にぶち当たった。

運が悪いのか良いのか。エドワードは前者のような気がした。

力量からして、エドワードは相手より自分の方が上だと測った。あのまま気絶してなければ、もう少し戦えたはず。

なお、蹴った人物は誰かまでは特定できなかった。モリビトが何人か陣形に入り込んでいたので、モリビトに蹴っ飛ばされたと考えるのが妥当な見方だろう。寝室の花瓶と赤い花は彼女が詫びの意味を込めて、自腹で購入したものらしい。青い花はジャンベが買ったものであった。

「俺も買ったほうが嬉しかったか」あえて尋ねるコルトン。

「俺はあんたが無事で、あんたの口から仲間が生きっていると聞かされただけで嬉しいよ。さて、最後に戦況を語ってくれ」

「また自ら話の腰を折ってしまうが、腹空かしてないか？俺は少し空いてきた。あんたも丸一日眠っていたわけだし、ここで休憩しようじゃないか」

コルトンに腹のこと聞かれた途端、エドワードは急に胃がすぼまつたような気がした。エドワードはコルトンの小休止案に乗った。

ケフト施薬院は三つの建物の総称である。エドワードやロディムが居る寮室館。患者の応対や治療に当たる本館。小ぢんまりとした食堂の三つである。エドワードはコルトンの手を借りて、食堂に向かった。コルトンは少し待ってくれと、エドワードを残して食堂を出た。十分後、コルトンはジャンベを連れて、食堂に戻った。

「人数は多いほうが良いと思えてな。それに、語り部が多くて損することはないだろう」

「お元気そうだなによりです、エドワードさん」

ジャンベはエドワードが元気になったことを素直に喜んでいた。こういう素直な一面もあるからこそ、エドワードはジャンベを最後のメンバーとして選んだ。

三人は同じ物を注文した。ベルダの広場から由来するベルダの野菜スープに、パンである。パンを千切っては、野菜スープに浸して食べた。

いつもどおり食べるエドワードとコルトンに対し、ジャンベは思ったよりも食が進んでない。表情から察するに、先の戦いの尾を引いているのだろう。二人はジャンベに声をかけて、食べるよう促した。

エトリアや周辺国ではスプーンやフォークなどのものが流通しているが、この三人にとってその食べる為の道具は馴染みが薄く。素手で掬って食べるほうが性に合っていた。

エドワードは食欲が湧いてきて、更にもうワンセット分のパンとスープを運ばせた。

食事が済むと、今度は三人で屋上に上った。エドワードはようやく、コルトンとジャンベという二人の語り部から事情を知らされた。二人は真剣に、やや暗い面持ちで語った。死者十一名。重傷・軽傷合わせて、十名。そのうち、戦えなくなった体の者は二名。ロディムは

その数には含まれなかった。倒したモリビトの数はざつと五十名余り。

知り合いに死人はいないが、負傷者はいた。

モンパツイオの仲間でレンジャーを勤める隻眼の男ヌナは、右腕を複雑骨折して、全治三ヶ月の重傷を負った。ゲンエモンほどではないが、エドワードは先輩として彼のことを尊敬しており、弓を握れなくなったヌナの心中を察する。

当初の予定ではモリビトの死体も持ち帰る案もあったが、現実には不可能だった。何故なら、モリビトは樹海時軸を通ったことがないからだ。

試しに、五人ほどにモリビトの死体を担がせたり、手を握らせたまま変位磁石の光を通らせても、光はモリビトの死体を持ってこなかった。仕方なく、幾つかの死体から、装備や持ち物を剥ぎ取った。

地上に帰った後、ゲンエモンと執政院ラーダの関係者は対応に迫られた。衛兵の親族からの訴えだ。ただの掃討作戦で、どうしてこんなにも犠牲が出たのだという、当然の疑問と訴えであった。

訴え出るのは市民だけではない。第四階層に辿り着いてない冒険者たちもだ。

四階層に到達してない冒険者たちは、不満に思うことがあった。四階層への立ち入り禁止だ。突然の四階層立ち入り禁止に、冒険者たちは戸惑いを隠かず、事情を説明しろと申しても、ラーダは頑として口を閉ざした。そのせいで、横との繋がりが大切な冒険者たちの間に隔たりができた。おまけに、立ち入り禁止以降、四階層に到達してない冒険者には試験を課したのが拍車をかけた。

半数以上のもは立腹した。今回の犠牲に関し、彼らの中には冒険者を蔑ろにした報いだと言う者までいた。この発言を聞いた市民が冒険者に喧嘩を売り、一部、市民と冒険者の間で不和が生じる始末。更に、ゲンエモンと副隊長の間にもいざこざが起きた。

副隊長は名士フリストの長男であり、家長の愛してやまない妻の忘れ形見。

幼い頃から甘やかされて育ち、彼の権威と地位は半ば親の助力が大

きい。そのためか、妙なところで劣等感が強く、嫉妬や傲慢な一面もある。愛国者であることに誇りを持つてゐるが、国の歴史などには疎い。自分はこの立場にいながら、こうなんだぞと無理に主張してゐるように見える、周囲からは小馬鹿にされてた

彼を名士の名で呼ぶのは逆に失礼だと、大抵の者は彼を名前で呼ばず、役職名で呼ぶのが殆ど。そして、彼はそのことに気付いてなかつた。

副隊長は当然、先発隊はエトリア出身で、誰よりもエトリアの平和を願う自分が指名されるものと思つていたばかりに、ゲンエモンが先発隊の隊長に任命されたことにショックを受けた。

ゲンエモンへの衛兵と冒険者からの信頼は厚く、指導する力量があると認められ、ゲンエモンは先発隊の隊長に任命された。

私は彼より劣るといふのか？ そのことも、ゲンエモンへの嫉妬を駆り立てた。

犠牲者には彼の部下もいたため、彼はここぞとばかりにゲンエモンを糾弾し、議会にゲンエモンの降格を願ひ出たが、議会はゲンエモンの降格を見送つた。副隊長には主に衛兵を、ゲンエモンは冒険者たちの導き手として選ばれた。

今回の犠牲は決して安くはないが、この完全に手探りの状況で無事に帰還できたことは驚異に値し、ゲンエモンは執政院の命令通りにも動いた。悔やむのは我らの情報不足にある、彼に咎める点はない。

「副隊長殿、逆の立場であれば、あなたも同様の。もしくは、それ以上の犠牲を払つて帰還したことになりますぞ。今は窮地に一致団結して対処するとき。身内を糾弾するときではありません」

ヴィズルの代理として議会長を務めるオルレスもゲンエモンの弁護に回り、エトリア総隊長のミルティユーゴも庇つた。議会終了後、ミルティユーゴに言われて、副隊長はしぶしぶゲンエモンに詫び入れた。ゲンエモンも彼に詫びた。

「謝るのはわしのほうだ。情報不足だったからなど、言い訳にならん。むぎむぎ、将来がある者たちを亡くしてしまつたのはわしの責任だ」

今、ゲンエモンは執政院や部隊に関する情報の整備や雑務。冒険者

同士や市民との間を取り持つのにてんてこ舞い。

「ゲンさんは大変だな。心情を察するよ」エドワードが言う。

「そうそう、ゲンエモンさんと言えば、お弟子さんがいますよね。シヨーさんとコウシチさん。シヨーさんは無傷でしたが、コウシチさんは軽い手傷を負ったようです。ゲンエモンさん、コウシチさんが怪我を負ったと聞いたら、顔色を変えて、酷く心配したらしいです」とジャンベ。

「コウシチはギルド長とかを除けば、結構付き合いが長いほうだからな。それがどうしたというのだ？」

「どう言い表したらいいものか。とにかく、コウシチさんへの反応が他の人よりずっと違っていたというだけです。すみません、関係ないことですね」

コウシチは十代の時、エトリアを訪れた。彼は元剣士の夫妻に拾われて育ったが、強盗目的の放火に遭い、彼を残して一家は死んだ。行き場を失った彼は、剣士の知人であり、自身が尊敬するゲンエモンがいるエトリアへ訪れ、弟子入りを果たした。

「では、話を続けよう」

コルトンが語りを再開した。

現在、執政院が市民と冒険者の対応に当たっている。討伐隊のほうは、副隊長率いる二番隊が迷宮に降りたが、副隊長と執政院の命令で、部隊は十六階にずっと留まっている。

「何日かの間は、十六階で様子見だとさ」

執政院は、衛兵の親族には怪物との戦いで命を落としたと誤魔化しているが、その嘘も、戦いが長引けば通用しそうにない。執政院ラーダは市民にモリビトという余計な存在を隠し、市民に不安を与えないよう短期の決着を望んだが、この状況では難しい話である。ジャンベはううんと首を捻った。

「僕は難しい話は分かりませんが、政治と戦争というのは、変にごたごたした形でくっ付いていますね」

エドワードが同意した。

「お前の言うとおりかもな」

「で、お前さんは俺ら二人の語りで納得したかい？」コルトンが言う。「うむ、状況は掴めた。お前さん方には感謝するよ、ありがとう」「そうか。では、今度は俺からお前さんとジャンベに聞こう。まずは、ジャンベからだ」ジャンベは居直った。「そう固くなるな。ちよつと簡単なことを聞くだけだ。ジャンベ、戦いはどうだった？」

ジャンベは微かに俯いた。思いつめ、張り詰めたような表情。ジャンベはゆつくりと、コルトンと目を合わせた。その声はいつものような響きはなく、舌に鉛が乗ったような感じだ。

「二つ言えるのは……いつもの冒険のような怖さというか、緊張とはまた違いましたね。人というか、人に近い者達との戦いは、また別の怖さと緊張がありました。躊躇すれば、こつちが殺される。こんな事ぐらいしか言えません。あの場では、僕のような未熟者はとてもじゃないですが、自分の身を守るので精一杯でした。もう一つ言えば……人にしろ、モリビトにしろ。目から生氣が抜けていくところを見るのは、嫌な気分でしたよ……」

少しは気持ちを吐き出せて楽になれたのか。ジャンベは深く息を吸うと、ふううと息を吐いた。

コルトンはジャンベを慰めた。

「お前はあの状況下で衛兵を助けたのだろう？ その上、お前さんはあの場で自分の出来ることを冷静に見極めて、無傷で生還した。初戦で大したものだよ。そして、お前さんの言うとおり、躊躇はするな。味方や自分がピンチのときは、ギターではなく弓の弦を弾け」

最後の言葉は厳しい顔付きで言った。ジャンベは気圧されまいと、目を逸らさなかった。コルトンは肩を優しく掴み、安心するように笑ってみせた。

正直、いちいち考える余裕など無かった。いつ殺されるかという極限のさなか、頭に本能的にパツと思ひ浮かんだこれをやろうと思ったことをしただけ。まともに考えていたら、あの場では生き残れなかったかもしれない。

「だから、固くなるな。ちよいと、感想を聞きたかったただけだ。次に、エドワード。お前も戦に参加すること自体は初めて」

エドワードはコルトンの言葉を遮った。エドワードは鉄の鏝のよ
うな鋭い眼差しを両者に向けた。

「あんたが望むなら答えよう。俺の意志に変わりはない。モリビトが
道を塞ぐのなら、こちらはその壁を崩すのみ。もう一つ付け加えれ
ば」

エドワードは口端をニヤリと歪めた。「今度は奴らにたっぷりと矢
を浴びせてやる。そして、最後まで二本足で立つ」

戦場の血を浴びて狂喜に打ち震える残酷や残忍さと形容するより
かは、無様な醜態を晒した汚名を晴らしたい気持ちと、自分の心は決
して折れてないと仲間を安心させる余裕の表しであった。この答え
に、ジャンベはさすが我らがパーティーのリーダーと内心褒めた。コル
トンはエドワードの心が折れたり、恥辱に塗れて絶望したり、まして
や戦場の狂気に吞まれたりしてないのを知り、満足そうに、エドワー
ドを真似て口端をニヤリと歪めさせた。

やや怖い笑みを浮かべる二人に挟まれて、きよろきよろとジャンベ
が顔を動かしたのを見て、二人は普通に軽く微笑んでみせた。

モリビトたちは無言で勇士の遺体を背負い、近くの林村まで運ん
だ。

過去の歴史は、八百のモリビトがたった六十の地上の者と相討ちに
なった例もあるが、過去は過去。現在の時が大事である。

「割に合わない」

指揮を任された十一の林村の大僧正が居並ぶ死者を見て言う。死
者の周りでは、同じ林村の身内の死を嘆く者。戦友の死を嘆く者たち
がいた。大僧正は僧侶たちと共に、一人一人に冥府へと送る祈りを捧
げた。

「五三の犠牲と、二十そこそこの犠牲。割に合わない。おまけに、地上
の奴らは十六階でこそそこそと動き回っているというではないか。地
の戦士さえ参戦してくれば、もう少し討ち取れたものを」

今回の作戦に、神官は地の戦士の参戦を許さなかった。何故という
疑問に、神官は時期が早いと答えた。

「聞けば、地上の者共は新たな武器を手にしたようではないか。初戦を叩くのは肝心であるが、わしはこの初戦。地の戦士の者共を参戦させるほどの価値は無いとみる。二度目、あるいは三度目の交戦までには敵の新武器の正体と有効範囲を調べよ。それまでは、地の戦士の参戦は控える」

正直、使者の一団が話したあの新武器のせいもあり、作戦は失敗に終わった。あそこまで激しい音とは予想だにできなかった。初陣に参加した者たちと大僧正は、しかと武器の威力を見届けた。それでも、あの武器の射程範囲まではまだわかっていない。

「我らはもう一度、戦士たちに多大な犠牲を強いることになる。神官殿を信じよう。あの武器の威力と、現代での地上の者たちの戦法がいかなうなものか見極めること。それこそ、我らの勝利に繋がろう」

大僧正は自らにそう言い聞かせた。

三日間。膠着が続いた。稀に石やブーメランが飛んでくることもあったが、被害は無かった。

一日おきに、ゲンエモン、副隊長に部隊と交代した。多くの者は戦闘が無いことにホッとしたが、十六階に居座るだけのこの状況は却って戦意が低下した。偵察を出すことも考えたが、執政院が許さなかった。

「全く！現場にいちいち口出ししおって」

偵察すら出せず、ゲンエモンや副隊長すら不満に思った。こうしている間にも、敵は着実に新たな罠を張り巡らしているに違いない。罠もたいしてない今こそ、攻め入る好機。

五日目。執政院ラーダは重い腰を上げ、部隊に出撃を命じた。

とはいえ、ゲンエモンはすぐには攻め入らず、危険を承知で十七階の更なる開拓を進めた。翌日も、今度は副隊長率いる二番隊が作業を引き継ぎ、道を切り開いた。どんな罠や攻撃が来やしないかと、警戒したが、意外なことにモリビトの攻撃はなかった。

それもそのはずで、モリビトは別の問題が発生し、問題に対処するために人手を回していたのだ。

同時に、その問題は地上の者たちにとっても共通であり、モリビトにとつてのその問題の種が地上側勢力に向かつてくれれば、これほど好都合なこともない。

六日目。熟練した冒険者と土木工事の技術も教えられた優秀なエトリアの衛兵たちにより、行進するための道が開けた。

七日目。人員二十名、四階層到達許可を貰った二組のパーティを加えた百余名の部隊は十八階目指して行進した。

十八階は天井の高さはさしてないが、見渡す限り、何も無い荒地が広がっていた。何キロか先に、薄らと森が見える。

ゲンエモンはここでも、初日と同じく、重装歩兵で固めた移動を試みた。改良点に、前二列と後ろ二列の横にわざと隙間を開けておいた。左右から人を繰り出し、近くを回って偵察させて、危険があればすぐに逃げ込めるようになっていた。また、敵は防御に破れ口があると勘違いし、誘いに乗ってくるかもしれない。その見込みは薄い。

一週間前の事件と前回の戦いにより、モリビトは猿の如き敏捷性と逞しさ、一部に限ってだろうが人間の言語を話せるほどの高い知能を有するのが分かった。

こんな単純な誘いには乗ってこないだろう。キアラなど、カースメーカーが気配を感知した。

「森の向こうと、ほんの少しだけど、地面の下からも気配がする。穴掘って隠れているかも」

カースメーカーたちの言い分は正しい。モリビトは地面に穴を掘り、隠れて機会を窺っていた。

部隊はモリビトが潜む穴の近辺から離れ、少しずつ移動した。森のモリビトたちは攻撃できなかった。これは地上側でもあるが、双方、何百と離れた先にいる敵を攻撃できるような武器や兵器を持ち合わせてない。

双方にできることはただ一つ。相手の出方を窺うこと。

またしても膠着が続くか。その時、森の向こうに潜むモリビトたちは派手に戦太鼓を叩き、戦の笛を鳴らして姿を現した。笛の音はポーと蒸気のような音だ。カール口は近くにある枯れ木に上り、数を確認

した。

「敵。数百五十」

「百五十か」

ゲンエモンは顎髭を撫でた。モリビトたちは、前列の戦士に盾を抱えさせて行進した。背後には、赤紫色のモアに乗った指揮者たちとその護衛がいた。二枚板の盾や獣皮製の盾、貴重な鉱物を薄く張った盾を抱えて、戦士たちは地上の者と同じような行軍隊形を模した。

モリビトたちは始めはゆっくりと行進していたが、やがて、地上側との距離を詰めてきた。

三百メートルにまで接近してきたとき、ゲンエモンは二人の衛兵に発砲を命じた。

モリビトたちは一斉に行進を止めた。大僧正は低空飛行すれすれで飛ぶ妖精モリビトの半分に、天井ぎりぎりの高さまで飛んで見張りをしよう命じた。

妖精モリビトは上でぴったりとくっ付いたまま、移動した。

衛兵と冒険者たちは口を揃えて、羽を生やした空を飛ぶ赤ちゃんのようなモリビトに注目した。

「静まれ！ あれらがこちらに向かって下降するようならば、弓兵とアルケミストの諸君。そなたらの矢と術式であの羽虫どもを追っ払え」

モリビトたちは二度目となる進撃の太鼓を叩き、二百メートル台まで接近した。ゲンエモンは突撃を命じなかった。

「数はあちらが優るが、兵士の強さと兵器力ではこちらが優っておる。目一杯引きつけて撃つのだ」

モリビトは、この状況で地上側があの方全の守りを崩してまで仕掛けてくるような愚策に出ることはないを見た。好都合だ。大僧正は思い切って、今度は地上側との距離を百五十メートル台まで詰めた。火縄銃が盛大に火を噴く。さっきは二丁だったが、今の射撃では更に十丁の鉄砲が火を噴いた。地上側から薄らともやもやした煙が昇る。

前列の盾を持つモリビトたちは盾と体に強い衝撃を感じた。二枚

重ねの板張りの盾は一枚ひび割れ、獣皮性のものは命中した箇所
の皮に穴が開き、鉄の盾は凹んでいた。指揮者たちは三十メートル
ほど離れるよう号令した。何かして、全ての妖精モリビトは見張
りを交代した。一体はモアの頭に、一体が大僧正の肩に留まる。

「クロツエ様。僕たちが見たところ、あの火と雷の音を出す
長い筒は、一回使用するのに大層時間がかかるようです」

クロツエ大僧正は見張りについた妖精モリビトの内、三十人
を適当に選んで聞いた。

総合すると、一発撃つのに、大よそ三十秒か一分以上かか
るとのこと。

また、これは自分の想像であるが、あの武器は、こうした
安定した地盤でなければ有効に使えない武器ではないかとも考
えたが、勝手な想像は控えてこう。

三度目となる戦太鼓を叩き、戦士たちを地上側に向かわせ
た。

大胆にも、百メートル台まで接近したとき、火縄銃が猛威
を振るった。弾丸は鉄の盾をも砕き、十三名の戦士は体に穴
を穿たれ、どくどくと血が流れ出た。指揮者たちはモリビト
語で退却を告げた。倒れた味方にモリビトが集い、速やかに
回収を行う。

ゲンエモンは彼らの狙いに気付いた。このまま帰してしま
うのは不味い。ゲンエモンは危険を承知で攻撃命令を下した。
百名の地上部隊が接近してくる。エドワードはジャンベの音
の力が宿った矢と毒矢を素早く番え、倒れた者たちを回収し
ようとするモリビトや、あの妖精モドキに向かって矢を放
った。

モリビトたちは地上の者に負けず劣らず。何人もで倒れた
者たちを抱えて、凄まじい勢いではるか先にある森へ逃亡し
た。

味方の逃亡を助けようと、穴に隠れたモリビトたちも出
てきた。ここぞとばかりに、穴から顔を出したモリビトは
矢と術式の歓迎に会い、自ら身を隠していた穴が墓穴にな
った。

モリビトたちの足腰は強く、早い。重い装備を身に着
けた彼らでは、追いつくのは不可能だった。

ゲンエモンは法螺貝を吹いて、部隊の進撃を中断した。
この先の森

は彼らの住まいであり、恐らく、大量の罨や待ち伏せもあるはず。幸い、犠牲者は一人も出してない。

ゲンエモンは追撃を避け、計四個の変位磁石を使用して部隊は地上に帰還した。

何回目となる議会の場で、ゲンエモンは今回モリビトたちが立てたと思われる作戦の内容を細かに伝えた。これを聞いて、副隊長は懲りずに噛み付きかかった。

「敵に火縄銃の有効射程範囲を知られるとは、何て愚か！ ですが、私にはあなたをこれ以上、咎める気はありません。所詮、あなたはエトリア外の出身者で、おまけに軍人でもありません。素人のあなたの失敗を責めるというのは酷というものでしょう」

「副隊長殿の説教、しかと心に刻んでおきましょう」

この侮辱に、ゲンエモンは平素な態度で応じた。この落ち着き払った物腰。自分が侮辱されたような気がする。副隊長は内心、きりきりと歯軋りをし、「分かってくれたださったか」と言っ、口を閉ざした。

副隊長はゲンエモンを気に入らなかった。

国外出身者が先発隊の隊長に選ばれたのもそうだが。冒険者は致し方ないとして、衛兵までも、自分よりゲンエモンのことを信望しているのがとても気に食わない。彼の地位は、執政院の重要ポストから引退した多くのパイプを持つ親のコネもあつて就けた地位。

ゲンエモンは実力を評価されて、一時的にはあるが、モリビト討伐の三つある部隊の隊長に選ばれた。これも、彼の嫉妬心を煽った。彼にとつて、モリビトとの戦いは自分が決してコネではなく、実力で選ばれたと証明するチャンスでもあつた。武人崩れのじじいのみすみ活躍の場を奪われてなるものか。私は七光りのボンボンではない！

エトリアの兵士は総轄隊長がまとめる（普段は総轄の“轄”の部分が外されて呼ばれる）。

他、エトリアには五人の地区隊長がいて、二人は国境沿い。一人は国の中間地点並びに交通網の警戒と整備。二人は姉妹都市担当で、ミルティユーゴは地区隊長も兼ねる。その隊長の補佐として、副隊長が

九人いる。そのうち、六人は国境沿いで、後の二人は姉妹都市に配属されている。

エトリア本都市の副隊長に彼が任命された理由は、彼が一番、樹海に潜った経験があり、総隊長ミルティユーゴの命令でもある。ミルティユーゴは自分以外の者で、非常時に迷宮内での陣頭指揮に当たれる人材が欲しかった。また、彼を除き、四階層に辿り着いた指揮者格の者がいないせいもある。議会終了後、ゲンエモンは彼に話しかけた。

「副隊長殿。わしらの間では、何やら誤解があるようだ。どこか話し合える場で腰を落ち着けて、話し合わないかね」

どうせなら、偉そうにふんぞり返ってもらったほうが楽である。

ゲンエモンは相手と接するとき、常に敬意を払うよう心がけている。副隊長にはそう見えず、この低姿勢が、何故だか副隊長の癪に障る。

「結構。私はすべき用事があるので」ゲンエモンの申し出に、副隊長はにべもなく断った。

ゲンエモンも無理には彼を引き留めず、彼の背を無言で見送った。両者のこのすれ違いが、後に大きな失敗を生むことになる。

*
—————
*

六月二十日。敗戦の報が届く。副隊長率いる二番隊だ。死者二四名、負傷者十名。戦えない身になった者は三名。

十七階の十八階に通じる道で交戦。モリビトは最初と同じように、姿を見せない攪乱戦術を取った。姿を現したモリビトを部隊は火縄銃と矢で撃退。追撃を仕掛けて、十八階に降りたところをいきなり攻撃された。

鬼のような姿をした頭部に二本角を生やした黒い人型の怪物三体和、鱗肌に羽根を生やした悪魔が三体襲ってきた。この怪物の出現に、前列の者たちは抵抗する間もなく倒された。

モリビトは退くように見せかけ、追いかけてきた相手を迎え、挟み撃ちにするという高度な戦術を駆使した。一旦退こうとしたが、道の前と後ろを挟まれてしまった。狭いところで挟み撃ちにあい、火縄銃

も撃てない。急遽、副隊長は変位磁石を使用。部隊は地下迷宮から脱走した。あまりにも急で、死者を運んでやれなかった。

全滅は免れたものの、副隊長は厳しく責任を追及された。意外なことに、副隊長をゲンエモンなどが庇った。

副隊長はそれをありがたいと思わず、同等の犠牲を払ったゲンエモンは何故責められないのだと、益々憎悪を募らせた。議会席に座ったオルレスは、ひたと副隊長を見据えた。

「四階層に辿り着けるような人材は少ない中、この犠牲はあまりにも手痛い」

「では、私は解任でしょうか」と副隊長。

「解任はしない。しかし、ゲンエモンとミルティユーゴ殿の指示を仰ぐように」

副隊長は拳から血が出んばかりに、強く握り締めた。

六月二一日。ギルド長は戸惑った。今日に限って、何名か、四階層に辿り着けるほど腕前の良い冒険者たちが辞めてしまったからだ。

「こんな事例、全くないわけじゃねえが、あの腕が良い奴らが次々に死んじまって、辞めちゃうなんて。何が起きてるんだ！」

更に、市民の間でも露骨な非難が目立ち始めた。衛兵の親族は、何が起こっているのだと執政院に詰め込み、多くの市民が執政院前で暴動する事態に発展した。二番隊の敗走により、市民に情報を隠せなくなった。役員たちだけでは、最早市民を抑えきれない。事態を重くみたヴィズルは、とうとう、モリビトの存在を公おおやけに明かすことにした。

モリビトの存在に、市民と事情を知らない冒険者は半信半疑であったが、すぐにごうごうと非難の嵐がベルダの広場を通過する。

「何故教えてくれなかった」「ヴィズルは独裁者のつもりか」「息子を返して」

凄まじい民衆パワーに、オルレスなどの役員たちは、落ち着いてくださいと声を張り上げた。

神官は村々を歩き回り、戦死者たちを弔い、大地の幸があることを祈った。戦意は枯れてない。が、いつまで持つか。神官は胸に提げた

神鳥の笛を見て、あることを思い出した。隣の僧侶に話しかけた。

「トル・ホイの樹が後六十回萎れる頃は、神鳥の時であつたな」

「はい」

「そうか。ならば、戦士たちに伝えよ。好機あらば、息のある地上の者共を生け捕りにしろとな」

僧侶は神官の顔を見て、背筋を凍らした。神官は、まるで残忍な悪戯を思いついた悪魔のような笑みを浮かべていたからだ。

「一日休憩挟んだら、また行く。だが、俺たちは配置換えをされた。

……今度、俺たちを率いるのは、ゲンさんではなく、副隊長殿だ」

エドワードの報せに、ロディムなどは露骨に嫌な顔をした。

「私たちが配置換えされる意味はあるのかしら」

アクリヴィの疑問はもつともである。

「何でも、然るべき人員を補うために、腕の良い者を寄越してくれとゲンさんは頼まれたらしい。そこで、俺たちの他、同館に居るアデラの奴ら。オールドリッチ率いるグラデイウスの連中は、命の恩人率いるパーティの仇を討ちたいとき」

この二度の大きな犠牲で、少なからず、ホープマンズでも顔馴染みの者たちの命が失われた。ロディムと歩哨の任を共にし、エドワードの後頭部にうっかり盾をぶつけた衛兵の彼女は死んだ。結婚を約束した相手がいたようだが、彼女の花嫁になる願いは永遠に叶わなくなった。執政院がモリビトの存在を白日の下に晒した翌日も、執政院に來る人数は一向に減らない。執政院は四階層への立ち入り禁止に並び、試験も廃止。

冒険者たちに積極的に潜るよう勧めたが、何を今更と、多くの冒険者は意欲を無くした。モリビトの存在が余計にやる気を奪った。それでも、新たに九名の冒険者が四階層に降り立ち、部隊に加わってくれた。

執政院、一部の冷静な市民は焦った。エトリアの主要経済三本柱。農業・工業・樹海の品物。

現状、エトリアの利益の三分の一は冒険者たちの探索によるもの。

その冒険者がやる気を無くして探索をしなくなるということは、エトリアの収入の要が三分の一も失われてしまう。

そんなごたごたを気にせず、エドワードは一人、昼の金鹿の酒場を訪れた。

店内には、女将と自分の他、シリカやギルド長という意外な人物もいた。シリカはぴよんと振り返って、挨拶した。

「やあ、エドワードくん」

ギルド長はぶつきらぼうに「よう」と言った。シリカはギルド長の横腹を肘で突いた。

「おやっさんさあ、そんな冷たい挨拶しかできないから、嫁さんがこないんだよ」

「けっ。小娘がうるせえなあ。俺は自由が好きなんだ。俺以外の男が結婚してくれるし、俺が嫁さんもらう必要なんてない」

「なら、私の身を引き受けてくださいと頼んだらどうかしら？」

女将のこの言葉に困ったギルド長は、むつつりとだんまりを決めた。そのギルド長を流し目で見て、隣に座るシリカはけらけらと笑った。ものにした。

「あんたたち二人の組み合わせは珍しいな」

「そう？　僕は、君が昼間っから酒場に訪れるのも珍しいと思うけど」
シリカは椅子を指でちよんちよんとつつき、エドワードに自分の隣に座るよう誘った。断る理由もなく、エドワードはシリカの隣に座った。

「エドワードくん、一つ聞いていいかい」

「答えられる範囲にあるものなら」

「はは！　聞きたいことはね……モリビトのことなんだ」

全く予想してないわけではない。なんせ、常連客が何名か失われたのだから、シリカが尋ねてくるのも当然であろう。

「モリビトの特徴とかか？」

「そうじゃなくて、その。ほら、君自身は何を思っているのかなとか。亡くなった方はどうなのかなとか」

エドワードは視線を下ろした。

「上手く答えられそうにないな。俺自身の気持ちは変わらない。邪魔するなら倒す、邪魔しないなら無視する。それだけだ。俺の目的はただ達成されてないし、ここまで来て、はいそうですかと引き返す選択肢はあり得ない」

シリカは腕を組んで、うーむと眉根を寄せて唸った。

「ちよつと期待していたことは違ったけど、まあ、君らしいと言えば君らしいか。ところで、ここに来た用はなんだい」

「何となく、気付けば足を運んでいた。逆に尋ねるが、シリカとギルド長はどうして来た」

「あんたと同じさ」ギルド長はコップの蜂蜜ジュースを少し啜った。

「あんたと同じ、気付けば足が向いていた」

「そうか」

エドワードも、蜂蜜ジュースを頼んだ。シリカが金券をカウンターに置いた。

「僕が奢るよ」

エドワードはシリカの奢りを受けた。騎馬民族はおもてなしすることも、されることも素直に受ける。

小一時間経つ頃には、エドワードを酒場を出た。久々に、ブケフアラスに乗って気晴らしをしたい。エドワードの背に、シリカが最後にもう一声かけた。

「ねえ、戦いはいつ終わると思う?」

「俺が知りたいよ」

エドワードはぼつりと、シリカを見ずに呟いた。エドワードはこの時、予感めいた物が働いて、一目、愛馬を見ておこうという気持ちもあつた。

馬屋に行ったら、馬屋の者達によく世話をするように言っておき、自分に何かあれば、愛馬を譲ろうとも約束した。エドワードはブケフアラスの黒曜石の如き滑らかな体毛を撫でた。ブケフアラスはひんと小さく鳴き、エドワードの頬に顔を擦りつけた。

「俺たち一族全体の友であり、我が友よ。しばらくはお別れになるかもしれないな」

副隊長はゲンエモンの指定した場所で、彼と対面した。本当は来たくなかったが、上司であるミルティューゴ総隊長に言われて、嫌々ながら、約束通り夕刻までには訪れた。

ゲンエモンが指定した場所は、東洋出身のアヤネが経営する花桜はなざくらの館。ゲンエモンやグラディウスが寝泊まりする宿屋である。この館にある奥座敷に案内された。ゲンエモンは黒い和服姿で正座して待っていた。ゲンエモンは副隊長に、東洋風のお辞儀をした。

「お忙しい中、ご足労いただき感謝を申し上げます。では、堅苦しい挨拶はこれまで。余す時間とぎを使い、とことん話し合いましよう」

「私が忙しいとご理解されているようであれば、早く帰らせてもらいたい」

「待ちなされ。そのほう、わしのことを誤解しておらぬか？」

ゲンエモンは何か言いたげな副隊長の口を遮り、話した。

「失礼。しかし、まずはわしから申しあげさせてもらいたい。副隊長殿、わしはそなたを馬鹿にしておらん。ましてや、そなたの地位を狙っている訳でもない。わしの願いはたった一つ。いつもの探索ができるよう、早いとここの戦いを終わらせることだ。」

それには、わしだけの力では足りない。冒険者同士の連携に、街の方々の協力、衛兵の方達の協力も必要だ。そなたがわしを嫌うておるのは分かる。だが、仲良く手を握ろうとは言わんが、どうか、誤解を解いてもらいたい。わしらが仲違いしても、不利益を被るのはわしらである。わしは、あなたの協力も得たいのだ。身分と立場は違えど、エトリアの街を守るといふ気持ちは同じです」

ゲンエモンは副隊長に例の東洋の挨拶をした。その挨拶は、客人に対する最大限の礼を示すものだが、副隊長はゲンエモンの話も挨拶も全て無視した。

部下の犠牲とその対応に追われ、副隊長は疲れていた。仕事を終えた後に呼び出しをくらい、それに加え、ゲンエモンに心の内を読まれ、ペラペラと説教を説かれ、副隊長はかなり気を悪くした。普通に聞けば、ゲンエモンの言葉には説教の類や侮辱など含まれてないことがわ

かるが、今の副隊長の心に余裕はなくなっていた。彼には、ゲンエモンの話すこと全てが耳障りに思えた。

「あなたの言いたいことは分かる。私に大人になれと言いたいのだろうか!? 私は用事があるので、失礼する!」

副隊長はゲンエモンの制止を振り切り、緑に挨拶もせず宿を出た。対応に追われ、疲れているのはゲンエモンも同じだった。――わしはまた間違い犯したのか。

ゲンエモンは障子の隙間から外を眺めた。ギュリオン、わしは間違ったのか。悩みを絶つように、奥座敷を誰かが訪れた。障子開けたのは、女主人のアヤネ。ゲンエモンと同じ年になるが、その容貌は今だ衰えない。

「ゲンさん、オールドリッチさんが一緒にご飯食べよと呼んでおります。いかがなさいませうか」

アヤネは怒れる副隊長を見て、何が起きたか察知した。アヤネは氣遣って来てくれたのだ。ゲンエモンは静かに微笑み、アヤネと共に食堂へと歩んだ。

六月二三日。早朝から二番隊は出発した。

本来なら、ゲンエモンの一番隊が行くはずだったが、副隊長は本人と各方面の者に行かせてくれと頼み込み、彼の二番隊が行くことになった。

今度の出撃には、多くの見送りがついた。そのなかにはゲンエモンとアヤネもいて、二人はグラディウスや親しい者たち、ホープマンズの一行を見送った。ゲンエモンはこっそりと、コウシチの手にある物を握らせた。お守りだ。コウシチはそつと、懐にお守りを忍び込ませた。見送るゲンエモンを副隊長は目敏く見つけ、見送りや帰還を祈る言葉をかけるゲンエモンの前まで来て、冷たく言い放った。

「戦場はいついかなるとき死が訪れるか予測不能。あなたのお弟子さんばかり気に掛けられない。余計なことをして、兵士たちの心を乱さないでほしい」

怒って口を開こうとするアヤネを抑え、ゲンエモンは頭を下げ、一

歩引いた。

「副隊長殿。一言言わせてください、部隊は分けられないほうがよい。精々、たまに一名か二名を偵察に送り出す程度に控えたほうがよい」彼のつとめて冷静に装ったこの物言いとしごく当然なアドバースに、副隊長は神経を逆撫でされた。

ぴくぴくと頬をひきつらせ、それはどうもと言うと、前列に戻った。副隊長は悪人でもなければ、完全に馬鹿でもなかった。彼は一応プロであった。地下世界に降りると、頭を冷やし、すぐに行動に移った。彼は部隊を前七十。後三十と分けた。

「案ずるな。三日前の失敗を犯さぬような配慮である。敵は少ない後方を襲ってくるはず、そこを狙い、前と後ろで敵を挟み撃ちする」

彼はゲンエモンに反抗心を抱いて、この作戦を立てたのではない。彼は彼なりに考えて部隊を分けた。

ただ、前は衛兵が多いが、後ろは二十二名の冒険者と、人材の配置に少々偏りがみられた。

「何だか、後ろは俺ら冒険者が多いが、意味はあるのか？」とオルドリッチ。

「意味はあるとも。君らは衛兵以上に樹海に詳しく、慣れている。咄嗟の危機にも、よく対処してくれるはず。私が君らに殿を任したのは、君らを買ってのことと思ってほしい」

副隊長のこの発言には嘘はない。実際、彼は冒険者たちの腕を信用していた。しかし、ゲンエモンの弟子や彼と親しい者たちを後方の部隊に置いたのは、少なからず、悪意があつたと認めざるを得ない。特に問題も無いので、オルドリッチもそれ以上、副隊長のすることに口出ししなかった。

彼はゲンエモン。いや、総轄隊長の言うこともよく聞くべきであった。ミルティユーゴも、部隊を分けるのは極力避けたほうがいいと忠告していた。

であるが、批判の多さに、彼は自分の地位が危うくなるのではないかと焦っていた。そして、その焦りが彼に部隊を分ける方法を思い付かせてしまった。彼のモリビトは低能種族という偏見も、この作戦を

思い付かせた原因である。

部隊を分けて、前と後ろの攻撃から対処する。間違っていないが、これこそ、モリビトの望んだ行動であった。副隊長はあまりにも敵を見くびり過ぎていた。

反省したと思われる今も、彼はモリビトを未踏の地に住む文化の程度が低い野蛮人共と見下しており、三日前の敗北では、ゲンエモン並みにモリビトを憎んでいた。

「キアラ、感じるか？」

オールドリツチの問いに、キアラは首を振った。

「ううん。駄目。モリビト以外にも、樹海に住む生物たちの敵意やら悪意やらが混じって、数が把握できない。その前に、こんなに多くの敵意をまともに感じ取っていたら、戦うよりも前に神経が参ってしまうよ」

敵はモリビトだけではない。冒険者や衛兵には馴染み深い樹海生物も存在する。

この戦いで、始め無視していた樹海生物たちも、血の臭いが増すにつれ虎視眈々と餌である人間を狙っていた。そのため、キアラのよくな殺気などを感知するカースメーカーが索敵をしても、樹海生物たちのものも混じるようになってしまい、モリビトの気配を感じ取れなくなってきた。

一七階。最も警戒すべき階まで降りたとき、異変が生じた。あちこちから、声からして距離はあるが、多くの怪物たちの遠吠えが聞こえた。

モリビトは樹海生物を利用し、樹海生物たちを地上の者たちが通ると予想した道へと何日もかけて誘導していた。

「武器を取れ！」

副隊長の号令に、前後方の部隊は身構えた。

「右です！ 右の方から凄いい沢山の遠吠えがします！」

ジャンベの言ったことに、ロデームは「俺でもわかるわ！」と返した。多くの者が右方向を警戒していたが、約五名は左の方向にも注意を払った。

「アクリヴィー！ 左方向の木々を燃やせ！ 訳は聞くな」

エドワードの命令に、アクリヴィーはすぐに事態を理解して、強力な火の術式を両腕から放出した。木々とくさむらから悲鳴が上がった。二番隊は左右の方向から来る敵にも対処しなければなかった。

「今ならまだ間に合う！ 撤退だ」

必死に前方の部隊の間に立つ副隊長に呼びかけたが、怪物たちの声がうるさすぎて聞こえてなかったようだ。エドワードは直接知らせようとしたが引き返した。

エドワードの道を阻むように、鱗肌に羽根を生やした悪魔のような怪物が出現した。謎の怪物の出現に特に恐怖したのは、何を隠そう副隊長だ。異形の悪魔を見て、副隊長はまざまざと三日前の敗走を思い出した。

副隊長は撤退を忘れ、雪辱を果たそうと攻撃を命じた。だが、元より人望も薄く、この状況で攻撃に向かうのは危険だと判断し、衛兵たちは副隊長の指示通りに動かなかった。

「何をもたもたしてやがるんだよ！」

舌打ちするオールドリツチの肩をキアラが掴んだ。

「くるわよ」

オールドリツチは鉄棒を手にした。シショーは無言で、小柄なキアラを守るように盾を構えずいと前に出た。

足元が揺れる。植物をかき分け踏み付ける音がはつきりと耳に届く。ぎらぎらと数え切れないほどの怪しく光る眼が近づいてくる。

怪物たちは上と下から襲いかかってきた。

火縄銃が一齐に火を吹いた。怪物たちが派手に転がって倒れる。エドワードは矢を三本替え、空を飛ぶ三羽の怪鳥を仕留めた。怪鳥は回転しながら樹や地面に衝突した。

火縄銃の音で怪物たちの動きが僅かに鈍ったものの、後方部隊は完全に怪物たちに阻まれた。変位磁石を使ってる余裕などない。後方部隊の小隊長はモリビトが潜伏する左側へと部隊を連れた。怪物たちのおおさに、部隊は怪物がない森の左方向を進んだ。

……そして、怪物どころかモリビトが追撃しないことに疑問を覚え

た頃、部隊の者達は罨にかかった。

足に糸が引つ掛かった者、縄で体を吊るされる者、飛んでくる丸太を避けようとして頭を打ち付ける者もいた。

入り組んだ森では、どこに罨を仕掛けられてるのか判断しがたい。途中から妙だとは思っていたが、やはり罨か。

「罨だ！　ここは、モリビトの罨の集積所だ！」小隊長は大声で喚起した。

後方部隊はパニックに陥った。あっちへ行け。こっちへ行け。その度に、罨に嵌った。

「な、何ということだ！　動くな！　一度踏み止まり、一步ずつ慎重に行くのだ」

と、そう言う小隊長自身が罨にかかってしまった。獲物を生きて捕える編み製の罨で、小隊長と部下の二名が網に捕えられた。小隊長が罨に掛かったことにより、部隊の混乱は収集が付かなくなった。遂に、残ったのはホープマンズとグラディウスの二組。

「助けられる限り助けて行こうと思うが、どうだオールドリッチ」

エドワードの案に、オールドリッチは無論だと答えた。

「慎重に行けよ。小隊長さんも……」

遅かった。シシヨールは知らぬ間に糸を断ち切っていた。木々の間から、縄で括られた細い杭を何個も巻きつけた物体が飛んできた。シシヨールはキアラを突き飛ばし、盾を構えた。コルトンは素早くシシヨールの横に付き、二人して盾で受け止めた。衝撃は強く、二人は盾を放しそうになったが、持ち前の怪力を発揮して何とか持ちこたえた。胸を撫で下ろしたのもつかの間、キアラがきやあと悲鳴を上げた。

徒歩十歩分離れて、落ち葉が堆積したところでキアラは、喉元にモリビトのナイフをあがわれていた。

モリビトは全身土や枯葉がまとわりついていた。その身のこなしといい、普通のモリビトより手強そうだ。

モリビトの腕には、赤い布が巻かれてある。赤い布には見覚えがある。大抵のモリビトが緑や茶色などの地味な装備を身に着ける中、た

まににいるこの目立つ紅色の服を着た者はかなり腕が立つ。

「くそー！ 見落とすとは」

エドワードはモリビトの存在に察知できなかつたことを悔やんだ。カールロも同じ気持ちだ。

あまりの混乱に、二人の優秀なレンジャーもモリビトの存在に気付かず。集中力を欠いたキアーラも気配の察知を遅れた。

モリビトはキアーラの両腕をねじり上げた。キアーラは苦痛で顔を歪めた。

言葉を話せないのか。モリビトは行動で武器を放せと示した。その時、ばちりと関係ない方向で木の葉が爆ぜた。

アクリヴィが雷の術式で足元の近くを打つたのだ。視線を外した瞬間、カールロは弓を。そのカールロよりも速く、エドワードはナイフを投げつけた。ナイフはキアーラを傷付けず、見事にモリビトの額に命中した。

しかし、キアーラを助けたのは無意味であつたのかもしれない。ぞろぞろとモリビトたちが現れて、武器を捉えた衛兵や冒険者たちに突きつけていた。杖を持つ、長髪で紫の衣を着たモリビトが分かる言語で喋った。

「投降しろ。今この場で捕えたお前たちだけは、しばらくの間生きられるぞ」

「だとさ」

オールドリッチはあっさり武器を捨てた。オールドリッチに倣い、他のメンバーも惜しむように、武器を置いた。

「お前たちもだ」僧侶はエドワードを見て言った。

エドワードはこくりと頷き、腰のサーベルや矢筒を背中から降ろした。

すると、一人のモリビトがエドワードの頭を棍棒で殴打した。強烈な一撃に、抵抗する間もなく、もう一回頭をぶたれ、エドワードは倒れた。

エドワードを呼ぶ仲間たちの叫びと、モリビトの言語で馬鹿者と叫ぶ僧侶の叫びが両耳に木霊する。

これで、二度目か。途切れく意識の中、最後にそんなことを思い、気絶した。

予定より早く帰還した二番隊を見て、内壁の上にはいたゲンエモンは駆けだした。そこには、あるべきはずの三十余名の姿が見当たらない。ゲンエモンは乱暴に副隊長の両腕を掴んだ。

「何があつたというのだ!? 三十余名の者たちはどこにいる。グラデウスは、ホープマンズは、レッドユニティは。五人兄弟は。衛兵たちはどうしたのだ?」

ゲンエモンの呼びかけは呆然自失の副隊長に届かなかつた。大きなショックでまともにものを考えられなくなった彼の頭にも、はつきりとわかることがある。自分の地位はおしまいだ。

「副隊長殿、黙っていては解らん。何があつたのか申せ!」

ゲンエモンは副隊長の体を揺すった。副隊長は糸が切れた人形のように揺さぶられるがまま揺れた。

ゲンエモンの必死の呼びかけに、帰還した副隊長と敗残兵たちは口を重く閉ざした。

その頃、馬屋では大きなブケファラスが突如、暴れ始めた。馬屋の者達は必死に黒い暴れ馬を宥めすかした。ほうほうと口ずさんだり、どうどうと一般的な呼びかけも試した。

「どうどうどう! どうしたい、ブケ? 蛇や悪戯小僧にでもなんかされたか?」

ブケファラスは答えられるはずもなく、ただ、馬屋から出ようと足掻いた。

一六話 生け贄

小隊長の一人が副隊長に代わり、現状を報告した。

小隊長の口から起きたことを聞かされ、ゲンエモンは目の前が絶望で暗くなり、ぎらりと光る眼差しで副隊長に一瞥をくれた。副隊長は、ゲンエモンのその眼差しに気付かず、ただただ頭を垂れていた。小隊長はそれとは別に、新種の樹海生物についても言及した。

「恐ろしかった……しかし、モリビト以上に恐ろしかったのは、あるモンスターです」

「モンスターとなく？」とゲンエモン。

「はい。見たことがない奴です。体は黄色く、背中には蝙蝠の羽根があり、眼は不気味にしっとり淀んだ緑、頭には二本の真つ直ぐに伸びた黒い角を生やした獅子頭の魔物。そいつは、至近距離から二発の弾丸と数本の弓矢を食らったにも関わらず、その状態でしばらく動いて、我々を執拗に攻撃してきました」。

ほかにもめぼしいのはいましたが、あんなに強く、昆虫並みにしつこい生命力のモンスターを見るのは初めてでした。おまけに、毒息も吐いて」小隊長はくいと顎を動かした。右端にいる一人の衛兵が、顔を両手で押さえていた。「一名、目をやられました」

ゲンエモン副隊長に掴みかかりたい衝動を抑え、冷静に指示を出した。

「ご苦労。では、あそこにいる彼を含め、君と動ける気力のある者たちは負傷者をただちに施薬院を連れて行くのだ。副隊長補佐は彼の代わりに、執政院に報告をしてくれ。フリスト副隊長殿は、わしと一緒に内壁の中にある詰所にて、少し話し合おうではないか」

副隊長はぴくりと反応を示したが、今の彼は、ゲンエモンの話し合いを拒否する気持ちも失われていた。

小隊長と副隊長補佐の指示により、帰還した部隊は速やかに内壁内部から引き上げた。ゲンエモンは副隊長の腕をがっちり掴み、強引に詰所へと連れ込んだ。詰所の衛兵たちは只ならぬ空気を察知し、緊張した。ゲンエモンは彼らに微笑みかけた。

「案ずるな。流血沙汰には発展するような馬鹿な真似せんし、させん」
副隊長は糸が切れた人形のように、ゲンエモンに座らされるがまま椅子に置かれた。

ゲンエモンは常として、相手がどんな悪人であれ、まずは敬意を抱いて接することになっている。

だが、副隊長のこの様子を見て、ゲンエモンは彼に敬意を払えなくなった。それどころか、憐みすら覚えた。彼の身勝手さ、彼の器量の狭さには心底愛想を尽かされた。

薄々気付いていたが、やはり、彼は獅子身中の虫であった。

可愛い一人息子だからといって、甘やかされたのが原因だろう。

部下の犠牲よりも自分の地位が危うくなることにシヨックを受けているのも、呆れる。身を焦がしそうな憤りをぎりぎり抑え、表面上は敬意を払いつつも、狙いを付けるように副隊長の顔を見据えた。ゲンエモンの眼光の鋭さに、副隊長は目を逸らそうとしたが、ゲンエモンの眼力は彼が目を逸らすことを許さなかった。

「さて、昨夜は上手くいきませんでした。今日こそはじっくりと語り合います。あなたがお望みとあらば、ミルティユーゴ殿や執政院の方達をも交えての語り合いの場も用意しましょう」

副隊長はようやく、何をと言いかけたが、ゲンエモンの眼光の鋭さと内から漂う張りつめた凄気せいぎに押され、慌てて文句を言いそうになる口を閉ざした。

下手なことをこいつに抜かせば、首が落ちる——副隊長は本能で悟った。

*
エドワードは目を覚ました。黒い熊のような体躯に自分は抱えられていた。

一暴れしようと思ったが、その考えはあまりにも無謀であり、頭はずきずきして視界もぼやけ、体を縛られ目隠しもされているので、下手に動いたら、このデカ物の拳骨が飛んでくるだけだろう。

自分以外にも、小柄なキアラも背負われていた。四階層まで来られるだけあって、並の体力と精神ではない。ただ、カースメーカーなる

陰気で動かない職のためか、幼っぽい外見通りというべきか、他の者より体力が劣る。よく見たら、身体に何か貼られているがどういった物かまではわからない。

目を瞑るな。逸らすなども教えられたが、今回に限っては師の教えを無視したほうがいいだろう。エドワードはこのまま、眠ることにした。再び目を覚ましたエドワードの視界に入ってきたのは、縄で何重にも固定された何本もの寂れた太い木材だった。

「目を覚ましたかー」

周囲が騒ぐ。エドワードはぼやけた顔で、頭が動くままに任せて辺りを見渡した。馴染みのある者たちの顔、太い木材と縄。

エドワードは毛皮を縫い合わせた毛布を被せられ、後には彼の包んだマントが敷かれていた。他の者にも、一枚ずつ毛布が薄っぺらな毛皮製の毛布が宛がわれていた。

声を出そうにも、掠れてでない。

ジャンベがこれをと、水が入った木のお椀わんを差し出した。半分飲んでジャンベに返し、エドワードは改めて、「ここはどこだ？」と誰にともなく聞いた。後頭部をさすり、巻かれた物を引き寄せると、茶色い布が頭に巻き付けられていた。

「モリビトの牢屋さ。あんたは眠らされていたからいいものの、俺たち遅ければ、軽くぶたれて酷い目に遭ったよ」

軽薄な声で答えたのは、木材の一本にもたれかかったオルドリッチ。オルドリッチの左頬には痣がある。

「……そうか……我々はいわゆる捕虜になったのか……」

「捕虜として生かされれば、まだ幸運でござる」そう言ったのは、コウシチ。

「あやつら、我らをただ生かして口を割らせるためだけに、ここへ連れてきたようではなさそうだ」

「分かるのか？」

「我らの言語を解する一人が、『お前たちの命日は今日から一四日後だ』と言っておった。恐らく、良からぬ企みに使われるやもしれぬ。ええい！ 口惜しい。あのとき、喉を切つとけばよかつたかな」

「そんなさもしいこと言うなって」

オールドリツチは背を牢材にもたれて、上を見上げたまま言った。

「案外、助かるかもしれないぞ。それに、一四日後とやらが、逆に脱出のチャンスになると思うぞ」

「そなたのお気楽な姿勢には感服するよ」

コウシチの皮肉にも、オールドリツチは至って無反応だ。

木材牢屋は高さ四メートル、縦幅八メートル、横幅二十メートルのスペースがあり、意外にも広い。

エドワードは牢屋内に誰と誰がいるかを数えた。

自分、ジャンベ、オールドリツチ、コウシチ、ベルナルド、火縄銃の扱いを心得た衛兵四人の内二名、双子のダルメオとダルカス、エドワードが案内したことがある盾持ちの衛兵の二人。たかだか十人程度なら、この居住スペースでも我慢できないこともない。外は茨やつの草が絡み合い、天然の要害を築き上げていた。植物は細いものでも指ぐらいの太さがあり、切れ味がある剣を振るっても、切り開くには苦勞しそうだ。

後方。やや離れたところから声をかけられたので、振り返ると、三十メートル離れた木材牢屋の中から、ロディムが立ち上がって手を振るっていた。

コルトンはその隣で、気軽な挨拶な感じで小さく手をようと挙げていた。見張りのモリビトが槍の柄で木材を叩き、はしゃぐロディムを黙らせた。あちらの牢屋では、残りのメンバーの姿が見受けられたが、自分が居る牢屋とお隣の牢にも女性陣の姿が見当たらない。

前、それとも後ろ、右か？ どちらでもよかった。牢の右(多分)から移動し、前に行き、外を見ると、同じく三十メートル離れた先にも木材牢屋があり、そこに女性陣の姿があった。

「そうそう、今日はもう、正確には十三日と半日だ。トル・ホイの樹とやらが枝垂れきっているからね」

「トル・ホイの樹？」 エドワードは聞き返した。

「俺が話そう」

立って背もたれていたベルナルドが、黒い長髪を払い除けた。

「曲がりなりにも、職業欄に狩人ハンターの名を冠しているしな。あんたほどではないが、それなりの観察眼と状況説明能力はあるよ」

ダークハンターのベルナルドはここに来るまでの事を説明した。所々、オールドリッチなど他の者が訂正したり、口を挟んでくれたおかげで、エドワードは大体の事を把握した。

犠牲者の数は一名。衛兵の一人が罾に嵌まり、そこを樹海生物に襲われて死んだ。

生き残った三十人は、猿轡で口を閉ざされ目を布できつく縛られ、途中まで歩かされた。僅かでも反抗の素振りを見せれば、手や肩をぶたれ、頭や頬を槍の柄で軽く叩かれた。オールドリッチの左頬の痣もそのときつけられた。

感覚からして、十七階にまで連れてこられたとき、モリビトの間からブーイングの嵐が起きた。僧侶たちは文句を言う戦士たちを黙らし、三十人の捕虜たちはモリビトの背や何かとても大きな者たちに担がれて移動した。

丸一日、大急ぎのスピードで、幾度となく運搬役の者たちは交代した。そうして、彼らは現在、見渡す限り茨と樹に囲まれた場所にある木材牢屋に放り込まれた。

コウシチは餓死か、舌を噛み切るか、強引にモリビトに歯向かって死のうとした。しかし、オールドリッチが許さなかった。馬鹿な行為は絶対許さん。いつにない迫力で、オールドリッチはコウシチの荣誉ある死を阻んだ。

トル・ホイの樹とは、地上の言葉で表せば時折れ告げの樹という名称のようで、紫の衣を着た一人が教えた。モリビトたちの時計のような存在。一回伸びれば、地上の時間で言えば、六時間過ぎたことになり、同じく枝垂れば、六時間過ぎたことになる。

カースメーカーたちはお札のような物を貼りつけられた。モリビトの僧侶たちが特別に大地の力を込めた魔を封じる札であり、そのせいで、キアラなどは力が使えなくなった。エドワードはキアラの身体に貼られた物の意味を知った。

オールドリッチは外を指した。オールドリッチが示した方向を見た。

他の樹より太く、弛んだ贅肉腹のような形の樹があった。その樹は枯れたように木全体が枝垂れており、これがトル・ホイの樹であろう。「現状が理解できたよ。では、今後の事は誰が説明してくれるかな」ベルナルドがお手上げのポーズを試してみた。

「さあね。そいつは、モリビトたちに聞いてくれ。奴らのお偉いさんだかが、今日か明日には来て、訳とか色々話してくれるそうだし」

エドワードは二人の衛兵にも物を尋ねた。

衛兵たちは暗い顔で、盾サン役の彼が死んだと語った。

それとは別に、糸目で坊ちゃん刈り、人の良さそうな弓兵のアレイというの名の彼は、待機中の部隊にいますという。彼は事情があつて、緊急事態に限り、通常の戦闘には参加しなくて良い許可が下りたらしい。

「運の良い奴ですよ」そう言ったのは、盾ワン役の衛兵の彼。

エドワードは最初、否定していたが、段々と認めざるを得なくなつた。

自分たちはモリビトの罠に嵌まり、モリビトたちに捕えられ、いかがわしい計画の餌とかに使われるかもしれない。動きたいが、こう捕えられ、当然武器まで取り上げられては、思考と会話しかできない。運を天に託すのみか？

それでも、エドワードなどの男性たちは、一点モリビトに感謝すべきことがあつた。女性と男性を分けてくれたことだ。極限の状態や自由が拘束された状態では、男女はよからぬ関係に陥ったり、男が豹変して女を襲う可能性がある。本人に全くがその気がなくとも、体や下半身の欲求不満と本能を抑えきれず、レイプする恐れがある。

だから、男女を別々の牢屋に分けてくれたことだけは感謝したい。

エドワードは礼を言うと、水の入った丸い椀を持ち上げた。

「ところで、ジャンベ。この水の椀はモリビトが？」

「はい、そうです。時間は判りませんが、ちよくちよく水が入った桶を持ってきて、柄杓のようなもので椀に水を入れていきます。この椀は誰の物でもありませんが、手付かずでしたので、今日からこの椀がエドワードさんの物になります。食事とかも、日に二度ぐらい運んでく

るようです」

「その食事を持つてくるときが数少ない楽しみなんだよな」ベルナルドなどが意味ありげないやらしい笑みを浮かべた。

エドワードは首を傾げた。食事ではなく、モリビトが食事を持つてくる事自体が楽しみとは。

トル・ホイの樹が全体の四分の一まで伸びたとき、地上の時間でおよそ一九時から二十時ぐらいだろうか。

エドワードは食事を持つてきた者たちを見て、ベルナルドの言った意味や意味ありげな笑みの意味をすぐに理解した。

絹のような緑の髪と青紫の長い髪の毛のモリビトの女が二人ずつ、戦士に交じって食事を運んできた。彼女らの髪は地面すれすれまで伸び、背も普通のモリビトの成人男子より高い。腰には長い鞭を携帯していた。

注目すべきは四人の容姿と恰好である。

滑らかな腰つきとくびれ、ふくよかな乳房。身に着ける物は綺麗に仕上げられた布一枚であるが、下半身だけ身にまとい、二人は上半身に服らしきものを一切身に着けてない。そして、整った目鼻立ち。あときの紫の衣を着たモリビトも悪い顔ではなかったが、今ここにいる四人と比べたら、大分見劣りする。人間の基準からしても、四人のモリビトはかなり上玉の美女である。

これなるは、モリビトの戦乙女と名付けられた者たち。通常のもりビトより力を有し、歌には魔力が秘められている。地の戦士と違い、彼女らの遺伝子は次代に残せることが可能であり、選ばれた一握りの戦士と僧しか彼女らと契りを結べない。

エドワードやコウシチは警戒し、探るような眼差しをその四人や戦士たちに向けたが、大半の反応は異なっていた。

「お嬢さん方こねえかな」

ベルナルドはにやけづらを隠そうともしない。他の者も無理に引き締めているが、ふとすれば、顔が崩れてしまいそうだ。

ジャンベもエドワードに倣い、顔を厳しく保とうとしたが、エドワードに「綻んでるぞ」と指摘され、慌てて口を噛み締めた。横目で

ロデウムやコルトンが居る牢屋を見てみたが、心なしか、ロデウムが喜んでいるように思えた。心なしではなく、本当に喜んでいるかもしれない。

呑気な奴らめと思ったが、コウシチの言っていた言葉を思い出した——十四日後。少しでも、死ぬ前の恐怖を紛らわせれば、それはそれで良いかもしれない。度を過ぎたら注意するが、他人の気の紛らわしかたにまでは口を出さないでおこう。

それに、ベルナルドなどはにやけていても、目には隙がない。他の者も同様に。彼らも隙あらば、脱出や反撃のチャンスを狙っていた。油断していると見せかけて、しつかりと警戒を怠らず、敵意を維持していた。それを知って、エドワードは安心した。

エドワードはモリビトの美女たちを見た。素直に美しいと思った。それだけだ。どうせ、俺たちとは関係ない。抱かせてくれるわけでもないし、あれらも敵だ。

隙を狙って、あの鞭を奪い、首を絞める事も考えたりしたが、向こうも向こうで警戒しているから難しい。

土を掘ることも考えたが、作りを見ると、どうやら、木材は土中まで繋がりにしつかりと下の方も結ばれているようだ。

座して待つのみか？ いや、チャンスは必ずあるはず。

捕えられた者たちのなかでも、一番残酷かつ現実的な事を考えているのはエドワードであった。

食事が盛られた椀は、水の入った椀を大きくしたものだ。自分以外の者は既にモリビトから与えられた食事を口にし、生きていたので、毒は入っていないだろう。

てつきり、げとげとした液体やら不純物とか大きなミドリムシがぶちこまれているものと思いきや、良い意味で裏切られた。

でこぼこした黄色と赤で彩られたフルーツっぽい物を置かれた。皿の中身は、焼けた肉。緑野菜の葉っぱ的なものに、尖がった黄色いお米のような物まで添えられていた。外見は地上で見る食材とは少々異なるが、悪くはなさそうだ。

「この果実や肉は初めてですが」ジャンベはぼこぼこした果実を掴んだ。「この葉っぱと米は最初に出されたメニューにも入っていません。この肉と果実にも毒は入ってないと思います」

モリビトが持ってきた食べ物エドワードが疑り深く見ていたのを見て、ジャンベは大丈夫ですよと説得し、試しに一口かじった。

「どうだ？」見ていた衛兵の一人が感想を尋ねる。

ジャンベはにっこり笑った。「薄い酸味の味がします。なんのお肉かは知りませんが、多分、お肉も普通に食べられると思いますよ」

毒味したジャンベの感想を聞いて、他の者たちも少しずつ、料理に手を出した。喉が乾いたので、エドワードも果実から手を出した。確かに薄い酸味の味がする。癖になる味ではないが、喉の乾きを癒すには十分だ。

果実を半分かじり、お次は肉に手を付けた。ただ焼いただけだが、贅沢は言ってられない。

高貴な身分の者ならまだしも、たかだか一兵卒の捕虜待遇としては、むしろ優遇されている。コルトンはこう言っていた。大抵の場合、捕まった名も無き兵士は悲惨な末路を辿ると聞く。

この先、良からぬことが待ち受けているのは間違いないが、牢屋に放置され、干されて死ぬよりはましだなど思った。

水は貯め置きしたいが、そうすると、水を入れてくれないらしく、飲んで空にするかしかない。

エドワードは自分とジャンベが居る牢を一の牢と勝手に呼ぶことにした。コルトンらが居るのは二の牢、アクリヴィやマルシアが居る牢は、女郎とかけて一の女牢じょうらうとでも命名した。

《二の牢》

「俺としちゃ、あっちの牢屋にぶちこまれても良かったのに」

ロディムは女性陣が捕えられた牢屋を見つめた。

「だとしても、お前さんは手をもじもじさせるだけで。そのまま手出しもせずに終わりだろうな」

コルトンはロディムを無視し、隙間から外を窺った。木材は太く、固い。下手な安打物の鉄剣より頑丈な造りだ。縦にした手ぐらいな

ら通れるが、自分の太い腕では無理である。それは自分以外にも当てはまる。とはいえ、軟体動物のような体の造りでなければ、人間がここを通るのは無理であろう。

鬱々として思いもエドワードが目覚めたことにより、安堵して、何故だかこの事態も切り抜けられそうな気がしてきた。

この牢にはコルトン、ロディム、カールロ、アデラ率いるパーティ・レッドユニティのアルケミストのクリイル、銀髪のバジリオ、五人兄弟の三つ子の一人、小隊長以下、衛兵三名である。

コルトンにもロディムにも、これといった策はない。チャンスがあれば、一四日後の命日とやらかもしれない。ともかく、今は訳を説明してくれるお偉いモリビトが来るのを待つのみである。美女と戦士たちがやってきた。ロディムがへへとにやける。コルトンは顔をしかめたが、ふと気を抜いたら、ロディムのように顔が崩れてしまいうだ。

女性陣には二人、こちらには美女一人が来た。奇怪な形の果実であつたが、気にせず食べた。毒入りだとしても、死期が早まると思えば、却つて気が楽だ。そうして、無言の時。全員四階層まで来れる実力を有するだけあつて、心身共にタフであるが、まだ慣れないこの状況では、語る気力すら起きなかつた。

「ああ。せめてリユートでもあれば、この限りなく退屈な時間を紛らわせるのになあ」

そう小声で愚痴るのは、バジリオ。彼とジャンベの楽器も当然、取り上げられた。

「少しは退屈をしのげるかもしれないぞ。外を見ろ」

来てから、食事時以外は殆ど立ちっぱなしのカールロが牢の端にまで寄り、外を眺めた。ロディムがどれとびつたり張り付くように覗くと、モリビトが槍の柄でロディムが覗いている付近を叩いた。

「何でおれだけ!?!」

「お前は近寄りすぎなんだよ。少し離れろ」

ロディムはカールロの言われたとおり、今度は少し離れた。

牢屋番のモリビトや他のモリビトたちが、急に畏まったように姿勢

を正した。笛の音が聞こえた。あの一八階での戦闘で聞いた笛の音とは少し異なる。

「どうやら、奴らの事情を話してくれるお偉いさんのおでましのようだな。では、ほれ小隊長さん。立場上、この面子ではあんたが一番偉いわけだし、そんなむつつりとした顔して機嫌でも損ねられたら、この場でお陀仏だぞ」

小隊長は頑固な反応を示した。

「敵の手の平に踊らされるぐらいなら、死んだほうがましだ。地上にある街にこれ以上、迷惑をかけずに済む」

「そうかい。だが、俺はまだ死のうとは思ってない。ともかく、形だけでも礼を見せたらどうだ？」

「忠誠深い軍人魂は素晴らしいですが、その魂と誇りを守るためにそんな態度を取ったら、虚しい空威張りにしか見えませんよ」とコルトン。

小隊長は副隊長ほど頑固ではなかった。カールロとコルトンの忠言を聞き入れ、来るであろうモリビトのお偉方と会うため、胸を張って真っ直ぐな姿勢で立った。

吹き鳴らされた笛の音が止んだ。ついにモリビトの総大将のおでましである。

《一の女牢》

女性陣は会話もせず、じっと立ったり、座ったりした。

彼女らの仲は決して悪くないが、シヨックから立ち直れず、まだ話す気力が起きなかった。

この牢には、アクリヴィ、マルシア、シシヨー、キアーラ、アデラ、ブルーナ、レツドユニテイのレンジャー、三つ子のジヨハンナとトルニヤにファイリが閉じ込められていた。

アクリヴィもだんまりを決めていたが、自分の考え事を邪魔されたくないためでもあった。彼女は心の片隅で、ずっと引っかかっていることが二つあった。モリビトを見るのは初めてであるが、モリビトにまつわる伝承をどこかで耳にした記憶がある。

静かに目を閉ざし、師と共に渡り歩いた過去の世界を旅する。そ

う、どこかで。あの日あの時は、紛争やらの騒ぎで、じっくり話を伺えなかつたが、少しは話を聞いた。確か、あれは……。

「……緑髪みどりがみの死人鬼しびと……」

アクリヴィが思い出すように呟いた一言は、静寂な牢内では思った以上に響いた。

「アクリヴィさん、緑の鬼がどうしたのです？」

ざつくらばんに伸ばした燃えるような赤髪、その赤髪に負けず劣らず赤い瞳、街の男に若乙女も振り返り返そうな凛々しい顔立ち。

まだ若いのが、既にチームリーダーとしても冒険者としても、街に来たばかりの頃と比べ、一人前の頼もしい顔付きに成長した女。パーティ名・レットユニティのリーダーであるアデラが、アクリヴィに聞いた。

「関係あるかどうかわからないし、思い出す前は、どこかで聞いたことがあるような気がしないこともないというぐらい、曖昧模糊な記憶だった。けど、ようやく思い出した。エトリアから歩いて、順調に進んでも、二カ月も離れたところにある山岳地帯の村があるの。そこは、他と幾つかの部族と宗教関係のトラブルがあつてって、これはどうでもいいわね。ともかく、そこで、“緑髪の死人鬼”という物語をほんの少し、村のお婆さんから聞いた。ただ、その日の夜、別の部族がその村に侵入してきて、騒ぎから逃げようと、話の途中で師と共に命からがら、そこから逃げ出した。……あれは、辛かったわ。三日間、食事も水もろくになかったし。ごめん、また逸れたわね。語ったところでどうにもなりもしないけど、暇潰しぐらいにはなる」

「語つてちょうだい」と言ったのはマルシア。

アクリヴィは語った。といつても、彼女自身、今こういう話があつたなと思ひ出したばかりで、殆ど語れなかったが、幾つか重要な点があつた。

緑髪の鬼の先端は朱色、目玉は血のように真っ赤、肌は死人のように青白いという外見を説明する下りだ。緑髪の死人鬼には、サイズを小さくした妖精のような鬼もいるとも語られた。物語は村人たちが鬼と出会い、鬼とどう付き合うか判断するところで終わった。

緑髪の死人鬼の短い物語を聞き終えた後、全員の顔は驚愕していた。

「モリビトは昔、地上に出た。あるいは、地上に出た一派もいたのかしら？」

疑問を簡潔にまとめて答えたのは、キアラ。

彼女は首や手足に一枚の布が巻かれた。その布は複雑な絵や文字が書かれ、簡単に取れそうなのに、引っ張っても取れず、彼女も力技では無理と言った。

「そのどちらかか、どちらかかもしれない」とアクリヴィ。

「どういう意味？」

「つまり、地上に出た一派がいたとする。その地上に出た一派が地上は安全だと言ったあと、より多くの者たちを引き連れて、地上に出た可能性もあるということ」

マルシアが首を傾げた。

「でも、仮にそうだとすると、そんなにぞろぞろ多くでたら、緑髪とかとは異なる名称だろうけど、あの人たちに関する伝承はもつと地方に残ってると思うわ」

「まあね、あくまで推測にしか過ぎない。だけど、昔話には必ず意味があるはず。確証はないけど、この物語は昔、モリビトが地上に出た可能性を示している」

アクリヴィの心は好奇心で疼いた。モリビトから話を聞けるものなら、一度聞きたい。

彼らの伝承、暮らしぶり、自身の文化への観念、厳しく残酷な地下世界で生き抜く方法など、興味が尽きない。

小さく息を吐いた。

無理だろう。少なからず、自分もモリビトたちを殺めた事実を否定しようがない。師は無益な殺生を拒んだ。もし、自分も師のような姿勢を貫いていたら、あるいは。

離れた牢が叩かれる音がした。小さく驚きあげた声は、ロディムだった。思わず、鼻で笑った。笛が鳴り響き、アクリヴィは考えるのを一度止めた。

「前の笛とは異なる感じだな」

じつと正座姿勢のシシヨーが初めて口を開いた。

「ええ、そうね。賑やかといおうか…そう、歓迎しているみたい」

マルシアの言っていたことは概ね当たった。

笛の音が鳴り止み、そろそろと紫の衣を着た数名と紅服を着た戦士たち。集団の先頭を居丈高に歩くのは、とても背の大きなモリビトだ。

他の子供ぐらいのモリビトと比べ、そのモリビトだけは地上の男の大きさがうらいた。随分着飾り、手には鳥の羽で飾った長い鉄製の槍が握られ、精悍な顔には顎鬚がよく似合う。地上の貴族の服装をしても、このモリビトなら優雅に着こなせそうだ。そう、そのモリビトには自らの自信から来る余裕と気品すら漂わせた。

周りのモリビトもそのモリビトを敬う様子が見て取れた。

小隊長はびしりと居住まいを正した。想像とは大分異なる相手を見て、自らもできる限り、礼をわきまえようと思った。一団がちょうど三つの牢の中間地点に着くと、長と思しきモリビトは声を出した。そのモリビトはびっくりするほど、流暢な言葉で話した。

「諸君らに、指導者に位置する人物はおらぬか。いなくとも、話を進めるが」

小隊長は名乗り上げた。

「エゴイツと申します。私は高い身分の者ではありませんが、今は捕えられ、引き離された三十人の部隊を率いるよう命じられた者です。あなたの言葉に従えば、一先ず私が指導者の位置にあたいするかもしれません。ご不満であれば、引き下がります」

モリビトは一団を置き、一人で小隊長がいる牢に近づいて彼の顔を見た。

小隊長は気圧され、いたたまれない気持ちになった。自分如きが、このモリビトと接していいのか。モリビトは手が届くか届かない範囲まで来て、言った。

「確かに私は言った。今だけは、この捕えられた者たちの中ではそな

だが一番偉いことになる。だが、最初にも言ったとおり、これから語ることは指導者のみではなく、ここに捕えられた者たちに聞かせる。私がこのことを問うたのは、いざという時でもまとめ上げられる立場の人物がいるかという意味もある。そして、そなたに人をまとめ上げる力がどの程度具わっているかは分からぬが、期待はしておこう」

モリビトは中央に戻ると、大声で語り出した。まるで、民衆に演説する敏腕政治家や軍人のようである。

「私にはとうに名は無い。だから、身分は明かそう。私は大僧正長、皆からは神官とも呼ばれる。分かりやすく例えれば、モリビトの指導者であり、神鳥しんちゅうにお仕えすることを許された唯一のモリビトでもある。自己紹介はここまでだ。私は彼以外の名や身分を尋ねる気はない。それでは、短刀直入に言おう。そなたらは、今より十三日と半日後。トル・ホイの樹が残り五十三回伸び枝垂れる頃、ここより下の階、君らの言葉で言えば、二十階かな？ 二十階の神鳥の広場にて、神鳥生誕祭のお供え物になってもらう。その間……」

「ざけんなよー！」

神官の演説を阻んだのは、ロデイルだった。

「何が供え物だ！ とつとと槍でも火でも付ける！ 慎重だかキンチョーだかしんねえが、そんな訳分からん供え物になってたまるか」
言葉自体は分からなくても、口調と態度から侮辱されたのを知った見張り役のモリビトは、ロデイルを槍で刺そうとしたが、神官はモリビト語で「待て！」と止めた。

「待つのだ。どうせ、十三日までの命。それまでの辛抱だ」

見張り役は槍を置き、跪いた。神官は人にも分かる言葉で話を続けた。

「命が惜しくないなら、いくらでも吠えるがいい。今は止めてやるが、私がない時にそんな口の利き方をすれば、もうそこにいる者の槍を止められんぞ」

まだ何か言いたげなロデイルを、コルトンとカール口の二人がかりで押さえた。

「癪に障るのは分かるが、この状況ではいくら何を言っても、無駄なだ

けだ。お前が叫んで名誉ある死を遂げても、俺や他の奴はまだ死にたいと思つてない」とコルトン。

「戦場から逃げたビビりに言われたくないね」

この挑発を聞いて、捕まつて苛立つコルトンはロディムを殴りつけてやろうと思つた。そのとき、隣の牢から鋭い声が発せられた。

「黙れロディム！ お前の気概は買うが、口を開けるべき時と閉ざす時を知れ！ 俺に叱られたのが悔しければ、大人になり、まずはモリビトの話を聞け！ 文句はそれから聞いてやる」

ジャンベは、エドワードの怒鳴り声の冷たさと凄さに驚き、一步分身を引いた。エドワードは礼儀正しく、仲間内でなくても気軽に話すような人柄だが、怒つたときの彼は本当に怖い。

エドワードに怒鳴られたロディムは親に叱られた拗ねた子供のように、口をむつりつぐんで牢の木材部から離れ、ゆっくり座つた。コルトンも、自分が叱られたわけでもないのに、殴りつけようとした自分が子供っぽく思え、ロディムから離れて座つた。呆れたようにカール口は首を微かに振るつた。エドワードは立ち上がり、仲間の非を詫びた。

「話の腰を折つて済まない。供え物とやらの話の先を続けてくれ」

エドワードのこの言い方も、身分が上の相手には少々失礼であるが、モリビトの神官はエドワードが居る牢をチラと見ただけだ。

「よかろう。その間、君らには生きる為、儀式の一日半前までは食事を与え、前日までの間は水を与える。理由は簡単。神鳥の御膳に供えるものは、身を清めなければならぬのだ。そして、儀式より三日前にはある試練もこなしてもらふ。私が語るべきことはこれまでだ。十三日後にまた会おう」

一団が去ろうとしたとき、またしても、彼を阻む者がいた。

「待ってー！」

二の牢からだ。次に阻んだのは、アクリヴィだ。

「聞きたいことがあるの、あなたたち昔、地上に出たことがあるの？」

神官は二の牢に三步分近づき、聞いた。

「だとして、それがそなたと何の関わりがある？」

「関係ないでしょうね。だけど、試練とやらと私の知っているモリビトにまつわる伝承は何か関係があるのかな？　そう思っただけよ」

アクリヴィの言ったことに、二の牢に居る者たちはアクリヴィの企みに気付き、密かにほくそ笑んだ。

神官は興味が湧いたらしく、アクリヴィに話すよう言った。アクリヴィは緑髪の死人鬼の物語を伝えた。ついで、「試練」との関係性を伺った。

「何の試練かは知らないけど、聞けば、もしかしたら、緑髪の死人鬼と呼ばれた者たちとモリビトの関係性が分かるかも」

しばし無言ののち、神官は肩を震わし、くくと薄ら笑いを浮かべた。「緑髪の死人鬼」とな。失礼な表現だ。お主の言うとおり、遙か昔、我らの先祖の中で地上進出を果たした者たちがいた。彼らは三世代の繁栄を果たせば、メツセンジャーを送るといふ言葉を残した。だがしかし、メツセンジャーは何千年経った現在も来ない。それをまさか、地上の者から聞かされるとは……皮肉よな。一人残らず殺されたと考えるべきか。これだけは答えておこう。試練とお主が知るその伝承は、何の関わりも持たぬ。試練は歌を聴く。それだけだ」

もうこれまでだと、神官は話を打ち切った。まだ話を聞きたかったが、これ以上はこの勘の良さそうな相手には不味いと思い、地上風の謝辞の作法をして下がった。

神官と一団は来た時と同じく、歓迎の笛で見送られた。

《一の牢》

アクリヴィさんが語った緑髪の死人鬼は初耳であるが、全員、彼女には感謝していた。

アクリヴィさんのお陰で、試練がどういった内容なのか知ることができたからだ。

「歌か。儀式には上手い歌の奴しか駄目なのか？　だとしたら、十日後までには生き残れるのはジャンベとバジリオだけだな」

オルドリッチは冗談めかした。ベルナルドが喋った。ベルナルドは隙あらば、退屈がちな獄内の湿っぽい雰囲気盛り上げようとした。

「俺は自信があるぜ。何なら、歌ってみようか」

「歌わんでいい」と、オールドリッチはにべもなく言った。二人のしょうもない漫才劇の反応はいまいちである。オールドリッチはすつくと立ち上がった。

「ええと、まあ。どう転ぶか分からんが、取りあえず、体が鈍らないよう、ストレッチや筋トレを教えてやろう？」

「筋トレとは何ですか？」

ジャンベは素直に聞いた。

「筋トレとはなあ」

一の牢は、医師オールドリッチの指導の下、定期的に体を動かすよう命じられた。一の女牢も、マルシアが他の面子にストレッチや筋トレを推奨していた。見張り役たちは、地上の者たちのストレッチや筋力維持トレーニングを奇妙な目で見たが、特に注意はしなかった。

筋トレしている間はまだしも、やはり会話は続かず、一同は沈黙した。一三日間、ずっとこの状態で暮らすのだろうか？ 二の牢のコルトンとロディムはどうしているのか？

二日後、思いも寄らぬ交流が彼らを待ち受けていた。

《二の牢》

ロディムとコルトンは間を置き、口を利かなかった。

コルトンはいかんなど思った。喧嘩しそうになつて、タイミングを外れ、間を置いて口を利かない。これでは、子供だ。

さりとて、ロディムのあの言葉は腹が立った。事実に近いだけに、余計腹が立つ。不味いと分かつてても、子供っぽいと分かつてても、自分から言うのは癪だ。

牢の者たちは、二人の問題だと放っておいた。数時間後。コルトンは意地を捨て、話し合おうとした。が、ロディムから動いた。ロディムは目を下に下ろし、ゆつくりと顔を上げると重く口を動かした。「悪かったな。殺すことを遠回しに勿体ぶった口調で言われて、なんだかむかつ腹が立ったんだ」

コルトンは微かに笑みを浮かべ、ロディムの肩に手を置いた。お互い夢見がちな子供だな。

「嫌になって逃げたのは事実だし、俺も少しむかついたが、もう大丈夫だ。俺は怒っちゃないよ」コルトンはにやりと笑った。「エドワードを怒らすほうがよっぽど怖いよ」

「ははは。違うない」

二人が和解したことに、共にする者たちは胸を撫で下ろした。

離れても、二の牢の空気が和やかになったことをエドワードとジャンベは感じた。

捕まっている間、冒険者と衛兵はただ、退屈な毎日を過ごすだけではなかった。労働にも駆り出された。数人ほど牢から出されて、手足をある程度自由が利く状態で歩かされた。手だけを自由にされたら、行き着いた先で棒切れで溝を深くした。

首に縄をかけられたまま、何時間も背中の中に入れて薪となる枝や草を背の中に入れる作業をさせられる者もいた。

これを機に、脱出のチャンスを考慮したが、やはり難しい。同じ顔突き合わせれば、相手もいつか油断するだろうが、作業となる場に行く度に見張り役は違っていた。ならば、経路を探すのはどうかという提案もあったが、これも難しい。

何故なら、移動中はすっぽりと顔に汚いずた袋を被されているので、景色を拝むこともできない。勘の良い者たちの言葉を信ずれば、作業場で大体徒歩で三十分から二時間かかると判明。

囚人たちは話し合うが、一向に良いアイデアは浮かばない。牢の見張り番もあてにできない。当たり前だが、モリビトの警戒心はこちらの想像以上に強く、付け入る隙が見当たらない。

後日の出来事で決定的となる。

時折れ告げの樹が八回半伸び枝垂れた頃、何十人かのモリビトたちが囚人小屋広場に集う。

彼らの目付き、雰囲気から察するに歓迎ムードではなさそうだ。男もいるが、多くは女や子供だ。隣のジャンベがエドワードに尋ねた。

「何が起きるのでしょうか？」

「頭を庇え。石とか飛んでくるかも」

言うが早いか、石が飛んできた。石は一個で木材に跳ね返った。続くように、小さな石ころが降ってきた。

大体、木材に跳ね返ったが、隙間から入ってくる石もある。これにはたまらず、毛布を前に重ね合わせて、投石から身を庇った。

見張り役たちが注意するものの、その声音こわねからして、本気で止めてはなさそうだ。

その後はブーイング。モリビト語は分からないが、罵倒されていることだけは分かる。聞いていても仕方ないので、カエルや動物の放つ雑音（ノイズ）として聞き流した。満足したのか。そろそろとモリビトたちは立ち去った。しかし、二人の子供と、一人の鞭を携帯した緑髪の美女が残った。子供たちは女の手を小さな手で握っている。

「子持ちか」

コウシチは何となく、三人を見て呟いた。彼らはモリビトの風習を知らないせいであるが、子供二人にとって、一緒にいる戦乙女はいわゆる近所の優しいお姉さんの人である。

「父か……兄を殺された恨み言か？」

コウシチの何気ない一言に、エドワードは自分の父と兄のことが頭によぎった。コウシチの言っていたことは外れた。

一方はしかめ面、一方は好奇心旺盛な顔付きだ。三人は牢と距離を保った。

「何が始まるのだ？」

二の牢のカールロも興味深そうに、モリビト三人の様子を見つめた。

「アナタカタ、ココにクルノハ？」

女の子のように長い髪のもりびとの少年、興味深そうな顔付きの子が話しかけた。一の牢の者たちは、言葉の意味を考えた。恐らく、あなた達がここに来る訳は何だと言いたいのだろう。誰が答えようかとしたら、オールドリッチが応じた。

「スリルと冒険。道なる発見。金。新たな医療技術の開発と新薬。今の俺の夢だ。夢なんて持とうと思えば、いつでも、いくらでも持てる」
モリビトの少年は地上の者が言った言葉の意味を考えたが、イ

リユーやシヤなどはどういう意味があるのか測り兼ねた。

「……ユメ……う？　モリビト殺すの、ユメなの？」

子供の正直な疑問には、答えるのが難しい。オールドリッチがどう返答したものと迷った。オールドリッチの代わりに、エドワードが答えた。

「モリビトを殺すのは夢ではない。ただ、道を行くのを邪魔するならば、戦うだけだ。邪魔をしないのなら、戦わない」

エドワードは解りやすく言ったつもりだ。少年は眉根を寄せ、首を捻った。隣のしかめ面の少年が声を出した。

「ワラナイ！　道行くナラ、話せ！」

話し合いをしろと言いたいのだろう。しかめ面の少年は隣のお兄さんが死んで、地上の者に怒っていたが、隣の少年に誘われ、憎しみよりも好奇心が勝り、物は試しと会いに来た。戦乙女は二人の身を案じて付き添った。

しかし、今のエドワードの言葉を聞いて、がっくりした。やはり、野蛮な奴らなのだろう。エドワードは冷静な態度で、身ぶりも交えて反論した。

「話せと言うが、話す前に、君らの交渉役が『殺されたのは四人だ！

嘘吐きめ！』と言って、我らの使者の一人を攻撃した。二人のモリビトを殺した事実は認めるが、更にもう二人のモリビトを殺めたのは知らないことだ」

「もういいー！」

少年はモリビトの言語でそう言って、立ち去った。女な困ったようにきよどきよどきとしたが、立ち去った少年のほうを追いかけた。一人の少年は残った。

「嘘ツクノ？」

「嘘ではない。話し合うとした時点で、二人のモリビトが殺された言われても、何のことだかわからない。繰り返すが、二人を殺したのは間違いないが、そのときは、それ以上のモリビトを殺めたりしてない」

残った少年も、やがて怒ったような顔付きしてきた。

「ソウリヨサン、黒いスカタの地上の者たちが殺したとイテイタ」

「黒い姿？ 君が良ければ、話してくれないか？」

見張り役は咎めないのを見て、少年は遠慮がちに、やがて、交渉の団に加わった一人から聞いた出来事を教えた。少年の片言な言語を翻訳するのは苦勞したが、エドワードを含む一の牢の者たちは目を見開いた。

「そんな奴ら知らんぞ。何より、ここに捕えられた者たちを含めても、そんなに小さい背恰好の奴なんかおらん」

「ホント？」

「本当だ」

少年はエドワードの眼を見つめた。どこまでも真っ直ぐな瞳には、エドワードが嘘を付いてないことが読み取れた。

「……願うことなら、君の名は？ 私はエドワードという名だ」

牢の者たちはぎよつとしてエドワードを見たが、少年は恐る恐る、面を上げた。名を明かせば魂を操られるとでも思っているのか。

更に躊躇った様子だが、相手が名乗り上げたのに、自分が逃げるのは卑怯で恥だと思い、名を明かした。

「……ジェルグ……ジェルグ」二度名前を告げた。

「ジェルグか。良い名だ。では、初対面でこんなことを頼むのは気が引けるが、出来ることなら、今の話を隣と前の牢に居る者たちにも言ってくれないか？ 頼む、ジェルグ」

ジェルグはううんと腕組みをしたが、エドワードの横に置かれた、射撃時に砂に目が入らぬよう作られた新しいエトリア製品の「ゴーグル」を指した。

「ソレ、チョウタイ」

さすがに目に余ると思ったのか。見張り役はそれ以上、ジェルグと囚人との対話を駄目だと拒否した。

ジェルグは惜しそうに一の牢から去ったが約束通り、二の牢にも向かった。

上手く見張り役に言い訳したらしく、ジェルグは二の牢の者たちに事情を話した。一の女牢へ向かおうとしたら、戦乙女が友達を連れて戻った。

「ジェルグ、まだいたの？ 戻るわよ」

「あつちの人たちと最後にちよつと話をしたら、帰るよ」

女はジェルグの言い分を聞き入れた。

「でも、手短にね」

ジェルグは要領を得たらしく、最後は多少、要点を得た話し方ができた。戦乙女は二人を連れて、村に帰った。

「エドワードよ、お前はと思う？ 俺は執政院とかが臭いと思うな」とオルドリツチ。

「執政院かどうかは知らんが。できることなら、地上にこの事実を伝えるようなら伝えたい」

エドワードは去りゆくジェルグたち三人のモリビトの背を見つめた。姿形すがたかたちは多少違えど、あの子供と女を見たら、迷いが生じた。

そもそも、人間の観点から見るのは失礼なのかもしれないが、あえて人間を基準にすれば。

彼らは野蛮人ではない。空想物語に出てくるような意地汚いオークやウルクⅡハイなどの怪物とは異なる、非常に人間に近い者たちだ。ある意味困ったことでもある。

もし、自分が安全な地上で暮らしていれば、モリビトを殺すのに情けはなかったが、面と向かって会話をしてしまった。

モリビトに家族や友人がいると知った今、脱出に成功することができたとして、その後、モリビトとの戦いに支障が出そうだ。弓を引くのを躊躇ってしまうだろう。そんな悩みを余所に、エドワードはあることを思い付いた。というより、エドワード以外の者も思いついた。「あの坊やとは仲良くしよう」

オルドリツチが代表して、皆の頭に思い浮かんだことを口にした。子供を利用するのは良い気分ではないが、四の五の言ってられない。ジェルグと名乗るモリビトの少年をきっかけに、ふせがちだった囚人たちの心がわかかに活気づいた。

後日。村に戻ったジェルグは、忙しく準備する合間を縫って、小休止する神官を見つけた。

「神官様。昨日、私は地上の者たちと話をしました」

「ほう、それで。お前は何を思い、何を考えて話したのだ？」

ジェルグは肌身で神官など大人たちがぴりぴりしているのを感じたが、神官はジェルグに先を促した。

「はい。ええと、話したことは、向こうは二人しか殺してない。黒い恰好をした奴らは知らないと言っておりました」

「知らないだと？ ジェルグ、怒らぬから正直に話すのだ」

ジェルグは話したこと、聞いたことを神官に語った。神官は平静を保ったが、戦が始まる前後の出来事を語るあたり、少年ジェルグの情報は衝撃をもたらした。

神官が凄んだ目付きをして、ジェルグは怯えてびたりと話すのを止めた。神官は厳しい声で言った。

「報告ご苦労。だが、ジェルグよ。二度と地上の者たちと話をすることは許さん。さあ、行け。私にはやるべきことがある」

感情を制御したはずであるが、声を荒げてしまった。ジェルグは背をすつくと伸ばして「はい！」と言うと、素早く去った。

やってしまったと自戒しつつ、板や甲骨文字、歌に残された記録を思い起こした。過去の大戦で、その大戦は幸いにも勝利したが、記録にはこう記されていた。交渉するふりをして、数名の使者を問答無用で殺害。交渉前にも、狩りに出かけた何名かの戦士が殺害されたという記録だ。

捕えた地上の者たちによれば、そんな交渉役の存在など知らないと言言した。過去に起きた事例、現代起きた事。似て非なるが、裏がありそうだ。

ふうと息を吐いた。

過去は文化や人格を形成する土台として重要ではあるが、そればかりに捉えられてはいかん。企みがあつたとしてもだ。

奴らが侵入者であり、最初に我らの同胞はらからを話も利かずに二人を殺したのは事実。

戦意高揚維持のために行う神鳥イワオロペネロプ生誕祭の供え物にあの三十人を貢ぐのも決定。今更、引き返せん。

《一の牢》

数人の囚人が労働終えたところを見計らい、懲りずにジェルグというモリビトの少年はまた来た。昨日の男の子の代わりに、女もいた。仕事帰りで疲れた者たちも、ジェルグが来たら疲れを押しでも、ジェルグと会おうとした。利用するしない以前に、牢の中以外の者で会話をしたり、聞けるだけでも退屈凌ぎとなり、心が和んだ。

もちろん、牢と隔てた状態での会話だが、この変化を悪いとは思わなかった。見張り役も口煩く注意しなかった。相手が子供のためでもあるが、形式では身分が上の戦乙女が良いと言い、子供がそんなに重要な情報を言うこともないだろうと判断した。

多少、罪悪感はあるが、この子供から聞きだせるだけのことを聞こうと思った。暇潰しにもなる。

「歌、歌える？」

エドワードがジャンベの背中を押した。

「こいつは歌も上手いが、楽器の演奏はかなりの腕だぞ」

「キカセテ、ヒイテ」

「楽器は取り上げられたよ。楽器を持ってこられるのなら別だけど」
ジャンベは言った。

「ウン。ソレスルノ、ボクじや無理。ナラ、歌えて」

ジェルグは歌ってちようだいと言ったつもりだ。ジェルグはその旨を伝えたが、見張り役は駄目だと言った。

「なら、私が歌うのは良いかしら？」

美女はさり気無く髪を色っぽく撫でつけた。見張り役は迷ったが、退屈な仕事にちよつとした余興はあつてもいいと思ひ、他の見張り役たちにも一応聞いた。見張り役たちは良いと許可を出し、乙女が歌うのを許した。ついで、捕えられた地上の者の一人で、歌が上手いと言う黒い肌の者に歌わせていかとも頼んだ。

これには、相当渋ったが、結局は許可した。見張り役たちは、神官の指示で叶えられる限りのことなら叶えてやれと命じられていた。ただし、妙な真似をしたり、あまり反抗的な態度を取れば、死なない程度の罰も与えろとも命じられてた。

モリビトの女は朗唱した。敵に聴かせる歌は、聴かせた者の精神を狂わせる歌。今歌うのは、人に聴かせて喜ばせる歌だ。

歌の魔力は疲れた心。苛立つ心。不満や猜疑に充ちた心を癒した。ジャンベも女モリビトの調子に合わせ、歌いだした。言語こそ異なるが、ジャンベの歌とモリビトの歌声で辺りは和んだ雰囲気に含まれた。歌う許可は降りてないが、音楽家としての魂が抑えきれず、バリオも歌声を上げた。

二の牢のモリビトは驚いたが聴かなかったふりをし、三人の朗唱に心身を委ねた。モリビトと人間、三人の小さな合唱団のハーモニーが響き渡る。

何時間も夢心地に浸ったような気がするが、実際は三十分も経っていない。

「イイね、良い歌ー」

ジェルグは拍手をして、一人と二人の美声を褒めた。エドワードはジェルグから思った以上のことは聞けなかったが、暇潰しにはなれたと思えた。

「ほう、そのヒュージモアに乗るのか？」とベルナルド

「ウン、でも、ボクは下手、まだ歩くしかデキない。地上では、馬というのに乗るか？」

ジェルグは片言で、変ではあるが、大体言いたいことは理解できてきた。また、地上の言葉を話せるのは全体の一割程度らしく、好奇心旺盛な本人は度々、僧侶などにせがんで言葉を教えてもらうようだ。

ベルナルドは女モリビトの隙を見て、自分達はどこで働いているのだろうなとさり気無く伺ったが、ジェルグは首を傾げた。一応、用心して、あの人には聞かなくてもいいと言っただけだった。

帰る間際、ジャンベは女モリビトの名を聞いた。

「僕はジャンベという名前です。あなたは？」

女は歩みを止めなかった。駄目に決まってるよな。そう思ったが、女モリビトは歩を止めると、振り返って名乗った。

「サラよ」

ジェルグより流暢だ。戦乙女のサラと少年ジェルグは村に帰った。

「サラか」惚れたりしてないが、モリビト・サラの美声には感心を受けた。

二の牢、特に一の女牢のアクリヴィイは、一の牢の者たちがモリビトと親しげに話すのを見て、羨ましかった。ジェルグは毎日来ることはなかったが、初めて会って、試練の日まで計八日分ぐらい来た。サラは時折り歌い、場を和ませた。

モリビトのサラ、ジャンベとバジリオの合唱団は退屈で憂鬱な一時を紛らわせる最上の娯楽であった。ほんの短い時間だが、歌い手と聴き手に笑みがみられた。そのサラは、試練の日三日前から顔を会わせるにすることは無くなった。ジェルグに試練とサラのことを聞いても、分からないと答えた。

囚人たちは、サラとジェルグを利用する価値は十分にあると理解していた。

だが、そんなことよりも、いつの間にかこの二人と会話することが何よりの楽しみになっていくことにも気が付いていた。

「自重せねばならんな」

そう言う小隊長も、二人の前では自然と顔を綻ばせていた。少年ジェルグを利用して、脱出する計画も見直さなければならぬのだ。

ひしひしと、処刑台上がる日が迫りつつあることを感じた。

《一の牢》

「試練があんな風に歌を聴くだけなら、ちよろいぜ」とロディム。

コルトンはそうだなと頷いたが、それだけではないだろう。

《一の女牢》

いよいよ、明日。試練の日だ。

どうせ、四日までの命だが、一の牢のエドワードたちと二人のモリビトの交流を見ただけで良かった。

モリビトは外見のせいで誤解されて、地上の人間に迫害を受け、地下世界に引っ込んだ。邪悪ではなく、身を守ろうとして戦っているだけであり、モリビト語と地上の言語の一種も話せるほど高度な知能を持つ種族だと理解した。

アクリヴィはこのことを伝えられないのが悔しかった。伝えたくらいで戦が終わることもないだろうが、学者の本文として、発見した事実はきちんと伝えたい。

退屈な一日は過ぎ、試練の日がやってきた。

三人ずつ連れて行かれた。戻って来た頃には、全員抜け殻のように生気がない顔で帰ってきた。

ロデイルとコルトンは勇んで挑んだが、彼らも披露困憊な状態で戻った。何があつたと、話を聞ける様子ではない。お気楽に構えていた者も、これには顔を強張らせた。たまに、上半身が濡れそぼった状態で戻る者もいた。

二の女牢も終わり、一の牢に順が回った。

オールドリッチ、ベルナルド、コウシチが連れられた。帰ってきた三人、ベルナルドやあのオールドリッチにすら陽気さが失われていた。一人、ベルナルドの顔や服が濡れていた。ベルナルドは喘ぎながら、伝えた。

「耳……栓、耳に土と、か詰めても……無駄だ。引つ掻きま……回されて。水、ぶっかけられるから……な」

次に三人が連れていかれ、最後にエドワードとジャンベと二人の衛兵と、四人が牢から出された。二十人もの戦士が槍や剣を携え、腕を縛り上げ、目を隠してしばらく歩かされた。

「お前がいけ」

誰かにそう言われ、一人の衛兵が連れられた。少しして、右方向から衛兵の苦悶の叫びが聞こえた。歌だ。

その歌は何と冷たく、冷酷で、聞いているうちに頭が変になってきた。交代で別の衛兵が案内され、またしても悲鳴が上がった。死ぬほどではないが、相当な苦しみが付いてくる試練のようだ。

今度はエドワードの番だった。エドワードは何度か木の間を通り過ぎたような気がした。

座らされて、目隠しを取られると、無言で佇む槍を持った紅服の戦士たちが辺りを取り囲み、青紫の長髪の美女が腰布一枚とほぼ素っ裸

な格好でエドワードを見下ろした。

女の背後には石造りの祭壇があり、二人の僧侶が立っていた。何が始まるのだ？

女モリビトは静かに歌い始めた。始めは気持ちよかったが、徐々に不愉快なものへと変わった。

エドワードは唇を内側にきつく噛み締め、目をぎゅつと閉じ、必死に耐えようとしたが、歌は容赦なくエドワードを襲う。

例えれば、頭や体を石でこすられて、塩や砂をごりごりと傷口に押し込まれていく感覚だ。大変な不愉快さと苦痛に、エドワードは衛兵たちが悲鳴を上げた理由と、他の面子が疲労困憊な状態で帰ってきたのが分かった。想像以上の苦行である。戦乙女たちが対象者を絞って聴かせる、魔力が込められた呪いの歌。

エドワードは呻き声一つ漏らさなかったが、終わる頃には、精神的にも体力的にも参った。今が絶好のチャンスの場合だとしても、エドワードにはその気力や体力はどうに失われていた。

最後にジャンベの番。ジャンベはエドワードが悲鳴を上げなかったことに安堵したものの、不安や恐れは拭えない。

何が待ち受けているのだと、目隠しを外されて、前にいる人物を見て、アツと声を上げそうになった。

腰布一枚姿の赤裸々な格好の女モリビトは、サラだ。

ジャンベは口を閉ざした。余計な口を聞けば、最悪槍が飛んできそうな心配がする。サラは相手が顔と名前を知った地上の者と知り、動揺したが心を冷酷に保ち、呪わしい歌を聴かせた。

「うわああああ！」

あまりの気持ち悪さと頭痛の激しさにジャンベは悲鳴を上げた。

「サラさんの歌……っ声は……もつと綺麗はなはず、だ……よ……ううっ！」ジャンベは身を震わせて訴えたが、サラは聞かなかつた。

指定時間の半分が過ぎたとき、サラは歌うのを止めた。

「どうした!? サラよ、後少しだぞ? 喉が乾いたのか」

一人の僧侶がサラに尋ねた。

サラは首を振り、哀れむ眼差しをジャンベに向けた。「僧侶殿、私に

はこれ以上、彼らを苦しめる悲鳴を聞くのが耐えられません。もうよろしいでございましょう」

「サラよ。そなたの優しい気持ちは尊ぶべきではあるが、今は戦いの時。優しい気持ちは敵につけいる隙を与える。捕虜を連れて、このような清めの儀式をするのも一度きりだ。モリビトたちの平和のため、最後まで歌うのだ」

自分一人の自我を通せない。サラは申し訳なさそうに、歌を続けたが、悟られない程度に歌の魔力を弱めておいた。そのおかげで、ジャンベは他の者よりも、幾分か保てた状態で牢に戻れた。

食事が出されても、大抵の者は極度の心労で動けず、手を動かすのも一苦勞のありさまだ。

ジャンベはすっかり気力を失った者たち励まし、食事の介助をした。エドワードは大した奴だと褒めた。

「……ジャンベ……歌と演奏もすごいが、あの歌にも耐えるとはな。俺の想像を上回るほど成長したのだな」

「違いますよ」ジャンベは否定した。「普通に聞かされたら、僕もあの歌には耐えられません。彼女のおかげです」

エドワードは「彼女」の名を聞かなかったが、誰だか分かったような気がした。

もう一日が過ぎた。少しは体力を取り戻したが、気分は優れない。いつまでも変わらぬ枯れた風景。地上の太陽が誰もが恋しくなってきた。ジェルグとサラが来たが、サラはジェルグを置いて離れ、顔を合わせようとしなない。

「試練はどんなもの？」

この十一日で、一の牢、エドワードに言われて、一の女牢にいるアクリヴィたちに話し方を教えてもらい、ジェルグの言語は大分聞き取りやすくなった。自分達と付き合う変わり者なモリビトの少年は頭が良いようだ。

「話すまでもない」とエドワード。

エドワードはジェルグに教える気はなかった。彼というより、ジェ

ルグから離れた女モリビトのことを気づかっていたのこと。

「僕、明日で君らに会えるのは最後になる。親や周りがもう駄目だと言うんだ。僕が少し話しをしてみたいたら、凄く怒られた」

「お前の親と周りが言うことも一理ある」

ジェルグは納得しかねたが、うんと頷いてみせた。今日は短い会話で終わった。帰ろうとするサラとジェルグに、ジャンベが声をかけた。

半日後。最後の食事が配られた。いつもより量が少ない。

「これで仕舞いか。よく噛み締めておけよ。ゲンエモンから聞いた、あの世の地獄の閻魔大王とかに舌を抜かれて食事の楽しみが奪われる前にな」

オールドリッチは質の悪いジョークを言うほど回復していた。戦士と美女たちの中には、サラとジェルグも混じっていた。

「ジェルグ。今は渡せないが、この牢から出されて空っぽになった後にも、これを持っていくがいい」

エドワードは近づいたジェルグにゴーグルを見せた。少年モリビトは神妙な顔でうんと首を縦にふった。

「わかった。形見に持っておく。僕は儀式を見ないことにするよ」

少年なりの慰めか、優しさか。エドワードは小さく手を挙げて、ジェルグの言葉を礼として受け取った。

水の桶を持ってきたサラに、ジャンベが一声かけた。

「僕も、他の方もあなたを恨んでいません。伝えたかったのはそれだけですよ」

サラとジェルグ以外のモリビトも囚人に会いに来たが、好意的に接したのは結局、あの二人だけであった。

最後の食事はよく味わおうとゆっくりと噛んだ。脱出の方法もチャンスも見当たらない。あるとすれば、儀式の時だけだが、仮に成功しても、全員の帰還は望めない。

数時間後、腕に最後の水が入れられた。最後の水の量は半分だった。

「今まで食べた分は腹にある。一日ぐらいじゃ死にやしない」

衛兵を除き、オールドリッチなど冒険者たちは一度や二度、絶食する日があつた。それは、決して宗教的な理由ではなく、金が無いからだ。彼らにとつて一日の絶食は苦痛ではないが、後の儀式のことを思うと、胃が重くなる。

樹が伸びきつた。運命の神鳥生誕祭当日。いくら経験があるとはいえ、丸一日、少量の水しか摂取できなかったのはやはり辛い。土を払いのけた石を口の中に入れたりして、舌で転がして唾液を出して、渴きを誤魔化そうとした。

出すものは出し切つた。少し気掛かりなのは、髭も伸び、髪はぼさぼさで服も汚れている点だ。とはいえ、儀式とやらの直前で綺麗に整えられるだろう。

ダルメオが無駄だったかと呟く。それに対し、エドワードは決して無駄ではないと返した。

「まだどう転ぶか分からんぞ」

囚人たちは静かに座し、迎えが来るのを待った。しかし、いくら待てど、迎えのモリビトは一向に来ない。ベルナルドが言う。

「儀式や祭りの準備には時間が要る。そんなびつたり、時間通り来やしないさ」

だが、そうでもないようだ。見張り役のモリビトたちは、定刻をいくら過ぎてても迎えが来ないことに、おかしいと思つていた。一人が様子を見に、近隣の村へ行こうとしたとき、笛と太鼓の音が一齐に鳴り響いた。

「この音は、あの一八階の時と同じもの！ まさか、援軍が来てくれたのか？」と盾ワンの衛兵。

「そうではなさそうですよ。よく聞いてください」

ジャンベに言われ、その衛兵を含む一の牢の者たちは全神経を目と耳に向けた。音に混じり、ジャンベの耳には樹海生物の吠え声も聞こえた。

「何か聞こえるぞ？」

獣が吠える声はモリビトにも聞こえたらしく、見張り役のモリビトたちは恐怖で顔を見合わせると、囚人たちを置いて逃げた。

モリビトたちはマンなんかと言っていたが、吠える樹海生物の群れと関係があるのか？

「今度は何が来るのだ!？」

エドワードは武器はないかと、目の前にある子供の拳ほどの石を左手で掴んだ。せめて、サーベルの一刀でもあればなあ。

*
—————
*

地上。地下世界の神鳥生誕祭より二日前。

総勢百五十名の冒険者と衛兵が出動した。部隊を率いるのはゲンエモン。地上では、副隊長が作戦から外された。彼の懲罰は現時点では保留。それよりも、モリビトとどうするかで揉めた。

今回の作戦の成否で動向を見極める、とヴィズルは宣言した。

ゲンエモンには、もう市民の文句も冒険者の愚痴や衛兵たちの不安もどうでもよくなった。あるのは、この戦いを勝利で終わらせることのみ。

コウシチ。シシヨー。エドワード。オルドリッチ。皆（みな）よ。

ゲンエモンはコウシチたちが生きているように思えた。死んだという感覚がないのだ。

可笑しなことを……現実を否定したいのだな。勝てるかどうか予想も付かぬが、死んだ者たちとこれから出撃するわしらの数を合わせた四倍のモリビトを討ち取ってみせようぞ。

「おやっさん……!」

モンパツイオは背筋を凍らした。ゲンエモンの顔は、いつもの好好爺であるゲンエモンではない。自らの冒険者の教えとして、人を斬れと教えても違和感がない風貌。刹那、垣間見せた鬼のごとき険しい表情。部隊は沈黙の観衆に見送られた。明るい時間帯になっても、人々は活気づかず。エトリアの街は暗い静寂で覆われていた。

登場人物一覧

(主人公とそのパーティ)

エドワード・ウオル 男 年齢27 モデル：金髪レンジャー
ホープマンズのリーダー格であり、騎馬民族エクウウスの生き残り
コルトン 男 年齢29 モデル：おっさんパラディン サブリー
ダー

アクリヴィ 女 年齢26 モデル：金髪アルケミス メンバー
その1

ロディム 男 年齢24 モデル：青髪ソードマン メンバーその
2

マルシア 女 年齢25 モデル：金髪メディック (お姉さんのな
人の方) メンバーその3

ジャンベ 男 年齢19 黒人バード (オリジナル) メンバーそ
の4

ゲンエモン 男 年齢50代 モデル：おっさんブシドー パー
ティ名をつけてない。

ラクロワ 男 年齢30 若禿げレンジャー (オリジナル)

ニツツア 女 年齢26 モデル：ソードマン

ブレندان 男 年齢29 赤茶のスポーツ刈り頭のアルケミス
ト (オリジナル)

ヘンリック 男 年齢26 地味な濡れ髪金髪のメディック (オリジ
ナル)

オールドリッチ 男 年齢26 モデル：オレンジ髪のメディック
(眼鏡かけてないほう) グラディウスのリーダー格

カールロ 男 年齢27 モデル：黒髪 (緑髪?) のレンジャー

コウシチ 男 年齢28 モデル：黒髪ブシドー

ベルナルド 男 年齢29 黒髪ダークハンター (オリジナル)

シシヨー 女 年齢26 モデル：金髪パラディン

キアラ 女 年齢不詳 (推定20代半ば) 虚ろな目をした紫髪
のカースメーカー

ドナ・A・トルヌウーア 女 年齢23 金髪団子髪のアルケミス
ト(オリジナル)

サヤ 女 年齢21 モデル：紫の衣を着た茶髪ショートヘアのブ
シドー

ピエルパオレ 女 年齢24 臙脂(赤茶?)の服で顔に赤い紋様
がある茶髪のカースメーカー

パーヴォ 男 年齢22 モデル：金髪ボブヘアのパラディン(若
い方)

パスカル 男 30代半ば 毛深いレンジャーの男(オリジナル)
ダマラス 女 20代後半 グラマラスな褐色ソードマン(オリジ
ナル)

ヤルヴィネン 男 20代前半 小柄なバード(オリジナル)

ティッグロ 男 30代ちよつと ふとつちよで金髪坊つちゃん
刈りのメディック(オリジナル)

モンパツィオ 男 年齢36 元はケチな盗賊の赤髪赤髭パラ
ディン(オリジナル)

ヌナ 男 年齢33 隻眼レンジャー(オリジナル)

その他、ソードマン二名とレンジャー一名

アデラ 女 年齢22 モデル：赤髪ソードマン レッドユニティ
のリーダー

ブルーナ 女 年齢24 モデル：赤髪の黒人(褐色肌?)パラディ
ン

バジリオ 男 年齢25 モデル：銀髪?のバード

クリイル 男 年齢23 アルケミス(オリジナル)

その他、レンジャーの女一人

トウー&スリー：双子と三つ子で構成された珍しい冒険者の一行。

長男ダルメオ・バード 次男ダルカス・パラディン

長女トルニヤ・メディック 次女フィリ・ソードマン 三女ジョハ

ンナ・レンジャー

ヴァロジャ 年齢三十代 パラディン(オリジナル) エトリアで
も冒険者でも一番でかい大男

他、メンバー三人。エリカという名のカースメーカーの妹もいる。
リカルド 若手のソードマン パーティ名“グラツジオ”率いる
リーダー

エドワードに叱られて以来、気を引き締め直して冒険に挑んでいる。メンバーが一人増えて、今は正式な五人参加型のパーティ。

—————

エトリアの街関係者

執政院ラーダ長 ヴィズル

執政院冒険者窓口室長兼秘書 オルレス

シリカ商店店長 シリカ

金鹿の酒場の女将 サクヤ

エトリア自衛軍総轄隊長 ミルティユーゴ（オリジナル）

エトリア地区本都市担当副隊長（オリジナル） 性はフリスト

弓を持つ細目の衛兵：アレイ 盾持ち衛兵の一人：ヴィリ

厩ひづめ館の主 リストマツディ、ひづめ館の青年 ニコムデス

（オリジナル）

花桜の館女将 アヤネ（オリジナル）

冒険者ギルド長 ガンリユー

戦火から逃れられたエクウウスの一家 父：ティノフェ 長兄：チ

ノス 母と兄弟二人

カルツバス：元はエクウウスと同じ、一二の部族で成り立つ、かつての騎馬民族大国の部族の一つ。

新天地を求め、部族と別れてエトリアに来た一家がいる。

エトリア：長以外の役職は投票や細かな取り決め・査定・試験などによって選ばれる。

エドワードの身内

父親：ゲロリリオン 四十代半ば 戦死

長男：エアリス 二十代前半 戦死

母親：エウドラ、生き別れた身内の一人。 五十代後半 長い心労

で疲れて杖を突くようになった

妹：フェドラ、生き別れた身内の一人。二十代前半

婿（義弟）：ヴァン 二十代前半 フェドラの夫。武芸に秀でてないが、優しい性格

甥っ子：エウゲドロス 四歳

他国の人々（全てオリジナル）

メテイルリク国の將軍 デイアドルゴ・パツチユリオ

メテイルリク：投票などで君主や政治家が選ばれる。

エピザ・トーテイ国王子 ハイノオン

大戦士の父子 父：エキアロモ 息子：エキモロノ

エピザ・トーテイ：君主制

小国アライランスの王 イツフエ

妃と皇女

騎士団団長 モルゴンド

アライランス：君主制

地下世界の住民モリビト

モリビトの神官 男性 40代

モリビトの神官の弟子 女性 20代

巫女の少女（別名：不死の巫女） 年齢不詳

チエチェラとパルッグ 戦士と成人に成りたてのモリビトの若者

10代後半から20代前半

大僧正兼指揮者の一人 クロツエ 三の林村出身 30代後半

モリビトの少年 ジェルグ

モリビトの戦乙女の一人 サラ

その他、各林村りんそんの大僧正と僧侶たち

（ゲーム中での呼び名は、紫の衣を着たのは“グリンヴァルド。白っぽいのを着たのは“グリンドルイド”）

妖精のような姿をしたモリビト（ゲームでは“ピクシー”と“アー
クピクシー”）

黒い体軀で鬼のような姿をした地の戦士(ゲーム中での呼び名は“
フォレストオウガ”)

鱗肌から羽根が生えた悪魔のような姿をした地の戦士(ゲーム中での呼び名は“フォレストデモン”)

長髪で露出が激しい服を着たモリビトの戦乙女 通常の髪色と青っぽい紫髪の者

(ゲーム中での呼び名を使えば、緑髪は“冷酷なる貴婦人”で青髪は“禍乱の姫君”)

モリビトと共に生きる樹海生物

赤紫のモア(ヒュージモア)

蒼き聖獣：コロトラングル

黄金の神鳥：イワオロペネレプ

キャラクターや各勢力があまりに多く出過ぎて、自身もよく分からなくなつたときのために掲載。

あくまで簡易的にですが、各勢力とグループの関係、その勢力の特徴を簡易的にまとめてみたのものです。

話がよくわからない、誰が誰かわからないというときには、是非ご覧ください。

キャラクターの名前に関しては、一部を除き、ネット上にある海外(主に欧州辺り)の人名事典などから、これと思う物を選んでつけました。

その一部を紹介すれば、エドワードは「鋼の錬金術師」の主人公エドワード + 性であるウォルは、war(英語で戦いや戦争を意味)が由来です。

凄くどうでもいい設定(身長)

エドワード 199cm

コルトン 200cm

アクリヴィ 184cm

マルシア 166cm

ロデイム	185cm
ジャンベ	180cm
ゲンエモン	178cm
ラクロワ	203cm
ニツツア	173cm
ブレンダン	181cm
ヘンリック	174cm
オールドリッチ	182cm
カールロ	186cm
コウシチ	184cm
ベルナルド	201cm
シシヨ	190cm
キアラ	160cm
アジロナ(故人)	200cm
ドナ・A・トルヌウーア	187cm
サヤ	170cm
ピエルパオレ	165cm
パーヴォ	181cm
パスカル	177cm
ダマラス	176cm
ヤルヴィネン	163cm
ティツグロ	182cm
モンパツイオ	179cm
ヌナ	184cm
アデラ	173cm
ブルーナ	175cm
バジリオ	180cm
クリイル	172cm
レンジャーの女	170cm
ヴィズル	178cm
オルレス	184cm

シリカ 152cm
 サクヤ 168cm
 ミルティユーゴ 196cm
 副隊長 185cm
 アヤネ 160cm
 テイノフェ 177cm、チノス 175cm
 デイアドルゴ・パツチユリオ 191cm
 イツフェ 176cm、モルゴンド 182cm、妃 171cm、
 女王 167cm
 ヘイノオン 180cm、エキアロモ 198cm、エキモロノ
 198cm
 モリビト (平均身長150〜160cm台)
 モリビトの神官 180cm、弟子の女性 156cm、巫女の少
 女 138cm、クロツエ 162cm
 チエチエラ 158cm、パルツグ 155cm、ジエルグ 12
 9cm、サラ 160cm
 妖精モリビト 40〜50cm、
 地の戦士 (悪魔) 平均260cm、地の戦士 (鬼) 角なしで平均
 350cm超え

十七話 決断と抵抗

遠吠えの距離からして、怪物の群れが間近に迫りつつあるのがわかった。腹は空き、喉は乾き、武器となる物といえは石ころ。各牢に居る者たちは石を握り、アルケミストは術式を練った。

だが、触媒となる籠手が無い彼らは、通常より錬金術の錬成に時間を要し、籠手が無ければ、威力は従来の十分の一しかない。

「とうとう終わりの時が来たかな？ 我らの最後の抵抗。武勇伝を歌ってくれる者がいないのは惜しい」とエドワード。

「この石で、目ぐらい潰してやるか」

片手で石を弄びながらオールドリツチが言った。

怪物の吠え声が更に接近した。きつく石を握り締める。腹を括つたとき、怪物の吠え声に混じり、人の声が聞こえた。牢の外を見ると、モリビトの少年ジェルグとサラが来た。ジェルグは彼らの身を案じてきて、サラはジェルグの身を案じて追いかけた。迫る怪物の咆哮を聞き、二人は縮こまりそうになる足を懸命に立たせた。

ジェルグは手を振るう。

「オーイー・今行くよ」

ジェルグとサラはどこから調達したのか。角張った木片を幾つか嵌めて、動かし、からくりしかけの牢を解錠した。

二人は続いて、二の牢と一の女牢を解錠した。久しぶりの外。久しぶりの仲間との対面。

ひとしお仲間との再開の喜びを味わいたいが、おちおちゆつくりもしていられない。

「急いで急いで！」

ジェルグとサラは急ぐよう促した。捕虜たちは飢えた体に鞭打ち、走った。囚人広場から出る直前、怪物たちが正体を現した。

黄色い体、蝙蝠の羽根、しっとり淀んだ緑の眼、二本の角を生やした獅子頭の怪物たち。

怪物たちは凄まじい勢いで現れ、その勢いで牢にぶつかった。怪物たちは怒り狂い、牢を大きな顎で噛み千切り、腕の爪で引き裂き、太

腕を振り下ろした。怪物の猛攻で、牢はあっという間に木屑と化した。

太い縄と木材でできた牢を瞬時で破壊しつくした怪物たちの怪力。謎の怪物集団の力を目の当たりにし、二人のモリビトと捕虜たちは背筋を凍らした。ベルナルドがおどけてみせた。

「ひえー。おっかない、おっかない。ありや、普通に石ぶつけても大して効果なかったな」

道は広くないが意外にも整備されて、通りやすかった。広場にあった牢を全て破壊した怪物の群れは、ターゲットを逃げる一同に定めた。これが最後と、一同は全速力で駆けた。走りながら、アルケミストたちは枯れ枝を数本拾った。怪物たちが迫ると、一斉に石を投げつけた。

ロデイルム、コルトンのようにただ投げる者もいれば、エドワード、カールロ、コウシチのように、上手く狙いを定め、目や開いた口に石を投げつける者もいた。投石は結果、怪物たちの怒りに余計に火を注ぎ、怪物は速度を速めた。

ジェルグとサラがモリビト語で叫ぶ。前方には、武装したモリビトの戦士一団が待ち構えており、一団の背後には柵と杭が埋め込まれた堀で囲まれた建物の屋根が見えた。あれが、モリビトの住処。モリビトの集落であろう。集落が見えた辺りで、走る速度を人間も怪物も落とさなければならなかった。

突った何十本の杭が寄せ手側を向いているので、突っ込み過ぎれば、串刺しになる恐れがあった。

追いつく直前、アクリヴィとクリイル、二人の錬金術師は拾った枝に火を付け、背後の怪物集団に向かって放り投げ、ついでに火の術式も浴びせた。最大火力で放たれたはずの術式は、基本術式程度の威力しかなかったが、効果はあり、怪物たちの先頭は一時的に歩みを止めた。

捕虜たちは自分でも信じられないくらい勢いで走り、村まで急接近した。やっと村に入ろうとしたとき、戦士たちの槍と剣が入村を拒んだ。

白の衣を着たモリビトの僧侶が話した。

「その二人は入ってもよいが、貴様等は駄目だ。どうせ、今日までの命。援軍が到着するまでの囷になってもらう」

ジェルグがモリビト語で抗議した。

「でも、この人たちは強そうだよ。怪物たちも沢山いるよ。今はモアの脚も借りたほど人手は無いんでしょ？ それに、武器も無い人たちに武器を向けて囷にするなんて、誇り高い森の民のすることじゃないよ！」

「黙れ！ ジエルグ、サラ。お前たち二人の処罰は後だ。とつとと村に入れ！ お前たちはそこにいろ。行けるものならどこへなりと行くがよい。逃げられるものならな」

僧侶はお前たちのところから、地上の者にも分かる言語で言った。舌打ちしたロディムをコルトンが下がらせた。エドワードは適当に石を拾い、棒切れを掴み、村を囲む怪物の群れをキツと睨んだ。後ろのモリビトたちが口々に何かを言う。

「マンティコア！ マンティコア！ ウル・パジエヴィー！ マンティコア！」

モリビトたちはそれを指して、恐怖に引きつらせた声で、怪物をマンティコアと呼んだ。モリビトたちの呼びかけに応えるように、一際、途方もない鳴動が一带を揺るがした。

「姿は見えぬが、遠くにこやつらの親か首領格のけだものがあるやも知れんな」

沢山枝葉が付いた棒で、抜刀の構えを取るコウシチが言った。

地上の者たちが知らないのも当然。これこそ、何千年前、モリビトたちとの覇権争いに敗れ、河から這い上がったおぞましい獣の生き残りの一種。永らくモリビトたちの天敵で有り続けた存在。

その名も——マンティコア。

マンティコアの群れは警戒し、近づこうとしない。それとも、数が揃うのを待っているのか。

戦士たちはジェルグとサラと共に、一応は安全な囲み身を隠した。外に残された地上の者たちとの間合いを、マンティコア達は徐々に詰

めた。

「た、助けてくれー！ お、俺はまだ、こんなところで死にたくない！」

エドワードの顔見知りの盾持ちの衛兵が身も蓋もなく泣き叫んだ。

冒険者とは異なり、衛兵は窮地に立たされる場面に慣れていなかった。衛兵につられて、他の衛兵もだらりと腕を下げたり、無気力な瞳を向けた。小隊長は部下たちを叱りつけ、必死に勇気づけたが、彼の声も裏帰っていた。かくいう冒険者たちも、自らの死を悟って崩れそうだったが何とか踏ん張った。

「おい、せめてピーピー弱音を吐く口をつぐめ。お前以外の者は皆、そうしているぞ」

絶望的状况で心が折れて泣き叫ぶ衛兵の一人をオルドリッチは肩を揺さり、乱暴に立たせたら、平手打ちでけつを叩いた。正気になった盾持ちは一言済まないと謝り、他の者に倣って自身も石と砂を驚掴みにした。エドワードは袖口で気持ち悪いを汗を拭った。喉もカラカラだ。

騎馬民族エクウスのエドワード・ウォル。ここに命極まれり。長いようで短かったな。オルドリッチの言ったことを真似するわけではないが、己の身を毒と化し、喰った奴の腹を下させてやろう。石を強く握り締め、近づこうとする奴あらば、いつでも石をぶつけられる態勢を取った。

村の中のジェルグは衛兵の悲鳴を聞いた。彼の心にあるモリビトの誇り、心ある者として弱者を見捨てられぬ憐み、戦士の勇気が燃え立った。

ジェルグは肩を掴む戦士の腕に噛み付き、脛を蹴り、戦士が飛び退いた隙に小さな体格を生かし、大人たちの間を潜り抜け、柵を飛び越えた。柵を飛び越えたジェルグに、一瞬、全ての視線が注がれた。

「早く来て！ 裏手からなら、何とか乗り越えられるかもしれない」

集落の中にいるジェルグの親と友達、サラが呼びかけた。

「戻ってこい、戻ってこい、ジェルグ！ 彼らを見捨てろ！」

「できないよ！ だって、悪い奴がこの戦争を仕掛けたんだろ？ この人たちが悪くないとは言えないけど、どっちが始めたかより、互い

に殺し合った時点で同じだよ」

説得するジェルグの背後にそつと近寄り、エドワードは後頭下部を打って、ジェルグを気絶させた。柵上のモリビトは槍を投げようとしたが、エドワードはジェルグを担ぎ、上のモリビトに差し出した。

「互いに後には引けんな」

言った意味は分からないが、モリビトはエドワードの言った言葉が何となく理解できたような気がした。モリビトたちは柵の合間から手を伸ばし、ジェルグを引き上げた。

遠く離れた首領各のマンティコアが雄叫びを上げた。攻撃命令であろう。マンティコア達が動き出した。黄色く染まった荒波が押し寄せてくる。この波間に吞まれたら、いかな者として、助からないだろう。

指揮者と戦士は地上の者を見た。四、五名を除き、彼らは勇敢にも素手で大群に立ち向かおうとしていた。決して、その姿に心を動かされたりはしてないが、大僧正はひとつ、危険ではあるが彼らを利用してみることにした。大僧正は防御陣に、地上の者を救うよう命じた。打算的な考えがある指揮者に対し、戦士たちの多くは先ほど同族の少年が見せた行動に心を打たれていた。

モアの羽根を借りたいほど手が足りないのも本音だが、同族であるモリビトの少年が見せた行動も、彼らの心を動かした。村の囲い、捕虜たちが固まる箇所へ急接近するマンティコア達。

「いけえー!!」

オールドリッチが叫び、石を投げる。他の者も続いて石を投げた。しかし、囚人たちが投げた投石は明らかに数が多い。一同の頭上を越えて、大量の石と槍とブーメランが降り注ぎ、雷の矢と火炎弾がマンティコアの毛皮を焦がした。

何本かの槍には縄が輪つかに通されており、手繰り寄せられた。

門が解放された。「来い!」あの僧侶に言われるがまま、捕虜の一同は集落内部に雪崩れ込んだ。門が閉まると、マンティコア達が突っ込んできたが、降り注ぐ石とブーメランを前にさつと引き返した。

戦士の一人が報告に来た。

「怪物たちの関所的役割をも果たす六の林村は落ちてならぬと、五と四と三の村から増援が送られてきました。何とか保つてしよう。しかし」戦士は地上の者たちを胡散臭い目で見た。「彼らを引き入れた訳は？」

「今は存亡の時。訳は後で説明するとして、この者らに、この者らが使っていた武器を渡してやれ。責任は私が持つ」

戦士はさっと踵を返し、他の者も共ににすぐに武器を運んできた。

地上の者たちが武器を持つまでの間、来たるマンティコアの群れを必死に止めたのは、地の戦士たちの怪力と戦乙女の歌と鞭、戦士たちの石や槍による遠隔攻撃であった。

一同は自分達の武器装備が帰ってきたことに喜んだが、喜びを噛み締めている暇はない。白い衣の大僧正が杖を向けた。

「答えよ。ここで我らと戦って死ぬか。あの怪物の胃袋に入るか。だ。我らとあの子を失望させてくれるな」

「短刀直入に言おう」エドワードが前に出た。「俺はお前たちの刃にかかって死ぬ気もないが、それ以上に、あの獣の群れに身を委ねる気はない。代わりと言ってはなんだが、あの勇氣ある少年へのせめてもの恩返しをすると決めた」

「その答えはいかような？」

大僧正の問いに、「こういうことだ」とエドワードは弓矢を番えるのと、柵の段を上り、迫りよる黄土色の荒波に向かって長弓から矢が放たれた。毒矢はまっすぐに飛び、一体のマンティコアの額に深々と突き刺さった。

「続け、ホープマンズよ！ モリビトとは一時休戦だ」

「最初からそう言えって」

ロデームがにんまりと笑い、長柄戦斧を持って剣をたばさみ、柵上に上った。アクリヴィはコートを羽織り、鍊金籠手と手袋を嵌めた。コルトンはジャンベの手を借りて、武装を整えた。マルシアは白衣を着て、槍を握り、医療用品が入った鞆を肩の向かいに提げた。ジャンベは短弓を背負い、突如、ギターを弾いた。

負けじと、他の者たちも次々と臨戦態勢をすぐに整えた。柵上に上

り、マンティコアを迎え撃つための陣形を作った。柵に上ったエドワードは少しだけ背後を見た。いざという時の逃走路や安全な場所を確保するためだ。

入ってきたときは急いでいて気付かなかったが、ここより先に、この柵よりもっと高くて大きな柵がある。五メートルはある。門は開け放たれて、その先にも同じくらいの高さの石を石膏で塗り固めた柵があり、堀まである。手前の柵には尖った剃りが彫られ、勢い余って衝突したら、えらい目に遭う。

今居るモリビトの集落は、例えば、山城のような造りであった。一番奥にある石の柵が破られたら、この集落は一巻の終わりであろう。

エドワードがほんの少し目を逸らした間にも、怪物たちは枯れ森を抜けて、どんどん押し寄せた。森の罟。乱雑に植えられた杭で少しは侵攻を食い止められているようだが、引っこ抜かれたり、刺さった味方を壁替わりになっていた。

地上を黄ばんだ色合いに汚す雲霞うんかの群れをモリビトと地上の人間たちが迎え撃つ。マンティコアが蹴り出すように走る為、一面に土煙がもうもうと沸き立つ。

波が押し寄せる度に、石が降り、ブーメランが投げられ、槍が飛び、矢が正確に急所を射抜き、火縄銃の弾丸が貫き、空気が振動する。槍は縄を巻かれて投げられて、何回も使えるように出来る限り手繰り寄せられたが、標的に深く刺さったり、引きちぎられて回収不可になる物もあった。

僧たちは大地の力を借り、火と雷をどこからともなく召喚し、アクリヴィとクリイルも火と雷の術式でマンティコア達を蹴散らした。

マンティコアたちは攻撃されるたびに引き返したが、引き潮の次に来る上げ潮が高く来るように、第一の柵との位置は確実に狭まり、数も増してきた。さっと数えただけで、優に数百、防御側の二倍を超えている。

戦いが長引くと思い、射手と衛兵たちは矢と弾を残しておいた。物資と補給経路がある地上とは異なり、ここでは使い尽くせば、補給は

無理である。マンティコアたちが目前まで迫った。

「接近戦用意！」

各僧侶と大僧正が指令を飛ばし、戦士と上級戦士であるウオリアーが身構える。

地上側も小隊長の号令下、衛兵は盾をかざし、冒険者たちは思い思いの方法で迎撃態勢を整えた。

マンティコアの羽根は飾りではなかった。飛ぶことはできないが、跳ぶことはできる。柵を乗り越え、身の毛もよだつけども共が防衛陣に襲いかかる。

悪魔のようなモリビト、鱗肌で羽根を生やした地の戦士が火を噴き、剣の形をした鉤爪で顔面を切断した。その後ろのマンティコアの攻撃は防げず、地の戦士は腕を噛まれて抑え込まれた。

その地の戦士を救う為、鬼の姿の地の戦士は拳骨でマンティコアの頭を何度も砕いた。地の戦士の腕から流血する。マルシアがさつと柵から降りて、モリビトの怪我をした腕側に寄った。

「動かないで」厳しい顔でそう言うと、傷口を凄く速さで縫合し、神秘的な光が腕を包んだ。モリビトの傷口から血が止まった。

「無理に動かさないでね。応急処置をしただけだよ」

言葉は分からずとも、地の戦士はマルシアに感謝した。

間を狭めた波は柵に到達した。

「最後の一兵になっても戦え！」

がらがら声の小隊長の指揮に、地上の者たちはおうと応じた。柵を越えた三体のマンティコアは二人のモリビトを殺し、次の獲物にかかろうとした。右のマンティコアは右目に衝撃が走ると、視力を失った。

「帰んなー！」

ベルナルドは鞭を震わせて、右のマンティコアの顔側面を抉ったのだ。キアラが呪縛を唱え、三体の動きを封じる。

「今よ」

ベルナルドは右のマンティコアの心臓を一刺し、左のマンティコア

はシシヨアの剣で体を貫かれ、角ばった大盾で頭蓋骨を陥没させた。真ん中のマンティコアは、抜刀術重視の孤自戦流を徹底的に仕込まれたコウシチの見事な抜刀で首が柵の内側に落ちた。ベルナルドがカールロ口にグッドサインを送る。

「カールロ、一体仕留めたぞ」

「俺は七体ぐらいだ。もつとも、俺とお前の仕留めた数は物の数に含まれんが。矢はもう四本しかないし」

「くつちやべるなら手を動かせ！」オールドリッチが言った。

柵に入る前に、大盾と槍で弾き返されたが、軽々と盾と槍の陣形を飛び越すのも当然いた。

柵の防御陣は飛び越えるマンティコアを必死に防いだが、マンティコアの数は膨大であり、この小さな柵では持ちこたえられそうになり。

司令官の大僧正がモリビトの言葉と地上の言葉で、地の戦士と僧と地上の者を集めた。

「地の戦士よ。火の扱いを心得る地上の者よ。筒を持つ地上の者よ。我らとそなたらの攻撃で、敵の進行を一時でも食い止め、味方を第二環状区に避難させるのだ」

大僧正は僧とアルケミストと地の戦士と火縄銃の扱いを心得る衛兵を並ばせると、一斉掃射を行つた。火と雷、地の戦士から投げられた巨大な岩石、鉄砲の弾。強力な一斉掃射により、マンティコアの群れは少し柵から身を引いた。

撤退用の低い音の笛が吹き鳴らされる。地上の人間は意味が分からなかったが、身を引くモリビトを見て、先にある高い柵の裏に避難するのだと理解した。溜めに溜まったマンティコアの群れは爆発した。柵の杭を引っこ抜き、あるいは壊し、怒りをぶつけるように徹底的に破壊して最初の防御区域を突破した。

幾人かのモリビトが波に吞まれ、五人兄弟の一人。三つ子の末妹が背中を引き裂かれた。モリビトを助けようとした隙に殺られたのだ。

「ジヨハンナー！」

助ける間もなく、白目を向いたジヨハンナは無情な黄色い波間に吞

みこまれた。

唯でさえ少ない優秀な射手を失い、大変な痛手だ。ホープマンズとグラディウスは顔見しりが死んでショックを受けた。特に身内であるトウー&スリーの面子にとつて、彼女が死んだことは体の一部が失われたのと同じ心痛に襲われた。

ダルメオとダルカスが長女トルニャと次女フィリを引き止め、最後に入門した。

柵上のモリビトたちは石を槍を投げつけ、松明と火で燃やした石と砂をぶちまけた。妖精モリビトも微力ながら術を用いたり、吹き矢でマンティコアたちの接近を阻んだ。

締めめに、紫のモアに乗ったモリビト騎兵隊が左右の茂みから奇襲をかけた。マンティコアたちは奇襲に浮き足立ち、多くが門から離れた。マンティコアの群れが蹴散らされて、門が閉じられる。

撃退には成功したものの、今の攻撃でモア突撃部隊人員の三分の一が亡くなった。突撃部隊はさっさと防衛線内に引つ込むと、モアを石作りの柵のほうへとやり、乗り手たちは一介の戦士に戻った。

喉はカラカラ、腹もすかすか。飲み食いたいが、そうしている暇はない。と、普段着姿の女モリビトや子供のモリビトが甕と柄杓を持ってきた。

戦いを手伝おうと少数ながら居残っていた者たちもいた。女子供たちは、自分たちの出来る範囲で戦いを手伝おうとしていた。モリビトの女子供は地上の者たちにも柄杓を差し出した。

この差し出しは大変ありがたく、彼らは喉を潤した。甕の液体はただの水ではなく、一種の強壯剤でもあり、甘酸っぱい味もした。

地上の者は大抵、二杯も飲んだ。モリビトも彼らが丸一日と半日、絶食させられていたことを知っていたので、二杯飲んでも咎めたりしなかった。

「元氣百倍というやつだな。これで、しばらくは動けるよ」とコルトン。

彼らが英氣を得たとき、彼らとモリビトの氣力を摘みとろうと、遠く離れた首領格のマンティコアが三度目となる号令を発した。

「さあ、行くぞ！」エドワードに言われるまでもなく。戦える全ての者たちは段を駆けのぼり、柵下のマンティコアの群れを迎えた。

*
—————
*

数時間前。人が多いこともあり、ゲンエモン率いる部隊は歩みが停滞していた。理由はほかにもあり、ゲンエモンは絶対、部隊を急行させなかった。一日半かけて、一八階の広場に到着した。林まで四分の一の迫ると、部隊を分けなかったゲンエモンはようやく、ラクロワなど腕の良いレンジャーを偵察に出した。

一時間後。偵察の者たちは、罾や敵の姿は無いと報告した。ゲンエモンは五分考えた後、三十分相手を待ち、来なければ、危険を承知で林に攻めいることにした。

彼を知る者達はらしくないと思った。ゲンエモンは時には慎重、時には大胆な行動をする。

彼は無謀と大胆の違いを知っており、大胆にも林に攻めいる作戦をゲンエモンらしくない。モリビトのホームタウンと考えるのが妥当であり、奥へ行けば、敵の待ち伏せや罾も大量に仕掛けてあるはず。三十分経つと、ゲンエモンは衛兵たちに油壺と火薬を出すよう命じた。

「非情な作戦だ。無関係な命まで奪ってしまうが、森を焼き払い、モリビトと怪物共を追い出す」

この作戦には衛兵たちが反対した。地下世界は極力、規模の大きな破壊を禁じている。

戦時中であれ、森を燃やすのは違法行為であり、行き場の無くなった煙でこちらにも被害が出る恐れがある。ゲンエモンは断固、森を焼き払えと命じた。

「はっ！ 何が違法行為じゃ。勝たなければ、我らもエトリアも終わり。ごたごた抜かさず、火をつけい！」

ゲンエモンは口調を荒げた。衛兵たちは渋々、油をかけ、火薬を設置した。

礼儀正しい彼が、自分の立場を利用した強硬的な姿勢。彼らしからぬ行為の連続に、冒険者と衛兵は戸惑いを隠せない。

彼の決意で固まった張り詰めた表情を見て、意見を言える者もない。

火打ち石で点火され、導火線を火が伝い、木々が燃えた。風もなく、行き場がない煙はさまようがまま揺らいだ。煙は高低差があるほうへと降りて、隠れた怪物やモリビトたちを追いやった。

一八階を覆い尽くす森の数パーセントは完全に燃え尽き、河や荒地のある箇所。モリビトが防火用に掘った深い溝で火は食い止められた。

「じじい。何考えてんだか知らないが、無茶はよせよ。てめえの私事に他人を巻き込むな」

「私事ではない。勝利の為だ」

口の悪いブレンダンの忠告にも聞く耳もたず。

火が燦る頃になると、ゲンエモンは部隊の出撃命令を下した。火と大人数を前に、襲おうとする怪物はいなかった。ただ一つの存在を除き。

部隊は北へと南下し、森を抜けた。抜けた先には樹で囲まれたちようど良い高台のような場所があつて、高さ一メートルの土台のような土壁もあり、偵察の報告でも、敵や罠の気配は一切無いようだ。近くには川もあり、水の補給地点も確保できた。部隊はここを拠点にし、しばらくはモリビトの出方を窺うことにした。

ゲンエモンの超越権行為に訴えてた作戦は結果としては成功したものの、らしからぬ態度は周りを不安に陥れた。

部隊の不安と不満を感じ取り、ゲンエモンは少し頭を冷やした。ゲンエモンは立ち上がり、胸を張って堂々と演説した。その姿と声には、気負いや復讐心もない。

「諸君の不安に思う気持ちにはわしも同じ。だが、さつきも言ったように、勝たなければならぬ。わしは諸君らを生かし、勝利に導くためならば、決まり事の二つや二つを破る。我に勝機あり。どんな相手が好きでも、自分の磨いた腕を信じ、戦い抜け。わしと君らの技量はほぼ同格であり、モリビトの技量はわしより劣る。これは全てに当てはまるが、戦い方さえ誤らなければ、いかな軍勢にも負けぬ。モリビトと

て例外ではない」

人を率いる大将の威厳を身にまとうその姿を見て、多くの者は安心した。この人の下にいれば、勝てる。

本当のところ、ゲンエモンは無理をしていた。しかし、復讐心に駆られても、目の前で生きている者達のことを思い、無理矢理一歩引いていたが、重圧と苛立ちに押されそうであった。彼は優秀だが、一介の冒険者。自由を好むところであり、こうして大勢に話して心を動かすのは向いていても、率いるのは性に合わないと自覚していた。せめて、有能な軍師がいればなあと思っていた。

「動きがあれば報せにきとくれ。わしは、少し考え事がある」

そう言つて、一人、高台の中央で目とつむつて正座した。

律しなれば。心を。乱れは全てを悪い方向へと持つていく。ここに来た以上、こういうことは覚悟していたはず。

赴くがままに動くのも大事であるが、そのときではない。想像で山の清流を思い描き、風光明媚な自然の光景を想像して、心を落ち着かせた。それでも、ふとすれば、親しい者たちの顔が過ぎる。特に、一人の顔は何度もちらついた。

……情けない。てめえなんぞ、一介の夢見がちな老いぼれ侍。手前にお鉢が回ってきたつてのに、この様とはな。それこそ、亡くなった者たちも浮かばれない。非情になれ、ゲンエモンよ。焦れば、運もチャンスも逃げる。落ち着くのだ。事態が好転するようなことを考えろ。

ゲンエモンは心を研ぎ澄ませ、余計なイメージをとつぱらい、無の世界に身を投じた。どのくらいいたったか。近くに人の気配を感じ、目を開けた。

「どのくらい経った？」

「私の他の者の言葉をまとめたら、おおよそ一時間程度かと」答えたのは女剣士ニツツア。

「ゲンさん、来てください。敵が迫っています」

ゲンエモンは腰の紐に脇差を差し、槍を握つて立った。

高台は森から百三十メートル、火縄銃の有効範囲ギリギリのところ

で離れていた。森の向こうでは、ここそと動き回る影が見て取れた。モリビトであろう。少し予想はしていたが、やはり罠か。完全に包囲された。

「撤退しますか？」

一人の問いに、ゲンエモンはきっぱりと否定した。

「土道不覚悟という言葉を知っておるか？ 戦わずして逃げるのは断じて許さん」

「私は絶対に逃げません。あんな連中にエトリアを汚されてなるものですか」

ドナ・A・トルヌウアが意気込む。

声がする。モリビトの言語で、何を言っているのかさっぱりだが、声からは決意が滲み出ている。そして、地面が揺れた。巨大なモンスターーの雄叫びか？

モリビト独特の笛の音が何個も吹き鳴らされ、戦太鼓が叩かれる。モリビトたちが姿を現した。先頭に行くのはこれまで見たことが無い位、立派な装いの大きなモリビトだ。そのモリビトの背後には、紅服のモリビトや白と紫の衣を着たモリビトもいて、先頭のモリビトたちはあのモアの背に乗っていた。

実に堂々しており、落ち着き払った姿勢を見ても、先頭のモリビトが総大将。あるいは、ここにいるモリビトの指揮を任された者かもしれない。見ておれ。この刀が折れるまで、斬って斬りまくってやろう。

「決戦か」

他人事のように呟く。

クロツエ大僧正は神官に報告した。

「神官様の予想したとおり。地上のやつばらは、あの高台に行きました。あそこの守りは鉄壁とは言い難く、離れたところで地の戦士が投石でもすれば、木々の守りなど脆くも崩れ去りましょう。……それにしても、まさか森に火を放つとは、あれには驚かされましたな」

「火を使って身を守るのは我らもすること。驚くほどのことでもな

い。逆に言えば、奴らもそれほどまでに追いつめられているところであろう。とはいえ、無闇に無辜の命を奪い去る行為をした者たちを生かすわけにはいかぬ。ただちに戦士を集めよ、出撃の時だ！」

戦士たちは集められた。数は優に千五百を超える。多少、強引な攻め方に出ても、この数で押せば、打ち破れるだろう。今度は地の戦士と戦乙女たちもいる。彼らの力を借りれば、どんな堅固な守りでも容易く破れ口を作るができる。モリビトは人間が森に火を点けたことに激怒し、早いところ打って出て、地上のやつばらを切り刻みたいと勇んだ。

戦士たちで少しずつ囲みを築き上げ、モリビトたちは高台の人間たちを囲んだ。

戦闘開始直前、神官は戦士たちを鼓舞した。

「戦士よ。地の戦士よ。僧たちよ。戦乙女よ。我が同胞よ。この戦いが終わっても、戦い自体は終わらないだろうが、我らの勝利は着実に近づく。地上の者は戦える数も少なければ、戦う勇氣ある者たちも少ない。

反し、我らを見よ！ ここにいない者を含め、我らは幼子から老いた者に至るまで、戦い抜く決意を秘めた勇敢なる者たちばかり。この時点で、我らと地上では大きなひらきがあった。あの高台にいる森に火を放った外道共を滅ぼし、今後来るであろう僅かな手勢を倒せば、我らの勝利。決着までもうひと踏ん張りだ。モリビトよ、立て！」

全員の眼を見るまでもない。ひとしと身に伝わる千の戦意。

全員の思いが一つに収束したとき、水を差す出来事が発生した。モアに乗った農夫が軍に向かってきた。農夫は足を怪我していた。農夫はモアから降ろされ、処置を施された。大僧正が聞いた。

「ここは今から戦場と化す。それを理解してここに来るとは、何があつたというのだ？」

「だ、大僧正様！ 大変です！ マンティコアが。おぞましい獣の群れが六の林村にやってきました!!」農夫の叫びは、静かな想いを秘めた戦士たちの全てに聞こえた。

「ま、マンティコアの野郎共は、いきなり現れました。俺以外にも、も

う一人。ここに緊急事態を報告しようとモアに乗ってきましたが、途中で襲われてしまい」

農夫は口を閉ざし、涙を流した。目の前で食われたのだろう。だが、クロツエは彼が感傷に浸るのを許さず、厳しく続きを言うよう促した。

「……す、すびません。とにもかくにも、凄い数です。俺自身、生のマントイコアを見るのは初めてですが、あんな膨大な数はあり得ません。現状の一九階の戦力では、とてもじゃないが持ちこたえられそうにないです」

一人の農夫の報せは、腹を決めた戦士たちに動揺を与えた。静かな場がにわかに騒ぎ出す。

神官は遠目で農夫を見ながら、占い師のおばばの言っていたことを思い起こした。

これか！ おばばの言っておった幾多あきとの罽あきととは、これのことか。だが、今日来なくても良かったのに。事は自分の都合よく運ばんものよな。

ならば、私の命日は今日なのかもしれん。それがどうしたというのだ。マントイコアであれ、地上の奴らであれ、この命、安くはないぞ。

神官に注目が集まる。皆、彼の決断を固唾を飲んで見守った。神官は間を置かずにつくりと告げた。

「戦士たちよ、いつでも動けるようにしておけ」

「し、神官様！ マントイコアの群れは凄いか……」

「黙るのだ」農夫は神官に一睨みされると、あまりの恐ろしさに顔面が蒼白となった。

「私には私の考えがある。私を信ずるのだ」

農夫は引き下がるしかなかった。

神官は森の向こう。高台の樹に隠れた者たちを見やった。そう、引き返せぬ。ジェルグが何と言おうと、仕組んだのが誰であれ。戦士たちの中には神官を殺し、家族の元に戻ろうと考える者までいたが、いざその人を前にしたら、武器を持つ手を挙げなかった。

「モアに乗れ」

神官は誰の手も借りずにモアに乗った。千五百のうち、約四百名がモアたちの背に乗り込んだ。

森に入ると、下からマンティコアの首領格と思しき雄叫びが上まで届き、大地をほんの少し揺るがした。

「……神官殿……」クロツエは口ごもった。彼は三の林村出身。自分が出身した村を心配するのも当然であろう。

「皆よ」神官は前方を見据えたまま言った。

「私が皆を信じるように、私のこれからの判断を信ずるのだ。命令ではない。不服とあらば申せ。私を嫌い、憎むのなら、私に槍を投げよ。そして、彼を決しては咎めたりはしてはいけない。何故なら、私がそうしても良いと言ったからだ」

神官を後ろ振り返らずに話した。その背は無防備で、槍どころか、近くの戦士がやろうと思えば、剣で簡単に一突きできそうだ。

だが、できない。本来、モリビトが不意打ちを嫌うためでもあるが、神官の指導者としての威厳を前に。一人で重責を担う、大きくもどこか儂げな背中を見て、殺そうとする者はいなかった。

「我ら、元より覚悟の上でここに参りました。全てはあなたの仰せのままに」

戦士の一人が面を上げて言った。

「お主の言葉をここに居る者の代弁として受け取ろう。さきも言うたが、私の判断を信ずるのだ」

笛が吹かれ、どんどんこと太鼓が叩かれた。

先頭のモリビトを見て、一目で総大将格と認めたゲンエモンは、射手と鉄砲隊に先頭のモリビトを狙うよう命じた。

「好都合じゃ。大将の首を討てば、敵の士気が落ち、戦いが優勢となる」

何十もの銃口と鏃が神官に向けられた。

—————

「どりゃーー!!」

気合一声、ロディムは長柄戦斧で柵上に向かって跳んだマンティンコアの顔面を縦に真っ直ぐ切断した。マンティコアは剃りが邪魔を

して、跳んでも足の裏や体が傷付いて勢いをなくし、そこを叩かれた。隣ではコルトン、アデラとブルーナが待機していた。

ロディムはモリビトたちと一緒に何度も叫び声を上げて、跳躍してくるマンティコアたちを切り、刃の反対部分、烏のくちばしの形をした戦槌せんつゐでぶつたたいた。

「お見事！　こんなに豪快な斧捌きは見たことないよ」

アデラがロディムの手腕を褒めた。

マンティコアの群れは高い柵を前に勢いが弱まるどころか、更に勢いが増した。口から吐く毒つばもそうだが、毒成分が含まれた棘の尻尾にも注意しなければならぬ。

柵は人が横に三人並んで通れるぐらいの幅があった。一体、柵を飛び越え、柵内に立った。

前はコルトン、後ろはアデラとブルーナが対峙した。

マンティコアは大口開けて、コルトンを噛み付きにかかったが、コルトンは盾を横にし、つかえ棒替わりにした。ひるんだ隙に、足元に剣を突き刺した。マンティコアはコルトンを押し倒そうとしたが、尻尾にじんとした痛みが走った。アデラが剣で尻尾を根元から落としたのだ。

マンティコアは後ろ足で蹴り飛ばそうとしたが、アデラはさつと身を引き、中央に棘が生えたブルーナの盾で右後ろ足が貫通した。顎から盾を外し、悲鳴を上げるマンティコア。コルトンとブルーナは盾で押し出して、内側にマンティコアを落とした。

落とされたマンティコアは、下で待ち構えていたモリビトの槍で串刺しとなり、斧で止めをさされた。

柵の内と外にマンティコアの死体が積まれる。

一体仕留めても、次の個体がいつくるか分からない。柵の下を覗きこみ、登ろうとするたわけたマンティコアどもを警戒した。

「ジョハンナの仇！」

叫ぶのはダルメオ率いるトゥー&スリー。一人死に、トゥー&トゥーとなった一卵と二卵性双生児のパーティーは憤怒の勢いでマンティコアを攻撃していた。

エドワードは、カール口、バジリオ、ジャンベ、ベルナルドと組んだ。ベルナルドを除く、弓術の扱いを心得た者たちの集まり。エドワードは穂先が折れた槍にサーベルを縄でがんじがらめにした。薙刀だなどコウシチが言ったが、武器名はどうでもいい。あれらとは、少しでも間を開けて戦いたい。

弾丸はまだあるが、矢は尽きかけている。エドワードは二本、コウシチやカール口は一本ずつしかない。他の者も同じく。状況を見極めて射る必要がある。

彼らは皆、秀でた練達の技を持つ射手であり、矢は一本足りとも無駄にせず、全て急所に命中させた。だが、相手は膨大で生命力も凄く、頭に一本や二本刺さってもすぐには死ななかつた。

空を飛ぶ蒼い巨体が頭上を通過した。コロトラングルだ。予断を許さないと、大僧正は早々に最高戦力を投入した。背には乗り手もない。コロトラングルは派手に暴れた。コロトラングルは棘だらけの二本の尻尾を鞭のようにしならせ、冷気を吐きつけ、凍らした敵を碎いた。モリビトも、地上の人間も、蒼い巨体がけだもの共を蹴散らすのをしばし見つめた。

しかし、長くはもたなかつた。

うねる黄色い波間を大きなものが強引に潜り抜けた。マンティコアは虎より一回りでかいが、普通のマンティコアより二倍近く大きな個体が数体、接近した。大きな個体は一斉にコロトラングルに襲いかかる。危うく難を逃れたものの、コロトラングルは横腹と右の羽根のようなひれを深く切り裂かれ、おまけに毒唾まで吐かれた。乗り手が笛を鳴らし、コロトラングル共々、戦線を離脱した。大僧正は判断を間違えたことに気が付いたが、既に手遅れだった。

大僧正やモリビトだけではない。ホープマンズ的面々も、例の怪物がいと容易く撃退されたのを見て、驚きを隠せなかつた。

コロトラングルは三十体以上のマンティコアを倒した。だが、これすらも、物の数に入りそうになかつた。

これは、首領格のマンティコアの血を引き継いだ子供たちだった。首領格の子供は仲間を踏み台にして近づいてくる。アクリヴィ、ク

リイル。僧たちが術を唱え、地の戦士は杭と岩石を投げつけて撃退を試みたが、半数が攻撃に耐え切った。

二体は柵上に飛び乗り、暴れ回った。もう二体は柵に突進をかました。二体分の突進は想像以上に強く、足元が激しく揺れ、台から身を乗り出していた何名かが柵の向こうに落ちて、他の個体に八つ裂きにされた。二体は厚い木の板を三枚重ねた柵を激しく攻めた。マンティコアは爪でがりがり柵を引き千切るように裂いて、柵に穴を開けた。

攻撃しても、他の個体が己の身を盾として庇うので、思うようにダメージを与えられない。

エドワードは小さな隙を見つけた。矢を番え、二体の右の方に向かって弓弦を放した。シヨックオイルを塗った矢は脳天を抉り、電流がマンティコアの子供の脳内を焼いた。

柵上の方にいる大きな個体二体の暴走を止められず、二十名のモリビトがやられてしまった。

宙にいる妖精モリビトには毒つばを吐きかけ、尻尾ではたき落とされた。毒つば吐きかけられた妖精モリビトは地でのたうち回り、尻尾ではたかれた者は即死した。

コルトンとブルーナ、シシヨーと盾持ちの衛兵たち、大盾を持つモリビトは弾を装填する衛兵たちを命懸けで守った。

「準備オーケー」右の衛兵が叫ぶと、「こつちもだ！」と左の衛兵も答えた。

四丁の鉄砲から弾丸が発射された。左の個体は心臓を貫かれ、左前足が砕かれた。右の個体は二発とも顔面に命中した。子供たちの悲痛な悲鳴が洩れる。一体、素早く柵の外に逃げた賢い子どもは吠えて、兄弟たちが開けた穴に来るよう示した。

柵の剃りで体が傷ついても一向だにせず、破れた箇所にとつとマンティコアが溢れかえる。第二防衛線が崩落しかける。ここでまたしたも、術の扱いを心得た者たちが活躍した。

火と雷、キアラ渾身一滴の呪いの力が溢れかえるマンティコアを襲い、柵ごと燃やした。柵はごうごうと燃え、マンティコアたちは柵

から離れた。おかげで、防衛陣は全滅をまぬがれた。

門と要所に作られた扉を通り、防衛陣は最後の石で覆われた最も堅固な防衛線に引っ込んだ。エドワードたちは間一髪で間に合ったが、五人の兄弟の内双子の弟であるダルカスが亡くなり、恋人同士でもあった三つ子の長女トルニヤは無謀な攻撃をしかけた為に重傷を負った。トルニヤは肩から胸を裂かれた。

トゥー&スリーは守りの要を失い、医療を心得た者も一人減った。逃げ遅れた衛兵の一人は大きなマンティコアの一撃で首がもげた。

後悔と悲しみが混じった声で、血を吐いてトルニヤはごめんなさいと涙を流した。マルシアは二人に替わり、トルニヤを担いだ。

最後の防衛線は垂直三角形の堀があり、石で覆い、柵内側の板は四枚重ねと一番分厚く強固である。

地上の者を合わせて、四百三十人でマンティコアの襲撃を持ち堪えていた。マンティコアもぎつと五分の一ぐらい倒したが、いつまでも持ちそうにない。

地上側も三名死に、接近戦主体のモリビトに至っては百と数十人死亡した。

彼らは疲れてきた。武器は傷付き、飛び道具も尽きかけて、盾にはへこみが目立つ。コロトラングルという最高戦力はもういない。

モリビトと人間の気力を奪うように、首領格のマンティコアは温存しておいた勢力を動かした。

翼がない、大地を這う緋緋金の地竜。森の破壊者や三階層の赤熊と酷似しているが、あれらより大きく、とても残忍に瞳をぎらつかせた青い熊の獣人。

その二体の周りには、四体を周辺に残し、首領格の可愛い子供たちが付いた。マンティコアは他のモンスターも従えることがある。

この二体は地下世界の下層にいる怪物であるが、あまり強い方の個体ではなく、マンティコアの下に仕えることで生かされた。マンティコアたちが柵から離れて行った。モリビトが口々に言う。

「恐れをなして逃げたか!？」

「そうではない、よく見ろ!」

木々を薙ぎ倒して新たに出現した存在を目の当たりにして、モリビトと地上の人間から絶望の呻きが洩れ上がる。マンティコアの群れは退いたのではない。あの二体とでかい個体を中心に、一気に最後の防衛線を突破しようとしているのだ。手が項垂れ、顔には疲労の色が滲む。

もはやこれまでか。誰もがそう思う中、諦めず、最後まで抵抗の意志を見せる者もいた。

「皆さん、立って！ 怪物は迫っています！ 僕らはまだ死んでいませんし、負けてもいません！ 立ってください」

ジャンベは絶望に陥りそうになる者達を懸命に励ました。しかし、いくら呼びかけても、エドワードなど一部の者を除き、殆どの者の表情には諦念の観が浮かんでいた。

ジャンベはギターを降ろすと、爪弾いた。始めはゆっくりと弾き、段々と激しく鳴らし、歌いだした。

こんな時に何をと思ったが、ジャンベはモリビトや近くの衛兵に怒鳴られても、演奏の手を緩めない。

ジャンベの歌と声に乗せられて、バジリオとダルメオも立ってリユートを弾いた。三人につられて、サラも歌いだした。サラに続き、何人もの戦乙女たちが合唱を始めた。

歌は朗々と響いた。互いに意味は分からなくても、歌と音に込められた荒ぶる魂が感じられた。

人々の心にふつつつと失われた闘志が蘇る。怪物たちは合唱を聞き、大変不気味かつ不愉快に思い、進行が鈍った。人々の心が一体化した。いさおしき者達は激しい怒りと抵抗の意志を柵の外の怪物たちに向けた。

真のバードが紡ぎ出す、聞く者を戦いへと躍らせる曲。猛き戦いの舞曲が落ち込んだ戦士たちの心を奮い立たせる。演奏が最高潮に達したとき、怪物たちが堰を切ったように動き出した。同時に、人もモリビトも音のリズムに乗って動いた。

「青熊を狙えい！」

小隊長の号令の下、四名の衛兵は火縄銃を青熊に向けた。

青熊はそれで十分と判断し、アルケミストと僧たち、レンジャーと射手は緋緋金色の地竜に狙いを定めた。大きなマンティコアたち、青熊と地竜がどすどすと地鳴りを上げて接近してくる。

二十メートル手前。小隊長が放てと号すると、火縄銃は派手に煙を巻き上げ、鉄の弾丸を発射した。弾丸は全て青熊の獣人に命中し、青熊は頭部に二発、開いた口に一発、心臓の位置に一発当たった。

火縄銃の発射を合図に、少し遅れた地竜に射手は矢を放ち、地竜の体の柔らかい部分である目や鼻を潰した。地竜が怯んだところを、これまでとは比べ物にならないくらい規模の劫火が地竜を焼き払った。倒したと思いきや、全身が燃える地竜は跳躍した。地竜の命を懸けた攻撃！ 地竜は最後に柵へと強烈な体当たりをかまして息絶えた。

燃える塊が衝突したせいで、柵の内側の木材にも火が移り、衝突箇所が半壊した。衝撃で数名が柵の内側に落っこちた。

狡賢い首領格の子供たちは二体を盾として、身を守っていた。

ホツとしたのも束の間、一人が「マンティコアがいるんだぞ！」と喚起したので、慌てて撃退しようとしたが間に合わなかった。

地竜が半壊せしめた箇所にマンティコアたちは毒つばを吐きつけ、地竜の燃える亡骸を越えて、その勢いで柵にぶちあたり、最後の防衛線に一箇所の破れ口を作った。堅固な最後の防衛線はあえなく崩れた。

防衛線の破れた箇所へ、マンティコアが殺到する。破れ口はあつという間に広がり、マンティコアがやすやすと通れるサイズができてしまった。

一体につき、五人から十人組んで、相手をした。二人は囿役となり、後の三人が攻撃役である。首領格の子供には十人がかりで相手をした。

ベルナルドが鞭で牽制している間、僅かにみせたお尻の死角にエドワードは薙刀を力一杯刺した。驚いて振り返ろうとしたら、ジャンベの短弓の矢が目刺さった。ベルナルドの鞭が容赦なくマンティコアの体を引き裂く。果敢なモリビトたちが背に飛び乗り、下に向けていた槍で止めをさす。マンティコアはふらふらと足をもつれさせて、

ばったりと横様に倒れた。

防御陣の苛烈な抵抗もあり、マンティコアたちは堪らず一時撤退した。

何とか撃退に成功したものの、代償も大きい。衛兵一名は爪で顔を抉られて、クリイルは右目に毒つばを吐かれ、コルトンは盾を持つ左腕を殴られた。医療所からマルシアが来て、暗い表情でトルニヤが息を引き取ったことを告げた。モリビトも十数名が倒れ、戦死者が二百近くに上った。

長男ダルメオと次女フィリは次から次へと兄弟姉妹が亡くなった悲しみに襲われ、既に戦う意欲を無くしていた。エドワードは二人に厳しく言い放った。

「兄弟姉妹が死んだばかりでむごい言い方になるが、戦えるのに戦う気がないならどこかへ行け」

「なにを言うエドワード！ 私とダルメオはあの汚れた奴らを皆殺しにするまで引き下がらんぞ」

フィリが涙をこぼれ落ちさせながら、気丈にも背筋を真っ直ぐにして胸を張って応えた。ジャンベは彼らを強いと思った。自分なら、泣いてばかりでしばらく動けなかった。もしも生きて帰れたならば、ダルメオと共にこれまで亡くなった者達への哀悼歌を捧げよう。

マンティコアたちが一時身を引いている間に修復が行われた。石やら材木が重なり合う、何とも頼りない土塁。簡単に突破されるだろう。ホープマンズのメンバーがコルトンの周りに集う。コルトンは食い縛って痛みを耐えようとしたが、流れる冷たい汗がその激痛を物語っている。

アクリヴィはマルシアに肩を担がれて来た。

アクリヴィは立っているのもやつの状態である。アクリヴィだけでなく、モリビトの僧たちも息も絶え絶えの有様だ。アクリヴィが申し訳なきように右手を上げた。口を動かすのも辛そうだ。

「……………めん。もう、術式は……………打ち切り」

「苦労だ。コルトン、アクリヴィ、少し休め。ジャンベは二人についている」

マンティコアが攻撃を再開する前に、ロデイルムとエドワードはコルトンを支え、マルシアとジャンベはアクリヴィの歩行を介助して、二人を急場建築の医療所に置いた。何十人ものモリビトたちがいた。

コルトンの隣は顔を抉られた衛兵。エドワードが案内した盾ワン役の衛兵で、名はダミアが横たわっている。眼球と歯と顎の骨がむき出し、見るに堪えない傷を負っていた。どくどくと流れる血を止めようと、布やら彼の服で怪我をした箇所を抑えられていたが、血は一向に止まらず、ダミアは体をびくびくと震わしていた。救護に当たる衛兵はマルシアに助けを求めたが、マルシアは悲しそうに首を振った。「ごめんなさい。私とオルドリッチでも、もう彼を助けられない。ここに医療器具と施設が充実していたなら、彼を助けられるかもしれない。いけど、傷も深くて、出血も多量で」

マルシアは誤魔化さず、はつきりと申告した。衛兵は傷付いたような裏切られたような顔でマルシアを見て、涙を流してダミアを見た。

マルシアは鞆から注射を取り出すと、ダミアの静脈に刺した。さつと注射を抜き、また使えるよう、ジャンベに注射を煮沸消毒するよう言った。衛兵は期待の眼差しでマルシアとダミアを見比べたが、マルシアは否定した。

「アヘンよ。痛みだけは和らぐわ」

それでいいと衛兵は首を縦に微かに動かした。表情から恨みがましいものが消えた。

四度目となる首領格の命令が響き渡り、最後の攻撃が行われるのを知った。エドワードとロデイルムは壁に立てかけた武器を引っ掴んだ。

「ここは、私とジャンベに任せて行ってちょうだい」とマルシア。
「合点承知の助だー」ロデイルムがぐつと腕を上げた。

防衛線に戻るさなか、エドワードは小隊長に変位磁石は無いかと聞いたが、小隊長は無いと即答した。

「モリビトの一人が教えてくれたんだ。逃亡を防ぐため、石はとうに叩き割ったとさ」

「とても優しくてありがたい気遣いだね」

ロデイルムは顔を歪めて皮肉った。モリビトと人間たちは、自分達の

命運が間近に迫りつつあるのを感じた。飛び道具は遂に底をつき、頼りの綱である術式を扱える者たちの力も切れた。

「万策尽き果てるはこのことよな」

エドワードは自分で言った言葉を嘲けるように笑った。黙って胃袋に入る気はない。まだ三日月刀サーベルがある。

俺を含めて、ホープマンズのメンバーは六人いるから、最低でも同数の六体は仕留めたいな。

ロディムも、エドワードと全く同じことを考えていた。

エドワードはふと、足を止めて、耳をそばだてた。ロディムにどうしたと問われても、人差し指をロディムの眼前に立てて黙らせた。マンティコアの首領が吠えたけり、群れの方向を東に向かわせた。モリビトたちはどうしたと互いに目を合わせ、首を傾げた。聞こえてきた。蒸気のような笛の音。戦太鼓。遠くでモリビトが楽器を一齐に鳴らした後、聞き覚えのある音が微かに聞こえた。音は段々と高くなる。

ロディムが「あつ！」と叫んだら、「静かに！」と黙らした。

エドワードより一早く、その音を聞き分けている二人がいた。ジャンベとバジリオだ。

「法螺貝だよー」とバジリオ。

ジャンベも医療所から飛び出た。

「法螺貝と角笛！ 地上から援軍が来たぞお！」

援軍が来ることを知って、疑問に思う者もいた。これはどうしたことだろう。どちらか一方ならまだしも、両方から援軍の便りが来るとは。

彼らの興奮と喜びは摘み取られ、暗く沈んだ。

恐らく、援軍は互いを敵と認め合い、攻撃するだろう。そこへマンティコアの群れがきたら。マンティコアは敗れるだろうが、一方の軍勢も倒れることになる。下手をすれば、両軍全滅の可能性もありうる。

エドワードとロディムと小隊長は背中を合わせた。モリビトたちも戸惑いながら、柵に向かうのもしれば、自分達に武器を向ける者も

いた。ロデイムがへつと、肩をすくめた。

「やれやれ、これからだつてときなのによ」

そのとき、モアに乗った二組がやってきた。モアの背にはモリビトと人間が乗っていた。彼らは声を上げて、矛を収めるよう言った。

「やめい！ 双方、矛を納めろ！ 戦いはまだ終わってはおらん。今は共通の敵を倒すことに集中せよ。神官殿のご命令だ」

地上側はゲンエモンの伝令だと叫んだ。

いまいち状況は掴めないが、伝令たちのメッセージを聞いて、エドワードとロデイムはひよつとしてと顔を合わせた。

首領格はいつまで経っても攻め落とせないことに苛立ち、自らも戦場へ身を投じることにした。後ろ足で立ち上がり、自身の巨体と恐ろしさをまざまざと見せつけた。

とてつもない巨体が姿を現した。

人どころか水牛すら一呑みしかねないその大きく開かれたあぎとに巨体は、人の希望や抵抗する心を奪い去るには十分であった。首領は子飼いの者たちを踏み潰すのを歯牙にもかけず、一直線に新たに出現した豊富な餌の匂いにする方角へと、木々をねじ切り押し倒して進んだ。黄ばんだ濁流が全てをのもうとひたすら突き進む。振動は全ての者の足にぴりぴりと伝わる。

首領格が目にしたのは、小さな棒切れを抱えた見たことない者たち。その者たちの後ろや横にはモリビトが並ぶ。

首領格は小さき者たちを嘲り、一口で全てを飲みこもうとした。

突如、痛烈な痛みが顔中に走り、轟音がした。続いて、口の中が爆裂し、液体が入った瓶が投げつけられ、雷と火が自身の顔を焼いた。

毒息を吐こうにも、吐けば、更に火が燃えるのを理解した。このまま、小さき者たちもろとも焼き殺そうとしたが、二度目の轟音が自分の顔を直撃した。

首領格は訳も分からぬまま、大量の餌を一口もできなかつたことを無念に思いつつ、今わの際、天に向かって慟哭した。直立姿勢で伸びた首領格のマンティコアは仰向きに倒れた。ばきばきめきめきと樹

が何本か巻き添えを食う。

長年、王者として君臨していたわりには、実に呆気ない最期を遂げた。

獣の咆哮より遙かに優る勝鬨が上がる。人間の叡智と技術の結晶が強大な怪物をいとも容易く討てたのを見て、地上軍は興奮と歓喜のるつぼに吞まれ、失われつつあった戦意と統率を完全に取り戻した。

モリビトたちは人間たちの木筒の武器の威力に脅威と驚異に礼を込めた称賛を送った。彼らにとって、自分共の戦いは物の数ではなく、首領格の戦いこそ本番。最低でも四百人の犠牲を覚悟にしていたが、払うはずの代価をびた一文払わずに済んで安堵する者も実は多かった。

首領格に付いてきた群れは首領が死んだことにより統率を失い、自暴自棄に陥り、混乱した。

逃げる者あり。最初に攻撃していた地点に戻る者あり。狂って味方を攻撃する者あり。目の前の敵に向かう者あり。くうんと哀れっぽい子犬の如き声を出す者あり。

「親玉を倒したただけだ。まだ終わってはおらぬ。戦士たちよ、けだもの共を二十階に追い込め！」

神官とゲンエモンが攻撃命令を下した。

千五百のモリビトと百五十の地上部隊が攻撃を開始した。追う者が追われる者へ。狩る側が狩られる側へと立場は逆転した。

両軍は盾と槍ぶすまでマンティコアに対抗した。首領を失い、整然と並んだ大量の盾と槍ぶすまを前にして、マンティコアの群れは完全に戦意を喪失した。石とブーメラン、投げ槍と矢、火縄銃と術式が一斉に放たれる。マンティコアの群れはクモの子を散らすように逃げた。

六の林村に居る防陣は状況を掴めずだったが、顔が焼け焦げた首領格が慟哭して倒れるのを目撃した。

更に逃げまどうマンティコアの群れを見て、勝機があるのを知り、絶望は希望へと変わり、柵の内側から外の援軍へと応えるような歓喜の声が上がる。

火縄銃が鳴り響く。ゲンエモンは白刃を煌めかせて躍り出て、近づく怪物を露払いする。山中を駆け下りる鹿のような確かな足取りで至上のモアは戦場を駆け巡り、モアに乗る神官は長い鉄の槍を振り回してマンティコアを叩きのめす。

流れに乗った人々は餌を求める獣の勢いより強し。目的を一つにした援軍の兵士達は堰を切ったような勢いで、色んな生物を寄せ集めた姿形の醜い黄ばんだ獣の群れを撃退した。

マンティコアは奥へ奥へと追いやられる。首領各の子供二体と子分二十体から三十体はルートから逸れた。両軍は少数は捨て置き、残りは逃がさぬよう囲んで追い立てた。

マンティコアたちは下へと降りる道まで追いやられると、下に何が居るかも忘れて、我先にとがむしやらに降りた。

怪物たちは気付いてなかった。

二十階・神鳥の広場には最後の破滅へと導く存在が待ち受けていた。

何分もかけて下に降りると、護衛の地の戦士と戦乙女たちの歓迎を受けた。火を噴かれ、大きな石斧で引き裂かれ、拳骨で張り倒され、鞭と魔力が秘められた恐ろしい歌声で追われて、マンティコアの群れは森を抜けた先にある広場の中央へと集結した。

突如、首領格の子供たちの中で覇権争いが勃発した。群れを率いるのは自分だと、愚かにも殺し合いを始めたのだ。

群れは次期リーダー候補の争いを余所目で見つめていたが、群れの動きが止まったのはそれだけではない。遙か天井の上。そこから、黄金に輝く翼ある巨軀きよくが舞い降りてきた。群れは一步後ずさったが、恐怖で逃げるのを忘れていた。

神鳥しんちようイワオロペネレプの眼には激しい怒りと憎悪の炎が滾たぎる。

臭いがしたからだ。自らと親しき、言葉は交わせぬが、血の繋がらぬ同胞たちの血の臭いが、黄ばんだ汚らわしい毛団子共から嗅げた。

神鳥は翼を広げた。その姿は、太古より伝えられし神々の如き威容。これまでにない危険を感じ、マンティコアの群れを本能的に動かしした。

神鳥が空に舞う。砂塵混じりの豪風が発生する。突風で身動きが思うように取れない。砂塵のせいで群れの大半は五感機能が使えなくなった。そして、神鳥の体は一層輝きを増した。体から高圧電流を放出し、岩をも砕く鉤爪でおぞましい獣共を粉碎した。

静寂な神鳥の広場の様相は一変して、マンティコアの血肉と阿鼻叫喚で埋め尽くされた。

降りてきた両軍はまともに顔すら上げられなかった。砂嵐が吹き荒れ、枝や石が飛んできて、とてもではないが、前を見れないし、前へ行けそうにもない。

遠くから聞こえるのは落雷の音とマンティコアたちの断末魔。ゲンエモンはほんの少し、遠くの様子を窺い知れた。吹き荒れる砂塵の中央では、黄金の色彩を放つ神々しき怒りの化身が見えた。

十八話 新たなる階層へ

前が見えず、前へ行けない状況。荒ぶる神鳥を見て、誰もが安堵して、油断していた。

神官は示しをつけようと、モアを数歩分歩かせて前に出た。てつきり、怪物はもう一匹たりともいないと思われていた。しかし、実は一体、マンティコアとは別種の怪物が天井ぎりぎりまで伸びた高い樹の上に隠れていた。

モリビトから白刀しろかたな呼ばれるカマキリ。カマキリは上と下の騒動を聞きつけ、樹上に逃げたが、腹を空かしてた。枝の間を見下ろして、自分の真下に良い大きさの獲物を確認すると、体を縮こまらせた。

そして、獲物の真上に付くと、縮こまらせた筋肉を一気に伸ばし、羽根を広げず、空気抵抗を受けないよう体をぴんと伸ばした姿勢で飛び降りた。モアは野生の本能で神官より早く気付いたが、間に合わず、モアの頭部に両の鎌が深く刺さった。

カマキリは凄まじい動作でモアの首に回り、槍を上げた神官は白刀の一撃をくらってモアの背から強制的に降ろされた。カマキリはモアを押し倒した。モアの死体は神官の上に覆いかぶさり、カマキリは完全に息の根を止めようと、モアの死体を神官ごと何度も叩きつけた。

これで良いだろう。そう思い、両の鎌の動きを止めたとき、小さな物体が右目に当たり、そのまま左目をも貫通した。今まで生きてきて、感じたことがないぐらいほどの強い衝撃。その衝撃で、カマキリは首半分が捻じ曲がった。怒りに駆られ、視力を失い、訳も分からず鎌を振りあげて威嚇したが、更にさつきと同じ衝撃が細い首、でっぴりと楕円形に丸まった内臓が詰まった腹部に命中した。臓物を収めた部分から千切れた内臓と神経器官が洩れ出て、青緑のどろりとした血液が流れ出た。

カマキリは一步二歩後ずさると、両の鎌を揃えて左方向へと倒れた。

カマキリの一五メートル前では、地上の鉄砲隊が火縄銃を構えている。

た。銃口の煙は神鳥の起こす突風で一瞬にして掻き消された。

カマキリが倒れたら、一齐にモリビトたちはモアの死体をどけて、神官を引きずり出した。

神官は右の肩口から腹にかけて、深く切り裂かれ、数え切れないほどの内出血を起こし、叩きつけられたせいで骨が何本も骨折していた。折れた骨が著しく内臓をも傷付けていた。

「ひきあげだ！ マンティコアの始末はイワオロペネロプと地の戦士たちに任せ、神官様を上へと運ぶのだ。こんな場所では治療もままならぬ」

クロツエは騒ぎに吞まれぬよう、何回も大声で指示を飛ばした。神官の傷にはただちに包帯が巻かれ、担架に乗せられた。

「慎重に、慎重にだ。傷を深めてはならぬ」

重傷を負った神官を乗せた担架が運ばれていく。後へ続いて、モリビトたちが上へと戻っていく。クロツエら指揮者たちは二十階の守り手たちには、引き続き、任務を果たすよう命じた。

モリビトの最後列をゲンエモン率いる地上部隊が付く。

「親父、おれたちや一体どうなるかね？」とラククロフ。

「あの方か。あの方の代理を待つのみ。ただ、万が一もあるから、いつでも対応できるよう身構えておけ」

両軍は上へ上へと行く。砂塵が吹き荒れない、比較的安全な十九階へと急いだ。

マンティコアの群れが去った後も、防御陣は柵の内側で待機した。また、来ないとは限らない。

次の指令があるまで、援軍にいるであろう司令官が戻るのを待った。全員待つだけはどうかという意見もあり、五人二組を偵察へ向かわした。

二十人は柵の外に怪我人がいないか探した。主に援軍の者たちで、取り残された負傷者がいないかどうか向かった。地上とモリビト、それぞれの哨戒が戻ってきたぞと告げた。だが、様子がおかしい。

何人ものモリビトが担架を担いで先頭にいた。モリビトはモリビト語で叫んだ。

「神官殿だ！ 神官殿が担架に乗せられている。酷い怪我だ！ ただちに開門せよ！」

援軍は第一と第二防御線の門を通る必要はなかった。

門や柵は殆ど破壊しつくされていたからだ。最終防御線の門が上を開け放たれた。どっと担架を担いだモリビトが入り込む。戦士の一人が言う。

「医療所はどこだ？」

「あちらです！」

「分かった！ お前たちは大僧正の方達の指示があるまでは、ここで待機せよ」

両援軍の指揮者たちは到着するや、早速指示をあおがれた。速やかに指示は出された。防御陣に関しては現状維持。医術の心得があるなら、医術師たちの協力をすること。援軍に関しては、半分をこの防御に残し、もう半分は周囲に取り残された負傷者の救出ならびに、マンティコアを含む樹海生物への威嚇行動を行うことにした。

血の臭いを嗅ぎつけ、マンティコア以外の樹海生物の群れが大挙する可能性はおおいにありうる。ゲンエモンは柵の外を出る前に、エドワードたちと再開した。

「おお！ ……おお！ ……！ 無事であったか——コウシチ、シヨウ、エドワード。他の者はどうした？」

ゲンエモンの瞳から雫がこぼれんばかりである。ゲンエモンは袖でさっと顔を拭き、内側の頬と舌をも噛み、涙を堪えた。

「五人兄妹や衛兵が何名か亡くなりましたが、それ以外は特に。死ぬほどの怪我は負っていない」

答えたのはエドワード。

「そうか。これから忙しくなるだろうが、今しばらくは休め」

ゲンエモンは感動と歓喜で抱きしめたくなる気持ちを抑えた。衛兵とドナ一行、自身のパーティの者たちを連れて作戦に参加した。

全て終わったわけではないが、ようやく一息を付けそうだ。エドワード、ロディムは少し腰を下ろすことにした。あの白い衣を着た、自分たちを引き入れたモリビトが近くを通ったので、気がかりといお

うか、気になることを聞いてみた。

「少し聞きたいことがある」

モリビトは足を止めて振り返った。「何だ？ 私はまだ動かねばならん。手短に済ませ」相も変わらず無愛想な口調であるが、戦う前とは異なり、声の嫌悪感は薄れているように聞こえた。

「あの怪物。マンティコアといったか？ 後を追いかけて、皆殺しにしないのか」

それを聞くと、モリビトは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「貴様らが敵に襲われたとき、その敵をどうするかは知らん。だが、我らはどんなに同胞を殺されようとも、敵となる生き物を皆殺しにするような非道な行いはしない。これは我らにも言えることであるが、一つの生物が増えすぎると録にことにならん。それを抑止する役割の生き物は必要不可欠だ。

確かに、我らはマンティコアを含むおぞましい獣共が憎いが、それは向こうの立場に立てば、同じことが言える。多くの犠牲を払ったが、時が経てば、我らもマンティコアのような生き物もまた増える。そうして、またいつか戦い、この地下世界における生命のバランスを保つ。例えこの場での戦いに敗れたとしても、全モリビトが一致団結して追い払っただろう。では、私は行くぞ」

白い衣を着たモリビトは群集の中に紛れた。エドワードたちはじっと、彼の背中を見つめた。

このモリビトの考え方には心底驚かされた。

自分たちの仲間をあれだけ多く殺した相手を生かし、そればかりか、生命のバランスを保つために必要とまで言う。到底、地上のどの人間も思いつかないような思考だ。こんな考え方をするのは、地方の民族など、ごく一握りの者たちしかない。エトリアも一応、含まれると思う。

モリビトは人間より文明は遅れているが、精神的文化はある意味、人間より進んでいた。

ほんのひと時、休憩した後、手の空いている者たちも作業に移った。マンティコアの死体除去作業だ。除去作業を行う上で、言語を話せる

モリビトが注意してくれた。

「気を付けろ。こいつらは虫並みにしぶとい奴らだ。死んだと思つていたら、いきなり口をひらいてくるかもしれん。動かす前に、武器で頭とかを突いてみるんだ」

除去作業は柵の周囲から行われた。さきのモリビトが言ったことを考えれば、死んだふりをしたマンティコアが潜んでいるかもしれない。槍で突いてみると、ぴくと反応を示すのもいたが、傷の具合からしてどう見ても演技ではない。そのまま運ぶわけにもいかず、もう一度、深く突き刺し解釈してやったりした。死体はひとまず、防衛線の隅に集められた。

倒れたモリビトや地上の人間もマンティコアに混じっていたが、生きている者はいなかった。いたとしても、殆どが死にかけていた。

作業している間、援軍による威嚇作戦行動が聞こえた。絶え間なく太鼓の音が轟き、笛が鳴らされ、まれに火縄銃が発砲される音がした。交代しつつ作業は続けられた。マンティコアの死体は見かけより重く、おまけに面倒な確認作業をいちいち踏まなければならぬ。第二と最後の柵内側にある死体を出すのは、とても苦労した。

戦闘後、たいして休みもなく働いているため、作業効率が滞ってきた。時計が無いので何とも言えないが、平均した体感時間で二時間くらいだろうか。そろそろと列をなして、食料や水が入った瓶を持ったモリビトたちが来た。大半は女子供だった。

マンティコアとの戦いは取りあえず決着したと知り、せめてもと、食料を運んできたのである。この差し入れは大変ありがたく、フルーツや薄い肉片には手が殺到した。

地上の人間たちにも分け与えられた。危険なため、女子供は死体除去作業に加わるのは許されなかったが、食料の運搬や怪我人救護の手伝いを任された。女子供たちの加入により、男たちは除去作業に全力で取りかかれた。

数時間後、すっかり疲れた援軍が帰還した。その頃には、防衛戦内部のマンティコアの死体は半分ぐらい片付けられていた。

威嚇作戦に参加していた援軍にも食料が振舞われた。ゲンエモン

は女モリビトから受け取った柄杓で水を飲んだ。武器や鎧は土と血で汚れ、ゲンエモン自身もくたびれていた。それでも、やるべきことがある。

ゲンエモンとモリビトの指揮者たちは短い相談をした後、何名かの歩哨を立てて、まずは防衛陣と援軍の兵たちも思い切つて、四時間ほど休ませることにした。

「もう俺は疲れた」

そう言うなり、ベルナルドはマントを丸めて重い武装を解くと、マントを枕がわりにして寝た。グラディウスは休憩を聞かされるなり、誰が寝て、見張りにつくかすぐにジャンケンで決めていた。最初はカールロが寝ずの番についていた。

戦いは終わったが、モリビトがいつ、刃を向けるかは分からない。「お前は救護所の傍に行つて寝てろ。俺は適当な頃合いを見て、ジャンベと交代するから」

エドワードに言われて、ロディムは喜んで、マルシアがいる救護所の傍に行き、小さな盾に布を重ねて、そこに頭を置いた。マルシアを手伝っていたジャンベも、二時間後には仮眠を取ることにした。ロディムの近くで眠るジャンベを見て、エドワードは参つたなど頭を掻いた。そこでエドワードは、寝ずの番についていたキアラに頼み、グラディウスの面子に交じつて一眠りすることにした。

一方、マルシアとオールドリッチは手を休める暇が無かった。医術の心得がある者は少なく、今は一人でも、怪我人を介抱できる手が必要だった。しかも、二人は重大な局面に立ち入っていたので、実際に休めたのは一時間ぐらいだった。

四時間の休憩終了を告げる、太鼓の音が響く。

思い思いに体を伸ばし、次々と戦士たちが起床する。軽く水分補給をしたら、本格的なマンティコア死体除去作業と平行して、戦死者たちの搜索を行った。

威嚇作戦に回っていた者たちの手が来たお陰もあり、除去作業はスムーズに進み、戦死者たちも発見回収されていく。元は第一の柵があつた場所。最初の防衛線前の近くに、けだもの共の死体の山が幾つ

も築き上げられる。第一と第二の防衛線の間には、戦死者たちが一人一人、丁重に並べられた。

近くにある物を除き、防衛線の外にあるマンティコアの死体は放っておかれた。自然と朽ちるか、他の生物による掃除を待つことにしたので。

大方の作業は済んだ。残すところは、モリビトの最高指導者。神官である彼の判断を待つのみ。

彼の判断で、ここにいる地上の者たちも、マンティコアと共に葬られることになる。ただ、ごく短い期間だが、共同戦線を張り、作業を行うことにより、人間とモリビトの間には絆とまでいかなくても、信頼関係が僅かながらも築かれていた。

援軍が到着してから、半日以上が経過していた。戦闘時間は一時間半をやや超す程度だったが、今できる最低限な後始末でも半日の時間を要した。

いくら待てど、神官は姿を表さない。

神官は医療所よりも小さな掘っ立て小屋にて治療を受けている。マルシアとオールドリッチも診ていたはずだが、はてさて、どうなることやら。あの神官が俺たちを生かして返すのを願おう。

掘っ立て小屋から一人、クロツエと名乗る大僧正が出てきた。クロツエは小さな台に登り、注目を集めた。

彼はわざとらしく咳払いもせず、淡々と告げた。彼が告げたことを聞いて、モリビトたちに明らかかな動揺が走る。地上の者たちは何を言っているのか分からなくて困惑した。

「な、なんだよ？俺たちをやるうってのか？」

ロデームは警戒したように斧と剣に手を触れた。エドワードはロデームが下手なことをしでかす前に、あの大僧正の男を見つけて、彼に訳してくれないかと頼んだ。

彼の顔は悲痛で歪められていた。言葉は交わせないが、他のモリビトの表情から窺っても、何となくわかったような気がした。彼は少し口をもごもごさせたが、諦めたように言った。

「……崩御された……。神官様が。我らの最高指導者が亡くなられ

た。しかも、いましがたではない。神官様がここに着いて、一時間と経たないうちに……。半日前にはとうに亡くなっていたのだ」

彼は頭を垂れ、モリビト語で大地の祈りを唱えた。

運ばれているとき、神官は言った。声はか細く、とても弱く、集めた全ての者に届くほどの大音声で演説する指導者の威厳が損なわれていた。

「頼む……出来ることなら、私を……隔離するなり、他の者と離れたところに置いてくれ。伝えなければなら……ない」

「大僧正長様、どうか口を閉ざしてください。傷に触りますゆえ」

担架を運ぶ戦士の一人は大僧正にも伝え、彼の願い通りにすることにした。六の林村りんそんに着くと、神官は掘つ立て小屋に静かに置かれた。

マルシアなどメディックたち、医術を心得たモリビトが集まつてきたが、神官は二人を残し、他の者の治療に当たれと僧侶を通じ、命じた。

神官はもう、小屋の中に居る者たちに聞かせるほどの力もなくなっていた。

「お前たち、医術を心得た者たちの手は私以外の者にもいる。私はそこにいる、地上から来た女人医師と彼だけでいい。頼むから行つてくれ。ここに残るのは、私を含めて七人でよい。大僧正長の厳命である」

「頼むぜ」

オールドリッチはマルシアの肩をつかんで言った。マルシアは心得たように頷いた。

医術を心得る者たちは名残惜しそうに小屋から去り、他の負傷者の治療に当たった。去ろうとするマルシアを、僧侶はお前は残つていいのだと引き留めた。

残ったのは、マルシア。黄色の衣を着たモリビトの医師。二人の紅服の戦士と僧侶と大僧正が一人ずつ。

医師は地上の言語を話せないため、間に僧侶が翻訳として立ち会った。僧侶は交互に訳した。

僧侶は悲しく厳しい面持ちで、まず神官の言葉を訳した。言葉は分からなくても、神官である彼が危ない状態であるのは、素人が見たとしても、一目でわかる。傷は酷く深く、出血も相当である。生きているのが不思議なぐらいだ。

「私をほんの少し、生き延びさせてくれ。伝えねばならぬことがある。私がそこにいる大僧正に伝えられる限りの時間が欲しい。その間、君ら二人は口を挟まず、黙って手を動かすのだ」

マルシアと医師は頷くほかなかった。まともな医療器具もない。ここで全ての力を使えば、彼が生き伸びる可能性は微かにあるかもしれないが、それだと、他の助かるべき命が助からない。医師として残酷な判断を下さなければならぬのは初めてではないが、自分の無力さを思い知らされるようで非常に悔しい。

二人ができることと言えば、痛みを和らげるくらいだった。

クロツエ大僧正は治療の邪魔にならないよう、顔元より上の位置に寄った。杖や武器を壁に立てかけると、話を聞きやすいよう正座姿勢で佇んだ。

「クロツエよ。そなたも口を挟むのでないぞ」

「受けたまわりました」

神官はとつとつと遺言を語った。本当はもつと片言であるが、それでは分かりにくく、読み辛いので、聞き役の者が整理した形で送る。

私が死んだことを皆に教えるのは、別作戦に向かったであろう援軍が仕事を終えて帰還してからだ。今は作業に集中する時。余計なことで気持ちを煩わし、仕事の手を止めさせたくない。

私が亡きあとは、私の弟子であるあの娘に神職の座を譲るのだ。あの娘は優秀ではあるが、まだ若くて未熟。就いてしばらくは、お前たち大僧正と各林村の長たちであの子を見守るのだ。

神官は残す最期の時間で精一杯、伝えるべきことを伝えた。

ついで、あのモアも私と共に葬ってくれ。あれも長年私と付き合い合ってきたもがら。一羽で逝かせるのは心苦しい。

——最後にひとつ、地上の者たちは無傷で地上に返せ。言いたいことは分かる。だが、これは彼らのため、ひいては我らのためにもな

りうる。

この地下世界の下には、立ち入りを禁じた世界があるのを知っておるか？ 私は若い時分、一度、そこに踏み入ったことがある。すぐに引き返したが、今も忘れられない。その世界はここより光り輝き、見たこともないような巨大な建築物が立ち並んでいた。

私は急に心細くなり、怖くなって引き返した。

人や生き物の気配を感じられなかったせいでもあるが、何故だかは知らぬが、あの世界はモリビトという存在を拒んでいるように思えた。

彼らの大将から話を聞いた。彼らは地下世界の謎を解くためにここに来たと言っていた。幾度となく語られて来た地上の者の言葉であり、信ずるに値しないと思われるが、私は彼らを信ずることにした。地下世界の謎を解くことこそ、我らと地上の者の無用な争いを避ける鍵となる。私はそう考えた。

モリビトの犠牲はおぞましい獣けだもの共の戦いで十分だ。心ある者同士が戦っても意味はない。

これらの遺言は、モリビトの指導者である神官職に就いた者の最期の言葉であり、私というモリビトの平和を願う一個人の願いでもある。

聞き届けてくれ。クロツエが少し、口を挟んだ。

「最初に申しあげましたでしょう。受けたまわりました、と。私はあなたの意志とお言葉をきちんとお伝えします。口を挟んで申し訳ございません。話を続けてください」

神官は万が一のことを想定して、今とは別に、自らの遺言を綴った甲骨文字がある場所を伝えた。予め、幾つかの起り得るパターンを記した甲骨文字を数個。地上の者へ伝える、細かな決め事が書かれた文字。神官はクロツエの聡明さを信用し、細かなことは伝えずとも、彼ならば、伝えるべきことを記した文字以外は破壊してくれるだろうと思っていた。

彼がこのことを伝える前に死亡した場合、占いのお婆ばから、彼の弟子へと遺言は渡る予定だったが、そんなことまで語る余裕は無かつ

た。脈を計るマルシアは、いよいよ最期の時が来たのがわかった。モリビトに大地の幸が賜われんことを願ふ！

最後にモリビトの言葉でそう叫ぶと、神官の眼から光がすうと消えた。脈もとく……とく……と打ち、やがて、止まった。心臓に耳を当てても、聞こえない。脈を打つ音がどんどん弱まる。

今日この日。二十年來、モリビトを導いてきた指導者が逝った。

彼は皆の前で弱音を吐かず。文句も言わず。何が起きても鉄の仮面を張りつけて応じた。死の床にあっても、彼は怯えず、死を当然のこととして受け入れ、最後まで指導者の立場にいる者として振る舞った。死に場所は指導者らしくないところだが、彼自体は惨めたらしいものには見えず、死してなお厳かな気が漂い、神聖にすら感じた。

神鳥は神官の死を察知したのか。勝利の雄叫びを上げただけなのか。神鳥の声の鳴動は十九階にまで響き渡る。

医術師と戦士二人、僧侶は沈痛な顔で頭を垂れた。大僧正は立って背を伸ばし、モリビト語で短い祈りを唱えた。

「しかと聞きました。そして、見届けました。あなたはやはり、我らの偉大なる導き手でありました」

全員掘っ立て小屋を出た。大僧正はマルシアと医術師に頼んだ。

「ある程度過ぎたら、ここに戻ってきてくれ。あのお方のお体を綺麗にしてほしい。他の者に聞かれても他言無用。上手く誤魔化すのだ」
紅服の戦士には掘っ立て小屋を守るよう命じた。大僧正は僧侶を伴い、仕事に戻った。香を焚いて、死臭が洩れるのを防ぎ、悪い虫が寄り付かないようにした。一時間を過ぎ、マルシアが戻った。ちよつと遅れて、医術師も戻った。香がたかれて紛れているものの、死臭がする。

紅服の戦士には水をくんできてもらった。

二人して、何枚もの布で神官の顔と体を綺麗に拭いた。

拭いているときに思ったが、モリビトの体は僅かに人間とは違い、例えば、ペニスの位置や形は人間とは少々異なる。と、この場でじろじろ見るのも失礼なので、マルシアは体を綺麗にしてあげることには専念した。

彼の体を綺麗にする仕事が済むと、二人は医療所にて、負傷者の処置にあたった。

クロツエは言われていた場所に行き、掘り返した。確かに、数枚の甲骨文字版がある。クロツエは一枚一枚遺書の内容を読んだ。神官は予め、幾つかの事態を想定していた。モリビトが勝った時。モリビトが負けた時。引き分けに終わった時。冷戦に入った時。そして、地上と再び、和平が結ばれた時など。必要と思う物以外は斧で壊し、自らの術式で焼いた。

四時間の休憩とその後の作業が終了した時、クロツエと名乗る大僧正が小さな台に上り、群衆に神官の遺志を告げた。

群衆はクロツエから伝えられた神官の遺志を聞き、動揺を隠せなかつた。まさか、我々の敵対者をこのまま帰すのか？ それでも、彼らは従った。彼らの尊敬に値すると認めた人物の死の間際の願いを聞き入れた。

大僧正はゲンエモンに語りかけ、地上の者を集め、地上の言語で同じことを語りかけた。

地上も地上で動揺したが、やったと言ってしまうようになる者もいた。

クロツエは神官が言った地上との決め事を告げた。大僧正は僧侶たちに持たせて、甲骨に記した条約を民に見せた。大僧正は淡々とした態度で、冷たさも温かさもない朴訥な声で話した。

一つ、地上の月日と言う、一週間の木曜日から金曜日。二日の間は『枯れ森』の通行を許可する。

二つ、身を守る以外では、無闇な殺生を行わぬこと。土を掘ったり、樹や植物もあまり傷つけないこと。

三つ、木曜日と金曜日に通れるとは限らぬ。我らにも我らの都合があり、来てほしくない日もある。

その場合、上にある紫の光の柱の付近に色を塗った石を置き、通行を禁ずる印とする。もし通った場合、警告はするが、それすらも無視するような輩は侵入者と認め、殺生もやむをえぬものとする。

四つ、我らの村には立ち入らないこと。我らが意図して地上の者た

ちに姿を見せるのは、我ら自身で決めること。

五つ、仮に双方が互いの姿を認めても、無視し合う。だが、どちらかに危機が訪れた場合、当人たちの判断により、助けるか否かを決めること。

六つ、話も利かずに我らを怪物として襲うのは止めよ。

「互いの利益のため、六つの条約全てを遵守せよ。これは、神官殿の願いであり、モリビトたちの願いでもある。一つぐらいとは思って、気軽に破らぬように」

ゲンエモンはクロツエに一礼をした。

「あなたの口頭から伝えられた、崩御された指導者の方の御遺志。理解いたしました。すぐには難しいでしょうが、皆に意見を聞かれる立場の者として、私も後輩諸君に決め事を守らせるようお約束します。迷惑でなければ、条約を遵守する証拠に私の血印を押しても構いませんか？」

「よい」とクロツエは言った。

クロツエは民にも説明した。ゲンエモンは小刀を抜き、親指を切りつけたら、甲骨文字の空白に血印を押した。この場にいる全ての者が証人となり、ゲンエモンの行いを見た。ヘンリクがさつとゲンエモンの親指に包帯を巻いた。

「かたじけない」

「これより、我ら、モリビトと地上の間で再び盟約が結ばれた。この盟約が破られたとき、血をもってこれを償わせるとする」

二度手間になるが、クロツエは地上の者にも全く同じことを聞かせた。

「では、地上の者らよ。これが、大僧正長がそなたらに聞かせる文字に記された最後の言葉である。そなたらを半日の間だけ、客人として扱おう。心ゆくまで休まれよ」

本当は変位磁石を使ってすぐに帰れるが、ゲンエモンと地上の部隊はこの申し出を受けた。

とはいえ、昨日まで争いあっていた仲。はい、そうですかと、宴会するわけにもいかない。モリビトと地上側は距離を置いて集まった。

ともかくにも、これにて、地下における戦いは意外な形で終わった。

一同は安堵よりも、やったと終わったと、深く長い溜め息を吐いた。気になる点がある。ゲンエモンはどうやってここに来たのだ。というより、モリビトたちはどうして、敵であるはずのゲンエモンを連れてきたのだろうか。

ドナや数名ほど、速記ができる者を連れて、条文を羊皮紙に記す準備をしていたゲンエモンにコウシチが尋ねた。

「師よ。そう急がれずとも、時間はあります。あなた働きすぎです。そこですが、あなたの休憩も兼ねて、おりいって、お尋ねしたいことがあります。何故、モリビトたちはあなたとあなたを率いる者たちをここに連れてきたのですか？ 昨日今日まで、敵対していた間柄だったのに」

ゲンエモンは顎髭をつるりと撫でた。「当然の疑問よな。よからう、半日もかからんだろうが、お前たち二十数名に事情を聞かせよう。少しは暇潰しにもなろうて」。ゲンエモンは捕らえられた者たちを自分の回りに集めた。「といっても、わしの語りを過剰に期待しないでくれよ。ありのままを話すだけで、杓子定規的でつまらんど」

一同は気楽な恰好で地べたに座った。ゲンエモンだけは、胡坐を掻いた姿勢から正座へと変えた。ゲンエモンは語り出した。

千を越えるモリビトに囲まれたとき、モリビトの大将と見受けられる人物が出てきた。ゲンエモンはその人物へ銃口と弓矢を集中させた。攻撃命令を下す直前に、大将格のモリビトが分かる言語で叫んだ。

「武器を下ろせ！ 我らは武装しているが、戦いに来たのではない。話し合いに来たのだ。これから、諸君らにも関わる問題を教えよう」

ゲンエモンは叫び返した。

「話し合うべき事柄などない。わしらは戦いに来た。心の拠り所を失った今、わしには戦いを拒む理由はない」

神官はある程度予想していのだろうか。もったいぶらず、素直に教えた。

「では、捕虜はまだ生きていると言ったらどうか？ 一人、灰色の鉄鎧を身に付けた者は罨にかかって死んでしまったが、他は生きておる」

この報せを聞いて、部隊には衝撃が走った。まさか、生きていているのか？ モリビトたちは神官が情報を明かしたことを聞いて、驚いた顔で神官を見た。

「信じられん。ならば、証拠に一人をここへ連れてこい！」

「できぬ！ したくてもできぬ。何故なら、我らの村は今、窮地に直面している。それは我らモリビトだけではなく、お前たち地上の者や他の生き物にも禍をもたらす存在だ」

「何が望みだというのだ？ 正直に言え！ さもなくば、最後の一兵になるまで戦う覚悟はあるぞ」

「短刀直入に申そう。我らは我らの村を救うため、お前たちは捕虜を救うため、一度戦いの手を止めて、共通の敵となりうる存在と戦わないかということだ」

土壇場にきて、神官は英断を下した。地上との戦いといい、彼は計画を立てて、思い切った発言をするが、彼は以前から、望みは薄いが密かに和解の手立ても講じていた。そんなことはないだろうと諦めていたが、彼にとつて、この日におぞましい獣が来るとはかえって都合が良かった。

そして、農夫の報告を聞いて思いついた。おぞましい獣たちから身を守るため、共に戦いあうことが和平へと繋がる最良の方法と考えた。神官は相手が疑問を挟む余地を与えなかった。

多少、強引ではあるが、時間が無いのもまた事実。一種の賭けである。

「断るならそれもよし。だが、そうなれば、我らは捕えた者たちを怪物たちの囿にする。もつとも、戦いで命を落とした者の責任までは取れぬが、戦いに協力すれば、生き残った者たちは絶対に無傷で帰す。私の命を賭けて保障しよう。森に火を放った行為も許そう。返答は数えて六百までだ」

神官は僧侶に六百を数えさせた。ゲンエモンは目から鱗が落ちた。

彼の心から疑問や憎しみの渦、復讐心は消え去り、希望の灯がぱつと宿った。とことんとやると決めたのだ。ならば、こういう方法でやるのも、またありだと自らに言い聞かせた。何よりも、ゲンエモンにそう思わせたのは、モリビト大将の言葉である。彼の言葉には裏表があるように聞こえず、威厳があり、言っていることに対する責任、確かな重みを感じられた。

初対面ではあるが、一切の迷いや気負いが無いモリビト大将を、ゲンエモンは迷いつばなしの自分とは異なる相手を見て、素直に尊敬の念すら抱いた。

彼はもう迷わなかった。嘘をついているのではないかと思っている者にも聞こえるよう、ゲンエモンは決然とした表情で百五十名の者を説得した。

「これは真の意味での最大のチャンス。わしはあのモリビトの大将の言うことを信ずる。わしは最後にもう一度、わしはお前たちに隊長としての権利を行使させてもらおう。モリビトの和平、捕虜と我ら自身のため、モリビトとの戦いは一時休戦し、下にいる怪物共と戦うことにする」

全員無言でゲンエモンを見つめた。戦士たちには、身内や同僚の仇を取ろうと、とうに一戦交えようという者もいて、近頃になって揺れがちなゲンエモンや指揮力が殆ど無い副隊長に不満を抱く者もいた。「異論のある者は前に出よ。わしは折れぬぞ。モリビトとわしが気に食わないというのなら、わしを切って、その首を向こうに投げつけよ。ただし、その前にわしに近づければの話だ」

ゲンエモンは腰の刀に手をかけて、集団を睥睨した。

彼の本気を知り、多くが困ったように隣り合う者と顔を合わせた。モリビトと手を取るか。否か。上層部と話し合わず、早急に重大な決断を下さなければならぬ。多くの冒険者たちはゲンエモンの説得に耳を傾けたが、衛兵の半数は話半分。疑り深く聞く者もいた。

その時、ドナ・A・トルヌーア。エトリア期待の星が立つ！

聡明な彼女は、この場で何をすべきか理解して立ち上がった。

「私はゲンエモンに賛同する！ 手前勝手だが、私のさっきの発言は

なかったことにしてもらいたい。私はエトリアの真の平和を守るためにモリビトと共に戦う！」

これはエトリア勢である衛兵たちには効果的だった。不満を隠せない者もいたが、賛同する大多数を見て、渋々と従った。満場一致とまでにはいかなかったが、とりあえずまとまった。

「返答はいかに?」

神官が問いかける。ゲンエモンは臆せず、高台から一人、姿を現した。

「わしらは皆、モリビトと共に戦うことをここで決めた」

ただちに下へ降りる準備が進められた。神官はもう一つ条件を加えた。目隠しをして、モアの背に武装解除した状態で乗せるというものだ。いくら和平を望んでいるとはいえ、まだ、村がある場所まで教えるわけにはいかない。これには、当のゲンエモンも反抗したが、いた仕方ないと、この条件を飲んだ。

百五十のモアの背に人間とモアが乗り、残り百五十のモアの体には地上側の武装が載せられた。

神官の号令の下、千五百と百五十の部隊は出撃した。移動している最中、ゲンエモンは不安に襲われた。間違った判断をしたのかもしれない。いや、迷うな。戒めに自らの舌をかちりと噛んだ。

モアの背に揺られて、おおむね三時間か五時間経ったのだろうか。時間の感覚が麻痺してくる頃、ようやく降ろされ、装備品も全て元のまま返された。

妖精モリビトの斥候の報告から、思ったより被害が拡大していることを知り、モリビトたちは戦太鼓と笛を盛大に鳴らした。

僧侶の口から危機を知ったゲンエモンたちも、遅れをとるなど法螺貝と角笛を吹き鳴らした。

こうして、両援軍の到着によって当面の危機は去ったが、モリビトの大将である彼は「命を賭けて保障しよう」と言っていたが、本当に命で支払うことになるとは。本人以外には思いも寄らないことであつた。

ゲンエモンたちも知らない、モリビト側の視点も交えた経緯いきさつであ

る。

「ということは、あなたの英断あつてのことですネ」

ゲンエモンは顔を少し苦々しく歪めて、首を振り、コウシチの言葉を否定した。

「わしは何もしておらぬ。わしがしたことと言えば、刀で怪物を幾らか切り、森に火を放つという愚策を犯したぐらい。誉れるのは、こんなわしに付いてきた勇氣ある衛兵と冒険者諸君。ドナ殿。いましがた亡くなられた、英断を下したモリビトの指導者の方。そして」

ゲンエモンはコウシチから順に捕えられた者たちの顔を眺め、最後にエドワードを見た。

「そして、捕えられて尚、真実を見誤らず。わしより先に真実に気がつき、種族の垣根を越えて協力しあつたお前たちだ」

時間が経つのが遅く感じた。長い一仕事が済んだ今、地上部隊。特に捕虜となった者たちは一刻も地上へと帰りたくなつた。ゲンエモンは、クロツエというモリビトに一つ頼んだ。

「あのマンティコアから物を採取させてくれぬか？ 証拠の品にもなり、彼らの報酬となる。全ては無理だが、手を付けた遺体はこちらで処分する」

大僧正は他の者と相談をした。モリビト側は採集を許可した。彼らもまた、マンティコアの角や毛皮の他、体内にある毒腺を利用するものの、肉は食えないのでどうしたものかと迷っていた。手を付けた分に限りだが、処分してくれるのは助かる。

ものはないでと、ゲンエモンは緋緋金の竜と青熊の獣人も頂いていかと伺つたところ、これも持つて行って良いと言われた。

彼らにとつて、正体が判らない以上、二体はでかいだけの邪魔な廃棄物でしかなかった。

五人六人に関わらず、ゲンエモンは一組につき公平に三体を割り当てた。地竜と青熊の獣人に関しては、執政院リーダーに買い取ってもらい、衛兵の遺族や亡くなった冒険者の葬式代、負傷者たちの費用に割り当てること合意した。

おかげで、しばらく退屈をしのげた。急がず、のんびりと皮や爪を剥ぎ取り、毒液を空ビンに溜めた。剥ぎ取ったら、角だけを残り、引つ張って一箇所に集め、そこで角を剥ぎ取った。傷付きすぎたり、そもそも取れるような物がないほど傷付いた死体もあったが、比較的傷付いてない死体は必ず一体は分けられた。中には、離れたところにある物まで取りに行く者たちもいた。

アクリヴィは、少しでもモリビトから話を聞こうとしたが、簡単な挨拶では会話できず、話せる相手でも、「それは駄目だ」と断られた。モリビトの少年ジェルグ、戦乙女のサラも近づこうとしない。エドワードはジェルグを救ったつもりだったが、ジェルグにはショックだったろう。

エドワードはこれで良いだろうと思った。後腐れなく帰れる。

ゲンエモンは一言断って、予定より早く帰ることにした。

確かに共同戦線を張ったが、千年にも及ぶいざこざがたった一日で氷塊するわけもない。時間が経つごとに、両者の間は微妙な空気で覆われた。そろそろ帰ってもいいだろう。大僧正も帰るのを許可した。

一応、モリビトたちは彼らを見送った。

「石はそんなにない。わしのパーティが最後に行く。光が出たら、とにかく飛び込め。別れを済ませるのなら今のうちだ」

誰も別れを済ませる者はいない。そも、別れを済ますほど仲の良いモリビトはいない。だが、例外はいた。

ジェルグがつつと、顔を下に向けながら、恥ずかしそうに近づいてきた。もう、彼の勇気はさつきので萎えて、元の普通の少年に戻った。た。

「さよならだよ。サラさんにもお元気にと行ってね」とジャンベ。

一の牢に居た者たちは、ジェルグに別れを告げた。エドワードは頭のゴーグルを手渡した。

「勇気ある者への詫びの意味も込めて、約束通り、これを渡そう。お別れだ、ジェルグ。立派な戦……大人になるんだぞ」

エドワードは「戦士」ではなく、大人と言い直した。ジャンベが後で聞いても、本人はさあたとぼけた。

光の柱が二本出現した。五十人がここの戦いで亡くなった者たちの遺体を抱えて帰還した。続いて、二本の光の柱が出現し、七十人が十六階の樹海時軸に戻った。最後にもう一度、光の柱が出現した。消えゆく間際、小さく手を降るジェルグとサラの姿が目映った。

一瞬にして十六階に到着した。エドワードたちホープマンズは、ロディムが斧で伐りつけた跡が残る樹を見て安心した。エドワードは最後に来たゲンエモンに聞いた。

「地上の時間帯はどうなんでしょう？」

「むしろは二日前の早朝に出立した。それから、二日の早朝に半日足せば、夕方かの？」

居ても立ってもいられず、ロディムは早速樹海時軸を通って帰還した。マルシア、コルトン、ジャンベ、アクリヴィ、エドワードが通る。

眩しい光。地下世界から戻った者たちを歓迎するように、太陽は燦々と輝いていた。太陽と雲を見れて、これほどまでに歓喜できる日はそうないだろう。紅く染まる夕焼け空が一段と美しかった。

「いいいいやつっぽおおー!!」

ロディムや多くの者が感動で大声を上げて、トルヌウーア内壁に木霊する。

内壁の見張り役の者たちは、ぞろぞろと帰還してきた部隊を見て、啞然とした。彼らや市民は、部隊は帰ってこないだろうと諦めていたのだ。

驚きは喜びへと移り変わり、内壁の上にいる衛兵たちは部隊が戻って来たぞと口々に叫ぶ。ラツパを吹き鳴らし、部隊の帰還をエトリアの街に伝える。

内壁の衛兵が一人降りてきて、ゲンエモンを称賛した。「あなたは期待どおり、エトリアに勝利をもたらされた」

ゲンエモンは彼の右肩を掴み、にこやかに首を振った。

「違う。勝利よりもっと素晴らしいものを得た。休戦停止ではあるが、とりあえず戦わずに済むようになったぞ。詳しいことは、執政院ラーダに報告した後にでも教えよう。それより、見ろ」

ゲンエモンは夕焼けで紅く陰る世界樹を見上げた。

「太陽は素晴らしいではないか。何を言っているのか分からんぞ？
わしも自分で何を言っているのか分からんわい」

ゲンエモンは久しぶりにがははと笑い声を上げた。

エドワードははっと思いつ出した。長鳴鶏にわとりの館への支払い期日は今日じゃないか。エドワードは苦笑した。帰って、地上へ帰還した喜びの次に、いきなり宿賃の支払いを思い出した自分が滑稽でならない。

*
—————
*

上と下から、モリビトの民、巫女の少女、長たちと神官の弟子。いや、新たな神官の地位に就いたモリビトの女性が一九階六の林村に集合した。実の父親のような存在であった人の悲報を聞いて、顔こそ気丈に上げているものの、彼女の心は例えようがない深い悲しみで張り裂けそうだった。神官を含め、三百を超す者が戦死したので、人々の悲しみも大きかった。どの村でも、友人知人、身内が亡くなったという話題で包まれていた。

亡くなった神官は、新たな神官の地位に就いた者と巫女、数人の僧と上位の戦士三十に囲まれ、各林村にひととき滞在をしてお別れをする。

巫女の少女は悲しみよりも、後悔の念で苛まれた。

こういう事態を全く予想していなかった訳ではない。それでも、彼が死ぬ前に話すべきであったのだろうか？ 私の教えは全て間違っていたのか？ よもや、本当に地上の者たちと手を取り合って戦うことになろうとは。彼の行動と大胆さときたら、大戦を勝利に導いた指導者たちより上であった。現状を考えたら、彼にはもうしばらく、生きてもらいたかった。

神官の死を見届けた、クロツエ大僧正が幕内に居る巫女にそっと近寄った。

「このような場でお伺いするのは失礼と存じあげておりますが、二つ申しあげたいことがあります」

「許す。ただし、小声で申せ」

「一つは生前、神官殿があなたと交わしたお約束の件でございます。亡くなる前、あの方は私に念を押しつけて聞けと申されていたので」

巫女はふふと微笑した。

「案ずるな。約束はたがえん。約束どおり、皆が集まったら、我らの歴史に関する真実を話す。で、二つめとはなんだ？」

クロツエは更に声を潜めた。

「非常に申しあげにくのですが……現神官殿の契りと申せばよろしいでしょうか？」

巫女はクロツエの契りという言葉聞いて、少し目を見開いた。

「契り……だとう？」

「どうか、怒りを静めてください。これも、神官殿が亡くなる前に申されたことでありまして、これからは神官も、子をなしてもいいだろうとおっしゃつられてました。ただし、その子には引き継がせてはならぬ。後は済まぬが、巫女を中心に皆で相談して、私の代わりに新たな決まりを作つてくれとも申されてました」

巫女は手をかざし、少し待てと示した。神官……指導者の結婚か……。考えたこともない。

地上の独裁政権を真似てなるものかと思つたが、今私がしていることは、影の支配者。独裁者と変わりないのかもしれない。それにしても、土壇場で長年敵対していた地上の者と手を組んだり、自らの命を賭けて私に真実を約束させたことといい、大した若造だよ。

変化か。神官の選出方法を変えるべきかなと思つていたが、こんな変化があつてもいいだろう。この変化がきっかけで、我らモリビトも新しい道を見つけることができるかも。それに、親も無き今、現神官には別の支えも必要だ。神官から、彼女が密かに想いを抱いてしまつた相手がいると聞かすが、さて。

巫女は笑い声を上げた。たかが結婚のことで、こんなにも深く真剣に考えている自分が馬鹿らしくなってきた。だが、慎重に進めなければいけないのも事実。巫女は少女らしい、緩やかな笑みを浮かべて言った。

「すぐには難しいでしょう。大僧正長の婚約は、皆とよく話し合わなければなりません。ですが、その前に彼と戦士たちを見送ります。さあ、あなたはゆきなさい。私も支度を整えたら参ります」

クロツエは一礼して退出した。

クロツエが出た後、巫女は無言で天井を見つめた。彼らは私の話を聞いて、受け入れられるだろうか。せつかく、埋められるかもしれない地上との溝はより深まってしまっているのではないか？

——彼らは強い。どうか安心してくだされ。

誰かが自分の肩に手を置いたような気がした。振り返っても、誰もいない。ふっと、どこでもないほうを見て微笑んだ。

「分かっていますよ。彼らモリビトの強さは私が一番知っているつもりです」

そうだ。話さなければいけない。どんなに辛く苦しく、耳を塞ぎたい事実だとしても、いつかは明かさなければ。それは、彼の望みであり、私自身の望みでもあったのだろう。

巫女はいざ語る日がきて、肩の荷が下りたような気がした。

*
—————
*

七月五日。

帰ってまずしたことは、体を清潔にすること。特に、囚われた者たちは何日間も入っていなかったので、二日間、行軍していた援軍百五十名より臭かった。綺麗さっぱりにしたなら、急激な疲れに襲われた。長鳴鶏の館の主人など、冒険者が寝泊まりしている所の主たちは、支払い元気になってから来いと言う。そう言われて安心して、冒険者たちは久々に、土やぎこの上ではなく、柔らかい枕を頭にして、暖かい布団を被って眠れた。

七月十二日。地上部隊が帰還して一週間経った。その間、冒険者とエトリア住民たちは亡くなった者たちを追悼した。

ジャンベは地下戦争の最中、心に決めたとおり、ダルメオやバジリオらバードたち、街に居る各宗教者たちと共に亡くなった勇氣ある衛兵と同業者たちに哀悼歌を捧げた。

顔見知りの者がいれば、一人一人、誰彼身分と立場の違いを問わずに訪ねてお悔やみの言葉と故人への別れをすました。

実質、丸一週間休めた為、虜囚の身だった者たちの体力と精神も大分、回復していた。

あらかたの事を終えたら、冒険者たちは誰が一番に潜るかで揉めた。捕まっても諦めなかった自分達こそと主張する者あらば。応援に駆けつけた者達こそ相応しいと主張する者あり。この中でどのパーティが一番初めに五階層への切符を手にするか。物議は一昼夜かけて催されたがどこが代表するか決まらない。

ホープマンズやグラディウスなど、一部のパーティは傍観者に徹した。

ボス格のゲンエモンが辞退したので、どこが最初に行くかの物議は更に難航した。そこへ、ゲンエモンに頼まれて見るに見かねたギルド長のガンリユーが助け舟として現れて、こう提案した。

「運で決めろ」

彼はさつとトランプを並べた。ガンリユーはさも、この騒ぎを楽しんでいるかのように酒場の冒険者たちを見渡した。

「ポーカー。七並べ。ブラックジャック。大貧民。何でもいいから選べや」

かくしてガンリユー実行長委員長の下、各パーティから代表者を一人ずつ出したポーカー大会が丸一日かけて行われた。一試合ごとにパーティ代表を出場させる方式。最初から最後まで一人通すのもよし。試合ごとに交代するのもよしとした。エトリア住民と今回の戦いに関わらなかつた冒険者たちもこぞって、真昼間でポーカーの勝負に火花を散らす冒険者たちを見学し、いつしかお祭り騒ぎへと発展していた。

ゲンエモンとオルレス。二人きりで膝を合わせたの対談。

「オルレス殿。あんたは来度のモリビトとの戦、どう思われる?」

「どう思われると申されても」

オルレスは外の気配を窺った。特に誰か居る様子はない。

「わしはあんたより感覚が鋭い。聞き耳を立てているような者はおらん。安心して申せ」

「では……遠慮なく。はっきり言いまして、このままモリビトと戦っていたら、悪戯に兵力を消耗するだけで、我らエトリア勢が押し負け

たでしょう」

ゲンエモンは無言で首肯した。情報不足。

自分たちのことをよく知っていたモリビト。モリビトのことを全く知らないエトリア軍。そのモリビトを相手に、相手の本拠地、こちらにとつては全くの未開地で戦う。いくら装備や個々の兵士の精度が秀でていても、無謀にも程がある。

その上、歴然とした戦力差もある。エトリアがモリビトと戦って勝てる要素や見込みは非常に薄い。おまけに、エトリア陣営は相手を見くびるといふ、最大の過ちをも犯してしまつた。

正直、執政院の首脳陣は形はどうあれ、モリビトとの戦が無事済んだことに胸を撫で下ろしていた。執政院だけではない。冒険者、エトリア在住の市民も同じ心境である。

「私にも責任がある。遺族への対応や後始末は協力する。しかし、これだけ言わせてくれ。もう政治屋や軍人は結構だ」

冒険者室長室オルレスにゲンエモンはこう言った。エトリア市民の多くは、人を入れてはならぬ地に人を送り込んでいることを理解しているが、来度のことでもエトリア人と冒険者たちの間にこれ以上、不和が生じるのは避けねばならない。

オルレスはくいと眼鏡を掛けなおした。

「これからどうされるのですか？」

「だから言っただろう。政治屋や軍人は結構。今回のことで、私には大人数を率いるほどの器は無いと知つた。将たる者、一度戦に出たら、情に流されてはいけない。だが、私はコウシチたちを思うあまり、今思えば手前勝手な命令を出した。将失格だ。私にはやはり、少人数の気心と知れた者たちと冒険に行くのが性に合つとる」

「それでしようか。あなたの方、東洋出身者が語る『謙遜』というものでしようか。あなたは不慣れな任務を十二分にこなしてくれた。あなたがどう言おうと、私にはあなたは大将としての器があると思いません」

彼は首を振って、それはないと謙遜した。

「もう、あるかないかの話しはよそうや。これからは、世界樹の迷宮に

おける冒険の新しい規約。第四階層の決まり事を後輩とわし自身がしつかりと学ばなければならん」席を立とうするゲンエモンに、オルレスは最後にもう一言聞いた。

「外の騒ぎは中々盛況でしたね。私も叶うことなら、仕事の手を止めて見に行きたかった。それでは、新たな階層。つまるところ、前人未踏の第五階層の最初の一步を踏むのはどなたになるのでしょうか？」

ゲンエモンは満面の笑みを浮かべた。心底、面白おかしい感じだ。「何かおかしなことを聞きましたでしょうか？」

「くく……あんたも存じでおろう。ガンリユーム、困ったことがあつたらポーカーなどトランプ勝負に持ち込むのが奴の小賢しい常套手段じゃったが、今回はそれに感謝せなばな。誰が何百年ぶりかとなる階層へ潜るかで揉めて、いがみ合った末に流血沙汰となつたら元も子もない。多くから誘われて、わしらも参加したが、早々に負けてしもうてな」

「それでいいのですよ。昔の時代では、モンスターによる死傷者よりも、モンスターに殺させたように見せかけた、相手の取得物を狙った冒険者同士の殺し合いによる被害が遥かに大きかったとあります」

ゲンエモンの顔に微かに影が差した。オルレスはしまったと誤魔化すように曇りもない眼鏡を拭いて、改めて誰が五階層初探索チケツトを手に入れたかを聞いた。ゲンエモンはオルレスに耳打ちした。オルレスはやはりそうですかと納得した。

「幾つか予想はしていましたが、やはりあそこのパーティですか」「そうじゃ。勝負は時の運というしな。彼らはモリビトに捕らえられなくても殺されず、マンティコアなる怪物の群れとの戦いでも誰一人として欠けなかった。彼らには幸運のなんとやらが舞い降りているのだろう」

ゲンエモンの豪快な笑いが室長室に響いた。オルレスも折り曲げた人差し指を口元近くに持っていき、ゲンエモン並みに笑いそうになる自分を押さえた。ゲンエモンは笑い声を止めて、外の世界樹を眺めた。

「今頃、もう六人は到達しておるかもな」

去り際、ゲンエモンは副隊長の処遇を尋ねた。オルレスは淡々と答えた。

副隊長は地位に見合う能力が無いと見なされ、地位剥奪。

しばらくはエトリア領土の隅に建てられた、小さな村役場の衛兵の任に就くとのこと。本来ならば、命令無視などの軍紀違反でもっと重い処罰であったが、彼の父親の働きかけと彼の過去における冒険の功績をかんがみて、このような処遇に決まった。

ゲンエモンは残念そうに溜め息を小さく吐いた。彼と仲違いしたまま別れたのが気掛かりだ。このことが、後に災厄をもたらすきっかけとなるのでは？

そんな不安が頭の中を掠めた。

今回に限り、ホープマンズは六人態勢で潜った。道中、白い獅子が一頭襲ってきた以外は、スムーズに探索を進めた。一九階への道を見つけた。降りて、辺りを見たら、不自然に道が切り開かれていた。罾かと思ったが、多分、モリビトたちが村には来させず、かつ、下の二十階へと降りる道を切り開いてくれたのだろう。

植物たちはどれも複雑に絡み、太く、数メートル切り開くだけで大変な労力を強いられそうだ。一時間半後には二十階へ降りる道を見つけた。太い根っこでできた道を降りた。

暗いので、カンテラの蠟燭に火を点けて降りた。ゲンエモンが降りた道は明るかったと聞くが、モリビトたちが通してくれた道はそうでもないようだ。感覚からして七〜八分ぐらいか。二十階に到達した。降りる時間で分かったが、天井とは距離がかなり離れている。ゲンエモンが語った例の巨大怪鳥とやらも、この広さがあれば十分飛べるだろう。残念ながら、黄金の怪鳥の姿は見当たらなかった。

道中、怪物が一匹足りとも出てこないのは、不幸中の幸いだ。

現在、コルトンは盾を持つ左腕をマンティコアにへし折られて、ともに戦うことができない。

マルシアや優秀な医家たちの看病もあって、目安として二週間程度

で元通りくつつく。治るまでは本格的な探索は禁止。一時離脱である。

「こんな機会はそうないだろうし、俺一人だけ置いてけぼりをくらうのは断じて嫌だ」

コルトンはベッドから降りて、懸命に懇願した。彼の冒険者としての矜持がそうさせたのだ。第一の発見の名誉を味わいたい。頭まで下げられて、エドワードも仕方なく許した。

分かりやすいよう、目印があつたので、それを辿って新階層への道を目指した。小休止を挟み、二時間後には木々に匿われるように、新階層への道を発見した。新階層への道はこれまでと違い、植物ではなく明らかな人工物だ。石や石膏とも、地上のどの材質とも異なる物で造られており、四角い穴があり、穴にある高さ三メートルの小さな梯子を降りたら、階段がある。

どこからか光が発生しているため、たいまつ松明やカンテラも不要。

六人は柄にもなく子供みたいに興奮した。前人未踏破の地の第一歩を踏むことに、喜びを隠せない。胸の鼓動がどくんどくと高まる。もしかしたら、俺は一族の復興よりも、こういう楽しみもあるから冒険者になろうと思ったのかな？ と、エドワードは思った。

天井の明りを頼りに下へ下へと階段を降りた。そのうち、天井とは違う明りが見えてきた。

「見えて来たぞー！」コルトンが叫ぶ。

これまた柄にもなく、下に危険なものが待ち構えているかもしれないのに、六人の探索者たちは一気に駆けだした。

まだ見ぬ世界の興奮と感動。新たに待つ冒険が冒険者たちの体を本能的に押し出した。

第五階層攻略編

一九話 超古代文明

階段を降りたら、あまりの眩しさに目がくらんだ。目が慣れてくると、エドワードが「右を見てみる」と言う。全員そちらの方を見た。生涯、この時の衝撃と感動を言い表せる者はいなかった。あえて表せば、圧巻の一言に尽きる。

元は窓ガラスが嵌めてあったと思われるところ。そこから見渡す限り広がる、数多ある山のように聳え立つ巨大な建築物。そして、その建築物の上にある、螺旋状に、荒波のごとく複雑に絡みあう樹齢千年の大木よりも太く大きな植物の根と思われる沢山の緑の霊峰。自然と人工物が入り混じった。奇妙で。不思議で。荘厳で静寂な雰囲気がある。

恐らく、この上と下にある途方も無く長い歳月をかけて成長した世界樹の根が、この第五階層にある都市、遺都を——。正確には、第五階層に埋もれた前時代の文明が土中深くに沈むのを防いでいた。

植物は建物同士も繋げ、上にも下にも、自然の階を造り上げていた。遠く、何やら黒い鳥の群れの影が見える。鳥にしては、随分と羽根や足が多く、胴体が異常に長いような気もする。

「あれは何？」アクリヴィが黒い群れを指した。

五人は余計なことをせず、しばらくはあの群れの動向を確かめることにした。黒い点々とした物体は刻一刻と近づいてくる。視力の利くエドワードとロディムは手振りで窓から離れるよう示し、エドワードは「頭を下げたほうが良さそうだ」と緊張の面持ちで言った。

誰の耳にも、聞くに耐えない不快な羽虫の羽音が届いた。羽音は凄まじく、地上や世界樹においても、これほどまでに激しい羽音は聞いたことが無い。スズメバチが人間並みの大きさだったら、ちようどんな感じの羽音になるかもしれない。錆びてとち狂った弦楽器の演奏を耳元で聞かされてるようだ。

全員、チラと窓の外を窺った。速くて、集団内でぐるぐると移動し

ているので分かりにくいだが、赤っぽい、体長はおおよそ二メートル前後もあるトンボの群れがホープマンズが居る建物のすぐ近くを旋回していた。

ロデームが剣を握り締めた。

「俺たちの存在を嗅ぎつけたのか？」

不安は杞憂に終わった。トンボの群れは窓から見えなくなり、羽音は段々と遠ざかって行った。

脅威となりうるものが去った後、五人は改めて、新階層の迷宮の内部を見回した。足元から天井まで十メートルもあり、横幅も数メートルあって広い。道は前と左に別れている。遮る物も無く、見る限り、危なかつしい罨や生物の気配は無さそうだ。また、所々に植物や苔が生えたり、小さいのとやや太めな木の根が一部、道や窓枠に引っ付いている。

この建物の材質については何とも言えない。コンクリート（石膏ともいう）に似ているが、どこか異なる。ロデームが試しに指先で突っついてみた。とても頑丈である。壁や床の色は全体的に白っぽくも見えて、銀色にも見える。

「こりゃ。一箇所壊すだけでも、かなり時間がかかりそうだな」

まずは真っ直ぐ進むことにした。角を曲がると、やはり、地上のどの材質とも異なりそうな、長い歳月で灰色に変化したドアが二つ見えた。と、さきのトンボとはまた違う二種類の樹海生物とも遭遇した。右側は下半身が赤、上半身は黄色、顔は濃い灰色のモグラ。左側は真っ青な色のでっぷりとした体型のウサギ。

モグラは二本足で立ち、爪は鉤爪の形をしており、一メートル以上の背丈もある。水色に濁ったどこを見つめているか分からない釣り目の瞳が不気味である。

青ウサギのほうはモグラより一回りでかく、口元から覗かせるナイフのような齧歯が恐ろしく、目も怖い。目を凝らして兎の糸目を見ると、角膜の部分は黒く、水晶体は赤い。

二体は互いに睨み合い、こちらに気付いた様子は無い。縄張り争いでもしているのだろう。エドワードはこう推察した。壁際を歩き、刺

激しないよう注意した。

互いに足を僅かに動かすと、二体は猛烈な速さで攻撃を始めた。モグラは鉤爪を掲げ、ウサギは鋭い犬歯をぐわと向いた。二体は空中で衝突した。ウサギが喉元を狙うのを察知していたモグラは、右の鉤爪でウサギの歯を防ぎ、左の鉤爪で青ウサギの腹を搔つ捌いた。地に足が着く前に、ウサギの腹から臓物と血が溢れ出た。モグラはきゅろぎよお！ と、どう例えたらいいか分からない奇怪な鳴き声を上げて、青ウサギの体を何度も切り裂いた。

語らずとも、ホープマンズはすべきことを理解していた。血の臭いを嗅ぎつけ、他の怪物もやってくる可能性がある。更に言えば、あのモグラが一番近いドアの前に居る。早々に片付けなければ。モグラはようやく、人間の存在に気付いた。せつかく、仕留めた相手を奪われてなるものか。モグラは威嚇のため、上半身を逸らして、声を上げようとした。これが運の尽きである。

胸に固く鋭い物が当たり、雷に打たれたような衝撃が全身に走った。視界が揺らぎ、モグラが頭を下げたところをロディムは飛び出し、力一杯を斧を振り下ろした。斧の刃はモグラの顔を縦に半分切断した。

「こいつらの死体はドアから離れたところに置こう」

エドワードはモグラの胸から矢を引き抜くと、ロディムと二人で反対の壁に向かって放り投げた。青ウサギの死体も同じく。

ドアに仕掛けはないか？ 鍵など要るのか？ 警戒しつつ、ロディムはドアノブを押した。開かない。試しにドアノブを引いてみたら、あっさりと開いた。どうやら、外開きのドアらしい。

ドアを開けた途端、紫の淡い光が部屋からこぼれた。嬉しいことに、樹海時軸は降りたところよりすぐ近くに存在していた。部屋は廊下と比べ、案外狭かった。六人は樹海時軸を潜り抜け、地上に戻った。これにより、ホープマンズの一同は第五階層の行き来が可能になった。誰が残るかで話し合ったが、既に決まっていた。コルトンが拳手した。

「俺が残るよ。お前たちが死なずに戻ってくれば、また次の日にでも

潜れる。足手まといはいない方が冒険もしやすいだろ」

腕を怪我したコルトンを地上に置いて、改めて、正規の人数で五階層へと向かう。ドアを開けて、あり得ない光景に目を疑った。モグラとウサギの死体から大量の血が噴き出て、そのまま凝固している。赤い血はぼこぼこ湯立ち、体毛と肉を焼いた臭いが漂う。

血というよりは、溶岩といった感じた。溶岩は風船のように膨らんだ。膨らんだ溶岩を見て、五人組はギョツとした。

風船は天辺のところまで左右対称で円みを帯びて膨らみ、そこに真っ赤にペイントした人の目玉が浮かび上がっていた。風船の下には深い窪みがあり、窪みは人の唇を削ぎ落したような、薄気味悪い血濡れた口つぼい形をしていた。

目玉はぎよろりと五人を睨んだ。五人は息を潜めて、体の動きを止めた。目玉は興味を無くしたように風船内に引つ込み、窪みも消え、膨らんだ箇所は萎み、溶岩はまた二体の死体を覆った。

五人は忍び足で壁際を移動した。すると、前方から二つの赤く丸っこい液体が迫ってくるのではないか。困惑しつつ、身構えたが、二つの液体は五人を素通りし、二体の死体にたかった。そして、新たに来た二つの液体もぐつぐつと湯立ち始めた。湯立った泡が破裂するたびに、硫黄の臭いがした。

歩いているうちに、広場に差し掛かった。そこまで行くと、あの液体たちは点にしか見えなくなった。ほっとしたロディムが小声で喋った。

「なんなんだありや？ どつかで見たことがあるよう気もするが」
アクリヴィが答えた。

「あるわよ。ほら、二階層の密林に居るあの気持ち悪い緑と紫の液体生物たち。あれとよく似ている。でも、やっぱりというおうか。あれらよりでかいわね」

「ああ、あれか。俺だけじゃないだろうが、嫌な思い出しかないぜ」
ロディムはわざとらしく、ぶるると体を震わせた。数年前を思い出す。あれらの毒液にかかって、何度も散々な目に遭ってきた。服や装備を何度か駄目にされたこともあった。マルシアは一回。コルトン

に至っては、三回も危うく失明させかけられた。失明に限らず、毒液が体にかかつて酷い目に遭うのは、誰もが一度は通る道。

広場の曲がり角まで行き、左右を見た。左には大きめなドアが二つ。右には両開きの扉が二つある。試しに、右にある両開きのドアに向かったが、おかしな点がある。取っ手やドアノブなど、掴める物がない。中央に筋があるので、それを掴もうとしたが、つるりと滑って掴めない。

扉の真横、ちょうどジャンベの胸の位置ぐらいの高さに、長方形に綺麗に彫られた窪みがある。窪みには、数字が書かれたガラス細工と思しきボタンがある。ボタンの数は1から25までであった。もう片方の両開きの扉に行くと、こちらにも内側に数字が書かれたボタンがあり、こっちは26から50まで表示されていた。槍や棒、斧で叩いたり、突ついたりしてみたものの、扉は傷一つ付かない。

「どうやら、たかが数人の力でぶち壊すのは無理なようだな」とエドワード。

「アクリヴィ、あんたの知識でどうにかならないか？」

「やるだけやってみるわ」

そう言つて、アクリヴィはボタンに触れたり、何度も押ししたりしたが、扉は反応を示さない。アクリヴィは首を振った。

「無理ね。推測を述べれば、暗号。あるいは、これを動かすからくりがどこかにあると思う」

「壊す選択肢は無いのか？」ロデームは斧の柄をさすった。

「不可能では無いと思う。だけど、私の勘と学者としての良心が囁いているのよね。これは壊さないほうがいいって。どの道、この扉を壊すには相当な時間を要するでしょうね」

この両開きの扉は後回しにして、前にある大きめなドアに向かった。あちこち錆び付き、あちこちガタついている。このドアは年月の重みに耐え切れなかったらしく、ロデームが軽く引いただけで、ドアノブは壊れてしまった。仕方なく、このドアは破壊することにした。ロデームが斧の柄で蝶番の箇所をぶつ叩いたら、ドアごと壊れた。ドアが向こう側に倒れた際、埃が派手に上がった。

ドアを適当に捨てて、先を進んだ。今度もまた広場だったが、もしかたら、昔はもつと色んな調度品や家具が置いてあったのだろう。朽ちた椅子や箆筒が遺されている。アクリヴィは椅子に歩み寄り、慎重な手付きで椅子に触れたが、椅子は脆くも崩れ去った。

広場は向こうの建物とを繋ぐ橋もあった。橋も天井と同じぐらい、太く大きな植物の根で覆われていた。橋に沿って覆われており、渡る分には問題はなさそうである。

箆筒も同じく、マルシアが取っ手を引くと、ボロボロと崩れた。ガラスの小瓶や手帳などがあるが、息を吹きかけただけで灰になってしまいそうだ。絵の具を取り出し、箆筒のすぐ近くの壁に緑の丸をつけ、縦に線を引いた。

この印は調査中・手を触れるなを意味する。要約すれば、これは私たちの獲物だと主張している意味が含まれる。冒険者はいつ頃か、絵の具などを携帯するようになり、ここは安全。ここは危険という印を残した。赤は主に危険な対象・場所などを意味し、青は安全と判断した対象、緑は調査中を意味する。

五人が広場を見て回っている中、ドアを壊したときの音がまずかったのか。五人が居る広場に接近してくるのがいた。

先ほど死体にたかっていた三体の溶岩のような液体生物。大蜘蛛が二匹、橋からやってきた。エドワードが目敏く液体生物を見つけ、ジャンベは蜘蛛二匹に気が付いた。

エドワードとマルシア、ジャンベは蜘蛛と対峙し、ロデウムとアクリヴィは液体生物と向き合う。

液体生物たちは互いに間を開けると、ぼこぼこ体が沸騰させ始めた。液体生物たちよりも早く、蜘蛛二匹が先に動いた。山羊より大きな蜘蛛はお尻を持ち上げて、糸を噴出した。白い糸が矢のごとく飛んでくる。エドワードは足元に飛んできた糸を身軽に避け、マルシアは鉄製の杖で糸を絡めた。蜘蛛が糸をたぐる。蜘蛛のあまりにも強い引きにマルシアは必死に抵抗した。

エドワードとジャンベは蜘蛛に弓を射掛けた。まず、エドワードの矢が土手っ腹に穴を開け、続くジャンベの矢は頭に命中した。しか

し、さすがというべきか。虫の一種であり、深層にいるだけあって、大蜘蛛はその程度の攻撃では死なない。背後から冷たい冷風が吹く音と叩きつけられる音がした。多分、あちらは決着がついたのだろう。遅れを取るまい。

蜘蛛はエドワードに狙いを定めた。エドワードは素早くファイアオイルの小瓶に鎌を突っ込み、大蜘蛛に矢を射る。矢はまたしても頭に当たり、大蜘蛛の顔面内部と外側の肉を焼いた。大蜘蛛はしばらく足をばたつかせた後、ぐったりと倒れた。

引つ張り合っていたマルシアは、ぱつと杖を手放した。いきなり放されて、勢い余った蜘蛛は僅かにもたついた隙を突かれ、矢を頭に食らい、続いてエドワードはジャンベに持たせていた小槍を更に蜘蛛の頭へと投げつけた。

液体生物たちは、口から真っ赤な人の頭ぐらいあるゆだる熱湯の弾丸を発射した。ロディムは盾で二発を防いだが、一発は右の脛当に命中した。

「あつっ!!」あまりの熱さにロディムが跳ねた。

「どいてー!」

アクリヴィはロディムを押しつけたら、両の輝く金の籠手先の手袋から身を凍らせるほどの冷風を真っ直ぐに吹き出し、三匹の液体生物を凍らせて、三匹は風の勢いで壁に叩きつけられた。液体生物共が粉微塵に砕け散る。

戦闘終了。

マルシアはロディムの治療にあたる。脛当は表面が軽く焦げる程度で済んだものの、内のロディムの肉は赤く腫れていたが、そこまで酷い火傷ではなかった。

アクリヴィは砕けた液体生物から、二つの拳で握れる大きさのゴツゴツした赤い水晶核を回収。エドワードとジャンベは、糸の粘り具合から普通のナイフでは無理と判断して、全体的に刃の表面が刺刺にぎらついた細かな切り込みがあるナイフで蜘蛛糸を五メートル感覚で切断して束ねた。

部屋にもう、これという物は見当たらない。一行は橋を渡ろうとし

だが、白い骨ばった塊が接近してくるのを見て、踏み止まる。

ずん！ ずん！ 我が物顔で橋を渡り、あたかも王者のごとく、足元にいる自分より小さな存在を見下すかのような、白い巨体。全身に骨を貼り付けたような姿は、無骨で厳しい。そいつは二本足で歩き、顔はトカゲっぽい。

「地竜ね」とアクリヴいが呟く。

モリビトの共同戦線で目撃した、金色に輝く怪物とよく似ている。あの怪物の亜種か近縁種の類であろう。

恐ろしいといえば恐ろしいが、伝説の翼があるドラゴンとは異なり、地竜はこれといった特殊能力は持たない。その分、翼あるドラゴンよりは劣るものの体は頑丈で、どの樹海生物や地上の動物よりも、体力は群を抜いている。

ロディムとエドワードを目を合わせた。戦うか？ エドワードは首を振った。命を賭して戦えば勝敗は分からない。今回は純粹に探索にきたのであって、戦いや狩りを目的に来たわけではない。装備や道具もやや不足している。無謀な戦いは避けるに限る。

彼らは部屋から去った。白い地竜は、嗅ぎ慣れない臭いに首を傾げたが、気にした様子はなく。一行が出た戸口とは違う戸口を使った。

ホープマンズが五階層から地上へと帰還しようとした時、突如、魔獣の咆哮がホープマンズが居る階を揺らした。ジャンベは驚いて掴んでいた矢を手放してしまい、慌てて拾った。

「見つかったのでしょうか!？」

「いや！ 部屋の臭いこそ嗅がれたかもしれんが、見つかったり、ましてや挑発行為は断じてしてない！ 誰か、別のパーティと遭遇したのかも?？」

一行は帰還を後回しにし、通路へと戻った。二度目の咆哮が鳴る。五人組。男四人と女一人の構成のパーティが白い骨の地竜に追いかけられている。内一人は背負われていた。ついさつき目撃した個体よりもっと大きく、体に古傷の跡が見て取れる。

エドワードやジャンベは、咆哮に混じって、か細く哀れっぽい獣の悲鳴も聞き分けていた。

多分、さつきのは若い個体で、年齢も力も上の個体の縄張りに踏み入り、怒らせてしまったのだろう。そして、たまたま居合わせた五人組はとぼちりを食らった。五人はいずれも軽装であり、ホープマンズと同じく純粋な探索を目的に来ていた。言わずとも、分かっていた。エドワードは矢を引き絞り、アクリヴィは炎の術式の錬成を整えた。

五階層に到達しうるほどの腕前もあり、五人もホープマンズが何をやるのかすぐに読み取った。牽制に、ジャンベの矢が飛ぶ。鼻面に矢が跳ね返って、地竜は地団駄を踏んだ。動きが止まったところへ、エドワードの矢が地竜の右目を抉った。首を逸らして悲鳴を上げる地竜。その隙に、五人はさつと脇に退いた。

地竜が態勢を立て直す前に、アクリヴィが術式を放つ。強烈な熱風と火炎が地竜の顔を包み込む。地竜はぶんぶんを尻尾や燃え盛る頭を振り回し、声にならない吠え声を上げ、暴れながら逆方向へ走り去った。五人はホープマンズと合流した。

「礼はいいから、行け」

しんがりを務めるエドワードは最後に樹海自軸を潜った。潜る直前、地竜の物と思しき叫び声が聞こえたような気がした。

翌日。コルトンは完治するまで当然留守役。一行は朝の五時と早い時間帯に出発した。エドワードは昨日の叫び声が耳から離れなかった。悪夢を見たという意味ではなく、何故、地竜は叫び声を上げたかのか。一行は装備を整えて、第五階層の探索に挑んだ。ロディムは欠伸を噛み殺した。

「あふお……。そんな、深刻な問題かねえ？」

「とにかく気になる。初めに外を見た時、植物がそう、まるで階段のようになんか他の建物と繋がっていただろう？　いくら樹海生物とて、二四時間眠らずに活動できない。その隙を狙って確かめたいんだ」

奥へ奥へ。エドワードが聞いた、叫び声が聞こえた方向へと向かうと、建物の壁が崩落した場所を見つけた。

驚いたことに、床から天井にかけて、びっしりと根が張られていた。植物のトンネルだ。五人はトンネル内に侵入した。トンネルのそこ

かしこに隙間があり、入ってすぐの右側に、ぽっかりと穴が開いてた。エドワードは体に縄を括りつけ、しっかりと仲間たちに縄を握ってもらい、そつと植物トンネルから降りて外の様子を窺う。

思った通り、遙か真下には小さな蜥蜴のような生き物が横たわっていた。目を凝らしたら、頭が黒焦げてた。明らかに先日在地竜だ。

「向こうをー」とアクリヴィ。

前を見上げる。向こうの建物も何個の植物の通路で繋がっており、向こう側でぞろぞと固まって移動する群れがいる。先日戦った大蜘蛛と同種の群れが通路の外側を伝っていた。

エドワードは引き上げられて、一行は慌てて建物内部に戻った。

「これで、はつきりした。ここと向こう側の建物は、こうした植物の何十もの植物の通路で繋がって、樹海生物が行き来しているんだ。さもないや、ここに怪物共が居る理由が説明できん」

「いつそ燃やすか？ 伐るか？」

「それは駄目よ、ロディム」

マルシアはロディムの案を否定した。

「植物の通路は、きつと、建物を支える役目も買っているに違いないわ。何年も観察して、計算すれば、落として問題ないと分かる物もあるだろうけど、今は駄目よ。あなたが瓦礫の山で眠りたいなら別だけど」

マルシアの説得により、ロディムはとても素直に大人しく、納得した。

「さしずめ。樹海生物の集合住宅地って感じかしら。この二つの塔は」

アクリヴィがややしたり顔で言う。地上にも怪物の類はいるが、地下世界ほどではない。集合住宅地という言葉は、世界樹の迷宮全体に言えることだ。

「正にそれだな。しかし、俺たちのすることはいつもと変わらない。ここに住まう先客とは極力を顔を合わせないようにして進み。昨日のように、向こうから喧嘩をふってきたり、道を塞いだり、求めんとする換金できる物を持っていけば、きちんと出迎えてやる。対応の仕

方はいつもと同じさ」

エドワードは改めて、外の光景を眺めた。古代文明の名残が所狭しに並び、その下や上には植物の根が幾層にも絡み合う。薄ぼんやりと、五階層の端が見える。五階層全体を覆う淡い光彩で霞んで見えにくいのが、微かに緑と茶の壁が見られる。無理ではないだろうが、人間が行き着くには相当な時間と覚悟を要する。エドワードは勘違いしていた。壁は植物の根ではなく、何千何万年にも積み重なった苔とキノコが土壁に折り重なった物である。そこから、要所で木々が生えていた。

トンネルを進むか、否か。全員、否で可決した。トンネルの足場は堅いが、要所で節くれだち、つまずき易く、所によって急で視界も悪い。おまけに獣道で、上や前、どこから敵が来るか予測し難い。戦いとなれば、人間が不利なのは圧倒的。

いずれは、建物の外に降りて探索しなければいけない日も来るだろうが、現状では難しい。よしと、目標を立てた。

「まず、第一の目標に、この二つの塔の内部地図を完成させる。二つの塔は並の建物よりでかくて広い。上の天然迷宮と比べれば、若干狭いのは否めないがな。色々と探す余地は多くあるはず。すべきことは他にもあるが、当面の目標としては良いだろう」

一行はエドワードの目標に賛同した。というより、現状ではその当たり前ともいうべき目標しかすることがなかった。一行は探索を開始してすぐに、迷宮は昨日の歓迎では物足りないと考えたのか。五人は二度目となる新階層の歓迎を受けた。

黄金の角鹿。大蜘蛛。一つ目の歩く毒樹。鋭い槍のような嘴を持つ紅い怪鳥。赤だいだいの三階層に生息するカエルより大きい、醜い疣いぼが目立つ二体の大王ガエル。

ロディムは待つてましたと言わんばかりに、にたりと笑い、武器を剣から斧に切り替えた。

大王ガエルと怪鳥が先制攻撃を仕掛ける。アクリヴィの雷の術式が三体を弾き飛ばす。大蜘蛛の糸をロディムが斧で断ち切り、黄金鹿の角を振りかざした攻撃にマルシアが毒を塗った投擲ナイフと鉄の

槍で応じ、毒息を吐きかける樹の怪物にはエドワードが矢で返し、ジャンベはみななを鼓舞する演奏で盛り上げ、怪物と共を音波で動揺させる。ホープマンズ以外にも、グラディウスなど、他ひと組みのパーティーが五階層における歓迎会に参加していた。

五階層だけではない。各階層で樹海生物と人間達による死闘が行われていた。多くは樹海生物の悲鳴で占められているが、少なからず人間の悲鳴も混じった。今日もまた、世界樹の迷宮は通常運転。

無事に戦闘を終えたホープマンズは、怪物の死体から採れる物を取ったら、建物内部の探索を開始した。

二十話 浅く潜る

二週間は安静するように言われたので、地上にて、仲間たちの帰り待つものの、正直いって、暇である。

考えようによつては、二週間も好きなことができて、思う存分に体を伸ばせるのだ。有効に利用しよう。六日目辺りのこと。五階層の樹海時軸を通った日から三日目まではそう思えたものの、休みすぎたら、どういう訳かいつもより、何かをしなくてはという気持ちが焦りが生じてきた。

人間暇すぎるとろくなことにならない。こんなのは、どうせ有閑貴族様しか判りえない感傷の類かと思いきや、自分にこの言葉の意味が理解できる日が来るとは。

無駄にだらだらと汗ばかり流れる。季節は夏。自分の故郷では、夏でもさして暑くないが、エトリアの夏は格別に暑く、地下世界にいたほうがましだと思える。

剣を持ち、片手で遊ぶ。次は戦棍^{せんこん}。次は盾。次は兜と、きりがないので止めた。傍から見なくても、子供っぽい行動だというのは理解できる。片手でも、物は片付けられるし、洗濯物も洗える。だが、そういう日常における仕事も限度がある。ゆっくりやっても、洗濯も洗う時間を含めて、二時間で完了。

読書という手もあるが、自分はそこまで本を読むのは好きではない。書き物もしてみるが、こうした日常では、書くことがあまりない。かといって、無駄に金を使うこともできない。大昔にはそうではない時代もあっただろうが、今の世の多くの出来事は必然的に金が要る。

エトリアにも、実はギャンブルや娯館の類はあるにはある。それは、海外との公益拠点である港があるソロル・エトリアの他、国境境界線沿いにある幾つかの町や村で公然の秘密として運営されている。あくまで、長い船旅で欲求不満の仕事人や船乗り、国外から来るお大臣とのちよつとしたお付き合いの為、通常とは異なる娯楽もまた必要と考えられて、そういう場の存在を見逃しているだけであり、基本は公共の風紀を乱す施設の運営は許していない。

とりあえず、体を動かそう。冒険者は休日中、荷や帳簿を整理したり、寝転がっているだけだと思ふ輩もいるが、冗談ではない。そういうのもするし、そういうことだけしかない日もある。

ただ、樹海生物と戦うだけでは、経験が足りない。実戦は何よりの修練になるが、時には、人間同士で打ち合ったり、型通りの仕事をする必要もある。とはいえ、一人で、しかも片手となれば、たかが知れているが。

鞘に入れた剣を腰にたばさみ、いざ外へ。今日は曇りなので、さして暑さは無かった。

外壁と街の間には、刈り込まれたやや緩やかに下る草地があり、市民の憩いの場。はたまた、衛兵たちの訓練場ともなる。最近では、後者としての役割が多い。

左から数十メートル離れた箇所では、教官が衛兵たちを指導していた。動きもぎこちなく、兜から覗けた顔はまだ若い。新兵であろう。先のモリビトとの戦いで、数十名近くが戦死した。その穴埋めをと、エトリアは各地で新兵を募集していた。ぎりぎり届かない距離に標的となる人形を置き、人形との間には石が置かれ、突撃の際、この石を越えずに止まり、かつ、槍を最大限の力で繰り出す訓練。

いかにして槍という武器の威力を引き出す訓練の一つだが、新兵たちは手こずっていた。教官は容赦なく叩き、無駄飯食らいの役立たずの豚どもが！ 最低限、役立ってからやられろと罵る。

衛兵の一人が拳手をして、武器だけではなく、食料や工事をするのも我ら衛兵の役目ですがと口答えしたら、当然、けつを蹴つ飛ばされた。国の方針にもよるが、正規兵は大変だなと思う。武器の扱い以外にも、屯田兵として作物を耕し、読み書きと計算をやらされて、工事にも駆り出される。だが、そういったことは一戦を退いた後の生活や仕事で役に立ち、もちろん実戦においても、戦うしか能がない臆病な半農半兵より使える。

剣を上段から振り下ろす。左腕を負傷しているので、自然と体を庇う素振りになり、情けないぐらいへっぴり腰な振りである。肩の力を抜き、振り下ろすところから、下ろされる重さに自身の力を加える形

で剣を振り下ろす。今度は空気を切る良い音がした。

横下段。下段。再び上段。調子が出てきて、五十回振った。そこそこ汗が流れるぐらい、体が温まったら止めた。あんまり、片方の筋肉ばかりが鍛えられるのは良くない。メインの左腕は使い物にならないが、大きい盾を持つので、自然と鍛えられる。だからといって、右腕しか使えない間、右腕ばかり無駄に鍛えたら、体の中心線というか、バランスが偏る。マルシアからの受け売りではだが、使える方ばかり使い続けたら、そこに疲れが溜まり、すぐに使えなくなってしまう。コルトンも、そこは以前から何となく理解していた。

人間と同じだな。使える奴ばかり使えたら、益々使える奴になるが、いざというときは頼れる奴はそいつしかいなくなり、他に手がいる状況にも関わらず、手が足りない。使える奴に仕事を回しつつ、見込みがある奴、自分のように使えないとされていた奴でも、傭兵などある程度の経験を経ることにより、一応、使えるようになる奴を育てる必要がある。

剣を鞘に収めようとしたら、声をかけられた。どちらも若々しい。一人はゲンエモンのパーティで剣士を務める、薄茶の肩にまでかかる頭髪を団子状にまとめた女、ニツツア。

もう一人は、ゲンエモンが着る着物を紫に染めて、麗しい茶色がかつた黒髪のショートボブヘアと黒く凛々しい二重瞼の少女と見紛う武士。ドナたちのメンバーで、武人としての嗜みという訳で、他のブシドーと同じく弓の心得がある、白兵兼弓兵役のサヤ。

ニツツアは気軽に話しかけてきた。

「やあ、コルトン。調子はどうだい？」

「見れば分かるだろ。片手はこの通りだ。身近な医者にきつく言われて、後一週間と一日はこのままだ」

サヤは両手をぴしりと伸ばすと、どうもと深くお辞儀した。

「コルトン殿。ご機嫌がよろしくてなによりでございます」

年齢も冒険者としての経歴も上のコルトンに、サヤは礼儀正しく挨拶した。

二十代後半に差し掛かるニツツアとは異なり、二十を僅かに超えた

ばかりで、背は低く、顔も小さめのサヤはニツツアと比較したら、少女にしか見えない。

「それで、女性二人がなんのようだ。俺が喜ぶようなお誘いをしに来てくれたわけでもあるまい」

「そりやそうよ。あなたを誘うなら、エドワードとかを誘うわ」ニツツアは悪びれる風もなく言ってくれた。

サヤはもったい付けずに答えた。「修行の為、相手が欲しかったのです」

「今の俺を見て、分からないのか？ まともに武器を扱えないし、教えを受け賜りたいのなら、もっと上手な奴に聞いてくれ」

「我らは二人はコルトン殿のような、五階層に到達しうるほどの男性冒険者を探していたのです」

他にあては無いかと聞くが、今日は残念ながら、コルトン以外の五階層組の男性はいない。同パーティのメンバーと組手したらどうだと言ってはみたものの、違う相手としてこそ意味があると返された。完全な状態の相手もいいが、コルトンのように、怪我をしながらも、最後まで必死に戦い抜く敵を想定した上でのイメージも必要だと言われた。一理ある。常に万全な状態で戦えるとは限らない。今の怪我をした状態でも、戦わざるおえない時もあつた。怪物ならまだしも、人間相手となれば、また微妙に違う動きを要求される。

コルトンは良しと承諾した。

初戦はサヤと条件付きで対峙をする。条件とは、サヤは素手に対し、コルトンは布を巻かれた木刀を使用するというもの。武器が無いシチュエーションで、サヤは負傷した敵意満々の兵士と遭遇する。素手はいくら何でもないが、負傷して尚、最後まで戦意を失わなかった敵や樹海生物とは何度も戦ったことがあるので、分からないこともない設定だ。

木刀でも、自慢ではないが自分ほど力がある奴が振ったら、骨を折ってしまう。サヤを鋭く見据え、本当の敵だと思ひ込みつつ、ぶち当たる直前には加減できるような心掛けておいた。

サヤの凜々しい二重が細められる。コルトンの動きを注意深く観

察する。

左は完全な死角と隙だけど、相手もそのことは承知している。いかにコルトンの攻撃を避け、武器を奪うか。体術を仕掛けるか。この二点に絞られる。

まずは真っ直ぐに突き。サヤは斜め右後ろにステップで後退。二度連続で突きを繰り出すが、コルトンの力がこもった速い突きをサヤは紙一重で避く。そして、四度目の突きが来た時、サヤは横に退くと、刃の無い刀身部分を裏拳で叩いた。コルトンの体勢がやや崩れる。その隙に、サヤに体を抱きしめられる形になる。体術をかけられるかと身構えたが、ここまでと言って、サヤは自分の体から離れた。「完敗だ。参ったよ。仲間や他に親しい奴が見ていなかったのが幸いかな」

握りこぶしを右の手の平にくつつけたら、サヤはそのまま頭を下げた。古武術とかいうものの挨拶らしい。

「いえいえ、手負いで片手を使えないのに、少し手加減までされたようによく勝てた私の方が未熟。恥じ入りたいのは私ですよ。万全な状態で繰り出されたら、避けるので精一杯でした」

サヤは地面に伏せてた太刀を腰帯に括った。

二番手はニツツア。剣を上段水平に保ち、コルトンが剣を全力で振り下ろすとのこと。ニツツアは剣を抜き、腰を落とし、上段水平に構える。あえて、不利な姿勢から敵の一撃を受けて、そこからどう切り返せるのかを自らの課題にした。

剣を落とさず、全力の一撃を受けても痺れず、すぐさま反撃に転じられたら勝ち。剣を落としたり、痺れて、追撃を許す暇を与えるようなら、負けとなる。

深呼吸をすると、コルトンは両足でしっかりと地面を踏み締めて、柄を固く握り締める。

おうと気合一声、相手の剣が折れよと言わんばかりの勢いで斬りかかる。金属と金属の激しい衝突により、火花が飛び散る。ニツツアは受けた刹那、体を沈ませることにより、少しでも衝撃を減らそうとしていた。微かにコルトンが剣を上へ上げようとしたら、ニツツアは素

早く剣先をコルトンに向けた。ふうと溜まった緊張感を出すと言。

「あたいの勝ち」

練習で、負傷して片手が使えないとはいえ、二連敗はやや落ち込んだ。コルトンを慰めるようにニツツアは快活な笑みを浮かべた。

「まあまあ、そう気を落とすな。両手で全体重加えて斬りかかられたら、いくらあたしてもやばかったよ」

「いやあ、二回はさすがに、な。次こそは片手で剣を落とさせてやろう」

これ以上は勘弁してくれと言う。サヤとニツツアは礼を言うと、二人は思い思いの方へと去って行った。

思いもよらず、退屈のぎ以上のことに巡り合えた。それは良いものの、遊ばれたような気もしなくはないが気にするまい。

夕日が暮れかかる頃、五人は帰還した。多少、語れることが今日はあるので、土産話を聞けるのがいつもより楽しみである。

五階層二階というか、巨大な建物の中間辺りというか。今日はようやっと、下の階の方へ行けた。特に興味を惹かれたのは、二種類のお花のくだけり。

一つ目は、崩れた壁から発光する天井や五階層世界を覆う光とは異なる光が洩れていて、計三時間かけてその部分の壁を壊して、植物と根っこをどかした所、寄り添うように群生する水晶の如き輝きを発する花畑を見つけた。証拠にと、シリカ商店には売らずに取っておいた物を置いた。手に取って確かめる。色や紙を貼ったなど、人の手を加えられた痕跡はなく、花は自然と透き通った水晶の色をしていた。木造のテーブルに置けば、若干、花は黄金色に染まった。

シリカの話では、初めて値段の付けようが無いらしく、花の利用価値がどんな物か判明次第、お金を渡す約束をした。ついでに持ち帰った壁の材料については、既に発見済みらしく、五百グラムで一単価と計算し、一個辺りの値段は六三〇エン。二キロ分持ち帰ったので、二五二〇エンに換金された。

他、ツルや透明色の草については、検討中。

二つ目は、新手の怪物の話。

二一階から降りて、すぐ右側の道は太く堅そうな植物と根がはびこっていた。その手前には、危険を意味する赤い印が書き殴られていた。ロディムは植物を剣でつつき、アクリヴィが火力を抑えた火の術式で根を炙ってみた所、剣先はちよびつと刺さり、根には泥水を薄っぺらに塗りたくった焦げ目とはいえない焦げ跡ができたぐらいだった。植物や根は水分をたっぷり含み、何百年か何千年の年月で鉱物に近い堅さを手に入れていた。

危険を承知で進んだら、頭がぼうつとしてきた。

これは不味いと思い、舌を強く噛むなり、マルシアから渡された刺激臭のする物が入ったビンの臭いを嗅ぎ、ジャンベに耳元で叫ばれるなりして正気に戻ると、天井から壁、床に至るまで大の大人ほどもある真っ赤な毒々しい花々が覆われていた。

目の錯覚でなければ、花が動いている。大変危険と判断し、アクリヴィの火の術式で適当に花を焼き払ったら、明らかに悲鳴が上がった。

思った通り、そこは樹海生物ならぬ樹海植物の密集地帯であり、花は恐らく、催眠効果がある甘い香りを出して、近づけば、毒で動きを止めた他の生物を食しつつ、通常の花と同じ栄養も餌にする雑食性の花であった。ロディムの足に転がった花を、エドワードは槍で突き刺した。一旦、引いてから、槍で貫いた花を解体して、アクリヴィとマルシアが花内部の構造を調べた考察。

これも、ほれとエドワードが袋から出した。焼けた花卉と小指ぐらいある茨の棘が一本、置かれた。

実物を見てないので何とも言えないが、花が口開いて、こんな棘を大量に見せられたら、慣れないうちはびびってしまいそうだ。

五人が語り終えた後、コルトンも今日の出来事を語った。ただし、内容に少し花を添えて。

七日目は五人が一斉に休暇を取り、コルトンを除く五人が二時間芸にいそしんだ後、思い思いに休んだ。

次の日はまた一人。だが、コルトンは軽装な武具で身を包んでいた。

エドワードとマルシアに許可を貰い、特別に一階層一階の探索のみ許された。もつとも、この腕で深い所まで潜る気はさらさらない。

人の手が加えられた、世界樹の根の中に築かれたアーチ型に作られた階段を降りて、香しい新緑豊かな一階に降り立つ。一人で、しかも一階に来るのは久しぶりだ。来たばかりの興奮を思い出し、出入り口近くにある切り株の上に座って懐かしさに浸る。地上より気温が低い分、快適であった。

コルトンは採集や狩りを目的にしていない。あくまで、感覚を忘れないよう来ただけ。五階層は色々と超越しており、こことは似ても似つかず、樹海とは到底呼べないが、迷宮という単語なら当て嵌まる。むしろ、今までの自然がある場所よりも、五階層の方が一番、迷宮という言葉がしっくりする。どうしても避けられない限り、わざわざ、一階層探索組の獲物を横取りする気持ちは毛頭なかった。

出入り口のある箇所を抜け、疎らな林を抜けると、最初よりも開けた場所に出た。鉤爪を垂らした茶色いモグラが一体、爪の手入れをしていた。気配を感じ、コルトンの方を向く。歯を剥いて威嚇されたら、コルトンはゆっくりとした足取りで元来た道を引き返した。相手に敵意は無いと知ったが、気持ちよく爪の手入れをしていたのを邪魔されて、警戒したモグラは不機嫌な様子で藪を掻き分けて行った。

木の陰から様子を窺っていたが、モグラが大人しく去ったので、安心した。モグラは藪のある左前方へと行ったので、右の切り開かれた道を進むことにした。

道なりに進んでいく。紫の森ネズミや、薄水色で鉄兜の大きさもある蝶々を何匹見かけたら、すぐに元来た道を引き返すなり、自分を何かの像と思い込み、直立不動の姿勢で生物が立ち去るのを待った。

途中、隻眼のレンジャー・ヌナと出会った。モリビトとの戦いで三ヶ月もまともに腕が使えないと診断された彼だ。肩から巻かれた包帯で腕を支えていた。歳もそれなりに近いので、コルトンは呼び捨てている。

「よう、ヌナ」

「コルトンか。お前も俺と同じ動機で来たな」

ヌナはコルトンの腕を一瞥して言った。

「ああ、そうだ。勘を鈍らせないためにな」

ヌナはふんと皮肉っぽく鼻を鳴らした。「二週間がなんだ！ 俺なんか三ヶ月……いや、もう一ヶ月近く経つか。嬉しいことに、礼儀よく療養していたので、期間は短くなったが、まだ最低でも一ヶ月は弓を握れそうにない。他の連中が先々行っているのに、情けないもんだ！」

ヌナもそこまで愚かではない。大声で何かを話していたら、パーティ内の者にしか語りたくない情報や秘密をうっかり漏らしたり、怪物共に余計な刺激を与えてしまう。

互いに語り合うこともなく、じゃあなど、最後はちらと視線を合わせたら、通り過ぎた。

コルトンは段々と例の鬼門。一階にある花畑へと近づいて行った。ここでは、稀に下の階で見かける怪物が出現する。結構前にエドワードから聞いた話では、三階層に出現する赤熊も出現したらしい。といっても、そんなのは本当にごく稀で、大半は一階層で押められる顔で占めていた。

何故、鬼門と呼ばれるのかというと、ここで多くの冒険者が倒れたからに他ならない。まだまだ、冒険者への規約が整えられてなかった時代、ベテラン冒険者たちの暗黙のルールで、将来性のある生意気な新米冒険者たちの試験と称し、花畑へ行くよう命じ、樹海生物に殺させる恐ろしい手口が存在した。

今では、花畑へは滅多に誰も近寄ろうとしない。しかし、人が寄り付かない分、一階にある採集ポイントでは希少な物が合ったりするの、手っ取り早く名誉や金が欲しい新米が命を落としたり、重傷を負う事例が後を絶たない。

花畑へ入る道はちょうど、花畑へ人が入るのを拒むように太い木々と密集した藪があり、真っ直ぐには突き進めない。コルトンはそつと、木の間から花畑の様子を見た。成長した淡い花々に交じり、いや

にでかく、左右にゆったりと何も無い空間で開閉する紫色の物体。こより一つ下の階にいる毒蝶だった。

他からも様子を見るが、三匹の毒蝶以外の姿は見当たらない。

コルトンは冒険ではなく挑戦することにした。あの三匹の毒蝶に挑もう。勝つても逃げてても、戦い方を馴染ませることができれば良かった。負けの選択肢は無い。三匹に負けることは即ち、自分の死だ。

足音を立てないように、慎重に歩む。時々、毒蝶は飛ぶが、体勢を変えたり、別の花蜜を吸うための移動に過ぎない。気付かれた様子は無い。と、一匹が少々高く飛ぶ。棍棒を下ろせる姿勢で動きを止める。

いつでも、逃げるなり、攻撃する準備はできている。毒蝶はコルトンの一歩手前の花に留まる。二匹から少々離れているが、一匹でも片すのが先決。コルトンは棘が彫られた木製の棍棒を毒蝶へ目掛けて叩きつけた。毒蝶は気付く間もなく、棍棒で叩き潰された。同時に毒蝶二匹は敵の存在を感知した。

毒蝶が飛び立つ。羽根の裏表にあるぐるぐる渦を巻いた目玉模様が忙しくコルトンを睨む。

コルトンは棍棒を投げ付けた。命中は期待してない。注意が逸れてくれればいい。二匹が棍棒に気を取られた間に剣を抜き払う。棍棒は木に跳ね返って落ちた。

いつもより軽い剣である。これなら、片手でも戦える。

二匹の毒蝶は間合いを詰めて、毒粉を撒き散らした。コルトンは大きく三歩後退して、毒粉から逃れた。コルトンは息を止めると、右腕の籠手で顔を隠して蝶二匹に突っ込んだ。二匹は慌てて樹上に逃れたが、右の毒蝶は太い腹を貫かれた。ばたつく毒蝶を剣ごと地面に叩き付けたら、鉄具足で体を踏み潰した。

残る一匹はばたばたと急降下してきた。コルトンは地面に向けていた切っ先を返す刀で上へと力一杯切りつけた。切っ先は毒蝶の体を斜めに切った。コルトンは後ろに飛び退くと、動きが鈍った毒蝶へ止めを差した。

深く息を吐き、吸い込む。片腕で戦うのは予想よりきつかった。行

動パターンが大体分かっている相手でも、両手の時と比べて、遥かに苦戦を強いられた。万全だったら、大盾と剣を以てして、この三匹をもっと楽に片付けられたと断言したい。

思い付きの挑戦は成功した。長居は無用だ。コルトンは毒蝶三匹との戦いを最後に、探索を切り上げることにした。一方、五人組の方はといえば。やや得をする程度の収入を得ただけで、目立った発見は無いとのこと。

さすがに、毎日潜るのは体に良くないとコルトン本人も自覚しており、次の日は大人しく待機し、十日目にまた軽く探索に出かけたら、二日は休んだ。もつとも、その二日の内、一日半はパーティ全体で休んだ。

十四日目。短いようで長かった療養生活最後の日。コルトンはどう問題ないような気がしたが、マルシアに、今日一日も絶対に左腕を無理に動かしたりしないでねと怖い笑顔で注意された。一応、軽い探索なら認められた。最後の調整も兼ねて、コルトンはある二人組に行わせてくれと頼んだ。

「構いませんよ。なっ、ファイリ」

ダルメオに言われて、ファイリは笑顔で応じた。トウー&スリー。男の双子二人と女三つ子という、非常に珍しい組み合わせで有名なパーティだった。第四階層でモリビトとの共同戦線にて、マンティコアなるあの獣のせいで、三つ子は二人死に、双子は片割れである弟と失った。

今や、長男であるバード・ダジリオと侍女のソードマン・ファイリしかない。二人も当然、第五階層の時軸を通っていた。だが、この先どうするか迷っていた。二人は一先ず、行ける所まで行き、そこから新たにメンバーを募集するか。あるいは、引退をするか。二択を迫られていた。

この二人は冒険者同士の間柄ではない。コルトン以外にも気付く者がいた。同年齢の者たちと比べても、二人の貯蓄はかなりある。実質、故郷を捨てた自分がとやかく言える立場ではないが、故郷に帰るか。技能を生かして職を持ち、エトリアに戸籍登録して、一般人とし

て暮らす。二人にはもう、そうした生活をした方が良いと思えた。

お主らは若く、道がある。わしぐらいになれば、引き返せん。よく考えてくれ。コルトンより大先輩のゲンエモンは、躊躇わずに二人にこう言ったが、二人はもうしばらくと濁した。

ダルメオとフィリは女将の依頼を受けていた。昨日、愛犬が逃げて、追いかけたら、内壁扉の隙間を縫って、迷宮へと行ってしまった。飼い主は早速、金鹿の酒場へと駆けこむ。二人はたまたま酒場に居たのだが、成り行きで女将と飼い主は愛犬搜索を依頼した。飼い主は酒場にエール酒を卸す仕事を請け負う一人らしく、そういった繋がりもあって、女将は目の前にいた腕の良い二人に頼んだのだ。

エトリアに住んでいるだけあって、迷宮事情は他国人よりも詳しい飼い主は、三日経つても見つからなければ、死んだものとして諦めるといった。

今日はその搜索日一日目になる。因みに、彼ら二人だけではなく、他の一階層探索組にも情報は伝わった。人の手は多い方が良いと、飼い主が犬を見つけたら、七百エンを提供すると約束したのだ。一階層組には、七百エンは大金に等しい。目の色を変えて、冒険者が殺到した。

ダルメオとフィリは直接頼まれた手前、もう断る訳にもいかず、犬の搜索に出ることにした。コルトンの同行を許したのも、気心が知れた相手でもあるが、仮に犬を見つけても、報酬を分ける段階で穩便に事を済ませられる。

コルトンが加わって、三人の犬捜査班が樹海に下りた。階段を下りる前から、あちこちで犬の名前が叫ばれているのが聞こえた。

コロポチー！ 出ておいでコロポチちゃん！ 美味しい餌があるよコロポチー！

緊急事態以外では、無駄な大声ご法度の地下迷宮でこんなにも堂々と人々が声を張り上げる日が来るとは思わなかった。深い層なら大物呼び寄せて危険極まりないが、浅い階でそこまで強いのがいないためか、樹海生物たちはさすがさくさく叫ぶ連中から離れていた。

それにしても、コロポチとは変な名前だ。コロかポチと呼んだほうがいいのでは？

一階層組の収入源を奪う真似は控えたほうが良いと思い、三人は真剣に探さなかった。一階で全く樹海生物と出くわさなかった。二階はどうなっているのだろうか、二階にも降りてみた。一階より少ないが、こちらの中々に盛況。コロポチの名がしつこく叫ばれていた。

適当に進んでみたが、やはり、遭遇しなかった。

「こんな日もあるか」

半ば呆れるも、コルトンは楽しげに二人に笑いかけた。

人々が恐怖もなく、自分の中で楽しそうに徘徊しているのが世界樹の怒りに触れたのだろうか。それとも、単にうるさすぎて、良からぬ者を呼び覚ましてしまったのか。

遠くから途切れ途切れに悲鳴が聞こえ、森の北東が騒がしい。

「やばいのを呼び覚ましちゃったかしら？」とフィリ。

やがて、疎らな木立から樹海生物たちが出現した。三人は戦闘態勢を整えた。樹海生物の群れはどんどん近寄ってくる。人間のうるさに耐えかねて、切れて出て来たか？

だが、樹海生物たちは三人を無視して、西の方角へと去って行く。三人は身構えたまま、群れが去るのを待った。樹海生物の次は、一階層組の冒険者たちが登場した。皆、一様に青ざめた顔をしていた。

「こりゃ、やばいぜ。やっぱ、こんなにどかどかと大人数で声上げるのは不味かった。今ならまだ間に合う。犬っころなんざ放っておいて、逃げよう」

一人の言ったことに全員、同意した。七百エンは欲しいが、命あつての物種。それでも、三組ほどは残って探索を続けると言う。

しかし、すぐにこの三組も探索を打ち切ることになる。足音がして、次いで、四人の男の声が出た。同じく、北東から。今度はなんだ？ 四人が何を言っているか判明した時、二階に居た者たちは満場一致で犬搜索の切り上げを決めた。

「きよきよ巨人だ！ ばかでかいにに人間が！ ごつごつした巨人が出たあ！」

何かが響く。地震ではない、一瞬の揺れ。それが継続して続く。嬉々とした搜索の声と打って変わって、やばいでか物が現れたぞと喚起が叫ばれた。継続的な揺れは続く。一階へ続く階段では、冒険者たちが泡を食ったように我先にと逃げていた。

コルトン、ダジリオとフィリの三人はしんがりを務める形で最後に逃げた。揺れはしていたが、どうもこちらに寄ってくる気がしない。ともかくにも、三人は駆けあがる。その三人の後を追う存在がいた。一階の者たちと合流。やれやれと首を左右に振る。一人があつと、コルトンを指した。正確には、コルトンの後ろだ。三人は咄嗟に跳躍しながら振り返ったら、その存在を見て、拍子抜けした。よくいる中型犬ではないか。ひよつとしなくても、かのコロポチであろう。

コロポチに詰め寄る一階層組を余所に、三人はとつと上を戻り、状況を報告しようとした。くうんと哀れつぽく鳴くコロポチ。ある意味この騒ぎの元を作った犬に対し、コルトンは思わずざまあみると言った。

地上へと帰還した時、おいと呼び止められた。ひげ面の逞しい男。二階層で通称“軍隊バチ”が落とす蜜や花粉を対象に、軍隊バチの狩りを行う、軍隊バチ狩りと二階層のプロフェツショナルといっても過言ではない冒険者パスカルだ。隣にはヌナがいる。

「おい、お前ら。残りの連中はどうした？」

コルトンが手短かに説明すると、呆れた表情でパスカルは舌打ちし、ヌナはけつの青い糞ガキ共がと切れた。

「そんな奴ら、巨人とやらに叩き潰されちまえばいい」

切れるヌナをパスカルが窘めた。パスカルは深刻な顔つきをしている。どうも、一階層の巨人騒動とは別の問題と直面したようだ。

「何が起きた？」

「歌だよ、コルトン。歌を聴いたんだ」

歌？ コルトン、ダジリオ、フィリの三人は首を傾げた。バードのヤルヴィネンが悟りを開いて歌ったのかと聞いたら、そんなわけあるかアホウと返された。

「とにかく、会う奴にいちいち伝えるより、もつと大勢が集まった状態で伝えた方が良いと判断した。お前は自分のパーティに伝えてくれ。ダジリオ、フィリ。すまんが頼み事を聞いてくれ」

はいと二人は頷いた。

「ダジリオは他の面子を見かけたら、二階層に行くなと伝えてくれ。ついでに、夜に金鹿の酒場に来てくれとも。来るのは、パーティの代表だけでいい。フィリはサクヤ女将さんに、今日は冒険者で貸し切らせてくれないかと言伝を伝えてくれ」

尊敬できる先輩の頼みとあり、ダジリオとフィリはパスカルの伝言を持って、街へと戻る。俺の整理が付くまで時間をくれとパスカルは言う。彼の表情は暗い。

「二つ言えるのは、姿は見えなかった。そして、綺麗な歌だった。ヤルヴィネンやバジリオ、お前らんとところのジャンベよりもずっと。だけど、俺にはあれほど綺麗で美しく、禍々しさに充ちた歌はないと思えたね」

二階層に関して言えば、パスカルら四人のキャリアはゲンエモンを越える。

彼と彼のメンバーほど二階層に詳しく、恐らく、長い歲月潜ることにより、二階層の酷い環境に適した強い肉体を持つ者たちはいないと思える。本当なら、素の実力で四階層に行けるのに、そうせず彼は完全に金稼ぎを目的に二階層に入り浸っている。だから、二階層での危険を知り尽くした彼がここまで怯えるとは、一体どれほど力ある悪魔が現れたのだ。

大分して、エドワードたちが帰還した。宿に着いた五人に、コルトンはパスカルから重要な話があるとエドワードに伝えた。コルトンもまた、自分から語れる話があると言った。

「あんたの顔付きからして、良からぬ報せのようだな。だが、俺たちが持ち帰ったのは朗報だ。驚くと思うぞ。これは、多分だけど、ゲンエモンさんから聞かねば分からないことだ」

ゲンエモンから聞かねば分からない事とは何だろう。どうも、判別し難いことが連続して起きている。一つは朗報だと確定しているか

らまだしも、後の二つは良くない報せ。

地下大戦での傷も完全には癒えてないのに、エトリアにまた、新しい嵐が到来しそうだ。果たして、今回の嵐は、来るかもしれないかのエトウ王賊連合を上回るか。地下世界の巨人、美しくも禍々しいという謎の歌。これこそ、冒険物におけるセオリーがようやく登場したようであり、緊張の面持ちで身震いするも、聞けるのをエドワードとコルトンは楽しみにしていた。

二二話 深く潜る

入って間もないうちは先へ先へと進むより、階層の雰囲気。周囲の建物との距離関係や位置把握。出現する怪物の系統を今までの手帳に記したデータと照らし合わせて、どういった対策をするかに焦点を絞られた。

二つの巨塔を繋ぐ人工物と植物が合成された橋を何度も行き来し、情報交換をすることにより、二一階に出現する生物の種類が大体つかめてきた。

一階層に出現する長い爪を持つモグラより更に強い腕力と硬い爪を持つ、下半身は黒っぽく、上半身が赤みがかった黄色い体色のモグラ。森ウサギより頭数センチ程度の大きさしか無いにも関わらず、見た目以上の脚力と鋭いのこぎり歯を持つ青いウサギ。三階層のカエルより巨大な醜い疣がある毒蛙。やはり、上の階に出てくるものより一回り大きくなった大蜘蛛。毒液の代わりに高熱のガスを噴き出し、高温の恐らく体液か排出物の類を弾丸のように飛ばす真つ赤な液体溶岩生物。四階層の怪物たちも散見された。

そして、注意すべき種類が早速、二頭挙げられた。

一頭目は、初日に派手な登場をしてくれた、体に骨のような鎧を着けた白い地竜。試しにと、偶然にも植物の階段を登ってきた一頭に、角ばった箇所から縄で垂らした肉を括りつけた安物の剣を噛ませたところ、一噛みで剣ごと肉を食いちぎってしまった。

二頭目は、四階層のモリビト集落での防衛戦時に出現した青い熊の獣人。こちらはまだ、この階での目撃例はないが、二回ほど、塔の遙か下で明らかに青熊と思しき姿が見られたので、二つの塔の下層か。植物のトンネル階段を通じて、今居る上階にて遭遇する可能性は十分考えられる。

何回目となるだろう。例の橋を渡る。大蜘蛛が二匹いたが、戦わず、しばし様子見。数分して、大蜘蛛二匹はこそこそと植物をつたって上の方へと引つ込んだ。いくら凶暴で強いといっても、樹海生物といちいち戦ってはきりが無い。あちらが襲ってきたり、どうして

も利益が欲しければ、戦うのもやぶさかではないが。長らく冒険をやっていると、最初は否定していた者も、いつしかこういう石橋を叩いて渡る方法になってしまう。その方がまだ確実性があり、危険をおかすこともない。無駄に自分や仲間の命を落とす意味はない。危険を承知で冒しに行くのも必要ではあるが、今はまだ、その時ではない。石橋を叩く時は終わった。親階層へ降りた興奮も若干薄れてきて、そろそろ変化が欲しいところ。そこで、明日から一つ下の階下へ行くとうとエドワードは言った。

仕方ないといえば仕方ないが、樹海時軸がある二階は、もうあらかた人の手が入ってしまっていて、自分達が探らずとも、自然と情報が来るので探る意味が無いように思えてきた。既に階下へ降りたり、果敢にも植物トンネルを上り下りする組も出てきた。

さして戦闘も無かったので、身体はもちろんのこと、武器も大して傷つかなかったので修理する必要もない。宿に帰ると、やや退屈そうな面持ちで骨休みを取るコルトンが待っていた。

今の彼にとって、迷宮の事柄を聞くのが数少ない楽しみである。何より、完治して、いざ潜入した時、少しでも現場に直接赴いている者たちからの話を聞いておけば、殆ど知らない状態で潜るよりかは、幾分か安心である。特に、前の地下大戦での情報不足は一層、知っておける事はほんのささいな事でも知っておくのは大事だということ身を以て証明した。

もつとも、こう考えるようになったのは、彼だけではなく、大半の冒険者やエトリア住民にも当てはまる。

二階男部屋の四人は、コルトンの包帯を巻かれた左腕を何となく見た。

運良く約一名が軽い怪我で済んだものの、本当なら、全員あの黄金怪鳥の餌、火炙り、マンティコアの胃袋に収まっていたかもしれない。「まあ強運が良かったとしところや」とロディム。

「寿命一ヶ月減るがすぐに治るのと。じっと大人しく待つものとならどっちが良い？」

コルトンは何度めかとなる問いを聞いてきた。ジャンベはさあと

首を傾げ、ロディムは良い女が看病してくれるなら一ヶ月、じじばばやむさ苦しい野郎が看病者ならすぐにもと言おう。

そして、エドワードは状況によりけりと答えた。三人の決められた答えに、質問者はそうかとだけ言う。

メディックのマルシアから、コルトンは二週間は絶対、左腕を無理して動かすなと告げられた。メディックと呼ばれる者たちはアルケミストの派生の一つで、錬金術を医術に活かせないかと模索した者たち。

メディックには三派いて、通常の医術を試みた一派。錬金術の人体再構築に加えて、通常の医療技術をも追求する一派。純粹にアルケミストの錬金術のみで人体の再生を挑んだ一派に分かれる。

現在、錬金術のみの一派は存在しない。マルシアともう一人、オールドリッチはどちらかといえば、中間の一派に属する。しかし、二人とも、真に必要と判断した時以外は、メディックの数ある秘術の一種である「キュア」の使用を極端に嫌う。これには、訳がある。

具体的なメカニズムは解析されていないが、例えば、二ヶ月にも及ぶ怪我を負ったとする。キュアを使い、その怪我をももの一分で治す。二ヶ月も期間が短くなり、喜ぶべきであるが、使用された本人には明らかに変化があった。まず、激しい空腹状態に襲われて、更に一分間でどう見ても、僅かながら老けていた。

他にも、腕を落とされた者の腕を秘術でくっ付けようとしたら、腕が恐ろしく捻じ曲がった状態で再生されたとか。体の毒物を「リフレッシュ」で排したら、体の内側が焼けるように熱くなったり皮膚と肉が焼け爛れたようになったなど、メディック秘術使用による弊害が数多く寄せられた。

これには、ある高名なメディックが唱えた説が推されている。

つまり、二ヶ月の傷を癒すのにキュアを使う。二ヶ月分の肉体の活動や自己再生機能を一分や数分で行った際、肉体が異常速度で行われる回復についてこられず、結果、腕や指があり得ない方向に生えたり曲がったり、また摩擦を起こして、体が熱くなり、皮膚や肉が焼けてしまう。

当初は否定されていたが、十件に八件という割合で肉体に異常が生ずる事例が多発したことに伴い、この説は支持された。戦時ではこの技術は高く評価されたが、治療と同時に新たな傷や後遺症を負わせてしまうリスクが非常に高く、メデイックの一派は癒しの秘術を禁術として扱うことにした。使用時には使い手と相手との間できちんとした取り決めをして、いかなる事態が起きても、メデイック側は補償しないのを条件に秘術の使用を認めるとした。

こうした経緯もあり、純粹に錬金術のみでの医療技術向上を求めた一派は自然消滅した。

地上に帰ったとき、コルトンは一瞬にして治せないかと言ってみた。

「あなたがその歳でおじいさんになるか、腕がネジのように曲がるのを見たいならば」

と、普段の彼女らしからぬ強めの語気で言うので、コルトンは大人しく下がった。よく知っているからこそ、マルシアは使用時のデメリットを恐れていた。

それに、二週間も休めると思えば、お得な気もする。こう思えたのも束の間で、ちよつとぐらい、数日ほど期間を短くする程度なら問題無かったかも。

明日、階下へ行くことを聞いて、もうそこまで進むのかと驚き、自分一人が置いてけぼりを食らったみたいで、少ししよげたコルトンをエドワードは慰めた。

「気に病むな。あんたが動けるようになったら、二週間働き詰めてもらおう」

コルトンは笑顔で「それは勘弁してほしい」と言った。

親階層に降りてから六日目。二つの塔合わせて、エトリアの本都市並の広さと迷路のように入り組んだ道も把握できてきた。一行は安全運転を終了させて、次なる下層。二二階を目指した。道中、これといった戦闘もなく、窓の近くを例の二メートル級のトンボが二匹飛び

去っただけだった。

階段の左右端には埃が積もり、腐った植物と土が盛られている。階段の中央には、まだ新しい人の足跡が幾つも見受けられた。階段は真っ直ぐではなく、途中で折り曲がって、また降りる構造。

「先にお宝を発見されてなきやいいが」

今日は戦槌付きの長柄戦斧は置いてきた代わりに、ロデイムは背丈ほどもある両刃の斧を携えていた。

「お宝よりもまず、階段を降りてすぐ右の道はやばいと聞いた」

先に階下に降りたのは、グラディウスだった。彼らに直接聞いたのではなく、金鹿の酒場の女将からアクリヴィは又聞きしたのだ。

彼らは長居しなかったので、女将も詳しくは聞けなかったようだが、危険が一杯であり、赤い印を付けておいたらしい。ロデイムが呆れた顔をした。

「おいおい。危険が一杯って、それを言えば、この迷宮全体が当て嵌まるじゃないか」

「だから、その危険な所でも、もつと危険な所なんでしょう」

エドワードが横から二人の会話を止めた。

「無駄話は後だ。どのぐらい危険だというのは、実際に自分で確かめればいい」

「知ると同時に死ななきやいいけど」とロデイム。

彼の言うことももつともだ。知った瞬間に死ぬような目に遭うのは御免である。しかし、ロデイムも変わったものだ。本人は気付いてないだろうが、出会って間もない頃の彼なら、間違いなくいけいけドンドンと進んでいたはず。乱暴ともとれる勇敢さに、多少、慎重さが加わったのはバランスが良くなったとエドワードは思った。

通路と同じく、ただっ広い階段を降りる。階段の右側が植物に浸食されているのを見て、本当にすぐ右側だと分かった。

階段を下りると、左は人口の通路が続く。右は、完全に植物で構成された空間が出来上がっていた。植物の手前には三つほど、赤い丸印が書きなぐられていた。建物内部はここまで植物に浸食されたのかと思っただが、アクリヴィは違うと言う。

「ようく見て、植物の通路を。私たちが今居る塔と同じ鉱物の欠片が幾つもある。他にも、ほら」

アクリヴィは右側の植物に侵されていない窓から身を乗り出して、上下を交互に見やる。マルシアが声をかけた。

「何がわかったの!?!」

「説明しなくても、ここから見ればわかる!」

一人一人、左右の警戒として交代しつつ、窓の外を見た。理解した。右側の通路は別の塔と繋がっていた。また、その塔は今居る塔と比較しても、小さく、建物の植物による浸食は酷い有様。あちこちから覆われて、伸び放題である。ただ一つ、気になる物がある。右側の通路から繋がる塔の天辺に、とてつもなく巨大な車輪状のフレームのオブジェと思しき物が鎮座している。車輪状のフレームには、等間隔で丸っこい球体の物があり、球体には窓枠やドアが付いている。

「あれはなんなんでしょうか? 何かの神様や精霊を想像して作られたのでしょうか?」

ジャンベは素直に疑問を口にした。

「そうとは思えない。多分、住処の類だと思う。あくまで推測の話よ」
アクリヴィは推測という単語を強調した。「それとも、見張り台とかだったにして」

「あれの意味を知るためにも、まずは行こう」とエドワード。

右の通路を進む。デコボコした植物と根っこがはびこり、ともすれば、足元を取られそうになる。ロディムが試しにと、根を剣で突く。ちよつびと刺さっただけだった。鉄でできてるのかと、ロディムは言う。それを見て、今度はアクリヴィが火力を抑えた火の術式で焼いてみた。これもまた、根の表面が微かに焦げただけで、到底焼き切れそうにない。植物を排すのは、途方もない時間と労力を要することが分かり、除去作業は断念せざるを得ない。

あえて、危険を承知で行く。エドワードは改めて、上から下を眺めた。かつては高度な文明を誇っていた物も、永い歳月と植物には勝てなかった。変な感傷に浸りそうな気持ちを抑え、前を見据える。通路の半分も行かないうちに、甘い匂いが漂ってきた。

「良い匂いがしますね」とジャンベ。

確かに良い匂いだ。甘く心地よく、頭が冴える。

「滋養効果のある花や蜜でもあるのかしら？」マルシアは興味深そうに、足元や壁の根と根の間、植物を一つ一つ手に取り、匂いの元はどこかと嗅ぎ分けようとする。

進む度に、匂いの度合いは濃くなる。決して、不愉快ではない。臭くはなく、甘味に仄かな酸っぱさと苦みも混じり、飽きない匂いだ。

ロデームは歩きながら夢を見た。片手に女性の手を握り、片手には大量の宝と栄光を手にして凱旋する自分。アクリヴィは難しい数式や別の言語が次々と頭をよぎり、マルシアは匂いはなんでしょう、なんでしょうと楽しく口ずさみ、ジャンベは良い音色と新しい音の組み合わせが前に浮かんでくるような気がした。

エドワードは赤い調度品で囲まれた一室が見えてきた。赤の配色が多いが、悪い趣味ではない。バランスよく別の色が配置されて、高貴にすら感じる。部屋のどこかから、今も生きていると思う妹と母が出てきそうな気がする。中々に良いものだ。

「ああ、実に全く良い。良すぎるぜこん畜生めが！」

一時でも、悪い夢に陥った自分を恥じた。がっつと、口を噛む。強すぎて、口の中が少し鉄分臭くなつたが、ぼつちりと目が覚めた。歌うマルシアの鞆からビンを取り出すと、刺激臭のするビンの中身をジャンベに嗅がせた。何をと文句を言うようになったジャンベは、悲鳴に近い大声を上げた。

ロデームが半目で振り返る。「え？ あに？」

「目を覚ませアホウ！」どんと、エドワードは人差し指と中指でロデームの眉間を突いた。

何をすると言う前に、ロデームはわあと声を上げた。二人の悲鳴でアクリヴィとマルシアも正気に返り、眼前に広がる光景を見て言葉を失くした。

花花花。どこもかしこも花だらけ。先ほどまでの地味な緑から一変。一面、見事なまでに艶やかな紅の花に埋め尽くされていた。花の大きさは、十歳半ばの子供ほどの背丈がある。奇妙なのは、これだけ

あるのに、開花したものが一つも見当たらない。伸びきった分厚い花びらを頑なに閉じた花の群れ。

五人は動きを止めた。花に目があるわけなのに、見られている感覚がした。目の錯覚でなければ、たまに動いているような気がした。「後ろも見ましよう」

アクリヴィは振り返ったまま言う。それほどでもないが、背後も天井から壁に至るまで、赤い花で覆われつつある。言葉にせずとも、危険極まりない状況だというのは理解できた。

立ち去る前にと、アクリヴィが進み出て、前方を埋め尽くす花々へ向かって、火の術式を浴びせた。籠手が光り、両腕の手袋から炎が発射される。数本の花が炎に包まれた時、頑なに閉じられた花びらが開花し、ごぼごぼと詰まったような音が花の中央から洩れて、花は炎を消す為、激しく己の身を揺さぶっていた。

逃げろとエドワードが叫ぶ。転ばないよう早歩きする。炎を避けるように、周囲の花たちはざわざわと音を立てて移動していた。花たちが動けるのは明らかになった。

エドワードはわざと、壁の花に対し、いつでも反撃できるような小槍を持ち、花びらが届かない距離を歩いた。そして、真横を過ぎたエドワードへと、紅の花はがばと花びらを開いた。一目で花びらには、大量の棘があるのを見て取れた。

予想はしていたので、難なく襲撃を避ける。空しく宙を噛み、棘と棘をがちりと噛みあわせる。閉じられた花びらへ、エドワードは小槍を突き上げた。上下の花びらが小槍で縫い付けられた。もかく化け物花に対し、止めはロデウムが差した。花の緑色の茎をぎつくりと斧で切断した。エドワードが槍を手放すと、花はロデウムの足元に落ちた。槍を引っこ抜き、即座に子房の部分へと槍を根元まで刺した。刺した箇所から甘い匂いはせず、硫黄臭が漂う。

元来た道まで引き返す頃には、埋め尽くされた花々は半分、姿を消していた。

追ってこないのを見て、ようやく一息付いた。

「また行くか、こっちのほう」

緑一色に戻った通路をロディムは指した。

「今はまだ行かない。準備が整ったら、いつかは行こう。いつかはな」とエドワード。

正体を確かめるため、早速、花の解体にかかる。花びらを開くと、一層、甘ったるい匂いがしてきた。棘に注意しつつ、花びらを切り落とす。

事細かに解体した結果、この食人花しよくじんかの生態が推察できた。証拠にと、棘を一本だけ持っていく。花たちの匂いによる影響か、頭や体が少しふらつくので、植物通路から離れて休憩する。

体が落ち着いたら、今度は左側の道を行くことにした。こちらは植物に侵されておらず、緑の通路より幅がある。右角を曲がり、十メートルほど足を止める。

「光っている」

率直な感想をロディムが述べる。左は窓、右は壁なのだが、右側の壁にはひびがあり、光が洩れている。壁や天井、この世界を照らす物質と同じ物があるのだろうかと思ひ、無視しようとしたがロディムが拒んだ。

「ここは掘るべきだ！ 絶対、俺の勘がささやいている。金目の物がある。頼む！」

「ロディムの勘は変な所で当たるし、花に襲われた以外での土産話があってもいいんじゃない？」

マルシアが賛同の意を示したので、ロディムは調子に乗って、そうだそうだという。

エドワードはちよつと迷った。勇気と慎重さ。いつもこの線引きに迷う。だが、ロディムがたまにいう勘というときは、内容の規模こそ小さいが、当たることも結構あるので、無くても合っても、試しに壁を壊すことにした。

壁を壊すのには、二時間半要した。倍以上かかると思ったが、意外と短く済んだ。もっと早く壊せることもできたが、時折り、怪物が通ったり、壁を下手に崩さないよう慎重な手付きでコツコツと叩いていたので時間がかかった。一応、人一人が這って進める穴を作れた。

壁を壊すと、光の強さが増した。植物に覆われた先に、壁や天井の材質とは異なる発光源があるようだ。

期待に胸をふくらまして、植物を排する。疲れや恐怖よりも、怖い気持ちに混じった興奮が男三人の手を動かす。這って進める大ききの道というか風穴を作る。そして、ご対面。

「わあお!! 見……い」

ロデイムの頭をはたいて、大声を制止した。見張りに付いていたマルシアとアクリヴィが穴を見やり、目を輝かす。彼女らの目よりも更に眩しく、花は輝いていた。

そう、花である。しかし、今度のは物騒な人を喰う花とは異なり、きらきらと輝く、花本来の目的を思い出させる美しい緑水晶の花とツルと雑草まである。ツルと雑草も水晶に光ってる。ロデイムの勘は見事に的中していた。

採集は慎重な手付きのアクリヴィ、マルシア、ジャンベに任せ、エドワードとロデイムは敵が来ないか見張りにつく。マルシアの袋には花を詰め、アクリヴィとジャンベの袋には雑草とツルを幾つか入れた。

「これって、繊細よね。固そうに見えて、意外とぽつきりいっちゃう。おまけに見て」

マルシアが袋を見せびらかす。中を覗くと、水晶花は緑から淡い茶褐色を発光していた。どうやら、置く場所の色によって、花の色も変わる仕組みらしい。全ては取らず、数個ほど摘まんだ。グラディウスが先にここを通っていて、隠しても無意味かもしれないが、破片を集め、壁の穴を埋めた。破片の間に一枚の布を敷いて、光が洩れない工夫もしていた。物はついでに壁材もちよつと持ち帰ることにした。

印は付けない。下手に付けたら、かえって怪しまれる恐れがある。エドワードは微笑した。

「分け合うことは必要だが、他の箇所が発見されるまでは、当面隠しておこう」

赤い食人植物への恐怖と反省はどこへやら、五人は意気揚々とした足取りで二階の時軸まで戻った。

夜になってコルトンに話す際、順序を逆にして、最初に水晶植物発見の朗報を聞かせて、最後に食人花の話をしたのは、コルトンに緊張感を持たせると同時に、ばればれの罫に嵌まった不甲斐ない自分を戒める意味もあった。

コルトンはコルトンで、サヤとニツツアと片手で渡り合ったことを語っていたが、たまたまシリカ商店でニツツアに会い、今日コルトンとの間にあった出来事を聞いていた。聞くだけ無駄な気もするが、本人は語りたがっていた。同室の三人はツツコミを我慢して、コルトンの脚色を加えられた話を聞いた。

翌日。一週間ぶりにホープマンズの五人は休んだ。

世界樹の迷宮探索で緊張しきった心身を休め、のんびりと休憩……という訳にもいかない。五人は自主的に武芸の練習をした。休む日なので長時間はしないが、怪物と戦うばかりでなく、時には人間同士の稽古も必要なことを理解していた。

アジロナ外壁にいる衛兵を練習相手として武芸に勤しむ。ロディムは槍を持った衛兵と対峙し、エドワードは槍同士で向き合う。アクリヴィは正座の姿勢で半時ほど瞑想した後、レイピアを構えて、レツドユニティ所属の赤髪が目立つ女黒人パラデインのブルーナと稽古し、適当な衛兵二人にマルシアは目を付けて、主に棒術の訓練。片方はジャンベの相手。衛兵といえ、マルシアの笑顔を見せられて、二つ返事でオーケーした。

コルトンはぼっと、五人の練習光景を眺めていた。

二時間後、それぞれ衛兵に礼を述べた。マルシアの相手をした衛兵はどこか引きずった顔をしていた。彼女が見かけに寄らず、予想以上に棒術を心得ており、外見とのギャップと負けたショックで落ち込んでいた。

ブルーナは豪快に笑い、アクリヴィの背をばしりと叩いた。

「いやー、あっはっは！ あんた、錬金術師なんか辞めて、今からでもソードマン目指したらどう？」

「遠慮しておくわ。これ以上、指と腕が太くなったら、本をめくるのに邪魔になるから」

残りの一時間は何をするかは決まっていた。エドワードが言う。

「もう一人のメンバーも連れてこよう」

「一頭だろ？」とロディム。

「数え方は勝手だが、俺たちの住んでいた場所では、馬は家畜であり、大切な家族の一員だった」

街の外れ、比較的大きな厩うまやが建てられている。民間人や衛兵、冒険者の馬も預かるのは、厩かんひづめ館の主、リストマツティ。普段はひづめ館と呼ばれる。

ひづめ館で働く青年ニコムデスに挨拶をしたら、冒険には行かないもう一人のメンバーと会う。

どこまでも淀みない黒さ、深い知恵を称えた黒々とした眼差し、樹齢数百年の木々にも劣らぬ引き締まった胴体。長髪の美人を思わせるさざりとした鬣たてがみ。走るのに一蹴りたてがみで地面を抉り取ってしまう光景を想像させてしまう太く逞しい四肢。他のどのものよりも、瑞々しい生命力で充ち溢れている。

自らの愛しい者が来ても、駄馬のように喚くことはない。

「ブケファラス。三日ぶりだな。今日はお前の背に乗ろう」

主人の了解を得て、ようやく彼はぶると小さく鳴いた。ブケファラス、ホープマンズ共有の馬であり、エドワードの愛馬である。

厩かんひづめ館に預かってもらうこともあれば、チノス一家に預かってもらう日もある。天気が荒れており、一家が二日ほど厩かんに預けていたのだが、しばらくは晴れ間が続くそうなので、再び、一家に預かってもらう。残りの時間はブケファラスと過ごした。

外壁から出ると、順番にブケファラスの背に乗った。樹海生物の皮をなめして作った鞍を装着する。

最初にアクリヴィイが乗った。彼女は多少、馬術を心得ており、一応、走らせることもできた。マルシア、ジャンベは徒歩。走らせるのは自分、先になりそうだ。鞍から降りたら、マルシアはブケの頭を撫でて、砂糖菓子を食べさせた。

「良い子ね、ブケ」マルシアは愛称で呼んだ。

馬は賢い生き物である。十年近く離れた主人と出会っても、すぐに

誰かと分かり、擦り寄ってくる馬もいるほど。ブケフアラスはブケと
いうのも自分の名であり、また、マルシアとジャンベの二人を背に乗
せたら、自分は歩かなければいけない事も理解していた。

さて、お次はロデイムと言いたいところだが、ロデイムは拒否した。
かつては牛を乗り回していた悪ガキにも、苦手な物はあった。ロディ
ムは昔、馬に蹴られたことがある。

馬に泥を投げるといふ悪戯を繰り返していたら、切れた馬が馬房の
柵を壊し、少年ロデイムを蹴り飛ばしたのだ。幸い一命は取り留めた
ものの、茶色い巨体が迫り、目にも留まらぬ速さで蹴られた出来事は
悪たれ小僧の心に反省と恐怖の二つを植え付けるのに十分だった。
以来、彼は馬が苦手である。

完全な自業自得であり、この話を聞いて面白がる者はいても、同情
する者はいなかった。

最後にエドワードの番である。ブケは待たましましたと歩み寄るエ
ドワードを見つめた。嬉しそうですねとジャンベが隣のマルシアに
言う。

慣れた動作で鞍に乗ると、ひゅいと口笛を吹き、発進。見る間にブ
ケフアラスはエドワードを背に乗せたまま、草原を駆け、平らな丘を
登り、見る見ると点のように細く小さくなっていく。コルトンは一
人、外壁から立って、見ていた。コルトンの腕前とはいえば、付き合
いが長い分、アクリヴィより乗れる口であった。やはり、エドワード
は地下にいるより、地上で馬を駆る姿が様になると思った。

途中で休日を挟みつつ、二一階と二二階を行ったり来たり。二二階
には、更に四つの橋が架かり、また、要所で他の階からでなければ行
けないような道もあり、探索は困難を極めた。

新階層に降りてから十四日目。ホープマンズは二二階の探索では
なく、二二階と通じる植物の塔を探索していた。彼らはギルド長であ
る隻眼のガンリユーに頼まれて、二二階に五人組のパーティがいない
か搜索していた。

モリビトとの取り決めにより、第四階層での探索は木曜日金曜日の

二日に限られる。その為、ガンリユーや執政院冒険者窓口室長オルレスは、本来は五階層の怪物と渡り合えるほどの知識と実力が無いパーティが先行して、無下に命を落とす事態が多発しないかと恐れていた。予想どおり、本来は三階層で燻っていた一組のパーティが五階層に到着。これに気をよくした五人は先へ先へと進み、まだ完全に地形を把握しきれてない二二階へと降りた二日前から消息を絶った。

ガンリユーが知り合いから知り合いへと聞いた話によれば、彼らは植物の塔を調査するつもりでいた。

「馬鹿野郎どもが。あいつらの腕前は認めるが、後一年、三階層で鍛えるべきだったんだ」

そういうわりには、ガンリユーの顔には影が差しかかっていた。仲が良かったのか、惜しい逸材だったのかまでは聞かなかった。

植物塔に通じる橋の危険は承知している。準備を整えて、各種、刺激臭がするビンを携えて、口元を長い布で被い、急ぎ足で進む。無事に通過。気付いてはいたが、紅の食人花が天井と壁にはびこっていた。食人花の群れは、獲物が引つかからなかつたのでわさわさと引込んだ。

「花に食われたのなら、痕跡なんて残りそうもないわね」

見て分かつたのだが、植物の塔は二つの塔よりも遥かに小さく、建物内部の構造も至って単純だった。植物がはびこり、いっどこから怪物が襲ってくるか察知しにくい点を除けば。

五人の身元も気掛かりだが、それよりも、ホープマンズは植物塔の屋上に鎮座する車輪状のフレームが気になっていた。あそこになにか、この古代文明のヒントが隠されている可能性が無きにあらず。

ロデームが先頭を歩き、エドワードは二番目、マルシアは真ん中でジャンベは四番目、アクリヴィは後列を務め、いざ上階へ。階段を上ると、エドワードは改めて、階段を見た。気配を感じていたのだ。息を殺し、獲物を仕留めようとする自然の狩人がいる。ジャンベは逆に、前方を気にしていた。ジャンベの耳には、上からの微かな物音が届いていた。

少し進んだら、エドワードとジャンベは歩を止めたので、三人も歩

みを止めた。通路右に部屋がある。ドアは無いが、塔全体は薄暗いので襲撃するには持ってこいだ。ロディムに視線で合図する。ロディムはポーチから、干し肉を一切れ取り出し、部屋の前に投げた。そして、部屋から真っ赤な毛玉が飛び出し、肉に食いついた。狼だ。炎を連想させる逆立つ赤い剛毛の狼が五頭、部屋から出てきた。

下がりながら、エドワードは後ろだと叫ぶ。後ろからも、数頭の狼が静かな足取りで接近していた。前門も後門も狼に挟まれた。

「後ろは任せた」

アクリヴィはゆっくりと迫る狼に狙いを定め、ロディムは隣に付く。エドワードとジャンベは矢を番え、マルシアは真ん中に待機。こんなときこそ、前方をコルトンが守っていてくれたらと思う。

エドワードの張りが強い長弓から矢が放たれ、干し肉に食らいつく狼の脳天にぶるると揺れて突き立つ。

それを合図に、群れは一斉に襲いかかる。前方からは三頭も新手が出現した。ぶうんぶうんとエドワードの長弓は間断なく唸り続け、狼に命中していく。深層にいるだけのことはある。脳天に食らった一頭目以外は、心臓にまで矢が達しても、すぐには走りを止めなかった。

ジャンベは中ぐらいの大きさの弓をエドワードより遅く射る。威力と連射速度は大分劣るが、外すことはなく、確実に命中させた。

背後では落雷のすぐ後、凍える冷風の術式をアクリヴィは狼に浴びせた。雷を食らっても、思ったより効果はなく、狼に鞭を与えただけだった。強力な威力で発するには、練るための時間を要し、時間をかけずに撃てば、激しく体力を消耗するのだが、四の五の言ってられない。雷の術式にたて続けて、アクリヴィは氷の術式を狼共に食らわせた。

効果があり、狼共の全身は薄皮が張るように凍りつき、二頭は吹っ飛ばされて、固い根に叩きつけられて砕けた。一頭、最後尾は術式を食らわずに済んでいた。赤い狼は意外な能力を見せてくれた。

狼は口から火を噴き、凍った仲間を助けようとしていた。仲間想いなのは、群れで行動する時点でそういう一面があってもおかしくない。しかし、火まで噴くとは。同情もしてられない。別の群れを呼ば

れては厄介だ。ロディムが進み出て、残る一頭に剣を向ける。

「こい、タイマンだ！」

逃げられないと悟った火噴き狼はロディムへと飛びかかる。何が何でもロディムの喉元を食い破ってやるという気迫すら感じられたが一步及ばず、ロディムの剣で喉元を刺し貫かれた。

死体は捨て置き、三頭の新手が出現した角を曲がると、やはりというか。血で湿って黒ずむ服やマント、焼けた装備品に武器が散乱していた。血濡れた骨、肉片が付いた頭骨まである。その先にも、武器などが散乱していた。五人は食われていたのだ。また、ここに狼の肉と骨があることか察するに、返り討ちに遭った仲間の死体と一緒に食ったのだろう。

あまりにも惨い光景。だが、改めて思い知った。ここはこういう場所だ。栄光を掴めるチャンスは幾らでもあるが、誰彼を恨んでもしようがない、人間には決して優しくない非情な世界ということ。

「俺は……頭骨やらを持つのはやだぜ。かさ張るしな」とロディム。

慣れとかではない。これはこれと割り切り、感情を殺して、エドワードとマルシアは髪の毛が残る頭骨から数本、頭髪を切り、頭髪が取れない死骸からはこれと思う武器や装飾品を持ち帰ることにした。

狼の出現で歩みは遅くなり、神経が研ぎ澄まされた。でてこないかとぴりぴりとした緊張を持って進む。

しかし、狼の群れ以降は、数回ほど別の種が出てきただけで、屋上へと通じる道を塞いでいた動く一つ目の毒樹をあつさりとは片付けたら、鬱屈とした空気から逃げるように屋上へと飛び出た。建物から出て、その身に直接浴びると、五階層の世界は本当に光りを発しているのを知る。

危険は多々あるが、とにもかくにも、植物塔の屋上に出て、安心した。それでも、すぐに警戒した。外には外の危険がある。怪鳥に怪物ヤンマが飛んでいるからだ。

屋上はさして遮蔽物はなかった。十段の長く広がる段差を上がり、車輪状のフレームを近くで見ると、改めて、巨大なことを認識した。果たして、このような物を建てた意味は一体？ 車輪状のフレーム近

くには、なんの特徴もない四角い小屋がある。

小屋の中を覗く。箱やら緑と赤の線、訳の分からぬボタンにレバーまである。試しに押ししたり引いても、反応がない。無意味だったか。期待せず、小屋を探っていたら、文字が書かれたプレートを三枚見つけた。一つは判読できないほど風化していたが、二枚は一応、判別できた。しかし、困ったことに書かれた文字が読めない。

肩を落とすメンバーに、エドワードは悲観するなと言った。

「俺はこの文字を知っている。といっても、俺自身は読めない」

「じゃあ、意味がないじゃん」ロディムが肩を落とす。

「早まるな。俺は読めないが、読める人は知っている。ゲンさんだ」

「何!? どういうことだ」

「修行時代と今でもたまに、ゲンさんやコウシチ、ゲンさんの知り合いのアーネ女将が時折り、この文字を使っていた」

そういえばそうねとアクリヴィが頷く。

「確か、これは『漢字』とかいう文字だったはず。俺は読めんが、ゲンさんやコウシチ、エトリアより遠く東西に住まう人種がこの文字を使う」

狼襲撃の一件もあり、もつとないとは洩らず、変位磁石を使用して樹海時軸近辺に戻った。地上に帰ると、様子がおかしかった。宿のコルトンに尋ねたら、詳しくはパスカルが教えてくれると言った。エドワードも、発見があったとコルトンに言い、答えを知るにはゲンエモンに聞く必要があると教えた。

パスカルはパーティの代表が来てくれれば言い伝えていた。自らに語れる大事な話があるというので、コルトンを伴い酒場に向かう。

大変な予感に身震いするも、早いとこ答えが聞けやしないかとエドワードとコルトンは思った。

二二二話・会合

今宵は月明かりもなく、薄靄がかつたような曇り空のせいでいつもより暗い夜道だというのに、真昼のような灯りと人々の賑わいを催す金鹿の酒場に着いた。

夜にも関わらず、人で混雑し、テラスの席も殆ど埋まりかけている。座れなくてもいい、とにもかくにも話を聞けさえすればそれでいいと思ひ、コルトンとエドワードは入店をした。ちらりと、ゲンエモンが見えた。

入ってすぐ左側の卓に座る顔馴染みである戦う医師オールドリッチにおいと声をかけられた。オールドリッチと同席するのは、コルトンと同じく元傭兵であり、ゲンエモンら侍とどこことなく顔が似ていて、東にある日差しが強い険しい山岳に阻まれた国出身だという黒ひげを蓄えたヴァロジャが腕を組んで鎮座していた。冒険者やエトリア住民込みで数えても、彼の背を上回るのはいない。恐らく、二二〇もある巨人に大きな盾を構えられて、槍や斧を向けられたら、並大抵の者は当然、彼より小さな樹海生物ですら戦う前に怯えて逃げてしまう。

一方、彼と比べて、オールドリッチの小さく見えること。背はそんなに低くないが優男風な人相もあり、彼の小ささとヴァロジャの巨体さがより一層比較されているが、不思議なことに、並んで座っている二人の絵は調和していた。さながら、悪党とそれを守る用心棒。知恵と力、足りない部分を互いに補い合う奇妙な幼馴染み同士に見えないこともない。

ヴァロジャが入店した二人をそれぞれぎろりと一瞥した。見かけどおり、相当な膂力を誇るヴァロジャだが、暇潰しにやった腕相撲で何度か負けたことがある。勝敗はヴァロジャがやや優勢だが、エトリアに来てから、自分の怪力を打ち負かす者たちが何人もいるとは思ひも寄らなかつた。

「まあまあ、そう気張らずに座れ」

オールドリッチは手をひらひらさせて、へらへらとした笑顔で座るよう促した。ヴァロジャに鋭く一瞥されて、思わず身を引き締めていた

エドワードとコルトンは肩の力を抜き、数少ない席に座れた。

宿も違う二人であるが、探索中にオールドリッチらが毒で身動き取れないヴァロジャ一味を助けた事があった。それ以来、友情とは呼べなくとも、オールドリッチとヴァロジャの間には縁ができた。こんな威圧感溢れる巨漢に陣取られて、若い冒険者のリーダーたちの中で同席させて下さいと言える者はいなかったようだ。

エドワードとコルトンが来て、ちらほらと数人が遅れて到着したとき、パスカルが混雑に負けないぐらいの大声を張り上げた。彼はカウンターの内側にいた。右腕を掲げるように挙げて、何故、集めたんだという余計な意見を制した。

「皆集まってくれてありがとう。本当なら、もっと勿体ぶった感じにお喋りして、場を盛り上げたいところだが、残念ながら今回はなしだ」
そういう語り口の時点で既に無駄ではと何人か内心思い、口に出す者もちらほらいた。パスカルはわかったわかったと手の平をひらひらさせた。

「単刀直入に言おう。七階の毒沼中心部には絶対近づくな」

そこから、パスカルは重々しく言葉を続けた。パスカルの目には、未知に対する好奇心はなく、恐れと疑問が浮かんでいた。

「俺は身震いした。これまで、幾度となく危険と隣り合わせで生きてきた。女王バチがいる軍隊バチの巢にも突っ込んだ。ケルヌノスの傍を数回、通ったこともある。だが、あれは、そういう危険を遥かに越えていた。あの歌は美しかった。ぜひ聴かせたいぐらいだ。声質からして、女っぽい歌声だった。だが、俺の今までの経験と勘が激しくざわついた。もしも、このざわつきに従わなければ、俺は多分、こうして酒場で皆に語ることもできなかつた。俺の勘はこう告げている。死ぬと。歌に誘われて行けば、確実な死が待っていると俺の勘が何故かそう告げていた」

「正体は確かめたのか？」とゲンエモン。

「残念ながら、確かめる余裕はなかつた。俺はダマラスたちを引っぱたいて、すぐに六階へと逃げた。美しい歌を聞いて、逃げる必要あるのかと思う奴もいるだろう。だがな、六階へと無事逃げおおせたと

き、俺は汗をかいていた。暑くてかいた汗じゃねえ、冷や汗だ。あのときの汗は間違いなく、命の危機から逃げ果せた時に流れ落ちた汗だった」

ゲンエモンは頃合を見て、疑問を投げかけた。

「気になっておったのだが、パスカルよ。さつきから聞いておれば、お主、歌は美しいや聴かせたいなど、まるで、もう一度、聴いてみたいような話しぶりではないか」

確かにと顔を合わせる者もいた。パスカルは恐ろしいと言いながら、どこかその目はうつとりしていた。パスカルは重々しく頷いた。「そうだよ、ゲンさん。俺たちは歌をもう一度、聴きたいと思ってしまった。だけど駄目だ、駄目なんだ。少しでも、歌に気を許したが最後、今度こそ俺たちは」

パスカルは言葉を切り、自らの爪を噛み、落ち着かなさそうに足を二度、踏み鳴らして世界樹がある方向を少し見やった。その様子は、快楽を得る代償として常に薬を打たなければならないのに、わざと薬を打つ時間をずらして、打った時の快感をより一層得ようとする麻薬中毒者に見えた。

パスカルの実力は知れている。彼が仲間と軍隊バチ以外の存在に虜になりかけているとは、にわかには信じがたいが、彼の今の有り様を見たら、信じざるをえない。

「正体も分からん上に具体的な対処法も分からん。ただ言えるのは、心を強く保ち、他の樹海生物を呼ぶ覚悟で大声で叫ぶなり歌い返すなり、強い刺激臭のする物を持つとか、舌を噛むなり針で刺すなりすれば、気が逸れると思う。もつとも、いざあの歌を聴けば、俺が挙げたありきたりな対処法が通用するか怪しいがな。とにかく、毒沼がある七階は嚴重警戒したほうがいい」

パスカルの言うことはよく聞いたほうがいいとゲンエモンも念押しした。

大声を上げる。舌を噛む。刺激臭のする物を持つ。待ち伏せや毒の粉など、頭を使ってハンティングする樹海生物の罠に陥った時の対処法の幾つか。それらが効かないとなれば、別の方法を探すしかない

が、どうやって見つめるかが問題になる。

ざわつく中、一人、ゲンエモンとパスカルの忠告に異を唱える者がいた。オルドリッチだ。

「忠告は確かに聞いたが、近づく近づかないまでは自由に決めていいはずだぜ」

夢から覚めたように爪を噛むのを辞めて、忠告を聞いていなかったのかと不機嫌さを窺わせて、パスカルはオルドリッチを睨んだ。

「遅かれ早かれ、いつかは退治する必要がある。近づくのを避けて後に犠牲を出すか、今近づいて犠牲を出すか。そういう話だろ？ 頭が悪い奴のためにも、もっと判りやすく言おうか？ なんもわからんまま後になって犠牲出して、びびって手をこまねいた拳句に手を打つか、今犠牲を出して対処するかだ」

「お前は歌を聴いてないからそう言えるんだ」

睨み合うオルドリッチとパスカルの間にゲンエモンが入り、仲裁した。

「二人共熱くなるな。今は我ら冒険者、引いては地上に住まうエトリアの者たちの危機にも関わる新たな二つの脅威の正体について語り合いに来ただけ。無用な論争の為に集まったのではない」

「じいさんはどうお考えで」オルドリッチはゲンエモンを見て言った。「わしは二人の言い分、どちらにも一里あると思う。無闇に近づくのは危険なのは確かだろうが、いつかは、この中に居る者たちか居ない者たちの誰かが倒さなければいけないのも事実。近づくなというのなら近づかないが、手が欲しいというのなら、その者たちに喜んで手を貸す。わしが嫌でわし以外の者の手が欲しければ、そちらに声をかければ良い」

あまりにも頼りないパスカルに替わって、ゲンエモンが話を上手くまとめた。お前の意見はどうだとコルトンに見られて、エドワードは今まで閉ざしていた口を開いた。

「どうもこうも、二階層は二階層の探索に当たっている連中に任せればいい。ただ、敵わないようなら、手を貸してやる。だが、相当犠牲を払ってからでないと助けの声は来ないだろうな」

コルトンはこくりと首肯した。ある程度の階層に辿り着けたら、いらぬ誇りや自信がどうしても出てしまう。今もたまに、自分がとんでもなく凄いと思ってしまう時がある。戒めていてもだ。二階層を探索している者たちが他の階層を探索している者たちに助けを求めるとしたら、多くの犠牲を出していることだろう。自らの手で危険を切り開いてこそ、価値がある。望む望まざるに関わらず、付加価値として名誉や金も自然と付いてくる。それらの取り分を喜んで、他人と分け合うのは難しい。親しい者とするんで潜り合う、個を尊重する冒険者となれば尚更だ。

俺から話せるのはここまでだと、パスカルはカウンターから出た。お次は一階層に出現した巨人の話。

巨人を見たという話は一階層の探索者たちが多く語ってくれた。コルトン、ダルメオとファイリも証言した。地上でも揺れを僅かに揺れを感じた者たちが多くいたらしく、パスカルの語る謎の歌姫の話よりも信憑性があり、脅威に感じられた。

しかし、実際に見た者はそんなにいなくて、大きさもまちまち。成長した樹よりでかいと語る者もいれば、天井をこすりそうなほど巨大だったと語る者もいた。断定するのは良くないが、少なく見積もっても、天井をこするほどの大きさはないと判断したが、一階層にある成長した樹を上回る大きさの可能性はあった。二体の怪物の出現に一、二階層の冒険者たちは通夜に行く人のような顔を見せたが、深層の冒険者たちはそこまで興味が無さそうだった。上の問題は上が片付ければいいと考えていた。

今がタイミングだと、女将がどこからともなく現れて、につこりと一同に微笑んでみせた。

「皆さん、そんなに堅苦しくしていたら、明日の冒険に差し支えますよ。一つ、リラックスしていきませんか？ 今日はこちらとサービスもお付けしておくわ」

重い微妙な空気が薄れ、集まった者たちはにわかに活気づいた。女将はいつもと変わらず胸もとが開いた服を着て、目元や口紅にのみ薄らと化粧をして、寂しさが同居した瞳からくるたおやかな笑みは男た

ちの心をほぐし、女たちには女性の魅力という物を思い出させた。

物はずいごと、エドワードとコルトンも林檎をこしたジュースを一杯だけ飲んだ。同席のオルドリッチとヴァロジヤは料理を注文していた。初めから、二人は食事を取りに来るのも目的であった。とつととジュースを飲み干したら、こつそりと女将の目を盗んで退席した。彼女に目を付けられたら、更に頼んでしまいそうな気がしたからだ。夜道を行きながら、コルトンは顔をにやけさせて話しかけた。暗くて、エドワードにはコルトンの表情は読み辛かった。

「女将さんのことをどう思う？」

「親切で優しい人だな。真偽はわからんが、大分前に旦那さんが亡くなったとは聞くし、良い貰い手が見つければいいな」

コルトンはそうではないと首を振る。「わからんのかお前は？」
「わかるさ。あの人を女と見て抱きたいかという話だろ？ 残念ながら、俺はもうしばらく嫁を貰う気はないし、その暇もない。一族がもっと安定した生活ができるようになれば、その時にでも嫁を貰うさ。四十になって始めての者もいれば、大昔、一夫多妻の時代には五十で三人目の嫁さんを貰う奴もいた。心底、欲求不満が抑えられなければ、港の売女でも買って発散すればいい」

コルトンは周囲を見回した。アクリヴいやマルシアはいない。

彼らは別の意味で遊びに行く日が一年に一回か二回ある。もつとも、そこに行つてもロデームは手をこまねいているだけ。エドワードは裏に通じる連中と知り合うのが一番の目的であり、その手の女には関心が薄く、横に侍^{はべ}らせても、飲食物を注^はがせるだけで触れることも滅多にない。経験があるのはコルトンぐらいのもの。傭兵時代にも、商売目的で来た行商人たちにそういう女たちが混ざっていれば、少なからず買った経験がある。戦場に身を投じたら、その手の行為は一切しなかつたが。こんなことを自慢してもなんの意味ないだろうが、仲間内で経験があるなしで自分にだけ語れる物があるのは密かに喜ばしかつた。

ジャンベを連れて行くかで話し合ったこともある。純粋なジャンベには早すぎるし、これからも連れて行かない方が良い気がしてい

た。

「明日からは女の尻を撫で回す余裕が無いぐらい、あんたには大盾を持って働いてもらおうぞ」

「ほどほどにな」

そう言つて、コルトンはばしりと背中を叩かれた。

リハビリがてらに翌日、三階層に潜った。八月も間近。真夏で暑い地上とは異なり、三階層はひんやりと涼しかった。コルトンを先頭に一行は、適当にふらふらと当て所なくさまよい、出会つて向かつてくるものあらば、撃退した。一体なら、近づく前にコルトンの大盾で弾き返されるなり、剣で弾き飛ばされるなりされた。一階層とは比べ物にならない三階層の探索は、いやがおうにもコルトンの鈍りかけていた闘争本能と勘を一日で取り戻した。

迫る鎧を身にまとう黒アリ三匹の一匹は矢で貫かれ、一匹はコルトンが盾でえいやと頭が千切れるほど強く殴りつけ、最後のは斧で上半身と下半身を切り分けられた所をコルトンの戦槌で頭をぱつくりとやられた。

戦いっぷりを見て、コルトンが錆び付いてないのを知り、五人は一安心した。

「その調子なら大丈夫だろう」

エドワードが何やら含んだ笑みを見せた。目尻は下がっているが、口元は微笑んでない。

嫌な予感がして、コルトンは少し不安になった。不安になったのはコルトンだけではない、他のメンバーもだ。父との約束で一度は滅んだ一族を復興させる為とはいえ、わざわざこんな離れた地まで来たり、ジャンベをいきなり連れて来たり、最近だとモリビトと手を組むといった時として冷静に考えた末での行動とは思えない事をする。

回数自体は数えられる物だが、中身がどれもこれも嫌でも印象に残ってしまう出来事なので、今回もまた、そういつたことを企んでいるのかと思つた。

「案ずるな。シリカ商店から金鹿の酒場への依頼だ。獲物を一体、仕

留めればいい」

「獲物とは何ですか一体？」とジャンベ。

「竜骨だ」

マルシアはあらあらと言ひ、それ以外の者は目を見開いた。最近、到達したばかりの五階層に潜む、白い骨を体に張り付けたかのような変わった風体の白い地竜。どこぞのパーティが気取ったのか、“死を呼ぶ竜骨”と呼ぶ者もいるが、長つたらしいので呼び名は以前と同じく地竜、竜骨とでも略している。

到達したばかりのパーティが瞬時に全滅した光景を目撃されて以来、地竜の強さと狂暴性が伝わり、滅多なことではこちらから挑もうという者はいない。しかし、彼らは別である。偶然だが、彼らは一応、倒したことがある。コルトンは聞いた。

「儲かるのか」

「以前、モリビトとの戦いで緋緋金の地竜の一部を頂いたよな。あれから作られた武具の値段は、さすがの俺も目玉が飛び出しそうになつたよ」

シリカ商店など世界樹採集物の販売加工を行う五店では、店にもよるがべらぼうに高い値段を設定された。侍が着る鎧具一式合わせて十五万エン以上、緋緋金でできた武器にも驚くほど高い値段が付いた。

「緋緋金ほどの価値はないが、地竜の使いそうな部分を上手く持ってきてたら、謝礼込みで一萬払ってもいいそうだ」

一萬と聞いて、また見開いた。

「俺からの復帰祝いだ」エドワードは楽しげに言った。

反して、コルトンは口を真一文字に結び、目をぎらつかせた。

「やってくれるぜ全く。大した復帰祝いだ。そんなに俺を早死にさせたいのか？」

「嫌ならちょうど五人になるから、それで行く」

「そういうときは嘘でもいいから、お前が必要なんだと言うもんだ。よし！パラディンのコルトンが大盾に賭けて誓おう。お前達を必ず、トカゲから守ってみせよう」

早々に帰還し、次の日の準備を整えた。覚えている限りでは、アクリヴィの炎の術式を食らって苦しんでいたので、炎は効果があると見た。一応、シヨック、フリーズオイルの瓶も一点ずつ持っていき、ファイアオイルを各自一個ずつ携帯することにした。

エドワードは鎧通しと鎧砕きの矢をそれぞれ十本ずつの他、体に打ち込んで効果を発揮する毒矢五本、点火して毒煙を流す矢を三本準備した。毒矢の中身の半分はマルシア手製で後の半分は自前で用意した。毒矢は自分が全て持ち、他の矢は幾つかジャンベに持ってもらう。ジャンベは今回、短弓ではなくボウガンを持つてもらおう。連射性は短弓と比べ劣るが、命中率と扱いやすさでは優る。

樹海時軸を抜けて、一気に五階層へと降り立つ。三階層とは異なる空気を肌身で感じ、コルトンは全身の筋肉が改めて引き締まる思いがした。

五階層二一階。本当は建物の何階かに位置するのだが、二つの塔が何階建てかは不明なので、五階層の二一階ということにしてある。

二つの塔では現在、二二階に二頭。二二階にて数頭、地竜が出入りしている姿を確認された。シリカは五階層にいる地竜の話に大変興味を持ち、話を聞いているうちに頭に何かピンと降りてきて、凄い武器を作れそうだと思い、酒場に依頼した。なんでもいいというので、樹海時軸のある塔に出没する鬱陶しいこと極まりない個体を仕留めることにした。

真の復帰祝いが地竜退治だとは、骨が折れるどころか心の蔵が食い破れられそうだが、地竜に対する恐怖と戦いの先にある成功を手にしたときの二つの思いが重なり、体が武者震いした。ジャンベはきゆうと背筋を伸ばし、ロデームとアクリヴィは降りてから二度も入念に武装をチェックし、エドワードも一回だけ弓弦の張り具合を確かめていた。

マルシアはいない。今回はあくまで攻撃力のみを求めた。彼女も戦いは心得ており、足手まといではないが探索ではなく純粹に戦闘をする場合、どんなに優れた医師でも治せない怪我を負わせる相手ならば連れて行くか行かないかで迷う。いぎ、自分達の身に万が一のこと

があれば、一番若いジャンベか、死の場面を何度か目撃している彼女が適任だと思った。彼女は医師であり、知識も豊富で容姿も良い。冒険者として引退しても、その後の人生を普通に暮らせるだけの器量と遺産はある。

ジャンベというメンバーが入ってからは、そういう風に思われがちなのに薄々気付いているのか。私も結構、体張っているのよとアクリヴィに洩らしていた。アクリヴィはそれは話さず、自分の胸に秘めていた。

そこらの人間の兵士より手強い樹海生物達の中でも、深層に潜む、曲がりなりにも竜の名を冠する怪物との戦いは、戦闘前から苛立ちに近いかなりの緊張をもたらした。

以前のように、ただ倒せばいいのではないので、自分達が安全に戦えて、かつ、地竜の遺体が落ちこちない場所を選ぶ必要があった。一向に開く気配がない、数字が書かれたボタンがある両開きの扉がある場所を戦地に決めた。望みは薄いですが、地竜のパワーで扉をぶち破ってくれるのではないかという期待もあった。

途中、二匹の灼熱液体生物に出くわすも、壁に寄り添いながら固くガードしていたおかげで襲われなかった。地竜の徘徊地点に近づいたら、エドワードとジャンベは忍び足で偵察に向かう。他三人は例の広場へと行く。他の怪物が襲ってくる可能性もあり、気は抜けない。人が気を使って静かに歩いているのに、馬鹿みたいに連続してずんと足音を鳴らすものあり。早速、お出ました。

曲がり角からこつそりと真つ直ぐに伸びた道の様子を見たら、白っぽいトカゲ野郎が我が物顔で道の中心を闊歩していた。

目でも鼻でもいい、五感のどれか一つを潰して有利に戦いたい。前に対峙したときは、手製ではなくシリカ商店に売っている中型の弓を使用した。今回使用するのは、お手製の張りが非常に強い長弓。硬い皮膚を貫ける威力はがあると自負している。真正面からでは当然、警戒されて、頭を逸らされる可能性もあるので、危険だが曲がり角にて待ち構えることにした。

地竜の足音が半分、近づいたと思う頃、毒矢を番えて弓を引き絞り、

いつでも放てる用意をした。目測で大体の大きさは予測できた。ここからは、タイミングと勘の勝負。

一定の距離に来たとき、ジャンベはおーいと大声を上げた。地竜の歩が止まる。更に何度もおーいと叫び、音も掻き鳴らす。自分という存在がいながら逃げずに叫び続ける者に興味を持ち、あわよくば捕えてやろうと思った地竜は曲がり角の方へと行く。

地竜は叫んでいる相手が自分を恐れてないのかと思ったが、その相手は、避けられない時や莫大な報酬がでない限り、お前なんぞ好き好んで相手になどしてやるものかと思っていた。

地竜が直前で止まる。叫ぶのを止めた為か。仕方なく、おいおいと連続で呼んでやる。地竜が動き出す。弓弦と筋肉の筋を限界まできりきりと引く。全てがゆつくりと動いていた。鼻先が見え、顎半分が見えてくる。口の裂け目が見えかけてくる。裂け目が見えかけるということは、目が見えるのも近い。そこで、ぱっと手放す。矢はびゅんと飛んでいき、ぬつと横面全体を見せかけた地竜の片目を貫いた。衝撃で顔が横に逸れる。

地竜は吠えると、頭をぶんぶん振り回し、激痛と片目を失ったショックで混乱していた。エドワードは全速力で地団駄を踏む地竜の前を通り過ぎ、地竜の見える目の方で自分の姿を見つけさせた。

「もう一つ貫ってくれ！ 原価数百エンの手土産だ」

顔を向けた地竜に瓶を投げつける。地竜はもう食らうまいと、目を閉じて顔をちよいと横に動かし、瓶を砕く。思っていた以上の動きをしてくれた。瓶の中身は鉄砲・大砲の火薬の源となる硫黄の材料、硫化水素液。ぶちまけられた毒素と凄まじい刺激臭は鼻と口にこびりつき、地竜は自らの首を絞める結果になった。

悲鳴を上げる大口にもう一本、毒矢を打ち込む。地竜から三十メートル一気に離れ、罵声を浴びせつつ、鎧砕きを二本打つ。毒を持った相手と思われ、追いかけるのを躊躇われては困る。散々やられて、うるさく声を上げるのを止めず、大胆にも自分に攻撃を仕掛けるのを止めない相手に怒りを募らせた地竜は捕獲用に使う両手を床に叩きつけたら、一直線に突進した。

手を振り上げる前に、エドワードはとうに先を行っていたが、地竜の歩幅は人間の十歩分もある。追いつかれてなるものかと、全速力で駆ける。馬ほどは無くても、エドワードの足は健脚。容易く追いつかれはしないが徐々に距離を詰められる。エドワードは角を曲がる。さきほどの事が頭をよぎるが、この勢いで突っ込んだほうが安全だろうと考え、走りながら角を曲がった途端、胸に硬い物が当たる。エドワードは分銅付きの矢を放ったのだ。しかし、地竜の厚い鎧のような皮膚にはびくともしなかった。

相手にも余裕がないと悟った地竜は壁や通路に体や尻尾が当たろうとも気にせず、乱暴に追いかける。エドワードはもう一つ、例の広場へと通じる角を曲がる。地竜は相手の反撃など恐るるに足りずと判断し、角を曲がった途端、強烈な火炎が顔から上半身へかけて襲う。可燃性物質の硫化物もあり、火の勢いは以前より激しく地竜を燃やしている。

待機していたアクリヴィが一番効果があると思われた火の術式を放ったのだ。今使用したのは、集団を相手にする拡散タイプではなく、単体を相手にするとき放つ真っ直ぐに伸びる火柱。利き手である左から放った次は、右に貯めておいたエネルギーも放つ。地竜を包む火の勢いが強まる。エドワードとアクリヴィは下がった。

この時点で地竜は目鼻口耳、ほぼ全ての五感機能を失ったといつて良かった。しかし、油断はできない。仕留めようとした時の獲物こそ、最も危険。しかし、それは承知。広場に入った地竜へとすぐさま、逃げ道に近い右側に待機していたロディムとコルトンが攻撃した。

ロディムの長柄戦斧の戦槌が地竜の右足に叩きこまれる。見事に骨のような鱗と鱗の隙間を縫って、地竜の膝肉を裂き、骨を微かに傷付けた。立て続けに全身鎧のコルトンが突っ込み、両手で支えた剣でロディムの作った傷に剣を差し込む。人間と同じ赤い血が流れた。激昂した地竜は広場に出た瞬間、尻尾を滅茶苦茶に振り回した。既に離れていたエドワードとアクリヴィは無事だったが、接近担当のコルトンとロディムは間に合いそうにない。

「ロディム!!」コルトンが叫ぶ。ロディムはコルトンの後ろに隠れる。

コルトンはくるりと前を向きながら、かなりの早業で大盾を構えた。そして、三回、地竜の鞭のようにしなる尻尾の先端を受け流し、自身とロデイムの身を守った。地竜の足が震え始める。おまけにと、アクリヴィは火の術式を顔にお見舞いしてやった。

地竜は吠え、踏み、尻尾を叩きつける。その度に足元が微かに揺れるが、何万年も植物の浸食から耐えている建物には大して傷を付けられてない。火が鎮火する頃、地竜は倒れた。息も絶え絶えの有り様。息もできないのに暴れたせいで、呼吸困難に陥っていた。コルトンの復帰祝いということもあり、止めはコルトンがした。暴れているうちに抜け落ちた剣を拾い、地竜の脳があると思しき箇所へ剣を何度も突き立てる。皮膚が固くて、コルトンの剛腕を以てしても上手く刺さらない。コルトンはロデイムの斧を貸してもらい、戦槌の部分で三回叩いた。これで、ようやく完全に息の根を止めた。

「終わったんですね」

ひよっこりと現れたジャンベが言う。ジャンベの役目は声と音で地竜を惹き付ける。惹き付けた後、エドワードを追いかけると思う地竜の遙かに後ろを付いて行くよう指示されていた。いざとなれば、矢で戦うはずだったが、結局そうはならなかった。

「あんまり、僕が役だった感はしませんね」

エドワードは否定した。

「人には役割がある。お前はお前に課された役割をきちんと果たした。そのことを誇りに思えばいい。さて、今回の功労賞は誰だと思っ？」

諭されたと同時に質問されて、ジャンベはえつと戸惑うも答えた。

「全員だと思います」

「良い答えだ。だが、俺はあえて、コルトンがそうだと言いたい」

これには、コルトンが否定した。

「俺は大したことをしとらん」

「いや、あんたは地竜と戦う前、大盾にかけて誓ったはずだ。必ず守ってみせよう、と。その言葉どおり、運もあるが、俺たちは奇跡的に誰一人傷付かなかった」

何かを言おうとするコルトンよりも早く、エドワードは言う。

「戦いでは弓兵は大盾持ちの守りがあつてこそ、安心して戦える。俺にもパーティーにも、あんたの盾は必要だコルトン。回りくどい言い回しはもうよそう。お帰り、コルトン。我らがパラディンよ。あんたが帰ってきたとなれば、俺は安心して弓を射れるよ」

エドワードは微かに微笑でいるような表情でコルトンの肩当てを掴んだ。コルトンもエドワードの肩を掴み返した。

「近づく奴は俺に任せろ。離れた敵や後ろの敵はこれからも、あんたに任す。速足が要る時もな」

「俺の方が仕事多くないか？」

「リーダーだろ。小さい規模でも、人の上に立つとなれば当たり前だ」
そうして、二人は怪物共よ襲いたければ襲ってこいと云わんばかりに笑った。アクリヴィ、ロディム、ジャンベは二人と地竜を見やりながら、自然と相好を崩してた。年長者であり、ホープマンズのメンバーで限定すれば最も古い付き合いであり、頼りないような頼りがいがあるようなパラディンの大男が復帰した事実。狂暴な地竜相手にほぼ無傷で勝利した奇跡的な事実。どうも曖昧としていた二つの事実がやっと、現実の物だと認識できた時の喜びはひとしお大きかった。

喜んでばかりもいられない。また、変なでか物や騒ぎが一段落したところを狙ってくる樹海生物が来る前に、地竜から取れる物は取っておくことにした。鱗を幾つか削ぎ、肉を落とし、緋緋金の地竜と同じく肋骨部分を取り出しにかかる。巨体だけあって、取り出すのも一苦勞であり、地竜の肋骨は剣のように所々逆立っているので、作業の手は滞った。肉汁で全身を汚しながら、肉を削り出していく。

途中、別のパーティーが通ったので、今取り出そうしている肋骨以外は好きに持つて行って行って良いのを条件に、作業に強力してもらおう。屈強な男六人と女一人の手で効率をはかどり、仕留める時にかかった何倍もの時間をかけて、大木並みに太い肋骨を取り出せた。作業中、近寄るものあらば、ジャンベがギターを響かせて、それでも退かなければ、アクリヴィの術式と男性カースメーカーの呪術で追っ払った。

人二人を覆ってしまふ大ききの肋骨である。鳥のように前面は丸っこい。コルトンとロデイムの二人が重点を持ち、エドワードとジャンベは支点部分と思う箇所を支えた。帰りは急いで樹海時軸に向かう。なんせ、全身あちこち肉汁と血の匂いがこびりつき、寄ってきてくださいと言っているもんな状態。先頭のアクリヴィは腰に付けた鈴を鳴らして先行し、いてもいなくても、雷と吹雪の術式を何度も撃って露払いした。

時軸のある部屋まで間近に迫った時、鉤爪モグラ数頭と青ウサギ二頭、灼熱の液体生物が四匹も後を追って来ていた。

アクリヴィは背後に回ると、茨状に拡散する雷の術式を繰り出して足止めをした。その間に四人は時軸に飛び込み、続いてアクリヴィも行った。これから、樹海時軸から別の階層へと行こうとした冒険者たちは、時軸を通って帰還してきた五人と巨大な汚れた骨を見て、思わず後ずさった。

息を切らしながら、エドワードは立ち上がった。

「すまないが、内壁近くまで運ぶのを手伝ってくれないか？」

時軸から早く退いてもらう必要もあり、やれやれと、何人かが手伝ってくれた。内壁まで運んだら、今度は彼らのみで運び出す番だった。汚れた冒険者を見るのはさして珍しくないが、大きな骨を担いでいる冒険者はあまりお目にかかれないので、じろじろと見られた。残念ながら、手伝おうという者はいなかった。

仕留めた後の気持ちはどこへやら、コルトンはこの辛い作業を何も考えないようになっていたが、一言言わざるを得なかった。

「これが復帰祝いだつて!? とんだ重労働だな。倒した後のことは考えてなかったのか」

「多少はな」

濁した言い方をされた。口を開くだけで余計に疲れるので、その後は喋らず、黙々とシリカ商店を目指した。とはいえ、なんだかんだ報酬の事を思うと若干、浮き足立っていた。だけど、それはそれ。これはこれ。普通に乾杯でもしてくれたほうが良かったかもしれない。

歩いている時、時折り、地面が揺れているように思えた。もしも、

もつと周りの市民を見ていれば、一様に動揺しているのに気付いたはずだが、細心の注意は抱えている物に向けられており、エトリア市民をのんびり見ている暇は無かった。

二三話 巨人討伐

冒険者窓口室長執務室にて、エドワードはオルレスと向かい合わせで座っていた。毎度ながら、執務室の緑色のソファは座り心地がいいなど思いながら、エドワードは迷っていた。

「儲かってはいるかい？」

エドワードはこくりと頷いてみせる。先日在地竜退治による報酬は相当な額を得られた。全体共用資産に三千回し、一人頭二千エン弱で分け合っても、なお余るぐらい。もつとも、余ったお金は仲間の了承を得て、六千エンは復興資産貯蓄に充てた。

「そうか。その分だと、『農閑期』に入っても、大丈夫なようだね」

やや皮肉っぽく、オルレスは農閑期という単語を強調した。普段なら気にしないものの、やや寝不足なのでいらついた。

モリビトとの合戦、親階層に着いた興奮もそろそろ冷めてきて、ゆっくりと探索していいこうではないかという時期に入ろうとしている。実際の農閑期とは異なり、いつなんどき、そういう風になるかは不明だが、エドワードも無理して進まず、ここらで一旦、一山当ててから、自然とゆっくりと探索していく気になっていた。だからこそ、地竜退治なんていう危険な依頼を引き受けた。

それをまた、この眼鏡をかけた執務長殿が無謀を承知で引き受けてくれと言ってきた。

「人にはゆっくりと仕事をする時にも必要。私もようやく理解できる。だから、ゆっくりと冒険をする前にもう一回だけ、危険を冒してくれないかね。我がエトリアも大事な時期に入ろうとしているのだ。何も君のパーティだけで倒せとは言っていない。他にも協力を頼んでいる。報酬は山分けとなるが、我々リーダー側からも払うから」

「誰が協力をするんだ？ できれば動機も添えて」

オルレスは待ってましたと、慣れたように参加したパーティの名前。あるいは、パーティ代表者の名を上げた。知っている者も多く、ゲンエモンやグラディウスの名も上げられた。ゲンエモンのように、何とかせねばという物もいれば、グラディウスのように楽しみたいと

か腕試ししたいとかいう理由で参加する者らもいた。

「二人でも多くの強者が必要なのだ。君らは十分、強者足り得る。頼むから、協力してくれないかね？」

「それで、結局は引き受けたのね」

本を片手にアクリヴィイは聞いた。長鳴鶏の館には今、アクリヴィイとマルシアしかいなかった。男三人はどこかほつつき歩いていた。

「ああ、そうだ。予想より参加人数が多かった。ここで、俺たちが参加しなかったら……」

「面子に関わると？」と、マルシアが先に言った。

一言、そうだと言う。

今回の一階層巨人討伐による執政院側からの報酬は、一人頭二百エン。以前のエトリア兵案内では、一人案内すれば六百エン支払われた。無事に兵士を案内した時の報酬であり、兵士が死んでしまったら、体に後遺症が残る負傷をさせてしまった場合、冒険者から賠償を支払わなければならない。

対し、今回冒険者に払われる報酬は一人二百エン。しかも、死んだり怪我をしても、執政院側は大した補償をしてくれない。執政院側は自ら、お前ら冒険者の価値はその程度だと公言しているようなものだ。冒険は自己責任だが、それでも、頼んだのはあちらなのだから、もう少し、払ってくれてもいいだろう。国に来た者たちと、国に住んで国を守ると誓う者たちの待遇の差を思い知らされた。

時季は七月の下旬。夏真っ盛り。

これより、三ヶ月も先には、次なる年の豊穰祝いとエトリア国家の誕生祝いも兼ねたエトリア生誕祭が開催される。期間は四日間。一日目は豊穰祝い。それ以降の三日間は生誕祭である。一日目のみ、エトリアに居る人間のみ行われて、後の生誕祭で他国の人々を受け入れる。豊穰祭は前座。生誕祭が本番である。

エトリアで最も大規模なイベントであり、自由連合に所属する国々からはもちろん、海を越えて各国の金と暇がある物好きなたちが大勢来る。生誕祭はいわば、エトリアが開放的な風土という事を世界にア

ピールするチャンスであり、同時に新たな取引先を見つけて、他国の重要ゲストにエトリアへの略奪・戦争行為は一切しないと約束してもらう機会でもあった。

だが、そんなのはお上の話。一般人は三日間、大きな騒ぎを楽しみにくるだけ。しかし、今年の生誕祭の開催は危ぶまれていた。

理由は二つある。モリビトとの合戦。以前からある、エトウら盗賊軍に狙われている情報。

人の口に戸は立てられぬもので、モリビトとの合戦は多少、近隣諸国に知られてしまった。エトリア側は大丈夫と答えたが、エトウなる悪辣な者共を率いる悪人に狙われたとあっては、例年より落ち込みが予想された。好機と捉え、生誕祭の最中に襲ってくるのではないか。こういう意見もあった。各国の重要ゲストを危険に晒しては、エトリアの責任を問われ、最悪他国の軍に侵入する機会を与えてしまう。昨年までは、何があろうと開催しようと思気込んでいたものの、今年はモリビトとの合戦もあり、昨年より慎重派が増えた。

そこで、ヴィズル長は説いた。

生誕祭を止めるということは、戦う前から我らは悪党に怯えて屈していると主張しているも同然。例年通り、生誕祭を開催し、エトリアはここにありと世界に知らしめなければいかん。

不承不承な者も多かつたが、ヴィズルの言うことにも一理あるとして、例年通り開催が決定した。

たった二つの理由で開催が危ぶまれたのだ。もしも、後一つか二つの理由が追加されたら、今度はヴィズル長を以てしても説得は難しくなる。

そこへ、登場してしまった一階層の巨人と二階層の姿無き歌姫の存在。

エトリア側も冒険者側も、歌姫の方は当面、無視しても構わないと判断した。あれから、パスカル以外にも二組も歌を聴いたパーティがいたが、いずれも会合で言われたとおりの対応したら、何とか切り抜けたらしい。そんなわけで、謎の歌姫はしばし安全と判断された。それよりも、問題なのは巨人である。

昨日、巨人は二階に出現した。そして、生き物がいるにない関わらず、あちこちを自由に行進した。巨人に挑む者は当然おらず、皆、血相を変えて他の階へと逃げた。

証言が確かならば、巨人の体は岩で覆われている。ゴーレムねとアクリヴィは言った。ゴーレムといっても、死体を繋ぎ合わせた物や土人形まで様々。現在、世界樹の迷宮に出現するゴーレムは、多くの人々が想像しやすい体が岩石や鉱物で構築された類のゴーレムである。

ゴーレムが出現したのは初めてではない。エトリア伝承によれば、エトリアができて間もない千年前と五百年前にも一度、出現していた記録が残る。五百年前の記録はある程度残っており、そのときは街を守る兵士たちも討伐討伐作戦に加わった。冒険者と兵士含めて、実に三百人も犠牲を出してゴーレムを仕留めたらしく、エトリアの昔話には幾つかゴーレムに関する物が残されていた。千年前のは神など神秘的な物が協力して退治したと、あてにならない記述しかなかった。

地上ではめつきり見かけなくなり、既に御伽噺おとぎばなしでしか語られない伝説的な怪物の出現にエトリア人は不安を募らせた。世界樹の迷宮がある国で生活しているからこそ、他では魔物と形容される樹海生物の恐ろしさを知っていた。カースメーカーなどの呪術を用いたりする者たちは、ゴーレムの気配をひしと感じたせいで安眠できなかった。エドワードがやや寝不足なのは、ゴーレムの気配を感じたからではなく、勘がえ事をしていたからだだった。

実害は出てないが、噂という名の被害を執政院ラーダは出したくなかった。

ゴーレムが地上に出て、エトリア市街で暴れる。こんな悪い噂が出て、何かしらの勢力に付け込まれる前に巨人を討伐せよと冒険者たちに任務を課した。執政院は百人集まるのを期待したが、現状では四十人足らずと半分以下。執政院から出る報酬の低さとリスクと釣り合わず、一階層探索メンバーでは一組しか応募が来てない。

その他諸々の準備も兼ねて、九月に入る前に仕留めよと、期限付き

なのもやる気を奪っていた。

「お金が全てじゃないとはいえ、雀の涙ほどの報酬しかでないミッションとはね」

アクリヴィは遠回しに、そういうところは老いたのねと暗に仄めかした。

ゲンエモン、ヴァロジャ、グラディウス、レッドユニティ。五階層探索組でも早々たるメンバーが参加していた。ヴァロジャは三、四階層を行ったり来たりしているが、近々五階層に降りるつもりで、実力もガンリユー・ギルド長並びに、五階層を探索している冒険者たちも見合う実力はあると見ていた。

昔の自分なら、進みたい時には進み。止まる時は周囲を気にせず止まっていただろう。確かに、面子などそういったことを気にしている辺り、良くも悪くも自分は老いたのだなと実感した。ついでにパスカルも参加していた。

マルシアはどうするのと聞いた。

「巨人さんを倒すにしても、真正面から突撃して勝てる相手とは思えないけど」

「そりゃそうでしょう」とアクリヴィ。

「明日にでも、主だった者たちが来て、空家でも借りて対策会議をすることになった。時間は夕刻から、その前に探索を切り上げる」

「会議ねえ。やることが決まってるならまだしも、やること決めてない会議なんて時間の無駄」

「その点は大丈夫なはず。ゲンエモンさんが予め、やるべき事を選択肢を幾つか考えてくれている」

「なら、ついでにあれも持って行ったら。いつまでも置いておく訳にもいかないでしょ」

そうだった。五階層で見つけた、あれに書かれた文字をゲンエモンに解読してもらわなければならない。機会に恵まれず、あれよあれよ先延ばしにしていたが、ちょうどいい。早ければ、夜、金鹿の酒場で会えるかもしれない。

だが、金鹿の酒場にはゲンエモンは来なかった。花桜の館にまで行

く気もおこらず、文字解読は明日に持ち越し。巨人討伐依頼を引き受けた件を帰ってきた男三人に知らせたら、やはりというべきか。ジャンベですら、不満気な表情を露にした。

翌日の探索は探索で呼んで良かったのだろうか。あちこち適当に歩き、身を守る為に一回、戦闘したのみ。地上時間で四時頃には終了した。トルヌウーア内壁に佇む見張りに訪ねて、一階層の様子を聞いたところ、巨人を見かけた者はいないが、二階のどこか遠く離れたところを歩いていたらしい。明日は三階を歩くかもしれないと見張りと言った。

とつとと身の回りを片付けたら、会議の場である空家へと行く。目印に赤と黄の垂れ幕を窓から下げていると聞いた。指定された付近を歩いていたら、玄関ドアの左右窓から不自然に赤と黄の垂れ幕が下がり、受付係なのか、ゲンエモンが近くに立っていた。

一声かけて、前まで来たら師に一礼した。そして、会議終了後でもいいから、鑑定してもらいたい物があることを伝えた。

「目利きは他の者に任せてくれ」

「そうではない。私が発見した物には、あなたや花桜の館の女将であるアヤネさんがたまに使う漢字と思しき物が書かれているので、解読していただきたいのです」

それならばと、ゲンエモンは快諾した。中に入ると、先客たちがいた。馴染みのある者たち同士、会釈程度の挨拶で済ませたが一人、立って声をかける者がいた。

「エドワードさん、お久しぶりです。その節はお世話になりました」

茶髪で癪毛が目立つ、若いソードマンの男だ。誰かなと首を捻る。「俺ですよ俺。数か月前、あなたが三階層の怪物と戦う前日に一階層で出会った」

そう言われて、ようやく思い出した。モリビトが飼う、蒼き聖獣コロトラングルとの決戦前日。自らの気持ちを落ち着かせる為、一人で一階層一階に潜っていたところ、あまりにも呑気に探索している内に、一階の危険個所である花畑にずかずかと入り、三階層の赤熊の怪物と対面してしまった新米パーティーのリーダーであるソードマンの

男ではないか。

「思い出したぞ。確か、名前は」そうして、また首を捻る。

「リカルドです。あの時はエドワードさんが一方的に名乗るから、僕が名乗る暇はありませんでした」

そうかと、少し口元を緩ませた。自分に対し、多少なり生意気な口を利けるぐらい、成長はしたようだ。顔付きも、幼さは残るが前より男らしく見える。

「今の所、一階層探索組で参加するのは一組だけと聞いていたが、君だったのか」

「深い所まで潜っている人たちには負けられませんからね。今はまだ、一階層探索している俺たちも、今度こそはできるんだぞと見せてやろうと思い、任務に応募しました」

他の者たちが来るまでの間、エドワードはリカルドを相手に会話をした。リカルドは現在、メンバーが一人増えて、正式な五人参加型のパーティで挑んでいる。二階層にこそ到達してないが、四階の魔狼共相手に激闘を繰り広げていると聞く限り、数か月で随分と成長していることが伺えた。

最後にヴァロジャが来て、戸口に立ちゲンエモンが中に入り、巨人対策会議を開いた。ゲンエモンは長つたらしい前口上や、本日はお集まりいただきうんぬんかんぬんなどの挨拶は一切せず、自らの考えたすべきことを述べた。

「始めにすべきことは二階と三階、どちらの階で重点的に出現するかを探りつつ、ゴーレムの行動パターンを知り。ゴーレムに対して如何な方法で戦うかだが、これはもう考えてある。ゴーレムの行動パターンと重点的に出現する階が判明次第、巨大な罠を作る。罠の数、設置場所はゴーレムのパターンが判明してから決める。以上だ」

何をすべきか考える会議ではなく、何をするか判っている会議だったので、議論は進んだ。

ゴーレムの行動パターン搜索については、ゴーレムに近づいて行動を監視した後、ある程度周回パターンが判明したら、固定箇所で見張りつつ、いつでも交代できる配置に置いておくことに同意。

「ある程度周回パターンが判明するまでは、誰彼がゴーレムの後を追うのだ」

ヴァロジャが最もな意見を述べた。接近による観察は健脚でかつ洞察力がある者が良いとされた。となれば、エドワードやパスカルなどのレンジャーが適任である。また、もう一組、カースメーカーによる離れた場所からの観察もどうかとアデラが提案した。一階層とはいえ、どんな奴が出てくるか分からない。呪術による攻防が主体であり、接近戦に重きを置かないカースメーカーのみでは不安なので、アデラやヴァロジャなど、ソードマンやパラディンの護衛が付くことにした。

九月までの期限付きだが、エドワードはそのほうが良いと思えた。あまり長く一階層ばかりにいて、五階層探索における勘を鈍らせたくなかった。反面、オールドリッチやアデラは期限があることに不満だった。ゴーレムなるとんでもない相手に討伐期限を設けるとは、万が一、焦って事を仕損じたらどうすると考えていた。

エドワードも彼らの考えにはいたく賛成だが、下手に期限無しにしたら途中でやる気を無くす者も出てくるはず。期限有りでしたほうが身が引き締まり、何より、少しでもするべき事に関する事はできる限り明瞭にしといたほうが良いと思っていた。

長鳴鶏の館に帰ったら、早速、二階の部屋に仲間たちを集めて伝えた。

「では、エドワードさんが巨人討伐をしている間、誰がパーティを率いるのですか？」

ジャンベの問いかけに、エドワードはうむと言った。

以前から計画していたことを実行したときに、今の内に自分が不在な状況により慣れてもらえる良い機会だ。

「俺がいない間はコルトンがリーダーで、アクリヴィがサブ。俺がいないと行っても、短い間だ。すぐに巨人討伐のお手伝いをしてもらおう。異議のある者はいないか」

異議のある者はいなかった。たまにエドワードがいない時はいつもそうしていた。だがしかし、読みの鋭いアクリヴィが尋ねてきた。

「あなた、何か別のことを考えていない」

エドワードはしばし沈黙した後、さすがだなと言った。

「さすがは戦う学徒。読みが鋭い。確かに俺は別のことを考えている。それを今、全ては明かせない。ただ、たった一つ教えられることがある。今年になるか、来年になるか。いつかとはまだ決めてないが、近い内、かつては一つにまとまった者たちがいる場所へと行かねばならん」

「カルツバスという、あなたが属する騎馬民族の生き残りの元へ行くの？」

エドワードは固く口を閉ざしたが、それは却って、そうだと肯定しているようものだった。

カルツバスといえ、今は遠く離れた国と地方を行き来し、着実に人口を増やしつつあるかつては十二もあつた騎馬民族帝国の実質、最後の繁栄する部族。そして、更なる繁栄をする代わりに、エトウなる馬乗りの盗賊共に馬を貸して協力しているという噂がある部族。

そのせいで、無関係なエドワードとエトリア国に一時在住するエクウスの民まであらぬ疑いをかけられている。コルトンがそつと聞いた。

「何故なんだエドワード。彼らの口から直接、自分達は無関係だと聞きたいのか？」

エドワードは首を振るつた。

「違う」

「じゃあ、なんで」

「コルトン、皆よ。俺はお前達を誰よりも信じている。だから、お前達も俺を信じてくれ。これは、俺の使命なんだ。遙か遠く離れた親戚、ちりぢりばらばらになった者たちを集め、今集まった者たちを守る為にはしなければいけないこと。本当に大切なことなんだ。時が来れば、全てを語る。まあ、万が一にも、行く必要がなくなる時もありうる。その時も全てを語ろう」

話はこれまでとした。その後、表面上は普通に振る舞つたが、ジャンベとロデームはいまいち理解し難く、聞きたい気持ちはあつたが堪

えた。アクリヴィとマルシア、長い付き合いであるコルトンは何となく理解できる気がした。来ないと思っていた。このまま、普通に冒険をできると考えていた。しかし、今日のエドワードの態度を見たら、にわかにも現実味を帯びてきた。戦が近づいている。生誕祭をする余裕こそあれ、そこを境目に来るのだろうか。武装したおびただしい悪人共が。

いくら考えてもきりが無い。もう寝ようと思い、暑いからお腹にだけ薄い毛布をかけた。

エドワード、カールロ、ラクロワ、パスカルの四人は三階を目指した。今までの行動パターンから察するに、今日は三階と思われた。戦鬨は避けつつ、三階に降りる手前、カールロが一人、階段からこつそりと三階の広場の様子を見た。

「カマキリは大分、離れている」

その一言で十分だった。林に沿って行き、カマキリがこちらに気付かないのを祈るのみ。三階にいる白カマキリは、低層に出現するとは思えない強さを誇る強敵。厚くしまった筋肉から繰り出される鎌の一撃は鉄鎧さえ抉ってしまう。

一階層における、スノードリフト並ぶに強敵中の強敵。彼ら四人が全力を以て相手をすれば、なんとかして倒せないことも無いが、無駄な戦鬨は避けるに限る。

見渡しの良い疎らな林を行きつつ、時にじつと彫像のように佇むカマキリに目を向けて、巨人はいないかと探した。やがて、広場の角に差し掛かる地点まで来て、ようやく、微かな震えが体を襲う。いよいよおでましである。他の樹海生物たちも落ち着きを無くしている。震源地へ急ぐ。

「おわっ」と、ラクロワが足を取られた。切り株近くに隠れて、根っことで獲物を締め殺そうするのは、球根状の、彫られたような虚ろで真っ黒い目と薄ら笑い浮かべた口を持つ下級食人生物のマンドレイク。ラクロワ自らの不注意を恥じて罵りながら、慣れた手付きでナイフを取ると、足に絡みつくマンドレイクの足でもある根を絶ち、素早

くマンドレイクの本体を三回切りつけたら、恥をかかせてくれた礼だと口にナイフを突っ込み、右横へと強引に引き裂く形でナイフを抜いた。

ぱっくりと口が割れたマンドレイクは捨て置き、四人は震源地へと行く。

邪魔する者あらば、武器も使わず体当たりで強引に押しつけた。

どうしてもなら、手に持ったナイフを投げ付けてさっさと事を片付けた。長い爪を持つ二足のモグラ三頭の喉、心臓にナイフを投擲したら、またしても現れたマンドレイクの一体をエドワードは全体重をかけて踏み潰し、一体をカール口が蹴り飛ばし、毒蝶はパスカルが横薙ぎで胴体ごと羽根を切り裂いた。

足元が覚束なくなってきた。いよいよ、巨人との対面が迫ってきた。いや、もういた。

「大きな」

パスカルが率直に感想を述べた。天井を擦るほどの大きさはないが、カマキリよりも、一階層にあるどの樹木よりもゴーレムが上回っていた。ただ、がちがちに堅い岩石や鉋物で出来ていると思っていたが、よく見ると、そうではない。石工職人が精魂込めて切った石を一段ずつ、人の形に積み上げた、そんな感じのやけに人工的なゴーレムだ。ゴーレム自体、ある意味人工物ではあるが。

ゴーレムは四人や他の樹海生物に目もくれず、重々しい足取りで歩いていた。ゴーレムが通った跡には、踏みならされた地面と折れた木々の残骸が横たわっていた。四人のレンジャーはゴーレムが通った跡を見て、すぐに行動パターンの察しは付いたが、念には念を入れて追いかけた。

とてもではないが、ゴーレムの間近に行く勇氣は出ず、頭天边が見えるぐらいの距離を保ちつつ、追いかけた。間近にいるゴーレムのお陰で、四人を襲おうという怪物はいなかった。いくら追いかけても、ゴーレムは変わった動きをする気配がない。ゴーレム追跡は中断し、ゴーレムが来た道を逆走する。そうして、長い時間を要すると覚悟していたゴーレム討伐は案外、苦戦しないように思えた。

足跡と折れた木を注視しながら、パスカルは言った。

「みんな、でかいことにはばかり気を取られていたな。二、三回程度の偵察でいいだろう。後はどう、対処するかだな」

翌日の偵察ではエドワードが抜けて、アデラ率いるレッドユニティの女レンジャーが交代した。更に翌日ではラクロワが抜けて、代わりにヴァロジャのメンバーが一人入った。パスカルの言ったとおり、三回の偵察で分かった。また、測量技術のある冒険者たちの計算とカースメーカーたちの感知能力が確かなら、二階と三階でほぼ同じルートを周回していることが判明した。

この報告に、討伐作戦参加者たちと執政院ラーダは喜んだ。途方も無い巨体ゆえ、怯えて近づけなかった敵にいざ接近してみれば、うろろうと決まりきった行動パターンをするのみで、足元まで寄っても、岩石の巨人は攻撃する素振りすら見せなかった。

この話を聞いて、人によつては「どんな恐ろしい奴かと思えば、驚かせやがって」と、まだ見ぬ怪物に舐めた口を利く始末。

巨人討伐任務から四日目。大半の者はもう、勝利ムードに包まれていた。穴を掘るなり、適当な兵器を当てれば、勝てると思う者までいた。なんせ、岩石の巨人である。どんな凄い力を以てして、自分達を叩き潰しに来るのかと冷や冷やしていたが、蓋を開けてみれば、うろろうと決まった所をうろつくだけの木偶の棒にすぎないとわかり、皆一様にホツとした。エドワードですら、楽に勝てる相手ならばそれに越したことはないと考えていた。

しかし、ゲンエモンは違っていた。未知の相手と戦うのに、この気の抜けよう。第一、相手がどんな攻撃をして、どれだけ堅い身体を持つとか具体的な事は判明していないのに、戦う前からこの勝利ムードは不味いと思った。

ゲンエモンは四日目となる報告会議で、威力偵察してはどうかと提案した。簡単な罠を仕掛けるなり、弓矢や鉄砲による離れたところから攻撃をしてみても、ゴーレムの防御力を実際に知り得た上で具体的な作戦を練ると言い分だが、否定的な意見を言う者もいた。パスカルだ。

「ゲンさん。あなたの提案に一理あるのは認めるが、下手に刺激して、奴の一定的な行動パターンを崩すことになったら、それこそ余計な犠牲者を出したり、長期化しかねないぞ」

「想定のみして実行に移したら、想定を遥かに越えることをしてくる可能性がある」

威力偵察は人数を絞られた。結果、エドワード、カールロ、ラクロワの三名が当たることになった。手順としては第一矢は先が尖った鏃やじりを用い、続く第二矢は分銅や小さな鉄球が付いた鎧やじり砕きを用い、最後は爆発物を括りつけた矢を用いる。カールロ、エドワード、三名では一番火薬の心得があるラクロワが爆発物を扱う。

決行は翌日の昼前。二階に出没しかけているゴーレムを狙う。事前に一階層探索組と、一階層にて依頼を受けた冒険者たちには可能な限り、ゴーレムに対して攻撃をするよう伝えておいた。叫んだり、妙な動きをみせたら、即座に逃げるようにも。

三人は二階にて待ち伏せた。ゴーレムの通る道は丸分かりなので、普通の狩りよりかは幾分、楽である。相手が規格外のでかさを除けば。

徐々に姿が見えてきた。黒々とした二本足が生えた絶壁が接近してくる。明るい地下世界の光が遮られて、夕闇のような帳で林が覆われる。報告を聞いた者たちは気楽そうだが、幾度も間近でゴーレムを見ているレンジャーたちにとって、行動パターンが判った今でも、これほどの巨体を前にしたら萎縮してしまう。大体、ゴーレムの真後ろから五十メートル離れた時点で第一矢を撃ち、命中直前で第二矢を放ち、二本目の命中を確認と同時に爆弾矢を射る。

いつもどおり、ゴーレムは小さい者たちの存在に気付かず、通り過ぎた。平屋建て一件半分を越してしまうような歩幅なので、動きは鈍くても、ゆつくりしていたら段々と遠ざかってしまう。

ラクロワが鉄製の筒から火縄を取り出した。三人は自ら離れ、いざ、攻撃開始。

カールロが矢を放つ、ゴーレムの足首と思われる箇所には矢は直線上にゆく。続いて、エドワードが放つ。小ぢんまりな鉄球付きの矢は、

ほぼ同じ場所を目指す。

予想通り、かつんと音を立てて、カール口の鏃は弾かれた。続くエドワードの矢は、微かに砕いた音を立てて足首近くに落ちた。ゴーレムの動きに変化はない。ゴーレムが右足を上げたので、ラクロワは射るのを止めて、音も立てずに左足首後部に近づく。普通に撃つても弾かれてしまうので、矢の先にはたつぷりとトリモチが丸みを帯びて付着していた。その為、より近づいて射る必要があった。ラクロワは矢を放った。あまり勢いなく、矢はゴーレムの左足首にくつつく。重みで矢が上下にしなり、落ちるか一瞬、不安になったが、矢は持ち堪えた。

落ちたらそれまでよと、三人は林に隠れ、ゴーレムの右背後に位置する所で待った。数秒後。ゴーレムが足を上げた時、爆発が起きた。「どうだい？」ラクロワが身を乗り出して左足首を見る。ぱらぱらと岩の破片が降ってきた。

分銅で砕けて、爆発で壊れた事も確認できた。ゴーレムは難攻不落の要塞ではない。人の手で破壊することが証明された。視認が済むと、三人は脱兎のごとく逃げ出した。

ただの矢二本では無反応だったゴーレムに、異変が見られたからだ。ぐるぐると岩石の頂上が動く。ちらと何度が振り返ったら、赤く光る物が目に入った。やがて、ゴーレムが下ろしていた両手を上げて、三人が逃げる方向へと腕を振り下ろした。

木々が折れ、枝と葉が飛び散る。「やばい！」とカール口が叫ぶ。

木片と枝と葉の雨あられを浴びせられて、三人はもう、ただただ逃げられるしかなかった。最初の一撃以外、ゴーレムは追撃していく様子は無かったが、そんなのを気にする余裕など無く。とにかく、一分一秒でも早く、あの巨体から離れたかった。振り返らずとも、音で分かることがある。これまで、ずうーんと間延びした感じの足音が、ずうんずうんと感覚が短くなったように聞こえた。

地上へ出て、息を切らしながら、どう思うとラクロワが聞いた。エドワードが答えた。

「どうもこうも、見かけどおりの木偶の棒じゃないのがわかった。呑

気に構えた態度で適当な罨張って仕留められなかったら、もつと酷い目に遭っていたかもな」

三名が到着して間もないうちに、ゴーレムの動向を察知して他のパーティーも続々と地上へ帰還した。

各リーダーが帰還次第、報告会議が開かれた。そして、現場にいた三名とオールドリッチ以外の者からは、ゲンエモンに否定的な意見が寄せられた。ただでさえ、渋面なヴァロジャは口をきつくへの字に曲げて、言葉先を尖らせてゲンエモンを真っ向から非難した。

「俺たちが油断していたというが、ゴーレムもある意味油断していた状態だった。油断しているうちに叩けば良かった」

「そうはいうが、ヴァロジャよ。他の者にも聞くが、ゴーレムが予想を上回るほどの順応性と賢さがあるなど、誰が気付いていた。わしはこれで良かったと思う。というのも、近頃、手っ取り早く名と金を得るため、ゴーレムに真正面から戦いを挑んでみようかと考えている愚かな考えを抱く者たちも出てきていたからな。事と次第によっては、今より酷い事になっていた」

「それこそ、あんたのいう想定だ。余計なことをせず、さっさと叩いていけば、面倒事も増えなかった」

「では聞くが、お前はゴーレムを倒す手立てを考えていたのか？
ヴァロジャ以外の物も正直に答えよ。具体的にどんなことを考えていたのか」

問い返されて、一同は口を閉ざした。考えてなかった訳ではない。しかし、正直なところ、その手立てといえは、やれでかい穴を掘ったり、強力な罨を張ったり、中には全員で一致団結して戦うという作戦とも呼べない事を考えている者までいた。考えてはいたが、いざ実行しようとしたら、時間以上に大量の人手が要ることばかり。以前のゴーレムの行動パターンからして、四十人足らずで実行して、時間が足りるか疑問である。

誰も答えないのを見て、ゲンエモンは話を続けた。

「わしも同じ事を考えていた。大きな罨を張る必要がある。ただし、実行するにはもう少し、人手と金が足りん。道具もだ」

どうされるのですかとエドワードは聞いた。

「そこはコネだ。そして、名乗った覚えはないのに、勝手に長呼ばわりされとるわしが誠心誠意を見せなければならん。駄目元で執政院に頼み。足りないようなら、そうさな……ヴァロジャ、オールドリッチ、エドワード、最後に礼も兼ねて、わしの順で港へと買い物に行こう。頼まれてくれるか、ヴァロジャ」

唇を真一文字に結んだまま、ヴァロジャは微かに首を動かした。冒険者よりも前に、一介の戦士の誇りがヴァロジャに関わってしまった戦いから逃げるのを許さなかった。オールドリッチはおうよと一言で応じたが、エドワードは躊躇いがちに、小さく会釈した。

港がある姉妹都市ソロール・エトリアにはあまり赴きたくなかった。昔は良かったという言葉は使いたくないが、昔はまだ、よくいる一般人として扱われていたのに対し、今では、あちらでは良い意味でも悪い意味でも名が伝わってしまったている。

「すまんのう、エドワード。だが、毎回同じ顔を見せるわけにもいかんのじゃ。それに、執政院が望み通りにしてくれるかもしれない」

「かもしれないだけで、侵略に備えて密かに軍事強化を行っている今、我々に回してくれる兵器なぞたかが知れているでしょう。大丈夫です。もちろん、行きますよ」

「ああ、それと、お供を連れて行くのを忘れずにな」

各々の冒険もあるので、次の日からは偵察メンバーはラクロワを残し、全メンバーを交代した。エドワードは何日かぶりに五階層へ潜った。空気の違いに身が引き締まる思いだが、どこか安堵していた。少なくとも、この階層にはゴーレムはいないからだ。

ゲンエモンはニツツア、ブレンダン、ヘンリックに三階層の探索を任せている間、自身は執政院ラーダにて、交渉をしていた。冒険者窓口執務室にて、オルレスの他、がたいの良い予算会計委員長の男と新たな副隊長と座談していた。

地上時間にして夕刻に近い時刻に帰還し、早速、報告会議の場である貸家に向かう。今日は七百エン分と、ぼちぼちな収入だった。貸家に入ると、暗い部屋の隅にゲンエモンはいた。別の隅には、六個の木

箱とロープの束が置かれていた。エドワードは察した。

「お前さんが一番乗りだ」

エドワードは単刀直入に尋ねた。「執政院の協力は得られましたか」

ゲンエモンは不機嫌そうに眉をひそめた。予想はしていたが、執政院ラーダからは大した協力を得られなかったのだろう。

「こいつが、我々が協力したいという気持ちの証だと」

「開けてもいいですか？」

ゲンエモンは答えなかったが、無言で良いと言っているように思えた。木箱は両腕で何とか持てる大きさであり、中々重たい。中を開けたら、張子の紙を糊で固め、紙の上を木で覆い、点火口の回りを鉄で支えた爆弾が入っていた。爆裂弾と呼ばれる、大砲で飛ばして爆発する砲弾タイプの爆弾ではない。城壁や急な斜面から転がすなり、敵が通る道に設置して、爆発させることにより効果を発揮する物だ。

六個を同時に使い、上手く爆発させれば、ゴーレムの片足ぐらいなら壊せそうだが、倒すには数が足りない。最低でも、一四個は欲しい。後から来た者たちも、一樣に不満と不安を浮かべた顔を見せた。自分達の意味でここに来たとはいえ、頼んだのはあちら側なのだから、もう少し、工面してくれても良かったのではないか。ゲンエモンは手を叩き、注目を自分に集めた。

「そう暗い顔をみせてくれるな。人手はわしの方が何とかする。買い物の方はお主らに任す。ほれ、受け取れ」

ゲンエモンはヴァロジャ、オールドリッチ、エドワードに金券、金貨一枚と銀貨一枚と銅貨一枚を手渡した。金券だけで四千エンもある。

エドワードとオールドリッチはすぐに返そうとしたが、ゲンエモンは返却を拒んだ。

「それはわし個人の金だ。きにするな」

「あんたはもう、老い先が短い。老後の蓄えはとっておくもんだぜ」オールドリッチはぐいと手を伸ばした。

「よさんか。確かにわしは、後何年もしないうちに六十になるが、心身共にこのとおりに健康だ。わしよりまだ、可能性がある者たちに無駄な

金を使わせたくないわしの気持ちを理解してくれ。頼む」

頼むと言っている割りに、ゲンエモンは険しい表情で二人を睨んだ。こうなつては、断として受け取らないだろう。仕方なく、二人はゲンエモンの老婆心を受け取った。

偵察は常時。交代で行い、人手は集めはゲンエモンに一人。エドワードら三名は、港にて買い物に行く。一六年前の借り。対面したら、こう言えばいいとゲンエモンは言った。

エドワードは宿に帰ったら、コルトンにまず説明した。既に連れて行く相方は、威圧感を与えられそうな背のあるコルトンと決めていた。

「あの人の頼みで、しかも、こうして金まで渡されちゃあ、断れないな」コルトンは快諾した。

そして、一日目にはヴァロジャは仲間の一人を伴い、ソロール・エトリアに行き、木箱を二つ馬に括りつけて帰ってきた。二日目にはオルドリッチがコウシチを伴い、厩から借りた貸馬に乗り、ヴァロジャと同じく、二つの木箱を馬に括りつけていた。三日目の早朝、エドワードの番である。

コルトンは馬に必要な装備を付けたが、エドワードは鞍は付けず、一枚の厚い布のみを背に置き、馬の踝くるぶしに太く柔らかい布を巻きつけただけの手綱を付けた。裸馬と呼ばれるもので、馬の背には何も置かないのが基本ではあるが、夏で馬が汗を掻き、濡れた背中から滑り落ちないための配慮だった。

遊牧民にはこうした乗り方をする者たちはいると聞く。他の所なら、緊急事態で裸馬に乗ることがあるとは聞くが、裸馬を習慣に取り入れるのは遊牧民ならではある。大変危険な乗り方であり、これを走らせて移動するとなれば、相当熟した腕前が要る。エドワードはもちろん、チノスなど、ここにいる馬乗りの一族たちは大体、この技術を習得していた。技術以上に、馬との信頼関係が必要らしいのだが、ある程度慣れた今でも、コルトンは裸の馬に乗る気は起こらなかった（馬術の修練の一貫として歩くぐらいならたまにする）。

いつも、自分ばかり安全な屋根と寝床があるところで寝食するのは

申し訳ないと、エドワードは昨日のうちに、ブケファラスと文字通り、寝食を共にする。要は野宿すると言っていた。

二人はティノフェ一家のゲルへと行き、コルトンの為に栗毛の種を一頭、貸してくれた。

馬の背に揺られながらの短い移動はちよつとした旅行気分で、天気もカラツとした湿り気のない暑さであり、殺風な地下世界での冒険をしぼし忘れさせてくれた。それも、港町に着くまでである。

港町のソロル・エトリアは、本都市であるマター・エトリアと同様、石作りの堀が掘られていた。違いといえば、真水ではなく海水が張られている点だろう。堀の前には二重構造の空堀まである。陸の盗賊も警戒していたが、港町滞在の衛兵たちは海からの侵略者、海賊も警戒していた。

港町を遠く離れて迂回し、近くにある森の小さな集落に行き、一つの掘っ立て小屋の戸を叩いた。

「東の老侍のぐゝ用事だ」

エドワードは合言葉を言った。窓から感じられた人の気配は戸に移動し、慎重な手つきで戸を開けた。腰の曲がった背の低い、節くれだった顔と手が目立つ小男が現れた。目は油断なくエドワードとコルトンを見た。

「何用だ」

「馬を預かってくれ。買い物が進んだら、取りに来る」

エドワードは男に銀貨一枚を差し出した。形は崩れているが純度は高い。男はやれやれと首を振り、妥協してやったという感じで銀貨をポケットにしまった。

徒歩で森から出て、森に近い北西側の門へと向かう。同国の人間には大したチエックをせず通していた門番たちは、エドワードら他国人には厳しくチエックした。エドワードは、自分が近づくとつれて門番たちの気配が段々とただならぬ物になっているのを肌身で感じた。武器は一つ、サーベルとナイフを携帯している。隠さず堂々と所持していた。コルトンも剣とナイフを一刀ずつ所持し、これも、見えるようにしていた。

石橋を渡り、門番たちに近づく。門番たちの顔が苦虫を噛み潰したような酷い面になっている。妙な動きをしたら、問答無用に槍で一突きされてしまう雰囲気。

彼らは怯えていた。いずれ、来るであろう盗賊王となる者たちの来襲に。エドワード自身にはその気は無くても、彼の遠い親戚にあたる者たちが馬を貸している疑惑は、無関係に等しいエドワードに向けられていた。彼が名を上げているのも、盗賊とした化した馬乗り共がここへ来やすくするためにしているのではないか。こう考える者までいた。中には、自国ではなく他国の人間が英雄として持ち上げられているのに、不満を感じている者もいた。自分達に害なす可能性がある者たちを恐れていた。

虫の居所の悪さに、二人は早くも帰りたくなかった。表情は平静を装い、門番たちのしつこすぎるチェックを受けた。ズボンの上とはいえ、触る必要がない股間までべたべたと触られたときは顎を蹴り上げてやろうかと思った。一人が最後に忠告した。ナイフの携帯は許されたが、サーベルと剣の携帯は認可されず、取り上げられた。門番の一人が槍を持つ手をきつく握り、忠告した。

「その馬乗りさんよ。わかっているだろうが、買い物したら、下手な寄り道をせずに帰ることだな。我々が手をくみださずとも、妙な真似をしたら、袋叩きに合うかもしれないので気をつけるのだな」

その前に俺が手を下すという口ぶりである。エドワードはナイフの柄をさすった。

「忠告ありがとう。あんたも背後には気を付けろよ。気付いたら、頭がトマトみたいに真っ赤に染まってるかもしれないぞ」

エドワードも門番に返してやったら、早歩きでその場から立ち去った。斜面を下り、門が見えないところまで来て、一息付けた。コルトンは怒りを露にして言った。

「失礼な奴らめ！ 身に覚えのない罪を擦り付けやがって。野郎に股間触れるなんざあ、百害合って一利なしだ」

「全くだ。だが、あいつらの心情もできる。自分の国を襲う可能性があるある脅威と関わっていると知ったなら、警戒するのも当然だろう。

少々、腹が立ったのは認めるが」

無事に入門を終えて、二人は目的となる店を目指して港町をさまよ
い歩いた。外国人の行き来が激しいソロール・エトリアでは、多種多様
の人種とそれに合わせた色があり、歩いていて飽きがこなかった。石
膏、木材、石材、赤煉瓦に灰色煉瓦、泥炭、様々な建築物がひしめき
合う。

やがて、中年の女が営む布売りの屋台店に差し掛かった。他には浅
黒い肌の従業員が二人いた。女の方へ行くと、エドワードは小声で
「冬に育つ魚は脂身がのりにのっている」と呟いた。女は問うた。

「あんたは何があつてきたんだい、冷やかしかい？」

「友に魚を食べてもらいたくて来たのだ。お侍の気持ちもある」

客が品物を目利きする台に銅貨を置いた。女は銅貨を受け取ると、
片方の髭の薄い男を呼んだ。

「これじゃあ、あんたの友達は飢えちまうよ。直接行って、ご馳走して
やりな」

従業員は頷き、小さく手招きをすると、二人を店の裏側に通した。
そこから、二人を路地裏の方へと案内した。狭く、迷路のような入り
組んだ道を歩き続けているうちに、倉庫が見えて、倉庫の隣りには店
がある。路地裏通りにある店としては品格のある構えである。

店の正面にも店があり、こちらは媚を売るのに慣れた風なこやか
な男と、がっちりした荒々しい人相の男がいた。商売ではなく、正面
にある店に不穏な輩が入つてこないか見張っている。

本都市はどの都市にもある闇を世界樹の迷宮が一手に引き受けて
いるの対し、姉妹都市は都市本来の光と闇の部分が混在していた。

互いに挨拶もしない。案内の男は戸にある鐘を二回鳴らした。帯
刀した目付きの悪い男が出てきた。エドワードが先に話した。

「お侍からの御用だ」

男は付いてこいとだけ言う。案内の男は椅子に座り、ここで待つと
言った。店は整然としており、骨董品が置かれていた。今度は帯刀し
た男に案内された。店の三階、店長が居る部屋に行く。男は自らの名
を告げた後、客人がお侍の御用で来た旨を伝えた。男はドアの横に立

つ。

入れと言われ、エドワードとコルトンは入った。

店長はぱりつとアイロンがけしたリネンのシャツを着て、頭を七三分けにした小奇麗な紳士の風体をした男。この店の主、エイブラム。どこぞの王様や貴族っぽい名前だ。冒険者以外にも、要人や市民が普通の店では売ってないような代物を欲したとき、エイブラムを通して入手する。彼と会うには、相応のコネが必要となる。無駄話は一切せず、彼は淡々と語った。

「用件は解っている。二時間後には森に着くだろう。さあ、代金を支払ってくれ」

エドワードは金券と金貨一枚をエイブラムの机に置いた。慣れた手付きで数えたら、インクに浸しておいたペンでささつと大きな手記に記入した。

これで終わり。と思えたが、エドワードは不躰なのを承知で一つ質問した。

「二つ教えてくれ。一六年前の借りとはなんだ」

エイブラムは顔を引き締めた。こういう商売をしている以上、余計な事を聞く輩に対応する処置も心得ていた。答えてくれそうにもないと思い、引き下がろうとした。しかし、

「あんたは弟子のエドワードだな」

「そうだ」

「……そうさな。少し教えてやろう」

珍しいことだ。この男が自ら、無駄話をしてくれるとは思わなかった。

「私にも短い間だが、冒険者の日があった。あのお方に何度も窮地を救われた。その後も、何度か助けられた。あの人はこれで、私は借りを返したことになるだろうとお思いだろうが、私はまだ、返し切れてないと思っている。今回もまた、自分のお金を使って後輩達のため、自分が長年住んでいるだけの者たちを助けるため、何より、愛する者達のために身を犠牲にしている。それにまあ、本都市が困れば、いずれ我々も困る日がくるだろうし、悪い芽を早いとこ積んでお

くに越したことはない」

もういいだろうとエイブラムは口を閉じた。これ以上、例えナイフで指を切り落とそうとも口を開きそうに無かったので、退室した。

エドワードとコルトンは店から出て、門も無事に通れた。さすがにまた、ごちやごちやと余計な取り調べをして騒ぎを面立てないほうが良いと判断し、他の者と同じ取り調べで済んだ。森に向かう中、二人は思った。

ゲンエモンという人物の人脈の広さ。凄さ。遠く全体を見渡して行動する彼と比べて、目の前の報酬ばかりに捉われて行動する自分達の器量の低さを恥じた。ゆっくりと歩きながら、コルトンが喋った。「支え合いの精神だとか、そんなのは理解し難いが、ここまでされて、あんな話聞いて引き下がったら、男としても人としても価値がないな」

エドワードは何も言わなかった。森に到着して、集落の例の小屋で適当に時間を潰していたら、二頭の牛を連れた四人の男たちが現れた。牛の背には木箱が載せられている。

二人は木箱を受け取ると、それぞれの馬に木箱を載せた。帰りは馬と徒歩である。平坦な道、なだらかな丘、放牧地と田畑を抜けて、夕暮れにはエトリアに到着した。二人は木箱を会議所の貸家に届けたら、コルトンは長鳴鶏の館へ、エドワードは適当な物を見繕ったら、ブケファラスと共に街の外に出た。

テイノフエ一家から木製バケツを借りて、エドワードは愛馬の体を洗ってやった。皮袋に汲んだ水をブケに飲ませて、好きに散策させた。夜が来たら、アジロナ外壁から見えないよう森に近寄り、そこで火を起こし、堀にいた食べるカエル一匹を串焼きにし、虫食いのトマトにかぶりつき、干し肉を三切れ炙って食った。ブケには草の他、人参を与えた。

侍たちが伝えたという、抹茶色の渦巻型の物を地面に差し、火を点す。これで、蚊など悪い虫は寄ってこないらしい。

これまで、多くの者たちと出会ってきたが、畜生である馬と寝食を共にするのは理解し難いと言われた。人になつくよう、飼いや慣らされ

た生き物だからこそ、時にこうした付き合いはいると一族の者たちは考えており、エドワードも自然とそういう考えを持っていた。

マントを枕に毛布で身を包んでエドワードは就寝した。ブケファラスは転がってもエドワードを潰さない位置を保ち、彼を守るように寝入った。

人数を増やしての強化偵察を行い、徹底的にゴーレムのパターンを洗い出す。偵察では他、ゴーレムの測量も行う。ゴーレム討伐における具体的な案を出した。

当初予定したとおり、穴を掘り、大規模な仕掛けの作成が決定した。穴は二つ作る。巨人の足を引っ掛ける穴。引っ掛かり、こけた巨人を仕留めるための穴。引っかける穴には七つの爆弾を仕込み、転んだ先にある浅い穴にも七つセット。爆弾で止めを刺し切れなかった時は、木と木の間を縄を張り、巨大な尖った杭をゴーレムの頭目がけて打ち込む仕掛けを造成する。

言うは易しである。穴はともかく、仕掛けは相当数の人手が要る。一週間後。八月に入り、巨人討伐から十日はとうに過ぎていた。

始めにゴーレム行動パターンの報告がされた。会議には、いつもの何倍もの人数が訪れていた。若い顔が多く見られる。

ゴーレムは以前より速度が増し、二日半から三日かけていた移動を二日と短くしていた。時折り、ゴーレムはいつもとは別の方へと逸れることもあるが、大体、決まりきっていて、行動パターンはそこまで複雑化はしていないとのこと。

また、ゴーレムの身長だが。測量の結果、十六メートル台と判明。横幅は腕の太さで十一メートル、縦幅は七メートル。数値だけ見れば小さく思えるが、見た時の威圧感もあり、余計に大きく見える。

罨については、一つ目の罨には二重構造の穴を掘り、爆弾の上には薄い板を被せ、導火線が消えないようにする。罨はゴーレムが逸れずに必ず通る道を選択する。

ゴーレムが転んだ時に頭から飛び込む浅い穴には、倒れた衝撃で爆弾が倒れたり消えたり潰れないよう、注意すること。止め用の穴で締

めきれなかった場合、吊るした巨大杭を頭に打ちつけ、それでも、止めを刺せないようなら、アルケミストとカースメーカーたちがフルパワーを発揮して仕留める。これで駄目なら、各自撤退するよう角笛を吹く。

問題となるのが人手だったが、ゲンエモンは案ずるなど胸を叩いた。

「執政院が当初予定していたとおりの百人以上を集められた」

これには、拍手が送られた。ゲンエモンに否定的だったヴァロジャなども、真一文字に結ばれていた口元を微かに緩めた。

ゲンエモンといえば、冒険者の間では知る人ぞ知る人。一階層探索者たちには雲の上のような存在だが、ゲンエモンはそんなこと構いなしに彼らの一人一人に頭を下げて、巨人討伐に協力してくれと頼んだ。一階層の脅威排除のため多額な金を支払ったのを知り、上階下層探索組といった枠組みを超えて、誠心誠意に物を頼むゲンエモンを見て、個を尊重し、報酬の低さから手をこまねいていた冒険者たちの多くが心を打たれて、巨人討伐作戦に身を乗り出した。足りないものが全て揃った。

ゴーレムは三階から二階へと移動している最中とのこと。よって、明朝前に三階に降りて、一日半以内の突貫工事で作業を完了させなければならぬ。先発隊は十名ずつ、一人が荷を背負い、一人が警護に付く。荷運びは二階層三階層辺りの者たちが協力してくれた。この協力にはゲンエモンのみならず、ギルド長とオルレスの二人も加わり、協力を要請した。

「皆の物、いよいよ巨人討伐作戦の本番だ。帰ったら、すぐに休め。まだ、準備ができてない者は今からでも、食べ物と飲み物を買っておけ。武運を祈る。では、解散！」

解散後、リカルドがエドワードに話しかけた。リカルドはすっかり興奮していた。

「いよいよ、その時がきたんですね」

「ああ」

「エドワードさん。失礼を承知で言ってもよろしいですか？」

エドワードはうんと頷いた。

「実は俺、以前はゲンエモンさんのことを尊敬とかしてなかったのですよ。長だとか呼ばれても、同じ立場のじいさんだろうって。でも、直にあの人と接していくうちに、なんであの人の方が長と呼ばれて尊敬されているのかがわかりました。あんなに親しく声をかけてきて、それでいて、全く偉ぶってないのに貫禄があるんですよ。自分は損するというのは、俺たちのためにここまでしてくれるなんて、冒険者との両方で敵わないやと思いました。聞くまでもないですが、エドワードさんはご自身の師をどうお思いで？」

エドワードは笑顔で答えた。

「自慢の師さ。そして、もう一人の父親と思っている。このことは言うよな」

リカルドも笑みを浮かべ、了解と答えた。

明朝。ホープマンズの六人は起きて、簡単に食事を済ませたら、世界樹の迷宮へと向かった。近づくにつれて、ぞろぞろと冒険者たちが結集し、数秒ごとに間隔を空けて、降りて行った。各自、入口にて待機する衛兵からスコップとツルハシを手渡された。

三階に降りると、遠くでカマキリの死体が横たわっていた。この日のため、深層に潜るパーティが事前に退治しておいたのだ。

現場に付くと、既に多くの物が作業に従事していた。ゲンエモンもニツツア、ヘンリック、ラクロワと共に穴を掘り進めながら、指示を飛ばしていた。アクリヴィは最後の切り札として待機。マルシアらメディックは様子を見ながら、暇があれば手伝う。オールドリッチは全力で穴を掘っていた。

エドワードたちは留め用の離れた浅い穴を掘るよう言われた。

少し遅れて、リカルドとヴァロジャも来て、彼らのパーティと共に穴掘りの作業を進めた。作業中、仕掛け用の樹木を切り出すため、ロディムなど斧の扱いを心得た者たちが呼び出された。三人ぐらいが手を繋いで囲める太さの樹が選ばれた。ロディムら数名は、慣れた腰つきで木に斧を叩きつけた。最終的に百二十一人の人数まで達した。九四人は作業に従事し、十名は二人一組で伝令喚起役に回り、十七名

のアルケミストとカースメーカーはゴーレムが来るまでは見張りとして待機。

二時間で大木を切り落とし、運び役に五名が回される。懸命な作業もあり、途中で二回、五分休憩をはさんで六時間後には浅い穴が完成した。浅いといっても、ヴァロジャが埋まりかねない深さの穴だ。一時間かけて、爆弾の設置並びに点火用の木筒を通す穴も完成。

浅い穴作業班は運ばれた丸太を定位置に配置すると、先が尖るよう削り出した。削り出したら、それぞれの樹に縄を括りつけて、一旦、両班の作業は中止。一度目の一時間の休止を取る。ちよびちよびと摺取していた水がぶ飲み、食事を貪り、一息つく。浅い穴担当の者たちは樹に縄を引っ掛ける溝を両横と上に六つ作り、縄で緩く縛ったら、ゲンエモンがいる深い穴を掘る作業班の元へと行く。

人数が増えて、作業効率は上がった。といっても、ゴーレムの足を引っ掛けるには、相当の深さを掘り、形も工夫しなければならぬ。

十一時間後。二度目の長い休憩を取る。終了次第、直ちにスコップやツルハシを手に手に取り、黙々と掘り進める。ここまで行くと、会話をする気が起きない。ひたすら、無心に、がむしゃらに土木用具で土を掘り起し、邪魔な土を退けた。十五時間で一旦、穴自体は完成。続いて、二段階目の穴を掘る。十七時間目で三度目の長い休止を取る。疲れていようとも、ゲンエモンは後少しだ。頑張るぞと激励した。

二段階目の穴は爆弾を確実に爆破できる深さを掘れば良かったので、一段目よりは幾分、楽だった。二十時間目の半ばに差し掛かる頃には穴が完成。小さな溝に爆弾を設置し、薄い板を上にかぶせる。

二十一時間目半ばで二時間の長い休止を取ることにした。アルケミスト・カースメーカーの者たちが寝ずの番に入り、穴掘りの九十四人は眠りに就いた。予定通り、二時間後には寝ずの番の者たちに叩き起こされた。文句を言いながら、目を擦る者たちを尻目に、五階層など深層を探索する者たちは早くも作業に取り掛かっていた。

ある程度、冒険をしていけば、並の一般人では到底敵わない体力が付くが、深層にまで到達しうる者たちはそれこそ、体力・精神ともに

超人クラスと呼べる。

ここまでいくと、後はもう体力以上に精神の問題となる。ゲンエモンを中心に五階層探索者たちが牽引する形で、上階探索者たちをリードした。ゴーレムが来るのではないかという恐怖も後押しして、作業のスピードはいやがおうでも上昇した。思考を捨てて、穴を作る機械と化した。人間に戻ろうなら、ぷつりと糸が切れてしまう。傾斜を誤魔化すよう、土を周囲に少しずつ盛り、巨大な布を被せ、何十本もの釘で布を地面に釘付けた。釘は土をかぶせて隠す。茶色い布には適当に、土と根つこがある草をまぶしておいた。浅い布にも同じ隠蔽を施す。途中で一時間の休憩を挟み、三十一時間目には深い穴の導火線設置と調節完了。手を伸ばしても届かない大穴ができた。

二つの穴は完成した。残すは大杭の仕掛けのみ。

「これが最後となる。最後に力一杯作業するため、二時間の休憩を挟む。辛いだろが、食事を胃に詰めとけ」

そう言つて、ゲンエモンは握り飯にかぶりついた。くたくたになりながらも、食事だけは取り、作業班は寝入った。アルケミスト・カーズメーカーたちも、応援に来た二階層と三階層探索のパーティ十名に見張りを任せて、仮眠した。

三四時間目の半ば。結局、二時間以上も休憩した。残す仕掛けを作るため、浅い穴後方にある大木に集結。上に登つて引つ張る班と下から引つ張り上げる班に別れた。エドワードのような身軽に動ける者は樹に登り、大半の者は下から引つ張り上げた。

「えいや、そーれ！ えいや、そーれ！」

右側の先頭にいるゲンエモンの掛け声に合わせて、樹を引つ張り上げる。三六時間目に差し掛かる頃、僅かに調整を行いつつ、大杭を斜め下方向に向けて空中でピンと張ることに成功。何十にも縄を括りつけて、杭が落ちないように支える。爆弾で仕留めきれなかったゴーレムを、斜め下から降つてくる杭でひびが入った頭を叩き潰す。樹のそれぞれに二人が配置され、左右から支えるロープを一本ずつ、タイミングを合わせて切断する。

「皆、ご苦労。我らの苦労は必ずや報われる。少し休んだら、帰つて

ちゃんとした寢床で寝よう」

ゲンエモンは疲れを押し隠し、大声で感謝の意を述べた。殆どの者は極度の疲労で崩れた。手が豆だらけの者も多く、潰れている者も当然いた。

一七名のアルケミストの他、パスカル四人とダルメオとファイリが仕掛けの実行者として残る。見張りに付くラクロワが戻ってきて、彼も仕掛け人として残る。

応援に来てくれた二、三階層の十名を除き、殆どの者が休憩した。三八時間を過ぎる頃には起きて、一組十二人から九人の構成で順に帰る。比較的安全といえる一階層だからこそ、できることだった。エドワードら五人はアクリヴィの無事を祈ると告げて、帰っていった。地上は暗かった。

地上に着くと、体を緑に洗わず、汚い服を脱ぎ捨てて、下着とシャツ一枚の恰好で深い眠りに落ちた。さしもの彼らも、往來の時間合わせて四十時間にも及ぶ作業には参った。ここまでして倒せなければ、後はエトリア自衛軍や世界樹の賢者とやらに任そう。

翌朝。雨が降りしきる日。日が昇る中間の時刻にエドワードは目覚めた。

エドワードが起きたのが合図のように、ジャンベ、コルトン、ロディムの順で目覚めた。食事を取ろうと階下に降りたら、アクリヴィとマルシアがテーブルにいた。周りにも同業者がいるが、何やらもじもじしていた。アクリヴィが無事に帰還したということは、巨人討伐は成功したのか。失敗したのか。四人は駆け足でアクリヴィに寄った。アクリヴィは申し訳なさそうにやや暗い顔を見せている。まさか。

「結果はどうだ!?! その表情だと、まさか」

「違うの。これは、私だけ活躍できてなくて、こんな顔になっていたの」

「……では……」

「巨人は……ゴレムは倒れた。討伐作戦は大成功。あなたたちが起きるまでは黙っていた」

思わず歓声を上げた。彼らだけではなく、他の冒険者たちも叫んだ。四十時間にも渡る無茶ぶりな突貫作業が功を成したのだ。特に関わった者たちの感慨は一際大きい。

マルシアと四人はアクリヴィのゴーレムの最期を説明してくれと迫った。

「わかったわかった！ わかったから、そんなに詰め寄らないで」

アクリヴィは巨人討伐の一部始終を語った。

円筒を使い、紫の煙で見張り役の者たちはゴーレム接近を知らせてきた。私たちは左右に別れて、アルケミストは前へ、カースメーカーは後ろに立った。ゴーレムを見たとき、測量した数値以上の大きさに見えて、さすがに驚いたわ。あんな岩石の巨体に術式が通じるのだろうかと言ひしんだ。

でも、上手く行くときは上手く行くのね。

ゴーレムはずっぽりと右足が穴に落ちたわ。ゴーレムが右足を上げようとする前に、待機していたラクロワが火薬のラインに点火した。落ちてゴーレムの体勢が揺らいだとき、爆発が起きた。伏せて耳栓をしていた耳を抑えていたけど、爆発の大きさでこっちまで身の危険を感じた。だから、ゴーレムが倒れかけたら、急いでもっと後ろへ下がった。音でわかったけど、ゴーレムは全身を地面に打ち付けていた。見事に浅い穴に頭を突っ込んでいた。パスカルたちが点火して、浅い穴から爆風と爆炎が発生した。天井に炎が届きかねない威力だった。

あちこちに石の破片が降り注いだ。効果てきめんね。

いくらなんでも、この爆発には耐えきれないだろうと安心したら、キアラとか、カースメーカーたちが騒いで、ダルメオに。ダルメオは私がいる右側で、フィリは左の樹にいたの。早く縄を切れと叫んだ。

二人は息の合ったコンビネーションで杭を支える二本の縄を断ち切った。煙と木々が邪魔で見えにくかったけど、煙が内側から押される形でふわりと歪曲したのは見えた。

激しく打ちつける音が響いた。どうとキアラに聞いたら、まだ少

し、息があると云った。これほどやって、まだ息があるなんて、ゴーレムの生命力には呆れる同時に畏敬の念すら抱いたわ。というわけで、私たちの番。大抵の物質は温度の急激の変化に耐えきれない。そこで、左右から最大威力の氷の術式を浴びせた。

そうしたら、ゴーレムは腕を二、三度叩きつけた。指示どおり、撤退しようとしたら、カースメーカーたちに止められた。キアラが珍しく微笑んで、大丈夫よと告げた。あの笑顔の不気味さを伝えられたいいわね。ひび割れる音の後、ゴーレムの頭が更にぼろぼろと崩れ落ちて、跡には大小様々な岩の破片が残った。ああ、あと、ゴーレムの胴体や腕はほぼ無傷な状態だったわね。私から言えるのはここまで。アクリヴィは語り終えた。

後世の人間が事実を知れば、きつと、地味だなど言うだろう。あるいは、ゲンエモンや誰かが、剣の一撃でゴーレムの頭を粉碎したと捏造された物語が伝わるかもしれない。世に伝わる怪物退治の実態も、実は案外、こういう地味で多大な労力を払った末での成功なのだろう。

とにもかくにも、地獄の四十時間突貫工事が実ったのは、嬉しい報せだった。だがしかし、次にアクリヴィは更なる嬉しい報告をエドワードにもたらしめた。

「実はね、あなたに知らせたいことがあるの。教える前に一つ言い訳すれば、ギルド長に口止めされていた。ゴーレムの一部始終を伝えてから、教えろって。真意は分からないけどね」

そうして、アクリヴィはエドワードの耳元でささやいた。エドワードはアクリヴィを非難がましい目で一瞥したら、「すまん。外へ行ってくる！」と、長鳴鶏の館から飛び出した。

エドワードの慌てように、彼を知る者は顔を合わせた。彼があそこまで焦り、急がせるとは何用なんだ。

「アクリヴィ。あいつに何を吹き込んだ」とコルトン。

「この場で全ては教えられない。だから、じかに行って見てきたほうがいい」

アクリヴィは悪戯っぽく口元を歪ませた。ロデイルはいいから教

えろよ声を荒げたので、仕方なく少し教えた。

「彼に会いたい人が六人いる。そのうちの四人は、彼が会ったら、泣いて喜ぶ人かもね」

六人いて、四人は泣いて喜ぶ者たち。簡単には教えてくれそうになるので、コルトンはエドワードの後を追いかけた。ジャンベ、ロディム、マルシアも宿から出た。遅れて行こうとするアクリヴィを、アデラが呼び止めた。

「エドワードが泣いて喜ぶ人とは？」

アクリヴィはウインクをして、「秘密」と言い、宿を出た。

ちえとアデラは頬杖を突いた。彼と六人も気になるが、ゴーレムの死体が具体的にどうなっているのかも知りたかった。

「知りたいことが多すぎて困るよ」

二四話・再会

もしもだ。巨人討伐の報酬がこれだというのなら、地下大戦で奇跡的に帰還したのを除けば、今までの冒険の中でも最高で最上級の発見であり、見返りだと胸を張って言える自信がある。神や精霊の類は信じてない。だが、戦火から逃れて山中を彷徨う中で出会った狼を思い出した。狼は自分を見つめただけで、襲おうという気配は無かった。その後、無事に下山できた。あれが先祖の霊の導きによるものであるならば、きつと、今回も人の眼には見えない見えざる者たちの力が働いたのかもしれない。

屋外。エトリアにある壁の外側へと通じる門を出て近い所で、六人の男女がいた。

一人は杖を携えた老婆。一人は女性。一人は男。一人は判別し難い。後の二人は子供。各人、長旅の荷物を背負っていた。二頭の足が太い農耕馬と天幕付きの荷車もあった。

一人は金髪。世の中の出来事に憂んだ瞳と生きる渴望が宿る、複雑な眼差し的女性。女性は薄茶のマントを羽織る四、五歳と思われる子供の手をしっかりと握りしめていた。一人はややくすんだ色合いな茶髪の男。肌は日光に照らされて焼けており、体格は良さそうだが、武芸に秀でてる訳ではなさそうである。金髪の女と子供、エドワードをちらちらと見比べていた。

一人は真っ直ぐに長い青髪を下ろした者。男にも見えるが、女にも見える。太刀を携えて、侍が着る袴と呼ぶ着物を着ているのを見る限り、ゲンエモンと同じブシドーの者と思える。眼は自分や金髪の女よりも、黒味がかかった青色。額にある古い刀傷が目立つ。隙が無く、いつなんどきでも刀を抜いて対処できそう。相当な部芸達者とお目見えした。

侍はエドワードを一瞥した。切れ長の鋭い眼差し。エドワードは思わず身構えた。殺気が感じられたからだ。エドワードは侍を用心することにした。

一人は赤毛の少女と思しき者だが、真っ黒いフードをすっぽりと頭

から被り、身体にはカースメーカー特有の銀の鎖と鈴を胸元に下げている。僅かに覗かせる顔からと体つきから少女であるはず。

老婆と女性は言わずもがな。エドワードは男の正体は何となく察しがついていたが、赤毛の少女とあの侍の存在がいまいちわからない。

そして、もう一人。白髪交じりの女性。記憶にある顔より更に老けてみえる。苦勞の連続の末に刻まれた皺から、すっかり実年齢以上に老けてしまったのが見て取れる。杖を携えてはいるが、背筋はしっかりと伸びていて、眼差しには光が失われてなかった。

門外に居る者たちはエドワードの姿を認めて、歩み寄ろうとしたが、立ち止まった。男は早く行こうと身振りで示したが、女と老婆はどこか躊躇っていた。少女と侍は我関せずといった感じ。本に書かれる物語の多くでは、こういう場面の時、真っ先にどちらかを抱きしめて涙を流すものらしいが、自らがその場面に立ち寄ると、そうでもない。互いにかける言葉を探していた。

まずは自分からだろうと思い、エドワードは話しかけた。

「何故、こられたのですか？」

しまったと口を閉ざす。これでは、来たことが迷惑だと言っているように聞こえる。考えた末に発した言葉とは違う事を言ってしまった、少々、気不味い。相手もえつと、顔をした。

「失礼。言葉を間違えました。柄にもなく緊張しているようでして」

老婆が答えた。

「こちらこそ、いきなり訪ねて申し訳ございません。ところで。そろそろ、このような堅苦しい他人行儀は止めに行きませんか？ かくいう私もあなた同様、柄にもなく緊張しなくていいことで固くなっておりますが」

老婆は何とか笑みを浮かべると、エドワードを改めて見て、「息子よ」と呟いた。

「ありがちなことしか言えないけど、よくぞまあ、あの生意気な武芸者気取りの子が……。ここまで、大人としても戦士としても立派に育つとは。嬉しい限りです」

「ご健在そうでなによりです、エウドラ母さん」

エドワードも微かに口元を緩めた。杖こそ突いているが、母エウドラは昔と変わらない。優しくて気丈だ。エドワードは女の隣にいる男に拳手をしてみた。

「そして、あなたはフェドラの夫で、フェドラが手を繋いでいるのは……甥っ子になるかな」

男は何度か頷くいたら、微かに微笑んだ。

「ええ、そうです。ヴァンと申します。ですが、あなたより少し年下なので、そんな畏まった風にしないでください」

人の好きそうな笑顔である。良い家族、良い領主が居る土地の下で産まれたのだろう。男はほらと、女。妹のフェドラの横に回り、背中を押した「君も挨拶しなよ」

十年以上の歳月が過ぎたのだ。外見は当然として、フェドラは昔より暗くなった気がする。無理もない。戦争に巻き込まれて、自分の知らない十年の月日で相当な苦労をしたのだろう。母も明るく振る舞っているが、深く刻まれた皺と杖を突く姿から、容易に察しが付く。少しして、意を決したのか。兄さんと言い、真正面からエドワードの目を見た。

「久しぶりです。楽しく英雄ごっこされて気分はどうですか？」

エドワードとヴァンは目を丸くした。大げさな再開ではなく、普通に挨拶したら、後は何年の間になにが起きたか語り合うだけかと思いきや、妹の発言で一波乱がきそうだ。

「私たちはこの子が産まれた日から……この子の名前は長男のエリアス兄さんとエドワード兄さん、父さん、ヴァン、エウドラ母さんのそれぞれから一文字ずつ取って、エウゲドロスと名付けました」

エドワードはエウゲドロスの顔を見ようとしたが、エウゲドロスは母と場の空気が変わったのを感じて、エウドラの方に歩み寄っていた。

「私たちはこの子が産まれた日、あなたがこのエトリアにある世界樹の迷宮で一族再興の為、冒険をしていることを知りました。しかし、私はすぐに兄さんの所へ行く気になりませんでした。頑張るあなた

の足を引つ張りたくない、頼りたくないという想いがある反面、英雄ごっこにうつつを抜かしているという思いもありました。兄さんも想像以上に苦勞したと思いますが、私と母も、この方。ヴァンと出会うまでは、あちこちを放浪して、物乞い以下として扱われて、酷い目に遭ったこともありました。今でも忘れません。汚いひげだらけの口が顔面に迫ってくるのを。幸い、母が助けてくれましたので事なきを得ましたが」

フェドラはぶると身を震わし、目には恐怖と嫌悪感が宿った。

「でも、世の中、冷たい人だけではないのですね。私が十七歳の時ぐらいでしょうか。ヴァンと出会ったのは、彼は優しい人でした。兄さんが目指す、英雄や傑物になれる人ではないでしょうが、正しい人の心を持った方でした」

フェドラはヴァンの方を見た。エウドラとエウゲドロスの近くにいたヴァンは、フェドラの視線に気付くと、うんと微かに首を動かした。

「出会ったのは偶然でした。他の人から、その農家には若い独り身の男がいて聞いて、雇ってもらおうと思いました。軽蔑しないでね。私の若さを生かせばとか、そういう思いが僅かにあったのは否定できない。私と母は彼の住まう家に行き、ドアを開けた時、彼は息を呑んで私を見つめた。私がここで働かせてくださいと言ったら、彼は一つ返事で良いと言った。私は喜びました。けど、次に更なる喜びが私を待っていました」

フェドラは頬を染めて、ヴァンの告白を語ってくれた。

私にも当然、二親がいました。母は幼い内に死に、父も最近亡くなりました。父は亡くなる前、予言を残しました。俺が無くなって間もない内に、生涯、お前の伴侶となる人が現れる。そのとき、その人はお前の農場で働かせて下さいと言うだろう。知っているだろうが、私がこの村に来る前は放牧民の一族だった。その人を娶れば、お前はいつか家を離れて、遊牧民として生涯を終えることになり、なつて間もないうちは大変な苦勞をするだろうが、必ず幸せと満足を得られるはず。こうおっしゃってました。

そして、今、そのとおりの美しい人が現れました。お願いです。あなたを僕の妻に。生涯を共にする伴侶として、ここに迎え入れてさせていただきます。唐突な申し出で驚かれるでしょうが、私からすれば、あなたの申し出も唐突で他人を驚かせますよ。

「私と母は今までにないくらいの衝撃に襲われました。だって、彼の申し出は私のよりも唐突でしたもの。ですが、ええ、見てのとおりに私は彼の情熱にほだされて、そうして、私は正直に言えます。彼と出会えてよかった。彼と結ばれて、こんなにも嬉しいことはない。エウゲドロスが産まれ、こんなにも喜ばしいことはない」と三人で幸せを分かち合いました。

四年前にあの子が生まれ、二歳にまで成長した年。ヴァンはあなたの所へ行きましようと言った。すぐにではなく、この子がもう一歳か二歳、年を重ねて、ちゃんと準備をしてから行こうと。ヴァンには遊牧民の血が流れていたからか。彼は土を耕すことより、動物たちとどこまでも大地を行くのを好んでいましたから、自然とあなたの協力したい気持ちもうまれたんでしょう。私と母は最初、乗り気ではありませんでした。今更、前の生活をしてどうする。なにより、あなたにたかるようで、それが嫌でした。結局、彼の説得に折れましたけど。

四年目となる今年。あの子が四歳となってから、出発しようとした。長い旅のりで、一ヶ月半もかかりました。ですが、途中で引き返そうかと全員、悩みました。あの盗賊共が狙っているのを知ったからではありません。面倒臭くなったとか、やっぱり、あなたに会うのが嫌になった訳ではありません」

フェドラは話すのを一旦止めて、一息吸い、エドワードを非難がましい目で見た。

「エトリアの地下世界で、モリビトなる異種族と戦い、あなたが戦死したという噂を耳にしたからです」

エドワードは驚かなかった。あの状況では、誰もが死んだと考えるのが妥当だろう。ようやく、妹が自分を責めるのがわかってきた。フェドラは声を荒げた。

「これから、やっと、母と子を除けば、生き別れた肉親に会おうという

のに！ 肝心の人が死んでいたのでは話になりません！ 躊躇いはありました、何年ぶりにもなる肉親に会えるのは同時に楽しみであり、恋い焦がれるような思いもあった。それなのに、あなたに会えないのでは話にならない。戦には行くのは勝手だけど、少しは残された人たちの気持ちも考えて。せめて、花でも一つ手向けに行こうと思いました。途中、エトウの配下と名乗り上げる数人の盗賊に襲われました」

今度はびっくりした。エトウ配下に襲われただど!?

「一体いつ？」

「十日前です。その時、あのお二方。刀という剣を身に付ける、あそこ青みがかった長髪の方。レンさんともう一人。呪術師と名乗るツスクルという方。あの二人に助けられました。二人がいなければ、私たちはこうして、兄さんと会うことも叶わなかった。お二人には感謝してもしきれません」

レンとツスクル。合点がいった。目的こそ不明だが、ともかくにも、あそこにいる侍と呪術師の少女のおかげで家族と再会することができたのだ。後でちゃんと礼をせねばならない。

フェドラは唇を噛むと、面をやや下げた。

「助けて頂いた後、レンさんから、あなたの兄であるエドワード氏は生きていることを告げられました。レンさんは自らの武芸を生かす場として世界樹の迷宮を目指していたらしく、道すがら情報を集めていたようです。私たちはレンさんの言葉を信じて、エトリアを目指しました。そして、あなたと会うことができました。」

兄さん」

フェドラは面を上げた。口元を結び、目からは涙がこぼれそうである。

歩み寄ると、エドワードとフェドラは互いに抱き締めあった。エドワードは済まないといい、頭を撫でた。

「兄さん。やっと、会えるそばかり思っていたのに……私と母さんにこれ以上、悲しい思い出を作らせないで」

フェドラは怒っていた。無茶をして、拳句に死にそうな目に遭い、

これから会いに来ようとする者たち。残された者たちを置いて、死ぬはずだった兄に対し、怒っていたのだ。

「心配をかけてすまない。だが、どういわれようと、しばらくは世界樹の迷宮に留まるぞ」

フェドラは涙を浮かべたまま、何故と問いかけた。

「お前達が来たら、そこで冒険は終わりではない。まだ、迷える者たちが多くいる。そいつらが来ても終わりではない。傷を癒し、生活を安定させる必要がある。完全にこうだと言えるまでは、俺は冒険を止めない。良いですね、母さん？」

いつの間にか近くに来ていたエウドラに聞いた。エウドラはええと頷いた。

「私たちがここに来たのは、あなたが居るエトリアにしばらく留まり、以前の暮らしを取り戻す為、本音を言うならば、止めてほしいです。しかし、あなたには父から託された使命があり、この街に対する責務もある。そうですね、エドワード」首肯する。「そう。だから、止めません。ですが、母からの幾つかの願いを聞き届けてくれませんか？」はいと即答した。

「エウゲドロスが生まれた事の祝福をすること。これが一つ目。二つ目はゲルを作るのを手伝うこと。三つ目はレン氏とツスクルさん、御二方の頼みを一つ聞き入れること。四つ目は、時々でもいいから、様子を見に来ること。これで最後となります。五つ目は大分先になるでしょうけど、大きくした家族用のゲルに住まい、あなたが誰かを娶るまではそこで暮らすこと。もつとも、あなたがその前に誰かを娶れば、話は別ですけど、そうなっても、来たい時には来なさい。あなたが建てた家ですもの。それでは、エドワード。母にも」

エドワードは屈んで、エウドラとひとと抱き合う。別れる前は、背を伸ばして肩に届く位だったのに、今や大きさが完全に逆転してしまっている。長い歳月が過ぎたことを実感した。

「遅くなりましたが、あなたが無事でいて、喜ばしい限りよ」

本にある家族との感動の再会と比べたら、泣き叫ぶわけでもなしに、がははと賑やかでほのぼのとした再会ではなかったが、短い時間

の間、確かな繋がりのようなものと共に、まざまざと昔の記憶が思い起こされた。厳しかった父ゲロリオン。だが、決して母を含む女性に無闇やたらと暴言を吐かず、暴力も振るわなかった。自らの力をわきまえた上で、どこで使えばいいか理解していた。武芸に熱中しすぎて危険を顧みず、叱られて拳骨を食らったのも良い思い出である。

父から最初で最後となる頼みもよく覚えている。だが、他にも印象深い言葉があったはずだが、どうもうろ覚えである。男の誇りについて語っていた。涙を見せるなどか、男は背中で語れとか、そんな陳腐な内容ではない。いや、背中がどうのついては語っていたはず。もっと深い、重みのある言葉だったはずだが、幼い頃に聞かされたきりで覚えてなかった。どうしてもなら、母に聞こうと思うが、今はよそう。聞く時間はいくらでもある。

忘れてはならないのがもう一人。兄エアリス。正直、エアリスとの思い出はあまりなかった。物心付く頃には、エアリスはお嫁さんをもらい、他家にいたからだ。たまに来て、関わり合う時間は少なかった。それでも、互いに親愛の情は感じていた。父ほどではないが、エドワードはエアリスを頼もしい人と見ていた。エドワードは後悔していた。もつと思いつける思い出があるぐらい、兄と関わり合うべきであった。一番覚えているのは、武芸に付き合ってくれた事。出陣前の家族を頼むという言葉以外に、どんな状況でも狙いを定めた獲物から目を逸らすなという教えはよく覚えていた。

積もる話はあるが、やるべきことが沢山あった。おーいと、呼びかける者たち。振り返ると、コルトン、アクリヴィ、ロデイルム、マルシア、ジャンベがいた。到着したというよりかは、タイミングを見て出てきたという表現が合いそうだ。

「あの方達は？」とエウドラ。

「苦楽を共にした仲間です」

エドワードは手を振り、来てもいいと示した。本人たち自らが紹介に出た。

「初めまして、エドワードから話には聞いてましたよ。コルトンと言います。以後お見知りを」

アクリヴィはジェントルマンのようなポーズを取り、挨拶をした。さすがに育ちが良い。

「お初目にかかれて光栄です。アクリヴィと申します。よろしく願いますね」

打って変わって、マルシアはいつもと変わらない調子で自己紹介した。

「初めまして、こんにちわ。マルシアです。医術を学んでいるので、病気があれば相談してください」

ロディムは少々、畏まった感じを装っていた。あろうことか、自分をさん付けで呼んだ。

「どうも、ロディムといいやす。エドワードさんにはお世話になっています」

さん付けはともかく、下心があるように聞こえなかった。この男なりに自分には感謝しているのだろう。ジャンベも少々、堅くなっていたが、満面の笑みたたえて挨拶をした。

「初めまして、僕はジャンベと申します。僕もエドワードさんにはお世話になっております。精々、音を奏でて歌を歌うことぐらいでしか恩を返せてませんが、宜しければ、今度聞いていただけませんか」

積もる話は山ほどある。その前に、やるべきことが沢山あった。一通りの自己紹介が済んだら、早速、長鳴鶏の館に行き、一部屋貸して貰えた。レンとツスクル。二人の部屋も借りようとしたが、二人は断った（口を開いたのはレンのみ）。

「あなたの好意はありがたいが、断らせてもらおう。あてはあるのでな。では、エドワード殿。明日の御昼前にでも、冒険者ギルドへ来てくれ。あなたの母上から聞いた、我々の頼み事を一つだけ聞いてほしい。それでは失礼する。仲間とご家族と共にごゆるりと過ごされよ」

「そうか。今更だが、母と妹、甥と婿の命を救っていただき、ありがとう」

「礼には及ばん」

レンとツスクルは退館した。あの時、感じた殺気は気になるが、恐らく、そういう人物なのだろう。常に周りを警戒して、神経を尖らせ

ている。いかなるときも、敵に気付かなかった自分が悪い。いつ刃が降りかかってきても、切り返す。心身共に一生を武に捧げることを誓った人間なのであろう。額の傷が雄弁にそのことを物語っているように見えた。

殺気を向けられたのは、武芸に通じる者同士、感じる物があつたのか。だとすれば、自分はその侍のお眼鏡に適う程度の実力はあるということか。

妙に嬉しく思う反面、どこことなく、上手く説明できないが不気味も感じていた。それは、赤毛の少女のせいかもしれない。カースメーカー特有の、他者との共有を拒んだかのような薄くまとった嫌な空気のせいだな。修行すれば、抑えられるとキアラなどは言っていたが、少女は未熟なのか。それとも、単に見知らぬ自分達を前に緊張しただけだろう。

エドワードは気になることがあつた。エドワード以外にも、レンと知り合った者たちは気になっていた。レンは男か、女か。そこが判別し難い。声はやや男性っぽい、女に聞こえないこともない。外見は男に見えるが、今の武装と着物のままでも、女らしく振る舞えば、女にしか見え無さそう。男だとは思うが、自信を持ってそうだとは言えない。

細々とした考え事は脇にやり、エドワードは今を楽しむことにした。館に許可を貰い、ジャンベが演奏して、ちよつとした宴会をやることになった。もちろん、外壁にいるティノフエ一家他、呼べる限りの人数を呼んで、宿に泊まる同業者たちも自由参加オーケーにした。「エドワード、あまり身内びいきばかりは」

「母さん。毎回、俺は身内ばかりひいきにするつもりはありませんよ。ただ、俺があなたやフェドラ、新しい家族を迎え入れた時の喜び、何かをしてやりたい気持ち、これまでしてやれなかったことへ対する思い。俺がこれからしてやれる事の一つとして、今日の宴会をさせてほしい」

一時間後には宴会が始まった。初めのうちは固かったエウドラたちも、時間が経つに連れ、徐々に和らいだ表情をしてきた。一族と冒

険者総出の宴会はそれはそれは賑やかであった。笑い声が数件先まで響き、本当のお酒から、酢のような安酒まで様々な杯に酌み交わされる。エウゲドロスにエドワードは話かけようとしたが、まだ警戒しているのか。残念ながら、宴会中は碌に会話できなかつた。ぴったりと、祖母エウドラと母フェドラの間にくっ付いていた。

ジャンベとバジリオが歌い、ギターとリユートが奏でられる。隻眼となったクリイルがロディムとエクウウスの若駒の一人と肩を叩き合いながら笑い、チノスは比較的が年が近いジャンベと楽しみ、大人への一步と言い、人生初の酒を飲んだ。コルトンは飲み比べをしていた。

アクリヴィ、マルシア、アデラ、ブルーナ、アデラ組の女レンジャーはフェドラの隣に位置する席に座り、若い女性同士の談義に花を咲かせ、甥に年は幾つなど質問していた。甥は顔を赤らめて、エウドラの影に隠れてしまう。マルシアはフェドラに微笑みかけた。

「ふふふ。その年で随分とおませさんのようね。気を付けないとね」
そうねと、フェドラも心の底から笑みを浮かべて返した。

楽しい時間は瞬く間に過ぎていき、各々部屋に戻り、エクウウスの者たちは外にあるゲルへと戻って行った。宴会の最中、全てではないが、一つ一つ、語れることを語り合い、ゲンエモンの事も教えた。ゲンエモンにも来てもらいたかったが、生憎、本人は穴掘り作業の従業員兼現場監督の重労働で無茶をしていたらしく、ぎっくり腰になったとのこと。一週間は休むよう、メディツクのヘンリックに言い渡されていた。例の文字が書かれたプレート of 解説はできたようなので、また暇な日にでも来てくれ。今は家族水入らずの時を過ごすのがよいと言われた。

翌日、エウドラの要望もあり、エドワードは四人を花桜の館に連れて行った。コルトンたちは、何日かの間は家族を手伝ってやれ。しばらくは俺たちだけで金を稼いでおくからと言ってくれたので、エドワードは遠慮なく好意を受け取ることにした。和洋折衷の建物を見て、四人は物珍しそうに館を見つめた。白い着物を羽織る女将のアヤネに案内されて、ゲンエモンが住まう、今は療養している部屋に入っ

た。ゲンエモンも白い着物を着たままで、畳の和布団から起きて正座していた。

「遠路はるばるから来て頂いたのに、このような姿で迎えて申し訳ない」

エウドラはいいえと首を振った。

「いいいえ、こちらこそ、あなた様の体調がよろしくない時に訪れてしまい、すみません。それよりも、私はゲンエモン様に感謝しております。この子が幼い頃から青年に至るまで面倒を見てもらい、本当にありがとうございます」

エウドラはゲンエモンに頭を下げ、フェドラとヴァン、エドワードも母に倣って頭を下げた。頭を下げられて、ゲンエモンは慌てた。

「ああ、いや！ そのようにこうべを下げないでください。私がエドワードにしたことと言えば、武芸と学問を教えて、たまに相談に乗っただけ。後の功績は全て彼自身の力と彼の仲間たちの協力によるものであり、今、彼の母であるあなたがこうして来られたのも、彼の努力の結果。私は彼に大したことはしておりません」

ゲンエモンなど、彼の民族という謙遜をしていた。ゲンエモンがどう言おうと、今の自分があるのは師のお陰であり、実際にその通りだと思っている。大切な話があるので、エドワードは四人に館の待合室で待つように言った。ゲンエモンは察して、四つん這いの姿勢で棚に寄り、引き出しを開けた。プレートは布に包まれていた。

「全ては解読できなかった。だが、恐らく、これは地形を示しているはず。何故なら、我らに残された文字にこれを何かを表す文字は無かつたからだ」

ゲンエモンは布を解いた。掠れて黒ずんだ文字があり、中間に一字、下段右下の文字が読めそうならいだった。

「幸いかな。読み仮名らしき物が振って少し残っていたので、そこから、読み解くことができた」

「なんと？」

ゲンエモンは中間の文字を指した。「まず、中間にある文字は都。言葉で言えば、みやこや都市部のと、という」今度は人差し指を下段

二文字に当てた。「これには、左右端にある読み仮名が読めた。"シ"と"ン"じゃ。そこで、わしはアヤネと我がパーティの頭脳であるブレンダンとも相談し、これの読み方を推測した。恐らく、多分、いや高確率でこの新しいに宿と書かれた物は、シンジユクと読むはず」
「シンジユク!？」

聞いたこともない。世界地図を丸暗記したわけでもなければ、特別に言語や歴史に通じる訳でもないが、少なくとも、どこの地図や言語、歴史にもシンジユクという文字は書かれていなかったはず。最も、自分が学者と呼べるほど物知りではない。アクリヴィに聞けば、少しぐらいわかると思いたいが、文字に通じるゲンエモンやアヤネはおろか、アクリヴィと同じく学徒であるはずのブレンダンも解らないようなら、相当歴史に通じている者に聞いても、期待できそうにない。

アクリヴィの師、放浪の賢者ヘルメスなら知っていそうだが、ほぼ消息不明であり、生きているのも疑わしい人物を当てにはできない。
「シンジユクとは一体なんでしょう？」

ゲンエモンは首を振った。

「さっぱりわからぬ。ただ、関係ありそうな事は知っている。何千何万年も昔、今はブシドーと呼ばれ、南方や東に位置するエトリアより更に遠く離れた東の国。主に黒人や褐色の肌色の者たちが住まう国であり、わしの故郷でもある。だがしかし、わしのような黄色い肌の者たちの間では、現在いる国はかつては故郷ではなかった。現在、エトリアと呼ばれる国こそ、本当の故郷だという」

エドワードは唇を結び、ゲンエモンの言う口による伝承の意味を考えた。何千年の国家侵略で国を追われ、千年や数百年前の土地を還せと叫ぶ者たちは知っている。しかし、何千何万年も前は自分たちの土地だったなど、少々馬鹿げている。それとも、そうして残るほど、屈辱的な思いがあったのだろうか。エドワードは先を促した。

「第五階層にある古びた都から見つかった、お主が持ち帰った漢字が書かれたプレート。もし、本当なら、今はエトリアと名乗るこの国こそ、かつては我らの国、日の丸掲げていた国家になる。だが、どうして我らの先祖がここにいない？　そこが疑問だ」

「全く想像が尽きません」エドワードは素直に答えた。本当を言えば、歴史の談義よりも答えを聞きたかった。ゲンエモンは失礼と言った。「お前の家族を待たせてしまったな。すまん。ここからは、完全に想像の域なので、話半分に聞いてくれ。何故、わしの先祖がここにいないのか？ それは、住むに住めぬ事情があり、原因の幾らかは世界樹のせいではないかと思う」

エトリア人が聞いたら、聞き捨てならない台詞だと怒ること間違いなしだ。富と繁栄、栄光と平和の象徴であり、エトリア人ご自慢の世界樹が大昔には栄えた国を滅ぼした原因だなんて、認める訳がないし、ゲンエモンの想像はあまりにも突拍子ない。新しい宿と書いて、シンジユクか。ある意味、エトリアらしいかも。昔から現在に至るまで、根無し草の者たちが集まって繁栄している国だから。

師に改めて礼を述べたら、お気を付けてと言つてエドワードは退室した。

やるべきことは沢山あるが、ほんのひと時、数日だけでいいから、昔からの家族と新たに加わった家族と過ごしたかった。そして、甥のエウゲドロスの祝福をし、ヴァンというフェドラの婿を一つ、試さなければならぬ。その前に、レンとツスクルの用事を片付けておこうと考えて、四人の世話を一時、アヤネに頼み、エウドラに恩人二人の頼み事を聞いてくると断り、花桜の館を一旦、後にした。

二五話・試験

時期によつて冒険ギルドは盛況、閑古鳥が鳴いているのどちらかだが、今は閑古鳥が鳴いていた。冒険ギルドの賑わう、賑わない時期は本当にわからない。多く人が来ることもあるかと思えば、全く来ない日もある。ただ、今日は約二名が来るのは確定しているので、まだ人が来ているほうと言える。

ちりんちりんと鳴るドアの鐘がお迎えの挨拶代わり。当の隻眼のギルド長は、嫌々退屈といった感じで書類処理の作業をしていた。運動と称し、お古の刀剣を振るったり、矢を番えずに弓弦を引っ張っている時のほうが楽しそうなのを見ると、ギルド長は役人ではなく根っからの武人、冒険者だと思わせる。

結構な腕前のレンジャーとして名を馳せていたようだが、昔の話。片目を失い、右足も若干びっこを引いている状態では凶暴な樹海生物とまともに戦えない。

ギルド長は一瞥すると、一言「客だ」とだけ言つて書類に向かった。レンとツスクルは静かに椅子で待機していた。エドワードは待たせたとしようと、レンはいや、とだけ答えた。

「それで、俺はあなたに何をすればいい？ 見てのとおり、しがない一介の冒険者に過ぎないから、大してやれることはないぞ」

「ご謙遜を。あなたの名声は聞いておりますぞ。怪物蟻共の女王を倒した事や、モリビトと呼ばれる者たちの戦においても無事に帰還を果たしたと聞いております」

悪い気分ではない。見知らずの遠い者にまで、自分の名は届いていたのだから。レンは見たところ、旅慣れており、各地を放浪しているうだ。エドワードは一つ、レンに聞いてみることにした。

「そうですね。なら、一つお聞きしますが。私の同胞をどこかでお見かけしませんでしたか？ エクウウスの名も伝わっていれば、これ幸いです」

レンはううむと首を傾げたら、うむと思ひ出したように頷いた。

「そういえば、隣国であるメテイルリクより更に北西の国にある鉱山

で、劣悪な環境で働く者たちがいきました。その中にいる者たちと一人、たまたま話をして、俺なんかが今のエドに迷惑をかけられないとか。草原を駆け巡るのは素晴らしいことだと気付いたとか、そんなことを語っておりましたな。口ぶりでは、他にも家族や友人がいるようでした。もう一組、エピザと呼ばれる国より南に位置する海岸と隣接する国でも、どことなく雰囲気似ていて、エドワード殿とご家族と同じような金髪の者たちが数人、港のぼろ家に住んでいるらしい。たまたま、宿泊した酒場兼宿屋の所で、その内の一人と話をすることができたのですよ。彼が言うには、子供たちに以前の暮らし、特に馬に乗る素晴らしさを伝えたいけど、エトリアに行く余裕がないと語っていました」

おおとエドワードは目を輝かせた。やはり、同胞たちはまだまだいて、生きていたのだ。そして、レンの話から察するに、国無き民として苦勞をしているらしい。目頭が熱くなった。嬉しいのもあるが、少なくとも、彼らは一族の誇りを忘れて、自由が無い、こき使われる者たちの暮らしに馴染んだわけではないことも知り、安心した。

手紙と送金。必要とあらば、直接出向きたいが、そこはまず、自分の家族の生活の一時安定。並びに、自らの家族を含む、他の者たちも助けてくれた恩人の用件を聞く必要がある。

「レンさん、あなたには感謝してもしきれません。私でよければ、協力しうる限り協力しましょう」

「それでは、私からの頼み事を明かしましょう。私とツスクルの身分証明。エトリアの冒険者資格を得る試験のパス。そして、あなたが監督官として、我々の実力を見てもらい、迷宮に挑戦しうる実力があるかどうか見極めて頂きたい」

「だそうだが、許可願えるかなギルド長？」

いつの間にか作業の手を止めて、三人を注視していたギルド長にエドワードは申し立てた。ううむと眉をひそめて、レンとツスクルを見比べる。

「見た訳じゃないが、腕は良さそうだ。初対面である俺ともきちんとして礼儀正しく挨拶をした。お前さんと違ってな」

ことさら、お前さんという言葉強調した。初対面の時、隻眼でヤクザのようなツラの彼を胡散臭く思い、勝手に負けるものかと思い、不躰な態度を取ったのは今でも覚えている。若気の至りでと言っておいた。

「来る前に少し、話は聞いていた。こいつの身内の連中を助けて、例の悪漢どもを追っ払った。これだけでもう、お前さん方は強くて信用できる奴と証明したも同然。身分証明と試験パスの件は俺とエドワードが細々とした手続きを何とかしておくから、後はエド、お前はレンの強さを見てくれ」

「心得た」

「重ね重ね感謝いたします」

レンは侍がする、例の両手を組み合わせた礼をした。手の平を合わせただけなので、普通の人に対する礼を表すものだった。両手を組み合す場合、互いに打ち合ったときだとゲンエモンから聞いた。

しかし、さっきから気になることがある。ツスクルだ。レンと比べ、この少女は一言も喋ろうとしない。それどころか、フードを目深に被り、誰とも顔を合わせようとしなない。たまに胸にぶら下げたカースメーカー特有の金でできた鐘の形をした鈴を弄ぶぐらい。膝には、つぎはぎだらけの呪われた感じがする兎のぬいぐるみを載せていた。ギルド長は姿勢を改めると、なあお嬢ちゃんと話しかけた。相手が幼げな女の子のためか、いつもより声音や表情は優しい。

「どうした、緊張しているのか？ 黙っていちやわからない。一言ぐらい喋ってくれないか？ どこから来たとか、歳とか？」

「私が答えよう」とレン。

「見たとおり、ツスクルはカースメーカーだ。それも、恐らく並のカースメーカーよりも力は強い。それゆえ、不用意に人と口を聞くことを恐れている。うっかり、かけてしまわないかとな。因みに、歳はこう見えて十六歳だ」

ギルド長がえつと目を開き、エドワードを見た。エドワードもギルド長と目を合わせた。十六歳には到底見えない。精々、十二歳がやつとだろう。呪術を扱うせいか、はたまた、栄養が足りなかったのか。

青い長髪で長身の性別不明の侍と不気味な赤髪のカースメーカーの少女。改めて見て、奇妙な組み合わせである。

そもそも、二人はどこでどうして出会い、ここに行き付いたのだ。色々気になるが、根掘り葉掘り聞くまい。時が訪れれば、自ずと語ってくれるだろう。ほらツスキルと、レンはツスキルの頭を撫でた。レンのツスキルを見る表情と頭を撫でる手の仕草はどこことなく女性的ではあるが、鍛えられた太い手首と顔つきを見たら、男っぽく見える。眉毛を剃っているせいで、余計に。

「ん」と、ようやく、ツスキルはエドワードとギルド長に小さく会釈した。会釈する際、目深に被るフードから顔を覗かせてくれた。

不思議な金色の眼。^{まなこ}目の周りは睡眠不足のようなクマで覆われている。色白肌で鼻筋も通っているが、全体的に陰しさと影があり、睨むような警戒している目付きで近寄りたがたい印象。ただ、につこりと笑えば、同じ年ぐらいの男子の心ならば射止めてしまいそうな魅力はある。

エドワードとギルド長は微笑んでみせた。ツスキルは拒むようにフードを被った。私が心を開いているのはレンだけ。無言でそう言っている気がした。

レンは準備は出来ていると言ったので、早速、第一階層に向かうことにした。ギルド長は一旦、店仕舞いすると告げたら、エドワードに話があるから、二人に外へ出てくれと言った。ギルド長はエドワードを手招きすると、声を潜めた。

「例の輩共がきたこと。どう思う?」

「この国に直接来た訳じゃないが……偵察とか?」

「家族を助けられて、信用するお前さんの気持ちはわかる。俺も奴らのことはよくわかっちゃいねえが、そこまで悪人には見えない。だがな、こんな時代だ。一応、気を付けるこつた。二人とのお付き合いが終わったら、二人ではなく、身内の誰か一人を連れてきてくれ。詳しい証言を取りたい」

出身国ではないが、今や彼もエトリアの国民に属する一人であり、各冒険者たちをまとめる立場の一人。国の先行き、冒険者たちの行く

道を憂い、守ろうと動くのは当然と彼なりの責任と想いを抱いていた。来て間もなく、しかも知っている者が誰もいない他国の二人を警戒する気持ちも理解できる。しかし、家族を助けられたエドワードにとっては、ギルド長ほど二人を疑えなかった。

ほれと、ギルド長は証印が押された紙を一枚押し付けた。

軽い密談を済ませたら、とつとと世界樹の迷宮へと向かう。何か聞かれるかと思っただが、ツスクルは当然として、レンもさほど興味が無さそうに、ギルド長との話については特に聞いてこなかった。トルヌウーア内壁を守る衛兵には、ギルド長から許可を頂いた旨を伝えたら、あつさりと通してくれた。ギルド長も街ではそれなりの地位にあることを思い出させてくれる、数少ない場面だなど実感。

外で待つレンとツスクルと共に世界樹へ向かう。ツスクルはもちろん、レンもエドワードに、ギルド長と如何な話をしていたかとは聞かなかった。

週に二回、周辺地域から卸売に來た農民と港の者たちが集まる大規模な市の日であり、野菜に果物、肉に魚類のかごを抱えた老若男女と道をすれ違ふ。たまに同業者の姿もちらほらと見受けられた。すれ違ふ者たちは、三人を見ても特にどうと思わなかった。ただし、エドワードは名と顔が通っているので、たまに会釈やどうもと声をかける者はいた。

トルヌウーア内壁の門に着いたら、守備兵たちに事情を言い、ギルド長の証印を見せたらあつさりと通してくれた。姿勢よく起立して笑顔で送る彼らを見て、レンは一言、エドワードに申した。

「あのような態度で大丈夫なのか？」

「同じ国の者でも基本、態度は変わらん。レンさんがあの場で刀を抜いたら、話は別だがな。彼らは即座に劍に槍、最終的には鉄砲を持ち出して、あなたを討ち取ろうとするだろう。少々話は変わるが、この国における冒険者の立場は食客に近い。つまり、活躍して金を落とせば持て囃されて地位も上がり、逆に大して活躍しなければ、邪魔な無駄飯ぐらい。家の部屋取り野郎。エトリアの冒険者に対する態度はこうだと俺は感じた。あくまで俺個人の感想だし、例外もあるが」

「助言痛み入る。参考とさせていただきます」

迷宮に入る前、レンが一つ言わせてくれと言った。

「私のことはさん付けしなくていい。例え、私がエドワード殿よりも年上だとしても、レンと呼び捨てられて構わん」

うんと頷いたら、エドワードもそれならばと、「俺も殿なんて付けなくていい」と返した。

「心得た。エドワードど……エドワード」

迷宮に一歩足を踏み入れた途端、緩やかな表情だったエドワードの顔が厳しく引き締まった。ここは、地上とは異なる世界。例え、いくら通い慣れているからといって、油断しすぎれば、呆気無く紫の毒蝶の餌食になってしまう。エドワードはレンとツスクルの方を見てみた。レンは先ほどと表情こそ変わらないが、歩き方には一分の隙もない。ツスクルはわからない。カーズメーカー特有の力があるので、多分、大丈夫だろうと思った。

生き活きとした緑の光景が広がる。第一階層、別名^{すいりよく}翠緑ノ樹海

”

樹海に挑戦する上で必然的に最初に到達する階であり、基本ともいえる場所。人の出入りも多く、地上に近いため、さして入り組んでもおらず、出現する生物もその気になれば、武装した子供が何とか倒せるぐらいのものもある。比較的安全と呼べる。ただし、たまに深層の生物が出現して、思わぬ被害をもたらすことがあるので用心に越したことはない。

エドワードは二人にこう説明した。

ツスクルの膝頭近くまである大きさの森ネズミ二匹を鞘に収めたサーベルで軽く追っ払う。いくら実力を測るといっても、こんな弱いのでは話にならない。

二組のパーティとすれ違うものの、これといった物が出てこない。鋭利な爪を持つモグラが一頭出てきたが、こちらの数が多いと見るや、さっさと藪のほうへ引っ込んだ。

手頃な物がいないかと探していたら、四人ひと組のパーティが慌てて通り過ぎた。一人が気を付けろと声をかけた。四人が逃げてきた

二階へ通じる道へ行くと、三体の甲殻類と一頭の角鹿がいた。互いに相手を牽制しあっていて、縄張りを主張しているのが窺える。いずれも新米駆け出し冒険者が相手をするには荷が重い相手。

もつとも、一回り小さく、角鹿の角は左右に二股別れているのを見る限り、奇妙で耳障りな雄叫びを上げる凶暴な方の角鹿ではないのは良かった。あちらの角鹿は大型の角鹿並の大きさもあり、しかも強くてしつこい性格。一度狙われたり、攻撃をしかけたら、そう簡単には逃がしてくれない。

レンとツスクルの実力を計るには絶好の相手である。二人も察したのか、エドワードの前に出た。

「危なければすぐに射る」

レンは無言で頷いた。ツスクルは相変わらず反応すらない。

レンはわざとぎざぎざと、足音を出した。角鹿が振り返り、唸る。レンは歩くのを止めない。新手の相手が歩を止めないのを見て、角鹿は目標を切り替え、足を踏み固め、胸を逸らして自身の強さと大きさを見せつけたら、どんと一直線にレンに向かって突進した。頑丈な鎧で全身を覆っているのならともかく、そうでなければ、人体など軽く貫いてしまう角鹿の突進力と角の硬さ。

レンは腰の刀に手を付けて、来るのを待つ。鹿が直前まで迫るや、レンが軽い身のこなしで横に跳んだ時、どさりと角鹿の首が落ちた。胴体から大量の鮮血が流れ出し、緑の地面を血で覆う。翠緑の森がいつまでも健康でいられる要素の一つに、これら生きたものの血と臓物があちこちで肥料代わりとなっているのを否定できなかった。

続いて、ツスクルのお手並み拝見。ツスクルは角鹿の死体に立った。血の匂いを嗅ぎつけて、三匹のハサミを持つ甲殻類三匹が歩み寄る。かつかつとハサミを打ち鳴らし、どかなければお前も食らうてやろうかと言わんばかり。ツスクルはぶつぶつと、エドワードには全く意味不明な言霊を唱えたら、鈴を何度か鳴らした。

鈴が鳴るたびに一匹ずつの動きが止まる。計三度鳴らしたら、三匹ともぴくりと動かなくなった。これで終わりかと思いきや、ここからが本番であった。

三匹はハサミを振り上げて、味方同士で突如、殺し合いを始めた。しかし、奇妙である。本気で打ち合っているのは間違いないが、まるで、お人形劇の剣戟みたいに無理矢理戦いを興じさせられているようだ。

やがて、三匹とも互いの首近くの関節を切断しあい、最後には力を込めて甲羅の隙間にハサミを潜り込ませて、肉と鋳物を切断する気持ち悪い音が耳に届いた。カースメーカーの戦いをあまり見たことはないが、いつ見ても、良い気分にはなれない。離れた所から相手の意思を奪い、操り、命を自らの手の平で思うがままにころがす様は恐ろしいの一言に尽きる。カースメーカーを好んでパーティに入れようとしぬ者の気持ちもわかる気がした。

「如何かな？」とレンが聞く。

短い攻防だったが、二人の実力は十分測れた。エドワードは素直に告げた。

「合格だ。その腕前なら、二階層どころか三階層。いや、四階層の怪物たちとも渡り合えるはず。他の武技は知らないが、剣の実力なら俺の知っている剣士立ちの中でも五指に入るぐらいかも」

エドワードは二人の実力を知った。

レンの剣術。ツスクルの呪術。一見、水と油と思えた二人の技能だが、意外とマッチしていた。二人の腕もさることながら、言葉には表さない絆で結ばれていた。少々メンバーが足りない気がするが、おいおい同志を募るつもりなのだろう。

こと、剣術に関しては、エドワードはレンに敵わないと思った。全力でこられたら、こちらは受けるか避かわすかの二択を迫られる。とにかくレンとの約束を果たした。後はギルド長に教えて、推薦でもなんなりしてもらえばいい。

「行こう」とエドワードが言う。三人は無言で帰路に着いた。

「ギルド長にあんたら二人は強かったと言っておくよ」

レンは手を組み合わせてお辞儀をした。侍が武芸者に対して行う礼の一つをすることにより、レンはエドワードを認めたと表していた。エドワードも一つ、頭を下げた。

エドワードは一つだけ聞いておくことにした。

「これからどうするつもりだ？ 仲間がいるのなら、俺も探そう」
「しばらくは二人で行こうと思っっている。あるいは、一時的にどこかのパーティに身を寄せようかと。機会があれば、その時にでも頼もう。では、さらば。あなたの道に光があらんことを！」

エドワードはレンとツスクルと別れた。あの二人なら大丈夫だ。色々とな気になること、聞きたいことはあるが後にしよう。組合に行き、ギルド長に自らの見た事を率直に告げたら、花桜にて待つ新しい家族の一人、ヴァンに言わなければならないことがある。

戻ってくるや、ヴァンと二人きりで話すといい、半ば強引にエドワードはヴァンを連れ出した。フェドラは不安気な面持ちでエドワードに言った。

「乱暴はしないでね兄さん」

「そう暗い顔をしないでくれ、フェドラ。すぐに終わると思うから」
エドワードとヴァンが行き、途方に暮れたフェドラの肩にエウドラが手を置いた。

「多分、あの子は自分の気持ちにけりを付けるためにもやろうとしているのよ」

何をと聞かれても、エウドラは答えなかった。しかし、何となく解る気がした。実に十年ぶりに家族と出会った。しかも、自らの肉親である妹が結婚して、見知らぬ男まで連れていた。いくら、妹が信頼できるといっても、すぐには納得できないし、嬉しいやら、何を勝手にという理不尽な怒りを抱いているのだろう。実際、エドワードのヴァンを見る目は値踏みするようであり、僅かに疑わしく見ている感じだった。

彼は父親ではないが、実の兄として、父であるゲロリリオンが生きてもいたら、きつとやっていたことをしようとしていた。母エウドラからもつと強く信頼できると言ったとしても、エドワードはヴァンを試そうとするはずだし、夫もそうしたはず。エウドラはエドワードとヴァンを信じることにした。

エドワードはヴァンを連れて街の外にまで行き、森に入った。森は涼しく、夏の暑さも気にならない。多少、叫び声がしても、聞こえにくいと思える箇所まで来たら、草が生えた地面に座り込んだ。戸惑うヴァンに、まあ座れと促した。ヴァンは仕方なく、座り込んだ。

ヴァンはエドワードが地面に置いたサーベルを見た。自分と話すだけなら、武器は要らないだろうに。嫌な予感に冷や汗が流れた。

「二体、私に何の用があるのでしょうか？」

エドワードは微笑んでみせた。ただし、目元は全く笑っていないかった。恐らく、エドワードを自分を試そうとしているのだとヴァンは気付いた。いきなり剣を抜かれても、驚かないようヴァンは顔を引き締めめた。

「まあ、そんなに固くならないでくれ。本当にちよつと、話をしたいだけなんだ。ところで、ヴァン。君はフェドラのことをどう思う？」

ヴァンは素直に言った。

「苦労の連続で少し擦れているところもありますが、強くて、根は優しい家族想いの女性です。一目見た瞬間、この人しかないと思います。意味とか、そんなのはどうでもいい。ただ、生涯を共にする相手は彼女においてほかならない。フェドラが死んだら、自分の身内以外にはもう、あそこまで愛せない。もしも、あの時、フェドラに断られたら、二度と女とは付き合うことはなかった」

ヴァンは淡々とせず、強い想いを込めて語った。エドワードはなんの反応も見せず、黙って聞いていた。

ヴァンのフェドラへの想いを打ち明けさせた後、エドワードは少しの間、黙っていた。やがて、口を開いたが、ヴァンの予想していたことを言い出した。

「君のフェドラへの想い、確かに聞いた。言葉には重みがあり、嘘はないと思う。だが、人の気持ちは風化しやすい物。母とフェドラ、幼い甥はともかく、君が新しい生活に慣れそうにない。悪いことは言わん。故郷へ帰れ。一族以外の者がフェドラと結ばれるのは許さん。仮に私が許しても、他の者が許さんだろう」

エクウウスのこと、エドワードのことをフェドラとエウドラ、アヤ

ネからある程度は何い知っていた。

誇り高く意地っ張りだが、心中は誠実で、思うことも行うことも高潔。エドワードのやろうとしていることはそこから来ているのだろうし、立派だと思う。しかし、やはりというか、そういう民族にありがちな血統主義的などに拘る人ではなからうかと思ったりすることもあったが、このエドワードはそういう人に当て嵌まる人だった。

基本、争いごとは好きではない。命の代わりに金目の物を寄越せと言われたら、喜んでそうする。だが、自分の命、それ以上に自らの大事と思う者たちまで差し出せと言われたら、敵わない相手でも立ち向かうつもりである。例えば、明らかに自分より意志と力が強い、自分の最愛の人の兄が相手だとしても。

ヴァンは断固とした口調で言い放った。

「できません。あなたがどう言おうと、義母エウドラははに言われて、あなた以外の何十何百人から彼女の元から去れと言われても、私は去らない」

「では、フェドラがお前を要らないと言ったらどうする？ 嫌だと言えば？」

君からお前と呼び方が変わり、語気にドスが利き、射殺するような眼差し。幼年時代には逃げる為に相手を殺め、現在では世界樹での戦に参加したと聞く。ヴァン一人を殺すぐらい訳なかった。

自分とは違う世界を生きている人間を相手にヴァンは臆したが、逃げるわけにはいかなかった。

「その時は話し合います。それでも、彼女が僕を拒むのなら、僕は彼女を幸せにできるだけの力量が無かっただけでしょう。ですが、これだけは言えます。僕と彼女は互いに愛し合っている。僕はこれを絶対に真実と言える自信があります」

「根拠は？」

ヴァンは声を荒げた。

「ありません！ 目には見えなくても、あるからあるとしか言えません！」

ヴァンはすつくと立ち上がった。

「話の途中で申し訳ありませんが、帰らしてもらいます。そして、エトリア以外の土地へ行きます。もちろん、フェドラたちと共に」

「お前の言葉に耳を貸すと思うのか？」

「エドワードさん、あなたのはしていることは立派ですし、何年も付き合った訳ではないですが、周りにあなたは尊敬されていると思う。ですが、一族の血がどうか、そんな目先の小さなことに囚われている愚かな人とは残念だった。そんな人の下では、フェドラは幸せに暮らせない」

森から出て行こうとするヴァンに、エドワードは二度、待てと呼び止めた。

「断じて許さん。一族の者は一族で暮らせばいい。お前のような馬の骨には理解できんだろうし、譲れん。どうしても行くというのなら、エウゲドロスを殺す」

ぴたりとヴァンは足を止めた。一呼吸整えたら、ヴァンは挑むように振り返った。本来の大人しさはなりを潜め、彼なりの冷たい部分が滲み出た声で応えた。

「どういう意味だ」

「どうもこうも、部外者の血を引いた雑種の価値などない。浄めて、フェドラには新しいちゃんとした血を入れる必要がある。ただそれだけだ。どのみち、十年以上も会いたいと思う者たちを俺から横取りしたお前に情けはかけん」

話はこれまでだと逆に行こうとするエドワードに、今度はヴァンが待てと呼び止めた。

「待て！ フェドラにも、エウゲドロスに手を出すのは許さない。実の兄だからといって、やって良い事と悪い事がある。あなたは笑顔を取り戻しつつあるフェドラをまた、地獄に落とすつもりか！ 絶対に許さん！」

聞く耳持たず、エドワードは来た道とは別の方へと行く。そちらから行ったほうが近いのだろうが、そんなのはどうでもいい。エドワードの表情からして、彼は本気だ。このままでは、エウゲドロスの命が

危ない。 なんとかしたいが、相手は武芸に通じている。素手でも、ましてや帯刀する相手にどう勝つ？

臆病者めと罵り、話し合っていた方へ戻ると、サーベルが置き忘れられていた。エドワードもかっかして、うっかり置き忘れたに違いない。ヴァンは震える手で剣の柄を握りしめた。

これで、斬るのか。人を、彼女の兄を。

緑に喧嘩もしたことがないヴァンにとって、サーベルの重みはずしりと来た。それが、多くの命を奪ってきた物になれば、それらの命が宿り、余計に重たく感じた。

あの男を殺さなければ。後から斬りかかれば、殺せるはず。しなければ、自分ばかりかエウゲドロス、下手をすれば、フエドラも危ない。興奮と恐怖が入り混じり、ぶるぶると手と体が震える。エドワードの背は遠ざかって行く。

背を見つめるうちに、段々と呼吸が落ち着いてきた。エドワードはどこか、隙があるように見えた。自分が実力的に劣る相手と知り、油断しているのかもしれない。剣を一心に見つめたら、ヴァンは意を決し、父と母、フエドラと息子、エウドラとエドワードへの謝罪の意を呟いた。

「神よ、私はこれから恐ろしいことをする。しなければ、私の大切な者が奪われてしまう。どうか、私の罪を許したまえ」

ヴァンは思う限り、慎重に、早い足取りでエドワードを追いかけた。途中、牽制に仕えるかもと石を二個拾った。

木々の間を進み、エドワードに少しずつ追いついてく。太い二本の木々に挟まれた藪があり、そこに隠れる。エドワードが立ち止ったからだ。エドワードは首を傾げ、思い出したように舌打ちした。サーベルが無い事に気付いたのだ。戻られたら不味い。自分の敵意を知られてしまい、警戒される。

周りは木々に囲まれ、はびこる根と植物のせいで地形が歪んでいる印象がある。奇襲にはもってこいだ。

ヴァンは剣を握りしめ、夏の暑さ以外で流れる汗も物ともせず、息を潜めて相手を待ち伏せした。やらなければ。フエドラと息子を守

らなければ。一族の復興がどうかは、自分が責任を以てなそう。

近づきつつある。藪から木の背後に回り、来るのを待つ。エドワードが背を見せた時、ヴァンは息を止めて、真っ直ぐにエドワードの背へと切りかかった。獲れたと思った。だが、エドワードは軽く避けて、おまけに足を引つ掛けられた。転びそうになるヴァンの剣を持つ手を取り、力任せに剣を奪い取った。

ヴァンはかろうじて両手で受け身を取れたが、絶望した。ちよんちよんと固い鋭利な物で後頭部を突かれる。ゆっくりと見上げたら、感情のない眼でエドワードが見下ろしていた。

「何をするつもりだった」

悔しさと恐怖で震えながら、ヴァンは大声で帰した。

「お前を殺す為だ！」

「何故？」

「フェドラとエウゲドロス、家族を守る為だ！ 兄だろうと、家族に手出しをする者は絶対に許さない」

「そんな状態でよく言えるな」

エドワードは剣を上げた。おしまいだ。刺されるのか、斬られるのか。どっちだっていい。不甲斐なさで涙を流した。

ヴァンは覚悟をして、身を固めたが、いつまで経っても凶刃が振り下ろされなかった。死ぬ間際は時間を長く感じるといふのは本当だったか。

ヴァンの予想を裏切り、剣ではなく手が伸ばされた。ヴァンは掴まず、草を土ごと握り締めたが、エドワードは掴めと言った。

「大丈夫か。どこも怪我はしていないか？」

先ほどとは打って変わって、エドワードの声は優しかった。手を掴もうとないヴァンを、エドワードは無理矢理起こした。

ヴァンは混乱していた。混乱するヴァンに、エドワードは微笑んだ。今度は目元も笑っていた。エドワードは笑みを引つ込めると、真剣な顔つきになり、申し訳ないと詫びた。

「俺が言える立場ではないが、数々の非礼と暴言を許してほしい。すまない」

ヴァンは目をぱちぱちさせた。エドワードはヴァンを座らせて、正面に向かい合う形で座り込んだ。

「混乱するのも無理はない。一つ言っておくが、全て俺の独断したことだ。確かめたかったのだ。君が本当にフェドラに相応しいのか」

まだ頭がぐるぐるとまわっていたが、ヴァンはようやく理解できた。

全てエドワードの芝居。自分が妹であるフェドラの夫に、男としての度胸があるか試されたのだと。ヴァンは胸の鼓動に押されながらも、なんとかうんと首を振り、続けてと言えた。最初から尾行に気付いていたのかぼやくと、最初から最後まで知っていた、下手過ぎて途中でアドバイスをしたくなつたぐらいだとエドワードは答えた。

「そんなことより、本当に済まない。俺は馬鹿な奴だな。頭では理解していても、いきなりフェドラの男だといい、家族の大黒柱扱いされている君を気に食わない思いがあつたのを認めよう。俺の思いや苦労は何だったのだ。こいつは本当に、真実まっことに！ フェドラと暮らしていく気はあるのか。俺たちの暮らしを共ににできるのか。そう思ううちに、居ても立ってもいられなくなり、今回、君を試した訳だ。とはいえ、やり過ぎたことは事実。もう一度、謝ろう。ごめんなさい」

エドワードは一步分身を引いたら、両手を付いてヴァンに頭を下げた。ヴァンは慌てて、頭を上げて下さいと言った。

「エドワードさん、止めてください。あなたのフェドラと家族に対する重みはよく解ります。逆の立場だったら、僕も同じことをしたかも知れませんか」

「いや、させてくれ。そうしなければならぬ事をした。なによりも、是非とも言わせてほしいことがある」

ヴァンはまた、どきどきした。さつきとは違い、胸に期待を膨らませて。

「これからも、フェドラのことをよろしく頼む。お前という男なら、任せられる」エドワードはすつと立ち上がり、経を唱える神父のごとき口ぶりになった。「ヴァン、お前に荒ぶる力と包み込む心がこれから

も有り続けるのを願う。そして、蒼き狼の導きにより、我が甥エウゲドロスに人と馬、両方の友が生まれんことを望む」

さあと手を伸ばし、ヴァンはエドワードの手を取り、立った。ヴァンもエドワードに詫びた。

「僕もあなたのことを誤解していた。あなたを勝手に頑固な血統主義に拘る人だと思っていた」

「気にするな。誤解するなというのが無理な話。それよりも、俺は自信がついたよ。これからやろうとしてることもできそうだ、上手く演じられるだろうとな。何をやろうとしてかは聞くな」

エドワードはヴァンの言いたいことを読み取り、先んじて言った。

「俺は血統がどうかは気にしない。気にする奴もいるだろうが、少なくとも、一族の者にそう拘る者はいなかった。大事なのは血ではなく、心だ。やろうという意志、先人たちの大切に想う者を引き継ぎ、守ったり、より昇華させていく心さえあれば、誰でもいい。さもなきや、侵略した行く先々で他国の女を抱く気にはならない。物語によくある、あれの血を引く者でなければ使えない物だとか、入れない神聖な場所なんてありやしない。そうでなければ、身分が低い一戦士の子供にしか過ぎない俺がここまでやれるわけない」

これを聞いて、ヴァンもようやく笑顔をみせた。

そうして、来た時とは違い、和やかな空気に包まれて、二人は会話をしながら帰った。

二六話・短い余暇

早速、ヴァンを執政院に連れて、必要なことをまとめてやることにした。

エクウウス避難民の保護。エトリアは永住先ではなく一時的に受け入れる。経済的にも人数的にも安定次第、エトリアに恩を返し、今後自由な民として生きる代わり、他国にはエトリアの友として一切の脅威を与えない事を約束させる等々、書類の細かな取り決めは殆ど覚えた。

今回の項目にも一応、貧困で苦しむ親類縁者を冒険者などの一時的な住者が生活を安定させるまで呼び寄せた形式を取り、エドワードが身元引受人に名前と世界樹の迷宮に生息する像の怪物から採取した象牙製の印鑑、書類を持ち、執政院が用意したインク壺とペンを使い、承認にサイン。フェドラの夫ヴァンにもサインを書いてもらい、最後は役人が吟味する。役人はヴァンの文字の歪さに眉をひそめたものの、何も言わずに判を押しして終わり。これにて、ウォル一家は一時的にだが、エトリア人の扱いとされた。

ついでに、レンとツスクルから伝えられた他国にいる者たちの受け入れも認可された。

お次はヴァンによる、盗賊襲撃時の証言。エドワードの他、オルレス。市民代表の裁判官の男性と書記一名が立ち会う。

ヴァンは怒りと悔しさを滲ませた表情で語りだした。

ヴァンたちはエピザの国境沿いに差し掛かった時、五人の盗賊に襲われた。彼らは偉大なる義賊の末裔であり、いずれはこの世を統べるエトウの世直し助力の為、金品を献納しろとほざいた。ヴァンは仕方なく、母が遺した宝石と金が入った袋を差し出そうとしたら、これでは全然足りないふざけるなど五人は叫び、目をぎらぎらと輝かせて女子供も差し出せと要求した。

当然、これにはヴァンと母であるエウドラができないと突っぱねたら、凶悪な笑みを浮かべて、剣と槍を一斉に向け、二人を殺そうとした。そこへ、レンが颯爽と現れて、前方にいた二人を瞬く間に鞘で叩

きつけて、怒って切りかかろうとした一人の腕を軽く斬りつけた。残る三人はぴくりとも動かず、恐怖で顔を歪ませて、全身を震わせていた。こそそと、木の陰からツスクルが現れた。裏から呪術をかけていたのだ。

レンは五人を睥睨すると、「散れ。さもなくば容赦せん」と言った。ぶたれた一人でリーダー格と思しき男がわかったと領いたら、三人は糸が切れた人形のようにがくりと膝を付いた。

レンはさあ、急ごうとヴァンたちを促し、ヴァンたちも急いだ。腕を斬られた盗賊の一人がやりすぎだぜと唾を吐きかけ、もう一人は黒い翼と馬乗り共でてめえらを踏み砕いてやると吠えたが、相手にはせず、早々と立ち去った。

「正直、証言がどうのとか、他の国へ警告するとかそんなのは考えていられませんでした。一刻も早く、エトリア領内に行こうという思いで一杯でした」

「君と同じ立場なら、私でもそんな悠長に考えられていなかった。気にすることはない」オルレスはヴァンを否定しなかった。

ヴァンも深刻であったが、立ち会う四人の内情はヴァン以上に深刻であった。

最近、エトリアから歩いて一ヶ月離れた国が襲われて、一つの村が壊滅した。しかし、ヴァンたちがエトリアに到着したその日より十日前、五人のエトウの配下と名乗る盗賊に襲われた。単なる虎の威を借りた可能性もありうるが、十日程度で行ける距離にまで、エトリアやその他多くの国々にとって脅威となりうる者たちの存在が迫ったことになる。こと、エドワードには馬乗り共という単語が耳に痛かった。

遠く離れて暮らすカルツバス。馬だけでなく、時に船も乗る彼らだから、海を隔てた所に子孫を残せて滅亡を避けられた。何にも縛られず、時に留まり、好きに世界を移動する彼らだが、エトウに目を付けられて、大切な馬ばかりか一族の者たちを兵士として供給しているまことしやかな噂があった。

エトリアにいる、大分前までカルツバスで暮らしていた者の話が確

かならば、部族の本体と増えすぎて別れた一団の者たちを掻き集め、男だけではなく女も加えれば、推定四千から五千騎余りの戦力となる。そんなのが全て、エトウなる世直しどころか世を乱すだけの悪党に協力しているのは、脅威以外の何者でもないし、エドワードなどには悲しいことではない。

黒い翼も気になる。太陽を覆い隠し、人々に絶望を与えた存在。ワイヴァーンと言われているが、モリビトとの戦いで巨大怪鳥イワオロペネレプの存在を知った今、翼竜ではなく鳥かもしれないし、本当の悪魔も十分ありうる。そもそも、エトウ自体男だという以外わかつておらず、突拍子もない話にもなれば、正体は人間の皮を被った異世界の怪物だとか、実は強大な力を秘めたカースメーカーなど、噂が噂を呼び、公には姿を見せない大悪人に対する畏怖と恐怖を余計に掻き立てていた。

オルレスはヴァンにありがとうといい、ドアを四回ノックし、見張りに立つ衛兵に客が帰る旨を伝えた。エドワードとヴァンは解放された。

塞ぎ込むオルレスに、エドワードは一声かけた。

「今の俺が言えた立場ではないが、まだ終わった訳ではないだろう」

「そうではない。それもあるが、そうではないんだエドワード君。私はただ、あまりにも引つかかる点があつて、必死に頭でそのことを整理整頓。理路整然にまとめているのだ。君は気にならないかね」

「もちろん、気になる。カルツバス。彼らは盗賊の手下に身をやつしたか、そうではないのか」

オルレスはうんと首を捻った。どうやら、求めていた答えとは違わらしい。オルレスはヴァンと衛兵に、少し部屋から離れているように言った。二人は大人しく従った。

「私もまだ、何とも言えない。ただ、これだけは言っておこう。レンとツスクールには目を光らせておいてくれ」

「あんたといい、ギルド長といい、何をそこまで二人を疑う？」

オルレスは答えず、目を逸した。やがて、ふうと息を吹いたら、面を上げた。

「君の家族はともかく、君の家族を助けた二人はあまりにも得体が知れなさすぎる。自分でも過剰に反応していると自覚しているが、時期が時期だからね。ただ、私の言ったことは一応、せめて頭の片隅ぐらいにでも置いてくれ」

エドワードは承知したと頷いた。気持ちは解らないこともないが、見も知らぬ他人を数に勝る相手に挑んだ二人を疑う気にはあまりなれなかった。とはいえ、自身で引つかかる点があるのも否定できない。一応、オルレスの助言どおり、頭の片隅には置いておこう。

「それと。明後日、配達の仕事を頼まれてくれないかね？ 君のすべき事のためにも」

「ああ、わかった」

エドワードは部屋から出て、立ちすくむヴァンと連れて、階段を降りた。ヴァンは特に聞いてこなかった。聞かないほうがいい気がしたからだ。

大理石をふんだんに使った執政院ラーダの幾つもの受付窓口がある階下まで来た時、なんと執政院ラーダ長ヴィズルがいた。長い髪と長く蓄えられた髭が特徴であり、うだつの上がない身寄りの無い靴職人にしか過ぎなかったが、今や立派に国を治める長である。

齢六十になるが衰えはみえず、壮健であり、遠くを見つめている瞳が印象的。ヴィズルは二人の方を見た。エドワードとヴァンは身を固めた。相手が権力者であるのも理由だが、エドワードにはヴァンとは別の訳があった。ヴィズルが冒険者を見た時の眼には、得体の知れない圧迫感が一瞬、度々感じられた。

ヴィズルは二人に歩み寄り、一礼した。

「どうも、ウォル・エドワード。お元気そうでなにより。そして、ヴァンと申しましたな。代表としてあなたとあなた方一家の来訪を歓迎致します」

思わぬ言葉に二人は面食らい、ヴァンはいえいえ、どうもどうもとたじたじしていた。ヴィズルはエドワードを見て、にこりと微笑み、一歩近寄り耳打ちした。「首尾はどうだ？」エドワードは答えず一歩下がり、ゲンエモンに教えられたとおりの目上に対する挨拶を返し、

そそくさと執政院ラーダを後にした。

執政院を出たら、ヴァンは半ば興奮した様子で喋った。

「驚きましたよ！ 一介の国の権力者があんな風に頭を下げて、話しかけてくれるなんて」

「一応、あの人は市民代表であつて、国王ではない。制度に関しちやにためんはあるが、違うといえれば違う」

エドワードは周囲を見渡した。怪しそうな奴はいない。エドワードの態度をいぶかしみ、遂にヴァンは聞いてみた。

「オルレスさんといい、ラーダ長といい、何をこそこそされているのですか。これから、家族になるのに」

エドワードは首を振った。「すまん、ヴァン。今は言えん。一つ言えるのは、俺がするべきことはエクウウスの復興以外にも、やるべき事が増えてしまったとしか言えん。後は言いたくない。君と家族の為にも」

言えないではなく言いたくないと言われて、不満を露にヴァンは口をむつと閉ざした。そう、大きな事をやろうとすれば、付随して他にもやるべきことが増えるとゲンエモンは教えてくれた。ゲンエモンの言った通り、正にその状況ではあるが投げ出す訳にはいかない。これも、父や亡き者たちの想い、自らの大願を果たす為に必要な物として背負う覚悟はできた。

エドワードは話題を変えて、家はとうすると聞いた。ヴァンはゲルを造ると答えた。

「ゲルのことは父から聞いていました。住んだことはありませんが、彼女と共にならどんな場所でもいいでもですよ」

「おいおい、ゲルをなんだと思っている。そんな住みにくそうな物言いは納得できんな。よし、決めた！ 甥の祝日も兼ねて、私が迷宮から材料となる物を取って来よう。全ては無理だから、木材はいくばくか君が調達しておいてくれ。つてと金はなんとかするから。金は返さなくていい。これは、私の家族への贈り物だからだ。馬と羊、牛など家畜も用意しよう」

「エドワード……兄さん。ありがとうございます」

ヴァンは先ほどの置いてけぼり感は忘れて、心からエドワードの申し出に感謝を述べた。

エドワードは長鳴鶏の館に待ち、帰ってきたメンバー五人に家族のゲル造りのため、迷宮から資材調達するのを協力してくれと頼んだ。五人はあっさり引き受けた。ゲル以外にも、誰彼の建築や服飾品作りのため、迷宮から資材を調達するのは始めてではない。ましてや、リーダーであり、仲間である彼の心意からの頼みとあらば、断れるはずもない。

「実は二つ作ろうかと考えている」

ちよつと待てとコルトンが手を挙げた。

「他に誰の為に作ろうというのだ」

「もちろん、俺たちの分もだ。前から考えていた」

「それは、無理じゃない」とアクリヴィ。

「確か約束では、あくまでエクウウスとカルツバスなる者たちのみ、例外的にゲル造りの許可を許すとあるけど、私たち冒険者が勝手に家を持つのは禁じられている。家賃を払うのなら別だけどね」

「そうだが、深い関わり合いの持つ関係者なら、許されるはずだ。その方が宿代も浮く。大切な物は今まで通り、宿に預けておけばいいし、風呂には来たい時に来ればいい」

一見、合理的で得に思えた。しかし、長い付き合い同士のある者たち。彼らはエドワードの考えていることが読めた。コルトンが問うように言う。

「お前、ひよつとしなくても、家族と暮らしたいのか？」

隠し立てることではない。エドワードは素直に打ち明けた。

「それもある。それもあるが、俺だけがこのまま宿でいいのか。いくら、仕事で便利だからといって、正直、ゲルより暮らしやすいかもしくない居場所。頑丈な壁に囲まれた中にある安全な建物で、俺だけが寝ていいのかと以前から思っていた。どうしようもないことだと割り切ろうとしたが、どうにも割り切れなくてな。家族が来た今、これを機に、生活の一部でもいいから、昔の生活に戻ろうかと考えていた。だが、それだと、お前達はどうでもいいと言っていることになら

ないか。自分だけがぬくぬくと家族と寝るか、仲間と寝るか。我ながらしようもないことで迷ってなあ」

エドワードは慌てて、冒険を止める気ではないからなと付け加えた。

エドワードの気持ちをコルトンは解る気がした。屋根を共にするだけだが、それにより、エドワードはどちらかを重みに置き、選ばなかった方は口先だけで実際は大して思うところは無かった。そう思われてしまうのはでないかと恐れていた。だからこそ、ゲルを二つ作ろうと提案したのだった。

ジャンベはそんなことで悩んでいたのかと思ったが、もしも、エドワードが家族と寝床を共にするのを選んだら、少し寂しい気がした。ただ、一方でジャンベは安堵していた。英雄を目指し、戦でも先陣切って行く男でも、家族の事となれば急にしおらしく、どうしたものかと迷う姿を見て、エドワードも普通の人間だなと再認識した。

はつきりとコルトンは言った。

「エドワード、自分で決めろ。怪物退治や物を探ってくるのなら、俺たちがいくらでも相談に乗るが、こういう事では相談に乗れない」

皆、無言だった。ロディムはうんと首を動かしていたが、どちらでも良さそうだった。実際の所、家族を選んでも、彼らはエドワードを責める気は無かったし、文句を言う気も無い。彼が家族と寝床を共にするのを選んでも軟弱者呼ばわりはする気もない。十年間以上も思い続けていた者たちと出会えた気持ちを考えたら、むしろ当然に思えた。本人の気持ちの問題。本人が納得すれば良いこと。

「どちらかを選ぶかは置いて、明日、執政院ラーダに聞いておこう」とアクリヴィ。

そうである、話はそれからだ。執政院ラーダが許可さえすれば、万事解決。

翌朝、浮かない顔で執政院から出てくるホープマンズの六人がいた。予想通り、執政院は禁止の一言で突っぱねた。避難民に関しては特別認めるが、冒険者は認められない。避難民のより安全確保のため

とも言ってみたが、要求が通るはずもなく、ホープマンズが暮らすためのゲルは禁止。厳密に言えば有りなのだが、土地を持っても正式な国民ではないのでエトリア人より高い土地代や税金を払わなければならず、豊かどころか今の宿以上に金を取られるので、損するばかり。

結局、エドワードは寢床をどちらか一つを選ばなければならなかった。

このことはまず脇に置き、伐採する許可を得て、ついで紹介された腕の良い木こりを雇い、ヴァンと一緒に森へ向かわせた。

一階層と三階層を重点に資材を調達することにした。「守備兵たちと暇を潰してといてくれ」と、荷の見張り役にジャンベを地上に残し、出発。

鹿と狼、角牛をまずは狩る。一階では運よく出くわさず済んだものの、二階では問屋が卸さず、毒吹きアゲハ三匹がおでまし、誰も武器を抜くことなく、アクリヴィの威力を抑えた雷の術式で三匹はまとめて弾き飛ばされた。

三十分ぐらいして、ようやく本命である角鹿が登場。嬉しいことに、大型種だ。更に後方から攻撃的な性格で知られる角を持つ怒れる野牛を発見した。エドワードは二組に分けた。

エドワードはコルトンと組んで鹿を、野牛の方はアクリヴィ、マルシア、ロデイムの三人で挑む。

鹿の足取りはゆったりしていた。遠目で見ても、人間と思しき血が付いているのを見る限り、撃退して、恐らく逃亡するのを見て、人間をさして敵とは見てないようだ。油断していてくれるのはありがたかった。

エドワードはさつと矢を番え、真つ直ぐに射る。中型の大きさではあるが、見た目以上に張りは強い。鹿は頭を逸らし、矢を避けたが一本目は囷。エドワードは僅かに間を開けて、第二第三の矢を次々と連続で発射していた。頭を逸らした瞬間、大鹿の足、首筋、胴体には何本もの矢が突き刺さっていく。背後で猛牛が叫び、少し間を置いていかずちが轟き激しい打ちつける音を聞き、後方は既に決着が付いた

のを悟った。

喘ぎながら立ち上がるとうとする大鹿の額に、エドワードは無言で至近距離から矢を射かけた。

後ろでは真っ黒に頭が焦げた野牛に集まる三人がいた。アクリヴィが不敵な笑みをみせた。

「まずは上々ね」

ナイフで皮を剥いたら、即座に別の獲物を探した。彼らは決して油断せず、常に適切な戦術を取り、一体一体確実に仕留めた。ゲンエモンや先輩の冒険者たちに口を酸っぱくして、樹海生物に隙を見せるなと教えられたのもあるけど、強くなったと慢心し、少なからず痛い目を見た経験があるので、一階層の怪物だからといって、手を抜かなかったし、相手が油断せず全力で襲いかかればそんな余裕は自然と消え失せる。

三階も通過し、魔狼発生源の一つである四階に降りた。もう一つはスノードリフトが稀に見られる五階。

四階に降りて間もなく、森の破壊者と随分と気取った名前で呼ばれたりもする熊の獣人が草陰から出現したが、エドワードの矢であえなく胸板を貫かれて、留めにロデイムの長剣で頭をかち割られた。ロデイムは自慢げな表情で剣の血を拭った。

「見え見えなんだよ雑魚が」

「そうか。なら、これから来る相手を全部仕留めれるよな？」

おうよとロデイムが言う前にエドワードは獣人の喉元をナイフで切りつけ、ついで矢も引き抜いた。死んだばかりなので血がよく流れる。「アクリヴィ、極力氷以外の術式の使用は避けてくれ。毛皮を傷つけたくない」了解とアクリヴィはレイピアを抜いた。

マルシアを除く四人がかりで死体を開けた場所に移動した。下半身を持ち上げていたので、引きずられていた上半身から血が流れて臭いを拡散できた。後は待つのみ。

やがて、一頭の狼が現れて、うおんと吠えた。無駄に姿を隠してくるのは判断したのか。羊ほどの大きさもある白い魔狼の群れが木々の間を抜けて、五人を囲み、範囲を徐々に狭めてきた。ロデイムは右

に長剣を左に短い手斧を持ち、エドワードは矢を番え、アクリヴィはレイピアを握りしめた。

「姫を頼むわよ」アクリヴィに言われて、コルトンは大盾を構え、マルシアの前に行き、ロデウムとアクリヴィはコルトンより前の位置で左右に離れて、エドワードは盾に隠れた二人の後ろに回った。

またも、一頭がうおんと吠えて、狼の足取りがにわかには速まった。大ききからして、間違いなく頭目はロデウムとマルシアが向く方向にいる一頭。後ろは全部任せるとエドワードは言った。

「先手必勝！」

エドワードは矢を放ち、一頭の眉間を貫いた。か細い小さな悲鳴が戦闘開始音の合図となり、魔狼の群れは襲いかかってきた。ぶーんぶーんとけたたましく弦が震える度、狼は頭か胸、足に矢が立ち、戦闘能力と機動を奪う。ロデウムは剣を棒切れのように振るい、魔狼を次から次へと薙ぎ、返す斧で止めを刺し、あるいは剣で仕留めそこなった狼を斬り、先端の槍で狼の勢いを利用して突き立てた。

アクリヴィは一撃で仕留めようとは思わず、時折り、最低威力の水の術式で驚かしては、目や顔、足を切りつけて戦う力を失わせて、それらはロデウム、時にコルトン、長い棘だらけで先が尖った槍に近い鉄製の棒を持つマルシアが仕留めた。

大体一二頭が倒れた辺りで、頭目自らが戦場に立ち、浮き足立つ群れが活気を吹き返した。エドワードとロデウムが叫び、エドワードは前に回る。コルトンは急いで盾を後ろに回した。エドワードは黄色い印が付いたショックオイルの瓶に鏃を突っ込み、射る。狙いは正確だったが、伊達に戦いなれてなく、頭目は易々と避けて、木に当たった矢から電流が爆ぜても動じなかった。

頭目は身を低くして、弾丸のごとき勢いで接近した。エドワードは弓を下ろして、左手をだらりと足に沿わした。頭目が飛びかかる距離まで来た頃を見計らい、目にも留まらぬ速さで下した左手からナイフを投げ付け、ナイフは頭目の足に突き刺さった。地団駄を踏む頭目に今度はロデウムが手斧を投擲し、頭目の肩をざっくりと抉り、止めはロデウムが長剣で頭目の開けた口に深々と剣を突っ込んだ。

頭目が倒れるや、群れは四散した。しかし、少しでも毛皮が欲しいので追撃した。エドワードは残る矢を打ちまくり更に数体倒し、アクリヴィは拡散範囲を凝縮した強敵相手のタイマンを意識した極細な絶対零度に近い氷の術式を両腕から放ち、二体の狼を一瞬にして凍り付け。マルシアは棒を思い切り投げて、一体を背中から地面へ串付けてやった。

仕留めた魔狼の血を嗅ぎつけて、獲物が罠に飛び込んでくるのを待ち構えたが、他の魔狼の群れは相手を少数だと侮らず、死んで皮を剥ぎ取られた魔狼たちの死体と同種の流れた血の臭いの多さを嗅いで、これ程までの相手と戦い勝って生き残れた強敵と見て警戒し、迂闊に仕掛けてくることはなく。たまに吠えて威嚇してくる魔狼しかおらず、こちらから出向いて仕留める必要があり、以降の戦闘では精々四頭しか倒せなかった。

ロディムは足りるのかとエドワードに聞いた。

「狼の皮だけで家を建てるとしたら、ここらのを根絶する必要があるんじゃないかねえか？」

「まさか。狼の毛皮だけでは足りない。他にも羊やヤギの毛を使う。それは他の一家に貸してもらおうが。狼の毛皮を使うのは、少しでも他の者たちの負担を減らしたいからだ。羊とヤギの毛も財産だからな。足りなければ最悪、別の一行から買えばいい」

一旦、区切りをつけて地上に帰り、毛皮の管理はジャンベに任せて、五人は三階層に潜った。三階層では極力戦闘を避けて、家具やゲルを彩る装飾や調度家具品に使える鉱物や植物、彩色の材料になる物を採取。ついで、諦めず執拗に追いかけてきたワーム二匹とカエル一匹から採れる物も得た。

地上に帰ったら、エドワードは当てがあると言い、ワームとカエルから得た物を持ってシリカ商店に向かった。店の付近で待ち構えて、立ち寄る一階層探索組の冒険者たちに片っ端から声をかけ、冒険者御用達店の相場である八五エンよりも高い百エンで、ごわごわした皮を七百エンで計七枚入手した。

買い取った冒険者たちには、固く口止めをしておいた。シリカの罵

声を浴びせられたくない。

これだけでは足りないのです、外にいる一族の者たちからも材料を幾許か譲ってもらった。事情を話したら、ティノフェなどは喜んで譲ってくれた。

「あんたは俺たちを救い、人の誇りを取り戻してくれた。こんな程度で俺たちの恩が返せたと思うなよ」

「いや、これで十分すぎるぐらいだよ」

「それにしても、ようやくだな。あんたもようやく、自分の家族と寝られる訳だな」

笑顔で話しかけるティノフェに、エドワードも笑みを返した。

彼らには、大人になっても家族と暮らし、寝床を共にするのは普通だった。根無し草ともいえる厳しい放浪生活を生きるには、友人の付き合いも大事だが、親類縁者とのお付き合いがなんにもまして大切だから。

しかし、エドワードは決めていた。本当に自分達だけで暮らしているだけの人と財産が増えるまでは、家族が来ても、寝床を共にしない頭では分かっている。心では十年ぶりに会った家族と寝たい気持ちがあった。義兄弟であるヴァンと語らい、甥に物事を教え、妹と母と食事をしたい。だが、そうしてしまったら、今のままでもいい。昔、決意した事が揺らいでしまうのではないかと怖かった。

考えてもらちがあかない。一旦、ブケファラスに乗り、馬に身を委ねて、馬の足の赴くままに駆け回ろう。

手綱を引き、一声かけて、黒き悍馬が大地をゆく。真夏のカラツとした日差しを浴びながら、浴びる風は気持ち良い。馬の筋肉が鼓動し、大地を強く蹴る振動が何度も伝わり、そのたびに段々と頭が空っぽになっていき、一族や冒険がどうか、数多の考え事から解放されていき、落ち着いて考えられるようになった。

ブケは解っていたのか、踵を返し、離れて行った方向へと方向転換する。日が沈みかけた頃には、戻れた。ぎりぎりだったが、門番は通してくれた。

エドワードはブケから降りると、顔や首筋を撫でて、ブケの目を見

てを褒めた。

「あいつらが人の最良の友なら、お前は馬の中で最も最良の友だ。おかげで頭が冷えた」

ブケファラスは馬ひづめ館に預けた。宿に帰ったら、遅れて帰ったのを詫びて、すぐに自身の中で決めたことを告げた。

「今日は無理だが、家が完成したら、一日だけ家族と過ごさせてくれ」
「一日で良いのか？」とコルトン。エドワードはうんと微かに首を動かした。

「俺たちの探索はまだ終わってはいない。俺は目的を一つ果たせたが、復興はまだまだ完全とはいえないし、第一迷宮を踏破していない。多くの者が命を落とし、見知っている者たちも毎年何人か死んでいる。沢山の生き物の屍で築かれた世界樹の奥になにかがあるか。ここまで来て、見ずに引き返す事はできない。俺は世界樹の迷宮を踏破して英雄になる。その夢に変わりはない。だからいま、家族と過ごせば、確実に気持ち揺らいでしまう。しかし……しかしだ」

エドワードは少し遠くを見るような物悲しい目を見せた。

「自分の気持ちにふんぎりを付ける為にも、一日だけ過ごさせてくれ。後でと引き延ばして、二度と会えなくなる前に」

この言葉に仲間たちは同意した。職業柄、いつ何時死んでもおかしくない。一階層だからと油断したり、していなくても、今日会った魔狼の群れに喉仏を食いちぎられたベテランの冒険者も多くいる。死ぬ後悔を少しでも減らしたい気持ちは理解できた。

さすがに自分一人だけ休む訳にはいかないからと通常のローテーションを組みつつ、市民からの迷宮探索以外の依頼をできる限り引き受けて、時間があれば、エドワードはゲルの建築を手伝った。五日後、多くの者たちの協力もあり、無事に完成した。エトリア本都市離れた位置にまた一つ、厚い生地に覆われた白色円形の折り畳み式の家屋が一件増えた。

翌日にはエドワードたちが呼ばれ、エドワードは是非にとゲンエモンも招待した。ゲンエモンは大分、腰の調子が良くなり、リハビリにもなると快諾し、ウォル一家のゲルまで徒歩で来た。ゲル内部は鮮や

かな赤と黄の梁が中心から放射状に広がり、白い生地が絶妙なコントラストになり見る者の眼を惹きつけた。家具も一通り揃えてある。

エドワードはもちろん、五人も狼の匂いを嗅ぎ、採ってきた物が家屋やゲル内部の装飾や家の材料にきちんと使われているのを知り、さしにも喜びを隠せなかった。

ヴァンはフェドラとエウゲドロスの手を握り、そして、ひしと抱き締めた。

「楽しい事悲しい事。色んな事があるだろうが、私は今、人生で一番幸せだよ」

「なら、ヴァン。一番幸せだったと思える時を沢山作りましょう。どれが一番だったかわからなくなるぐらいにね」

ヴァンとフェドラは中に入り、エドワード、コルトン、アクリヴィ、ロデイルム、マルシア、ジャンベ、ゲンエモンにも礼を述べた。

「皆さんのお陰でやっと、スタート地点に立つことができました。これからは、家族と力を合わせて暮らしていきます」

雑談の後、他の一家も呼び寄せて、慎ましく四つの祝宴が開かれた。フェドラとヴァンが結ばれた祝い。新しい命が授けられた祝い。新しい家が建った祝い。最後にエドワードの正式な一六歳にするはずだった成人祝いがなされた。フェドラにより成人に迎えられた事への言祝ぎと戒めの言葉が送られて、馬と山羊、羊とラクダに友の証に頭を下げて、体を水で濡らした布で浄め、羊の毛を一部剃り、儀式は終わり。大昔では羊を生け贄に捧げていたが、いつしか無駄だという理由から、体毛をちよつと剃るだけで済まされた。

一通りの儀式を済ませたら、いよいよ宴会である。一人一人の器に馬乳酒が注がれて、行き渡ったら、エドワードが代表して乾杯と叫び、一息で飲み干した。食事が配られて、思い思いの面子で語らい、今日の祝福を贈られた者たちを中心に盛り上がった。

暇そうなエウゲドロスは、フェドラがあやし、ジャンベが遊び、時に歌って慰めた。

陽が落ちる頃、祝宴はおいとま。気を使い、エドワードを残して、ゲンエモンとホーパマンズの五人は本都市へ戻った。

初めのうちは片付けに集中していたが、それも終わり、一つ屋根の下に入った。中々話せなかった。武勇伝を語るのはどうかと思うし、この状況で血生臭い話をしたくなかった。それでも、ぼつりぼつりと仲間たちとの探索談や失敗に色を付けて面白おかしく話しているうちに何が合ったか少しづつ語り合い、お互いに苦労してきたことを知った。

付き合って間もないが、ヴァンは本当に気の良い奴だと再認識した。彼ならば、妹を幸せにできる。願わくば、二人の仲がいつまでも続くように。

夜、エウゲドロスが寝て、ヴァンとフェドラが甥に寄り添い、静かに寝息を立てた。起きているのはエウドラとエドワードのみ。星明りを取り込み、完全とはいえない暗闇がゲルを覆う。静謐な時間が続き、いつの間にか寝入るかと思いきや、エウドラが声を潜めて話した。「こうして、またあなたの顔を見て、話せる日が来るとは思いませんでした。エド、傍に来て」

エドワードが傍に行くと、エウドラは顔を触り、撫でるように肩から腕にかけて触れた。

「ゲロリオン。いえ、体付きは既にあの人を越えていますね」

逆に母は、記憶にある若い頃よりも、ずっとやせ細り、顔に皺が刻まれていた。身内でなければ、誰だか見分けがつきそうにない。

「本当は、あなたに冒険を止めてほしい。けれど、ゲンエモンさんや他の人から話は聞いています。あなたはもう、来る所まで来てしまった。母親である私がごねるのはかえって迷惑というもの。突き進みなさい、エドワード。己が道を信じて、あなたと運命を共にする者たちを頼り合いなさい。ですが、あなたの死を祈らせないでください。私の死をあなたが看取って下さい。約束できますか？」

できないとは言えない。状況によつては、母の死を看取れない。あるいは、自分が地下世界の中で深く、他の軀たちと同じ運命を辿り、どちらも見送れないかもしれない。そんなことは言えなかった。一言、「します」とだけ言った。

傍らには妹、もう片方には母。異なるのは甥と妹の婿がいることだ

が、些細な違いである。もしかたら、最後になるだろうし、数年後には当たり前になるかもしれない。この日のことが当たり前になるのを願いつつ、エドワードは目を閉じた。

二七話 エトリア生誕祭

晴れた日の翌朝、エドワードはロデウムとコルトンに剣の稽古をしないかと誘った。

「突然どうしたのだ」

「深い理由はない。ただ、ここ最近の俺はどうも、女々しいというか、芯がぶれている気がしてな。ちょうど、一時農閑期に入った訳だし、季節も真夏と身体を鍛えるにはうってつけ。ひとつ、己の心身を鍛え直して喝を入れようかと思った」

そういうことならと、二人は同意した。怪物対人ではなく、競い合うことにより、向上心が生まれる。そして、もっと強くなりたい、相手よりできるようになりたいと思ひ、身体を鍛えることにより、迷宮における生存率も上がるから、人と人で鍛え合うがほうがいいと先達の者たちの多くが言っていた。

人は多い方がいいだろうとコルトンが言い、ホープマンズ以外にも、グラデイウスの六人にも一声かけたら、ゲンエモンもついでにいかと付いて来た。用心して、ゲンエモンのパーティーメンバーであるメディック・ヘンリックも行くことにした。

彼はゲンエモンの仲間ではあるのだが、ニツツアやラクロワと比べたら、印象が薄い。話し方や素振りは普通。悪い人柄ではないのだが、濡れた感じの暗色な金髪と瘦けた頬、前髪で隠れ気味なギョロ目が見る者に良い印象を与えなかった。医術の腕前は確かであり、棒術やナイフ裁きもそれなりに心得ていて、戦闘の腕もまあまあ。暗い印象が災いし、個性と我の強い他の冒険者たちに押されて、金鹿の酒場で冒険にいかず暇を持て余していたところ、五年前に拾われる形でゲンエモンの仲間になった。

父親がエトリア人で母親は他国人だという事以外、エドワードらは知らなかった。ヘンリックは口を酸っぱくして注意した。

「良いですか、ゲンさん。素振りは許可しますが、私が止めと即座に止めてください。たかが腰痛と侮らないように。怪我一つも万病の二元。あなたが人からの介助で楽をしたければご勝手に。本来なら、念を押

して後二日休んでもらいたいくらいです」

「気持ち嬉しいがヘンリク。今のわしは体を動かした方が気持ち楽だ」

かくして、一四人と大所帯な一行は幅の広い河がある方角を目指して出発した。

乗馬の訓練もしようとゲンエモンの案で、ゲンエモンとエドワードは少し遅れて出発することにした。

迷惑をかけず、見られたくないのもあるが、水練で体を鍛えるためでもあった。体を鍛える一環、鎧武器も身に付けての行軍となり、傍目から見れば、恰好に統率が無い小規模な兵団に見えただろう。その点、さして武器や重たい防具をあまり付けないキアラやアクリヴィ、オールドリッチにマルシアは楽だった。

到着次第、コルトンはシショ。ロディムはベルナルド。ジャンベはカールロに弓術とナイフの扱い方を教えてもらい、マルシアはオールドリッチとヘンリクの三人で棒を打ち合う。コウシチは一人、幾つかの構えを取り、真剣を使って相手が目の前にいると想定した剣の素振りを行った。キアラは目下、木陰で正座しながら瞑想をしていた。

重たい装備身に付けた者同士の組合いは、シショがコルトンの盾と体格を生かした押しに負けた。ロディムとベルナルドでは、ロディムはすっかりベルナルドの素早さに翻弄され、鞭で軽く剣を持つ手を叩かれた。戦場や怪物相手ならば、ロディムのようないけないけどどんな戦い方は通じるだろうが、タイマンには向いてないとベルナルドは指摘した。三人の棒を打ち合う医師は、やはりオールドリッチが群を抜いていた。二人がかりでやつと同格に打ち合えた相手に、マルシアとヘンリクは素直に力量を認めた。

「怪我をさせてはいないだろうな？」

少々きつくこわいろを変えたロディムに、オールドリッチはせせら笑い、「お前さんのように力任せとは違う。俺を誰だと思っている。修練で無駄な怪我を負わせる間抜けな指導はせんさ」

ジャンベはカールロに礼を言くと、瞑想中のキアラに一声かけた。

「キアラさん、すみません。少し付き合ってもらいたいのですが」
キアラは目を開けて、おもむろにジャンベを見て、何故と問いかけた。

「いえいえ、前から気になってたことを試したかったですけど、中々やる機会がなくて。今日、あなたが来てくれて本当によかった。僕のしようと思っていることにお付き合いお願いできませんか？」
「で、何をするの。見てのとおり、私は他の人と違って、武闘派ではない」

「簡単なことです。僕は音を弾き、声を上げる。あなたは言霊を唱える。僕の演奏であなたの言霊を掻き消して、無効化できるか。それだけですよ」

キアラは顎に手を添えて考え込む姿勢をみせた。面を上げて、面白そうねと言った。

「いいわ。やってみなさい。ただし、何メートルか離れてね」

ジャンベはキアラに良いと言われるまで歩き、二十メートル位まで離れたら、止まれと命じた。

「私が鈴を鳴らすのを合図に言霊を唱える。あなたもその時、演奏をしなさい」

了解と言う前に、キアラはちりんと鈴を鳴らした。ざわざわと耳鳴りがし、足が重たくなつていく気がした。ジャンベは慌ててギターを下ろし、負けじと声を上げ、音を掻き鳴らした。キアラは眠たげな半目を一瞬、ギョツと開いたが、すぐに落ち着きを取り戻し、ぶつぶつと唱えた。自身の出す音を聞いているうちに耳鳴りは止み、鉛のように重たくなりつつあった足が軽くなってきた。

ジャンベは演奏しながら、ステップを適当に踏んでみた。足が問題なく動く。キアラがゆっくりと近づき、蚊でも払うように手の平を上下させ、止めると示した。

「その分だと、動けるようね。本気ではなかったとはいえ、私の言霊を打ち消せたようね」

「でも、前のマンティコアの喧噪やかましい状況では、あなたの呪術は普通に利いていましたよ」

「あれはあれ。そりゃ、でかい音で弱まるのは事実だけど、それだけじゃあ完全には防げない。音楽には力があるというけど、あながち間違っていないわね。世の中の儀式的な物の多くに音楽で精霊や神とかを歓迎することがあるけど、似たようなもの。ジャンベ、あなたは魂を込めてギターで音を紡ぎ、声も上げた。結果、私が念じて鈴を鳴らし、呪術を唱えるのと同じ効果を生み出した」

ジャンベはうんと首を傾げた。わからないことも無いが、非常に遠回しな表現でわかりづらかった。

「解りやすく言えば、自分のすることに対し、どれほどの意思と力を以て挑んだか。私は中途半端な気持ちであなたを束縛しようとした。対し、あなたは本気で挑み、魂を込めた演奏で私の弱い言霊の力を物理的にも完全に打ち消し、私の呪縛から逃れた。たったそれだけのこと」

キアラは溜め息を吐いて、上の空で独り言を呟いた。「こういう説明しにくい力は悪い事にも得てして大きく働くけど、最後は必ず良い奴の方に傾くのよね」

どういう意味か聞こうとしたが、キアラは無言で木陰に戻り、また静かに瞑想を始めた。オルドリツチが一人にしてやれとジャンベに言った。

「彼女はたまにこうなる。こんな時に不必要に声をかけたら、仲の良いシショでも、じろりと湿り気の帯びた上目使いで睨んでくる。俺も丸一日睨まれて、すっかり食欲を無くしちゃった日がある」

ジャンベはそれ以上余計なことを聞かず、キアラをそのままにしておいた。

一通りの稽古が住んだら、一休みをした。その間にゲンエモンとエドワードが馬を六頭率いて来た。馬を降りたゲンエモンの方へとコウシチは行き、手合わせを申しますと一礼した。

「急な奴だ。まあ、良かろう」

ゲンエモンは嬉々としてコウシチに木刀を渡した。二人は真剣時と同じくらい打ち合わせた。激しい剣戟ではなく、一刀二刀強烈に、真剣ならばつきりといってしまう勢いで木刀を打ち合わせた。時に

間合いを取り、詰め、一進一退の攻防を繰り返した。見応えのある勝負だったが、最後にはゲンエモンが途中で自らの負けを宣言した。

「止めだ止め！ 五十代後半の老骨には響くわい。お世辞抜きでコウシチよ、強くなった。全盛期のわしでも容易くは勝てんだろう」

「それもこれも、あなたの御指導あつてのこと」

「最初はそうだが、現在の力の多くは間違いなくお前の努力の賜物。胸に張るがよい。……息子なら、肩を抱いていたかもしれない」二人は互いに一礼をしあつた。

エドワードはこの光景を複雑な気持ちで眺めた。父と仰ぐ人が負けたのもそうだが、ゲンエモンはよく見たら、豊かな頭髮と髭には白髪が混じり、眼には烏の足跡が刻まれ、鼻にあるほうれい線も目立つ。改めて、ゲンエモンはお年寄りなんだなあと思つた。

一体、彼は何故、そこまでして世界樹の迷宮に拘るのか。師は納得のゆくまで洗いざらい探るのが目的だと語っていたが、どうも本心には思えない。エドワードやエトリア人らとは違い、ゲンエモンやコウシチ、アヤネにしろ、黄色いっぽい肌に黒目黒髪の者たちはどうも内心を語りたがらない。コウシチも詳しくは知らないと言ふし、師と、師と何か深い関係があると思われるアヤネが語ってくれるのを待つしかない。

「さあ、乗ろうや」とコルトンが叫ぶ。

乗馬指導に関しては、このメンバーどころかエトリアでもエドワードの右に出る者は中々いない。実戦形式がいいと、武装した格好でコルトンとシシヨーが乗り（重たいのでエドワードが手を貸した）、コウシチとベルナルド、カールロも乗った。

五人で周囲を散策した後、コルトンとシシヨーのみで全速力で走らせた。万が一にも備え、軽装のエドワードも並走した。コルトンは若干、危なっかしかったが、鎧を着たまま乗りこなせていた。シシヨーは文句なしの合格点。次にベルナルドとコウシチとカールロも走り、まあまあ上手く乗りこなせていた。

エドワードはコルトンとシシヨーを褒めた。

「二人とも中々だな。コルトンはちよつと危ないところもあったが、

大分、上手になったな。鎧を着た者が走ると絵になるな」

「数年にもなるかな。下手糞、馬を傷付けたいのかと言われていた日を思い出すと、あなたにそんな風に褒められる日が来るとは思わなかったよ」

シシヨーはしみじみと言い、馬の顔を撫でてやった。

次にそこそこ乗れるメンバーが馬の背にまたがった。アクリヴィ、マルシア、ジャンベ、オールドリッチ、ヘンリックだ。ロデイムは最後に回し、ゲンエモンは彼と付き合うと言い、キアラはあの状態でそっとしておいた。

さすがに武装した状態での全力疾走は無理なので、エドワードとブケファラスを先頭に、軽装でしばらく辺りをゆっくりと徘徊した。回っている間、残った者たちは雑談しあうか、素振りをしたり、コウシチとコルトンにシシヨーは鎧を着たまま河を泳いでいた。六人が戻ったら、一旦、昼飯を取ることにした。事前に果物と肉、ゲンエモンはおにぎりなるお米を球体状や三角形に形作った食べ物を持ってきていた。匂いを嗅ぎつけて、キアラもちやつかりきていた。

塩気が利いたおにぎりはよく動いた体に行き渡り、果物の果汁と井戸から組んだ清水が喉を潤す。肉を軽く炙り、頬張る。

しばし、キアラをならい、真夏の暑さを避けようと一同はばらばらになって木陰に隠れた。エドワードはゲンエモン、コウシチと共に地べたに座った。

「なんだか、昔思い出しますな」とエドワード。コウシチ、シシヨー、ラクロワ、ニツツアらと共に河を泳ぎ、競い合った日を思い出す。初めは嫌でたまらなかったが、長い期間をかけて、実戦などで鍛えたことが役立つ時の快感に満ちた感動。決して楽しい豊かな青春時代とはいえなかったが、悪くはなかった。

十数年近く。エトリアに来て、長い歳月が経ったものだ。人によっては、これほど居れば、第二の故郷といっても差し支えないだろうけど、エドワードはそう思えなかった。夢と希望、欲望に満ち溢れていた子供時代では気付けなかった自身の夢の重さ。必然的に関わることになる数々の重荷の多さを昔の自分が知ったら、投げ出していただ

ろうか。

ぼうつと河のせせらぎを眺めていたら、ゲンエモンがぼそりと話しかけた。

「突然だが、エドワードよ。裏で何をやっておる？」

驚かなかった。ゲンエモンの情報網は半端ない。どこかで引つかかってもおかしくはない。しかし、明かす訳にはいかない。

「申し訳ありません。いかにあなたであっても、話す訳にはいかないのです。コウシチもいますし」

「拙者、まつりごと政の類には興味はない。お主との仲だ。聞いたところで、べらべらと話さん」

「では、コウシチの言を信じ、掻い摘んでお教えしましょう。事実確認した後、道案内をして、私はある危険で大きな一芝居の役者の一員になる。抽象的でなにをおっしゃっているのかわからないでしょうが、私にはこれだけしか言えないのですよ」

ゲンエモンはうんと頷いた。

「構わんよ。わしにも話したくないことがある。厄介事を全て片付けたら、いつか自ずと語ってくれるのを待とう」

「話は打って変わりますが、今後の探索の予定は？」

「なんせ新しい階層だ。よく解らないことが多い上、怪物も強い。対抗するには体調をきちんと整えて、武器装備もいちいち揃えなければならんし、他の者たちと同じく、今はゆっくりと行くことにしている。そういうお前はどうかするのだ」

「俺も同じです。まあ、生誕祭の案内状を送る依頼が金鹿の酒場経由で執政院から来たので、その依頼を受けようかと」

そうかだとけゲンエモンは言った。実は案内状を送るのは建前に過ぎないのだが、一番察しが良さそうな人に気付かれないのは幸い。よしとゲンエモンは立ち上がり、剣の稽古をしようと誘った。

「弓や馬術では一步譲っても、剣の腕前ではまだ衰えてないのを見せてやろう。お前さんがどの程度、鍛え上げているのかも見たい」

「手加減はしませんよ」

エドワードは実に数年ぶり、ゲンエモンと剣の試合をした。休んで

いた者たちがこぞつて外野に回り、二人の打ち合いを見物した。ゲンエモンは攻めて攻めまくり、エドワードは防戦一方であったが、たまに鋭く大胆な一撃を入れて、ゲンエモンの剣先を緩ませて反撃に転じてみせた。非常に長い、良い試合だった。六分後には遂にエドワードが一本取られて負けた。

エドワードはひりひりと痛む左手の甲を抑えた。手甲も付けていたので軽い痛みで済んだものの、木刀ではなく真剣なら鉄で出来ていた手甲ごと手首が血飛沫と共に地面に落ちていただろう。

「参りました。剣ではまだまだ敵いませんな」

どうだと微笑みながらも、ゲンエモンはエドワードの成長を認めた。

「いや、わしも危なかった。後一年か半年もすれば、立場が逆転するかもしれない。では、今度はわしからお前さんに弓と馬術を教えてもらう番だ」

*
—
*

十月一日、全エトリア人には待ちに待った日。次なる年の豊穰祝いとエトリア国家の誕生祝いも兼ねたエトリア生誕祭の開催。祭りは四日に渡り催される。

豊穰祝いが始まる前にエドワードはオルレスに呼び出されていた。

エドワードはゲンエモンに言ったとおり、エトリアの方々と近隣諸国にまで入り、地図が無くとも頭の中にしつかりと地形を叩き込んだ。その間、五階層の探索は手付かずの状況であったが、案内状を送る依頼の報酬は普通に探索するより実入りが良かったので、文句を言う者はいなかった。完璧に記憶したのを知り、オルレスはエドワードに満足げな表情を見せた。

「エドワード君、よくやった。君の記憶力と行動力、決意は賞賛に値する。後は最後のテストをクリアするのみ。それまでの間、ゆつくりとご家族と仲間たちと祭りを楽しむがいいさ」

「祭りの間は大丈夫なのか？」

「それぞれの国には、連合の平和維持の為、他国を拠点に我らに情報をもたらしてくれる諜報員や協力者などがある。彼らが調べうる限り

では、賊どもは今の所、目立った活動はしていないらしい。生誕祭開催中に襲来する可能性は低い。行く前にひとつ、聞きたいことがある。あの二人はどうかね？」

あの二人とは、レンとツスクルのことだろう。エドワードは首を振り、大しておかしな様子を見せていないとオルレスに伝えた。

「二つ言えるのは、恐ろしくスピードが早いことだ。もう、三階層に到達したようだ。しかも、たった二人で。本人たちは戦闘を極力避けているからと言いつつ、相当腕前が立ちそうな二人だ。並の樹海生物では歯が立たんだろう」

エドワードは言うべきか迷ったが、オルレスに二人に関することから些細な事でもいいから教えてくれと言われて、約束していたので、教えておいた。

二人は人付き合いに関して消極的であること。人脈作りは冒険の成否どころか生死に関わることもあり、積極的に挨拶ぐらいはしといたほうが良さそうなのに、二人は他人と顔を合わそうとせず、目立たぬよう、街の陰から陰へと移動しているみたいである。エドワードも滅多なことでは二人に会わなかった。最後に会ったのは二三日前で、道を通りすぎりに会い、こちらから呼び止めて、短い会話をした程度。三階層到達はその時、レンの口から直接聞いた。ツスクルは相変わらず無愛想に無口であった。

「気に留めるほどでもないだろうが、ゲンさんとは一度も顔を合わせない。二人が来たばかりの頃から大分経つが、互いに顔すらも認識していない。何故だろうか」

オルレスはさあと言いつつ、エドワードの背を見送った。

レンとツスクルは話を聞く限り、白とも黒とも言い難い。オルレスはエドワードに伝えていないことがあった。人目を盗み、隼などに手紙を括りつけて輸送しているのを衛兵の一人が目撃していた。衛兵の証言はあやふやで、カースメーカー特有の黒や茶のフードマントを着ており、人相風体も確かとは言えなかったが、二人の背丈からして、オルレスは例の二人だと睨んでいた。

人付き合いを避けるのはともかく、武を志す者として、ゲンエモン

など腕の良い武芸者達ともっと会ってもいいはず。本人も自ら鍛えるとのたまっていたようだから、他の者と手合わせしたいとか、話を聞きたいと思うはずなのでは。人には人の考えがある。本人なりの考えがあり、そうしているのなら、誰かに迷惑をかけている訳でもないし、否定もできない。

世界樹の迷宮はもちろん、エトリアでの人の繋がり。地形。街角にある穴場の数をゲンエモンは自分以上に知っており、綱もある。しかし、ゲンエモンほど太いパイプを持つ人物ですら、二人をあまり認識していない事実をオルレスは酷く不安がった。

かくいうオルレスも二人とは直接の面識が無い為、どうにもならず、罪を犯したわけでもないから、執政院ラーダにも呼びつけられない。以前、適当な理由を付けて呼び出そうとしたら、エトリアの法律を列挙して、超越行為を市民に知らせてもいいとさりげに脅しも添えて手紙を突っ返されたので、迂闊に呼び出せない。しばし、密かな監視を続けるほかなかった。

偶然通りかかり、エドワードの家族を助けた。この話を聞いた時から、オルレスは二人を怪しんでいた。一方、当の本人はあまり二人を疑っていなかった。衛兵からの呼びかけで、オルレスは豊穰祝いに参加する時間が来たのを知った。堅苦しい白い衣装を脱ぎ、灰色のローブをまとおう。

今年が雨雲班であり、オルレスは自らの不運を嘆いた。風邪をひかなければいいけど。

一日目は豊穰祝い、二日目以降は生誕祭という名のお祭り騒ぎ。エトリア人のみで行われるため、派手に装飾しているわりには、街は静かである。他国の者たちへの配慮で、この日は本都市から離れた町村の宿に泊まるか、もしくはエトリア側が支給した仮説宿営地で待機していた。緑ローブ、黄ローブ、灰色ローブに別れた一団を冒険者などの他国の者らは、窓からじっと眺めていた。緑は大地、黄は太陽、灰色は雨雲をイメージ。三色のローブを着て、エトリアの土地に住む数多の精霊や土地神たちに今年も農作物が取れたことへのお礼、来年の豊穰を願い奉る。

黄ローブの者たちは、ローブを着ている事自体が祈り届けていることになる為、何かを持ったり、する必要は無かったが、緑と灰色は違う。緑ローブの者たちは土が入った容器を肌身話さず持ち続け、灰色ローブの者たちは水を被り、終わるまでぐっしより濡れた衣服を着続けなければいけない。エドワードは、オルレスが嫌がる気持ちも理解できた。

外壁の外ではエトリアの首脳陣が挨拶をして、それぞれのローブの長が代表となり、精霊と土地神へ一字一句間違わずに祈りと感謝の言葉を捧げる。他の者たちも長に倣い、輪唱する。

一通りの儀式が終わった後、今度は武装した一団が本都市に入り、世界樹の巨木を目指して行軍しだした。

一軍の先頭に行くのは、ドナ・A・トルヌウアの他、武器屋の少女店主シリカまでいる。ドナは女傑アジロナの子孫であり、エトリアが国として成立する前、古くから住んでいた民族の末裔でもある。世界樹を神と崇める一族が存在しており、詳しく書かれたエトリア伝承では、賢者が地上に現れるよりも前、神を我が物にせんと、無謀にも一族総出で巨躯なる三竜に戦いを挑み、根絶やしにされたと記述されていたが、実際には一握りの者たちが生き残り、今日まで細々と生き延びていた。アジロナの血は引いてないが、シリカと祖父母は原住民の血を受け継いでいた。

エトリア人には大切な行事でも、そうではない冒険者には、退屈極まりない一日。当然、四日間はエトリア側から迷宮禁足の札を貼られてしまう。アクリヴィは興味津々といった風情で、マルシアも乗り気だったが、男四人は退屈していた。

祭りの一日目は本当に暇だ。手帳に記録したことを見直したり、雑務をこなしたり、レットドユニテイの者たちと情報交換をしつつ、雑談も交えて時間を潰した。早いところ、馬鹿騒ぎが待ち遠しい。

翌日はからっとした晴天で、祭りには絶好の日和。豊穰祝いの効果があったかと、エドワードは思った。

長鳴鶏の館の部屋には、椅子に座ってパイプの煙をくゆらすコルト

ン以外、誰もいなかった。祭りの日に合わせ、探索のみならず、引越しを手伝って欲しいなど本都市や周辺の町村の依頼も受けて、金銭的余裕が生まれた。一人、千八百エンまでの無駄使いなら良いとエドワード自ら許可した。千八百以上は自腹を切れと加えていた。

ロデームはマルシア、アクリヴィの三人で行き、ジャンベはバジリオら若い連中と同行したと、コルトンはエドワードに説明した。コルトンは窓の外を眺めた。

「俺は気が向いたら、適当にそこらの露店でも冷やかしにいくよ。外は人でごった返しているからな」

エトリアは今、大勢の人で賑わっていた。ありとあらゆる国から人が来ており、様々な国や地方の特色を表した服装を着た異国の者たちが飾り付けた都市をより一層きらびやかなものにしていった。白い顔もいれば、黒い顔、赤っぽい顔から黄色い顔の者もいる。随所で旗揚げされた、緑の布地に黄色く樹の模様染め抜かれたエトリアの国旗が歓迎するようにはためている。

建物と建物の間には、一般の者たちが自由に創作した大小様々な提灯が建物同士に結ばれた綱からぶら下がっている。侍たちが普通の形と呼ぶ者もあれば、等身大の騎士を象った者から、ドラゴンに悪魔、かぼちやを人の顔にくりぬき虚ろな笑みを浮かべた不気味な提灯まである。

所狭しにエトリア人と異国人の露店が並び立ち、いつもの買い物市とは比べ物にならない艶やかな装飾をし、店主と店員、丁稚たちの威勢の啖呵が轟き、負けず劣らず群衆の声が更なる交響を生み出している。

今日ばかりは冒険者たちも冒険には行かない。どちらにせよ、要望・要請が無い限り、三日間は迷宮へと足を踏み入れてはならないと執政院リーダーが通達していた。祭りの中、血と汗臭い連中に通行されてはたまったものではないから。

「俺も楽しむか」と言つて、エドワードも祭りを満喫することにした。午後の祝宴の演奏には、ジャンベも参加する。それまではぶらぶらと、エドワードは流れに身を任せて歩いた。人々の活性に気圧されつ

つも、アクリヴィたちやジャンベらは楽しんでいるのだろうかと思つた。

その頃、マルシアとアクリヴィを連れて祭りを散策していたロディムは少々不満だった。てつきり、二人きりになるのを期待していたが、アクリヴィが行くと言ひ、マルシアも喜んで一緒に行きましようと言つたので断れるはずもなく、ロディムは同意した。どちらにせよ、相手がアクリヴィでは、自分がいくら言葉を並べても、言い負かされるのは目に見えていた。

本人を象徴したかのようなふわりとした緩やかな黄金色の髪、新緑の瞳がたおやかに微笑む白衣の美女。

美形と言えないことも無いが、真夏で暑いから、リネンの薄めなシャツを着ており、そのせいで余計に鍛えられた肉体が目立つ、尖がつたまなじりと金髪ロングストレートの大女。

デートに見えなくもないが、双方のアンバランスさで奇妙である。サンダル履き、茶色のだぶついたズボンに上着という出で立ちの自分は、さしずめ身分の良い姉妹二人のお付き人に見られているかもしれない。

実際、そのとおりであり、他国の物売りに呼び止められた際、商売人は二人のほうばかりに喋りかけ、ロディムを見向きもせず。しまいには、凡夫に荷物を持たせればいとまで言われてしまった。商売人の発言に切れたロディムは喉に金を詰まらせて死んでろと罵声を浴びせたら、ロディムは早足で立ち去り、二人も少し遅れて後を付いた。「黙って去れば、少しは格好が付いたのに。安い悪口は自分の育ちが悪いと言つてるようなもの」とアクリヴィ。ロディムはぴくぴくと頬を引きつらせた。

「じゃあ、なにか気の利かした言い回しをお教えしてくれないか、学者さんよう?」

「色々あるけど、言いたい奴には言わしておけばいいと言っておくわ。人を外見で決めつけるあの商売の方がもっと質が悪いから、安心しなさい」

どういう意味だと問い返そうとしたら、マルシアが二人の間に割つ

て入り、にっこりと微笑んだ。

「せっかくの縁日ですし、いがみ合うのはやめましょう？　ねっ」

同性から見ても、素直に綺麗で可愛いと思える美人。そんな人に微笑まれては、ロデイル然り、大抵の男はそうかと引き下がる。

ロデイルは機嫌が良くなったが、直後にまた、少々気が悪くなることが起きた。

マルシアは紫模様で統一されたエスニック風の露天喫茶を指し、一息付こうと言い、ロデイルは喜んでと答え、アクリヴィは会釈した。店の奥では肉と野菜が所狭しに並び、客の注文に合わせて、店員が濃い調味料とトッピングした料理を提供していた。

グラディウスのベルナルドとカールロが露天喫茶にたむろしており、サイコロで遊んでいた。二人はよくつるんでいることが多く、数字を元にして競い合うのを好んでいた。席が一杯であり、どうしようかと思渡していたら、ベルナルドは三人に手を振った。今回もまた、ゲームをしていたらしく、カールロはロデイルをいぶかしみ、ベルナルドはようしと小さくガッツポーズをし、ようと声をかけた。

「両手に花とは良いご身分だな」

「それより、なんか嬉しそうだな。俺たちと会えてそんなに嬉しいのか」

「賭けをしていたんだ。この店にいて、知り合いが九人来るまで待つ。男が多いか、女が多いかで賭けていた。今、女は計四人で、男はお前で計五人目。俺は男に賭けていた。だから、俺の勝ち」

さあとベルナルドはカールロに手を突き出した。カールロはああ、とだけこたえた。二人は食事代を賭けており、カールロは負けた。さっきのロデイルをいぶかしむ目付きには、そういう意味があったのかと知り、ロデイルは不快に思った。賭け事するのは勝手だが、対象にされた挙句、自分の存在を煙たがられるのは腹が立った。ロデイルは声を荒げた。

「用は済んだんだだろ。さあ、行った行った！」

「悪かったって」とへつらいながら、ベルナルドは五十の数字と森の絵が印刷された金券を三枚置いた。

「このマンゴーという果物は意外と美味しい。それ食って、機嫌を直してくれや。次行こうや、カールロ」

カールロも無言で立ち上がり、支払いを済ませた。許してやるかと、ロデームは溜まった不満を出すようにふんと鼻息を吹いた。二人に譲られた席に遠慮なく三人は座った。マルシアは思ったことを口にした。

「似ているわよね、あの二人」

「誰に」とアクリヴィ。

「エドワードとコルトン。カールロはエドワードをもつとブスツとした感じで、ベルナルドはコルトンをもつと軽薄にした感じだけ」

注文を取りに行くと、自ら席を立ててロデームがカウンターに向かった間、マルシアはアクリヴィに尋ねた。

「さつき、なんて言うつもりだったの？」

「奥手ボンクラ童貞くん。下には下がいる。まだあるけどやめておく」

酷い人と言いながら、顔は笑っていた。小悪魔めと思いながら、アクリヴィはマルシアを嫌いになれなかった。彼女の医師としての腕前、自らの職業から来る責任と意志の強さは知っていた。また、相手がモリビトであろうと、病人や怪我人に国境はないと処置をする心広き優しい一面も。強い力と父親的な威圧でロデームを大人しくさせているエドワードと異なり、彼女の前では自然と大人しくなる蛮人の態度も納得できる。

ロデームと店員が来た。ロデームは手に三つのマンゴーを持ち、店員は両手と頭に皿を載せていた。肉汁沸き立つ赤っぽい野菜料理、マンゴー、続いて店員は果物を絞った果汁入り木製カップも三つ置いた。

マンゴー代を除き、二つ合わせて二四〇エン。高くはなかった。味も良く、満足のゆく軽食だった。

食事を済ませたら、ぶらぶらと辺りを散策し、花桜の館に着いていた。紅葉をイメージした艶やかな着物のアヤネ女将、可愛らしい女性と逞しい男性のおもてなし、和洋折衷の宿。物珍しさに異国の者たち

が集まり、行き届いた接客に満足な表情をみせていた。係りの者をよく見たら、オールドリッチやコウシチなど、この宿を拠点にしている冒険者たちも手伝っていた。紫の着物のシシヨーは中々見栄え良かった。

キアラは黒い天幕に居座り、占いや人生相談をしていた。白い印象に身を包んでおり、頭には金細工のネックレスを身に付けて、紫の髪と色白な肌の透明さを際立たせていた。キアラの声と姿、淡いバイオレットの瞳に魅かれて、そこそこ客足があった。

熊のような髭面が目立つパスカルも商売していた。パスカルが啖呵を切り、小柄なヤルヴィネンが演奏で人を呼び、太つちよメディック・ティツグロが軍隊バチの軍隊バチの蜜入りタルを運び、褐色肌の美女ダマラスが杯に蜂蜜ジュースを注いでいた。

宿の入口近辺には、武装した連中もいた。エトリアの兵士もいれば、見慣れない格好の兵士もいる。

客が積極的に手伝いに回るなど、宿の質と女将の人柄が窺える光景である。アクリヴィイは、健康相談と書かれた天幕にいるオールドリッチに話しかけた。

「遊びに行かないの？ あの二人みたいに」

オールドリッチが答えた。「馬鹿騒ぎより、気の利いた者同士で過ごすのが性に合ってるんでね。やることもないし、普段、お世話になっている女将さんに恩返しをと。ただ働きじゃないさ。腕によりをかけた料理を振舞ってくれてるって約束したんだ」

コウシチは聞くまでもなかった。理由はオールドリッチ同様だが、ゲンエモンに引き取られて以来、アヤネは彼を実の息子のように接した。コウシチは親を知らず、アヤネを実の母のように慕い、祭りの手伝いも喜んで引き受けていた。

エトリアの兵士と他国の兵士がいる訳も聞いてみた。

「物好きな要人が数名、泊まりに来るんだとき。その打ち合わせていうか、来るまで暇だから、雑談でもしてるんだろ」

要人と聞いて、アクリヴィイは思い出した。昼間も過ぎる頃、各国の王や首相が祝いの為、来訪する。歓迎式典はアジロナ外壁の内側で行

われる。演奏もあり、その中には今朝、レッドユニティと遊びに行つたジャンベとバジリオも音楽隊の一員として参加するはず。人の流れもそちらへと向き始めていた。

「ジャンベも参加するらしいし、歓迎式に行かない？」

いいぜ、いいわよと二人は答えた。

ヴィズル以下、エトリア自衛軍総轄大隊長ミルティユーゴ、オルレスなど、執政院ラーダの主だった面子がお迎えの場に立っていた。

民衆は、自分達の国の首席や各国の主賓や行列がどんな物かと期待していたが、それ以上に楽しみなことがあった。山車^{だし}。飾屋台^{かざり}とも呼ばれる車輪付きの屋台である。

到着した各国の要人を、どおんと祝砲が雷のごとく轟き、直後、盛大にラツパが吹き鳴らされた。派手な装いの騎士や戦士に囲まれて、連合を中心にした各国の要人たちが集結した。ヴィズル長が一人一人に歓迎の意を述べ、頭を垂れた。

エドワードはここで、コルトンと出会い、アクリヴィら三人とも合流した。ジャンベが後列でヴァイオリンを弾いているのをエドワードが見つけた。赤い楽団の衣装は中々様になっていた。近くにはバジリオもいる。

言葉が国々の代表者たちの長い祝辞が終わり、高く造られた傍聴席を上り、いよいよ山車の登場である。

巨竜が三頭、現れた。暴虐な火竜、冷徹な氷竜、最凶な雷竜。作り物ではあるけど、精巧に作っており、鱗の一枚一枚まで再現されている。

火竜は火を吹き、氷竜は氷の息吹を模した白い綿毛を時折噴き出し、雷竜は身体のおちこちから、雇われたアルケミストらが極小に威力を抑えた雷の術式を放ち出す。中にいる何十人もが懸命に車輪を押し、回している。山車の一番手は毎年、三頭の巨竜が先導を率いるのが伝統になっている。

三頭の背にはそれぞれ、弓を持つ屈強な男と年老いた老人がいる。アルソールと彼に助言した賢者である。アルソール役が手に持つのは、サジタリウスの矢。錬金術師が生み出した最高にして最悪な兵器

だが、残りの矢は行方知らず。半ば伝説と化したもの。アルソール役の男たちは手を振りつつ、弓を射る仕草をして、賢者はアルソールに助言をしながら、簡単な手品も披露していた。

その後、続々と山車が通り過ぎていく。山車の上が舞台劇となる物や、単純に豪華絢爛さを追求したもので。山車の合間には道化師や手品師、曲芸師、音楽家までいる。歓迎の演奏が終わり、着替えたジャンベはバジリオと二人で五人にこっそり近づいた。エドワードとコルトンは察し、後ろを見たが、見てみぬふりをした。ジャンベは息を殺し、ロデイムの背をぽんと叩いた。

「うおっ!？」

ロデイムは驚きのあまり声を出した。ジャンベとバジリオ、エドワードとロデイムは笑い声を上げた。

「いくら人が多いからって、まだまだ甘いなロデイム」とコルトン。「うるせえやい!」ロデイムはジャンベの首に腕を回すと、こいつめと数回頭をはたき、ついでにバジリオの頭もひっぱたいた。

銀髪をさすりながら、バジリオは悪びれもせずになやけた面で言い訳した。「濡れ衣だ。見てただけで、なにもしていない」

「その時点で同罪だ」

では、これにてと、そそくさとバジリオは去った。

山車は、一日目は本都市をゆつくりと回り続ける。せつかく、六人が揃ったので、金鹿の酒場にでも行って食事をしようとマルシアは提案した。

道中も混雑していたが、金鹿の酒場の賑わいは想像を超えていた。店の外にまでびっしりと人が並んでいた。美人店主が経営する、味と値段が良い酒場の評判は他国の物見好きな耳に伝わっていたのか。ともかくにも、一時間では入れそうにない。今回はサクヤ女将も商売つ氣をみせて、来た客を逃すまいと、自ら外に出て、指でつまめる小さなお菓子を配り、サービスに勤めた。ホープマンズの所に来たら、エドワードに「忘れないでね」と耳打ちした。

エドワードは二つの約束をしていた。

一つは、明日は家族と遊ぶ約束。甥のエウゲドロスは少し、エド

ワードに慣れてきた。当初は全く懐いてくれず、近寄ろうともしなかったのを思えば、嬉しい限り。歳が近い子にも友達ができて、風評被害で苛めに遭ってないのも良かった。

そして、二つは荷運び。荷といっても、単なる手紙なのだが、腕の良いレンジャーで尚且つ馬も乗れる人物ということで、エドワードにご指名がかかった。商売上での女将の知り合いらしいが、詳しくは教えてくれなかった。使者を経由して、エドワードを名指しした。断る理由もなく、女将はできればとエドワードに頼んだ。

「祭りの四日目、夜遅くてもいいから、港に来てほしいと言っていたわ」

祭りの四日目、夜遅く。急な依頼だが、四日目は特に予定も無かったので、ブケの散歩と小遣い稼ぎにでもと気軽に引き受けた。四日目には数々の山車の到着地であり、二百発以上の花火も打ち上げられる予定。夜、一瞬だけ花開く巨大な芸術品を観るのは祭りを見に来た者たちにとって、最大の楽しみだった。家族とも会えるだろう。

結局、酒場の混雑具合で無理と判断し、適当な露店で飲み食いしつつ、長鳴鶏の館に戻った。

一方の身内とのお付き合いの次は、本当の身内との付き合い。エドワードは早朝、門を通り、ゲル内の家族に会いに行った。母エウドラがおはようと挨拶した。中と外にも、多くの者が寝泊まりしていた。基本、客人は歓迎という風習があり、この者たちは宿が取れなかったため、一族の者たちが寝床を分け与えていた。

「良き日和だ。エドや、エウゲドロスはもう少しで目覚める。それまで、喉を潤しなさい」

ゲル内では妹とフェドラ、夫のヴァンが迎えてくれた。ヴァンは眠たげな甥の顔を拭き、フェドラは炉で火をおこし、調理していた。今でも信じられない。妹の手料理を食べられようとは。

匂いを嗅ぎつけて、続々と他の者らも起き始めた。「食材をくれたの」とフェドラが説明した。

遠慮なしにお玉ですくって食べる者もいれば、自前で用意した物を

食べている者もいた。エドワードもお椀一杯分をもらった。朝日が昇り、活気がましてくる頃、寝泊りしていた者たちは出て行った。

「大変だったな」

「たまには、こんななにぎわうのも良いですよ。色んな話を聞けて、あの子にも良い経験になりましたしね」

ヴァンにはこやかに答えた。肌は日焼けし、元から逞しい体には更に筋肉が付き、頼もしくなった。妹と甥も幸せそうだし、二人が出会って本当に良かった。エドワードは約束通り、祭りの三日目は家族と一緒に過ごした。普段の殺伐とした光景は忘れ、思うがままに休暇と祭りを楽しんだ。母は精力が蘇り、曲がついていた腰が段々と伸びていき、昔のように真っ直ぐに立ち始めて、杖が要らなくなってきた。フェドラは来た頃よりも断然に表情が明るくなり、ヴァンには安心して家族を任せられる。甥は飲み込みが良く、同年齢の子より技術的には劣るとはいえ、馬術が上達してきた。

こんな時間がずっと続けばいいのに。そう思わずにはいられない。遊び疲れて、帰りではエウゲドロスをエドワードが二人に替わって背負った。小さく、脆そうだが、暖かさと脈打つ命を肌身で感じる。だが、線引きはしないといけない。これ以上は、自分にも良くないし、たまにならともかく、妹の家族の時間に自らが突っ込み過ぎるのはよくない。僅かに遊べる余裕はあるが、一族は完全に復興したとは言えないし、そこで産まれ育った者はこんなにも凄い、決して落ちぶれてはいない事を正銘する為にも来たのだから。

四人をゲルまで見送り、本都市にある館に戻ろうとしたエドワードに、フェドラが今更な注意をした。

「エドワード、見知らぬ人に付いて行ってしまつては駄目よ」

「子供ではないから、さすがにありませんよ」

「親にとつては、今がどんな地位や身形でも、子供はいつまで立っても子供なのよ。それに、あなたが裏でこそそしているのをゲンエモン様から聞いているのですよ」

これに関しては、余計なお世話と師匠に言いたかった。エドワードは母と妹、甥、義弟にお休みと言って別れた。

十月四日。祭りの最終日。

大量の山車が到着し、港町は最も賑わい、本都市のほうは少々人混みが薄れてきた。帰り支度をする者らも僅かに散見された。そろそろ、終宴を迎えつつある。館にある日時計を見なくても、太陽の位置からして、時間にして一三時頃と察した。港町ソロル・エトリアまでは徒歩で平均五時間。馬で行けば十分、間に合う。

今日もまた、コルトン一人しか部屋にいなかった。三日目の半ばで祭りに飽きたらしく、剣で素振りをしたり、人々の喧噪を眺めて退屈を凌いだ。コルトンは聞かせるようにぼやいた。

「こつちも平和だと、張り合いがないていうか。物足りないな。まあ、血生臭いのよりかはいいが」

エドワードはそうかとかだけ答え、行つてくると手を振った。「夜には帰つてこられるだろう。明日は早いぞ」

コルトンは気怠そうにおうと返事した。すっかり、ふ抜けているが、戦いとなれば人が変わったように働いてくれるのは知っている。いわば、力を溜めている状態。

金鹿の酒場に行き、女将から封筒に挟まれた手紙を受け取る。

「言うまでもないけど、手紙は見ないでね」

行つてらっしゃいと女将に見送られて、エドワードはブケファラスに乗り、港町を目指す。人が多くいる整備された道は避け、森沿いに沿つて移動した。例年と比べて幾分、人は少なかったが、こうして無事に祭りが開催されているのを見たら、何万もの盗賊に狙われている事とか、少し前にモリビトと合戦をしたのが嘘のように思える。

途中で小休止を挟みつつ、少し陽が傾いた頃、港町に到着した。これが最後だと、本都市並みに活気づいている。いつぞやのような、門兵たちによる嫌がらせもなく、無事に到着した。元冒険者であり、ゲンエモンと面識がある信頼がおける宿の番台に馬を預け、歩きで待ち合わせ場所の倉庫に向かう。エドワードはちらりと何度か振り返った。どうも、着けられている気がする。手紙の受け取り人だろうか。

人が多く、船着き場にある倉庫まで時間がかかった。山車が通り過ぎた後で、まだ人が多い、道を変えようとした矢先、もしと尾行者と

思しき人からが正面から近づき、声をかけた。派手な身形、胸元の開いた青いドレスにそそられるうなじ、豊かな金髪をまとめた髪、濃い化粧。一目で水商売の女だと解った。

「悪いが用事で来たのだ。他にもっと元気そうな連中とお盛んしてくれ」

「私にだって、人を選ぶ権利はある。あなたは他の男より遅しく、一途。そう思えたから声をかけたの」

女はじつと、青い眼でエドワードを見つめた。エドワードはじやあなど言つて、女を無視した。こんな女を喜んで抱く男の心情がいまいち理解できない。自由を忘れた者に魅力を感じない。とはいえ、金を稼ぐ方法がこれしかないのを思えば、多少、同情はした。しかし、ある一言がエドワードの興味を女に向けさせた。

「あなたの一族について知っていることがあると言つても？」

エドワードを女を一瞥した。鉄のような冷たい眼差しで睨まれて、たじろいだが、すぐに平静さを装った。着けていた時から思ったが、ただの商売女ではないらしい。

「ここは人が居すぎている。もつと、静かな場所に行きましょう」

妖艶な笑みを浮かべ、右手の親指と人差し指をくっ付けて歪な丸いマークをみせた。金を寄越せと言いたいのか。エドワードは母の注意を思い出したが、話を聞くだけ聞いてみることにした。下手な動きをみせたら、最悪、ナイフでもちらつかそう。この場慣れた感じの女がそれで引けばいいが。

二人は人目を避けて、どんどんと暗い路地裏に向かった。挟み撃ちされたら不味いなど思ったが、他に自分を見る目は感じない。余程気配を隠すのが上手いのか、女一人だけなのか。

ここで女は止まった。比較的表通りの近くである。何故と首を傾げつつ、女の動作を待つ。後ろを向いて、取り出す物があるからと女は言った。エドワードは断った。背後からぐっさりやられちゃたまらん。すると、「ならいいわ。知りたくなければこの話はなしよ」と強気に言い放った。もしかしたら、有益な話かもしれない。仕方なく、エドワードは離れて出すよう言った。これなら、対応できるはず。

六歩離れて、女に背を向けた。女が妙な動作をしても、対処できる
よう意識を集中した。そして、女は動いた。ただし、叫んでだ。女は
あらん限り、絹を裂くような悲鳴を上げた。このとまんまが自らの愚
かさを罵りつつ、振り返ったら、女は凄いい勢いで短刀を構えて突進し
てくる。構えから女が鍛えられた者だと一目で見抜ける。

頭よりも前に、窮地に身体が本能的に動いた。エドワードは体を横
に捻ってかわし、その勢いで女の横面を思い切り殴り飛ばす。女はナイ
フを手放した。女は石で舗装された路地にしたたかに頭をぶつけ、動
かなくなつた。エドワードはハッと、駆け寄り、女を抱き起こした。
殴られた勢いで頬と唇が裂けて歯が折れ、石にぶつけた際に額が割れ
て、血が流れている。それでも、息はあった。

「しつかりしろ。死なれちゃ困る。お前には話してもらうことが沢山
ありそうだしな」

悲鳴を聞きつけたのか、人が集まってきた。かなり不味い状況だ
が、下手な弁明は後だ。

「おい、医者を呼んでくれ！ 早く」

女は喘ぎながら、エドワードに話しかけた。

「く、薬を。腰の袋にあるわ。早くして、痛くて死にそう」

「塗るのか？ 飲むのか？ 痛みを止めるのか？」

女は三回とも首肯した。とにかく、万が一に備えた薬があるという
訳か。エドワードは女の腰を探り、袋の中身をぶちまけた。布に包ま
れた小瓶があり、液体が入ってる。

「塗るのか」

「塗って……飲ませて」

疑問に思わず、エドワードは女の額と頬に薬をかけ、最後にぐいと
飲ませた。避けた唇に薬が染みて、女はううと呻いたが、全て飲み干
した。

「さあ、終わりだ。次は傷を巻……」

「ええ、あなたの終わりよ」

女は引きつった笑みを浮かべた。避けた唇で笑っているため、非常
に痛々しい。どういう意味だと問いかけるも、女の異変を感じた。女

はか細く、エドワードにしか聞こえないで話した。

「失敗すれば、私は用済み。でも、ただでは引き下がらない」

まんまと嵌められたとわかり、エドワードは急いで女に薬を履きださせようとしたら、おいとドスの利いた声で呼び止められ、何本もの槍を向けられた。港町の守備隊だ。たまたま、近くを巡回していたのだろう。何人かには見覚えがある。

「これはこれは、英雄さん。人殺しは戦場に限られた事ですぞ」

あのねちっこい、嫌味を言いあつた門番だ。法律を盾に、憎たらしい相手を好きなかだけ取り調べできるのを知り、醜い喜びで顔が歪んでいる。手には櫂の棍棒が握り締められてる。

「ようやく本性を現したな。国土を犯す、汚い馬乗りめ」

「それより、この女を助ける！ 薬を吐き出させる」

女ががくがくと震えだした。やはり即効性の毒か。背中を向けて、叩いて吐き出させようとした、二本の槍の柄で痛烈に左肩と手の甲を叩かれてしまった。門番がこいつを連れてけと仲間に命じた。数人ががちりした男に抱えられ、女から引き剥がされた。

「待て、女を助ける」

驚いたことに、門番は女も連行しろと命じた。エドワードは男を罵倒した。

「この馬鹿！ あれを見て、なにをしたら良いのかわからんのか、犬畜生の小役人が！」

「演技かもしれん」男は冷たく言い返した。

女にまんまと騙され、男の度を越した態度と頭の悪さに切れて、エドワードは叫び、抱えた男たちを引きちぎるように力一杯振りほどいた。男たちはもんどりうって倒れ、あまりの怪力ぶりに門番はギョツとして身を引いた。

女の元に駆け寄ろうとしたが、既に手遅れだった。女を抱えた兵士二人が女に声をかけながら、揺さぶっていた。女は揺さぶられるがまま、動かない。口から血泡混じりのげろを吐き、半目に開かれた瞳は虚ろ。手遅れである。相当有益な情報を持っていたはずの者が死んだ。そして、自分の無実を証明してくれる者も。

エドワードは大人しく、連行された。これ以上の抵抗は無駄。自分の死を早めるだけ。モリビトの時はまだ、人間的といえる扱いをされたが、同じ人間である彼らは、モリビトのようには扱ってくれないだろう。エドワードは絶望しなかった。自分が帰ってこなかったら、仲間が来るはず。ゲンエモンやオルレスも来る可能性はある。一人ではないのだ。

今の自分にできることは、決して罪を認めず、いかなる取り調べでも必ず耐えることだ。

二八話 犯罪者

エドワードは振りほどいた男たちと門番に蹴飛ばされたり、耳を引つ張られて、小突かれながら引き回された。目隠しされて歩いていたら、前に捕まったことを思いだし、内心半ば苦笑した。

一年の間に二度も捕まり、豚箱にぶち込まれる人間はそういないだろう。呻かず、情けの一つもこわなかつたので、門番と男たちは不満に思うも、どうやったらこの生意気な犯罪者が這いつくばるのか想像し、いかにして後悔の悲鳴を上げさせるかという嗜虐心も刺激された。

「今日からここがお前の住処だ」

門番の男にするりと布切れを取られた。一番に目に入ったのは、見るも地味で薄暗い雰囲気の石を重ね合わせた小ぢんまりな建物。屋根はベニヤを適当に置いただけのような作り。周りも石で囲まれ、門の木材は風雨にさらされてやや朽ちていた。

留置所の周囲は荒れて、人家から少し離れた所に建てられていた。針葉樹が伸びて、遠くの景色を邪魔している。留置所の部屋に行くと、中では鎧を来た見張りがいた。腰には細身の長剣が提げてある。見張りが門番の男に話しかけた。

「手柄か、ナザル」

「おうよ。娼婦に毒を盛って殺した悪人だ。こいつは見かけ通り、かなりの怪力で、六人がかりで抑えても吹っ飛ばしかねんから気を付けろ」

見張りのお陰で、自分を捕まえた門番の男がナザルという名前だと知った。知ったところでどうにもならないが。長方形のテーブル二つと椅子が乱雑に置かれた詰所の奥に、地下へと通じる石段があった。降りる度に視界が暗くなり、ジメジメと湿気が滞り、こもった臭いがして不快である。

地下は意外に広く、左右に分かれていた。前は牢、唯一の昇降口がある側は壁。右側へと連れて行かれる。二人ほど、自分以外にも捕まっている者がいたが、仲良くする気になれなかつた。ここだと足が

止まり、最奥、数えて右から四番目。いずれの牢と同じく通風孔の他、隅つこに汚物を入れると思しき木製バケツもある。囚人にせめてもの慰めをと考えたのか、肩ぐらいの位置に外を見られる小さな穴もあるが、その部分はがっちりと数本の鉄棒で補強されていた。一応、背伸びできる高さだが、両手まで伸ばせる余裕はない。

がちやりと施錠された。真鍮製の鉄棒であり、しっかりと石に埋め込まれているので、自力で壊すのは難しそうだ。ナザルがしばらく待てと命じた。

「現場の状況をまとめてくる。安心しろ、時間はかからないから」

出来る限り長くかかるのを願ったが、一時間としないうちに呼び出された。武器を携え、鎧を身に付けた六人の男から一斉に刃先を向けられては、大人しく従わざるをえない。通路を真っ直ぐ行き、左の一番奥にドアがある。ここが取調室だろう。

中にはナザルが一人いた。地面と天井の半ばに位置する、左右にある煤けた燭台の蝋燭が部屋を仄かに照らしていた。目の前に座らされて、ナザルの顔を嫌でもじつくりと見られる機会がきた。若干、歯並びが悪い、ごま塩頭。背こそ幾分小さいが、薄い服では隠しきれないくらい肩や腕の筋肉が張り出し、意外と鍛えてあるのが知れた。目は意地悪そうであり、淡いロウソクの光が不気味に顔を照らし、余計に質が悪く見える。ナザルが口を開いた。

「まずだ。お前が冒険者として来て、ここに来た理由や目的はどうでもない。俺は何故、お前があの娼婦を殺したか。知りたいのはそれだけだ」

「俺は殺していない」

「殴って、毒を飲ませたのにか？」

「殴ったのは身を守るためだ。あの女がいきなり斬りかかってきて、仕方なく。毒は故意に飲ませた訳ではない。女が痛みを和らげる薬だと言って、鎮痛薬かなにだか知らんが、そういう体を治す類の薬だろうと思ったら、飲んだ後に女が不敵に微笑んで、それは毒薬だと告げた。あの女は俺を嵌めたのだ」

「つまり、女が殺しにかかってきた。そして、お前を嵌めるために体に

良い薬だと嘘をつき、自ら毒を一服盛り、お前を殺すように頼んだ依頼者の秘密を守った。こう言いたのだな」

「そうだ」

ナザルは人差し指で机を小突いたら、腕を伸ばせと命じた。エドワードはナザルの命を拒んだ。

「何もしないと保証するなら伸ばす。だが、あんたは明らかにしようしている。そんな奴に馬鹿正直に腕を伸ばす者はおらん」

「いいから、伸ばせ。ぐいっとな」

ナザルは右の方に視線を逸した。背後では、男が抜き身の剣をこれ見よがしにちらつかせていた。

「この場で腕を無くしたいのなら構わんど。腕一本と引き換えに罪を見逃してやる」

エドワードは不承不承に腕を伸ばした。予想通り、ナザルは思いつきり腕を引っ張り、自らの方に寄せて、最近になって少し短くしたエドワードの髪をわしづかみ、面を上げさせた。頭皮を引っ張られて、痛い声が上がるほどでもない。

「吐く息嘘つきやがって！ お前は女をたぶらかし、女が自分の言うとおりにしないから殴り、無理矢理毒を流し込んだゲス野郎、違うか!？」

「さつき述べたことが全てだ。第一、仲の良い者たちとの付き合いでああいう女と知り合う機会は会ったが、抱いたことは一度もない」

「処女がお好みだというのか」

「好みではないだけだ。良いと思えた女なら、子持ちの四十代でも構わん。あの女は俺を殺そうとした。仕方なく殴って身を守ったが、女は嘘について毒を飲ませた。これが全てだ」

いけいけしやあしやあと嘘を吐くなとナザルは怒鳴り、エドワードの顔を三度、机に打ち付けた。鼻血は出なかったが、額と鼻先が痛む。「俺は前からお前らが気に食わなかった。ただの難民ならいざ知らず。住む場所がないから提供してやったのに、恩を仇で返すお前らがな。盗賊共とつるんで内部をじつくりと視察するとは思ってもよらなかったぜ。あの糞みたいなボンボンの副隊長と一緒にくたばって

ちまえばよかった」

「副隊長のところだけは共感するが、他は訂正しろ。俺と一族はずっと、エトリアに永住するつもりはないし、遠く離れた者たちも盗賊とは無関係だ」

「黙れ」ナザルは容赦なく、再び二回も顔を打ち付けた。二回目は強烈で、机が壊れそうなほど叩きつけ、髪を掴んだままぐりぐりとエドワードの顔を机に押し付けた。自分の鼻からじわりと生暖かいものが流れる感触が肌身を通して伝わる。ナザルが面を上げさせたら、鼻から二筋の血が流れ出て、閉ざされた唇から顎下、机まで濡らしていた。ナザルによく髪を放されたら、エドワードは急いで袖で血を拭った。鼻血は出るが、じきに止まるし、この程度の出血では死なない。

その後、五時間に渡り、ナザルたちは交代でエドワードに尋問を続け、後半ではお前がやったのだろうと言いつつ続けたが、エドワードは頑なに拒否した。幾度となく来た地獄の尿意も耐え、牢に戻り、ナザルたちの姿が見えなくなったら、即座に空のバケツに用を足して安堵した。明日はもっと厳しくすると言っていた。

食事は当然、水の一杯すらも恵まれなかった。後何時間か、何日要するか予想もつかないが、覚悟をしたほうがよさそうだ。汗と血で濡れた顔を上着で適当に吹き、薄く藁を敷いた石を詰めた寝床に巻いた上着を枕代わりにして眠った。見た目通り、寝心地は最悪だが、冷たい石の上でそのまま眠るよりかはましである。

エドワードは仲間、身内の者たちの安否を憂いた。人を殺した者と関わり合いがあるという理由で、兵士にとつ捕まえられて、彼らにも害が及んでないか心配であった。

外から、地鳴りのような音が周囲へ微かに響く。花火をみんなと見たかったなと思ひ、眠る。

どのくらい、眠ったのか。妙な胸騒ぎがして目を覚ます。外は暗い。やがて、荒々しい足取りで武器を身に付けた男たちが降りてきて、エドワードが居る牢の前に集まった。確かにいるぞ、連絡を取ったのかなど、話し込む。話し合いは終わり、エドワードは牢から引き

ずり出された。

「ゆつくりと就寝する余裕もないのか」

誰も応じる者はいない。無言で取調室の椅子の座らされたら、ナザルが非常に険しい顔つきで待ち構えていた。きつく顔をしかめ、今にもひび割れて、火が勢いよく顔から吹き出しそうである。ナザルは開口一番、恩知らずめがとびしやりと鞭打つように言い放つ。

「お前とその一味はそういうことをするのか。我が国の入国官たちの基準をもっと厳しくする必要があるな」

「一体なんの話だ」

ナザルは机を打ち鳴らし、「しらばつくれるんじゃない！」と叫んだ。

「そう怒鳴られても、事情が呑み込めない」

「よかろう。お前が知っていることを述べても無意味だろうが、知らないこととして教えてやろう。お前の仲間の一人が、お前の馬を預かっていた宿の番台を家で殺した。馬に乗って逃げているのを衛兵たちが追っかけている。善良な市民にまで手を出しやがって」

エドワードは息を飲み、瞳孔を見開いた。「まさか、ありえん」と否定した。

「俺の知っている奴で、なんの罪もない。俺たちに協力してくれる者に暴力を振るったり、ましてや殺したりするような奴は一人もいない。なにかの間違いか、誰かが俺たちをたぶらかそうとしているんだ。あるいは、あんたが嘘をついているかだ」

「お前の仲間に番台の居るところを尋ねられたから教えたと言っていた証言者がいた」

「どんな外見だ。男か、女か。髪の色は」

ナザルはエドワードを睨みつけたが、仕方ないといった感じで教えた。

「声からして男だろうといった。仮面を付けて、おまけに大きな帽子を目深に被っていたので、髪の色はわからん。おまけに、前後が異様に反り返った底を履いてた。厚いのかさそうではないか判別し難い靴を履いていたので、背丈もわからん」

「それじゃあ証拠にならんだろう」

「だが、そいつはお前の仲間だと言って、宿の番台のもとへ行き、殺害したと思う」

エドワードはしめたと強気に出た。

「語るに落ちるとはこのことだな。と思うとはなんだ。では、そいつが殺した証拠すらないのか」

「彼に最後に会いに行ったのは黒ずくめの男だ。間違いない。数時間後、祭りから帰ってきた彼の妻がな、喉をぎつくりと切られ、背中から心臓を貫かれた血塗れの番台を発見した。お前の仲間と名乗る者の手でな」

「俺の仲間だと名乗る正体不明の者が人を殺したから、関係性があるだと。馬鹿げている」

「立場をわかっているのか？ この状況で最も疑われるべきは、お前とその関係者になるのは至極当然の成り行きだ」

否定はできない。自分も逆の立場なら、同じように尋問していたはず。

それより、ナザルは自分を犯罪者、ひいては国を脅かす悪人の手先と完全に思い込んでしまっている。愛国心は結構なことだが、こんな風に向けられるのはごめんだと思いながら、ふと、自分にも当てはまらないかと考えた。

ナザルがぱちりと指を鳴らす男たちが中に入り、エドワードの身体を椅子に縛り付けた。ナザルは重々しくドスを利かした声で話した。歪んだ顔つきも相まって、暴力犯罪組織の一員だと言われても、違和感がない。

「恩を仇で返す無法者め。覚悟しろ。俺はケチな門番と牢獄の頭だが、それなりの権利はあるぞ」

「弁明する機会と黙秘権はある」

好きにしろというと、ナザルは人差し指、中指、薬指を立てて、順番に折った。

「改めて聞くことが三つある。一つは女殺し。二つは番台を殺したきさまの仲間。三つは……ここ最近、どうして馬に乗ってエトリア各地

を行く。全て答えろ」

「二つめは前にも答えたとおり、謀られた。二つめも同じく。三つめはただ、エトリアと自分と関わる者たちの為にやっているだけだ」

ナザルは無言で右目辺りを平手打ちした。とっさにつむったが、目がひりひりする。エドワードが目の痛みを堪えて前を見たら、今度は両頬に二回、強烈な平手打ちをくらわした。

「全て信じない。と言いたいところだが、三つめに関しては、きちんと語れば許してやらないこともない」

「人付き合っても夢も、地道なことからは始まる。俺は荷物運びをしているだけだ」

嘘は言っていない。ただし、真実を幾つか隠しているが。お前がそういう態度を取るなら、こちらにも応じなければならぬ。ナザルは冷たく言い放つ。ナザルが例の抜き身の剣を持った者に耳打ちをした。男はすぐに、別の二人と共に、水の入ったバケツ二つとタオルを持ってきた。バケツとタオルを見て、エドワードはどんな方法で口を割らせるか知った。以前、アクリヴィイに聞いたことがある。

「洗浄をしてくれるのか。ありがたいね」

「ああ、そうだ」

そして、男たちは二人がかりでいきなりタオルを顔にまきつけた。荒い繊維が顔をこすり、肌食い込んでくる。更には水もかけられた。全てではなく、ちよろちよると少しずつ。タオルが濡れていき、重みがまし、濡れたタオルが息を吸おうと必死に開かれた鼻孔と口を塞ぐ。濡れたタオルで水分を得ようと思ったのはとんでもない間違いだ。タオルをぴつちりと巻きつけられて、僅かにこぼれた雫しか飲めない。

ふがつ、ぶがつと喉が詰まった豚か猪みたいな声をエドワードは出した。水分を含んで濡れたタオルに呼吸器官を完全に塞がれて、息が出せない。体を動かし、首をこれでもかと左右に振るうが、椅子は三人で抑えられて、両肩とタオルはがっちりと二人で押さえていた。馬鹿力めがと罵りながら、逃げられまいと五人がかりでエドワードを抑え続けた。両方の限界まで来た時、やっとタオルを剥がされた。息を

何度か思い切り吸い込み、生きている実感を得た。しかし、ナザルは容赦なく、四回も連続して続けた。

やがて、彼らの一人がナザルに文句を垂れた。

「おい、ナザル。てめえもこいつを抑えろ。この馬鹿、椅子に縛られているのにとんでもねえ力だ」

「ようし。なら、もう少し楽な方法を取ろう」

エドワードは椅子に縛られたまま、改めて座らされた。ナザルが席を立ち、少しして、一枚の紙とインクとペンを持ってきた。そして、紙に文字を書くと、エドワードに見せつけた。私エドワード・ウォルは、水商売の女を殺した罪を認めます。そう書かれていた。エドワードは啞然とし、怒りで身を震わせて激昂した。

「こんなのは無効だ！ 本人の同意は得てない」

「ああ、そうだ。これから、お前は自ら書いたというのだ。裁判官の前で素直にな」

「お前のような卑怯な輩の要求は断じて受け入れん」

「エトリアには拷問器具の類が殆どない。だが、大掛かりな道具が無くて、簡単な方法は幾らでもある。今からしてやろう」

そういうと、ナザルと連中は手足をきつく縛り付けた。エドワードは血の巡りが悪くなるのを感じた。舌を噛み切られないよう猿轡もつけられ、ついでに目も濡れたタオルが巻き付けられた。更に両足には鉄球付きの枷まで付けられるサービス。机と椅子は片付けられた。「そのままにいる。気が向いたら様子を見に来るぜ」

ナザルが蠟燭を消し、扉を閉めたら、後には光が差さない狭苦しい闇の世界にたった一人残された。

残されたエドワードは嘆いた。暗闇は怖くない。一人でいることも怖くない。自らの不甲斐なさを嘆いた。仲間や家族にも迷惑をかけた。自分とその他多くの者たちが成そうとしている事にも危険を及ぼさせた。あんな見え透いた手を見抜けなかったのが情けない。甘かった。精進が足りない証拠である。鍛え直さなければ。その前に、用心を深め、今一度自らの使命の重さを思い出さねば。もつといえ、現在の状況を打破しなければならない。

ナザルという男は悪人ではないと思う。国を想う気持ちはある。しかし、あまりにも偏見があり視野が狭い。暴力を辞さない。そんな男がこのまま無事に自分を返すはずがない。今はまだこの程度だが、反抗しても、黙って従っていいいても、余計に悪くなる一方である。ならば、することはひとつ。

手足を動かそうとしたが、無駄だった。エドワードは踏ん張り、重い鉄球もなんのそのと縛られたままふんがと叫び、立ち上がった。よちよちと歩き、頭がぶつけて傷めないよう注意する。がんと頭の右がぶつかってしまったが、壁のある方向はわかった。

エドワードは反対の壁のある方まで行き、勢いよく、力一杯体当たりした。ばきりと椅子の後ろ足が壊れる。何度も背中ごと打ち付ける。打ち付ける度に体にも直に衝撃が伝わってくるが、椅子が壊れ、縄が緩んでいく。多少、手が擦れるのは気にせず、縄から手を引っこ抜き、身体と足に絡まる縄もほどいた。鉄球は致しがたない。ドアをぶち破ろうと思ったが、鉄製で壊すのは無理そうだ。それよりも、良い考えを思いついた。

何時間経ったのだろうか。

どうやら、相手はこっちが大人しく椅子に座って縛られていると思っている。そこが狙い目だった。喉も乾き、腹も空いたが、苦痛とは感じない。むしろ、一つのこと集中する上では好都合にさえ思えた。

相手の誰かがノックをする。「返事を出せるわけはねえよな」と自答している。ドアを開けた瞬間、真っ暗闇から手が伸び、男を引きずりこんだ。一人が助けようとしたら、潰れた鼻から血を流した男が飛び出て、思わず手を伸ばした支えたところへ、明後日の方へと記憶と共に顔面ごと吹き飛ばされた。エドワードは一人から剣を奪い、鼻血を垂れ流して喘ぐ二人を一顧だにせず進んだ。

短い通路なので、すぐに昇降口がある場へ出た。ちようど、男が一人降りてきた。通路にびったりと張り付き、様子を見る。鎧を着ているが、問題はない。エドワードは音もなく後ろにつき、鎧の隙間に剣を入れた。

「動くな。振り向くな。兜を外すぞ。動いたらどうなるかわかるな」

相手は微かに頷いた。留め金を外し、兜を捨てさせたら、男の喉にぴたりと刃先をつけた。

「馬鹿な真似はよせ」

「馬鹿な真似だと？　なら、人の話を聞かないナザルとかいうあの男に言つてやれ」

エドワードは一步一步階段をのぼる。ごつごつと鎖と鉄球がぶつかる音だけが響く。地上に出た。外は朝日が差し込んだばかりらしく、眩しい。二人ほど起きていて、喉元に剣を当てられた男とエドワードを見て、驚く前におーいと声を張り上げた。どたどたと足音を立てて見張りたちが駆けつけてきた。ナザルもいた。捕えた男と下にいる二人を含めて、一七人はいる。

ナザルはエドワードに激しい敵意を向けた。

「やってくれたな。てめえの罪は確定だ」

「ナザル、お前は俺に対してしたことを忘れたのか。あんな約束なぞのめるか」

鉄砲を持った者が一人、弓矢を持つのが二人。後は槍と剣。エドワードが少しずつつ歩きたび、ナザルらは道を譲った。そうは問屋が卸さんと、ナザルが鉄砲を持つ者の手から奪い取り、エドワードと味方に銃口を向けた。男が悲鳴に近い声でナザルの呼ぶ。エドワードは強気に出た。

「お前にはできっこない。馬鹿な真似はよせ」

「俺は本気だ。てめえのような薄汚い馬乗りのゴロツキに逃げられるぐらいなら、いつそ撃ち殺したほうが手っ取り早いし、世のため普通に生きる人の為よ」

エドワードは一步ずつ後退し、ナザルを注視した。ナザルは本気らしい。あの男は本気で自分ごと味方を撃ち殺す気である。なんて奴だ。男もナザルの本気を知り、ふざけるなど罵倒しつつ、エドワードに命乞いをした。

「あんだ、頼む。俺には病弱な父に、幼い弟たちがいる。俺が死ぬ訳にはいかないんだ。頼む」

エドワードは気持ち揺らいだ。見知らぬ若い男があくまで自分が死にたくない、自分の命が大事だと命乞いするような奴なら、遠慮なしに盾にしていたが、こう頼まれては弱い。嘘をついているようには思えない。これが演技なら、大した役者だ。やはり、自分は甘ちゃんである。

ゆらゆらと火縄の煙が登り、帽子を被るナザルの顔を見えにくくする。銃口は常にこちらに向けられている。やがて、エドワードは男を軽く突き飛ばし、剣を捨てた。

「参ったよ」

とっ捕まえろと叫ぶやいなや、男たちが一齐に飛びかかり、エドワードを殴り蹴り、槍の柄でぶちのめした。逆に人質の男はナザルに掴みかかった。ゲンエモンに攻撃を受け流す方法を伝授されており、拳や足を使った攻撃なら威力をある程度受け流せたが、槍や棒まではさすがに受け流せなかった。ナザルがやめいと言うまで殴られ続け、あちこちにミミズ腫れができたり、皮膚が擦れて僅かに血が流れた。

わざと間を置いたなと思いきや、当のナザルもまぶたが腫れがあり、鼻が片方潰れて血が出ていた。ナザルは人質に取った男に二回殴られたようだ。本人なりの罪滅ぼしのつもりだろう。若い男は血で濡れた拳を握り締めつつ、怒りを露にナザルを睨みつけていた。

「さっさとぶち込め。今度は両手にも枷をつけてな」

ナザルの部下は言われなくても、そうするつもりだった。ぶち込む前に、エドワードの腕には木製の枷をがっちりと嵌めて、鎖付きの鉄球もつけておいた。鎖は短く、立つのは辛いので座らざるをえない。

傷付いた体を労わるようにエドワードは体を丸めた。ちよつとやそつとの痛みならまだしも、あちこち傷だらけ、空腹と乾き。さしものエドワードもこの三重苦を辛いのは否定できない。だが、一日や二日で根を上げまい、何日でも耐えてやるとまだ心までは折れてなかった。

物音一つ立てずに移動するものの存在を感じ、エドワードは腕を懸命に伸ばして捕えた。手足をばたつかせて、忙しく二本の触角を動かすのは、臆病な者なら悲鳴を上げるほど毛嫌らわれている真っ黒なア

ブラムシ。

「後五日経つてもろくに恵んでもらえなかったら、お前を食っていたところだ。運が良い奴だ」

エドワードは牢の外へとアブラムシを放り投げた。アブラムシは這い回り、完全に見えなくなった。

穴から僅かに差し込む光で正午を過ぎた頃、エドワードは牢から運び出された。臭いものの近くに長くいると臭いを気にしなくなるが、エドワードの大臭は彼らを上回り、普通に近づいたら思わず鼻をつまんでしまいそうだ。

ぼろぼろに疲れきった体で取調室の壁際の椅子に座らされたエドワードは、目の前で水が入った袋と食べ物置かれた。

「たった一言でいい。自分が素直にやった認めるのだ」
「断る」

ナザルはかぶりを振り、部下と共にエドワードの目の前でこれ見よがしに水と食料を食す。がぶがぶと音を立てて水を飲み、肉と調理された物を美味そうにほおぼる。エドワードは目を閉じ、無視しようとしたが段々と物を噛む音が大きくなり、片目を開けたら一人が目の前でやけづらを浮かべていた。腕が自由なら顔を叩き潰してやりたい。

エドワードはふと思いついたことをナザルに言った。今言ったほうがタイミング的にも良いと感じた。

「おい、ナザル。提案がある」

ふてぶてしい態度で呼び捨てにされて、ナザルは機嫌を損ねた顔でエドワードを見た。

「認める気になったのか」

「お前が俺に許しを得る方法だ」

周囲のふざけた空気が一気に薄れ、緊迫した重々しい雰囲気に包まれた。

「で、どんな方法でお前は俺に許してもらえるのだ」

「お前を入れて確か一七人いたな。もしもだが、国に敵が攻めてきたとしたら、お前は一七人以上の敵を殺れる自信はあるか。俺もそいつ

らは嫌いだな。もつとも、戦う度胸がお前さんにあるならばの話だけだ」

ナザルはエドワードの顔半分下をつかみ、潰れろと言わんばかりに指先に力を込めた。

「まず一人目はお前でもいいぞ。俺を舐めるなよ。お前なんぞの許しをこわすとも、誰が敵に背を見せるものか。一七人でも何人でもひねり潰してやるわ」

「今言ったことを忘れるなよ」

ナザルは、エドワードの顔を握り締めていた手の力を緩めた。飲食物は片付けられ、鍛冶屋が熱した鉋物を打つとき抑えるために使うペンチのような形をした小型のはしを持ってきた。かちかちとはしを持つ者が音を鳴らした。エドワードは嫌な予感に冷や汗が流れた。

「生意気な口を叩くからだ。大人しく黙っていれば、もう少しましな対応をしたものを。改めて聞こう。お前がしたのだな」

「していない」

ナザルは顎をくいと動かし、男に無言でやれと命じた。「お前の利き手は右かな」エドワードは答えなかった。本当は左手だが、あえて教える馬鹿はいまい。エドワードはまた猿轡をかまされた。

男はエドワードに耳打ちした。「今日は小指一本だけだ。俺は全部でもよかったがな」

鈍く冷たい鉄の塊が右の小指の爪を挟む。重圧感が伝わり、爪が砕けそうだ。爪が剥がれていく激痛が小指から全身へと伝わり、顔がしわくちやになるほど目を閉じ、体を身悶えさせる。爪が剥がれていくたびに縫い針をぐりぐりと打ち込まれると表せばいいのか。千切れる音と共に、エドワードの小指から爪がぼりと剥がれた。小指から手全体が痺れて、焼けて燃えるような痛みが小指を際限なく襲う。猿轡が噛みちぎれそうなほど強く噛み締める。エドワードは牢に戻された。当然、拘束されたまま。

枷が嵌められて手当てどころか痛む小指を片手で抑えることもできず、歯を食いしばり痛みを耐えた。

少なくとも、二日過ぎている。小指の痛みは麻痺し、痺れる程度に

収まった。のそりとたち、外を見る。暗い。既に夜だ。もしかたら、牢に入って三日目を過ぎたのかもしれない。エドワードは目をつむったが眠りは浅く、半ば呆然とした状態で起きていた。

翌朝。男たちが出ると命じ、エドワードは無理矢理立たせて、頭から水を被せた。

「これから引渡しを行う」

エドワードは答えなかった。遂に来たか。随分と呆気無い、惨めな冒険の最後。それどころか、人生の最後かもしれない。外は自分の気持ちと反し、爽やかな風が吹く晴天。

荷馬車があり、数頭の馬と衛兵もいる。ぼんやりとした視界でも目立つ者が二人いた。白い衣装を着た者と刀と思しき武器を身に付けた者。それだけならまだしも、二人は確かにエドワードと声をかけた。見間違い、聞き間違いと思い、おもむろに頭を上げたら、いつになく真面目な顔つきのメディックと豊かな髭と白髪が目立つ黒いぎんばらの侍。

「ナザル君といったかね。では、彼を引き取らせてもらおうよ」

ナザルは苦々しくも、仕方なしといった表情で侍に頷いた。メディックが肩を支えた。

「ひでえ有り様だな。良い男の顔が台無しじゃないか」

「三日間、待たせてすまんエドワード」と侍が謝る。

「いや、来てくれただけでも大変ありがたいですよ。しかも、予想より早く来てくれた」

エドワードは二人を見て、力なく会釈した。

「ねえ、ゲンエモンさん。オールドリッチ」

オールドリッチはようやくいつものふざけた笑みを浮かべ、ゲンエモンは安堵した顔で微笑んだ。永遠かと思われた虜囚生活は遂にピリオドを迎えた。馬の頭がぶると喜ばしげに頭を震わした。漆黒の愛馬ブケファラスが荷馬車を牽引する内の一頭だった。枷は全てはずされ、エドワードは二人の介抱のもと、荷馬車に乗せられて運ばれた。

傷の手当をされながら、エドワードはいつしか寝入った。揺れるの

で寝心地は良いとはいえないけど、布を敷かれ、枕代わりに包まれたマントもあり、石床とは比べ物にならない環境である。それよりも、親しく頼もしい二人と一頭の存在が安らかな眠りをもたらした。

探索番外編

二九話 白き姫君は終末の夢を見るか

十月六日。エトリアの街は祭りの興奮も覚めぬまま、今度は有名なパーティが二人の一般人を殺害した話題が喧かかれていた。そんな話を歯牙にもかけず、つんとすました態度で仕事に行く女が一人いた。

赤いレンガの壁。黒い鉄製の門扉。手入れが行き届いた庭園。季節に合わせて育てられた鮮やかな花々。専用の厩に馬車。奥に堂々と建立する、要所の真つ白い窓枠が目立つ薄茶の厚いレンガ作りの屋敷。一目で貴族や金持ちの住居だとわかる。本都市から少し離れた郊外に位置する豪邸の所有者は、エトリア一の大富豪アウルム家のお住まい。成長した樹齢百年を越す木々が本都市から屋敷を隠していた。

アウルム家の当主は混じりけのない銀髪の者が継ぐと決められている。例え、その者がいかな才に恵まれていなくても、彼か彼女を当主と仰ぎ、他の者たちと元は力が備わっていた銀髪の者はその者を支え、どんな事があっても命懸けで守ることを一番の家訓としていた。無論、道を違えないよう、しっかりと教養を身に付けさせるのも家訓にある。

銀髪の者が産まれないことは無かった。また、必ずしも長男や長女が家督を引き継ぐとは限らず、一番最後に産まれた者が混じりけのない銀髪なら、その者に家督とある力が受け継がれる。

銀髪の者には他にはない特殊な能力がある。夢を見ること。ただの夢ではなく、きたる未来を見る予知夢。夢は具体的な物もあれば、抽象的な物もあり、わかりにくいように思えるが、良いか悪いか簡単に見分ける方法があった。

まず、良い夢の場合は場面が全体的に明るかったり、楽しいな雰囲気がある。

逆に悪い夢の場合、場面は全体的に暗い。血が嘔きでたり、誰彼の断末魔が聞こえれば、不運な死が訪れることを予言している。アウル

ム家は銀髪の者が見る夢を頼りに四百年、莫大な儲けに乗れて、数々の破産の危機を回避し、財を築き上げてきた。

優秀な人材も多く輩出し、図書館を築き上げ、女傑アジロナとも知り合い、彼女の提唱した外壁製作にも支援するなど、国の発展にも貢献した。中には、分家に属するが、かの副隊長のような人物も残念ながら少なからずいるものの、エトリアが誕生してから六百年を過ぎてからの栄光は数多の冒険者の犠牲とエトリア人の知恵としぶとさ、そしてアウルム家の繁栄のお陰にある。

しかし今、アウルム家は窮地に陥っていた。別名白き姫と呼ばれるほどの美貌の持ち主。現当主で十六歳になるアルBUM・アウルムが八年前から夢を見なくなっていたのだ。全く見ない訳ではない。稀に見て、上手く儲けることもできたし、夢が無くても、経験を生かして危ない橋を渡らずに済み、大損は免れていた。だが、銀髪の者が夢を見れないとあっては価値がない。それだけではない。アウルム家に予測不能な災難が訪れようとした時、彼らの夢があつて避けられたことも、避けられなくなってしまう。

おまけにここ最近、アルBUMは夢を見る直前、苦痛に襲われたようにもがき、満足に眠れない日が続いた。名医が調合した睡眠薬を幾ら飲んでも無駄だった。八年前といえば、エトウなる者が名乗り上げた時期。関係あるかと模索してみたが確証は得られなかった。

当主といつてもまだ十六歳。彼女は現段階ではお飾りであり、彼女の父親と元は能力が備わっていた同じ銀髪である聡明な母が実質の当主だった。

冷たい眼で晒され、満足に眠れずやつれていく娘を不憫に思い。オレスへ、信頼できるカースメーカーはいないかと頼み、何度か顔を合わせたこともあるベテラン冒険者ゲンエモンと親交があるキアラを紹介してもらった。客人であり、娘の苦しむを少しでも和らげてくれるキアラが来るのを待ち侘びていた。薄らと陽が落ちた頃、黒いローブに身を包み、身体に銀の鎖を巻き、鎖が交差した中央には鈴がぶら下がっている。黒曜石のような艶やかな黒髪、吸い込まれそうな冷たい黒目がちな眼の凛とした佇まいの女性。外見の特徴は聞い

ていたものの、門番二人は槍を構えて警戒した。女は槍が届かない位置で立ち止り、懐から赤紐で結ばれた巻いた紙を出した。

一人が受け取り、紐を解いて手紙をしたためた後、相方に女を見張らせている間に館の執事にも確認したところ、間違いなく正式な紹介状だとわかり、キアーラは通された。

冷や汗をかく相方を見て、男は大丈夫かと声をかけた。

「なにかされたのか？」

「いや、なにもされちゃいない。ただ、あの女に見つめられていると、自分の内心を見透かされてるようで、不安でしょうがなかった。いくら美人でもあんな女はごめんだね」

燕尾服の執事に客間へ案内されたキアーラは、待ちくたびれていた様子のアウルム夫妻に早速、寝かすよう頼まれた。アウルム夫人が頭を下げた。

「お願いします。どうか私の娘に一時でもいいから安らぎを」

「落ち着いてください。確かに私の昏睡の呪言ならば深い眠りに落ちるでしょうけど、本人が普通に起きている状態で強制的に眠らすのはよくありません。それに、夢を見るということは浅い眠りの状態。本人がいざ悪夢を見て、苦しみだした時にはご当主様を無事に眠らせて差し上げます」

キアーラは食事をせひと勧められたが、やんわりと断った。もしも、いくら強くて魔物のようだと言われていても、所詮は狂暴なだけのものでしかない樹海生物なら体力維持は必要なため、食事の誘いを受けていたが今回は違う。相手は人間である。更にいえば、アルブムは呪いの類をかけられているとキアーラは予想していた。姿無き人ならざる者やこういう力と対峙した時、満腹では付け入れる隙を与えてしまう。カースメーカーは己のどこかを拘束し、傷付けることで力を発揮する。簡単な手段では断食がある。人間の欲の一つであり、生きていく上で必要不可欠な「食」を縛ることにより、カースメーカーは力を発揮する。

金持ちとなれば、相当のやつかみや恨みも買うはず。恐らく、そういう者たちの誰かが彼女を苦しめているのだろう。

八年前から上手く夢が見られず、その上、夢を見る直前に苦痛に襲われた。誰かが彼女に呪いをかけたとしたか思えない。多分じやなくても、人や人の手では敵わない怪物に対抗するため、眼に見えない力を駆使して戦う者たち。そう、同業者であるカーズメーカーが手を貸したのだらう。そのカーズメーカーが男か女かはこの際置いておいて、八年間も滞在させて、最近になって効力を発揮させるなど、相当な手練れ。呪力を長く滞在させるには、大規模な儀式や呪いの元となる物を本人の体内に潜り込ませるのがベスト。儀式の場合、身体には必ず傷痕や彫ったような痕があるので一目で解る。いずれにせよ、本人に会うのが手っ取り早い。

キアーラは本人に直接会わなければと言った。アウルム夫妻は了承した。アルバムの部屋に移動する間、キアーラは幾つか質問した。「つかぬことをお伺いしますが、アルバム様のお体には目立った外傷はないでしょうか」

アウルム夫人が答えた。「いいえ、娘の体には生涯残るような目立った傷はありません。転んだり、裁縫が慣れないうちは何度か指に刺してしまったこともありますが」

「その怪我をした針はまだありますか」

「我々は物を大事に使いますからね。今も娘が大切に使っています。それがなにか？」

「疑える物は全て疑えと考えていますからね。一応、後でいいから見せてください」

執事が部屋をノックし、両親と例の客人が来たことを告げた。扉の向こうから、弱弱しい声でお入りくださいと聞こえた。洗面台と化粧用具、香水品、白い木製の衣装棚に数々の家具。今の家業でよほどの大物を連続して倒すか、世紀の発見をしない限り、自分では到底住めそうにない。

薄らと灯りが点る部屋のベッドの上に、かの白き姫がいた。白を基調としたドレスを着け、母親よりも艶があるリボンで結ばれた銀髪、疲れ切った青灰色の瞳、やや尖った顎の瓜実顔。普段なら気品溢れる人物なのだろうが、寝不足のせいで気力が失われており、黒々と覆

われた目のくまが容姿ばかりか本人の雰囲気をも損なわせていた。

キアーラは型通りの挨拶をした後、気分はどうか。すぐに眠れそうかと尋ねた。アルバムは微かに首を振った。

「いいえ、すぐには眠れそうにはありません。もう少し時間がかかりそうです」

「お構いなく。それよりも、差し障りがなければ、当主様が使われている縫い針を見せていただけませんか」

アルバムは首を傾げるも、ええどうぞと言った。執事が多数の紋様が刻まれた白く塗られた裁縫箱を運んできた。キアーラは一本一本、縫い針に直に触れて力の痕跡がないか探った。数分で調べ終えた。特に感じない。縫い針は高価そうという点を除けば、一切の細工や力の痕跡は感じられなかった。怪訝そうに見つめるアルバムと夫妻の視線を気にせず、キアーラはどうもと執事に裁縫箱を返した。眠った直後にまた部屋を訪れることを告げて、四人は姫の部屋を出た。

アルバムが眠るまでの間、じっと待ちぼうけるつもりはない。キアーラはアウルム夫妻に、昔から現在に至るまで、アルバムや夫妻の近辺で変わった出来事はないかと尋ねた。

アウルム夫妻はこれと思うことをキアーラに話した。中々に興味深いものもあるが、どれも関係がなさそう。ただし、十歳と八歳の誕生日を迎えた時の話は別だった。十歳を迎えた日、アルバムはエトリア生誕祭の同様の服を着た司祭連中に祝われて、中にヨティスというカースメーカーの者もいた。ゲンエモンの紹介らしく、本人も特別に誘われたようだ。そのカースメーカーは高齢で既に亡くなったようだが、可能性は無きにあらずなので調べておくことにした。

次に八歳の誕生日のことで、キアーラはこれが一番怪しく思えた。

初代アウルムは何かと8の数字を好み、商売や金儲けでも最後か最初に8がつくことが多かったので、8を幸運の数字とし、当主となる者の年齢に八の数字が付く日は盛大に祝うよう言い残していた。アルバムの八歳を迎えた日はいつもの慎ましく行われる誕生日とは異なり、多くの客を招き入れた豪華なパーティを催した。

これを機会にと、アウルム家にお近づきになろうとする者たちもい

た。大抵の者は受け入れたが、変わった風体の一団も招き入れた。紹介状にはない一団だった。大きな悍馬に黒い馬車、逞しい護衛に美しい侍女たちの連れを見れば、一見すれば高貴な家柄の者たちかと思われる。変わったというのは、一団の長。黒を基調にした金糸銀糸で編み込まれた外套とフードを羽織り、口の端が裂けるほど笑みを浮かべた不気味な黒い仮面を顔をに付けていた。

紹介状がないとはいえ、国外から来たと思われる来賓。無下に断り、後にこの人物がいる国の外交でなんらかの支障をきたしては不味いと、門番と執事は丁重に尋ねた。ついで、執事が失礼を承知で仮面を付けている理由も聞いた。

男はある大国に属していると明かし、アルブム家の姫君を一目見て、祝福を捧げたいと告げた。

「私の祈りには力がある。私は祈りで力無き者たちの憂いを取り除き、当家の姫君のような優れた能力を持つ方が驕ることなく正しき道を進み、その力を大勢の人々の救いになるのを願い、今日、アルブム・アウルム様の下へと参りました。仮面は外せません。何故ならば、私の顔と体は醜く崩れているから。また、私自身への戒めと祈りの力を高めるため、たまった汚れを落とすとき以外、常に仮面を身に付ける必要があるのです。だが、こういう祝いの場でこのような仮面を着けるのは無作法ですし、周りの方達の酒も不味くしてしまうしれない。あなたが望むとあらば、仮面を外しましょう」

執事は突然の来訪者に主人と相談するのでお待ちくださいと言い、実質の当主である夫妻に事の次第を話した。夫妻は通すよう命じ、仮面も外さなくていいと言った。まだ見ぬ一団を少々不気味に思うも、外国の来賓を断る理由もないし、むしろ、そこまでして来てくれたことに感謝の意すら芽生えた。ただ、夫妻は内心、仮面を外されたほうが余計に酒が不味くなるのではという言葉は喉の奥にしまいこんだ。

いざ会ってみたら、不気味な仮面を除けば、本人は意外ときさくで友好的であり、話しているうちに仮面のことも気にならなくなり、事情を知らない他の客も彼を仮装した客の一人と見て、すぐに彼への関心は薄れた。

宴もたけなわ。仮面の男は夫妻に近寄り、アルバムを祈りを捧げた
いと告げた。夫妻は承諾し、大衆が集められて、主賓席に座らされた
アルバムへ男は祈りを捧げた。聞いたこともない言語だったが、あま
り気にとめなかった。最後に、男は侍女の一人に先が異様に細い徳利
状の物を持ってこさせた。夫妻は訝しんだ。男はこれの中身は聖な
る清酒だといい、証拠にと侍女に飲ませ、夫妻は屋敷を守る護衛の一
人に頼み込み、毒見をさせた。護衛の容態に変化はなかった。夫妻は
聖なる清酒とやらをアルバムに飲ませることを許可した。

酒瓶からグラスへ薄紫の液体が注がれて、アルバムは疑問を呈した
表情で仮面の男とグラスを交互に見比べつつ、ゆっくりと中身を飲み
干してお礼を述べた。

アルバムが夢を見るのはとても良い事かとても悪い事が起きる前
触れの時のみ。しばらくアルバムは予知夢を見ずに過ごした。三ヶ
月後、近縁の伯父が一人、山で狩りをしていたときに大きな猪に襲わ
れて、生死に関わる大怪我を負った。近い身内がそれほどの怪我を負
う事態なら、アルバムが何かしらの警告を発するはず。なのに、アル
ブムは伯父が怪我を負う夢を見なかった。

それから、アルバムは滅多なことでは夢を見なくなり、夢を見られ
ば避けえた自体も避けられず。堅固に守りを固めつつ、思い切った行
動をすることもあつたアウルム家の動きは鈍り、築き上げた財を無く
すものかと守りを固めすぎて一種の閉塞感が漂い始め、一族の繁栄に
僅かだが陰りがちらついてきた。アルバムにも冷たい視線が向けら
れた。

そういう事情があつたのかとキアラは無言で頷いた。アルバム
が予知夢を見れないということは、夫妻の立場も悪くなるはず。権威
保持のためもあるのではないかと思つたが、ぶしつけな質問は控え
た。

真夜中を過ぎ、召使いからアルバムが就寝したことを告げられた。
部屋では、アルバムが静かにベッドの上で目を閉じていた。キアラ
は夫妻を見て、無言で微かに頷いた。しばらくは様子を見よう。眠り
にくそうに何度か寝返りをうったり、寝息をはく。予知夢は熟睡する

直前の数分間に見るようらしい。熟睡直前までいつになるやら。一時間近く経ったか。アルバムの容体に変化が表れる。

アルバムはうんうん唸り、呼吸が荒くなる。寝るには快適な涼しい気温にも関わらず、真夏の猛暑で眠っているのかと思うほど汗を流す。アルバムがぶるぶると震えだす。夫人が哀れみな声でアルバムとキアーラの名を叫ぶ。

キアーラは婦人を片手で制し、アルバムの額に左手を添えた。呪術の類は相手に近いほど効力がある。樹海生物ならともかく、今回の相手は自ら眠らせてくれと頼んだ人間。最大限に発揮できる。キアーラは、夫妻にアルバムの近くに寄るように言い、手を握っても構わないと言った。夫妻は遠慮なくアルバムの元に寄り、婦人は手を握った。無理矢理寝かすのではなく、まずは自然に。自分は後押しをするだけである。キアーラは自らも半ば睡眠状態になり、アルバムの魂に訴えかけた。

落ち着きなさい。あなたは一人ではない。あなたにはお父さんとお母さんがいる。友達もいる。今は私もいる。怖がることはない。心を静め、河の流れに身を委ねるようにゆつくりとまた目を閉じなさい。

夫妻もあやすようにアルバムの手や顔に触れ、大丈夫よと声をかけた。アルバムの心が段々と暗く静まっていく。眠りに落ちていく。一安心、と思いきや。キアーラは異変を感じた。アルバムの心が別のものに変わっていく。初めは泥をこねまわしていき、空気が抜けた風船みたいに萎む。そして、キアーラは驚愕した。突如、泥の塊が肥大化し、ぐんと伸びてアルバムの内側に触れていたキアーラに襲いかかる。黒く、でかく、竜か鱈のような巨大な牙だらけの口がキアーラを飲みこもうとする。キアーラはカッと目を開け、大慌てで飛び退いた。

アルバムは身をのけ反らせて、詰まらせたような声で奇声を上げ、夫妻も一瞬、眠ったままの娘の奇行に思わず身を引いていた。アルバムは白目を向いたまま、キアーラの方を見て、くぐもった声で喋った。

「……殺すぞ……」

抑揚のない、冷たい響きに満ちた一言が場を凍らせた。アルブムはがくりと倒れ、意識を失った。予想していたとはいえ、強力なものにとり憑かれていた。執事が血相を変えて入り、婦人が悲鳴を上げてアルブムに駆け寄り、主人は執事に使用人と医者を呼んでくるよう命じた。アウルム氏は乱暴にキアールの肩をつかみ、これはどうしたことだと怒鳴った。

「良くなるどころか、悪くなったではないか！　ああ、所詮呪い屋に頼んだのが間違いの元。早く出て行け」

「あなた様のお怒りはわかるけど、少し私の話を聞いて」

何かを言おうとするアウルム氏をキアールは一睨みで黙らした。樹海生物と戦い明け暮れ、結構な人生を送ってきたキアール。並の相手を黙らせるぐらいの凄味なら備えていた。

「少し落ち着きなさい。まず、はつきり言うわ。アルブム様は呪われている。体内に侵入した異物がアルブムの心ばかりか身体にまで負担をかけている。そして、私一人では僅かに力が及ばない」

「ならば、意味はないではないか」

「最後まで聞きなさい。私は世界中全ての人間を知っている訳ではないし、全てのカースメーカーと知り合いでもない。ただ、私はあえて言う。数あるカースメーカーでも私は屈しの実力者の一人と呼べるぐらいの力がある。つまり、実力のあるカースメーカーをもう一人か二人連れてくれば、アルブム様の内にある呪いを払える。もうひとつ、ここ世界樹の迷宮があるエトリアでは様々な人間が集う。当然、私みたいなあまり歓迎されない人間も。そして、私は腕の立つ同職の者を連れて来られる。お分かり頂けたかしら？」

アウルム氏は理解した。ならばすぐにでもと言ったが、キアールは首を振った。

「今日はもう遅い。この方も今は一応、眠られている。どう取り繕うと、外法な手で眠らせることには変わりなく、生き物の自然の流れを無視した超越行為は身体にも負荷がかかる。明日に備えて、眠れる限り眠って体力を回復させたほうがいい」

「何名来られるのですか」

「さつきも言った通り、私を含めた二人か三人。大勢でやろうとしたら同調に時間がかかる上、お嬢様の負担もその分大きくなってしま

う」
「では、親友と協力されるのですね」アウルム氏の言葉にキアラは片眉をぴくりと動かし、友達ではないと吐き捨てるように言った。

夜には門が閉じられ、本都市には入れない。キアラは一晩止めてもらい、明日一番に行き夕方には戻ると約束した。

水と三分の一にちぎった食パンと薄いチーズ一枚のみ摂取し、キアラは出かけた。

既に事情は知れているので、キアラと門番は互いに挨拶することなく通り過ぎた。花桜の館に近い所にある、老夫妻の住む家の二階をドナは間借りしている。夫妻は要らないと言っていたが、ドナは律儀に宿賃を払っている。エトリア出身の冒険者だからではなく、そういうところもドナが慕われている理由だろう。

予定通りなら、家に居るはず。互いに住む所が近く、情報交換で何度も顔合わせているため、老夫妻はキアラを知っていて、ドナに用事がある言ったら家に招き入れてくれた。お茶菓子を勧められたものの、当然、断った。

「すみません。今は訳あつて飲食を控えなければいけないのです」

キアラはドナに会い、手短かに説明をした。同胞であり国の発展にも貢献している者の一大事を以前から知っていたドナは快諾したが、少し苦笑いを浮かべた。

「それにしても、ピオレが素直に受け入れるかしら。実は今朝、あなたの存在を感知したらしくて、会いたくなくて家の裏側に回ったのよ」
「腕づくでも連れてくわ」

「そう。あの子、繊細だから乱暴はしないでね」

そういうわりには今は普通の笑みをみせている。キアラは一度外に出て、隙間を通り家の裏側に回った。臙脂えんじのローブ、薄茶の外側がえらく太く跳ねたミディアムカット、顔の左半分を赤い刺青で染めた、冷たく見下したような鳶色のジト目の女。鎖付きの鈴をぶら下げ

ているので、語らずとも彼女の職業がカーズメーカーだとわかる。彼女はキアーラを一瞥すると、露骨に顔をしかめた。キアーラもやれやれと溜め息混じりに首を振った。

「ごきげんよう、ピエルパオレ」

「あら、てつきり吸血鬼かと思っただわ。愛称ではなく本名で呼んでいただきありがとう。あなたに愛称で呼ばれるなんて虫唾が走るけど」
ピエルパオレことピオレは早速、喧嘩腰である。二人は仲が良くなかった。実力が拮抗する腕の立つカーズメーカー同士で対抗意識があり、深層を探索する同業者だというのもあるが一番は意見の食い違いだった。

カーズメーカーが堂々と、ましてや自信満々に自らの戒められるべき力を誇示するキアーラの姿勢が気に食わなかった。一歩間違えば、自らの首を絞めかねない危険な能力。自重するどころか実力者とのたまうキアーラを好かなかった。もつと自分の力を理解し、冒険など必要な時に迫られた時以外は無闇に主張するべきではない。周りの者から恐れられ、誤解を生むだけだった。

キアーラは逆で、下手に隠せば余計に自分達は卑屈な奴らと見られる。自分はこんなに強いんだと堂々と誇ること存在価値が認められ、こそこそすることなく大手を振って歩ける。もちろん無闇に力を使うべきではないけど、実際に能力があるなら、自分の力と存在を周囲に認められるように主張するのは当然。爪を隠し続けるだけが能ではないといった。

カーズメーカーとして謙虚にというピエルパオレ。卑下することなく自己をアピールしろというキアーラ。ピエルパオレはキアーラの考えを周りを顧みない傲岸だと言い放ち、キアーラはピエルパオレは自己卑下で固めた保守的思考の持ち主だと言い返した。以来、パーティー同士で会うときにも、二人は極力顔を合わせないようにした。一度、歩み寄ろうとしたこともあったが、互いの根幹にある考え方が受け入れられず、口論というより口喧嘩に発展してしまうので止めた。

味方ではあるが、友とは呼べないし呼びたくなかった。

「あなたほど力に満ちたお方が私の協力を仰ぐなんて、どんな事態か

しら」

「仮にあなたが依頼を受けたとしても、後で私に協力を求めていたでしょう。もう説明するわよ」

ピオレと無駄口を叩き合う気はさらさらない。キアーラは起きたことを説明した。キアーラは役割も分担した。相手を眠らせ、惑わし、動きを封じるのが得意なキアーラ。対するピエルパオレは動きを鈍らせ、相手を畏怖により意のままに操り、ある禁じ手の術はキアーラより僅かに上だった。

キアーラが主体で抑えつけている間にピオレが補助で動作を鈍らして、次にキアーラが補助で抑えている間に形を持った呪いの意思をピオレが操り、自滅させる作戦を提案した。陽が落ちる前にまた来るとキアーラは言いわたし、二人は縁に挨拶もせず別れた。

一旦、宿に戻り、仲間がどうしているか確かめた。シショールが一人居た。「戻ってきて迎えがないのは寂しいだろと思ってな」オールドリッチは予定通り、エドワードの身元引受人兼治療役として陽が昇る早朝前にゲンエモンと出発。コウシチ、ベルナルド、カールロは軽く一階を散歩してくると出かけた。みんなバラバラねとキアーラは言った。

何か知っている者はいないかと思いい、同職の者に聞き込み回ることにした。あの手の呪いは初めてである。少しでも、知りたい。

しかし、一向に有用な情報は聞きだせず、駄目かと思つた矢先、オールドリッチと親交があるヴァロジャたちが迷宮探索から帰ってきて、妹のエリカから話を聞いた。ヴァロジャの実妹エリカは立派な体躯と長身であり、長剣を振るう様は呪術師というよりは戦士そのもの。腰に身に付けた鈴が無ければソードマンかパラディンにしか見えない。竹を割ったような性格で、ピオレが嫌いそうなカースメーカーの在り方をしているのだが、自分と違って陰険ではないためかエリカにはさほど嫌悪していなかった。

「私に技を教えてくれた故郷の師匠が知っていた。あの頃の私は今と違って、華奢な可愛い乙女だったねえ」

「雑談は後」

「せつかちね。私も全て師匠から聞いた訳じゃないけど、人の内側に蛇のような竜を出現させる呪術を解いたことがある。竜は直接触れることができない。特別な呪術で作られたその竜はなんでも、好きな時に人の心を蝕み、身体を僅かに操れるらしいわ。師匠は右手が不自由だったんだけど、そのとき、その呪いにかかった人を助けるための後遺症だと言っていた」

人の内側に竜？ 聞いたことがない。この世にはまだまだ知らないことがある。キアラはもつと話してくれとせがんだが、エリカは申し訳なさそうにお手上げのポーズをした。

「ごめん。これ以上は知らない。師匠は命懸けで消滅させたとしても言わなくて、対策方法は教えてくれなかった。知る必要がないって」

「何故なの」

「この術を使ったら、死ぬか。寿命が膨大に縮むか。異世界の怪物に身を食われる。太古、神や精霊が今より信じられ、私たちのような者たちが敬われていた時代には盛んに使われていたようだけど、たった一人とはいえ他人の人生を好き放題にして操れてしまうような術は危険も大きい。自然と使い手は減り、教える者もいなくなり、今や術を知る者は十人もいないだろう。わしも全ては知らないし、知りたくもない。どんな目的であれ、自らを含めた多くの者を殺めてしまいかねないものは無くなった方がいいと教えてくれた」

今の言だと、エリカはともかく、多分、彼女の師匠は知っている一人ではないのか。知っているからこそ、そこまで詳しいのだろうか。エリカに教えなかったのは、後世に残す意味など無いと悟ったことだろう。エリカも恐らく、気付いているが師の意をくみ取り聞かなかつたと思われる。彼女の師は術者を探り、ある町に潜伏しているのを突き止めた。周囲の証言によれば四十代の男だったようだが、彼女の師が見つけたときには痩せこけた白髪の老人の遺体が横たわっていた。追い出されたショックで術が跳ね返り、自らの術に命を食われた末路だった。

寿命が縮み、死ぬのは本当らしい。異世界の怪物というのは例えで、あくまで呪術により生み出された竜を指しているのかも。

正体不明の呪いと対峙する前に大変有力な情報を得られた。エリカが片手を差し出した。キアラは仕方ないわねと五百エンを渡した。エリカはおっと、目を丸くした。

「気前いいねえ。百エンぽちかと思つた」

「人によつてはそれ以上の価値がある。私の手元には今それだけしかなかった。それより、あなたにも来てほしいのエリカ。私とピオレがこれから対峙する上で、あなたの力強さは頼もしい。ピオレもあなたの前なら大人しいしね」

エリカは少し考えた後、良いよと言つた。「三割程度で手を打つわ」
「謝礼は千エンになるけど」

「金持ちつてのはケチだねえ。まあ、いいわ。恩を売つといて損はないでしょ。兄に伝えてから行くわ」

ピエルパオレ、エリカ、役者は揃つた。

門が閉じる前に三人は出て行き、館に調達した頃にはほどよく陽も落ちていた。今日、お嬢様は早めに寝入ってくれるだろうか。エルパオレは館を見てもさして表情を変えず、エリカは金持ちはこれだからと呆れた様子で微かに首を振つた。

軽く挨拶をすませたら、ピエルパオレがアウルム夫人に質問した。

「もし、今日予知夢を見なかったら、そのまま熟睡するの？」

ええ、そうですと夫人が答えた。そのときはそのときで、また日を改める。三人の予定を合わせなければいけないので、次の日にすぐ来られそうにもないことを事前に断つておいた。

一応、食事は勧められたが、もちろん断る。役割分担をした。エリカは認めたがらないが、カースメーカーの力量は二人より劣つていた。キアラとピオレは必要不可欠な縁の下の力持ちと持ち上げ、エリカを補助に回らせた。キアラは抑え、ピエルパオレは可能なら消滅、あるいは追い出し（術返し）、エリカは徹底的に補助。時間にして九時、アルブム嬢が眠つたことを執事が告げた。三人は立ち上がり、部屋に向かった。

「さて、呪術小町三人衆いざ参らん、てね」とキアラ。

冗談も手を組むのも勘弁とピエルパオレが返した。

部屋には夫妻が待機していた。とても不安気な面持ちで三人を見た。昨日の敗北に加え、関わり合いたくない人種が余計に三名も来て、早いところ出て行ってほしい気持ち言葉にせずとも通じた。金持ちでなくても同じ反応をしていただろうけど、これだから金持ちはと言いたくなる。

まずは熟睡直前まで見守る。昨夜の疲れが残っていたのか、十分程度でかなり眠りに向かっている。娘の傍に寄ろうとした夫妻に、キアラは来ないでくださいと言った。「昨日とは訳が違う。娘を助けなければ、黙って見てもらいたい」夫妻は納得しかねていたが、引き下がった。

三人組はアルブムの額に手を添え、意識を集中した。

白でもない黒でもない。ゆらゆらと揺らいだ灰色の世界がそこにあった。ぼんやりとした人の形が二つ。小さいのはピオレ。逞しいのはエリカだ。灰色に揺らぐ世界は暗く染まる。深い眠りに近づきつつある。暗闇の中に一点、ぐねぐね動く泥の塊が見受けられた。あれよ。言葉にせず、意識で伝えた。泥は肥大化したと思いきや、徐々に萎んでゆく。ここだ。キアラは意識を泥の塊に集中し、泥が怪物になる前に必死に抑え込んだ。

泥はあちこちが伸び縮みし、稀に鋭利な牙のような形になった。エリカの後押しを感じる。現実では、エリカは鈴をきつく握り締め、必死に己が力を振り絞ろうとした。泥の塊は見えない糸に絡まれている、動きが鈍りつつある。お次にピエルパオレの番。

肌身で感じるというのもおかしな表現だが、ピオレは泥の塊から恐るべき力を感じ取っていた。少しでも、気を抜いたら食われてしまう。

ピオレの意思は泥の塊に触れた。そして、一片の躊躇や慈悲も見せず、命じた。

聞け。我に従え。人の手により生み出された形無きものよ。汝に選択肢はない。この者の魂に触れる意味も、汝をつくりたもうた主に従う意味すらない。お前の存在に意味はない。己で思考すること、己で動くことすら許さん。聞け。我に従え。

泥の塊は棘を突出し、ピエルパオレを刺そうとした。エリカの補助が入る。棘の動きが僅かに鈍る。ピエルパオレは何度も命じた。聞け、我に従え！ 畏れよ、我を。

泥の塊の動きが止まった。三人の術がようやく抑え、呪いの竜の支配権を握れた。ピオレは仕上げの時が来たのを感じた。

畏れよ、我を。汝は全ての行為を我の命ずるがままにするがよい。我の最初で最後の言を下す。命ず、自ら裁せよ。己が存在を消しきれ。

泥の塊は始めこそ躊躇っていたが、もう一度、命じられたら従った。何十本もの牙が泥から出現し、牙は容赦なく泥をずたずたに引き裂いた。泥は粉々に砕け散り、細かな欠片が宙を漂っていた。欠片も崩れてゆき、呪いの竜はちりひとつ残さず自らを消滅させた。

ふっと現実に戻る。視界がしばらくぼやける。キアーラはアルブムが寝るベッドにもたれるように座った。脇や背中がぐっしよりと濡れている。息も荒い。キアーラは重たそうに頭を動かし、二人がどうしているか見た。エリカは立っているのがやつとであり、ピオレは放心した様子で椅子にもたれかかっていた。

「ピオレには所詮、耐えきれなかったようね。そこまでの実力だったか」

「……黙れ。根暗」

ピエルパオレは重たく口を開き、ぼそりと言い返した。重圧で心は壊れてないようだ。

キアーラは自らに課せられた最後の仕事をした。アルバム之苦悶に歪められた表情が安らぐ。

「当初の依頼通り、当主様に安らかな眠りを与えました。さあ、汗を拭いておあげなさい」

普段、頭を下げることはない夫人が涙ながら頭を下げて、娘の汗をタオルで吹いた。アウルム氏も警戒するような眼差しを向けつつ、安堵した様子で三人に礼を述べ、今夜はお泊まりくださいと言った。三人はありがたくこの申し出を受けた。とてもではないが、もう動けそうにない。使用人の介助を断り、三人は重い足取りで客室に向かっ

た。キアーラは部屋に入るまえ、小声で夫妻に話しかけた。

「起きたら、食事を用意してください。豪勢なものを。それが報酬ということで」

アウルム氏がそれぐらいなら結構と言った。部屋に入ると、何を話していたとエリカが尋ねた。改めてお礼を言われて、食事をたっぷり用意しておくと言えられた。

翌日。三人はばらばらの順に起きて、ピエルパオレが最後だった。食事はバーゲン方式であり、ピオレは起こしてくればよかったのにと舌打ちしつつ、手当り次第に食べ物を皿に乗せて、貪り食った。キアーラはエリカにこっそりと耳打ちした。

「貰っておいた」エリカは笑みを浮かべた。一家や客人も利用する大理石造りの湯殿も使わせてもらい、汗と疲れを綺麗さっぱり洗い流した。

しばし、休息してから、三人はアウルム家のお屋敷を後にした。帰りにはアルブムが自ら見送りにきた。目のクマは化粧で誤魔化しているが、肌には艶が蘇りつつあった。黄色のドレスが銀髪を映えらせる。アルブム、アウルム夫妻、数名の親戚と使用人に見送られて、呪わしい力が少しでも人の役に立てたことが誇らしかった。

途中、エリカに分け前を求められて、キアーラは千エン札を差し出した。

「なにそれ？ 私聞いてないけど」とピエルパオレ。

「これは、足りなかった情報料に加えて、今回協力してくれた私からの謝礼込みよ」

エリカはえつと驚き、キアーラを見た。「豪邸からの報酬じゃないの」

「謝礼は千エンになるとしか言ってない。そして、あなたは同意した。約束通り、千エン払った。それに、あそこの食事とお菓子だけでも千エン分以上あるし、ただで豪華なベッドと湯殿も利用できた。これ以上なにを望むの？」

エリカはキアーラを睨んだが、一呼吸を置いて、いびつな笑みをみせた。

「してやられたというわけね。これからは、人の、特にあなたの言葉を疑うのを覚えておくよ」

「表裏一体。どれも本当の私。常に疑う必要はないわ」

だから、あんたは好きになれないのよとピエルパオレが言い、エリカが悪戯っぽい笑みを浮かべて同感と答えた。

「それにしても、あの子にあそこまで強い呪いをかけたのは何故かしら」とキアロー。

誰も答えられなかった。仮面の男であるのは明白。何故、どんな目的があつてアルバムを呪つたのか。アルバム個人を恨んでいるのなら、既に呪い殺されていてもおかしくはない。その場合、夢を見る能力はアウルム本家夫人か近い親戚の誰かの子に引き継がれる。アルバムを生かしつつ、呪いをかけ続ける。あまりにも途方ない時間がかかる。単に栄華を極めた一族とその象徴が落ちぶれていく様を見たかっただけなのか。話に聞く仮面の男の正体と動機は不明のままである。

エリカが陽気な調子で喋った。

「大丈夫さね！　今頃、呪いをかけた奴はお嬢の倍以上の苦しみを味わっているか、下手すりゃ死んでいる。あの手合いの呪いをかけるのは面倒臭い準備がいる。お嬢にかけられた呪いは解けた。もう安心！」

そうねと頷いた。連続して悪夢、予知夢を見るということは、それほどまでに大変な事態か。はたまた、とてつもない大儲けに関することかもしれない。地味に聞き込み回るしか術者の正体を知る手段が無いが、そこまでの労力を払う気にもなれない。依頼達成。人の役に立てて、新しい知識と経験も得られた。これだけで十分。アルバムに安らかな安眠が訪れるのを願おう。

だが、三人も、アルバムも知らなかった。今宵、本当の意味での悪夢を見ることになろうとは。

アルバム落ち着いた気持ちで眠った。何年ぶりだろう。眠るのが楽しみなのは。眠るのはおろか、ベッドに近づくのも怖かった。心が

妙にざわつき、予知夢を見ずとも上手く眠れなかった。だが、今はざわつかない。昔は普通だったのに、この感覚が新鮮にすら感じる。もう寝るのを怖がることはないんだ。

アルバムは夢を見た。

ちらほらと雪が舞う。冬だ。今年か、来年の一月か三月まではわからない。空はうつすらと曇りがかっているが、雪が降っているためだろう。

アルバムは自分が宙に浮いている感覚がした。飛んでエトリアを見下ろしているのだ。世界樹も見える。手には地図も持っていた。アルバムはエトリア大都市の外に吸い寄せられた。多くの人々が行き交いする。壁を越えたら、どこまでも続く肥沃な広沃ヶ原が……。

緑の草原はなく、大小様々な黒々とした物で草原は埋め尽くされた。大半は人だとわかったが、怪物と思しきものも混じる。手に武器を持ち、エトリアの一般人から兵士、冒険者を殺める。世界樹に向かう。樹海生物も危険だが、外よりかはました。

世界樹の迷宮の入口に近づいた途端、どつと樹海生物があふれ出て、付近にいた兵士と冒険者を蹂躪する。雪は赤くなり、雪と血でエトリア各地が紅白に染まる。アウルム家の屋敷に火が放たれそこに居る者たち諸共焼け落ちる。アルバムが何よりも恐ろしかったのは、太陽を遮る存在。翼の生えた巨躯。四頭の翼竜ワイヴァーンが高所から滅びゆくエトリアを見下ろしていた。

アルバムは手が熱くなった。地図が燃えている。エトリアから燃えて、火の勢いはエトリアの隣国から隣国へと飛び火してゆき、灰になった。

ワイヴァーンがアルバムのいる方角を見た。急降下して、四頭でも一番大きなのがアルバムを噛み砕いた。アルバムは確かに見た。背中に乗っているのは、黒い仮面の男だった。薄れゆく意識の中、アルバムはしかと見た。焦土と化したエトリアにワイヴァーンが降り立ち、軍団を引き連れ世界樹の迷宮に入る。そして、世界樹の迷宮を中心として各地で大崩落が起こる。軍団も、怪物も、生き残った人々すら裂けた大地は無情にも飲みこみ、大崩落の衝撃の余波で各地も被害

に見舞われ、港がある姉妹都市を津波が直撃し、船で逃がれようとする者たちは波にさらわれた。いつ終わるとも知れぬ破壊と殺戮の後に残るのは、広廃しきった大地に立つ世界樹のみだった。

アルバムは悲鳴を上げて飛び起きた。何事かと駆け付けた使用人たちが払い除け、アルバムは両親のもとへと急いだ。どうしたのだと戸惑いながら、アウルム夫妻は目覚めた。

「アルバムよ、もしやまた」

「お父様、お母様！ 今すぐ荷物をまとめて！ 早く逃げなければ」

「落ち着きなさい、アルバム。何を見たのか話しなさい」

アルバムは震えながら、怯えた様子で語り出した。

「人が。家が。森が。全て消える。燃えて、なにもかもなくなる。エトリアも、エトリアに近い国も。近いうちに全てが滅んでしまう。逃げなければ、早く。持てる物だけを持って、皆で早く、逃げなければ、いけない。竜が来る前に、軍団が来る前に、怪物がやって来る前に」アルバムは嗚咽を堪えた。もどしそうになりながら、最後の言葉を告げた。

「みんな……死んでしまう。エトリアは滅びます」

夫妻と使用人たちは恐怖と驚きが混じった表情でアルバムを見つめた。

三十話 絶望のさなか

——エトリアから遠く離れた国での出来事——。

巨大な贅の限りを尽くした、黄金色で埋め尽くされた宮殿。遙かまで広がる城下町。道路に敷き詰められた石のタイル。広大な田畑と森林地帯。

一見すれば豊かに見えるが、近くにいったよおく見れば、そうでもない。森林は巨人に踏み荒らされたかのように薙ぎ倒された箇所が多く、焼け跡も目立つ。本来、豊かな秋のみりをつけていなければいけない田畑も荒れており、作物もやせ細っている。管理をする地主と農民たちの顔は浮かない。賑やかなはずの城下町もひっそりとしずまり、まだ秋だというのに、閉ざされた密室のように音まで遮断されたかと思わせるほどの静けさ。行き交う人々の顔は暗く、時に疑わしい眼差しを向けあうのもしばしば。要所で血痕、矢を打ちこまれてハチの巣状に開いた壁穴など、戦いの生々しい痕跡も見られる。

最近まで、この国では次世代の王座をかけ、醜い権力闘争が起き、民を巻き込む内紛にまで勃発した。長男、次男、王の隠し子。三人の間で我こそはと争いが起きた。民は無理矢理それぞれの派閥に組み込まれ、仲の良い隣人同士が刃を向け合った。内紛は当然、国を疲弊させて、人々の心は沈んだ。

勝利したのは、一番年上の隠し子だった。陰湿なイジメを受けていた隠し子の恨み積もりは凄まじく、長男次男を殺すだけでは飽き足らず、妻子にまで手をかけた。また、先王と肉体関係にあったという女をつぶさに調べ、その女達から生まれた者は、誰であれ尽く葬った。その際、かけられた報酬に目がくらみ、嘘をつく者が増えた。友を売り、恋人を売り、ときには家族を売る者まで現れた。かつての栄光はどこへやら、国は衰退の一途を辿る。

停滞しきった空気の中、ひとつ、溢れんばかりの熱気に満ちている場所があった。

人生にうみ疲れた者も、疑いの眼差しを向け合っている者たちも、そこに向かうときは瞳に生気が宿った。

この国に来た、英雄。その英雄が語る、自分達の真の敵を倒す。それが人々の心の支えになっていた。

宮中の隣には、一神教の大聖堂が建立^{こんりゆう}。だが、かつてそこにあった最高神の像と、寵愛を受けて、神の位に就くことを許されたと伝えられる八人の神の像は惨めにも打ち砕かれてた。椅子が敷き詰められた大聖堂からは椅子が無くなり、現在では、地べたに座つてある者を信奉していた。大聖堂にはこの国以外の者もいて、余所から来た者もいれば、連れてこられた者もいる。

その大聖堂に騎馬の一団が接近した。陽で肌ばかりか髪まで焼けような、何度か戦場を経験したかと思わせる険しい顔付きの、ざんばら髪の精悍な男が騎馬集団の先頭だった。

彼が近くを通ると、カセレス様と人々は頭を下げた。カセレスは自分の名を呼ぶ人々を一顧だにしない。今も昔も盗賊である自分が、英雄取りでにこやかに笑顔を向けるのは苦手であり、これからもそうしないだろう。カセレスと呼ばれた男は大聖堂に到着すると、自らが仕える主の下へと急いだ。裏手を周り、今や王よりも寵愛を得て、王からも頼られる男が住まう深く掘られた地下道を目指す。

松明を持たせた二人の部下を先頭にして進む。小さな鉄扉がある。数回ノックをし、合言葉を告げる。

「全ては闇にある」

内側から門が開く。鉄扉を開くと、中は広大な空洞が広がる松明以外の灯りが存在しない真の暗闇。空洞の正面の奥では、灯りでぼんやりと形作るものがあつた。近づくとつれて、影は明確に形作り、金糸銀糸のマントを羽織る黒い仮面を身に付けた者が王座に腰掛けていた。

カセレスはムツと眉をしかめた。何度来ても、空洞に溜まる腐臭は慣れない。全て、彼の吐く息と、王座の裏に隠された秘密の地下通路から漏れ出た空気のせいだ。仕事の時を除き、大勢の前では吐かないはずの臭い息をここでは遠慮なく吐いている。仮面の隙間から、しゅーしゅーと、リズムカルな吐息の音がする。カセレスは単刀直入に申しあげた。

「戦をするのか」

「そうだ」

仮面の男は率直に答えた。濁されるかと思っただけに、素直に返されて、カセレスは逆に動揺した。彼はいつもそうだ。先を読み、普通なら思ってもみないことをする。知り合つたばかりの頃、彼が仮面を付ける前の時代。ある特別な力で常人とは異なるのを除けば、まだ自分のようなそこらの無法者の面をしていた彼ならば、まだ何を考えているか読めたが、ある日を堺に彼は一気に変わった。包帯で顔をぐるぐる巻き、おまけに仮面まで付けたとあつては、表情から読み取ることなど不可能。

彼は昔、大層な美男子であつたが、あることで自らの鼻を削いで顔を焼き、おまけに片目まで奪われた顔は見るも無残なものになつた。もつとも、仮面を被る理由はそれだけでない気がしていた。

彼が変わつたのはそれだけではない。人々を扇動し、あまつさえ翼の生えた恐ろしい存在まで手なずけるほどの力を手に入れた。姿や声、仕草は彼のままなのに、彼以外の別の何かが宿つたと思えない。しかし、せんじてでも仕方ない。

彼は片手を挙げて、まだ喋ろうとするカセレスの言を制した。彼に手を向けられた瞬間、圧迫感に襲われ、寒気もした。自分が道端を歩いている虫けらのごとく踏み潰されるイメージがありありと湧いた。一番の古株であり、比較的優秀だからといって、立場を忘れてはならない。

彼が王座に手を戻すと、圧迫感は消え、身を切るような寒気も無くなった。誰も口を開かない。勢いよく乗り込んだカセレスも、彼の威圧に吞まれて口を利けなくなった。仕方なしと言わんばかりに、彼自らが沈黙を破つた。

仮面を被っているわりには、くぐもつてない。さきの大蛇がうなるような吐息から一転、よく通るバリトンボイスになつた。

「お前の心配は解る。だが、まずは私の話を聞け」

カセレスと側近の者らは居住まいを正した。

「ある者にかけて呪いが消えた。その者はよく当たる予知夢を見る事

で評判の女。すぐには信じなくても、繰り返し主張をすれば、女の言うことを信じる者が増えるはず。だから、女の言がまだ戯言と思われている、防備が薄い今のうちに行くのだ。無論、それだけが理由ではない。お前ならわかるな」

カセレスは頷いた。理由はそれだけではない。彼は暑い時期が大嫌いなのだ。

彼は夏や春、暖かい時期を嫌悪していた。そして、その時期になると心なしか弱まっている気すらした。そんな弱まった大将を見て、従う者はいない。だがしかし、秋、ことに冬となれば別。普通の人間なら動きが鈍りそうなものを、彼は正に水を得た魚の勢いのごとく活発になり、全てにおいて力強くなる。実際、人間を含む生物が寒さに凍えて、生命の活発さが失われていく時季、逆に彼は生き生きする。命から輝きが失われていき、力が弱まり、寒さで震える様を喜んでいなのだ。

厳しい自然環境にめげるところか活力を得る彼を見て、彼に従うある思念の下に統一された従順なる駒共は寒さを忘れて身を粉にして働く。

時間だと言い、彼は暗闇の王座から立ち上がった。カセレスたちは道を開けた。

カセレスと側近の者たちは空洞を出て、新鮮な空気が吸えてホツとした。あそこでは本当に息が詰まる。

地上に出て、彼の姿が目に残るや、人々は目をらんらんと輝かせて、次から次へと近い歓喜の声が城下町にあまねく勢いで広まっている。歓喜の勢いは広まりにつれて熱を帯びていき、やがて狂気へと変わり、一心不乱に彼の名を叫んだ。カセレスは彼の名を一様に口ずさむ歓声を不気味に思った。彼らの瞳の奥には喜びとは別の感情。抗わないよう、徹底的に服従の証を体に刻み込まれて、調教された奴隷が見せる眼差し。恐怖、もしくは絶望。人々は尊敬よりも、彼に対する恐怖の方が強かった。

彼が一言、誰かを指して殺せと命じれば、喜んでその命令を聞くだろう。あるいは彼が自ら手を下すときも。忘れたことはない。出過

ぎた真似をして、皆の前で処刑された者たちのことを。彼らは絶叫を上げて、吐瀉物を撒き散らし、急激にやせ細って髪が抜けて白くなり、恐怖に歪められた顔で絶命していった。

人智を超えた力で人が殺められるのを見た時、カセレスなどの長いこと修羅場に身を投じてきた者すら恐怖を抱き、多くの者たちは戦慄した。そんな彼が自分達の味方をすると言った時、人々は躊躇いなく彼に従うことを決めた。彼への恐れのため。

そして、殺されたくない。見放されたくないといった感情以上に、彼という対象を崇めることにより、彼が自分達に恐ろしい力を使うこともない。それどころか、自分達を守ってくれるはずという安心感を得ていた。実際のところ、彼は意味不明な動機かつ完全に私利私欲で動いているのだが、そのことを本人はもちろん、カセレスなどよく知る側近が言うはずもないし、言えるはずがなかった。彼らもまた、彼に対して尊敬以上に抗いがたい恐怖の念で縛られており、多少の意見は述べることはできても、逆らうことなど死に等しい。

また、それとは別に、人々は彼のある秘密を知りたかった。彼は不死身だった。

大勢が居る前で起きたことで、彼は自らの命を狙う者たちに剣で刺されても、彼は死なず、血の一滴も流れなかった。そして、自らに突きたてられた剣で逆に相手を殺したのだ。人々が恐怖とは別に、彼を敬うもう一つの理由があるとすれば、多くの権力者が願った不死身の肉体になる方法を聞きたいがため、王も民も彼を信奉した。

大聖堂にの演説台にあがった彼が顔の高さまで片手を挙げると、聴衆の賑わいは静まった。

彼はよく通る男の声で語りかけた。

「みなよ。よくぞ来てくれた。さあ、我らの新天地へと向かう時が近づいた。だが、新天地には大きな障害がある。それは何かわかるかな？」

彼の問いかけに聴衆はざわつき、自然だという者もいれば、怪物がいるからだという者もいた。

「確かに自然も脅威だ。怪物もだ。しかし、一番の脅威であり、最も恐

ろしいのは、偉大なる世界樹の富を貪り、

無知なる者たちを送り出して更に富を得ようとする者ら。そう、エトリアだ!! あの野蛮極まりない彼らがこともあろうに、地上の奇跡とも呼べる世界樹に根付き、肥えた大地に恥じらいなくのうのうと居座っているのだ。我らの国と裏で通じ、此度の戦の原因をもたらした一つである彼らは安穩と惰眠を貪っている。こんなことが許せるか!?! いや、断じて許してはならない。私から大切なものを奪い、あまつさえ、他国にまで手を伸ばそうとする欲深き輩に反旗を翻すのだ」彼の声に耳を傾けていた聴衆は憤怒の表情に変わり、誰かがエトリアに死をもたらすべきと叫んだ。その誰かは、実は彼の部下であるが気付く者はなく、そうだそうだと同調した。

「そうだ。許してはならん。我らのあるべき繁栄を奪った原因を隠し、善人面をする卑怯者を生かしてはならない。エトリアだけでは無い、エトリアに関わる全てのものにもだ。正義の鉄槌をエトリアに下し、奴らの謀略で築き上げた物を全て奪い返すのだ。勝利と力は我にあり!」

彼が両手を高々とかざしたのを合図に、黒い影が突如として大聖堂一帯を覆った。人々は膝をつき、ある者は頭を抱えて恐怖した。

風を力強く切る羽ばたく音。それらの内一体は咆哮した。落雷のごとき咆哮に多くの者が耳を閉ざした。

黒い影は四つに別れ、一体は彼が居る大聖堂に着地した。着地の衝撃で大聖堂は全体を揺らしたが、崩れることは無かった。蝙蝠のように薄く、先端が恐ろしく尖った被膜の翼。翼の内側や腹は赤みがかつた金属身を帯びた橙色で、背中や表面は淡い緑の鱗で覆われている。尻尾は大木のように太く、蛇みたいにくねる。頭は鰐に近く、弓なりに歪曲した黒い両角が目元の近くに生えて、上顎は槍の先端のように出っ張っていて、下顎はギザギザと細かく鋭い棘だらけ。虚ろな朱に染まった瞳孔はどこを見つめているかわからない。

世にも恐ろしき翼のある怪物の出現に、聴衆は怯えた様子で彼と怪物を交互に見やった。

「私とこれらがいる限り、敗北はありえん。見よ」

彼は怪物に向かつて、左手の人差し指を指揮者のタクトのように素早く振り下ろした。すると、怪物はびくりと身を硬直させて、そのまま大聖堂の上で身を伏せて、彼に従う意を見せた。

「見よ。空の支配者ワイヴァーンですら、私の前では赤子同然。何も恐れることはない。君たちは私の言葉に従い、動けば、全て上手くいく。現世でも来世でも、幸福になれるのだ。私に従えば多くのことを約束しよう。さあ、時は来たれり。準備を進めるのだ。エトリアへと攻め入り、我らの新たな架け橋となる新天地を築き上げよう。私の協力者たちにも手伝ってもらおう」

カセレスら幹部は頷き、彼に直接使えることを認められた七人の勇士の内、身辺警護で残留した二名は無言で彼を見上げた。カセレスの背後には屈強な金髪の男たちがいた。聴衆を見る目は侮蔑で充ちている。また、困惑な表情を浮かべた、灰褐色の鎧と冑を身に付けた黒い髪と瞳の黄色人種の者たちもいた。

この狂った歓喜を冷静に眺め、騒ぐ民衆をすり抜けて行動する者がいた。彼はエトリアから来た密偵だった。彼は人気のない路地に入ると、ドアの無い朽ちた空家の窓に石を投げ入れた。一人の男が顔を出し、頷いたら、彼は空家に入った。

「大変な事になった。事態は急を要する。私は一度、祖国に帰る。君も一度、逃げたほうがいい」
「お互いの無事を祈る」

密偵は籠に居る隼の両足に小さく折り畳まれた紙を一枚ずつ巻き付けた。頼むぞと言って、隼を籠から解き放つ。隼は建物の間を潜り抜け、あつという間に町はずれか森の方へとたどり着いた。後はあの隼が弓や鉄砲、あるいは地上に住まう怪物たちの目から無事に逃れて、仲間たちの居る所までたどり着くのを願うばかり。

残る自分達二人であったが、彼らが帰途につくことはなかった。何故なら、彼らもまた見張られていて、欲に目がくらんだ近隣の住民が彼ら二人を金に換えたからだ。その住民は密偵の協力者である男とは縁はあった。自分の困窮に耐えきれないのもあったが、それ以上に実質この国を支配する者への恐れから、男は自分が助かるために友を

売った。必死の逃亡も虚しく、二人は屈強で残忍なことになれた金髪
の兵士達に捕まり、長い拷問の末、見せしめとして処刑された。しか
し、二人は頑として口を閉ざした。たとえ事実をすぐに明かしたとこ
ろで、とうに遠くへ飛び去った隼に追いつける者はいなかっただろ
う。

処刑の時。王自らが彼らのありもしない数々の罪状を読み上げ、仮
面の男が自ら手を下した。仮面の男が通る際、王が男に僅かながら会
釈するところを目撃した者が何人かいた。王が一介の先導者に頭を
下げるなど、今やもう、大国の全てを男が握っていることを図らずも
知らしめた。間際に密偵の協力者である男が傷だらけで生々しい面
を上げた。故国の現状を憂い、仮面を常に被る悪魔から国をなんとか
して守ろうとした男は相手に向かって唾を吐きかけて、これを最期の
花道にと、乾ききった体と鞭でずたずたに裂かれた口から大声を絞り
出した。

「暴君に死を！ 悪魔の導きに未来はない！」

仮面の男が無言で二人に手をかざした。黒い靄が二人を包む。二
人はがくがくと打ち震え、髪の毛は白くなつたと思いきや一気に抜け
落ち、二人は骨と皮だけになった。二人のしわくちやだらけで虚空に
見開かれた目を見る者の背筋を凍らせて、護衛についていた者らも彼
から怯えた表情で離れた。一瞬の静寂ののち、彼の名が叫ばれた。

「エトウ様万歳！ 偉大で高潔なる義賊の生まれ変わり！ サンガツ
ト大国の真なる守護神エトウ様！」

一様に天に向かって拳を突き上げた。民草は仮面の男、エトウの名
を合唱した。

少なくとも、彼を敬う限り、彼がその力を自分達に振るうことはな
い。彼の機嫌を損ねなければ、この愚か者二人の末路を辿る心配はな
い。民衆は二人のむくろに石を投げつけ、罵声を浴びせて引きずり回
した。二人は死んだ後も散々辱められた。

だが、二人の死は決して無駄にはならなかった。二人が捕まった翌
日には、隼は無事に目的地に着いたのだ。そこから更に多くの手紙が
陸路と海路、ときに空を渡って急ぎ、エトリアを目指して送られた。

*

*

二頭の馬が牽引するのは、どこにでもありそうな木でできた荷車とそこに乗る三人の男。内一人は憔悴し、顔や手足に生々しい傷跡があるものの、穏やかな顔つきで眠っていた。

目が覚めたとき、木漏れ日の光がいたく目を刺激した。喉が刺さっているの、ぼそぼそとした小さい声になってしまう。

「太陽の位置からして、昼に近い」とオルドリツチがエドワードに教えた。

爪を剥がされた右手の小指や身体の節々に痛みはあるものの、動けないことはなさそう。ねずみ色の地味な着物を羽織る、ばさばさした白髪とヒゲが目立つ男、師であるゲンエモンから無言で薄めた酒を入れた水筒を渡された。喉がぐりぐりと動き、からからな舌が膨らみ、満足するまで飲んで口から水筒を離れた直後、じわりと唾液が口の中に広がる。ようやく、身体的にも生き返れた。後は腹さえ満たせばいいことない。

一体、なにがどうしてこうなったのか。皆は無事か。あの女は結局、何者で、誰の差し金で来たのか。聞きたいことが山ほどある。エドワードは両手で体を押し上げるように持ち上げ、荷車の囲いにもたれた。エドワードはゲンエモンに尋ねた。

「今の状況を簡潔に教えてくれませんか？」

ゲンエモンはううむと顔をしかめた。言うのを躊躇っているようにも見えるし、怒っているようにも思える。ふうと鼻息を吐き、「あまり良くない」と言った。

わかりきつてはいたが、形はどうあれ、所詮は余所者。その余所者が自国で殺人を犯したのだから、唯では済まされない。ホープマンズと一族の者たちへの信用と信頼は落ちて、今は表だった接触が避けられているようだ。ゲンエモンが安心せいと告げた。

「お前さんの仲間や家族と同胞には今の所、あらぬ危害を加えられてはおらん。周りから一分距離を保たれ、心無い好奇と冷たい猜疑の目は向けられているがな。それにだ」ゲンエモンはエドワードの肩に右手を置いた。「全ての者が見捨てた訳ではない。お前さんを慕う

者、ホープマンズと家族の者たち、そして、わしやオールドリッチ、ガ
ンリユー、オルレスやシリカなど。一部ではあるけど、お前の事を信
じ、味方する者たちがいることを忘れるな」

エドワードは無言で頷いた。一人彷徨っていた頃とは訳が違う。
今の自分には、自ら以外にも頼れる者がいる。

「さてと、聞きたいことが山ほどあるのはお前さんだけではない。あ
の、ナザルなる頑迷という言葉がびったり当て嵌まる男の話だけでは
いまいちわからんし、信じられん。着くまで時間はある。時間の許す
限り、エドワード、お前の身に起きたことを話してくれ」

エドワードは経緯を語った。女将から手紙を運ぶように言われた
こと。いぎ、港に行ったら、娼婦が絡んできて、背を向けたところを
ナイフで刺そうとし、仕方なく反撃。怪我を負った女を介抱しよう
と、女が持っていた薬を飲ませたら、おまぬけにも自ら一服を持って
しまったこと。ナザルの拷問の下りは避けた。ゲンエモンは、女将は
例の知り合いから話を聞いたらしいが、そんな部下に手紙を託した事
実はないと言ったらしく、つまり女将も騙されていたのだ。

もう少し、冷静に考えれば良かったのにとオールドリッチは言った。
エドワードは少しムツとして言い返した。

「あの状況で至極冷静に行動なぞできん。人に囲まれ、槍を向けられ、
女が血を吐いて倒れていては。まあ確かに、少しでも疑うべきだつ
た」これ以上の言い訳は見苦しいと思い、エドワードは口を閉ざした。

人生山あり谷あり。ゲンエモンが教えてくれた言葉を思い出した。
人生良い時と、悪い時は続く物というが、よりにもよって、順風満帆
な時に来なくても良かったのに。上手く行かない場面は何度もあつ
た。めげていても意味がない。即座に行動あるべしと心がけていた
が、今回はショックが大きい。溜め息の一つぐらい吐いても文句はな
かろう。

「そうそう、オルレスがお前さんが裏でこそそそしている訳を教えて
くれたぞ」

ゲンエモンは何気なく言ったつもりだろうが、エドワードはえつ
と、思わずゲンエモンを凝視した。

「全部ではない。ただし、今回は事が事だからと、わしなら信用できると教えてくれた。掻い摘んでな」

エドワードは馬の手綱を握るオルドリッチの背を見た。彼もわしと同じくらい既に事情を知っていると云ったので、エドワードは安心した。ゲンエモンは神妙な目付きでエドワードを見た。なんとなくだが、肩を落としているように思えた。ゲンエモンはぽつりと言った。

「お前さんがまさか、工作人員をしているとは夢にも思わなかったわい」「いえ。あくまで、最低限の協力をしているだけであつて、完全な手先になつた訳ではありません」

「同じようなものだ」

エドワードは居た堪れない気持ちになつた。事を説明するのには時間が要る。エドワードが話しづらそうなを見て、ゲンエモンは穏やかな口調で問いかけた。

「話せる部分だけ話せば良い。例えば、見返りにこういうのを貰つたとか」

「いいえ。金や高級品の類を一度も受け取つたことはありません。ただし、条件を三つ要求しました。一族が復興するまでの間、難民を受け入れ、捜索に協力してほしい。生活は始めの内だけ保障してくれ、後の生活はこちらでなんとかするとも。私がコルトンとコンピを組んでから半年後、難民が一組来たのを覚えていますか？」ゲンエモンはうむと頷いた。「私は頑張りました。そして、コルトン、特にあなたはとても協力されてくれた。だが、それだけでは駄目だったので。将来的に何十人と来るのなら、まあ色々面倒な手続きの他にも、問題が出てくる。だから、彼……オルレスがこう言つたのです。受け入れの手続きや問題に手を貸すのを条件に、少し働いてくれないか？持ちかけられました。こういった国柄ですから、暗殺とか物騒な仕事はありません。手紙や荷物の受け渡しをしたり、あるいは執政院からのミッションという形で下されることもありました。モリビトの一件が良い例ですね。断れるはずありません。今の関係が無くても、自分達の立場が認められることを思えば、結局は参戦しましたが」

エドワードが語り終えた後、オールドリッチが口を開いた。

「色々と聞きたいことはあるが、自由うんぬん言うお前は、そういったこととは無縁の人間だと思っていたよ。思い込みはいけないな、うん」

嫌味っぽく、皮肉めいた喋り方だったので、エドワードは声のトーンを落として、何が言いたいと尋ねた。

「裏切られたとは思っちゃいないさ。俺の仲間だったらショックを受けるが、あんたは俺らの一員じゃないさ。ただな、あんたの仲間はどうか。俺だったら、少なからず、裏切られた、騙されたと思うね。あくまで俺個人はな。あんたの仲間がどう思うかは知らん」

エドワードはゲンエモンを見つめた。

「まだ明かしてはおらん。自分の口から伝えるのだ」

ゲンエモンは佇まいをただし、正座をしてエドワードを見下ろした。エドワードは全体を押し上げるようにして、姿勢を真っ直ぐに正した。ゲンエモンの声は、優しいものから一変、修行の時の厳しい物に変わった。

「エドワードよ。人には誰も隠し事がある。わしにもな。だが、長く隠し続けるとその分、段々と明かしくなくなり、取り返しのつかないことになる。お前と仲間はまだ若い。多少、わだかまりも生まれるかもしれないが、きつと乗り越えられる。勇気を持って、全て話せ。おのれと、仲間の器を信じよ」

「ですが、あれとの約束では」

「彼がもう少し言ってくれた。本当に信じるに値する数名のみ、話しても良いとな」

「オールドリッチ、馬車を止めて、良いというまでの間、離れていてくれないか？ お前は師でも無ければ、俺たちの一員でもないし」

オールドリッチはチツと、舌打ちをして、馬車を止めた。エドワードはやつと言い返せて、これでもかどほくそ笑んでみた。オールドリッチは軽くふんと鼻息を鳴らし、概ね五十メートルも離れた位置にある木陰にもたれ、二人の話が終わるのを待った。

幾分が過ぎて、エドワードがおーいと叫んだ。オールドリッチは何も

聞かず、二頭の馬に再び前進するよう、手綱を引いて命じた。聞かなくても、ゲンエモンの渋面を見て、エドワードが語った事があまり明るい内容ではないのを悟った。

本都市に着いたら、まずは家族に一目会いたい。次は、パーティーのメンバーにも。願うなら、一回で会いたい。エドワードは詳しい事情を家族に話す気は無かった。余計な重荷を背負わせたくなかった。それでなくても、今回の一件で随分と苦労させられているのが目に見える。ゲンエモンを除けば、血を越えた絆で結ばれたあの五人にこそ、話しても良いと思えた。いずれにせよ、話す必要がある。時機が早まっただけだ。自分がしばらくの間、迷宮踏破を目指す冒険者ではなく、かつてのように、長い旅路をゆく旅人へ戻る前に。

その前にどうにも腹が減ったので、エドワードは二人に食べ物があるか聞いた。オールドリッチが後ろ手で水筒を渡した。

「一定の絶食が続いた状態でいきなり固形物を摂取したら、腹を壊す。野菜が崩れるまで煮込んだスープが入っている。それを飲んだら肉をやる」

エドワードは素直にありがとうと礼を述べ、ゆっくりとスープを飲み、ゲンエモンから渡されたミカンと干し肉にかぶりついた。いまの自分にまずできるのは、食べて体力を回復するところからだ。

三二話・暴露

本人の状況と体調的にも会いにくいだろうと思い、ゲンエモンとオルドリッチはエドワードの一族が住まう居住区がある、広沃ヶ原こうよくがはらと呼ばれる西側を避けて、北側の門に向かった。

ほんの少し前まで、門を守る衛兵たちは親しげな表情を浮かべていた。初めからいまいましいように無視をするのは以前からなのでともかく。

いまは、疑い、冷たい、戸惑い気に目を逸らすのいずれかである。エドワードはこれだけで、自分の置かれた現状を痛感した。と、エトリアを囲む高く分厚い壁を見て違和感を覚えた。

要所で黒く日差しを反射していた。違和感の正体はすぐに気付いた。建築作業員、もしくは兵士達がアジロナ外壁の更なる補強にとりかかっていたのだ。

橋を渡り、外壁の内に入る。前まで憩の場として使われていた外壁と街を隔てる平地には人が少なく、訓練をする兵士しか見当たらない。

もともと、平地の目的は兵士の修練の他、災害時における避難所。有事を想定したものであり、外壁の背後にある広い平地に軍や兵器を敷く。

老人の散歩コースや子供の遊び場として使われていたのは間違いないのだが、裏を返せば、そうする必要がない平和な時代が続いていた証拠でもある。

少年時代の昔、戦の準備をしていた周囲の尖った雰囲気を出し、エドワードはまた少し暗い気持ちになった。

「お前はこれからどうするのだ？」とゲンエモン。

「まずは長鳴鶏の館に居る彼らに事情を説明してきます」

エドワードは荷車から降りた。ゲンエモンとオルドリッチは肩を貸そうかと言ったが、断った。

「いつまでも甘える訳にはいきませんよ。それに、今は少し体を動かした方が気が楽です」

「あいわかった。だが、お前を宿に連れて行くよう言われたのだ」

三人は裏道を通り、できる限り人目を避けて、長鳴鶏の館に到着した。

中には数名の従業員と同業者がいた。従業員はともかく、同業者たちは話しかけずらそうだったので、エドワードは声をかけるのを控えた。

ゲンエモンはここでお別れだと言った。

「どうしてもというのなら、わしも行くが」

「いえ、これは俺の問題です。それに、あなたにこれ以上、迷惑をかけられない。どうもありがとうございます」

エドワードはオルドリッチに軽く一礼した。オルドリッチは手振りですぐ早く行けと促した。

二人の背を見送ると、エドワードはまず一階に居るアクリヴィとマルシアを訪ねた。ドアを開けたのはマルシアだった。事前に帰ることはゲンエモンから伝えられていたので、そこまで驚いた様子はないかった。

二階に来てくれと告げた。マルシアと椅子に座るアクリヴィは首を微かに縦に振った。エドワードがドアを閉めようとしたら、マルシアが押し止めた。

「行く前にあなた、身体を洗ったらどう。臭うわよ」

嫌な目を向けられた理由は一つではなかった。言われてみれば、たまに鼻を塞ぐ仕草をする者もいた。

ジメツとしていて、油虫が何匹もごそごそと出てくる汚い所にいたせいだろう。

エドワードは二人を先に行かせて、宿の裏にある井戸を借りて、軽く流した。冷たくなってきた秋の水は気持ちよく、身と心を引き締める。清潔なタオルで拭き、灰色の地味な出で立ちに着替えた。

いつもなら、ノックをせず入るのだが、今回ばかりはノックをした。三回、握り拳で軽くこづいた。どなたですかと、若々しく優しい声の男が答える。ジャンベだ。俺だと答えた。

「エドワードさん」と言っ、ジャンベは嬉々としてドアを開けた。こういう状況で、ジャンベの純粹さは救われる。隠しきれない痣や傷を

負ったエドワードを見て不安気な表情を見せたものの、何も聞かず、見慣れた愛嬌のある平たい鼻の黒人の青年が笑みを浮かべてリーダーを出迎えた。

喜びを隠さないジャンベに対し、中にいるコルトンとロデイムの二人は予想通りというべきか。ロデイムはぶすつとしていて、コルトンの顔付きはやや険しかった。五人に目立った外傷はなく、特に危害を加えられた様子を無いのを知って安堵した。

別件の殺人の疑いをかけられたのはコルトンだと聞いた。彼の機嫌が悪いのもそのためだろう。

彼は兵士達の只ならぬ気配を察し、馬首を転じた。

その判断は正しく、上手く本都市まで着いた彼は衛兵に捕まる前に、オルレスが来たので難を逃れた。

ゲンエモンから聞いた話だと、彼はその間、表を歩けなかったらしい。ごちゃごちゃと口喧嘩をするのはご免こうむりたい。

一言謝罪して無用なトラブルを避けられるのなら、そうしよう。ドアが閉められたのを確認すると、エドワードは即座に謝罪した。

「すまん。迷惑をかけた。だが、お前達が俺のような目に遭わずにすんで安心したよ。詫びと言ってはなんだが、訳を話そう。愚痴はその後で聞く」

コルトンはなにか言いたげだったが、すぐに謝られて、エドワードの痣と右手小指に太く巻かれた包帯に気付いた時、険しい物思いが消えて、エドワードの眼を真っ直ぐに見つめた。

すぐに謝るのは良し。だから、話を聞こうという態度だ。他の者も口には出さないが、こうなつた経緯と訳とやらを聞きたいのは明らかだった。

「今から語る長い訳を話す前に一つ断っておくことがある。この話を聞いたら、俺だけではない、お前達も一蓮托生で責任を負わせてしまうことになる。だから、俺の話を聞いてもらう前に聞いておくことがある。いや、警告というべきかな。部屋を出るなら今の内だ。今までのような、手強い怪物と戦うとの異なる。そのことを覚悟して聞いてもらいたい。付け加えれば、何から何まで全てを話す訳ではない。

俺が知らないことは答えられない。わかったか」

ジャンベがうんと頷いた以外、誰も反応を示さない。すると、コルトンが口を開いた。

「これまで、何度も窮地を潜り抜けてきたんだ。今更、ちよつとやそつとの脅しでびびる者は誰もおらん」

「では、全員了承したと考えていいな。なら、真ん中に寄つて小声で話そう。もう一度言うが、離れるのなら今がチャンスだ」

全員、部屋の真ん中に互いに椅子を向けあう形で置いた。エドワードは最後に椅子を持ってきた。

エドワードは全て話した。受け入れのために諜報員になったこと。殺人の疑いをかけられたことも。ナザルの名は出したが、自分が拘束されていた期間にどういふ目に遭わされたかまでは語らなかつた。そして、ゲンエモンにしか言わなかつたことをいよいよ五人にも話すときが来た。

「今から話すのは、オルレスなど一部の者を除けば、まだ誰も知らないことだ。よく聞いてくれ。今すぐではないが、俺は多分、近いうちに旅立つ。大国サンガットを目指して」

片手を挙げて、なんだと声を上げそうになったコルトンを制した。

コルトン以外の四人も今度ばかりは動揺を示した。それもそのはずだった。

大国サンガットはエドワードが居た国と一族を滅ぼし、コルトンの国も亡ぼしかけた国なのだから。

「何故、サンガットが？ いくらエトリアの資源が豊富だからって、遠い上に、今はそんな余裕は無いはず」とアクリヴィ。

アクリヴィの言ったことにジャンベは頷いた。エドワードやエドワード以外の者からもたまに聞いた。

近頃は内部分裂をしているらしく、他国を攻めている余裕は無いはず。

それなのに、エトリアに攻めにくるとは。

話を聞く限りでは、現在の状況でメリットよりもデメリットの方が明らかにでかいのではないかと、政治に疎いジャンベでもそう思え

た。それらの疑問はエドワードがすぐに答えた。

「ところで、エトウは知っているな？ 最近、世直しどうのとほざく馬鹿げた盗賊共だ。どうやら、大国と繋がっているらしい。エトウがどこからか集めたならず者の集団に加えて、サンガットの兵や彼を慕う国民が傘下に入り、他国へとあくまでサンガットとは関係ない王賊連合として侵略並びに略奪行為をしているようだ。そして、これはまだ推測だが、エトウはエトリアの元冒険者の可能性があるらしい」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

ロデームがおとよろめきながら、立った。

「エド、俺はあめえさんの言う話があまりにもでかくて、何度も叫びそうになったぜ。こういう話は余所でしたほうが良くないか」

驚きたい気持ちは誰もが理解した。余所で話した方が良いというのも、一理あるとジャンベは思った。カーテンは閉めているので覗かれる心配はないが、誰かが聞き耳を立てているかもしれない。ジャンベはちらちらと窓やドアを窺った。

「そうかもしれないが、俺たちの今の立場を考えろ。帰ってきたばかりの俺がお前達を引き連れて、どこか行くのは逆に目立つ。部屋に集まるほうがまだ自然だ。さあ、座れ。青髪小僧」

青髪小僧と呼ばれて少し眉根を寄せたが、ロデームは大人しく席に戻った。

「正体は判明してないが、サンガットに潜入していた工作員と協力者がもたらした情報をまとめれば、可能性は高いらしい。常に黒い仮面を被る男で素顔を見た者は誰もいないが、男であるのは間違いないらしい。年齢は二十代から七十代ぐらいと思われる」

「随分とばらばらね」とマルシア。

「時に若く力に満ちた声を発したと思いきや、長い年月を生きた、叡智に満ちた老いた賢者を思わせる重々しい声を発したりなど。声音を自由自在に変えて話すから、年齢に関してはいまいちわからなかったようだ」

コルトンがううむと唸った。

「では、かの大国の王はそいつに命じてエトリアを攻撃する腹積もり

か」

「ところが、そうではないらしい」

エドワードは間を置かず、話した。

もしも、談笑できる場で、エドワードが誰に話しても構わんと気軽に言っていたら、大袈裟なりアクションを交えて声を上げていただろうとマルシアを除く四人は思った。

「サンガットの一神教に関する像は砕かれ、書物の大半は焼かれ、エトウなる輩が大国の生ける神として国民以下、王もそいつを信奉しているらしい。王に力は無くなり、彼の言動が王にとって代わった。今やかの大国の政権や軍事力は実質、正体不明の仮面の男の手に握られて、彼の一挙一動に大国の者たちは従っているようだ。にわかには信じ難い事実だがな」アクリヴィイが口を挟んだ。「サンガットは一神教を軸にまとまっていた強国のはずだった。だけど、内部分裂で王族だけではなく、国民の血が多く流れたことにより、神という形無きものから、確かな力とカリスマ性のあるそいつに魅かれた結果、国を奪われたか」

エドワードは微かな会釈による返答をして、アクリヴィイの言が的を得ていたことを認めた。

「奴はエトリアを世界樹に血を吸わせるため、人の命を捧げる野蛮な国であり、此度の内紛もエトリアが仕組んだことと大ぼらを吹き、国民の不満をエトリアに向けさせた。奴は世直し、ひいては新天地を築き上げるため、近々エトリアに出向く予定のようだ。大勢のならず者たちに加えて、サンガットの兵士と国民。サンガット付近に度々、身を寄せていたカルツバスの一族を率いてな」

カルツバスといえ、かつては十二の大騎馬民族の難を逃れた一族の一つであり、エドワードの生まれたエクウウスとは遠い親戚に当たる。

カルツバスの一家は一組、ここエトリアにもいる。白人寄りなエクウウスに対し、カルツバスの者たちはゲンエモンやコウシチなど、南や東の黄色人種に近かった。

また、騎馬民族が国家として発足する前は三つの部族であり、その

内の一つである由緒ある一族であり、エクウウス一族は遅れて派生した一族だとエドワードに聞かされた。

進んで協力している訳ではないでしょうとアクリヴィが聞くと、エドワードはもちろんだと言った。

「彼らは狼藉者に喜んで味方をするほど墮落していない。ただ、状況は不味い。エトウたちが活動し、奴自身が大国を掌握した時から、協力を求められた。当然断ったが、彼らはその日から脅かされた。数々の嫌がらせを受けた。馬や物を盗まれるのはまだ良い方で、数年の間に何人もの女がエトウたちに攫われ、かどわかされた。中には帰ってこない者もいるらしい」

「余所へ行かないのか？」とコルトン。

「行くこうにも、彼らは大国の領地内。つまり、敵に囲まれているも同然だから、出ようにも出られない。何度か脱出を試みたようだが、その度に、陽の光を遮る大きな翼に阻まれて、出るに出られないらしい」

ジャンベは目を丸くして、陽の光を遮る大きな翼とは、と呟いた。

「翼竜ワイヴァーンのことだ。信じられないことに、奴ら、伝説に出てくる竜を子飼いのペットにしちまった。だが、それ以上に、彼らはエトウを恐れている。ある日、一人の若者が交渉の場に出てきたエトウを殺そうとした。若者の剣はエトウを貫いたが、エトウは平然と立ち上がりて手をかぎすと、若者は干からびたミイラになつて死んだ。エトウは血気に逸る部下を静めたら、今日はこれだけにしておこうと言つて去った。その光景を目撃した日から、彼らはいやましにエトウに対する恐怖を募らせ、生き残るために従うべきだと言う者も出てきた」

「とところで」と、アクリヴィは片手を挙げて、「そいつらはいつごろ来るの？」と質問した。

「わからん」エドワードは即答した。

「全くわからないわけではない。こちらと同じく、向こうも色々と画策はしているだろう。少し前、オルレスから聞いた話では、近い内に諜報員と協力者から最新の情報が送られてくる。それで、多分だが、分かるはずだ」

「規模はどのくらいなの？」

「それもなんともいえんが……自国の護りもあるから、最低でも三万。多く見積もっても、最高六万。あくまで予測であって、具体的にはわからん。多くの船は造船しているのは確かかなようだが」

アクリヴィは更に問いかけた。「他にわからないのは、そいつの動機は？ どうして、エトリアを攻め滅ぼす必要がある」

エドワードはアクリヴィの質問にはすぐに応じなかった。少し、迷いながらも、返答した。ジャンベは今度こそは声を上げたかった。

次々明かされる衝撃的な事実を前に、顔ばかりか咽喉の唾も固まつたみたいで、息が辛い。一言でいいから、なんですとでも叫び、緊張を僅かでもほぐしたい。

「奴自身がエトリアに恨みか、憎しみを抱いているようだ。経緯は不明だが、エトリアのせいで地位と名誉が地に落ちて、身体の部位を幾つか奪われた。潰されたというべきかな。話は変わるが、俺が子供の頃、ここに来る道中で山賊の頭と思しき男の目を射抜いたことを話したのは覚えているか」

その話なら何度か聞かされた。襲われそうになった木こりをエドワードが助けた。

「奴は昔、片目を奪われた。場所や年数からして、多分、その時の盗賊とエトウは同一人物の可能性が高い。つまり、俺も奴から身体の一部を奪った一人になるわけだ」

ジャンベはなんですとって！ という叫びを必死に飲んだ。エドワードは間を置かず話し続けた。

「俺自身はそいつの名前は知らん。ただ、かなりうる覚えで、聞き間違いかもしれんが、手下共の叫び声で、エトウという名を聞いたような気がする。多分だがな。名を広めるのも考えものだな。どこから聞いたのか。奴は演説の中で、エトリアにはかつて、私の片目を奪ったと思しき者がいると言っていたこともあるようだ。だから、奴の復讐リストにはこの俺もいるんだ。」

それだけじゃあない。エトウという男は復讐以外にもうひとつ、やり遂げたいことがある。奴は元冒険者の可能性があるといったから、

想像はつくかもしれないが」、アクリヴィがまたしても先んじて答えを挙げた。「世界樹の迷宮の踏破ね」そうだとエドワードは肯定した。

「口では新天地を築き上げるだの、罪を償わせるだの言っているが、一番の目的は軍勢を率いてエトリアの地下迷宮踏破が真の目的。正確に、いつ来るかはわからないが、数年も経たない内に来襲する可能性は十分ありうる」

「つまり、エトウという元冒険者はエトリアに並ならぬ敵意を抱いている。自らの才能とカリスマ性を以て、内紛で乱れたサンガットの権力を実質、我が物にして、復讐も兼ねて自らの見果てぬ夢である世界樹の迷宮があるエトリアに戦を仕掛ける。で、あなたはそいつらに協力する女に一杯くわされた。こういうことね」

途中から、現実離れのことに思えて理解が追い付かなかったため、アクリヴィの落ち着いた態度と口調から語られる解りやすいまとめに、ジャンベはありがたいと感謝した。ジャンベは思ったことをそのまま言った。

「なんだか、スケールがでかすぎて、本当かなと疑ってしまいましたよ。しかし、その国の人たちは何故、そこまでその人を慕うのでしょうか？ 気味が悪くないのかな」

「お前の言うことももつともだ。実際、奴を気味悪い、奴の支配に憂いを抱く者もいる。だが、それをおもてだつて言えば、奴自身か。奴を慕う多くの者たちから八つ裂きにされてしまう。それ以上に、奴は竜すらも従わせる力を以てして、大国サンガットの隣国や攻め入るかもしれない国に睨みを利かしていたのだ。形はどうあれ、奴のお陰で取りあえず、国はまとまり、守った事もまた事実。王ですら頭を下げて、国をまとめ、守ってくれた者を自然と慕う者がいてもおかしくはない」

みな、口を閉ざした。今起きたこと、語られたことに対して、各々の考えを整理しようとしていた。

エドワードが人殺しの疑いをかけられた。それだけでも驚きだったのに、次から次へと、ここまで想像を超えた事実を明かされて、ジャンベは頭の中で思考がぐるぐると回った。

長く続くかと思いきや、コルトンがその沈黙をすぐに破った。

「あんた、愚痴を聞くといいったよな。愚痴じゃあないけど、俺たちがどういう目に遭ったかも、少し知ってくれ」

コルトンはエドワードに、残された自分達に遭ったことを話した。エドワードほどではないが、五人も大手を振って歩けなくなった。街の者たちの見る目が猜疑とあらぬ好奇心に満ちて、同業者からも変な目で見られる。シリカ商店など、一部を除き、利用していた店から来ないでくれと告げられた

。聞こえる程度に、調子に乗るからだと言う者もいた。尊敬もあるが、その分、成功に対するやつかみや嫉妬もあり、そういうのが徒党を組んで、見えて聞こえる範囲で影口を叩く。

彼が戻るまでの間、人の目もあり、祿に探索にも出かけられず。こそこそしつつ、無意味に日用品や装備をちびちび整理や掃除する時間が続いた。

エドワードの殺人容疑騒動は思った以上に、本人の名声も相まって、とても広がるってしまった。

容疑が断定した言う者までいる。オルレスやゲンエモンは必死に火消しをしようとしたが、さすがに人の口に戸を立てられなかった。執政院ラーダは遠く離れた親戚筋に当たる者たちが王賊の輩に協力している噂は耳にしている。当然、今回の件も。

エドワードの処遇は検討中だが、本都市の近くに住まう避難民が必ずしも内通してない証拠が無いため、出入りが禁止されたことを教えた。

ゲンエモンから既に聞いていたものの、事態は色々と深刻である。「ところで、エド。お前はまだ話していないことがあるよな。近いうちに旅立つと」

「俺がここまで長々と明かしてはならないことを話したのは、謝罪と同時に、お前達を信じている証だと思ってほしい。では、言うぞ。旅立つ訳を。」

俺はエトリアの使者として二四ヶ国の連合国に有事の援軍要請。並びに、避難民受け入れの支援書を携えて行く。更には、大国サン

ガットに赴き、敵情視察。引いては、カルツバスの者たちとの接触を図り、いつまでも煮え切らぬ態度は止めて、敵となるか。味方となるか。最後通牒を伝える役目を担った。

これが、俺がオルレス。いや、エトリアの中枢を担う者たちと繋がるオルレスから下された使命だ。しかし、今回のことでそれどころでは無いな」

「他にも聞きたいことはあるが、俺はあんたが選ばれた理由が知りた
いよ」とロデイル。

「まず、体力があり、多少のことでは怖気ることなく、異性にあまり興味を抱いてない。もしくは、その暇が無い者。厳しい状況や環境でも適応する心得がある者。一定の礼儀をわきまえている者。乗馬技術に優れた者。エトリアに恩や借りがあり、尚且つ、それに対して返したい。返さなければならぬ者。自分達が交渉しようとしている者
と関わりがある者。最後に、できれば冒険者ないし衛兵など、実戦経験がある者が好ましい。付け加えれば、許可が無い限り、話さない者が良いと、オルレスが言っていた。ついでに言えば、亡くなっても、そこまでうるさく言われない人物がいいとも」

なるほどと、五人は納得した。確かにエドワードは、最後は納得しかねるものの、オルレスが述べた恐らく理想的と思われる条件に当て嵌まっていた。

ジャンベはエドワードに、「これからどうすればいいのでしょうか？」と尋ねた。

「こちらから出向くか、あちらから報せを来るのを待つか。判断には迷うが、俺は今、悪い意味で目立ちすぎる。一日か二日待って、報せや接触が一切ないようなら、こちらから出向く。それまではいつもどおりだ」

「いつもどおりとは」

「俺たちは冒険者だ。冒険以外に何を？」

下手な言い訳をして口実を与えるよりかは、普段通り、動くのがいい。師匠からも聞いたが、俺が冒険に出向く事自体は別に制限されていない。どの口が言うのだと思うのを承知で言うが人の目や口を気に

するな。

もちろん、あまりにも過ぎた言葉や行動に出る者には相応の対応をしてやるが、それ以外は構うな。あまりあたふたしていたら、実はそうだったんだという印象を与えて、益々動きにくくなる。俺とお前達にできることは、いつもどおりのことだ。まあ、時間を作り、証言や証拠探しをしても良いだろうが」

コルトンはなにか言いかけたが言うのを止めた。実際、そのとおりだったからだ。

いつもどおりにするしかない。極端な話、冒険者を辞める選択肢もある。しかし、原因も事実も分からない曖昧模煇な内に冒険を止めることなどできない。

「もうひとつ、最後に一番大切な事を言う。これらのことは、執政院の長ヴィズルには内密に行っていることだと一度聞いた。俺から話せることは以上だ。他にないか」

誰ももう、何も言わないと思いきや、アクリヴィがエドワードに。というより、疑問に感じていたことを言った。

「ずっと、思っていたんだけど。あなたの殺人容疑が広まるの、早すぎると思わない？」

エドワードはアクリヴィをじつと見たら、そうだなと首肯した。

「ここで、あれこれせんじていても仕方ない。それより、夕刻まで大分、時間があるから、少し身内の元に行って話をしてきてもいいか。言っておくが、お前達に語ったことは一族の者には話さない。余計な重荷を背負わせたくないのもあるが、巻き込みたくないのもある。既に巻き込んでしまっているかもしれないが」

コルトン、ジャンベは行って来い、行って来てくださいと言い、他の三人は口にもこそ出さなかったが、態度や雰囲気から行っても良いと伝わったので、エドワードは遠慮なく行くことにした。

出て行くこうとするエドワードをコルトンが呼び止めた。

「エド。なんで、俺たちにこんな恐ろしく大事な話をした」

エドワードは振り返って答えた。

「事が事だから、というのもある。だが、お前達なら、隠していたこと

に多少怒ることはあっても、明かした事実には怖がることなく共に来てくれる。そんな気もしていた。しかし、こんな事態で話すとは思わなかった。今はもっと早く話さなかったのを後悔しているよ。すまなかったな」

「俺はあんたが望んで売女を殺したとは信じてない。少なくとも、身を守るか、誰か親しい者に窮地が来る以外では、あんたは好き好んで人を殺す男ではないのを長い付き合いで理解している。俺ががっかりしたのは、あんたが今まで隠し事をしていて、実際にそうだったことだ。本音を明かせば、身に覚えのない罪を被せられて、今も少しむかついている。ただ、あんたは俺たちに巻き込みたくなかったのと、時期が整っていなかったのもあるだろうし、なにより謝ってくれた。だから、もういい。それより、俺たちをもうちよつと頼りにしてくれ。いつかも言っていただろう、一人で冒険をするのは無理だって。俺たちをそんなに弱く頼りないと思っているのか」

コルトンの言葉を聞いて、エドワードは胸が熱くなるのを感じた。互いの背中を守りつつ、冒険をしていた頃を思い出す。

長い付き合いから来る察しの良さに、コルトンの自分を信じたい気持ちを知れて、素直に喜べた。エドワードは緊張をとき、ようやく、微かだが笑みを浮かべた。

「コルトン。俺もお前も……いや、二人だけではない。俺たちは強く、どんな時でも無駄にしつこく生き延びられる奴らと思っている」

エドワードが部屋から出ると、コルトンは複雑な面持ちで、ほんとうに行くのかねえと呟いた。微かに嫌だ、行くなというニュアンスが含まれていた。

ジャンベは椅子から立ちあがり、疲れた様子でベッドに座った。マールシアが優しくどうしたのと聞く。

「なんとというか。実感が湧かないのですよね。僕が今も冒険者になり、世界樹の深層に挑んでいるのもそうですが、またしても戦になり、その上、エドワードさんが諜報員で執政院が色々動いているとか。これは、現実なのかと思いい、でも、現実で。すみません、何を言っているかわかりませんね」

「気にしなくていいわよ。あなたはどちらかといえば善良な小市民だし、私も話の内容が予想より大きくて、戸惑っているもの。だけど、今は彼の言うとおりに、いつもの通りにするしかないわね。ごたごたした事柄で私たちが彼がこれから具体的に動くのは、一先ず待てとね」

善良な小市民と言った意味は気になるが、マルシアの言ったとおりである。あえて言えば、証拠や証言を探すぐらいのことはするだろうが、それ以上はなにもできない。いつもの通りにするしかない。ジャンベは取りあえず安心したものの、微かな不安はまだ残っていた。

内紛で乱れて、戦争を仕掛けようとしている国に行くだけでも危険なのは子供でも分かる。ましてや、エドワードは向こうからして敵。ばれたら、確実に命を落とす。ジャンベはできれば、エドワードにそんな敵地に一人で行ってほしくなかった。この思いは、自分だけではないはず。

「話は終わったから」と、コルトンが一時解散を告げた。といっても、女性二人は部屋に戻り、男三人はリーダーの帰りを待つだけだが。

西の大門から出た。そちらからの方が近い。

エドワードは門番から警戒されて、通り過ぎるまで少し離れた位置を保ったまま付いて来られた。

跳ね橋を渡ったら、二人の門番はそそくさと離れていった。

身体検査はされなかった。理由を短く尋ねられただけで、探査用の大きく頑丈なブーツを除けば、馬借や厩がよく着そうな灰色の地味な上着とズボンを履いている以外には、何も身に付けてないと判断されたか。それとも、命令が無ければ特に調べなくいいと言われたのか、特に調べられることなく通れた。

エクウウス一族の者らが住まう地区に行く。ゲルの数が結構、増えてきた。以前はちんまりしていたのに、一目で群れとわかるぐらいだ。

話を聞きつけたり、エトリアの者に助けられたり、もしくは出産もあり、人数は自身を含めたら、九七人にも増えた。

世話になるだけでなく、農耕もし、家畜も飼い、質の良い馬や家

畜の群れを提供しており、むしろ貢献しているぐらいだ。

暗い噂と今回のことで、彼らに害が及ばないか不安である。出入り禁止に関しては、元から本都市の方に入ることには無かったので、中と外で用がある場合、喜んで自分が架け橋になろう。

一族の者たちは、エドワードに対して冷たく当たる者はいない者の、どう接したらいいのか分からないのか。無視をすると決めたのか。エドワードを避けていた。しかし、どこか申し訳無さそうな表情の者が殆どであり、前者と知り、少し安堵した。中には、冷たかったり、怒ったような顔を向ける者もいたが、仕方ない。

家族の身内を除く一族の者たちの中では最も親しいティノフェ一家のチノスはエドワードに真っ先に駆け寄り、僕はあなたを信じていますと言った。

「あなたが無用に人殺しをするはずがない。なにかの間違いだ。彼も人間だから、間違いを犯すと言っていた人もいましたが、僕から言わせれば、その言葉こそ間違いですよ」

「お前が俺を気にかけてくれて嬉しいよ、チノス。だけど、今は俺と関わらない方が良く。大丈夫、いずれ容疑は晴れる」
エドワードは妹の一家が住まうゲルにはすぐに入らず、一歩手前で立ち止り、自らの名前を告げて、入っていいかと聞いた。

おずおずと太い手が伸び、ゲルの戸の役目をする部分の幕が開けられた。手を伸ばした男は思ったとおり、ヴァンだ。表情には不安気であり、自分を見上げた目には一瞬、憤りが宿った。エドワードが失礼をしたと引き返そうとしたら、ヴァンはエドワードを呼び止めた。

「待つてください、兄さん。母さんに一言、声をかけてください」

以前、幸せに包まれていたはずのゲルには重々しい空気が漂い、鮮やかな色彩も鬱陶しく思えた。

甥のエウゲドロスは円らかな瞳で母であるフェドラとエドワードを見比べて、フェドラはヴァン同様。憤りが宿った不安気な面持ちでエドワードを見た。

「兄さん。私はあなたが罪を犯したとは思っていない。だけど、あなたの無事を祈って、いつも母さんがどれだけ苦しんでいるかも理解し

て」

母エウドラは横たわっていた。汗を流し、息を弾ませている。明らかに普通ではない。フェドラは布を絞り、母親の額を拭いた。

「いつから、こうなった」

「二日半前から。体も熱いの。誤解をしないように言っておくけど、ゲンさんはこのことを知らない。二日前に様子を見に来たのが最後で、後は兄さんを解放する手続きとかで奔走をしていたわ」

「施薬院があるだろう。医者を呼べ」

フェドラは首を振った。「忘れたの。出入りを禁止されて、入るところか、跳ね橋にすら近づけさせてもらえなかった。医者を呼んで頼みだけれど、あの態度じゃ頼んでくれたかどうか。ある程度、薬草や治療の技術を母さんから教わっているから、治せると思ったけど、一向に良くなるなくて。それどころか熱も上がる一方で。このままじゃあ、母さんは」

フェドラは涙声になり、口を閉ざした。

母は老いている。大体、どこの国や地域でも、平均寿命は五十か六十程度である。ゲンエモンより一歳年下のフェドラは今年で五八歳。相当な高齢である。この分では、出入り禁止の問題は他にもありそうだ。

今はともかく、母をなんとかしなければ。このまま病気に苦しむ母を見捨てるなんて絶対ない。

夫を失い、故郷も失い、女手一つで妹を育てるために泥水をすすった母にはせめて、安らかな余生を過ごしてもらいたい。

「マルシアは知っているな。俺の仲間の女医だ。彼女を連れてくる、待ってる」

エドワードはゲルから出るや、一目散に西の門を目指して駆けた。止めようとした門番には、必死の剣幕で逆に噛み付いた。

「俺の母親が死にかけているのだ！ あんたは、助けられるはずの家族や友人を前にして呑気でいられるのか!？」

門はよく通るから、衛兵たちとエドワードは顔見知りの者が多かった。そういう事情ならばと、剣幕に押されたのもあり、門番たちは工

ドワードをあつさり通した。

長鳴鶏の館に戻り、一階の部屋に居るマルシアに事情を説明した。マルシアは手早く準備を整えたら、患者の元へと直行した。

ゲルの中に居るフェドラに話を伺い、エトリア製の蜜蝋に灯りを点けて、自らの口元を白い布で被った。フェドラの喉元や目、顔に口などをつぶさに観察した。少しして、マルシアはエドワード、ヴァン、エウゲドロスの三人にゲルの中から出てとマルシアは言った。三人は大人しくゲルから出た。ゲルから出ている間、エドワードはヴァンと会話をした。

昨日から今日にかけて、仕事の手伝いや取引が殆ど断られて、家畜の世話以外にはすることが無いという。いくら、家畜を殖やしても、取引や仕事に使えなければ意味がない。話しているうちに、マルシアが出てきた。いつになく真剣な面持ちに、エドワードは身を引き締めた。

「その子をどこかに預かってもらえないかしら」

そういうことならと、ヴァンは一番近いティノフェ一家のゲルに寄った。ヴァンが戻ると、マルシアは話があるとゲルから離れた位置に立った。二人もそこに行った。エドワードは恐ろしい思いで聞いた。

「それほどまでに重たいのか」

「いいえ、多分、助かる。ただ、エドワードより、ヴァンさんに説明する必要があるわ。ヴァンさん、あなたは昨日、息子さんと一緒にティノフェさんの家に泊めてもらったと言ったわよね。ヴァンさん、エウドラさんが治るまでの間、子供とティノフェさんの家で過ごしてちょうだい。医者のお話で、治るまでは離れていた方が良いと言われたからとしか言っただけ駄目」

「どういうことですか！ 妻や母はどうするのですか。母はどんな病にかかったのです」

「あなたのお母さんは流行性感冒^{りゅうこうせいがんぼう}。略して流感^{りゅうかん}。インフルエンザなる名称もあるらしいわ。感染症の類ね」

エドワードもヴァンもマルシアが発した言葉を反芻した。流感、イ

ンフルエンザ、感染症。医者の専門用語を並べられても困る。

「要は病気。同様の類と思われる似た症状を発していた病は以前から合ったけど、認知されて、名称がついたのは三年ぐらい前。医者でも知っている人はまだ少ないわ。詳細は不明だけど、風邪のように咳やくしゃみでかかって、風邪より一段階上の病気と見た方が良いと言われているわ」

「詳細が不明。では、どうすればいいのだ」

エドワードは平静に保って聞いたものの、心はとても暗くなった。ヴァンも毒でも含んだかのような青ざめた顔をしていた。マルシアは微笑んで答えた。屈託ない女性らしき満開でありながら、嫌味の無い良い笑顔。こんな状況でなければ、微笑み返していただろう。ロデイルならやつたと内心喜んでたはず。

「特效薬は無いけど、安心して。風邪と同じく、暖かくして、飲み物をよく飲んで、療養すれば良くなる。もつとも、治る時間はその人の体力と症状に寄るけど。とにかく、できることは今以外に挙げた方法でもうひとつあるわ。隔離。わかり易く言えば、誰にも移らないよう、どこかの部屋の一室に治るまで過ごしてもらおうのよ」

「わかった。母にもそう伝えておく」

ヴァンは険しい表情のまま無言で頷き、マルシアの案とエドワードの賛同に応じた。

ヴァンも短い付き合いながら、エウドラの性格を理解していた。エウドラは優しくも厳しい、夫想いの献身的な女性であり、意思も強い。親馬鹿ならぬ子馬鹿かに聞こえるだろうが、母は立派な良妻賢母だと思っている。母が治療方法や薬もない病を患い、マルシアの言った方法しか無いのであれば、家族を守るために迷わず選ぶ。最愛の夫、ゲロリリオンが説得しても、聞かないだろう。母はそういう女性である。

ヴァンはマルシアに、妻と離れなければいけない訳を聞いた。

エウドラは自分が病にかかったと知るや、フェドラにのみ世話を頼み、エウゲドロスとヴァンには出て行くよう告げた。休むときもティノフェ一家に身を寄せていた。要約すれば、二人はフェドラと比べ

て、病にかかっている人と接触している時間が短く、感染している可能性が低い。対して、付きつきりで看病をしていたフェドラは、移った可能性が高い。

病気の潜伏期間込みでも、二十日ぐらいは積極的に触れ合わない方がいい。空気を入れ替えて、熱湯に浸したタオルで全体を磨くことも指示した。最悪、状況によつてはゲルを燃やしてしまうことも触れておいた。ヴァンは諦めた顔で、ただ頷くしかなかった。エドワードも肩を落ししかけた。自分だけではなく、身内にまでこのような不幸が訪れるのは、いたたまれない。

「絶望するのはあと！今はできる限りのことをしましょう」

そこで、マルシアはケフト施薬院に向かい、事情を説明しに行く。エドワードは万が一にも備え、ゲンエモンにも伝えに行くことにした。ヴァンは息子のお守り。エウドラは迎えが来るまで安静のとこと。

「院長は師と顔見知りで、何度か助けられたこともあると言っていた。門番は俺と師でなんとかする」

エドワードは行く前に、母と妹に説明をした。しばらく会えないことにフェドラは不服そうだったが、分かったわと素直に退いた。エウドラは深く息を吸い、自らの呼吸を落ち着かせてから話した。

「すまないねえ、エドワード、フェドラ。お前達に迷惑をかけて」「いいんだ、母さん。俺はもう少し、あなたには元気でいてほしい」

エドワードは濃い栗毛の馬を選び、再び直行した。集落からエトリアまで、四kmぐらい離れていた。途中でマルシアを拾い、西の門を通った。十月も半ばに差し掛かり、陽が落ちるのも夏と比べたら、若干早い。とにかく急いだ。跳ね橋のところまで馬を降りて、門を過ぎたら、馬を中庭に繋げさせてもらい、二人は目的の場所へと急いだ。

エドワードは花桜の館に入ると、女将のアヤネや同業者への挨拶もそこそこに、ゲンエモンの居る奥の部屋に向かった。靴を脱ぎ、素足で板張りの廊下を派手に足音を立てて走る。

ゲンエモンはラクロワといた。エドワードは一呼吸入れると、訳を話した。

「もしも、お前さんがしょうもない理由でこの中を走っていたら、叱り飛ばしてたい。あいわかった。できる限り、説得してみよう」

ケフト施薬院にも向かった。入ろうとしたら、ちょうどマルシアが二人の白衣を着た男二人と共に出てきた。一人は折り畳んだ担架も担いでいた。

「グッドタイミングだわ。これで、早く運べるでしょう」

「どうやら、私は運搬役として活躍しそうだな」とゲンエモン。

門に向かう頃には、更に陽が落ちていた。門が閉まるのも時間の問題である。ゲンエモンは門に留まることにした。

「二人も説得係はいらん。エドワードよ、母親を運ぶのを手伝え」

というわけで、当初の予定通り、ゲンエモンは門番たちの説得に当たり、エドワードたちはエウドラのもとへ駆けた。何かと注目を集めた。言い訳は後でしょう。ゲルに着くと、エドワードとフェドドラでフェドドラを運びだし、外の担架に乗せた。

一人でも数が多い方が良く、ヴァンも加わり、フェドドラと甥を残して出発した。跳ね橋の前で来たら、エドワードはヴァンに戻れと言った。

「君は妻子を守る役目がある。後のことは任せて、戻るのだ」

「兄さん……よろしくお願いします」

一行が入ったのを確認したら、門番たちは跳ね橋を巻き上げ機で上げて、鉄製の門も閉ざした。門の中からゲンエモンが表れた。エドワードは頭を垂れて、礼を述べた。

「礼はいいから、はよう行け」

ケフト施薬院の中に入る。中では、院長が直々お出迎えをしてくれた。エウドラは施薬院奥の隔離室の一角に泊まることになった。二四時間、交代で医師や看護婦と看護士が様子を見に行くことを約束した。

「まだ謎がある病気だからね。私も興味がある。ただ、分かっているとは思うけど、無料ただというわけにはいかない。一般人や異国の方は、物にもよるが一般病棟の宿泊は一日平均二百エン。隔離病棟の場合だと三百エンかかる。ただし、今回は症状の研究ということも兼ね

て、冒険者サービスの百エン引きを適応するよ」

退院するまでまとめて支払ってくれば良いとも付け加えた。完全ではないが、一応、母は安心である。エドワードはエウドラに別れの言葉を告げて、隔離部屋の扉が閉じるまでエウドラを見送った。施薬院を出たら、エドワードは一旦、マルシアと別れた。

「どこへ行くの」

「執政院ラーダに行く。悠長には待ってられん。今すぐにもオルレスと話をしなければならぬ」

すっかり陽が落ちていたので、もう閉じているかもしれない。そんなことは構わず、エドワードは執政院に足を向けた。執政院の門柱では、長槍を持った衛兵が一人、番をしていた。いくら街中とはいえ、大事な情報が詰まっている執政院を放っておくわけない。近くには、番をする詰所代わりの家もある。

当然というべきか。エドワードは門番に止められた。

「せめて、こちらに来てくれるよう伝えてくれないか」

「あなたにはオルレス殿から伝言を言付かつてあります。一週間か十日以内で多分、なんとかしているから、それまでは執政院ラーダには来ないでほしい。冒険や街への出入りは自由だが、執政院ラーダにどうしても用事があるときは、門番か誰か別の者に言付かつてくれ。あなた様以下、ホープマンズのメンバー並びにエクウウスなる者たちは執政院に入れてはならぬ」

「それが、オルレスからの伝言か」エドワードは怒気を滲ませて門番に聞いた。門の衛兵は澄ました顔で「はい、そうです。他に「質問は」と返した。

エドワードはそれ以上は何も言わず、憎々しげに執政院ラーダを見上げて門から立ち去った。オルレスや彼と裏でこそこししている者たちの立場を考えれば、当たり前だ。わかっていても、トカゲの尻尾切りをされたみたいでエドワードは不快になり、自由の民とは一体なんなのだろうかと現実逃避でもするかのように遠い思いに馳せた。

自分の命を狙った殺し屋の水商売女を結果としては、殺した事から段々と狂い始めてきた気がする。それでも、今の自分にできることは

自らが言ったとおり、いつも通り、冒険を続けて道を開き、ついでに金を稼ぐしかない。母の命と、仲間の信頼のためにも。

三二話・レンとツスクルの仲間

冒険者たちの朝は早い。理由は様々だが、特に早く起きたこの一組のパーティーは遅れを取り戻したいのもあるが、誰にも会いたくない思いが強かった。

あれから昨日、エドワードは熟睡した。それというのも、マルシアのメイックの秘術で怪我をした指先をすっかり治してもらったからだ。メイックの秘術“キュア”は術者の力に加えて、治癒される側の生命をも消費する危険極まりない代物であり、禁術に近い。身体にこれといった支障は幸い生じなかったものの、凄まじい疲労と睡魔に襲われてベッドに昏倒する形で眠った。

マルシアはじっくり治すべきと言ったが、探索の支障になることを省けるなら、多少のリスクは構わなかった。母の治療と施薬院での医師たちとの相談も兼ねて、マルシアは地上に残った。

ホープマンズの方針はまず、通常の探索を進めつつ、金鹿こんろくの酒場の依頼でも高額な物を引き受けると決めた。もともと、酒場の経営者で女将でもあるサクヤはともかく、依頼者が自分達を信じてくれるかはまた別問題であり、立場を思えば、断られてもいた仕方ないとした。

樹海時軸を抜けて、五階層に直行する。今やもう見慣れた、寂れて白みがかった緑の巨大な植物に覆われた古代遺跡が辺りに広がる。地上の喧噪と打って変わって、静寂である。何千何万年も有り続けた歴史や空気の重さに加えて、冒険者たちや樹海生物の存在をここからでも感じとり、身が引き締まる思いである。床には埃に砂、樹海生物が通って落としていったと思われる身体の汗や汚れがちりばめられて、数え切れないくらいの冒険者の足跡があちこちに見受けられた。道筋は決めていない。ひたすら進んでいくのかどうかと思つたので、今だ謎が解明されていない沢山のボタンがある両開きのドアの前まで来た。

本当にわからない。取っ手も無ければ、鍵穴もない。押しても引いても開かない。別のパーティーが無理にこじ開けようとしたこともあつたらしいが、中は真つ暗で、上も下も皆目見当がつかなかったよ

うだ。

古代人は何を考えて、そもそも、数字が書かれたボタンの意味はなんなのだろうか。二つの塔の意味はどういった目的で建てられたのだ。

考えてもらちがあきそうにないので、当初予定していたとおり、ひたすら進み、樹海生物を狩っていく。

ここは、樹海生物の集合住宅地であり、あちこちから繋がった太い根が上や下、別の建物に繋がりと、そこを通って来る。

今の所、とくにこれといった獲物や発見は見当たらない。途中、男四人女一人のパーティとすれ違い、無言で小さく会釈した後、思い思いの方向に行く。現段階では一先ず、五階層二一階と位置付けられたこの辺りを見るべき物が少なくなっていた。あるいはもう、無いと言ってしまった方がいいかもしれない。

いくら、小さな町一つならすっぽりと収まってしまうほどの巨大といても、所詮は建物。土と植物で覆われた上階層と比べて限りがある。あちこちに目印や物色した跡があり、狩りぐらいしか方法が残されてない。別の建物と繋がっている通路が多い二二階。到達して日が浅い二三階に、誰も到達していないそれ以降の階に行くなら沢山あると思われる。

エドワードは偵察で二二階の階段に近付いたとき、現れた。ぼこぼこと動く溶岩状のウーズが二体、壁を沿って二二階と繋がる階段の壁を沿って出てきた。おまけに、一体は背中と思しき箇所に大量のぶつぶつを背負っているのを確認した。エドワードは離れた位置にいる仲間の元に戻って伝えた。

「雄だ。卵を背負っている。もう一体は多分、雌だな」

ウーズは二体はぬかるんだ泥道を思い切り踏んだような警戒音を間断なく発した。五階層の怪物にとって、恐らく久しく見なかったはずの人間は、極上の獲物であると同時に警戒しなければならぬ敵と認識するものもいて、個体によっては積極的に攻撃してきた。二体は卵を守ろうとしているのだから、警戒するのも無理はない。

「どうするよ。見逃すか？」とロディムが誰かが答えるのを期待して

聞いた。アクリヴィが答えた。

「殺るに決まってるでしょう。あいつらは見かけだけじゃあなくて、繁殖力と成長速度も数倍。ここで、情けをかけて後で困るのは、私たちか他の誰かよ」

アクリヴィの答えは最もだ。いくら倒しても、異常な速度と数で増える。

だからこそ、安全を第一にと地上ではトルヌーアと呼ばれる偉人がエトリア本都市内部を守るために内壁を建造したのだ。

エドワードは昔、二階層でこれとよく似た液体生物を見た時は、哀れと思い見逃した。しかし、二週間では同個体から産まれたと思われる幼体が半分近くまで成長。産まれてから一ヶ月を過ぎた時に出て、身体の色が淡いので見かけがつく。コルトンとアクリヴィ共々、命からがら逃げ果せた。そのことをゲンエモンに話したら、馬鹿者と一喝されて、修行時代以来ぶりに頭をどつかれた記憶がある。

明らかに人の話を通じない相手。こと、樹海生物の中にはこちらの行動全てを警戒し、問答無用に襲いかかってくると判っている相手にはいらぬ情けをかけるな。情けと非情さは場合によって使い分けろ。

あの気味悪い真っ赤などろどろおたまじゃくしもどきを母親のイメージと重ねることはないが、子を守ろうとするのを見ていると、病気を患った母を救おうとする自分と微かに重ねてしまい、見逃す選択肢を思い浮かべてしまったが、師の教えとアクリヴィの迷いなき口調を聞いて、見逃す選択肢を捨てた。戦わねばならない。自分の身を守るのもあるが、自己満足な善意で他人を犠牲にしては申し訳が立たない。

エドワードは自らを戒めるため、率先して攻撃をしかけた。樹海の素材を集めて自ら作った長めで頑丈なとつておきの複合弓を構える。人差し指・中指・薬指で弦と矢を引っ張り、雄の方目がけて引き絞った矢を放つ。矢は耳元で空を切り裂き、雄の充血したような目と目の間に刺さり、矢は根元近くまで埋め込まれた。額から体色とほぼ同じ血液が滴り、卵を背負った雄はずると壁から滑り落ちた。

ロデイルムとコルトンが残る雌一体に突撃する。それよりも早く、エドワードの矢が目刺さった。頭を狙ったはずだが、雄を攻撃した自分を見定めていたのだろう。目を犠牲に致命傷は避けえたが、ウーズは悲鳴を上げて、口から小さな赤い高熱を帯びた液体弾を撃ちくる。痛みと視界を奪われたショックで狙いが滅茶苦茶である。何発かはコルトンの大盾に防がれた。残る一体は二対の剣で倒された。

二体の身体を慎重に長物で割いて、手土産に紅い水晶核を貰った。残すは雄の背中にある物である。ロデイルムは恐る恐る剣先で突いた。ぶちゆりと潰れて、膿のような硫黄の臭気を帯びた液が流れ出る。中には、丸っこいウーズに近い形の卵もある。放っておいても、他に食われるか、親の世話が無いので死んでしまおうだろうが、念には念を入れておく。

酷いしかめ面をして、ロデイルムは嫌々離れて、頼むようにアクリヴィイは見た。アクリヴィイは溜め息を吐き、ウーズの死体に近寄り、利き腕である左腕を死体にかざす。

腕に嵌めた威力増幅器である金色の籠手を通し、小さな雷というか電流がウーズの背中に叩きつけられた。幾つかの卵の膜が破れ、液が飛び出て、アクリヴィイの服にも飛散して、お気に入りな橙のコートが汚れた。アクリヴィイはロデイルムを一睨みした。

「次はあんたがやってよ。剣ならすぐに拭けるでしょ」
「あんなの剣が錆びちまうよ。おめえが離れてやれば良かっただけだ」

エドワードは行くぞと言い、偵察も兼ねてさっさと階段を降りた。二人は無駄口を叩くのを止めて、前に行く三人の後を追った。

コルトンとジャンベを待機させて、エドワードは先に言った。降りた階段の角から気配と音を察した。仮に音や気配が無くても、真新しい大小五人分の足跡を見ればわかる。

踏み鳴らすたびに金属音を鳴らす者が一人。普通にコツコツと音を立てて歩く者。ゆっくりと静かに歩く者。更に静かに、慎重に素早く歩く者。ゆっくり、小さな足音。多分、子供か、背が低いか。向こうもこちらの気配を察したらしく、音もなく歩く偵察係をしている

と思われる者が近づいてきた。

病的なまでに真っ白い肌に、背景に合わせたと思える白っぽいコートに身を包んだロディムより暗めな青色の髪の子。背も低く、左手には刺すにも投擲にも適した刃が太い短剣を持ち、右手には鉄のバイクが付いた鞭が握られている。鉄製の糸で編んだと思われる一枚の白羽根を挿したつば広帽子を被り、鉄の腕当てや腿と膝に防具が付いているが、それ以外の防具は無く、自分同様動きを重視している。多分、ダークハンターだ。

コウシチを思わせる三白眼寄りの眼で男はエドワードを見た。敵か味方か、疑わしそうだ。見たことは無い顔だが、ここまで来るだけあって、さすがに隙が無い。戦いになれば、一筋縄にはいきそうになり。無論、戦う意味など無い。両手をナイフがある腰に近い位置でひらひらと振った。

「まあ待て。俺は敵ではない。それとも、あんたは人喰い赤花の毒にかかり、俺が怪物に見えるのか？」

「案ずるな。俺はそこまで間抜けじゃない。俺が警戒を解くとしたら、お前がナイフからもう少し手を離れたときだ」

気付いていたかと思いい、エドワードは腰から手を放したまま、一歩下がった。

それにしても、同じ冒険者同士であるのに、男はちと警戒しすぎやしないかとエドワードは思った。この距離なら、なんとかナイフと鞭を避けられる。

青白い男は待てと呼び止められて、鞭は握ったまま、短剣を下ろした。エドワードは目の前の男を呼び止めた声を聴いたことがある気がした。そして、角から懐かしい顔が二人も現れた。

ボロボロの不気味なウサギの人形を後生大事そうに抱えた、黒いフードを目深に被り、金の鈴をぶら下げた赤い髪の少女はツスクル。以前とは異なり、胸の前で交差するように肩と脇を赤い鎖で縛り、中央には金のメダルがあり、そこから鈴をぶら下げている。

「元気にしていたか？」と話しかけたものの、相も変わらず、無愛想な顔つきで聞こえなかったように無視した。

一人は間違いない、レンだ。服装は前と同じ、籠手や胴当てを除けば、白い着物と淡い紫の袴を履いてる。澄んで尖った青みがかった眼とマツチするような真つ直ぐ伸ばした少し青みがかった黒髪に、人を寄せ難い冷たい雰囲気と額の斜めに切れた刀傷も相まって、自身が身に付けている鋭利な業物の刀をそのままにしたみたいで、触れたら危ないどころか斬られそうな空気を身にまとっていた。だが、相手が顔馴染みで、手助けをしてくれたこともあるエドワードとわかるや、どこか物々しくまとっていた空気も消えた。

「あなたか。随分とお久しぶりですな」

「こちらこそさ。それより、お仲間の警戒を解いてくれないか」

「おい」とレンが一声かけたら、ダークハンターと思われる青髪の男は後退した。

「彼はサンドマン。見て分かるとおおり、ダークハンターだ。普段はサンドと呼んでいる。警戒心は我らの中でも特に強くてな、相手が冒険者であっても警戒する」

「冒険者でも、相手の物を欲して奪いにくることがある」

昔、利益となる物を得るために冒険者同士が殺し合うことがあった。

今でこそ、めつきり減ったが、残念ながら、ごく稀にだが樹海生物にやられたという事にする者がいるのも事実。かといって、見も知らぬこんな男にそのような疑いをかけられるのは不本意であった。

「助けられる者がいたら、俺はできる限り助けた」

レンが間に入り、代わりに詫びた。

「すまない。彼の育ちをここで述べる気はないが、とにかく人を疑う男でな。許してくれ。彼なりに仲間を想ったの行動なんだ」

当の本人の顔からは全く悪気や一礼もない。

ただ、エドワードの一挙一足をつぶさに観察していた。滅多に他人に対して心を開かなさそうな男である。

サンドマンもといサンドも気になるが、三人の背後にいる二人も気になる。一人はメンバーの中では一番大きい。自分やコルトンより低い、ロディムよりかは確実に大きい。黒いショートヘア、黒い眼、

黒いマントに黒い武具。おまけに剣の鞘まで黒塗りである。年頃の娘が好む、絵物語に出てくる漆黒の剣士や騎士を連想させる。よつぽど、黒がお好きなのだろう。明らかにソードマンだ。

端正な顔立ちではあるが、戦士というよりかは、遊び人を思わせるところがある。

もう一人は女だ。下や横にはねた癖毛と桃色の髪がいやに目立ち、まつ毛がかかった緑の眼差しは好奇心旺盛である。マルシアが可愛く綺麗なら、彼女はより可愛さに重点を置いた気がする。白いコートに薄い水色のロングスカートを履き、これで、両手に金の鍊金籠手が無ければ、バードかメディックと勘違いした。

エドワードは彼女と目が合った。微笑みかけてきた。

初めて会い、言葉も交わしていないのに、エドワードは彼女を嫌いになりかけた。上手く隠し、ロデイルや純なジャンベなら騙せただろうが、エドワードは笑顔を返す気になれなかった。水商売の女は好きではないが、中には、決して媚びず奢らず、誇り高き者がいることを知っている。そういう者なら、抱くことはないが敬意を抱く。だが、彼女の目付きからは、品定めと財布の重さを確かめると同時に、男にあざとく媚びつつ見下しているのを笑みの裏から感じた。エドワードは小さく会釈だけ返した。

エドワードは背後から、四人が階段を降りてくるのを察した。

何があったかと険しい緊張の面持ちのコルトンが来て、エドワードの前に居る五人を見て、トラブルでも起きたのかと言った。自分以外は、レンとツスクールに会ったことが無いので、仕方ない。エドワードはコルトンを通じ、他の三人も降りてくるよう伝えた。コルトンは階段に戻り、三人を集めた。

こうして、ホープマンズの五人とレン率いる五人組が面した。

ロデイルはつんけんな態度で五人を見渡した。

「こいつらは誰なんだい。どうして、こうなっちゃったんだよ」

「ロデイル。他の三人は俺も知らんが、黒い長髪の侍がレン。カースメーカーの少女がツスクールだよ。俺が前に話した、やたら腕前の良い二人だ」

ロデイムはそいつはどうもと頭を下げた。エドワードは漆黒の剣士が誰かをじっと見ていることに気付き、それがアクリヴィだとわかった。剣士は軽やかぶりを振った。アクリヴィを見て、この女は駄目だとも思ったのか。ガタイが良く、少し女っぽさに欠けるのは否定しない。

「こうなったら、手短に紹介だけでも済ませて、とっとと行きたい方に行こうや」とロデイム。

レンがロデイムの案に乗った。「君の言う通りだ。私はレン、こちらはツスクル。背の低い鞭を持った男はサンドマンもといサンド。黒い衣装に身を包んだのは、ソードマンのダンク。桃色の髪の彼女はパウラ、アルケミスだ」

これで、残り二人の名前も判明した。ホープマンズの面々も、手短に自己紹介を済ませた。

パウラはさつきより更に満面な笑みを浮かべて、「よろしくね」と甘えた声を発した。途端にロデイムは相好を崩し、しどろもどろに頷き返し、ジャンベは変わらさずどうもどうもと返した。アクリヴィもパウラの笑みの裏に隠された顔を察したのか、僅かに眉をひそめた。

さてとと、互いに別の道を歩もうとしたら、困ったことに同じ方向かっていた。サンドマンが静かに素早く先を行く。漆黒の剣士、軽そうな男のダンクが振り向いた。

「おい。同じ道に行く必要はねーだろ。数が増えて、化けもんに気配を察知されたらどうしてくれんだ」

実にこちらに興味が無さそうな顔である。

女は一人いるのに、女つ気が無いパーティとして見ている。アクリヴィは薄々勘付いてたのか、顔にこそ出さないものの、内心は少し気を悪くしてそうだ。

ロデイムがダンクに噛み付いた。

「そっちは後輩だろう。そっちが向こうに行けや」

「先輩も後輩も関係ない。あんたらが反対に行ってくれや」

互いに似た者同士でありそうだ。この一悶着をサンドマンが制した。

「黙れ。先を見てきたが、やばいのが二体もいたぞ」

いがみ合うことに熱を出していた二人は目を覚ましたように身を引き合い、サンドに注目した。

「姿は確認できなかったが、青熊が二体近くにいるぞ。足元以外にも、特有の臭いが残っていた。多分、それぞれ縄張りを持ち、二手に別れている」

エドワードは地図を取り出し、コルトンとアクリヴィも覗き見た。既に何度か通り、地図にも記してある。もう一本道があれば、迷わずそちらを選ぶが、あいにく道は左右に二本しかない。青熊の獣人の話は聞いてある。時折り、近くを通るのは、狩場である縄張りの様子見であり、二体の縄張りの境界線上と聞く。

モリビトとの共同戦線では乱戦の最中、一斉攻撃で倒されたので実力は判明しなかった。他のパーティ、師ゲンエモンとライバルのヴァロジャ率いるパーティが別の場所で一体ずつ倒したらしいが、二人によれば、よくぞ誰一人欠けずに倒せたものだと言わしめるほどの強敵。ここの二体は周期は不明だが、数日に一回は必ず来ると自身と他のパーティの調査でわかった。極力、戦闘を避けようと心掛けていたが今日は運悪く、ごく近くにいるようだ。レンが刀の柄に手をかけた。

「さて、エドワード。君ならどうする？」

エドワードは二択の選択肢があると思った。一つは、このまま十人で退き返し、別ルートを取る。もう一つは、好い加減、我が物顔で道を邪魔する二体の内どちらかを仕留めること。もう、心は決まっていた。

「戦おう。俺にやるべきことがある。熊の一体や二体で道を阻まれてなるものか。それに、師であるゲンエモンが倒したのに、俺がいつまでも避けていては不甲斐ない」

エドワードは四人を順に見て、やってくれるかと同意を求めた。一人でもいたのなら、引き返す。当然、責める気はない。自分が今勝手に決めたことであり、意思の統一は大事だ。大きな物事に対しては特にだ。エドワードの強いやる気を受けて、四人は同意した。エドワー

ドの言とやる気に、コルトンはとても嬉しそうである。

「よくぞ言ってくれた！ 正直、ここ最近のお前はどうもうじうじしていて、らしくなかった。もしも、狩りしようと思っておきながら、引き返そうと言ったら、俺はお前を張つ倒していた！」

「ならば、俺の選択肢は正しかったことになるな。君らはどうする」「我らは五階層について日が浅い。ただ、赤いおたまじゃくしに虫けらの相手ばかりで、退屈していたところだ。別れて戦うことになるが、共同戦線と行こう。では、我らは左に行く。君らは右に行く。相手は同じだから、方向はどちらでも良いけど、君たちが左に行きたいのならそうすればいい」

「なら、俺たちは左に行くぜ！」とロデイムが嬉々として答えた。レンの言ったとおり、相手は同種だから、どちらに行こうが同じなのだが、こだわる理由も無いので左に行くことにした。

ホープマンズは左へ、レンの一行は右に向かう。別れ際、エドワードはふと思ったことをレンに聞いた。

「レン。下らないことを聞くが、パーティ名はあるのか」

「^{ざんとう}斬突”。道を切り開いて突き進むという言葉を略したものだ」

「良い命名だ。あんたのイメージにはぴったりだよ」

一歩一歩、いつもの足取りだが、適度な緊張感と集中力を保てている。そのことを居心地が良い具合だとエドワードは思った。

サンドマンの嗅覚がどの程度かは知らないが、血の臭いをいち早く嗅ぎつけた。多分、別の獲物を仕留めたのだろう。同業者ではないのを祈る。エドワードが無言に前に出たので、四人もびたりと歩を止め、エドワードが帰って来るのを待った。

またしても、左右に別れている。

ただし、右は続いているものの、左の方は行き詰まり。その左から血の臭いが漂い、強烈な気配を感じた。そうすることにより、自らは強者であることを誇示

し、自らと比べて雑魚に過ぎない生物が邪魔をしに来るのを防いでいるのだろう。

近寄るにつれて、乱暴に食い荒らす音がする。周囲の状況から察す

るに、餌となったのは人間ではなさそうだ。

ちらとだけ見て、角に隠れた。左、奥の行き詰まりで青熊がけつを揺らして、貪っているのを確認した。

これまた、道の真ん中の左右に赤い体毛が落ちているのを視認。恐らく、二頭の火噴き狼を捕えて、捕食している。絶好のチャンス。

何かに夢中で、無防備に背を見せている相手を見逃す手はない。エドワードは音を立てずに急いで戻り、攻撃するならいましかかないことを伝えた。

「地竜を仕留めた作戦の応用でいく。ジャンベ、来い」

ジャンベがまず、短弓で尻の左に矢を射る。大した傷は与えられないが、青熊は何事かと振り向く。振り向き様を狙い、エドワードが顔を射る。それも致命傷は無理だが、最悪、目や鼻、いずれかの五感を奪いたい。念のため、鍔をシヨックオイルに浸した。目や鼻に当たらずとも、電流で余分なダメージを与えておきたい。顔に一発食らわしてやるのが大事。

「俺が撃てと言ったら撃て。後は任せろ」

「わかりました」

熊は貪るのに夢中である。二人並んで、弓の弦を引き絞る

「撃て！」

ジャンベの矢が飛び、左の尻に僅かに刺さる。驚いた熊がくるつと振り向き様、既に第二弾が迫っていた。青熊の左の眼尻に刺さった。

バチバチとシヨックオイルが爆ぜる。青熊は醜い人のような顔を歪ませて、左手で目を抑えた。

「どうやら、目を焦がすのに成功したらしい。」

青熊の獣人は立ち直りが早かった。大きく胸を膨らませて咆哮をすると、黒い金属質と思われる両手の五指から生えた大剣のごとき爪を振りかざして襲いかかってきた。

そこへ、さつとアクリヴィが二人の前に躍り出て、たつぷりと時間をかけて練れた術式を浴びせた。アクリヴィの両腕から落雷が発生し、青熊の全身を強かに打ち付ける。

青熊は悲鳴こそ上げたものの、まだ死にそうにない。一方、道の反

対からも怒り狂う怪物の雄叫びが木霊した。レン率いるパーティ名・斬突も戦いを開始したようだ。

「いざ進めー」とエドワードが叫ぶ。左右で死闘が始まった。

夜が明けて、多くの人々が活動を開始した頃、ホープマンズと斬突の五人組は帰還した。

十人の冒険者のボロボロの出で立ちと背負う物を見て、少しばかり称賛の眼差しを向ける者もいた。

各自、黒い光沢豊かな鋭い剣と思しき金属を担ぎ、コルトンやエドワード、斬突ではダルクと名乗る剣士など大柄な者たちは赤い血で黒く染まった青い巨大な毛皮をぐるぐる巻きにして背負っていた。

喜びはなく、十人の顔は険しい。

ジャンベは落ち込んでいるようだった。エドワードがジャンベの肩に手を置いた。

エドワードの弓筒には、丈夫で多少の重たい矢でも遠くへと飛ばせる、彼のお手製で御自慢の一品である弓がばきばきに折れた状態で引っかけられてた。

「そう気を落とすな。また新しい物を作ればいい。お前の命とは代えられない」

青熊の獣人は恐ろしいほど強かった。前に倒した強敵クイーンアントやコロトラングルに匹敵。いや、単体の強さなら、化け物蟻の親玉クイーンアントより上かもしれない。生命力もだ。

最初の一発を除き、アクリヴィは術式の威力に見合った放つための時間を得られず、急速な錬成と連発により一気に体力を消耗。傷付いたり壊れたのは、エドワードの弓だけではなかった。

コルトンの大盾は何十もの深い爪痕が刻まれ、ロデイムの額には包帯が巻かれていた。後一步遅ければ、彼の無残な首と胴体を持ち帰る破目になっていた。胃が用をなし、事なきを得たが壊れてしまった。

お返しにと頭に一発、斧の刃を深く立ててやったが、信じられないことに、頭を割られているのにしばらく動いた。

その際、ジャンベがけつまずき、血塗れのおぞましい顔面を近づけ

たとき、サーベルを抜くのは間に合わない判断したエドワードは左手の弓をきつと青熊に突出し、身代わりとして食わせたのだった。

レンたちのほうも、無傷だが、げっそりと疲れているのが目に見えてわかる。

そこへ、笑顔でよくやったと褒める者が表れた。ゲンエモンだ。彼もちょうど、パーティを連れて、樹海の探索に挑もうとしていたところだった。

「お主ら、ようやったな。もつとも、今のお前さん達には褒め言葉よりも、上手い食事と傷付いた身を安らげる時間がなによりだろうがな」
エドワードは会釈をした。

「あなたからの賛辞はなによりもですよ。そうだ、まだ面識は無かったですね。おい、レ……」

レンは他の者より先んじていた。

ついさつきまでは歩調を合わせていたのに、どうしたというのだ。エドワードは一旦、採集品を置いて、レンを追いかけて手を掴んだ。「どうしたんだ、レン？ 急ぐ必要がどこにある。それより、やつと、お前に合わせたかった人が来たのだ。ブシドーだし、気が合うだろう」

「済まぬが、急用を思い出したのだ。仲間たちにも了解は得た」

「一言挨拶ぐらいしてもいいだろう」

「君は急いでいるとき、人から無意味に止められて、良い気持ちになるのかい」

レンはエドワードを睨みつけて、手を振りほどいた。エドワードは困惑した。レンの言い分にも一理あるが、いくらなんでも急すぎる。第一、挑む前は時間など余裕にある風な態度だったのに。

「そんなに怒ってどうした。青熊と戦って殺気立っているのか」

「君には関係ない」

そう言いつつ、レンは背を向けて行くこうとする。これ以上、止めるのはよそう。そう思ったとき、エドワードの代わりにゲンエモンが呼び止めた。

「待たれよ。なにやら険悪になりそうな空気を感じたが、我が弟子が

迷惑をかけたのなら、私も謝ろう」

レンはようやく足を止めた。そのまま前を向いたまま、動こうとしない。何を考えているのだとエドワードは思った。

やがて、レンはゆっくりと振り向いた。どこか躊躇いがちである。

「いや、彼は悪くない。非があるのは私の方。申し訳ない」

「こちらこそ、無理に呼び止めてすまん。さあ、行ってくれ。急いでおるのだろう」

レンは頭を垂れると、そそくさとトルヌウーア内壁の門を通った。

一応、挨拶を済ませたことになるだろう。エドワードはゲンエモンを見て、どうされたのだと思った。ゲンエモンはじっと、レンの背中が見えなくなるまで、なにやら厳しく考え込むような目付きで見っていた。レンの姿が見えなくなった後、ゲンエモンはぶつぶつと呟いた。

「まさか……そんな、な……」

「どうされたのですか」

ゲンエモンは何故かおかしいような、懐かしがっている表情を見せた。こうなつては、質問せずにはいられない。

「会ったことがあるのですか」

「確証はない。ただ、もしかたら、同じ人物なのかもしれない」

コルトンが叫んだ。「おーい、時間かかるなら、先に行くぞ。お前の分はちゃんと持って行けよ」

エドワードは片手を挙げて、返答した。

「エドワード、お前さんが来る前のことだ。剣の腕が立つ侍が昔、エトリアを訪れたことがあつてな。名はゼン。子供を一人、伴っていた。何度か手合わせしたが、奴は強かった。結局、決着は付かずじまい。再戦を誓って別れたが、彼とその子とは以来、会っていない。だが、今会った者。なんという名だ」

「レンです」

「レン？」 ゲンエモンは首を傾げた。

「レンか。名前を変えた可能性もありうるな、うん。まあ、とにかく、その時彼が連れていた子との面影があるな、レンという者は。目元や顔付きがゼンによう似とる。語らないのでわからんが、あの険しい目

付きや雰囲気から察するに、辛い時を過ごしたのだろうか」

「では、彼は昔、エトリアに訪れたことがあったのですね」

「彼？ 彼だと言ったのか、エドワード」

「ええ、そうですけど」

「お前さんの目を曇らすとは大したものだ。わしも昔、会うてなから、男か女か迷っていただろう」

エドワードは初めて会った日の違和感、疑問を思い起こし、そして至った。

「まさか。彼、いいえ、レンと名乗る者は女だと」

「初めにも言ったが、確証はない。あの者が直接語らなければ。しかし、わしはあの日会った、ゼンが伴う可愛らしい愛娘の麗華れいかという少女と同一人物だと確信している」

エドワードはレンが去った後を見つめた。レンが女性かもしれないことに驚きよりも、性別を上手く隠し続けた技量に大した者だと感心しつつ、レンの性別を見抜けなかった自らの観察力はそこまで未熟なのかと、悔しい想いのほうがまさった。

シリカ商店に行き、物品を卸した。シリカは算盤を取り出すことなく値段を決めた。

「これはねえ、五階層にいるヤンマの爪より質がいいから、一本百四十円ね。で、そっちの毛皮は、それなりに面積もあるから、五百エン」
命を賭けて戦った割りには、青熊のくれた物は随分とけち臭い。これなら、白いを骨を体中に張り付けたかのような地竜の方がずっといい。

「悪いね。君のお母さんが病で臥せているのは知っているけど、僕も身内や職人さんたちを食わす必要があるから。ところで気になっていたんだけど、背中の方はどうしたの」
「なんでもない。ただの不注意だ」

エドワードはケフト施薬院に行こうとしたが、ショーウィンドウの内側に飾られている物を見て、足を止めた。

シリカ商店で最も高い品の一つ。モリビトが聖獣と崇めるコロト

ラングルをホープマンズが倒し、そこから得られた骨を素材にして作られた大中小三本の灰色の光沢を帯びた美しい弓。名称はアーチドロワー。

価格はそれぞれ、大で十一万、中で十万、小でも八万と目玉が飛び出る。

飾られてるのはレプリカであり、本物は店の奥にある。

現在の資金は、個人に分担したのと全体共有財産込みで四十万エンを越す。増えるには増えたが、とてもではないけど、手を伸ばせない。

「触ってみるかい？」

シリカはどこか期待に満ちた顔である。

「悪いが、俺にこれを買う余裕はないよ。いつか大金持ちにでもなった暁には買おう。そのときにはもう、引退しているかもしれないが」

「そりゃあ困るね。どんな物も使われてなんぼだよ。単なる芸術品ならまだしも、これは武器。道具。僕としては遠慮なしに使われた方がいいね。でも、君は常連さんで、結構良い物を卸してくれるし、触るだけならいいよ。触るだけだよ」

そう言って、店員に少しの間店番を任すと、店の奥に行って布で包まれた弓を持ってきた。当然だが、弓の弦は外してある。

シリカは布をほどき、どうぞとエドワードに差し出した。エドワードは手に取った瞬間、弓が手に馴染む感触がした。そして、ありし日の蒼き聖獣の命と力強さも伝わってくる気がした。弓を弾く動作を試してみる。前に鎧を着た騎士がいるのをイメージする。

指から手を離す。矢は華麗に、獲物目がけて滑空する隼のごとき勢いで伸びてゆき、騎士の盾と鎧も貫いた。

「何が見えたの」とシリカ。エドワードは笑みを浮かべた。

「厚い鎧を着た騎士を盾ごと貫く場面が見えた」

エドワードは弓を返した。「いつか使えるよう、頑張るよ」

エドワードに弓を返されて、シリカは何か言いたげだったが、どうもとだけ言って、弓を受け取った。

「うん、その。そうだね。いつか使えればいいよね。えーと、まあ、僕が言いたいのは、君が喜んで人を殺すような男じゃないってことさ」

「そうか、ありがとう」

シリカの態度からして、本当に言いたいのはそのことではないだろうが、深くは追及しなかった。

エドワードはケフト施薬院に向かった。面会を告げたが断られて、代わりにマルシアが会いにきた。マルシアはまず、ロディムや皆の傷は大丈夫だと言った。母の容体は昨日と変わらず、まだまだ慎重に様子を見て対応しなければいけないとのこと。内心は隔離部屋に行き、必ず治りますからねと声をかけたかった。

もう一個、言わなければいけないことがあるとマルシアは言った。

「執政院の使いの人が来て、私に言付かったの。今日より二日後、早朝には執政院に来るように。オルレスがあなたを案内するって」

「わかった」

「ねえ、エドワード。あんまり無理しないでね。あなた、落ち着いてる風に見えて、根はカツカしやさいというか情熱的なタイプなのに、なんでも一人で抱えこもうとするからね。お母さんの影響かしらね」

「一人で背負うとするのは母の血筋だろうな。安心しろ、吐き出せるときは吐き出すし、共に背負っても良い物なら、そうしてもらえよう頼む」

思ったよりも早く決まった。二日後には覚悟を決めなければならぬ。

その日は体を休めた後、青熊に関する記述と得た分と出た分の支出をまとめたら、時間があるから体を鍛えてくると言って、本市の外にある森の方に向かった三人を見つけた。体術をかけあい、木剣を打ち合い、各々剣や斧、サーベルや短剣を振るう形の動作を何度か繰り返した。エドワードは短剣を盛り上がった土に投げつけた。結んだ草の真ん中を断ち切り、地面に柄の辺りまで埋もれた。

次の日は五階層ではなく、久方ぶりに四階層に降りた。モリビトとの停戦協定で、木曜日と金曜日なら通行は許可されていた。

黄色く枯れた世界の乾燥した空気が懐かしく思える。

「ジェルグは元気にしているでしょうかね。サラも」

ジャンベはエドワードに聞いた。監禁された中、心を許してくれた

少年と女のモリビト。彼らがいなければ、ある意味では戦は終わらず、エドワードも家族に会えなかった。会ってみたいが、叶わないことだろう。

「二人は元気に過ごしている。そう思おう」

ジャンベは元気よく、はいと返事をした。その日は、千エンとそれなりの儲けを得られた。

誰も欠けず、殆ど傷も負うことがなかった。事前に白い大カマキリや白虎びやっこたちの襲撃を察知し、我ながら冴さえていると珍しく自画自賛したものの、レンの性別を見抜けなかった悔やみは抜けきれなかった。

そして、当日。エドワードは執政院ラーダを訪れた。話は受けていると門番はエドワードを招き入れて、エドワードは何日かぶりに執政院に入れた。大理石をふんだんに使った豪華な広間の端々に置かれた椅子に一人、衛兵を伴ったオルレスがいた。

「ついでにきたまえ」

エドワードはオルレスに案内されて、二階に上がった。

背後では、剣を持った衛兵が距離を保ったままピタリと付いてきた。二階の東側は主に、取り調べや裁判に関することをすると聞く。

ドアの前に立ち、オルレスはエドワードの方を向いた。やや厳しい面持ちである。

「入れば、私も自由に話せなくなるから言っておこう。エドワード君、私は君に失望した。もっと慎重な者だと思っていたのに、そのような女の罠に引つかかってしまうとはね。ただ、それでも、私は君を信用している。成し遂げてくれる人だと思っている。だからこそ、今日、君をここに呼んだのだ。そして、謝ろう」

オルレスは頭を下げた。

「ナザルの件は許してくれ。あれはあれなりに忠誠があり、この国でも、ああいう者は必要なのだ」

エドワードは無言で頷いた。

オルレスはドアを開けて、先に入りたまえと勧めた。中は意外に広く、古めかしい木造の造りで囲まれていた。オルレスも入り、左右にある短い段を上り、右側奥の壇場に着席した。オルレスを含め、一二

人いる。十一人は男で、一人は年配のふくよかな女。見覚えのある顔もいる。モリビトに捕まりながら、エドワードら冒険者と果敢に兵を鼓舞して戦った鉄砲隊小隊長であり、現在は副隊長補佐の名の下、実質マルチユーゴ直属の部下として働いている男。名前はデニスと聞いていた。自衛軍総括隊長直々はさすがに騒ぎが大きいと思つて、本人の代理で来ているのだろう。

そも、彼自身、ここに来ている時点でオルレスらが企てた作戦に関わつて見るべきか。

エドワードは真ん中にある壇場に立った。裁判所ではないが、中身はそれの小型版といったところで、ほぼ変わらない。裁判長が開始の宣言を告げる。

「始めに申し上げておこう、エドワード・ウォル。君の容疑に関しては、女による他人を巻き込んだ悪質な自殺行為に巻き込まれてしまったものとして、あなたへの殺人容疑は無い。ただし、このことは自らの身内並びにパーティの者、ゲンエモンという冒険者以外には、まだ明かしてはならない。異議はありますか」

エドワードはいいいえと言つた。

「よろしい。では、此度の集まりの目的を述べる。オルレスを通じて、あなたは活動を行つてきたが、今回の一件で果たして、そのような大役を任せるかどうか疑問を抱く者が出てきた。私事です。そこで、私を含めた何人かに集まっていたら、今一度、あなたの真意。正直な気持ちを聞かせてもらい、あなたに役を引き継がせるべきか、他に譲るか決めようというわけです。いわば、審問と表現するよりかは面接に近いですな。ご了承していただけますか」

はいと言うしかない。いいえと言う気はないが。

「君の訴えを聞いて、議論をした後、多数決で決める。さあ、話したまえ」

「まず始めに申し上げておけば、私はエトリアという国のために戦う気はない」

エドワードの思いも寄らぬ発言は場をざわつかせ、オルレスに至つてはあんぐりと口を開けそうだった。裁判長は静粛にと言ひ、先を促

せた。

「私はエトリア国や執政院ラーダの政治うんぬんのために戦う気はない。あなた方とヴィズルの悶着は知らぬ、勝手にやればいい。私は家族のため、友のため、この国で平和に暮らし、これからも安心してこの国の民が暮らしていけるために戦う。これが私の真意だ」

一人が挙手した。裁判長は発言の許可を出した。

「君はエトリアの出自ではない。本当にそこまで命を賭けられるのか。取りあえず、良いこと言って、一通りの恩さえ返しとけばよかろうと思っないか」

「確かに、恩を返したい気持ちがあるのは否定しない。だが、私があなた方の国を狙う者と戦おう決めたのは、そのためだけではない。私はこの国を、良い国だと思っっている。どんな国にも問題はあつる、この国にも。それでも、多くの者と価値観を受け入れるエトリアは他では中に見られない良い国だと思う。私にも、かつて祖国や故郷があつた。今はもうないが、決してそこで得た数々の物を忘れはしない。私は居場所を失う辛さをよく知つている。もう、見たくはないのだ。私の前で、よく知る場所を失い、途方に暮れる人々を見るのは。」

話は変わるが、私はここで友を得た。コルトン、ジャンベ、アクリヴィ、マルシア、ロディム。全員ではないだろうが、コルトンやジャンベはこの国に住むかもしれない。彼ら以外にも、シリカやガンリユーなど、多くと知り会つた。

私はこの国に永住する気はない。一族の者を連れて、時が来れば旅立つ。ただ、残りたい者がいれば、残つても良いと思う。エトリアにはその価値はある。そして、いつの日かまた、エトリアを訪れたとき、流浪の遊牧民が私が言うにはおかしな言葉だが、かつての友と身内の者たちと会える、ある意味では故郷と呼べるような場所がどこかに在つても良いと私は思つている。

だから、私は戦う。どんな綺麗事を述べても、戦は戦。暴力だ。かっこよくもない。それでも、暴力を以てして来る者たちがいて、話を通じないようなら、最後の手段として戦わねばならない。この国に住む者たちと友を理不尽な暴力から守るため、この国に住まう

であろう友と一族が安心して生活を営んでいくために。やがて俺がこの世からいなくなっても、俺が愛しく思う者たちが立派に歩き続けに行けるように。関わった者達の子や孫や次の世代に幸あれかしと願えばこそ、俺は戦える」

裁判長が咳払いした。

エドワードは一人称が俺に変わっていることに気付き、失礼したと詫びた。

「他にあなたが言いたいことはありますか」

「ありません。しかし、一つ聞いてもよろしいですか」

裁判長は質問を許可した。

「以前、モリビトとの戦いの時。信用と信頼の証として血印状けついんじょうを押ししました。もしもまた、そうする必要があるなら、そうしますが、今回の件による責任もかねて、仮に指や体のどこかを切り落とせと言われたら、私はそれを拒みます。大事に至る前に、私は冒険や戦い以外で無意味に体を傷付けて、支障をきたしたくない」

「ここは、裁判所ではないですが、指先を刃物で切るのはもちろんのこと。いかな事情があれ、私の前で指を切り落とすなどの蛮行は一切許さない」

オルレスは決まり悪げに指を見て、デニスは微かに笑みを浮かべた。裁判長はエドワードに他にも聞くことは無いか尋ねた。エドワードは無いと答えた。

「よろしい。では、これにて、エドワード・ウォルの審問を終了する。エドワード・ウォル、あなたは我々の票決が決まるまで待機してください。決まり次第、オルレスがあなたを再び、壇場までご案内し、私が此度の議会の決定を告げます。このことに異存はありますか」

「異存はありません」

エドワードは一度、部屋から出た。衛兵が一人、増えていた。エドワードは近くの待機室に連れて行かれた。少しして、外の衛兵にかわやはどこだと聞いた。

珍しく、用を足す時間が来るのが早い。我ながら緊張している。心に反し、気持ちよく出た。

部屋にこもりきりで退屈であり、僅かながら置かれてる本に手を伸ばした。女性向けの小物や服を紹介した本など薄い冊子の他、二冊に分かれても分厚い「エトリア伝承」が置かれてある。

エドワードは上巻の方を手にとって見て、顔をしかめた。

中もそこらの辞書より事細かにびっしりと文字が書かれてる。アクリヴィなら、いつでも喜んで読むだろう。適当にページをめくり、気になった記述をたまに読んだ。

ふと、先日のシリカの思わせぶりな態度が頭をよぎり、エトリア原住民のページを読みたくなった。シリカやドナは、竜たちに戦いを挑んで滅ぼされかけた原住民の生き残りである。

読んでシリカの気持ちかわかるわけではないが、興味を持ったので読んでみた。大体、どこかで、あるいは本人の口から聞いたことがあるものも多かった。数ページを適当に眺めていたら、建国者であるアルソール。正確には、アルソールの親類縁者で、サジタリウスの矢を持ち出した者との関わりに対しても短い記載があった。

“エトリアの国宝にも成りえたであろうサジタリウスの矢の内の一本は、彼の親類縁者の一人が持ち出した。親類の名はアラソルゴ。一説では、アラソルゴは原住民たちの元に身を寄せたというのもあるが、当時と現在の調べでも確たる証拠はなく、原住民と子孫たちも否定した。アラソルゴの行方はようとして知れない。”

期待以上のことは得られなかった。サジタリウスの矢に関してはアクリヴィに聞いた方が早いし、アラソルゴの方もアクリヴィから聞いて知っていた。アラソルゴは野垂れ死んだ。子孫がどこかにいて、矢を伝えている。子孫は途絶えた。この三つの仮説は聞いたが、既に死んでる見立てが強かった。

全てに目を通さず上巻を戻し、下巻を手にした。思ったとおり、下巻の目次にはアジロナの項目がある。エドワードはそこを集中して読んでいるうちに、衛兵がノックをして、オルレスが来たと言った。

「退屈はしなかったかね」

「もう少し、遅れて来てくれたら、アジロナの記述を全て読めた」

「楽しく過ごさせてなによりだ」

オルレスの案内で再び、エドワードは審問室に入った。身内（ホー
プマンズや家族含む）ほどの付き合いはないが、何となくオルレスの
ことも分かっているつもりだ。表情にこそ出さないが、多分、良い方
に傾いたはず。

壇に立ち、裁判長の長めな前口上と宣言が終わるのを待ち、遂に聞
きたかったことがきた。

「私を含む票決の結果をお伝えします。エドワード・ウォル、あなたの
伝令並びに諜報員と使者の役目は、四人の反対票と八人による賛成票
が入った。よって、エトリア国とそこに住まう人民のため、先述した
役目を引き続けてもらいたい」

「喜んでお受けする。全身全霊を以て必ずや果たします」

「わかりました。一つ足しておけば、今後もし、このような目立つ問題
が起きた場合。此度のような議会や審問を行わずして、あなたへの
ミッションは強制的に解除となり、ホープマンズの一行は許可が無い
限り、執政院ラーダへの立ち入りを禁じます。では、今日の議会はこ
れで終了いたします。他にご意見のある方はおりませんか」

無言で数人が会釈したのを見て、裁判長は改めて終了と述べた。

他の者が出て行くまでエドワードは待った。デニスが寄り、微笑み
かけてきた。

「あんたやその仲間となら、喜んで一緒に戦うよ」

エドワードとデニスは握手した。共に死地を潜り抜けた者同士、通
じ合う面はあった。確実に賛成した二人の内一人は彼だろう。

デニスが行った後、そのもう一人と思われるオルレスも来た。オル
レスは早速、事務的な口調で室長部屋に来るのだと言った。エドワ
ードは来客用の柔らかい座り心地の良い椅子に腰掛け、オルレスは自ら
のデスクに座った。

「まずはおめでとうと言っておこう。私は正直、迷っていたが、決まっ
て良かった」

「迷っていただ?!」

「そうだ。どうするか迷っていた。君に任せたいが、別のことをやら
せたほうが良くないかとね。悩みに悩んだよ。デニス君は真っ先に

賛成したがね。残すは私も入れて二人、今日の面接の進行係も担当した姉妹都市である港町の行政にも関わる裁判長が賛成したのを見て、私も決意して賛成したのだ」

「では、入れない。もしくは、反対だったら」

「その時によりけりだよ」

政治に関わる者特有な濁した言い方をされて、少々ムツとしたが、突っ込むのは止めた。

彼も例の血印状に押ししたり、多くの事を協力してくれた。多少の裏表な一面は、清濁併せ呑まなければならない立場にいる者だから仕方ないと割り切る。

「さて、本題に入ろうか。まず、君はレンとツスクルに仲間がいるのを知っているか。ギルド長ガンリユーを通して、私は一ヶ月前にそのことを知った。特に目立ったことはしてない」

「二日前、知り会ったばかりだ。そして、あんたが知らないであろう事実を俺は知った」

エドワードはゲンエモンの推測を伝えた。オルレスはううむと顎を引き、少し考えた。

「ゲンエモンの言う通り、現段階では知り合いに似ているというだけでは証拠にならない。だが、彼、それとも彼女かな？ もしも、彼が性別や偽名を偽っていただけなら問題ない。問題なのは、エトリアに来たことがないという偽りを述べていたことだ。あの者たちは勘も察知能力も凄くてな、うかつに近付けんのだよ。エドワード君、接触して、レンと斬突と名乗る一行の正体を探ってくれ。彼らと比較的、親しい君にしか頼めない」

「俺自身、レン達のが気になるから、あんたに言われなくても話を聞くよ。それはそうと」エドワードは身を乗り出した。「例の馬鹿共のことを探った情報はこないのか」

「ままだよ。以前では、更に大量に送ると書いてあった。送る時期も明記してあったから、それを信じれば、後数日ぐらいかかると思う。総隊長も安否を気遣っておられる」

「スパイに行ったのは、ミルティユーゴの元冒険者の仲間だったか？」

「そうだ。情報と他国人の出入りも厳しく規制しているから、彼が直接、使用人として潜り込んだのだ。優秀な方ではあるが、周りは敵だらけ。最悪、骨も残さず死ぬのを考えたらゾツとするよ」

「無事を祈るよ」

これ以上、話せることないねと、オルレスはエドワードに帰って休みなさいと言った。

エドワードはもう、執政院ラーダに居る事自体が精神的に疲れてきたので、ありがたく帰らせてもらうことにした。

といつても、施薬院にはちゃんと寄った。熱はおおよそ一度くらい下がり、呼吸も安定してする時間が昨日より増えたとマルシアから知らされて、素直に喜んだ。面会は謝絶されたが、エドワードの気持ちは明るくなった。

金鹿の酒場にも行き、女将に良い依頼はないかと尋ねたら、女将はにっこりほほ笑んだ。

「良いのがあるわ。昔はどこそかの男爵で、今も子孫は頑なに男爵の称号を付けているの。現代の当主は、金きんが大好きで沢山の金製の物を身に付けた別名“黄金男爵”と呼ばれる人からの依頼よ。五階層辺りで金色の牛や猪が出るのは知っているわよね。それを聞いて、自分の豪華な織物を羽織りたいから、十体分、綺麗な状態の毛皮が欲しいって。報酬は五千エン。あなたのお母さんが病氣と聞いて、少しでも足しは必要だと思って、取っておいたのだけれど、受ける？ とてつもなく強いらしいけど」

「むしろ青熊なんかより、ずっと良いですよ」

エドワードは女将に感謝して、頭を下げた。そんな頭を下げないと、女将は慌ててエドワードに頭を上げさせた。帰ったら、すぐに依頼の件を伝えたが、エドワード以外の者は難色を示した。

「難しいぜ。ちよつとしか戦ったことないけど、あいつら素早くて力もある」とロディム。そこへ、アクリヴィが一案を出した。「今日は無理だと思うけど、明日にでも、グラディウスのキアラと私を一日だけ交換しましょう。キアラの術があれば、傷付けることなく動きを止めて、仕留めることができる」

ある程度知れた仲の冒険者なら、交換や貸し出す形で一時、余所のパーティに行くこともあった。今回は協力という形でアクリヴィが行くことにした。向こうが受け入れてくれればの話だが。

夜に拠点にしてある花桜の館へエドワードとアクリヴィは向かった。玄関付近の食堂席にコウシチが居たので、訳を話したら、オルドリッチに聞いてくると離席。すぐにオルドリッチはキアラと共に来たら、キアラの返事を待たずにオーケーを出した。

「いいぜ。貸すよ」

「私は玩具じゃないわよ」

キアラは、ふんと鼻息を鳴らした。

「まあ、そういうなつて。君の答えを先に読んだまだけだよ」

キアラはあつそと、そつぽを向いて奥座敷へ戻った。オルドリッチは悪がきみみたいな笑みを見せた。白衣を着てなければ、若い娘に絡むチンピラにしか見えなかった。

「生意気で口も悪いが、あれで結構、可愛らしいところもあるのよ。まあ、嫁入り前だから、傷付つかないようになしてくれ」

「そつちこそ、うちの嫁入り前の娘を傷付けないでくれ」

さすがに一日だけでは集めきれないと思うので、可能なら、別の日にまた互いに交換しあうことに合意し、握手をして別れた。

三三話・エドワード、発つ

四人の従者を伴い、しやなりと見せびらかすように大量の金の鎖や貴金属を身に付け、金糸で織ったヴェストとブリーチーズにコートを羽織り、金の指輪には高価な宝石が埋め込まれてる。帽子は金糸で、羽根飾りも金粉で固めた物。金のごとく、歯をきらりと清潔にしてある。目の前の人が悪趣味で有名な黄金男爵でなければ、他に誰がいう。

男爵は金鹿の酒場に自ら参じて、品物の状態を直に確かめに来たのだった。満足気にきらりと光る歯を見せつけたら、五千エンに加えて、キアラの鈴は良い趣味してるから気に入ったと、純金製のコインも与えた。キアラは呆れた顔で「趣味じゃない」と小言をついた。「あのおっさんを獲物として狩った方がよっぽど儲かるぜ」

ロデイムの発言に女将も含めて、居合わせた者たちは同意した。結局、金の狂暴な猪と猛牛狩りには二日間を要した。

キアラの術は強力であり、対象以外にも余波で眠らせたり、動きを鈍らせたりして、戦いを有利に進められた。もつとも、集団戦となれば、アクリヴィと同じくすぐに体力を切らしてしまう欠点も抱えていた。

花桜の館までキアラを送り届けて、再度、礼を述べた。キアラは顔を逸らして、紫の三つ編みを指先で弄ぶと「別に」と言っつて、靴を脱いで奥の部屋へと向かった。ああいうところがいいのよと言いたげに、オールドリッチはにかりと笑った。入れ替わりにアクリヴィも来た。

「うちのシシヨーとお宅の嬢さんは中々相性良かったよ。でかくて気の強いところは特にね。そういうのは一人で十分だよ」

「普通、本人の前で言う？」

オールドリッチは誤魔化すように笑い出した。言い方も皮肉や嫌な感じではなく、さらりと良くも悪くも率直に自然な感じで言うので、アクリヴィは今の発言に対して、特に思うことや嫌と思うことは無かった。宿を出たら、エドワードはアクリヴィに二日間の感想を聞い

た。

「ゴウシチとシシヨーはともかく、チンピラ医者と大きな悪ガキ二人の相手はだったわよ」

そうかと、エドワードは可笑しそうに頷いた。

その後は地味に地図の空白を埋めつつ、探索を進めたり、時に地上におけるエトリアの民の依頼や手伝いを引き受けたりした。母の容体は僅かにだが、快方に向かいつつあるとのこと。マルシアは研究も兼ねてと施薬院に泊まりきりであり、ロディムがそのことに対して不満気にぼやいたりすることや、あの一件で後ろ指をさされることを除けば、それなりに順調に進んで行く日は続いた。

レンとツスクルに会わねばならないが、どう理由を付けたか迷っていた。

しかし、とうとう、エドワードにいよいよ使命を帯びる日が近づきつつあった。

——十月十五日の夜——。

曇りがちな日であり、季節も相まって、晴れた日より暗くなるのも早かった。

城壁や門には篝火かがりびはあるにはあったが、有事や祭り、何かしらのイベント意外で篝火をたくのは無駄だということで、通常通り、要所にかけられた小さな蠟燭の灯りを頼りに衛兵は辺りを警戒していた。

曇り空で月や星もなく、街も一部の酒場を除けば火が消えて、蠟燭の灯りがより一層明るく思えた。

いつもの静かな夜が来るかと思いきや、激しく地面を踏み鳴らす音がはつきりと聞こえた。

目を凝らさずとも、草原を駆ける大きな黒い点がどんどん近づいてくるのが見えた。

衛兵は笛を鳴らした。連動するようにあちこちで笛が鳴らされて、篝火もたかれて、北の大門に接近する騎乗者や他に仲間がいらないか警戒した。数名の弓兵に鉄砲兵、万が一にも備えて、城壁の内側に備えられた石火矢（大砲）の準備も進めておいた。

騎乗者は騒ぎを察知したのか、馬から降りて、旗を振りながら近づ

いた。エトリアの旗である。

「報せを携えて参りました。至急、大門を開けよ。ミルティユーゴ殿へ届けねばならん」

衛兵たちは辺りを見回し、この男以外には誰もいないのを確認したら、急いで巻き上げ機で橋を降ろし、大門を開けた。北の大門責任者は小一時間ほど篝火をたき、確認が取れ次第、直ちに篝火を消すように命じた。

男は伴われるように数名の衛兵と共に、ミルティユーゴ以下、上級士官たちが住まう宿舎へと向かった。

ミルティユーゴは手紙をその場では開封せず、男の耳元に囁きかけた。

「彼は無事か？」

「聞いた限りでは、数名の異国のスパイが囚われて、見せしめに観衆の前で処刑されたようですが、ご友人が含まれているかは定かではありません」

ミルティユーゴは押し堪えて、彼をどこかで休ませてやれと見張りの衛兵たちに告げた。隊長や側近の者たちも部屋に入るのを許さず、ミルティユーゴは厚い手紙の中身を確かめて、呻き声を漏らす代わりに右手で額と両の目蓋を抑えた。

だが、彼はすぐに立ち直り、地図と自衛軍の数や状況を取り出し、チェスの駒や駒替わりとなる物を布陣に敷いた。

顎鬚を片手でならしながら、どうしたものかと考え、地図と敵味方に見立てた駒を睨んだ。

ホープマンズの面々は陽が明ける前に目を覚ましていた。すっかり日常になってしまったが、今日は訳が違う。少し前に執政院からの使いの者が来て、明朝にエドワード一人で来るように言われたからだ。

「周りに気を付けろよ。刃が来るぞ」

ロデイムの冗談に誰も笑わない。起きていても意味が無いと、仮眠を取ることにした。ちょうど二時間経つ頃には、エドワードは目を覚

まして、小声で行つてくると言った。本来なら微かに陽が差している時間だが、曇り空で外は暗かった。

エドワードは執政院の門を潜る前から、どうも中の空気が違うように感じた。殺気立っているというか、緊張している感じがした。

エドワードは中に入ると、冒険課の事務員の案内ですぐさまオルレスの下へと案内された。

オルレスは生きていることが疲れたかのような、険しく暗い面持ちだった。情報が遂に来て、思った以上に深刻なことをエドワードは悟った。

「早朝から済まない、エドワード君。ところで、あの二人と接触したかい？」

「まだだ。だけど、多少、強引でこじつけがましい理由でも、今日か明日にはあの二人と会おう」

「是非そうしてくれ。できれば、私からの話が終わったら、すぐにでもだ」

そうして、オルレスはエドワードに、ミルティユーゴを通じて知り得た情報を聞かされて、驚愕した。

「国情が不安定な状況でそんな大軍! 何を考えているのだ」

「指導者ならそう考える必要もあるが、かの国の指導者は実質あの盗賊が握っている。今月中にでも、ただちに兵の募集。場合によっては徴集も辞さない。ただ、集めたところでどうなるやら。なにせ、敵は最低でも、確実に八万、最大見積もり十万にも及ぶ軍勢を率いて、我が国を蹂躪する為だけに来るのだから」

八万、十万。口に出すのは容易い。いぎ、目の当たりにしたら、弱い者は腰を抜かすだろう。それほどまでに途方もない軍勢が侵攻してくるのは、脅威以外の何物でもない。

ましてや、建国以来、モリビトの戦や四百年前の英雄アジロナによる抵抗を除けば、一度とて戦争をしたことがないエトリアには、大軍が攻めてくるといのが想像しにくいはず。

近隣二国の人手を掻き集めても、やっと半分を超すか。呼びかけた者たちが全員、戦うことを承諾してくればの話だが。

「断っておくが、エドワード君。私が君に伝えたいのはこれだけではない。過去の資料をあさり、プロファイリングした結果、ある人物が浮かび上がった」

「では、そいつが元冒険者のエトウと名乗る者か」

「その可能性は高い」

オルレスはエドワードに、エトウなる者と思しき人を語った。そして、エドワードは男とエトリア、二つの闇を一度に知った。

「気持ちは分からないこともないが、元はといえば、そいつが自ら犯した悪事のせいだろう。そんな目に遭うのも、然るべきだ」

「そうかもしれない。そうかもしれないが非人道的だ。私もそのことを初めて知ったとき、自国。正確には政治中枢であるラーダの知りたくない一面を再度、知ってしまった、嫌な気持ちになったよ。このことはくれぐれも……いや、君の仲間やゲンエモン氏になら明かしてもいいだろう。彼らには知る権利がある」

「で、俺はいつ行けば良いのだ」

「君自身の整理や準備もあるだろうし、こちらとしても一件ほど、迷宮において重大な使命を果たしてもらいたいのだ。君だけではない、君の仲間と数名の衛兵に使者も加えてだ。モリビト達にも此度のことを警告しなければならぬ」

「モリビトだど!? 彼らが力を貸してくれるとでも思っているのなら間違いだ。親しくなった者もいるにはいるが、彼ら二人の力ではどうすることもできないぞ」

オルレスはそうではないと言った。

「彼らの協力は期待しない。しかし、今後、二度とあのような地下迷宮における悲劇を繰り返さない一環として、彼らにも警告を促して起きたい。彼らは被害者だ。だから、彼ら風で言えば、我ら地上の者が撒いてしまった災厄の種に彼らを巻き込む訳にはいかない。そうそう、君は笑うかもしれないけど、これも教えておこう」

オルレスは、アウルム家と十六歳になる当主アルブムが見る予知夢とその内容についても語った。一笑に付そうと思っていたが、エドワードは笑えなかった。近い内、エトリアを襲う大嵐そのものを既に

聞かされているようだ。外は人間、内からは世界樹の怪物数千が来ると聞かされて、さしものエドワードも暗澹あんたんたる思いに捕われかけた。「では、モリビトたちには外からの敵と同時に、そのお嬢様が予言した内なる敵についても伝えればいいのだな。ところで交渉の使者には誰が立つのだ」

「イアンが使者だ。彼が行く。彼はモリビトを許すどころか、今度こそ平和的に話し、彼らのことを知りたいと言っていた」

「一度殺されかかったのに、大した肝っ玉だ。あるいは馬鹿か」

「毎日、望んで死地へと赴く君らは馬鹿ではないとでも？」

オルレスの返しに、エドワードは口を閉ざした。オルレスは細かな日時を決めた。

「まず、今日の昼過ぎまでには四階層のモリビト達のところへと向かう。次に、例の二人と接触してくれ。必ずしもその日に会えるとは限らないと思うから、三日以内には必ずだ。彼らと接触できなかったとしても、今日より五日後には君に旅立ってもらおう。何か意見はあるかい」

「いや、無い。そうしよう。ところで、正確にはいつ来るのだ」

「敵は九月には出発をしたようだ。サンガットからここまでは遠い。距離にして三千km以上ある。途中、二千二百から二千キロの地点まで入り組んだ高山地帯で隔てられている。つまり、約百キロに関しては舟で迂回した方が早い」

オルレスは地図を指した。

確かに、行けないこともないが、この百キロに及ぶ高山地帯を何万の集団で移動するのはとても厳しく。多少、往復するにしても、高山地帯を避けて、船で人員と荷物を運搬した方が遥かに早い。ただ、多量の馬と一個師団の半分以下の人数なら、船よりも早く行けるかもしれない。

「ミルティユーゴ殿の見立てでは、これほどまでの大軍となれば、行軍行程はかなりの労力と時間を要する。航海や遠征が支障なく進んだとしても、最低でもエトリアの到着には五カ月。幾度となく事故や障害には阻まれれば、更に遅れて、最長でも十カ月かかり、軍団の規模

を途中で縮小せざるを得ない。引き返す可能性も無きにあらず。と
いっても、我らは最悪の事態を想定して、敵は五カ月後に到着し、誰
一人欠けることなく十万規模の軍を以てして来ることを強く範囲内
に入れておく。エドワード君。私としては、君には来年の二月か三月
までには、エトリアに帰還するのを望みたい。君の道中が滞りなく進
めたら話になるけどね。ついで、できれば、百騎だけでもいいから、
援軍を連れて戻る君の姿を見たいよ」

「注文が多いな。だけど、俺や仲間には家族、多くの罪の無い者たちの命
がかかっている。必ず成し遂げよう」

エドワードは宿に戻り次第、部屋に集めて事の成り行きを伝えた。
ただし、エトウに関しては、本名だけを明かし、彼の動機となる仕打
ちは伏せておいた。エドワードは改めて、問わねばならないことを聞
いた。

「俺は戦う。だが、お前達は俺との接点以外では関わりがない。今す
ぐではないが、戦いが始まる何日か前にも、避難するのは可能。無
理をして、絶望的な戦いに加わることはない」

「そうまでして、戦う理由はあるのかしら。無駄に命を落とすだけ
じゃない」

マルシアはふと疑問をもらした。マルシアの言うとおりかもしれ
ない。全員、逃げれば良い話だ。しかし、それもゆかない。アクリ
ヴィがマルシアの疑問に答えた。

「確かに、逃げれば全員助かる。だけど、そうすれば、その国の者は全
員、窮地には国を見捨てる者しかいないような臆病者ばかりと見なさ
れて、国を捨てた他国の者として下に見られてるのに、余計に扱いが
悪くなる。だから、せめてもの意地。国を奪われまいとする抵抗をし
なければいけない。たとえ勝つ見込みがなくとも。」

仮に私が他国の高い地位に就く者だとして、そこそ仲が良くて助け
られたことがあったとしても、戦う素振りすら見せない者たちを信じ
る気にはなれない。国民も受け入れがたい」

「うん、わかっている。わかっているけど、命を救う職に就いているか
ら。なんだか、やりきれない思いがね」

国、村、町、組。呼び方はどうあれ、一定の人数が集まると、まことに大変だなどエドワードは改めて思った。少数ならいざ知らず、大多数ともなれば、情だけではどうにもならない。自分と身内以外の思考、損得や有利不利も頭に入れて、動かなければならない。本音を明かせば、このようになつたことは避けて、ひたすら冒険に打ち込みたい。今だ辿り着いたことがない最下層に行き、なにかしらの真相をあばき、英雄になるのが夢なのに、深く行つて関われば関わる程、こんな事になるとは思つてもみなかった。

それとも、誰かがこうなる事を望んだのだろうか。

「俺は残るよ」

ぼつりと、コルトンが呟いた。

「俺はここを第二の故郷にしたしな。この平和な国を理不尽な暴力には晒したくない。それに、帰りを待つ者が一人もいないのは寂しいだろ。俺の後ろの守りはあんたしかいないと思つている。前にあんた自身が言ったが、俺たちは強い。だから、心置きなく行け、相棒。もう一度、あんたの姿を見るまでは、二本足で立つていてみせるよ」

他の者はどうだと見回した。みな、口にこそ出さないが、各々同意した顔付きだった。

「血の繋がった人はいませんし、帰る場所も無い僕には、ここしかありません」とジャンベ。

マルシアが微笑む。「沢山、怪我をする人も出るだろうから、人手は多い方がいいわよね」

アクリヴィは仕方ないと言つた風に右の口角を上げた。「流されて同調したつもりはない。私は自分の意思でここに残る」アクリヴィの不敵な笑みは、睨んで怒つてる表情にも見えた。

「盗賊怖くて、仲間置いて逃げ帰ったら、それこそ村八文で末代までの恥さらしよ。任せときな、近づくと奴はどいつもこいつも叩き伏せてやる」ロディムは意気込んでいるものの、マルシアが離れると言つたら、その意見に従つただらう。エドワードは半ば呆れるも、彼が残る選択を嬉しく思つた。

翌日の夜明け前。エドワードは本都市の北側に向かった。下町の風情が残り、格安の宿屋や酒場が点在するドヤ街の壁に近い宿屋チープにレンたちは宿泊していた。

チープ、粗末や安いといった意味だが、その名のとおり、安いだけが売りの居酒屋兼宿屋であり、出る酒も酔のような酸っぱい物が殆ど。中も所々ヤニ臭い。

どうしようもなく金がない旅人や冒険者。もしくは、宿泊費をケチりたい商人が泊まる。主人が死んだら、誰か適当に別の者が引き継ぐ方針であり、今の主人と前の主人に血の繋がりは無い。

泊まれてたまに飯が出るだけありがたいと思えと言わんばかりで、小柄な禿げた伏し目がちな主人が経営しており、太った妻が料理係で、子供が小間使い。大きくなった今はもう、家に顔見せ程度でしか来なくなったとオルレスに聞いた。

適当に言い訳をつけて、料理を作らない日もあり、過度なサービスは期待できない。

修行の一環だと、一ヶ月泊まったこともある。

一日や二日ならともかく、長くは住みたくない宿屋だった。もつとも、エトリアに限らず、世界中の多くの安宿は大なり小なりこんな感じで、良い宿屋というのは金がかかる。

建物と壁に挟まれて、薄汚れてるせいもあり、人目に付きにくい。レンたちは拠点を転々と変え、二週間前からこの宿屋を拠点にしていると聞いた。

ならば、この宿屋を選んだのは正解だろう。チープな場所で穏やかに微笑みあう連中がいるはずもない。

この手合いの宿だと、下手に目立つ行動をしない限り、余計な詮索を慎むのが無言の了承となっている。

エドワードは玄関をノックした。当然、返事はない。

次に裏手に周り、主人が住まう一角の壁付近を叩いた。用があると声をかけた。目をこすりながら、不機嫌そうな主人が顔を窓から覗かせた。薄暗く、会うのも十年ぶり。

多分、覚えてないはず。布元で顔を隠し、帽子も被っているので、見

られても問題は無いが。

「何用で。強盗なら余所へ行つてくれ。家にや大した金はないよ」

「ここに、レンという侍が泊まっているはずだ。青っぽい長い髪の者だ。彼に言付けてくれ」

エドワードは百エン札をちらつかせた。眠たげな主人はカツと見開き、につこりと愛想笑いを浮かべた。齒は安物なやにを摂取したせいで、黄土色に染まっていた。

「夜に、E・Wが金鹿の酒場に来てほしいと言っていた。それだけでいい。いいか、絶対に伝えるのだぞ」

最後は語尾を強めた。主人は微かな怯えを見せつつ、金の誘惑が優り、はいはいと笑顔で百エンを受け取った。

名前の頭文字なら、主人に自分の正体を察せらず、尚且つ、レンになら意味は伝わるはずとエドワードは考えた。なにか、事情があるのだろうかと来てくれるか。それとも、警戒して来ないか。後者なら、主人が伝えなかった可能性もあり、軽くとつちめてやろう。

今日は各人、エウドラの治療があるマルシアを除き、人手が足りない仕事に一日限りのアルバイトとして派遣した。コルトンとロディムは農耕。アクリヴィはミズガルド図書館の司書。ジャンベはシリカ商店に預けて、店番や雑用に従事した。エドワードは数件の配達を受けて、馬借としてあちこち回った。

陽が暮れる頃、エドワードは金鹿の酒場の奥側に卓を陣取った。事前に女将には卓を取ることは伝えてあり、今回は良いと女将は言った。既に半数近くも埋まっており、卓の事前予約を承諾できて良かったと思つた。

同じ酒場でも、チープとはえらい違いである。

決して高級ではないけど、来た者にせめてもの安らぎを与えたい女将の心意気は、騒がしいのに入りやすい雰囲気と常に清潔にしてある店から窺い知れる。

水で限界まで薄めたちびちび飲み、時に同業者と会話をし、レンを待ちもの一向に來ない。真夜中を過ぎて來なければ、諦めよう。三時間経ち、そろそろ待つのも飽きてきたとき、ようやくレンが姿を

現した。一人で来ていた。

レンは女将に会釈をしたら、真つ直ぐにエドワードのもとを目指した。

混雑の中、自然と相手をかわしてる。レンが空気でそこにいないみたいだ。ゲンエモンやコウシチなど一人前の侍は時に、このような動作を見せる。居合や見切りの修練を重ねるうちに、自然とそうなるらしい。

エドワードもできないことはないが、どちらかといえば、上手く身を引いている感じで、師のように緩やかな空気となつて避けるのは難しかった。弓や狩りを得意とするお主とは戦い方や技術が違うから気にするなと言うが、いつかは習得したい。

「E・Wと聞いて、名前の頭文字だと気付いた。それで、回りくどいことをして、私になんの用事があるのかい」

「俺は後数日したら、旅立つんだ。だから、その前に何人かと会って、話をしたいと思つてな」

「それなら、ここではなくても、直接話せば良かっただろう」

「まあ、座つてくれ。麗華」

レンは苦笑いを浮かべ、誰だそいつはと言いたげだった。

「おかしな人だ。人の名を平気で間違えて」

「すまん。似た人を見たものでつい」

レンは迷っている風だったが、着席した。本当は何も知らないが、知っていると思わせて、引き留めることに成功した。エドワードはエール酒でいいかと尋ね、レンは頷いた。胸元を開いた服を着た給仕の娘がエール酒のジョッキをレンの前に置いた。

そこから、下らない雑談を始めた。ただし、多くがエドワードから喋り、レンはたまに短く語るぐらいで、身のある会話ではなかった。エドワードのお喋りに、レンは関心無さそうに聞いてた。エドワードがモリビトとの事を語り出したら、レンは興味を示した。おやと思いい、エドワードは慎重になった。そして、モリビトのジェルグと交流し、黒い仮面を付けた三人組の辺りを語り出したら、レンが質問をした。

「君は、その三人は誰か分かったのかい？」

「いや、検討中だ。もしも、分かり次第、双子三つ子の三人を含む、その三人のせいで犠牲になった奴らの復讐を果たしてやりたいと思う。小さいのが子供でも容赦しない」

「子供には情けをかけないか」レンがこちらを睨んだ。「睨むな。子供なら、お灸をすえるに止めるつもりだ。まあ、とにかく。俺は一族のため。父との約束。俺自身の願いのため、世界樹の迷宮に挑んでい

る」
レンの態度にいぶかしんだ。レンはすぐに落ち着き払った様子で、話題を逸らした。

「尊敬できる父君を持って、君が羨ましいよ」

「あなたには親がないのか。よろしければ、話してくれないか」

レンは躊躇したが、自ら納得させるように微かに首肯したら、エドワードの目を見据えた。

「よかろう。私からも、少し身の上を語ろう。本当に少しだけな」

レンは昔のことと父親について語った。

「私は物心付いた日から、父と共にあてどなく彷徨っていた。母はいない。私を産んだ直後に亡くなられた。苦労は多かった。父は厳しく。滅多に笑わない人だった。それでも、愛情を以て接しているのは伝わり、嫌と思うことはあまり無かった」

レンの目付きが冷たくなり、侮蔑と憤りを込めて語り始めた。

「私が十代の頃。商人の一行に混ざり、移動をしていたら賊に襲われた。連携が取れて、腕も立ち、並ならぬ群れで多勢に無勢であり、商隊と護衛は全滅。父と私は捕えられた。賊の親玉らしき者が剣を抜き、邪魔になるからと即座に殺そうとした。私は父がなんとかしてくれると思った。しかし」

レンは言葉を切った。険しい表情である。やがて、ふうと一息入れたら、続きを話した。

「しかし、父は私を売った。この子は金になる、好きにしてくれ。代わりに俺は助けてくれと無様に泣き叫び、命乞いをしだした。私が父さんと泣きすがったら、手を振り払い、母の忘れ形見のお前を愛した

かったが、私の愛すべき女の命を奪ったお前の代わりに死ぬなど真つ平御免だと罵倒されて、引つ叩かれた。首が折れるかと思つたよ、あの時のびんたは。

あの男は荷運びでも奴隷でもいいから、俺だけは生かしてくれと賊共に懸命に土下座した。そして、賊は分かつたと言ひ、父の胸を貫き、肩をつかんで首を跳ねた。私は氣を失ひ、目を覚ましたら、汚い狭いかごで揺らされて、何度か吐いた。あの言葉とあれが父と信じていた男の本性を知り、色んな意味で死になつたのは覚えてゐる」

レンは語りを止めた。いや、終えたのだろう。そこから、今に至るまで、とてつもない苦難が待ち受けていたのは想像に難くない。

レンは一瞬、深く悲しい眼差しを見せた。初めてみる。エドワードはレンの素顔を見た氣がした。そして、男か女かの迷いは先ほどまであつたが、この表情を見た者なら多くはこう言うはず。レンは女だと。まばたきをしたら、いつもの冷たく用心深い目付きに戻り、男か女か判別しにくくなつた。

「君の父君と兄上は戦で散つたといわれたな。私もどうせなら、彼には潔く死んでもらいたかつた。あれ以来、私は彼を憎み、屑の言いなりに——そう易々とくたばつてなるものかと思ひ生きてきた」

「いかな事情があれ、自分の親を屑と言ふな。自分の親を貶めたら、親の血が流れている自分も貶めていることになるぞ」

レンは態度と声を改めた。鉄よりも非常に冷たい氷の眼差しで、視線だけで相手を切り捨ててしまふそうだ。

「最期まで尊敬できる父を持つ君には理解できないだろうな。他に話すことはあるか」

レンの口調からして、これ以上の会話は期待できない。ツスクルとの関係やメンバーについて聞きたかつたが、諦めよう。一つだけ確認しておいた。

「エトウという名を聞いたことがあるか」

「宗教家崩れの盗賊だろう。そいつがどうした」

自分への不快を入れても、レンはエトウをどうでもいい。軽蔑しているように聞こえた。

「わざわざ時間を取らせたのに、不快な思いをさせたな」

「失礼つかまつる」

レンは自分に運ばれた分の代金を卓に置いたら、さっさと酒場から出て行った。先ほど入ってきた巨人熊髭男ヴァロジャが声をかけた。「青瓢箪な外見のくせに、恐ろしいほど冷たくこええ目付きしてやがった。あんなどつかの筋者すしものみたいな奴と何を話してたんだ」

「いや、親について話し合っただけだ」

信じた訳ではなさそうだが、余計な人間関係に突っ込むのは面倒だと、そうかいと肩を竦めたら、周りの者と飲み始めた。今日の経緯いきざつは、オルレスの前にゲンエモンと話したいとエドワードは考えた。

しかし、長鳴鶏の館に戻ると、コルトンから執政院の言付けが伝えられて、翌日にはイアンの護衛に参加してもらいたいとのこと。正午の二時間前には集合。メンバーはイアンと衛兵四人他、冒険者十名から選抜されて、自分とゲンエモンの名が入っているのは好都合だった。

最近、ごたごたとしていて用事のせいで遅寝早起きもあり、いささか寝不足気味だったので、ありがたくゆっくり寝させてもらった。マルシアを除く四人は、パスカルらと付き添い、四人二組に別れて蜂狩りをしてくると言つて、既に出かけていた。

いつもより多めな朝食を取り、リラックスをした後、トルヌウアー内壁の門にある詰所に入った。

イアン他衛兵四人以外にも、ゲンエモン、禿頭とくとうのラクロワ、ヴァロジャ、隻眼のレンジャー・ヌナも来ていた。

残る五人は、オルドリッチとキアーラ、アデラ、ブルーナ、ドナ。少し待ち、ドナ、アデラとブルーナ、オルドリッチが来て、最後にキアーラが到着。時間はまだあるが、予定より早く出発した。

樹海時軸を抜けて、四階層へ到達。刈り入れの時期でどこか潤い漂う地上とは異なり、乾燥した空気に一気に包まれて、唇がきゅつと引き締まる。

木曜日と金曜日以外で潜るのは、久しぶりだ。白旗を掲げてゆくが、効果はあるか。全く交流が無いわけでもない。モリビトが必要だ

ろうと、冒険者を解して、言語を教えることもあった。イアンが叫んだ。

「ポヘトウヌ（話がある）」

モリビト語で、こちららに對話の意味があるのを伝えた。衛兵四人とキアーラ、周囲を観察する役目のレンジャーたちは口を閉ざし、それ以外の者はイアンが叫んだ言葉を繰り返した。

流れる砂場に足を取られても、できる限り視界も道も開けた場所を選んだ。この人数で狭い場所から襲撃されたら、迎撃は困難を極める。

前方を担当したヌナが毒樹が表れたのを告げて、後ろからも四体の白虎が接近したのを警鐘した。盾を持つ衛兵三人がイアンの周囲を囲み、他の者は迎撃態勢を整えた。ドナは炎ではなく、雷の術式を以てして、うごめく毒樹を薙いだ。真つ黒な根を蛇のように揺らしながら、紫の目蓋なき瞳でこちらを見据えていた毒樹は痛烈な電撃に叩きつけられて、地面に転ぶと薄らな毒煙を漏らしたまま炭火と化した。ドナは氷の術式を放ち、毒煙を掻き消した。

一方、反対ではヴァロジャが立ち塞がり、しっかりと両足を根付かせたら、飛びかかってきた一頭目の白虎の口に剣を入れた。牛ほどもある白虎の突撃をヴァロジャは全体重でこらえた。剣が首から突き出て、ぼとぼとと黒ずんだ赤い血が流れ出た。左右の二体は、三名のレンジャーに次々と顔や前足に矢を打ちこまれた。残る一頭は、遮二無二襲いかかり、キアーラの呪術で見えない縄に絡め取られたように足がもつれたところを、ヴァロジャが背中にある長い片刃の斧を頭に振り下ろした。

「やれやれ、出番はなしかい」中央にいたアデラは抜き身の剣を腰帯に付け直した。

ゲンエモンは十七階へ急ぐと言った。

「モリビトの集落はそこにある。ということ、見張りの目も自然と多くなるはず。なにより、我々と血の臭いを嗅ぎつけて、更なる樹海生物が来る恐れがある」

一行は確実な足取りで進んだ。ゲンエモンに言われずとも、避けえ

ない戦闘が一回あり、脅しをかけて危うく逃れた。ぎりぎりな綱渡りの感覚で何度か戦闘を避けえたものの、最初の戦闘を含めて、計八回も無駄な戦闘をすることであった。通常の五人で行けば、ここまで襲われることはない。人数が増えたせいで、いくら慎重に動いても、自然と居場所を知らせてしまう。

一七階に辿り着いたとき、一行は歓迎された。四方から槍と飛び道具を携えたモリビトたちに囲まれた。当たり前だが、緑のざんばら髪から覗かせる紅い瞳を敵意と猜疑心で滾らせており、一行は非常に警戒された。一行は武器を下に置き、跪いて、例のモリビトの言葉を叫んだ。

戦う意思が無いと見るや、幾分か敵意は薄らいだが、武器を向けられたまま、しばらく待たされた。小一時間ほどして、白いローブを着たモリビトの中でも高位を示す者がヒュージモアに騎乗して訪れた。モリビトは地上の言語で話したが、がなっている上に途切れているため、聞き辛い。

「ぞあたらは、なぜ、きた。約束を捨てたか」

交渉事ではなく、あくまで警告。イアンは早急に用件を切り出した。

「あなた方モリビトと、我ら地上の者たちに大きな悪と危険が迫っているのを伝えにきました」

高位のモリビトは首を傾げた。イアンはもう一度、ゆっくりと丁寧かつ紳士的な口調で言葉の意味なども説明した。武器も持たず、優男風な外見と丁寧な態度でイアンには気を許したのか。一定の距離こそ保っているが、相手のモリビトは耳を傾けた。白き姫と呼ばれる者の予知夢のくだりに、エトウと四頭のワイヴァーンには大変興味を惹かれたようだった。

モリビトは右手人差し指で緩やかに空を横に切ると、「待て」と言つて、去った。

今のモリビトの動作をイアンとエドワードが説明した。

人差し指で空を緩やかに横に切る動作は、モリビトのジェスチャーで“時間がかかる”や長い”などの意味があると教えた。つまり、し

ばらくはこのままになりそうだ。

三時間、退屈極まりない時間を待ち呆けた。待っている間、エドワードはゲンエモンにとても大切な話が二件もあるから、今日中に聞いてもらえませんかと頼んだ。ゲンエモンは了承した。一先ず、約束は取り付けた。やっと、先のモリビトが戻って来た。彼はもう一度、今度は一六階に來いと告げた。大切な言葉として習ったのか、話し方は不自然なもの、今度はやや流暢に喋った。

「使いの者が行く。何も起きないように。殺さないように」

一行は言葉の意味を推測した。以前、謎の三人が引き起こした最悪の惨事が起こらないことを願うと言っていると考えるべきか。イアンはいつくればいいのかと尋ねた。明日のどこかだと曖昧な返事がきた。待ち地獄になるのも覚悟した。一行はようやく解放された。変位磁石を地面に投げつけて、淡い紫の光を通って地上に帰還した。

エドワードとゲンエモンは花桜の館に行き、屋敷の奥にある離れの一角。茶室と呼ばれる部屋に入った。

「本来なら胡坐あぐらを搔くのはいかぬが、長い話になるだろうから、崩せ」自ら胡坐を搔いたゲンエモンに倣い、エドワードもそれではと紅色の座布団の上で足をどかと崩した。

「オルレスから聞いたのです。エトウと名乗る男の正体を。断定はしてないですが、可能性は高いようです」

「申せ、その男の名と所業を」

「名はドレーク。二十年以上前に居た、元冒険者で呪術を扱うカーズメーカーを生業にしていた。大変、腕も良く、無口だけど礼儀正しい男だったらしいですが、たまに奇行な行為をしたとか」

「そやつの奇行はどうでもいい。肝心な部分を話せ」

「そいつは呪術師たちの間でも、禁忌や禁術にされている物に手を染めていた。『呪魔じゆまの竜』とか、他人を自由自在に操れる強力な術を用いて、大きな秘密があると思われる世界樹の迷宮踏破が夢だと語っていた。そして、それら強力な術を得るために、契約やら儀式だと言って、何人もの年端もゆかぬエトリア人や二十代未満のうら若き冒険者を連れ去り、二階層にて——彼らを生きたまま刻んだ」

「やはり、そうだったか」

ゲンエモンの眩きに、エドワードはえつと目を向けた。

「ご存じでしたか」

「いや、存じておらん。しかし、十名ぐらいの若者や冒険者が失踪した噂は耳にした。今より平和な時代だった。冒険者は自己責任で、子供たちは冒険ごつこの末、樹海にて帰らぬ人となったと思われていた。そやつとも一度、安い酒場で会ったことがある。会話はしてない。遠目から見たただけだ。逞しい外見に反し、酷く陰気で禍々しい空気を身にまどっていたのは、なんとなく覚えてる。して、その所業はどうして知れた」

「彼のパーティの一人が勘付いて、恐ろしさのあまり、当時のギルド長に密告したようです。彼はリーダーでありましたが、誰も彼の味方をせず、酒に酔わせて眠っている隙に捕えて、執政院ラーダにつきだした。ドレークは港に連行されて、現在でいうナザルの立場になる男がドレークに拷問をかけた。あれを聞いたら、ナザルがまだ良心的にすら思えましたよ」

エドワードは拷問の中身を語った。執政院は男に口を割らすよう、男に命じた。自らに対する折檻せつかんや指の爪を剥ぐ他、数時間も吊るされる日が何日も続き、熱く熱した鉄棒を股間に当てるくさりでは、エドワードは股と腹を思わず引き締めた。真っ黒に焼けて、ドレークの鞞丸は二度と使い物にならなくなった。

男は遂に口を割った。場所を探った結果、十数人の無残な腐敗した白骨死体を発見。証拠の品も見つかって罪が確定した。命じたとはいえ、予想以上の非人道的な行いと市民と冒険者の軋轢を恐れた執政院ラーダの上層部は、拷問者やドレークの仲間など深い関わりを持つた者には口封じの賄賂を与えた。遺体は一部の品や骨を持ち帰り、不慮の事故として処理をした。

普通は死にそうだが、驚異的な生命力に凄まじい憎悪と執念がドレークを生かした。ドレークは重篤な病を患い、故郷で余生を過ごしたい彼の願いを聞いた扱いにして、彼を馬車に乗せて国外へ連れだした。記述の証言によれば、股間の苦痛を耐えながら、彼は最後にこう

言い残した

「俺は……諦めない。必ず、世界樹の迷宮を根こそぎ探る。そして……ついでに……俺をこんな目に遭わせた奴らも。エトリアのくそつたれ共を一人残らず殺してやる！ 必ずだ！」

その後、彼の消息を知る者はいない。数年の歳月が過ぎた後、彼を裏切った者たちと、彼を拷問にかけた数名は次々と死んでいった。最後に、彼への取り調べを命じられて、灼熱の棒を股間に押し付けた者は火事に見舞われ、焼け焦げた遺体は天井の下敷きになっていた。下半身に突き刺さった木材はちょうど、その者の股間を貫いていた。

「お主はともかく、お主の仲間がこれを聞いて、やる気を出すか。いずれにせよ、執政院が明かす気になるまでは、我ら二人の胸に秘めておこう」

「私は彼がそんな目に遭っても全く可哀想とは思いません。遅かれ早かれ、そうなったでしょう」

「わしは、そやつを全面的に責める気になれん」

何故とは聞かず、エドワードは別のことを思った。ここは法治国家のはず。いかな極悪人として、きちんと法に則って裁かねばならない。ここで語った行為が露見すれば、国民の支持はガタ落ちする。大きくなれば、人間余計なことに色々と手出しをするのだろうか、今の自分にも当てはまる気がした。

「よう語ってくれた。ところで、明後日には旅立つのだなエドワード。別れは済ませたか」

「明日中には。しかし、知りあい全員とはいきません。極一部の者にだけしときます」

「その方がよかろう。下手に大きくすることはない。人の噂も七五日。お主がエトリア一帯で有名でも、少し時を経れば、こんなのがいたなぐらいにしか触れられなくなる。ところで、何か聞きたいことはあるか。明日はわしも用があつてな」

用があるのは本当だろうが、今のうちにわしへの別れをさっさと済ませておけと言っている気がした。特に聞くことは無かった。と、一つ思い付いた。以前、ジャンベが。いや、自分も思い出しては疑問に

感じるものがあつた教えの真相。ついで、責める気になれない訳も聞けるかなと尋ねてみた。

「師よ。あなたは昔、私に限らず、首を斬れと言われたことがありますよね。一度、ある人があなたは誰かの首を落としたことがあるとも。その意味をお教えねがえないですか」

ゲンエモンは沈黙した。エドワードは内心、出過ぎたことを聞いたと苦笑いを浮かべ、すぐに「下らないこと聞きました。あなたなりの物事に対する例え話——」

ゲンエモンはエドワードの眼前に手をかざし、言葉を止めさせた。ゲンエモンは上の空で障子窓を見つめたら、どこか遠い所を覗いている顔で、エドワードに話しかけた。

「よかろう。お主はわしに、これまで、人には話したくない。話せない内容を多く語ってくれた。わしからも、忠義な弟子の礼儀に一つ、明かすのがすじだろう。だがな、わしが語ることで、どうして今はこうなったかとか、その人はどうしているかは聞かないでくれ。語る気になれば語る。それで良いか」

エドワードには、はいと頷くほかなかった。ゲンエモンは語り出した。

わしには昔、現在率いるパーティーとは違う者たちと道を歩んでいた。歳こそ近いが、年齢はバラバラ。その中でも、わしは特にソードマンのギュリオンと仲が良かった。

互いに切磋琢磨しあい、自然とわしら二人がリーダーになる形で、四年後には他のパーティーを突き放し、ケルヌノスも討伐し、三階層に着いた。

最も注目され、期待も大きかった。このパーティーの強さと自らの実力があれば、どこまでも行けると確信した。

わしとアヤネ、ガンリユ、ヴィズル長もみんな若かった。話はずれるが、若い時分のアヤネは大層美しく、今でいうと金鹿の酒場にいる女将のような存在。みな憧れ、高嶺の花であった。あの人の前では、わしらはライバルだった。楽しかった。ずっと、続くと思った。あの日までは。

「世界樹の四つ葉は知っているか」

突然、伝説の樹海生物の名を出されて、エドワードは戸惑った。知っているものにも、世界樹の迷宮に挑む冒険者にとって、一度は会ってみたい存在。

ミズガルド大図書館の重要文化財に指定された倉庫に二点の標本があるのみ。生きた蒼き植物の宝石と呼ばれ、幾星霜経ても、火で炙るか土に埋めない限り、輝きは失われない。不老長寿の薬にもなると信じられ、生涯をかけて探しても、一度として見つけられずに人生を終えた者も少なからずいる。持ち帰った者には巨額の報酬が約束されていた。

標本の一点はトルヌウーア内壁の建築者であり、冒険者でもあったトルヌウーアが発見。数百年経た今でも、瑞々しい輝きは失われておらず、そのことが伝説に拍車をかけている。もう一点は、ここ三、四十年以内の物らしく、発見者の名前は記載されていない。

「まさか、見つけられたのですか。伝説を」

「そうだ。見つけたのだ。伝説に歌われる世界樹の四つ葉を二階層でな。依頼があつて、たまたま来ていたのだ。美しかった。どろどろと汚く陰気な密林に、正に神か仏が降臨したかのような神秘的な輝きがあつた。おぼろげで儂く蒼い寶石のような植物が歩いていた」

わしらは例えれば、天にも昇天しそうなほど感動し、喜んだ。わしらは懸命に追いかけて、捕まえた。わしらは有頂天になり、油断した。二階層がいかに危険かを一瞬、忘れてた。

大量のウーズと蜘蛛が頭上から降ってきた。わしとギュリオンは難を逃れたが、三人は負傷した。二人で三人を支えながら、助けを求めて、叫んだりもした。誰もこない。

夢中なあまり、地図にない奥まで来すぎたのだ。

わしらは開けた場所で一休みをした。どうするかを話し合い、ギュリオンはわしに、お前を信じている。三人は俺に任せて、お前は人を呼べと言った。

わしは不承不承ながら、助けを求めて向かった。

しかし、途中、誰かの悲鳴の末尾が耳に届き、胸騒ぎがして引き返

した。開けた場には、首の無い二つの死体とぼつさりと正面と背後を斬られた死体があった。

見事な切り口だった。わしは、あのカマキリの類が出てきて、襲った。そうに違いないと言い聞かした。

背後から言い知れぬ悪寒を感じ、抜刀した。打ち合い、火花が散る。敵の正体はライバルであり、最高の友と信じて疑わなかったギュリオンであった。仲間の返り血を浴びて、冷たい目には皆ならぬ決意と殺気が宿っていた。理性が途切れ、静かな怒りに身を包み、冷徹に素早くギュリオンを仕留めにかかる。

激しい鏝迫り合いの末、ギュリオンの首に白刃を打ちつけた。ごろりと体から首が落ち、噴き出す血で真っ赤に染まった。わしはしばらく、呆然と立ち、仲間たちだったものを見つめた。気付けば、四つ葉が入った袋を担ぎ、二日間彷徨い、帰ってこられた。当時のギルド長に事情を問われて、素直に明かした。袋では、四つ葉がうごめいていた。執政院ラーダに連れて行かれて、わしは尋問を受けた。一生、牢に居る覚悟もした。だが、ギルド長を始めとする何人もの知り合いが弁護をしてくれた。ところで、世界樹の四つ葉はどうしたと思っただろう？

報酬は全て使った。三人の仲間の遺族や知り合いに分配し、葬式代を工面。ギュリオンに身寄りはなく、わしと数名で憤ましく送った。残りは慈善事業に役立てる約束で、名を伏せる形で寄付した。

エドワードは納得した。

「執政院ラーダと親しい者たちの助力もあり、わしに容疑がかかったことは人知れずとなった。容疑が晴れたら、二階層へと一人、飛び込んだ。形見でもいいから、何か持ち帰りたかった。手遅れだった。

仲間の身体はなく、あるのは身に付けていた物の残骸。泣き叫んだ。一生分の涙を流した気がする。その後、帰りの道すがら、わしは道行く樹海生物を一撃のもと両断していった。何組かのパーティとすれ違い、怪物の身や首を微動だにせず跳ねる姿を見られて以来、同業者間の妬みや疑いもあり、わしは密かに「首切り」とささやかれた」

「あなたがドレークを徹底して責められない訳がわかりました。ですが、それほどのことがあって、エトリアから離れなかつた訳は？」

ゲンエモンは渋い顔をして、首を振るう。

「エドワードよ、お前にも語りたくないことはあろう。ここだけは言えない。ある者にも明かしてないのだ。だけど、約束しよう。もしも、お前さんが来年、無事に帰った暁には教えよう。その訳をな。その頃には大抵の者に知られて、わしに会う前にはもう、そんなのは知っていると言うかもしれないが、会いに来い」

「おかしなことを言う。もしも無事に会えたら、既に他の者に教えていることを私にだけ来年になったら教えるとは」

「物事には段取りがある。つまり、今の段階では明かせないのだ」

ええ、わかりましたよと返し、エドワードは居住まいを改めた。

「師よ。今から、俺は失礼な態度になりますが、どうしても言っておきたいことがあります、それには、今までのような固い態度では言いにくいのです」

「申してみろ」

「あなたはドレークの罪が隠蔽されたことと、自らが犯したとお思っている罪を人知れずにされたことに対し、負い目を抱いた。だけど、俺から言わせてもらえば、ドレークもギュリオンとかいうのも大馬鹿者。最低な裏切り者。それに、自分の意思でおぞましいことをやってのけた奴と違い、あなたの場合は不可効力。ギュリオンの奴が欲に駆られて、裏切った。あなたは仲間の仇を討ち、成敗した。それだけのこと」

ゲンエモンは怒気を含んだ声でエドワードの名を呼んだ。エドワードは少年時代におけるゲンエモンの怒りを思い出したが、身を引く訳にはいかない。

「あなたはこの国のために骨身を削った。俺を入れた多くの者たちを導き、更生させた。他の者はどう思っているか知りませんが、俺は今でも、冒険者ゲンエモンを良き師。尊敬できる人間であり競争者。そして、二人目の父だと思っています。だから、あなたがあの怪しい宗教家風情の馬鹿野郎に負い目を抱くことはありませんし、意味がな

い。また、ギュリオンとかいうのに、いつまでも申し訳ないと思う必要はない。奴こそ元凶。あなたが謝ることはない」

「では、お主は幼い時分に射抜いた敵兵のことはどうでもいいと言えるのか」

「それとこれとは別です。俺はただ、あなたが年寄り臭く、いつまでも昔のことを悔いてしよぼくれてくよくよしている姿を見たくないだけだ！」

ぱんと右手で膝を打ち、ゲンエモンは顔を下に向けた。鬼のように怒り出すかと思いきや、意外にも微笑んだ表情で面を上げた。憂いや怒りはなかった。安心したのも束の間、ゲンエモンはくわと目を剥き、怒り出した。

「本性現したか、糞ガキが！ よくもまあ、年寄り臭くしよぼくれているなどと。おまけに、昔のガンリユートの奴みたく、ギュリオンを馬鹿者と罵りおって。わしがもっと若ければ、殴り掛かっていたところだ。だが」

ゲンエモンは言葉を切り、鬱憤と迷いを追い出すようにがははと笑い出した。笑いが止むと、穏やかな笑みをエドワードに向けた。

「だが、気は楽になった。あまり考えないよう努めていたが、モリビトとの一件以来、頭の中をよぎり、自身の性格も相まって、考え込むようになっていた。誰かに一度、吐露し、罵倒でもなんでもいいから、言われたかったのかもしれない。だから、ありがとうな、エドワード」

「こんな程度では、あなたに受けた恩を返し切れませんよ」

「まあ、気長に待つよ。して、もう一件あつたはず。それはなんだ」

「レンについてです」

ゲンエモンは真剣な面持ちで、エドワードがレンの口から語られた身の上を聞き、信じがたいと呟いた。やはり、レンの陰りはそういう体験から来ていたか。

「麗華と共通するところはあるが、たとえ死の間際であつても、彼が娘をそんな風に扱うのは信じがたい。きつと事情があるはず」

「娘を蹴り、罵倒することに事情があるとは思えません」

「エドワードよ。もしも、お前一人、絶体絶命の状況で助けも期待でき

ないのならどうする」

「万策尽き果てたのなら、覚悟を決めます」

「では、なんとしても、命を救いたいと思う者たちがその場に居ても、お前はそうするか」

エドワードは少し考えて、答えた。「その守りたい者たちから蔑まれる方法だとしても、助けない」

「そうだろう。ただ、信じろと言っておきながら、なんだが。人の心は移ろいやすい。最後まで意志を貫けず、捨てる者もいる。レンと麗華が同一人物の可能性は否定できんが、本人の口から直接聞けない以上、わしが言ったことはなにもかも、想像の域を出ない。それでも、あの親子の繋がりを信じる。なにより、あの男については軽蔑の気持ちを抱いている。それで良いではないか」

これ以上、話すことは無いと悟り、エドワードは頭を垂れて、礼を述べた。ゲンエモンはエドワードの肩をつかみ、じっと覗き込んだ。「戦いの渦中だとしても、必ず生き残ってみせる。お前自身と待つ者のためにも生き延びよ。それとだな」

ゲンエモンは肩から手を放し、右手でエドワードの頭を強く叩いた。

「これは、さつき年寄り臭いやしょぼくれていると述べた礼だ。師を罵倒する奴には礼儀を教えてやらんとな」

「俺は一番弟子じゃないのですか」

「一番はコウシンチやシンショード。お前は今から二番弟子だ。昔とちつとも変わらん」

あなたもですとエドワードは言い、二人は笑いあつた。笑い止んだら、ゲンエモンはまたギュリオンについて、もう少し触れた。

「あの時のギュリオンには、欲や殺気以上に迫るものを感じた。今となつては確かめようはないがな。さて、辛気臭い話はここまで。玄関まで見送ろう」

エドワードは玄関まで、ゲンエモンとアヤネに見送られた。

エドワードが去った後、ゲンエモンはモリビトとの戦前に行われた軍事演習後にあつた祭りを思い出し、言うべきかと迷った。ゲンエモ

ンはあの日、不気味にほくそ笑む仮面を身に付けた二人に出会った。一人は背が大きく、一人は小さい。背の大きな者は武芸に長けていのを感じた。大きくなつて、子連れなのだろうと思い、話しかけたあの者。

一笑に付した。なんの意味がある。第一、モリビトの証言では、背の大きな二人と背の小さな一人だったと聞く。しかし、もう一人の背の大きな者はお祭り騒ぎのどこかで合流したという説明がつく。違ふと否定しつつ、黒い仮面と衣装を身に付けたレンとツスクルに誰かが先んじて交渉の場に行き、モリビト側の使者を殺し、交渉を決裂させた場面を思い描いてしまう。

ケフト施薬院に行き、マルシアから途中経過を聞いた。まだ油断はできないが、峠を越した。近日に会える。

「院長に許可を頂いて、明日、ほんの少しだけ特別に会えるわよ」「色々と苦勞をかけたな、マルシア。お前への恩は言葉に表せない」「別にいいってことよ。こつちも、色々と新しいことが知れて良かったわ」

エドワードは長鳴鶏の館の出入り口付近でコルトンに呼ばれた。壁にもたれて、パイプからぷかぷかと煙を上げていた。薄い茶色の作業服は土で汚れ、つんとした臭いは数え切れない植物や糞を踏み付けたブーツから漂っていた。まただと言いたげに、コルトンは使者が来たことを告げた。

「俺から言えるのは、あんたが行った後、もうあれらに煩わされることが無くて万々歳だということだ」

エドワードはうんと同意した。

「明日は別の奴が行く。あんたと最後にもう一度、来てほしい。時間は取らせないと言っていたが、どうだか。ああ、それとな。シリカも来たぞ。暇な時にでもいいから、お前に来てほしいとき。あいつらしくない思いつめた表情だったけど、思い当たることあるか?」

エドワードは少し考えて、無いと言った。特に思いつめらせてしまふ言動や行動をした覚えはない。

どちらにせよ、エドワードは明日の別れの挨拶をする一人にシリカもいたので、明日行けば良かった。

翌日。エドワードは早朝に執政院ラーダに向かった。ぐだぐだと余計な会話はせず、伝えることだけ伝えて、手短かに別れを済ませるつもりだったが、オルレスの眼鏡越しから覗かせるいつになく不機嫌で難しい顔付きを見て、少々長くなるかなと思った。エドワードの前に、オルレスが開口し、不満の訳を伝えた。エドワードは口を挟まないことにした。

「先日、私は何人かの者たちと共にヴィズル長と会った。長は相変わらず、厳しく寡黙な表情で我らを睨んだ。そして、裏切る上に戦争好きとは大したものだと我らを非難した。もちろん、長とて今回の事態を重くみて、我らが裏でこそそこそそしているのも半ばお見通しであった。それだけなら問題ない。しかし、その後が問題だ。長はとんでもないことを言ったのだ」

エドワードは仕方なく、なんだと聞いた。早くしてほしい。

「急遽、来月には世界樹の迷宮にて、次世代の長を決める儀式を行うと言われたのだ。いつもより、時間がかかり、来年か数カ月後は要するとおっしゃられた」

挟むまいと思ったが、言わずにいられなかった。

「長を決めるのは構わんが、せめて、現在の不安定な状況から脱却した後の方がいいだろう。俺はどうにも何を考えているか全く読めないあの男は不気味で気に入らないが、指導力はあると思う。今回のことにおいても、あの男が民を率いるしかないはず」

「我々も必死に引き留めた。裏で防衛の準備を進めていたの謝りまです。いかな処罰も覚悟してる。ですから、近く起こりうる有事には、あなたは是非とも必要です、と。だけど、長は意思は固く、頑なに必要なことだと言われた。大砲を向けても、長は首を振らなかつただろう。」

我々は最高指導者無きまま戦いに挑まねばならなくなった。そして、代理がいると言われて、私を入れた三人がしばらくは執政院ラーダ長代理に選ばれたのだ。今の役職における業務はそのままだな」

オルレスの険しい顔付きが理解できた。いくら大切なこととはいえ、混迷を極めるであろう時期に、曲がりなりにも国の指揮を任せられた者がいないのは、一介の戦士にしか過ぎない自分がいなくなるのは遙かに違う。

冒険者室長兼秘書として多忙を極める上に、国と民の統率に戦の責任まで加わるのは、想像を絶する。

他の二人は知らないが、大きな心労に苛まれて、オルレスが重圧に押されているのは一目でわかる。

オルレスは無理に気を取り直して、エドワードに報告を話すよう促した。オルレスはゲンエモンと話をした事以外は全て伝えた。オルレスは納得しかねた様子でううむと眉をひそめる。

「まだ疑っているのか」

「前にも述べたが、私は彼ら二人と君の家族との出会いが気にくわなののだ。たまたま盗賊と出会い、たまたま助ける。どうにも出過ぎた感がする」

「事実は小説より奇なりともいうし、そんなこともあるだろう。少なくとも、レンはエトウを宗教家崩れの盗賊とどうでも良さげに言った。俺からすりゃ、その一言だけで十分過ぎる。それでも監視を続けるのか？」

「周りから、あれらを見る以外に人手を割けと言われるようになった。残念だが、監視の人数や時間を大幅に縮小せざるをえない」

「そうか。では、俺は行くとしよう。あんたの無事と幸運を祈る」

「無事と幸運は何よりも君に必要だ。滞りなく行けることを願うよ」

エドワードは次に、ギルド長ガンリユーのもとを訪れた。黒い眼帯を付けて、陽に焼かれて焦げた肌付きになったいかめしい六十代の親父は訪問も気にせず、デスクの書類に朝食を置いて、眠たげに頬杖を突いたままパンと搾りたてのミルクを飲み食いしてた。ギルド長はちらりとエドワードを窺った。

「俺の食事はやらんぞ」

「呑気に大口開けてぱくつく親父から物を奪うほど困窮しとらん」
「朝から喧嘩をやりに来たのなら、もつと若くて元気な奴に挑め」

「一時の別れを告げにきたんだ。長い用があつて、しばらくエトリアから離れる。その間、あいつらの相談をできる限り聞いてくれ」

「行くんだろ、あの国に。俺を舐めるなよ。最低限、知るべきことは知らされている。してやれることは大してないが、悩み事ぐらいは聞いてやる」

エドワードは一礼し、冒険者ギルドを出たら、シリカ商店を目指す。

珍しく、店番が二人。シリカとシリカの祖父が店番をしていた。

一線から引いたものの、今でも小物作りの細工は見事で、たまに奥の鍛冶場で雷を落とすことがある。太陽の位置からして、十時から十一時頃。夜、樹海生物が活発になる時間を避けて、朝から夕方まで潜るのが常。さすがに人はいなかった。

二人でいらつしやあいませえ！ と挨拶をした。

「君がこの時間帯に来るなんて珍しいね」

「いや、三つ物を買うついでに、挨拶をしておこうと思った。俺はしばらくエトリアから出る。多分、来年には戻ってくる。シリカにも、なんだかんだ世話になったし、会っておきたかった」

エドワードは二振りの剣を選び、一本のナイフをカウンターに置いた。三本合わせて、一五四〇エン。高くはないが、良い作りの武器である。

シリカは奥に引つ込み、代わりに祖父が代金を受け取り、重たく頑丈な地面の重石に鎖で繋いだ鋼鉄の小物入れに金を収めた。

出て行こうとするエドワードを祖父が呼び止めた。仕方なく、足を止めた。シリカが店の奥から出てきて、大きな包みを大事そうに抱えていた。

「やっぱり、僕の勘は当たっていた。君は噂になっっている奴らと戦いに行くんだろ」

「さあな」

「いや、理由はなんでもいいさ。それより、君に貸したい物があるんだ」

シリカは布包みを解いた。中からは、灰色の光沢を帯びた美しい複合弓アーチドロワーが出てきた。サイズは中型。太さもあり、大型よ

り。エドワードは驚いてシリカと弓を見た。

「何故だ。高い品物だろ、持ち合わせはないぞ」

「僕の予想さ。君は将来、大きなことを成し遂げる。そんな気がする。あくまで、貸すだけだよ。これは、僕から君への先行投資。お金はどんどんと二割値引きして、八万。ゆっくり返してくればいいさ。絶対だよ。でも、テストに弓に弦をかけてみて」

エドワードは手渡された弦をなんなく弓にかけた。立派な一張りが完成。二人は満足した様子で頷いた。

「凄い強いのに、なんなくかけたね。合格」

「本当にいいのか。壊れてしまうかもしれないのだぞ」

「その時はその時。道具は使えば壊れるさ。まあ、払ってもうらけど」
エドワードはありがたく、弓を借りた。妙なことに、弓が手に馴染み、自分に握ってもらうのを待っていたかのような運命すら感じた。エドワードが去った後、祖父はにやけた面を浮かべて、孫娘を見下ろした。

「しばらくおめえの給料は三分の一だ。にしても、あんなので伝わる訳ねえだろ」

「なんのこと。僕は店の将来になる投資をしたつもりだよ。深い意味はないよ」

にやけ面を浮かべる祖父に業を煮やし、シリカは怒って祖父のお尻を叩いた。にやけ面を止めず、シリカが勝手にしたらとそっぽを向いたら、くくと笑い出した。シリカは舌をべっと出した。

「すけべじじい」

「なんのことかな」

自分が去った後に起きていることも知らず、エドワードは次に金鹿の酒場の女将を訪ねた。

「長く留守になります。また戻ってきたら、最高の一杯を注文します」
女将は込み入った訳は聞かず、一言、いつてらっしゃいとだけ言った。長くわずらせることもない。エドワードは早々に昼の酒場から去った。

エドワードは三振りの刃を携えて、外にある遊牧民のテント集落に

向かい、一つ一つに挨拶をして回り、自分が何か月かいなくなることを伝えた。

家族のゲルに行く前に、チノス一家のゲルに行き、奥さんの案内で一時間かけて仕事場に行った。刈り入れを手伝った。父ティノフェと息子チノスはエドワードの訪問を歓迎した。

また、ヴァンもそこにいたので、呼び出した。エドワードは即座に用件を切り出し、長い旅に出ることを告げた。チノスは聞かずにいらなかった。

「何故ですか。あなたが疑われていることと関係が!？」

「そうではない。ただ、大きな仕事なのだ。チノス、お前に渡したい物がある」

エドワードは一振りの剣をチノスに渡した。刃は刀のように片側に寄った婉曲した三日月刀。馬上から切るのにも適していた。

「いざというときは、父と共に己と家族の身を守れ」

エドワードはヴァンにも同形の二振りを渡した。

「俺の母と妹、お前の子を守れ。戦わないことを恥じるな。生き延びることを考えろ」

「必ず守り通してみせます」

ヴァンとチノスは剣を抱き、真っ直ぐな眼差しを向けた。父ティノフェも、納得したように首肯した。チノスはもう立派な大人。彼の意を汲んだ。エドワードは奥さんと来た道に戻り、礼を述べて別れた。

妹一家のゲルにも行く。フェドラは中にいて、手作業をしていた。甥御は外で離れた位置からエドワードを見ていた。まだ懐いてくれない。長くエトリアを空けるとだけ明かした。フェドラは動じた様子を見せない。

「あなたが無事に成し遂げて帰るのを祈るわ。本当に、帰ってきてね。兄を二人も失うのは辛いわ。エウゲドロス、来なさい」

甥御のエウゲドロスは慎重な足取りで入った。自分の目が怖いから、警戒されていると言われた。

「ほら、おじちゃんに行ってらっしやいと言って」

「どこに行くの?」

「遠くへ行くのだ。土産話は聞かせられるだろう。それより、贈り物がある」

エドワードはエウゲドロスの前にナイフを置いた。幼子は目を輝かせて柄に入った新しいナイフと腰にあるちんまりしたナイフを見比べた。

「父と母。周りの大人たちから正しい使い方を学ぶのだぞ」

エウゲドロスはうんうんとナイフを見つめたまま頷いた。エドワードは、ヴァンとチノスにも剣を渡したことを伝えた。

「兄さん。また普通に暮らせるかしら」

妹の自らに問いかけるような言葉に、エドワードは答えた。

「お前にはヴァンがいる。彼を信じろ」

エドワードは甥御と妹に見送られた。甥御のこの世に不幸などないかのような笑顔を見たら、満足した。

最後に、エドワードは母と面会した。やつれてはいるが、前見たときよりかは、生気があった。

遠くへ行つてくるとだけ告げた。体には気を付けなさいとエウドラは言った。後は無言のまま、互いに近くで寄り添い、静かに時が流れていく。エドワードは一つ、母なら知つてると思い、父が昔、教えてくれたことを聞いてみた。母はささやくように話した。

「二度しかない人生。要領良く金を稼ぎ、食われるより喰らう側に回って面白おかしく生きる。そんな楽しそうな選択を捨て、誇り高くあり続けるのは、いかにも損を感じるだろう。誰が評価してくれる訳でもない。日陰でどうすれば男は誇りを保ち続けられるのだろうか。自分の為などと矮小な事でなく。天下国家の為などと身の丈を越えた大法螺でなく。ただ自分の背中について歩ける後進の為に男は背筋を伸ばすのだと。」

やがて自分がこの世からいなくなつても、愛する家族が立派に歩き続けて行けるように。子や孫や次の世代に幸あれかしと願えばこそ、胸の張り甲斐が生まれるのだ。あなたの父は、私にもこのような内心を明かしたときがありました。あなたは小さかったから、忘れても無理はありません」

エドワードは母を見つめ直した。

驚いたことに、最近あった面接とやらの際、エドワードは近いことを述べていた。

「実は最近、父と同じようなことを言ったのです」

「あの人も自慢の息子だと喜んでいるでしょう。私もです、エドワード。帰ってきて、お前の顔をもう一度、拝ませておくれよ」

もう少し、居たかったが、看護婦が時間ですと入ってきた。エドワードは名残惜しそうに閉じられるドアを見やった。エドワードはマルシアと共に宿に戻った。

次の日の明け方前には、行くことをメンバー五人に伝えた。

「他の者たちには、長い用があるからとだけ言って、去ったと言ってくれ。余計な詮索はされたくない。俺が行った後は、コルトン。アクリヴィ。お前達で率いてくれ」

二人は無言で承知した。部屋で身内だけのささやかな別れの杯を交わしたら、早めに寝具へ身を横たえた。みなが寝静まった後、ジャンベはぱちりと目を覚まし、エドワードの寝顔を見つめた。視線に気づき、エドワードはどうしたと言った。

「いえ、なにもありません。ただ、あなたが行ってしまったのは寂しいなど。一人の兄がいなくなるから」

「血は繋がってないぞ」

「例えです。ロディムさんがやんちゃな三男なら、コルトンさんは次男。あなたは頼れる長男かな。僕を拾って育ててくれたあなたが行ってしまったのは、色々と理由はありますが、ただ寂しいなど」

「俺はお前も頼りにしている。それに、死に行く訳じゃない。生き残るためだ。ほら、寝ろ」

すみませんと、ジャンベは布団を被った。

五日目の朝。空模様からして、旅立つには絶好の日和。エドワードは先に起きて、夜勤の従業員に軽食を持ってこさせた。コルトンも降りてきた。続いて、ジャンベとロディムも。

「二人でだんまりは感心しない。勝手に行かせんぞ」

アクリヴィとマルシアも来た。六人で、今年最後となる一回会した

朝食を取った。

何も喋らず、食べる。

エドワードはアーチドロワーにナイフ、三日月刀ではなく、中程度の剣を携えた。寝具と火打石、携帯用の食糧や水筒、皮袋など必要な物を担いだ。

防具の類はかさ張るので置いた。一点、アクリヴィから貰った首の防具だけはお守り代わりにと持っていくことにした。

宿から西の大門までの移動も速やかに行う。門に通じる広場に出ると、門前にオルレスとラーダ職員の他、ギルド長に、繋がれたブケフアラスもいた。

エドワードはふと語った。

「もしかしたら、戦場で会うだろうな」

そりやそうだとコルトンは苦笑した。

「いや、そうではない。具体的にはコルトン。お前と戦場で馬上の人として合い間見える。そんな予感がする」

「だとしたら、喜ばしくない再会だな」

二人はこれ以上、語らなかつた。

オルレスは二つの薄くて小さな鉄箱を渡した。二つの鉄箱を両手で受け取る。

「一つは外交書。一つは路銀。純度の高い金や銀、いくばくかの小さな宝石も入ってる。黄金男爵が協力してくれたのだ。愛する国の危機には投げうつつとね」

「あなたを誤解していた。本当の紳士だと伝えてくれ」

大門の隙間を空けて、エドワードは愛馬と通った。振り返り、最後にもう一度、別れを告げた。

「コルトン、アクリヴィ、ジャンベ、マルシア、ロディム。お前達と共にまた、世界樹の迷宮に挑戦したい。オルレス、ギルド長、そのあなたにも、幸運があらんことを」

エドワードは馬の頭をさすった。

「最後の見送りはお前になるな。俺を国境まで送ってくれ」

エドワードはブケフアラスと草原を駆け抜ける。

五人は外壁の上上がり、遠のく背を見つめた。ギルド長も外壁に上がり、見送る。

風に運ばれるように一人と一頭は進んでいき、朝日に照らされて、点すら見えなくなった。

三四話 不在期間

澄み切った寒い空気にさらされた外壁は堀に湛えられた水の反射も受けて、酸化した鉄のように黄色く照り映えてた。補強工事により、例年より一層きらめきが増していた。見張りとは別に、淡青の服を着て楽器を抱えたジャンベが一人、遠く見据えて佇んでいた。コルトンが下から呼びかけた。

「おい、そろそろ戻れ。二週間やそこらで帰って来られない」

夕陽を眺めてたのですよと言いつつ、ジャンベは外壁の階段を軽やかに降りてきた。

エドワードが旅立ち、早二週間が過ぎた。

ローテーションでエドワードがたまに休む日はあった。しかし、今はメンバーが実質一人いなくなった状態。探索の仕方にしては、休みにしろ、その他諸々の細かなことなど、以前の六人がいたままのやり方ではやっていけなくなり、少しずつ変えて慣らしていく必要に迫られた。

平日の火曜日から土曜日まで迷宮に行き、日曜は半日程度。月曜は完全に休みとした。六人になって、違和感はあるものの、むしろ普通だと言う者もいた。人数が多いとそれだけ樹海生物に存在を感知されて危険なゆえもあるが、迷宮内部での通路は本来、集団行動に不向きであり、限定されて空間では、少人数でのほうがより効率がよく、迅速に行動できる。故に、冒険に行く人数は多くの犠牲と試行錯誤の結果、最大五人で行くのが一番良いという結論に達したので、五人でちようど良からう。

それはそうだろうが、当人たちとしては、なんだかんだ六人でまとも、リーダー不在なのはどうかだろう。いない日でも思うが、いなくなつてはつきりわかるのは、エドワードは探知能力に優れた狩人で、並の兵士や傭兵より近接戦闘も強く、おまけに百発百中に等しい腕前を持つ射手と三役をこなしてたのを改めて知った。

リーダーの役割を含めれば、実質四役こなしてた者が一時的にはいえ去り、ホープマンズの歩みは目に見えるほど遅くなった。他の組

が四歩、五歩先行く間、やっと一歩進む。

探知能力に秀でた者がいれば別だが、新しいメンバーを入れる籍はもうない。かといって、事あるごとにカースメーカーやレンジャーを借りる訳にもいかず、借してくれるとは限らない。大事なメンバーをためえのところまで亡くすならまだしも、余所に借して亡くなったとあっては、やるせない。本人と関係者にも申し訳が立たない。

今日は水曜の夕方。本当なら、樹海生物たちが更に活発化する夜中より前の時間帯まで活動を続けたかった。

負傷は無かったものの、二回も立て続けに奇襲に遭い、大変危険とコルトンが判断し、昼までには探索を打ち切った。メンバーはそれぞれ、自身の五感を尖らせて、注意深く進んでいたが、やはり限度がある。もちろん、そこらの一般人よりは観察や探る能力は優れているつもりだが、幼い頃から培った経験ないし能力には劣る。コルトンの判断にロデームは臆病と罵られて、何も言い返せなかった。

ギルドの冒険者心得には、カースメーカーやアルケミストなど、特殊な生物への対抗手段として特殊な攻撃をする者はとても必要と書かれてる。それ以上に、危険を察知し、探ることに優れた能力を持つた者はもつと要ると付け加えた方がいいとジャンベは思った。

アクリヴィは以前と変わらさず。だが、コルトンは変わった。というか、二週間で疲れた顔付きになり、無精髭を生やしたままで、余計に老けて見える。自分は相応しくない。小者だとコルトンは自信を無くしてた。

メモや細かな物を書いたりするが、計算をしたりする帳簿や緻密な物はアクリヴィとマルシア。知的な女性二人が分担して行つてたので、負担は軽いはず。それよりもと思い、好奇心に抗えず、ジャンベは並んで歩くコルトンにやっとならした。

「人の上に立つのは辛いですか？ あなたは誰から見ても、沈んでるようになんか見えない」

なんだと目を丸くした。「人の上つっても、たかが四人さ」そうして、ふと黙り、都市と壁を区切るようにある広場の階段を登ると、口を開いた。

「たかが四人。俺を入れたら五人。ただ、まあ。普通の仕事ならまだしも、命懸けのやつだからな。俺を入れた五人分の命がかかっている。それを自慢の身体と盾で守る。前と変わらない。だけど、曲がりなりにも上に立ってやるとなると、違うな」

「リーダーという立場でやれば、重く感じますか」

ううんと唸り、そうかもなと言った。

「思えば、俺はこれまで、明確にしたいことが無かった。俺は自分でどこかに行って何かをやると決められるが、そこから先の具体性に欠けるんだよな。だから、傭兵は基本そうとはいえ、自分の身を守る以外は隊長や誰かに決められて行動してた。で、世界樹で一旗挙げたいと思っただけ。けど、思い返せば、とにかくビッグになろうと考えてただけで、またしても具体的にどうこうしたいとか無かった。だから、エドワードに会えて良かったと思ってる。俺のただ、英雄になりたいという願望に、具体的な物を与えてくれたからな」

「では、もし、会わなければ」

ジャンベの問いに、コルトンは悟ったような表情で微かに微笑み、答えた。

「多分、もうここにはいなかった。あるいは、冒険者辞めてたかもな。断っておくが、俺は世界樹踏破して英雄になりたい想いは変わらないぞ。なつて、どうなるかはわからんが、今まで誰も成し遂げられなかった時の風景や人生がどう見えるか知りたい。別の言い方すれば、人生の希望の光とはなにか、かな？ とにかくだ。俺の曖昧な夢に、あいつは何をするべきかを与えてくれた。俺じゃなくてあいつのしたいことだけど、大きいが他にやるべきことが見えて良かったと思ってる。しかし、可笑しな話だよな」

今度はわははと声を出して笑った。「農耕や牧畜なんて、うだつの上がらねえ事なぞやってられるかと傭兵や冒険者になったのに、ここに来て、復興や仕事の手助けで農民と同じことして、悪くないと思ってるからな。可笑しなものだ。かなりずれたが、俺は英雄とかビッグになりたいが、人の上に立つのが苦手。今まで、考えたこと無かった。短い間だが、リーダーとしてお前らをまとめるのは、手く言い表せな

いけど、変な気分なんだ。リーダーとして細々とどうして指示を出し、自分はどう動けばいいんだ。全力で盾を持つだけじゃ駄目なんか。余計なことを考えちまう」

コルトンとジャンベはわざとゆっくりと歩き、ジャンベは大人しくコルトンの話に耳を傾けた。コルトンは成る程と呟いた。はてと、ジャンベは首を傾げた。なにかとジャンベは聞いたが、コルトンは答えるもんかと、子供っぽくにやけた。

エドワードがジャンベを誘ったのは、単にバードの才能や冒険者の素質があるからだけではなかった。今なら真に理解できる。話しやすさというか、親しみやすい一面に、良くも悪くも裏表がない信用と信頼できる人柄が良いと思ひ、六人目のメンバーとして加えたのだろう。悪いなどコルトンは言った。

「こんな器の小さい奴の下らない話を長々とよく聞いてくれたな。酒、いや、お前の声を保つためにも、酒よりかは茶や牛乳が良いのか？ 奢ろう」

宿では既にロディムがテーブルの一つを取っていた。時間帯のせいもあるが、宿からは宿泊する者が若干、少なくなった。

長鳴鶏の館は主に冒険者が利用して、長期滞在を想定した宿泊施設。エドワードにかかった容疑が晴れたわけではないが、同じ冒険者で非難の声や猜疑の目を向けてくる者はあまりいなかった。それはそれ、これはこれ。自分達に害を加えるわけではない、現状は無視をするのが一番だと、野暮つたいことをする者はいなかった。あいつらはそういう奴らだったんだよとのたまう者もたまにいるが、聞かないふりをした。一部、以前と変わらず接してくれる者たちもいる。

同じ宿で限れば、赤い髪のコンビでも知られる女剣士アデラとパラディンのブルーム率いるレッドユニティ。かつては五人いたが、マンティコアとの戦いで三つ子の二人と双子の片割れが亡くなった今も、二人で冒険を続けている双子の長男ダルメオと三つ子の次女フィリ。彼らとの交流は続いている。

ロディムは、ぽけーつと退屈しきった様子で椅子にもたれてだらけてた。多少の無理は承知。お前の頭には臆病者しかいないのかよと

罵ったこともどこ吹く風、二人を見やつても、居住まいは正さなかった。

何も言わず、二人は座った。ロデイムの罵倒はともかく、彼のこの態度までは責められなかった。何故なら、夜や夕方と通常の半分で戻ってきたから、剣や斧の近接武器の刃を研石で砥ぎ、明日の準備を済ましたら、やる事が無くなる。本を読めば、気晴らしができる者のそんな趣味や教養は持ち合わせてない。読めないこともないが、中々、興味が持てない。

ロデイムはぼーつとするのもありだが、コルトンとジャンベはそうもゆかない。二人は休みでもなにかしてなければ、気が落ち着かないほうであった。ジャンベは楽譜を読むなり、曲を作るなり、バードや音楽家同士の繋がりでセッションや互いに学ぶ機会があるもの、コルトンはあまりない。常に誰かが武術の相手をしてくれるわけではない。かといって、今日は一人で懸命に励む気も起きない。要は必要なことを終えたら、何もしてないのだ。

アクリヴィはミズガルド大図書館に入り浸り。マルシアはエウドラの様子見に行っている。

「母親かあ」と呟く。故郷には今も母や家族はいるはず。身も心も捨てた気になっているが、一年に一回か二回ぐらいは仕送りも備えて手紙を遠征する旅商人に預ける。ふるさとに全く思いが無いわけではないが、こちらの方が故郷より良いという思いが強かった。近くても、変わらなかつただろう。

マルシアは特に近いので、頻繁にはではないが、年に一回か二回、直接会いに行く。彼女は家が裕福なので、土産を持っていく。ロデイムもそれなりに近いが、どうせ口減らしか、どっかに奉公出されてとうに家にいなくなつたずと言いつけて帰らないものの、稀に仕送りはしていた。

母親という単語に反応し、あの人は大丈夫でしょうかとジャンベはエウドラの身を案じた。

「来た頃は腰が折れ曲がり、見るも儂げでしたが。一箇所に着いたことから来る安堵と、エドワードさんに出会えたからでしょうか。

どンドン元氣になられたと思いきや、あんな風が変わるとは」

ぽけーつとだらけてたロデイルも身をただし、うーむと唸った。

「奴が帰って来るまでに間に合えばいいが」

「縁起でもないことを言うな」と、コルトンはロデイルの発言を咎めた。悪い悪いと、手の平をひらひらさせた。

エウドラは一応、回復した。しかし、彼女は変わり果てた姿へ変貌。以前はまだ肉づいてた体はやせ細り、骨と皮だけに。目が窪み、開けば、ぎよる目がちに。ジャンベの言う通り、息子と出会い、比較的、温暖な気候のエトリアで過ごして活気を取り戻しつつあったが、新しく認知された病気に罹り、エウドラの生気を一気に奪ってしまった。食は細く、小さく、かゆのような物しか取らず、全部食べきれない日もある。おまけに、ぼんやりとする時間が増えた。奇妙な行動もあった。壁や何もない場所で語りかけたり、用も無いのに出歩こうとしたりする。

ただ、義弟であるヴァンいわく、出会ってまもない頃から、そういうことはたまにあつたようだ。エトリアに訪れ、エドワードに再会してから、ぱったり止んだらしい。また、そういう行動が始まり、以前より増えたことにヴァンと娘のフェドラは嘆いてた。

苦労の積み重ねにおいて尚、目の澄んだ賢いきらめきを失わなかった人があそこまで変わること。短い付き合いとはいえ、彼女を知る者は動揺を隠せなかった。

ロデイルの言を認めなくなつたが、使命を帯びて帰還した者に身の不幸を告げることは考えるだけで気が重くなる。

エウドラの容体を悪化させたのは、寒さもあるだろう。今年は今年の嵐を予感させるかのような厳しい寒波に見舞われる予測が立てられてた。十一月間近だが、吐く息はもう白い。覚えている限りでは、エトリアの気候的には、息が白くなるほど本格的に寒くなるのは十二月の半ばを過ぎてから、二月辺りまで。十月下旬でも、たまに暑い日があるくらい。

なのに、思い返せば、今年の十月は暑い日が無く、涼しいほど。夜になれば、明らかに寒い日も多かった。人々の顔も冬の夜のように暗

い。

エドワードが去って十日後。四日前、エトリアは遂に防衛戦の準備を声明。エトリア各地から、兵を民意で募集する旨も発表。二ヶ月過ぎて、兵の集まりが良くなければ、徴兵することも厭わないと告げた。この発表には、民ばかりでなく、冒険者にも衝撃を与えた。声明発表の四日目までに、ギルド長の口から一割ほど去ってしまったことを聞いた。少しでも長く留ろうとする者もいれば、早めに見切りをつけて、去る者がいても仕方ない。

ギルド長は懸念してた。このせいで、少しでも稼いでと後はとんずらと考える輩が増えるのではないか。実際、そうだった。酒場や宿でも、無理して新しい発見や探索をするのは控えて、お金を稼ぐだけ稼ごうと切り替える者たちがいた。非難できない。そう考えるのは当然だろう。ただ、エトリアが入る中小連合に属する国出身者は、自らの故郷に害を及ぼす可能性は十分にありうるので、エトリアに残って抗戦すると主張する者もいた。

様々な思惑に赴く冒険者に反し、エトリア人の行動は違った。モリビトの時みたく、反対する者が多いと思いきや、そろそろと本都市に集結して、自衛軍の衛兵に志願する者が続出した。

恐らく、世界樹の迷宮という、身近にありながら正体不明の敵や場所よりかは、相手が強大でも人間相手でよく知られてる。動機がどうも不透明で曖昧模糊としたモリビトよりかは、今度は相手と目的が明確な分、危機感が上回ってた。反対派は少数で、防衛のために戦う意思表明する国民が多数を占めてた。

激務をこなすオルレスと話す機会はないが、非難をこうこうに受けた前回とは異なり、国民の意思が一つに固まっているのを見て、声明を読み上げる演説台の上で感激しているのを見て取れた。

「黙っててもらちがあかねえ。なんか頼もうぜ」

ロディムはパンとスープ、一日一回だけ頼める料金がかからないセットを持ってこさせた。コルトンは先の約束どおり、ジャンベにホットミルクを奢った。コルトンは酒を頼んだが、一杯か二杯だけに止めておこうと思った。

陽も暮れて、冒険者たちが帰ってきた。アデラとブルーナら五人と相席し、ジャンベとバジリオが弦楽器を爪弾き盛り上がり上がっていると、意外な来訪者が表れた。

ひよっこりとよろい戸から顔を中を窺う者の顔を見て、アデラが「あつ」と声を上げた。ゲンエモンである。珍しい来訪者に長鳴鶏の館一階の食事処はにわかになじわついていた。ゲンエモンは賑わう場をざわつかせた場に詫びるように軽く頭を下げたら、コルトンの方へ向かった。近くにいた者はもちろん、だらけてたロディムも思わず居住まいをぴしりと正してた。

「何か用で？」

「すまんのう。場をざわつかせて。コルトン、確かホープマンズは月曜が定休になったな。その日でもいいから、わしの居る方へ来てくれぬか。少し、話がある。その日までにお主が生きておればだが」

「あなたが生きてなければ、どの道、俺が行く意味はありませんよ」

それもそうだとかかと笑い、ゲンエモンは去って行った。宿の者はコルトンとよろい戸を見比べてたが、やがて、元の賑わいに戻った。ロディムはふうと溜め息をついた。

「おっどろいたぜ！ まさか、あの人に来るとはな。何の用だろうな」
アデラがにんまりと笑みを浮かべ、ロディムを突いた。

「あんたの今の居住まい、おとんに怒られた子供そのものよ」
「うるせえな。俺はあの人がちよつと苦手なだけだ。親父が来たみたいでな」ほら、やっぱりとアデラたちは笑い声を上げた。「お前も、ぎよつと泡食つてたじゃないか」ロディムは無意味な反論をした。

二人のやり取りはコルトンの耳には届いてなかった。ゲンエモン来訪の目的はなんだ。弟子でもない俺に用とは一体。考えても分かんかった。すれ違う形で、アクリヴィとマルシアも帰ってきた。騒ぎながら、席に来るよう促す者たちに対し、コルトンは上の空。

一週間、無事に過ぎた。もつとも、変わらず遅々とした歩みであり、必ずしも探索に向かったわけではなかった。訳を話したので、ロディムに咎められるようなことは無かったが、利用してないかと否定しきれないツツコミをされた。とはいえ、ゲンエモンからの重要と思われ

る話を聞かずに死ね無茶を犯したくなかった。なにより、自身の身の内を聞いてもらいたい思いもあった。以前、エドワードを女々しいとやゆしたが、公私ともに多くの問題と悩みを抱えてた彼とは違い、自らはなんと小さなことで悩んでいるのやらと肩を落とす。

月曜の朝に花桜の館に来訪。淡い紺と紫の着物を着こなした上品な女将アヤネが笑顔で出迎える。昨夜、泥を落とした安い革靴を脱ぎ、奥座敷へと案内される。

黒を基調にした着物と白い袴を履いたゲンエモンが座してた。遠慮なくと言われ、コルトンは胡坐を掻いた。侍と呼ばれる者たちがする正座という姿勢をしなくて良かったと思う。

女将が直接、お茶が入ったお盆を運んできた。緑の茶だった。苦味はあるが、癖は無いので、意外と飲める。

アヤネが礼をして退室したら、ゲンエモンは挨拶をした。

「よう来てくれた。早速だが、本題に入る。実は——」

「ああ、少し待ってください」

コルトンは制止した。「すみません。ですが、話し終わった後でいいですから、俺の話というか愚痴も聞いていただけませんか」

「もちろんだ。実はな、わしの話もそなたがいう愚痴や下らないことだ」

コルトンは胸を撫で下ろしたものの、ゲンエモンが自ら下らないことを聞いて、ひっくり返りになった。

「実はな、冒険者を引退しようかと思う」

「な!?!」なんですと、その先の言葉は絶句して出てこなかった。いきなり、えらい一撃が来たなど胆をひやした。落ち着けと宥められて、コルトンは叫んだ。

「これが、落ち着けるものですか！ あなたから、止めるという話を切り出されて、落ち着いていられるのはごく少数ですよ」

「落ち着かんかい。いますぐ止めるわけではない。二、三年後か。あるいは、かの軍勢が大挙したときだ」

それを聞いて、コルトンはそうですかと一旦、身を引いた。しかし、まだ衝撃の熱は冷めきらない。年齢といえばそれまでだが、よもや、

こんな大事な話を聞かされるとは思わなかった。

「で、その話を知る者は他にいないのですか？」

「直に話してはないが、エドワードには伝えた。ゲンリユーにもな。三人目はお主だ」

選ばれて名誉なことだ。これ以上、重たい荷を共有したくない。自分のちやちな悩みを話していいものかと思いつつ、どうぞと先を話してもらおうことにした。

「もしかたら、もう一人か二人にも話すかもしれん。それはきつと、アクリヴィやオルレスになるだろう。話を戻そう。四年ぐらい前から、身体に少々がたが来ているのは感じてた。ヘンリクの助力と自らの撰生で誤魔化してたが、モリビトでの体たらく。更にぎっくり腰。おまけに……一ヶ月前、戦闘中に刀を落とした」

恐らく、この話を聞いたら、エドワード以下、弟子たちはショックを隠せなかっただろう。ゲンエモンは正座に置かれた右手を見つめた。

「手がな……刀の感覚が全くなくなる感じがした。少しそれるが、わしとエドワードの出生した日が十一月二三日。射手座のサジタリウスなのは知ってるな」コルトンは頷いた。「今年でわしは六十を迎える。まだいける、まだいける。そう思ってたが、戦闘で刀がすっぽ抜けてしまうようではもう終わり。そろそろ、潮時かな。だがのう、諦めが悪い性分だな。後、二年か三年ぐらい抗ってみようかと思ったが、あのエトウなる者たちが来るなら、話は別。あやつらが実際にここまで来て、エトリアに戦いを吹っかけてくるのなら、わしは死に花を咲かすため、戦場に赴こうと決めた」

「無事に来られると決まってはいませんし、あなたが死ぬとは限らない」

「無論だ。しかし、死んだら終わりなのは当たり前として、仮に生き延びたとしても、わしはその戦で全ての力を使い果たす。普通に生活する分にはともかく、多分、冒険はもうできない身となっているだろう。表面上では否定しながら、わしの奥底では、悠々自適な老後より、派手に散る花火のように最後まで輝きたい想いがある。今まで、世話を

かけた者たちには迷惑な話だが、わしは結局のところ身勝手な大馬鹿な者なのだ。だからこそ、大馬鹿者らしく、のんびりと暮らすより、潔く散りたい」

「なんだか、遺言を聞かされるようですね」

「そうだ。冒険者ゲンエモンとしての遺言だよ、コルトン。そして、もう一つ明かしたいことがあるのだが、まだ明かせない。いずれ、時期が来たら、帰還するエドワードより前に明かす」

コルトンは内心首を傾げて、無駄だと知りつつ、今明かすのは駄目ですかと尋ねてみた。

「駄目だ。これは、ある者にとっては、人生に関わる大事な話。この話を知ったら、彼はきつと、戦火の嵐が来るエトリアに最後まで残り、命を落としかねない。それだけは絶対に避けたい。だからこそ、この老いた身に万が一のことがあった時、他に事情を話せる者が必要なのだ。もしも、戦の前に、冒険で命が落とすことがあれば、わし以外にも多くのことを知るもう一人の者が事情を話すだろう。断っておくが、もう一人は冒険者や兵士ではないから、現状では命を落とすようなこととはない。して、お主の悩みとはなんだ。上に立って辛いか」

既に見透かされてたか。コルトンはゲンエモンに思いを吐露した。ゲンエモンは口を挟まず、黙ってコルトンの話に耳を傾けた。やがて、ゲンエモンは立ち上がり、コルトンにも立つのだと言った。言われるがまま、コルトンは立つと、前を向けと指された。

「ほれ、いいから、黙って前向け」

コルトンは前を向いた。泉でとぐろを巻く龍が描かれた掛け軸がある。

「何をしておる。敵がいるのだぞ。お主はそんなへっぴり腰で味方を守れるのか？　どんと盾を構えるのだ。なんでもいい。敵が迫るのを想像しろ！」

コルトンは腰をぱんと叩かれて、背筋をぐんと伸ばし、前に敵がいて、盾を構えてると思ひ、身構えた。例の青熊が迫ってくる。よだれをたらした口を開けて、喰い殺しにくる。鉤爪を振り上げる。盾で弾き、持っていた切っ先の鋭い剣を眉間に突き立てる。そこまで！　ゲ

ンエモンが叫び、拳が掛け軸に届く前に止める。

「それで良い。それで。難しいことは考えず、お主は見得切つてどんと構えておれば良い。もしも、主が鎧を着て盾を持って堂々と敵に立ち向かつてくれたら、わしは大きな安心感を抱いて敵と立ち向かえる。主の仲間はそれ以上にそう思ってるはず。自分こそはホープマンズの盾だと胸を張れ。細かいことは、アクリヴィに任せれば良い。あの娘は賢いからな」

「それだと、俺は前とやることが変わりないような」

「そうだ、そのとおり。大体、リーダーにしろ王様にしろ、なんでもかんでもできる有能が就くとは限らない。揺るがぬ意志と挫けぬ心を持ち、公平に接し、常に前を見据えて、後ろもたまに見やる。人の上に立つ者の資格はなにかと問われれば、これらがあれば良い。威張るのではないぞ、要は堂々としておるだけでいいのだ。リーダーではなく、味方の命を守るホープマンズのパラディンとしてな」

ゲンエモンに促されて、コルトンは座った。そして、やっと重たい物が抜け落ちた気がした。こんな当たり前のことを何故、もつと早く言わなかったのだらうと思ひ、自ら子供じみた意地を張つてたことを認めた。ジャンベは後輩で、年齢的にも自分が支えなければいけない。長い付き合いだが、ロディムも年下で、一個人としてはともかく、リーダーとしては自分を認めてくれない。雑用を任せきりの女性陣には切り出しづらい。それでも、さっさと話せば、二週間、苦しい思いをせずにすんだらう。

膝を割つて話せる相手がゲンエモンという点については、少々申し訳なさも感じる。俺があいつらをもつと信じてやらねばと、ぐつと身を引き締める。

「あなたのおかげで吹っ切れた。ありがとうございました。どうでもいいですけど、このような場で話しても大丈夫で？ もっと、隠れ家的なところで話すのかと思いましたがよ」

「やましいことを話したりはしてない。むしろ、かえってそういう場所ですら、悪戯に好奇心を刺激してしまい、裏があるのではと勘繰られる。だから、馴染んだ所で尚且つ、人がおいそれと入ってこれな

い場所があれば、そこで話したほうがいい。混雑してるところもいいな。少なくとも、わしはそう考えておる。幸い、正にそういう打って付けの場所にいるからな。さてと、コルトンよ。手間を取らせたな。礼を言う」

ほれ、飲めとゲンエモンは茶をすすった。コルトンも喉を潤した。少し冷めて、飲みやすい温度である。一口で飲み干したら、ではと、コルトンは退室した。磨かれた木製の床を通り、靴置場にて靴を履き直す。店にはちらほらと、一般客と同業者の姿も見受けられた。入った時にはいなかったコウシチとシシヨーもいる。明らかに待ち構えている風情だ。

黙って通り過ぎれるかと思っただが、待てとシシヨーに呼び止められた。

「少し話がある、コルトン。ここに来てくれ」

簡単に放してくれる雰囲気ではなさそうだ。ゲンエモンの弟子二人は近寄りがたい空気をまとってる。あの様子では、詳しい話を聞いてないのは本当らしい。退室直前、ゲンエモンに耳打ちされたことをコルトンは述べることにした。着席するや、シシヨーは切り出した。「コルトン、教えてくれ。師はあなたに何を話したのだ。何故、我らばかりでなく、お仲間にも明かされないのだ。信用されていないのか」

「わかった。だけど、驚かずに聞いてくれ」

コルトンが素直に明かすことに疑問を抱きつつも、二人はコルトンの口を通じてゲンエモンの話を聞いた。二人は眉をひそめ、考え込んだ。

「師が引退……そうか」

シシヨーは合点したようだが、コウシチは納得しかねた。

「失礼ながら、コルトン殿。今の話に虚偽は含まれておらぬか」

「まさか！　ここで嘘をついてなんになる。本当だ。ゲンさんは二年後か三年後。もしくは、例の奴らとの合戦を終えたら、引退するつもりだ。そうまでして疑ってなんなんだ」

「すまぬ。だが、信じられぬのだ。ブシドーにとって、戦いの最中で自らの得物をすっば抜かしてしまうのは、武芸者として終わりも同然。

私はあの方が日頃、皆の見えぬところでたゆまぬ精進を続けて、力を保とうとしてるのを知ってる。主の話が真実であろうと、にわかには信じがたい」

コウシチは捨て子だった。身寄りのない彼を親切な夫妻が引き取り、育てたのだが、夫妻は野盗共に殺された。コウシチは元冒険者の義父の言葉を伝に、ゲンエモンのもとに身を寄せて、我が子のように育てられて、流派も教わった。コウシチにとってのゲンエモンはエドワードと同じ、第二の父親。そんな人の衰えを聞かされては、そのシヨックはシシヨーを上回るだろう。

「ああ、それとだな。これも近い内にらしいが、お前を弧自戦流の正統後継者にする、と」

「このような心境で、それを語られても、拙者の心には響かない」

シシヨーは小さく会釈した。「ありがとう、コルトン。おかげで疑問が解けた。あの方は冒険者の前に武人。そのようなこと、確かに我らや身近にいる者に話しにくいのも道理」

コウシチもうむと同意してみせた。まだ納得しかねてたが、これ以上引き留めるのもどうかと思い、追及は控えた。

色んな意味でやっとな解放された。コルトンは来る時よりも、ゆるやかな軽い足取りで長鳴鶏の館へ戻った。引退、刀を落とした事、後継者。二人には、ゲンエモンに明かしても良いと言われたことだけを話した。もつとも、コウシチとシシヨーが最も知りたいであろう事実は、エドワードにすら打ち明けてないので、コルトンにも明かしようがなかった。

三五話 近寄る嵐

十一月二三日。ゲンエモンとエドワードの誕生日。ゲンエモンら南方から来た者には、産まれた日を祝うという風習は馴染みなく、よくここまで生きられたものだ和我ながら、感心の一つも示した。だからといって、他者に祝われるのが嬉しいはずもない。決して当人は催促するような言動や行動、そんな素振りも微塵も見せなかったが、いざ六十歳と還暦を迎えたら、何人かがおめでどうと祝言を送られて、花桜の館からは赤い法被をアヤネから渡された。

親しい方達だけでも呼ばれてはというアヤネの提案に乗り、ゲンエモンは自らが率いるパーティ四名とアヤネの他、ガンリユー、グラデイウス、ホープマンズ、エドワードの家族と人数を限定した。オルレスは彼の激務を考慮して、自らしたためた手紙をラーダの職員経由で届けた。

「旧知の方は呼ばれなくて？」とアヤネ。

「場所や都合もある。わざわざ、手を煩わせることもあるまい。後で知って、おめでどうと言ってくれたら良い」

当日は朝から空一面雪で覆われた。一週間前から、エトリアと周辺では雪がちらほらと降りつつあった。年老いた者たちの記憶では、温暖なエトリアと周辺国では十一月半ばに雪が降ることは数えるほどしかない。降雪に伴い一気に冷え込みも厳しくなってきた。結局、ヴァンが一人来て、簡単な祝辞を述べて、帰った。母親の容体がかんばしくなく、といって、自身や息子は仕事があるので面倒を見る暇がない。フェドラができる限り、様子を見ている。ゲンエモンはヴァンに、精のつく物や飲みこみやすい食べ物に分けた。

「息子ほどではないが、わしもエウドラ殿の快方を祈ってる」
ヴァンは深々と一礼をして去った。

エドワードが帰って来るまで生きていてほしい。ゲンエモンには、二人の無事を祈るしかなかった。オルレスも来なかった。代わりに、使いの者から返信の手紙と小さな荷物が包みが贈られた。手紙には祝辞の言葉が綴られて、来られなかったことを大変残念に思うと謝罪

も含まれてた。包みには、彼が気晴らしにと、たまに飲む高い紅茶の葉を詰めた瓶が収められてた。

ゲンエモンは使いの者に、「ありがとう。あなたの健康が損なわれないことを願うと伝えてくだされ」と言った。

夕刻。近隣の肉屋で働く若者が大きな牛肉の包みを運んできた。これは何かとアヤネが聞いた。

「エドワードという金髪の人が、今日、この肉をあなたの宿に持って行ってくれと頼まれたのですよ。恩のある人の健康長寿の祝いの品代わりにと、これを」

アヤネの案内で台所まで行くと、若者は包みを開き、自前の包丁でささっと素早く肉を裁いた。一目で高い肉だとわかる。牛肉は新しく、見るも鮮やかな霜降り。ゲンエモンにこのことを伝えたら、感嘆した様子でそうかと呟いた。こうして、一八名によるささやかな祝いが催された。

乾杯の音頭をガンリユーが取り、侍たちがもたらした清酒をなみなみと注いだグラスを一息で飲み干した。普段は口うるさい医師のヘンリックも、今日ばかりは無礼講と飲み、酒豪のラクロワは遠慮なく酒を体内に吸収してゆき、酒樽にでもなるつもりかとゲンエモンに突っ込まれた。ニッツアはグラデイウスの者たちとつるみ、ブレンダンは静かにちびちびと啜り、酔ったガンリユーが彼の肩に腕を回し、嫌そうな面をした。

ホープマンズの面々は、招待してくれた事。エドワードが自分達のために、美味しい肉を用意してくれた事に対し、感謝を述べた。赤らみを帯びたロディムが杯を掲げる。

「我らがリーダーにも、健康と使命達成の祈願を」

ロディム以外の者たちも杯を掲げ、ものはついでにと、宴会にごちそうを用意してくれた者の誕生と生還を祈った。

エドワードの密命は伏せられてる。執政院ラーダのミッションで遠方の地を目指した。天空にあるとされる城と世界樹の迷宮の存在をひた隠しにしている噂があり、かつてはエトリアの世界樹にいた偉大なる巨龍の一头・蒼き龍落命の地とされる謎多きハイ・ラガード公

国の視察に向かった。執政院ラーダとエドワードの関係者は、こう述べることにしてる。

宴会は夜中で幕を閉ざした。泊まっていけないかと誘ったが、元から花桜の館に居る者たち以外はガンリユーを除いて辞退した。気を利かせたのか、グラデイウスと若いメンバーも部屋から出て行き、ゲンエモン、アヤネ、ガンリユーの三人が残された。今回だけは、アヤネは女中たちのみに片付けを任せた。ガンリユーは障子を閉めていき、宴会所の規模を小さくした。

「三人なら、この広さでも十分だろ」

「なんだか、懐かしい集まりですわね」

アヤネはたおやかに微笑んだ。ガンリユーもほくそ笑む。

「おつ、そうだ。アヤネちゃん、久々に目をぱちつと開けてくれよ」

あら、やだと言いなながら、アヤネは目をぱちりと開けた。切れ長の三白眼がそこにあつた。その黒い眼は力強く、見る者を吸引してやまない魅力があつた。少し皺はあるものの、若い頃の美しさは衰えておらず、丸顔の童顔で可愛らしさもある。そんじやそこらの小娘より色気がある。惚れ惚れしたガンリユーをゲンエモンが小突いた。

「無用に見つめすぎだ」

「何言つてんだ、お前も嬉しいくせに。だけど、アヤネちゃんも結婚できなかつたとはなあ。というか、俺らの誰一人結婚しなかつたな。俺らはともかく、寂しくは無かつたのかい」

「ここには、多くの知り合いに冒険者の方が訪れます。働いている多くの子もいます。お二人もいて、私は寂しくありません。世に孤独な人は多くいます。その方達と比べたら、これ以上、望むのは贅沢ですよ」

そうは言うものの、我が子を抱きしめられる親を羨ましく思う。この年で、半世紀を過ぎた今となつては、それも叶わないだろう。年月がたちすぎた。

のどかな時間を過ごしたかったが、アヤネは居住まいを正して、ガンリユーと向き合い、ゲンエモンも続いた。

「急に改まつて、どうしたんだよ?」

「あなたにお伝えしたいことがあるのです。その前に必ず、約束していただきたいのです。ここで話したことは他言無用。あなたのお人柄は十分に存じております。信じられるお方です。私もあなたに、このような言い方をしたくない。しかし、とても大事なことです。ある者の人生に関わる話。ですから、用意に明かせないのです。何卒、今からお伝えすることを最後まで聞いてください」

アヤネは両手を揃えて、頭をガンリユーに伏した。その土下座のような姿勢に、ガンリユーは慌てた。

「頭を上げてくれ！ なにがなんだかわからねえけど、俺に頭を下げることはないよ。むしろ、そこまで言われたら、是非ともお聞かせくださいと俺が頭を下げて、早く聞きたいくらいだよ」

ありがとうございます。アヤネは面を上げた。ゲンエモンとアヤネは、ガンリユーに今だ明かしてない事実を伝えた。全てを語り終えた後、アヤネは悲しい眼差しで灯された細い油の紐を見つめた。気まぐずい空気を誤魔化すようにガンリユーは頬をさするように掻いた。

「とやかに言えないが、今からでも明かすのは駄目かい」

アヤネはいいえと首を振った。

「私は以前、ゲンエモンを臆病者と罵ったことがありましたが、それは私にも言えること。月日が長く経ち過ぎました。私の口から、すぐに話せる勇気がありません。まして、今の状況で明かすことなどできません。それなりに長い付き合いで、どういう性分分かったからには、なおさら」

「先にエドワードに明かしても良かったのじゃないか」

「あの子は大事な使命を抱えています。この方の言う通り、帰ってくるまでは、余計な荷物を背負わせる意味はないでしょう」

どうしたもんだと話の切り口を探すがガンリユーに、アヤネは詫びた。

「ごめんなさい。せっかく、水入らずで楽しみたいところを私たち二人の臆病故、このような湿ったお話しを聞かせてしまいました、ごめんなさい」

「さつきも言っただろう。そんな風に頭を下げたり、謝らなくていい。

二人の気持ちは分かった。だから、刀を突き付けられたとしても、絶対に口を割らない」

アヤネは着物の袖で口元を隠し、心配いらぬという風にほほと優しい笑みを浮かべた。

「本来ならば、私たちで話さなければならぬことを、卑怯にもあなたに託してしまった。万に一つ、そのようなことがあったのなら、遠慮なしに明かして下さい。このような下らない秘密を守るために、あなたが傷付くいわれはありませぬ。さあ、暗い話はここまで。私は花桜の館の主人アヤネ。来訪して頂いた方を湿らせたまま帰らせたとあつては館の名折れ。楽しみましょう」

アヤネは自ら、ゲンエモンとガンリユーにお酌した。つまみも幾つか運んで来て、短い時間を楽しんだ。深酒はせず、ほろ酔いで止めた。適当に縫い合わせた皮靴を履いてたら、オールドリッチが話しかけた。

「気分良さげだな、おやっさん。良いことあつたのかい」

「秘密だあー」

酒臭い息を浴びせるように叫んだ。加齢臭込みでくせえぞと、オールドリッチは後退した。

「そうだ、秘密だよ。秘密。話せるわけないね。うへへ」

気分良く千鳥足気味でギルド長は歩いた。彼の妙に浮かれた様子をオールドリッチや周囲の客は呆れて見つめた。

ガンリユーは真っ直ぐ冒険者ギルドに戻らず、金鹿の酒場に寄つた。

酒場では今日も、無事に命を落とさず帰還した冒険者たちが集い、男には高嶺の花と憧れられて、女からは頼られる存在である女将が元気に切り盛りしてた。店に居た殆どの者がガンリユーが訪れたことに驚いてた。冒険の舞台から去った俺が堂々とは行けない。みようちきりんな気遣いをして、滅多に夜の時間帯には来ないギルド長が来たのだから、注目が集まるのも当然であつた。

ギルド長は女将を呼び止めた。若造やそれなりに年期を積んだ冒険者であっても、女将を注文以外の事で、個人的に呼び止めることはままならない。だが、ギルド長のいかつい顔が一段と険しさを増して

たので、不用意に口を挟む者はいなかった。女将はあらあらと、余裕の表情で近づいた。

「どうしたのかしら？ そんな顔して飲んだら、高級酒もドブ水と同じよ」

「話せない。話せるわけないよ。こん畜生！」

「困ったわねえ。それだと、悩み相談はできないわ」

「いやいや。あんた無闇に困らせない。ただな、ちよいと愚痴というか。俺の悲しみを聞いてくれ」

女将が卓に座ろうとしたら、どんと拳骨で卓を叩いた。

「俺の青春が！ 恋が終わったんだよ、ちくしょー!!」

ガンリユーは突っ伏したまま、俯いた。あらまあと困り顔で女将はガンリユーの背をさすった。羨ましく、妬んで見る者もいたが、ギルド長の発言を聞いて、まあ良からうという気になった。女将はさり気無く尋ねたが、ガンリユーは口を割らなかつた。

「すまないね。今は言えないんだ。いずれ、時がきたらな。秘密なんだ」

「あなたから、そんな言葉が出るとは思わなかつたわ」

くすくすと女将は微笑んだ。酷いなど呟きながら、ガンリユーもつられて笑った。あ立ち上がり、さあ、お前らと声を上げる。

「俺は今、ちよいと悲しくて、こうアンニユイな気分なんだ。もつと、はしゃいで。俺の悲しみが吹き飛ぶぐらいはしゃげ」

「どんな女のけつ追っかけてたのか教えてくれよ。おやつさん！」

誰かが揶揄した言葉を端に、酒場は哄笑に飲まれ、ガンリユーも負けじと馬鹿笑いした。大ジョッキ一杯分のつもりが、若い連中にあるよこれ、飲めやと誘われ、年甲斐もなくはしゃいでしまった。気付けば、深夜を過ぎてた。年齢を重ねて身に付けた自制心により、飲み潰れるのは避けえたが、身体が熱く酩酊してる。きつと、顔もトマトみたく真っ赤なはず。女将が変わらず笑みを浮かべたまま、隣に座る。

「気分はどう？ 少し、吐き出せた？」

「口からと言ったら、どうする」身を引いた女将を見て、ガンリユーはくくと意地悪く笑った。「冗談だよ、冗談。皆の尊敬と憧れであるあ

んたを俺のゲロで汚すほど、酔っちゃいないよ」

「あなたが独り身な訳がよく分かった気がしたわ」

「ははは。そうかもな。まあ、でも楽しかった。拾った命、無駄に長生きしようと思ってたが、たまにやがば飲みするのも悪くない。久々に若くなれたよ」

「あなたの悲しみは解らないけど、楽しくてなによりなこと。私はずっと、こういう日が続くと思ってた」

女将は悲しんでも考えてるとも判別し難い、陰りのある顔で店内を眺めた。外見や髪の色はともかく、雰囲気はどこかアヤネと似るとガンリユーは思った。明るさの奥にある守ってあげたいと思う陰り。決して手を伸ばせない高嶺の花でありながら、誰であっても、嫌な表情を見せず、心をほぐす、作り笑いではない心からの笑顔をみせてくれる親切な女性。先代の亡き女将もそうだが、ここに人が集まるのがよく分かる気がする。先代と違うのは、とびきり美人な点だ。

俺に相談といぶかしみながら、ガンリユーはつと、聞いてみた。

「悩みかい？」

女将は首を振った。「ううん。そうじゃないの。ただ、私はこの出身ではないけど、もう故郷も同然だと思ってる。モリビトの一件で、エトリアも凄く綺麗じゃないと分かったけど、これだけ長い歴史ある国だもの。隠し事の一つも二つもあるでしょう。彼らとも、長い時間はかかるだろうけど、いつかは和解できると信じてる。少し話は逸れるけど、荒くれて、個性的な冒険者を相手にして大変じゃないと言われる時があるの。でも、私はちつとも、そう感じたことはない。だって、とても面白くて、楽しいもの。あの人たちと付き合うのは」

女将は小さなグラスに手を伸ばし、くいと一口含んだ。

「だから、冒険者たちと付き合える時間はどのくらい残されてるのかわかって。私がとこしえに住むと決めた居場所にいつまで居られるのかわかって。寂しくて、少し、怖く思う時がある。一度も戦争したことがない国が大軍と戦うんですもの。勝つにしろ、負けるにしろ、以前と同じでいたいなあ。一般の常連さんや冒険者の人にも、結構、残って戦うんだって息巻く人もいたわ。そういえば、エドワードはどうし

「てるかしらね」

「さあな。簡単にくたばるたまじやないのは確かだ」

「なにも、あの人は特別じゃないと思う。事情というか、色々今までの例にない冒険者だからね。もう亡くなつたけど、王子様の身分を偽つて来てた虹色の剣士さんも特殊な例かしらね」

虹色の剣士は覚えてる。きぎなイケメンであつたが、剣の腕は確かなものであり、一途だつた。それだけに、残された恋人の涙はとてもではないが見ていられなかつた。王子様が来るのは珍しいことだが、名誉や誇りのために来る部類と分ければ、珍しくない。エドワードも、名声・金・夢といった物をもとめて来たと分ければ、珍しくもなんともない。

ただ、エトリアが支援を出したり、難民や貧民を一時受け入れることがあつても、そういう立場の者たちで積極的に冒険者になりたがり、成功を収めるのは長い歴史をひも解いてもあまりいなかつた。まして、エドワードと彼の一族は自分達で極力、動こうとしてるので、なお珍しい。

いくら、自由を与えても、どう動き、生きていくかわからなければ、前と同じ。下手をしたら、前より悲惨な生活を送る破目になる。受け入れた以上、彼らが自分で動き、考えて生きてけるようにしなければならぬ。そのため、単なる支援ならまだしも、受け入れとなると、エトリアは厳しく人数を制限せざるをえなかつた。何千人も受け入れたら、それらを育てるのに膨大な時間と金がかかる。

その点、エクウウスの者たちは以前、それなりに自由に動ける身分であつたので、そういう必要な経費も大してかからないどころか、最終的には利益をもたらしてくれると判断したからこそ、受け入れも賛成が多かつたとオルレスは語っていた。実際、エクウウスの者たちは支援以上に、エトリアに利益をもたらしてくれる立場になつた。

女将はどう思っているかは知らないが、ガンリユーは実力こそ認めてたが、他はそこらの冒険者と変わらないと考えてた。

「まさか。これかい」

親指を立てたガンリユーに、あらやだと女将は答えた。

「そんなんじゃないわ。ただね、あの人の母親のこと。そんなに深い付き合いは無いけど、前はあんなに元気だったのに、あそこまで細く……。彼が帰るまで、持つか。彼の父さんとお兄さんは戦で亡くなり、母は遠くへ出かけてる間に、死に目を看取れないかもしれない。誰かに入れ込むのは私の立場的に良くないとわかってる。誰にでもある来たるべき別れだけど、よく知ってる人のことだから、肩入れしちゃうのよね。できれば、無事に親子が会えたらいいな、と。大切な人には一目でもいいから、会いたいわよね」

女将の語りは、まるで自分のことのようにも聞こえた。

金鹿の酒場の女将サクヤの過去は謎が多い。かつて夫、もしくは恋人。はたまた家族や兄弟の誰かが冒険者にいたと聞く。どこから来て、誰と親しかつたのか、本人の口から真相が語られることはない。タイミング的に聞いても良い気がしたが、それは野暮というもの。

店員の子に肩を貸してもらおう女将の案を断り、ガンリユーは来た時より、更にふらつく足取りで仕事場兼自宅の冒険者ギルドに帰ってゆく。

戦争への興奮。愛国心。未知なる脅威と出来事への漠然とした不安と恐怖が入り混じり、エトリアの本都市は妙な空気に覆われて、その空気は本都市から離れた町や村にも伝導していく。妙な空気の正体は停滞感も大きい。

兵士の選抜をして、その者たちを一刻も早く一人前の兵士に鍛え上げるべく、エトリア本都市は過密になりつつあった。金属がこすれ、ぶつかりあう。上官や兵士の怒声と罵声が飛び、火薬を使った兵器の音が轟く。以前の生活では、たまにしか聞かなかった音が日常的に聞く機会が増えた。

やる気があると評する者がいる反面。無駄なあがき、怯えてるのを誤魔化そうとしてるといふ者もいた。やる気があるのは確かだが、戦という全く未知数の出来事への恐れと怯えを誤魔化そうとしてるのも、あながち間違いではなかった。

その空気は冒険者や国外の者たちにも伝わり、来訪中に戦に巻き込

まれないかと二の足を踏み、冒険稼業を辞める人数も少しずつだが、増えていた。エトリアから活気が失われつつあった。

「私自身は戦の経験こそないが、多くの文献を読み、関わったことがある者たちから聞いた話では、これこそ戦争の空気であろう。熱気に包まれながらも、どこか冷めていて、諦めや怯えが混じる。多くの者たちの様々な感情が戦争という強大で恐るべき行為の前に激しく乱されて、何とも言い難い奇妙な空気が生まれるのかもしれない」

一ヶ月前、最後にオルレスと会い、彼なりの有事に対する分析をコルトンは思い出した。オルレスの言うことは大体当たってた。確かに、エトリア人は老いたように肩を落とした感じの者らが目立つ。自身も気分が高揚としながら、変に冷めてるといふか、冷静な気分だった覚えがある。

今日は冒険を休み、軍事演習に参加する。エドワードが帰ることを信じた以上、離れるわけがない。自身を鍛えるため、曲がりなりにも傭兵の経験が役立つかと思ひ、コルトンはパーティを率いて参加した（マルシアは除く）。必然的に冒険に費やす日数が減ったものの、いた仕方ない。

軍事演習はお祭り騒ぎの要素を一切排して、メテイルリクとエピザトーテイの二国を仮想敵国に、籠城戦を行ってた。エトリアの戦力では、国境沿いに大規模な人員を配置するのは無理だった。

ゲンエモンからの提案で、コルトンはシショールと共に騎乗の訓練もしていた。無論、鎧の騎馬武者が様になるからという理由ではなく、素質があるから、戦える者として一つでも多くできることは増やしといた方が得。今後、生きていく中で役立つかもしれない。こう説かれた。

そういうことで、コルトンはシショールを先輩。ゲンエモンや日替わりに来る騎馬隊の者たちを師に、馬の扱いや馬上での戦い方を学んだ。素質があると言われたのもそうだが、自らがエドワードの代わりになればと思ひ、日夜努力に勤しむものの、上達は他と比べて遅いと自覚してた。騎馬隊の者には笑われ、シショールには名のとおり、師匠面された。

しかし、弱音は吐かず、精進を続けた。コルトンには思うところがあつた。エドワードが去る少し前のことだ。

あんたとは戦場で馬上の人として再会することになるかもしれない。俺は地に足つけて盾を持つ兵士。あんたが帰って来る頃に戦いが始まつてるかは知らんが、それはない。そのときは鼻で笑つたが、コルトンはエドワードの言葉が予言めいたものに思えてきて、騎士への憧れと同じくらい、強い予感めいた物を感じて、修練に励ませた。

「ほけつとするなコルトン。馬を全速で走らせなければ、まずはしっかりとコンタクトを取り、手綱でちゃんと振れ」

シシヨーの叱咤が飛んできた。彼女は親指と人差し指で手綱をつまみ、口の中のハミに合わせて、上手に制御していた。コルトンは乗れることはできても、コンタクトを取るタイミングや感覚がいまひとつ、掴み辛い。

とはいえ、シシヨーもパーティとの付き合いがあるのに、自分に時間を割いてくれることをコルトンは感謝してた。下手と言われて、頭頂部をぱちんと平手打ちされるのはご免だが。

計五時間も馬に乗り、股が裂ける思いである。起きたとき冷えた身もかつかど熱い。ふらつく足を休ませて、身体が冷える前に汗を拭いておく。

コルトンは大規模な演習所と化したエトリアから離れた位置にある、エクウウスのキャンプ地へと徒歩で向かった。キャンプ地の奥にウォル一家のゲルがある。エドワードに代わり、毎日とはいかないけれど、ホープマンズの誰かやゲンエモンもたまに様子を見に来てた。

疲れを押し隠して、妹のフェドラが迎えてくれた。中では、腰を折り曲げたエウドラが佇んでた。エウドラは笑顔で「どちらさまですか？」と聞かれた。エドワードの友人だと答えたら、「そうですか。大した歓迎はできませんけど、くつろいでください」と言われて、近くの来客用の敷物に胡坐を掻いた。

エウドラはここ最近の出来事の大半を忘れてた。例の病気が治りかけたと思いきや、再び、数日の高熱に苦しまされて、見る間にやせ細つた。年齢は五九と聞くが、ここに至るまでの苦労がたたり、重い

病を患ったのが原因で、七十どころか八十といっても通じるほど老けてた。

今日は調子が良さそうだが、酷いときは食事や水も通さず、羅列も変で不安げに誰かを探すように辺りを見回し、まともに話ができない日もあった。

長居は無用。コルトンは本当に軽く様子だけを見たら、帰った。最近、一段と冷え込んだ。冬だから当然と言いたいが、温暖寄りな気候のエトリアからすれば、今年の寒さは異常である。体感でいえば、去年より十度近く低く感じる。

夏は灼熱、冬は酷寒の地にいましたから、平気ですとフェドラは言っていた。若い時分はまだしも、果たして、病弱なお年寄りに耐えられるものか。もう十二月も半ばに差し掛かる。新年まで後少し。

エドワードは到達したのか、長きに渡る行程の最中はわからない。冒険での新しい発見といえば、ホープマンズではなく別のパーティだが、別の階から二階に上られるルートがあり、その一つになにやら大きな大量の貴金属の線やらボタンが付いた箱のような正方形の物体が置かれてた。部屋の広さで例えれば、四人も入れば満室になる程度の大きさしかないらしい。

ブシドーたちが使う漢字の他に、幾つか見慣れない言語も書かれてた。漢字と同じく、古代文字であろう。大半は掠れてたが、大きく彫られた二文字は読めた。執政院ラーダにて、冒険者やラーダ関係者のみが閲覧できる特別資料にて、外見のイラストと共に浮き出るように彫られた二つの言語で書かれた文字も載せられてた。

上は“エレベータ駆動装置”。下は“Elevator driver unit”と記載。

エレベータとはなにかわからないが、高度な文明を誇っていた古代人の装置であることには間違いない。執政院は現状、慎重な調査を冒険者たちに頼み、不用意に触れたり、動かすのを禁じた。兵器や危険な物がわき出る恐れがある。第一、エレベータなる名称がどういったものを指すのか図りかねる。

合言葉・兵器・物質・意味のない名称。文字や歴史に詳しい学者は、

Elevatorは「昇降」という意味があるから、単になにかしらの物を動かす役割の装置だと言う意見もある。確かに絵に描かれた多量の貴金属の線は橋や門にある巻き上げ機の類にも思えるが、太いのはがっちり固定されて、他に小さく細々とした物は人の指の半分以下の太さしかないので、巻き上げる道具としての運用は難しそうだという見解が書かれてた。

結局、どれも憶測に過ぎず、真相は謎のまま。物は試しにボタンを押せば良さそうだが、今の所、そこまで勇気のある者はいない。そこへ辿り着くまでのルートは長く、樹海生物も多くて厳しいため、調査は難航してた。

歩きながら、コルトンはルートを長鳴鶏の館から逸れて、外壁へと向かう。

陽は暮れかけてたが、軍の演習による熱気冷めやらず、見るも多くの者たちの迸る体熱と汗が伝わる。てきぱきと片付けをする彼らを避けて、コルトンはジャンベのように、外壁から暗く染まりつつある霜が下りた地平線の先を細めて眺める。

「早く帰ってこい。お袋の死に目ぐらいは看取ってやれ」

*

*

鉄板を雑に打ち付けて作られた粗末な太鼓のリズムに合わせて、オールを漕ぐ。漕ぐ。漕ぐ。

何度も何度も漕ぐ。

疲れて、手の皮がずる向け、まめが潰れ、血が流れて、骨が折れようとも、オールに腕を縛られたまま、ひたすら死にも狂いで漕ぎ続ける。ぬるりと湿り淀んだ空気。病み、身体から膿をもらす人の体臭。汗と脂と血に塗れたぼろきれ。あかぎれだらけの手。いつ終わるとも知れぬ旅路への怨嗟。奴隷を見張る者たちの冷酷な眼差しと同じくらい、鈍く光る武器の刃。船底は地獄の様相。

疲労も限界に達し、視界がぼやけ、鞭や棒で打たれても反応しなくなったが最期。船外に放り投げられて、鮫——あるいは、数こそ少ないけれど、世界樹の迷宮でいうところの水棲の樹海生物。余所では、「魔物」と呼ばれる恐るべき力を持った生き物たちの気を惹きた

め、撒き餌としての運命を待つのみ。

彼らをぶち、罵り、虐める者たちは、彼らと比較すれば、恵まれた航海の日々を過ごしてた。

彼ら奴隷にもある意味、救いがある。大空を覆い尽くす巨躯なる翼を抱く忌まわしい蛇を従える、元盗賊から実質王へと上り詰めた男のために役立ち、死ぬること。エトウのためならば、この身に火を抱けと言われても、迷いなくするだろう。

想像を絶する激痛と絶望、恨みつらみを抱きながら、彼への恐怖には逆らえず。彼のために文字通り、骨身を削ることは、怨みと痛みを超えて喜びすらもたらした。また、ときに上で過ごす者たちからも無作為に漕ぎ手が選ばれて、同じように使い捨てられる様を見るのは、痛快であり、あの方はある意味、平等に接してくれていると思う者もいた。

エトウはある意味、平等であつた。貧民^{ふしや}富者、貴族奴隷問わず、彼は全ての者に逆らえない畏怖を植え付け、動けなくなるまで使う。

四頭のワイヴァーンに、内三頭のワイヴァーンにカセレスを含む部下百名を騎乗させて航海の目的地に襲来。港がある国はたちまち恐慌し、国の総統以下、大臣たちは無理矢理寄港地にすることを約束させられた。矢火の速さで周囲にも伝わり、次は自分達の番だと、固唾を飲んだ。

その後、一万の無傷の正規兵並びに、何万もの疲れ果てた惨めな奴隷兵と徴集された民兵を搭乗した大船団が到着。寄港地にさせられた海洋国家の者たちは、ただただ震えた。空に影をもたらす者を異様なまでの陶醉した熱気と恐怖がこもった視線で見つめる死んだように表情が無い大集団を傍観する。そして、膨大な食料を近隣の国や独立した市町村に請わなければならぬのを諦観した。

少し遅れて、真っ白い肌と淀みない金髪の兵団。浅黒い肌に髪と瞳も黒と統一された兵団も到着。

全軍団をまとめては移動せず、四分の三を本隊として先陣を往く。サンガットの精鋭と南方に住まう黒い肌の兵団に北方に住まう白い肌の兵団は一万ずついて、正規兵は半分の五千、南方と北方の兵団が

らは六千ずつの兵士が遅れて出発する計画（荷物運搬と盾代わりの奴隷は数から除外）。

上を仰ぐ人間達には歯牙にもかけず、一際巨大なワイヴァーンにたった一人で乗るエトウは雲で覆われた先にあるエトリアを見据えてた。

「約束どおり、私は帰って来たぞ。私こそ、世界樹の迷宮すら治める王の器に相応しいことを明かしてみせよう。そして、私への恥辱は、貴様等の血肉で償わせてやろう」

エトウの思いに応えるように、ワイヴァーンは吠えた。赤く輝く濁った瞳のワイヴァーンから発せられた咆哮は、彼に従う者たちには、彼からのメッセージだと狂乱させた。そうではない者たちには、彼への逆らう意思と生きる意思の両方を奪った。

これらの光景をどことなく冷めた目で見てたエトウ側近の一人であるカセレスは、この距離と奴の大好きな酷寒だ。辿り着くまでに、数千か一万、それ以上の人数が志も半ばに死ぬのだろうか。

——*

国によつて新年を祝う日は違うが（そもそもそんな風習が無い所も少なくない）、エトリアは一月一日。ちょうど、新しい年が始まる日に行われる。例年にはない寒波と、近頃の出来事で溜まりつつある憂さを晴らすように、人々は盛大に賑わった。人々の祭事への熱意に気圧されたのか、今日は雲一つない晴天。そんな町や村、本都市から距離を置いた者たちには関係なく、一家や友人と過ごしてた。

中でも、奥にあるウォルのゲルは、人が集まってるにも関わらず静まり返ってた。

暖められた中に反し、その顔触れは沈んでる。奥の寝床では、エウドラが胸の上で両手を揃えて、寝静まってた。身じろぎもせず、寝息一つも立てず。口や耳には綿が詰められてた。

マルシアはゆっくりと告げた。

「時刻十二時から半頃、ご臨終です」

ヴァンは堪えた表情で、今までありがとうございますとマルシアに頭を下げた。フェドラは優しい手つきで穏やかに目を閉ざした母親

の顔を撫でた。

「母は……私たちの暮らしていえば、長く生きたほうです。生まれ変わったっても、父と会えるでしょう。きつと」

病気がちな体になり、とてつもない寒さと流行性感冒なる重い病の度々熱を発し、風邪を何度もこじらせた。遂には耐えきれなくなり、ちようど一月一日を迎えた真夜中。息を引き取った。世界中の誰もが遅かれ早かれ経験することであり、間に合わない者もその分多くいるとはいえ、エドワードは結局、母と父、両方の最期を迎えてやることができなかつた。

帰還した彼に母の死を告げるのは、気が重い。それでも、言わねばならないとコルトンは思った。ヴァンが明日に葬儀をすると聞いた。

「昔はどの一族も共通して、お坊さんのみが体を綺麗にして、お坊さんが一人で遺体を動物が多くいる山の中に七日間放置。その間に動物たちにさらわさせて、遺体があつたはずの場所で家族が改めて葬儀を執り行つたと聞きます。とてもではないですが、僕にはそんなことできません。母が望んだとしても。フェドラもそれでいいね？」

当然よフェドラは答えた。「そんなのは古い風習よ。もうこれ以上、母さんが傷付く姿は見たくない」

気を使い、ホープマンズの面々は退出した。メンバーの中でも、アクリヴィとジャンベは一段と重々しく、一家の心中に強い共感を抱いてた。二人はここに来る前、ジャンベは兄を。アクリヴィは母親を亡くした。あちこちにテントが張られて、売り者や飲食店で賑わう道を通り過ぎるとき、ロディムが呟いた。

「おれ、帰るわ」

みな振り返り、コルトンが聞いた。

「帰るってどこに？」

「実家に決まつてんだろ。誤解すんなよ、おセンチになつて冒険者辞めるわけじゃない。ただな、冒険か今度の戦でどうなるか分かつたもんじゃねえ。俺の国も、なんとら連合に属してて、必ず安全とは言えないしな。まあ、なんだ。なんやらかんやら起こるその前に、てめえなりにこう、心のけじめをつけたいのよ。今すぐにはいかない。奴の

お袋さんの見送りをしてからだ」

ロデームに続き、私もと手を挙げたのは、マルシアだった。

「私もお父さんとお母さんの顔を見ておこうかな。近いし、二週間以内には戻るわ」

「俺は距離があるから、往復で三週間かもう少しかな」

「いや、まだ時間はある。のんびりしてこい。こっちは地味に、一階層や二階層をぶらついておくさ」とコルトン。

あの人も関わりがある。コルトン花桜の館に赴き、ゲンエモンにも葬儀の件を伝えた。

こうして、翌日。陽も差さぬ早朝の内に、エウドラ・ウォルの密やかな葬儀が執り行われた。

葬儀には身内はもちろん。一族の大半が参列し、ホープマンズとゲンエモン、意外にもアヤネの姿もある。

今は亡き師の下で師事をしたたという男が彼らの言語でいうところのお経や祈りの類を唱えた。昨日の内にヴァンと数名の男で掘られた穴へ、そつとエウドラの遺体が置かれた。

彼らは花だけではなく、エトリアの通貨、小物、雑貨、ときに金銀を置く者いた。生まれ変わるには、死んだ時と同じくらいの時間を要する。それまでの間、困らないよう現世の物をいくばくか送る習わしがあった。

ヴァンとフェドラの目は腫れて、頬も窪んでいた。泣き明かしたのだろう。エウゲドロスも神妙な面持ちで下にいる祖母を見つめてた。人の死を学べたのは、不謹慎な表現になるが、良い経験になるだろう。土を被せた後、エウドラへ一族による歌が贈られた。鍛えられた声と喉を持つジャンベの歌唱力は特に響く。

さあ、歩こう ふるさとまでゆこう

みんながいる ふるさとまで帰ろう

人にはふるさとと呼べるところが幾つかある

生まれ育った場所 友と語り合える場所 一人一人 ふるさとは幾つもある

ある日 わたしはふるさとかから遠く離れた
仕事か 未来か なんのために離れたのだろうか
だけど いまはふるさとかから離れ ただ歩こう
ふるさとを離れて 自分がみいだした道を歩もう
辛くなつたときは ふるさとで 背中を見送つてくれた人たちを
思い出そう

ああ、懐かしい 空気のおい ああ、懐かしい 親しい人たち
ともに笑い ともに語ろうじやないか そう、いつか帰ろう
さあ、歩こう ふるさとまでゆこう

心を許せる者たちがいる ふるさとまで帰ろう
ある日 わたしはふるさとかから遠く離れた
帰れないのか 帰りたくないのだろうか
だけど わたしは新しい場所を見つけた
思い出を胸に そこもわたしのふるさとと呼ぼう

ともに笑みを返しあい 悩みと喜びを語り合える人がいるとき
そこが居場所だと思えた

辛くて 悔しくて 悲しくても
ふるさとと呼べる場所がある限り 前を向いて歩こう
たとえ 手が届かなくても 想いはある
たとえ 何もなくても また新しく作ろう
そう 心を安らげる場所はひとつじやなくてもいい
人にはふるさとと呼べるところが幾つかある

生まれ育つた場所 友と語り合える場所 一人一人 ふるさととは
幾つもある

みんながいる ふるさとまで帰ろう
心を許せる者たちがいる ふるさとまで帰ろう
さあ、歩こう わたしのふるさとまでゆこう
親しい 愛すべき者たちのもとへゆこう
この大地こそ 我らのふるさと

我々は 仲良きにはかろうと思つる者たちを歓迎する

“ふるさととは幾つもある”や“この大地こそ ふるさと”という表現は、古来から、遙かに広がる大地を転々と移動して暮らしてきた遊牧民らしい歌だと、ここに居るエクウウス以外の数名はそう思った。

葬儀を終えた後、コルトンはアヤネに聞かずにおれなかった。

「あなたが来るとは思わなかった。正直、驚きました」

アヤネは微笑んで答えた。

「そうでしょうね。ですが、最期に一目、お会いしたかったです。産んだ時も、別れた時も、お亡くなりになられる間際でも、子を想い続けた方のお顔を拝見したかった。ただ、それだけです」

深くは答えてくれそうにもなく、場が場であり、コルトンは質問を控えた。

正午、ホープマンズの一同は大門前に集い、三人はロディムとマルシアを見送った。とても寂しそうなジャンベをロディムが小突いた。

「馬鹿！ 死んだり、ましてや止めるわけじゃない」

「そうは分かっていますが、実質パーティ解散状態になるから、なんだか言い様もなく寂しくなってしまうのですよ。僕はエドワードさんと同じぐらい、あなた方二人の帰りをお待ちしていますよ」

やれやれと首を振りながら、ロディムは嬉しくはにかんでる顔を隠せていなかった。

「お土産を期待しててねー！」門を出て、マルシアが叫ぶ。

「期待しないでくれよー！」というか、歓迎しろ」とロディム。

去りゆく二人を見つめながら、アクリヴィは二人に語るように呟いた。

「まっ。原点回帰で一、二階層を探るのも悪くないかもね。新しい発見があるかもしれないしね」

無言でコルトンとジャンベは頷く。

かくして、エトリアの腕抜き冒険者六人組のホープマンズは半分の三人が残された。

距離や用事的にも、エドワードに対するほどではないけれど、早く帰ってこいよなどとコルトンは思った。アクリヴィもほんの少し。

三六話 さらば、こぎようよ

新たな年を迎えた熱気はどこへやら、数日も経てば、夢から覚めたように静まり返り、いつ来るのかと不安と期待が混じった気持ちになった。ここから二千km以上も離れた地続きの港がある国に到達して、刻々と迫りつつあると行商を生業とする者たちからの確かな情報はエトリアの民に伝わってきた。

有事の対応としてオルレスらラーダ長代理三人を交えた会議が始まり、三人を代表してオルレスが読み上げた。

「まず、我々が行うべきことは幾つもあります。第一に優先してしなければならぬことは、千人程度いる冒険者を含めて、総人口八万と数千の国民の移動です。もつとも、冒険者と此度のこと増員した兵士七千を除けば、八万と少しですが。これらの者たちをいち早く、国内外に退避させることにあります。」

先述したとおり、我らの有事に割ける人員は七千余名いますが、エトリアで行われるであろう戦いに全て投入することは愚策に等しいと、専門家であるミルティユーゴ殿もおっしゃっております。つきましては、八万のうち陸を伝って行く者たちには二千人を同行させて、残す渡航予定八千人には四百人付けます。もつとも、これは物の数の内であり、潜在的な兵士とおっしゃればよろしいでしょうか？」

潜在的な兵士とは手が上がったが、オルレスは今から言う所ですと答えた。

「潜在的な兵士とは、訓練に落ちた者。もしくは、募集にはこなかつたこそ、いざというときには戦う力を持っている者たちのことです。それらの人数を踏まえたら、もしも彼らが襲われることがあり、兵士の手が足りなくても、彼らが戦うはず。」

断言はしかねますが、そういう者たちの人数は七千を超えて、おおよそ二万か三万をいると思われれます。とにもかくにも、決戦の舞台である本都市には、四千五百余名の配置し、二千五百余名の衛兵たちは民の守備に就くことが決定しました。

期待はしていませんが、冒険者にも戦ってくれる者がいるので、本

都市の人数は多少の増加が予想されます」

その後、幾度となく繰り返し返された議論と問題に及んだ。

いついかなる日に退避させるか。受け入れ先の国に対する配慮とエトリア人の今後。敗北した後はどうするか。勝利後はどうするか。和睦交渉の使者を送るのか。現在の食糧備蓄と今後の食糧事情。農耕地と牧畜地、森林などの天然資源の管理など、多くの議題と情報について語り合った。

大抵は結論が決まっていたので、長々と無意味で無用なことをだべつて、罵りあうことは殆どなかった。

本都市に残留して軍を指揮するのは、ミルティユーゴ総轄隊長の他、国境沿いと国の中間と交通網を担当する地区隊長が選ばれた。残る港都市の地区隊長と、もう一人の国境沿い担当地区隊長が民を先導・護衛する軍の責任者に指名。

会議終了後、オルレスは自室に戻り、秘書と共に冒険者室長の業務として数々の書類と向き合う。休む暇などない。のんびりと紅茶をすすれた時間すらも、たまにしかとれない。しかし、少しきついと思うことそれあれ、不思議なことに不幸だとは思わない。忙しいことを喜んでたりする。

不必要に余計なことは考えずにすみ、自分は仕事がいきがい人間だと再認識させられた。なにより、代理とはいえ、曲がりなりにも一国の代表としての責任感が彼を突き動かした。

ふと、地図を眺め、頭に叩き込んだ母国の基礎知識^{あつた}を検める。

エトリアは西と北に交通の要である主要の大門が建ち、北側は姉妹都市で港でもあるソロルと繋がっているため、行き交いが頻繁。同じく北と西には農耕・放牧地帯である肥沃な大地、広沃ヶ原が広がる。

南の各地には小さな門が点在。西南には鬱蒼とした森がある。先にある霊峰は隣国エピザ・トーティの国境線沿いとなり、霊峰から流れ出た幾つもの支流が重なった大河が堀の水を湛え、生活の用水となる。それとは別に、干ばつに備えて、地下からも水をくみ上げる場所が幾つか作られていた。

東側は緩い下り坂のような草原が続いた後には悪い虫が湧く湿つ

た森があり、先には隔てるような大きな崖がある。その崖を登り、降りたら、険しい悪路と荒れ果てた大地が続き、鋭い小さく連なった岩山が道を阻む。奥には硫黄が充満した洞窟と湖があり、満足に呼吸すらできず、行き着く先には切り立った断崖絶壁しかない。

船で行こうにも多くの暗礁があり、潮の流れも速く、近づくことすらできない。何年経とうと草一本生えないところから、不毛地帯と呼ばれ、物好きな冒険者ですら近寄らなかつた。昔、国の地図作製を目的に寄つた一団の内、四人もが亡くなつた事から、人喰いの地とも異称された。よつて、自然の障壁に守られた東側はあまり警戒する必要がなかつた。

東が異様に険しいのは、規模の大きな海底火山の噴火で形成された可能性があると指摘があつた。火薬の主原料である硫黄が取れる洞窟や湖が存在し、国の仕事で硫黄運搬の専門職の者もいた。冒険に見切りをつけた元冒険者の男性も見られた。場所が場所であるため、屈強な者にしかできないことであり、エトリアは火薬の原料を自国と交易により賄つていた。

東側が枯れている理由は硫黄だけではない。聳え立つ世界樹の根つことその下に広がる広大な地下世界を支えるのに、養分を取られているためだと主張する者もいた。

世界樹の迷宮は厳密にはエトリア本都市の真下ではない。樹がある東側。街全体の四文の一ぐらいである。

人が入るのを拒むかのように険しく、堅い岩と砂、硫黄しかない不毛地帯の下に世界樹の迷宮が存在しているとの見方で一致していた。今の所、出入り口は世界樹のそこしかない。もつとも、通常の生物より遙かに優り、繁殖能力と適応力を備えた危険極まりない樹海生物がいるのを承知で新しい出入り口を掘ろうする愚か者はさすがにいなかった。東側へ行くルートには、要所で柵や看板が立てられてた。

上記の理由から、東側は警戒の必要が無いと言われた。

例の白き姫の予言が本当だとするなら、怪物たちがぎやーぎやーと騒ぐ壁を破壊して、自分達の方に敵を招きよせる真似はしまい。壁との距離が狭く、高低差でこちらの攻撃は届きやすく、向こうの攻撃は

届きにくい。おまけにぬかるんで、人の血を吸う悪い虫対策にときおり薬をぶちまけたりしてて、衛生面もよろしくない。いずれにせよ、東側に敵が陣を張る可能性は限りなく低いと言われた。

四方八方から攻め入る心配が無いのは、まだ良いといえるのか。

しかし、近頃、冒険者たちからもたらされる報告では、一階層に三階どころか四階層で見られるうごめく毒樹など、深層の怪物が浅層に出現したとの目撃情報が多数挙げられてくる。白き姫の予知夢を単なる妄想と笑えなくなってきた。

艶やかな赤い毛並は、深緑の森ではより一層生えて、目立つ。子羊より少しばかり小さい鼠をここで見た時は驚いたものの、今ではもう、見慣れたものよとコルトンは思う。

そう、ここは一階層。本来、四階層の火噴き鼠が来ていい場所ではない。なのに、ちらほらと見られて、浅い階を中心に探索をする冒険者たちを脅かす。いくら冒険稼業が命懸けとはいえ、命を落とす危険性が増した状況でほしいと送るのはどうかと思われた。そこで、浅い階を探索する冒険者たちを守るため、各パーティの他、冒険者ギルドの仕事に関わる者、執政院リーダーが決めた安全策を講じた。

日が浅い者ら。あまり腕が立たない者らは、三階層以上に到達した者が最低二人以上、護衛に加わるのが条件とされた。理想とされる五人を超えてしまうが、無闇に散らしてしまうのはあまりにも酷。犠牲者は少ないに限る。

だが、そうはうまくいかなかった。日が浅い者たち、浅層で長らく燻つてる者たちはこれを機会と捉えて、無謀にも戦いを挑む事例が少なからず起きた。結果、消えない傷ができるのは良い方で、生涯付き合わなければならぬ重傷者もいれば、死亡した者もいた。

ある程度過ぎれば、そういう計画性の無い英雄願望も鎮まったが、今度は利益分配の問題が上がり、そのことで喧嘩をする者たちもいた。全体でいえば四分の一程度なのだが、決して少なくない件数にベテランの冒険者、ギルド、リーダーの者たちは悩んだ。

コルトン、アクリヴィ、ジャンベの三人は浅層の冒険者護衛の取り

決めができたとき、分配はそこそこで良いだろうと決めた。そこそこがどの程度かは曖昧模糊ではあるが、どちらにせよ、相手方と比較して、半分もしくはは三割寄せと言ふ気は無かった。

ロデイルム、マルシアが来るまでは、こうした護衛を買って出ていた。少なくとも、一日二回以上は深層のものと出会う。時間にして、大よそ二時か三時頃、本日一回目となる遭遇。

森ネズミと呼ばれる紫のネズミの群れは、ふうと熱気を伴った息を吹きかけられただけで、だだつとコルトンとアクリヴィ、後ろにいる十代後半と二十代前半の年も経験も若いパーティの足元を駆けてゆく。火噴き鼠は自らを大きく見せようと、すすつと二本足で立ち、ネズミというよりかは、ガラスを引つ掻いたときに出るような不快な鳴き声で威嚇した。

一人、丸っこい一番大きな盾を持ったパラディン役が出る。がたいはよろしいものの、構えや動作もぎこちない。体付きが良いだけで、慣れてないのが一目でわかる。コルトンは斜め横に離れて、鼠から見えない位置を選び、くさむらでじつと見守る。

鼠が憤りの声を上げて、若きパラディンに跳びかかる。なんとか盾で受け止めたと思ったのも束の間、盾に爪をかけてよじ登る。剣で刺そうにも、頬袋はとうに膨らみきつてる。愚かにも戦いを挑んだ凶体ばかりでかい鈍い相手を焼こうとした瞬間、鼠は火の息の代わりに血と唾を吐き散らして、倒れた。ぷしゅうと音を立てて、僅かに熱い吐息が齒の隙間から漏れる。

コルトンは地面に剣を刺して、血を拭った。大丈夫かと一声かける。

「え、ええ。お陰で。手甲を着けていましたから、傷もありません」盾は鉄板と木材を合わせた合板製の物。木材部には鼠の爪痕が残り、鉄の手甲にも引つ掻き傷が見られる。手甲を着けてなければ、この天然茶髪カールの男の手は血塗れになっていただろう。

「ああいう風に跳びかかれたときは、直前で盾を手放せ。そうすりゃ、手甲を着けてなくても、痛い目を見ずにすむし、相手が痛い目を見る。あるいは、もつとでかいのを使うんだ」

とは言ったものの、時間はかかるだろう。自分は慣れたが、火噴き鼠は森ネズミとは比べ物にならないほど速く、力もある。どんと跳びつかれた際、手首から肩にかけて強い衝撃があり、手の感覚が無くなったはず。その証拠に、はいと面を上げて返事をしたとき、するりと手から盾が抜け落ちて、震える手で拾おうとした。

パラディンなど、盾持つパーティの守護役には、相手の攻撃の衝撃を受け流すスキルが求められる。例えば、雷の避雷針みたく電流を地面へと逃がすようなもの。格闘技で相手の攻撃をいなしたり、咄嗟に身を引いて、直撃によるダメージを軽減するのと同じ。一朝一夕では身に付かない。命懸けの実践と絶え間ない精進の末、やっとこさ覚えられる。

傭兵の経験があつたコルトンも、その感覚を身に付けるのに、実に二年要した。特に下へ行けば行く程、重く、速く、強い相手がいて、必ずしも型通りにいかせてくれるとは限らず、柔軟性もある。いやがおうにも鍛えられる。できなければ死ぬ。

この同行して間もないパーティとの相談では、三階層以上の敵を倒したときに得られる八割の報酬はこちら。浅層の相手に関しては、全てあちら側という約束で同意した。残念なことに、今日は鼠一匹。森ネズミ数匹分とはいえ、たかが一匹では知れてる。かといって、いっそやの青熊なんぞに出て来られても困る。

あんまり強すぎると、今のメンバーでは戦うのはおろか、逃げるのも困難。

強敵と出会わなかったのを幸運と見るべきか。儲からないのを不幸と思うべきか。シリカ商店で換金した鼠一匹分のしけた金をぎゅつと握る。

「生きて帰れただけ良いでしょう」アクリヴィが淡と言う。

ああ、そうだなと適当にあいづちを打つ。三人で五階層に行く無茶をする余裕もなければ、状況でもない。三人の内、誰でもいいから、とつと帰ってこいとコルトンは切に願った。

自らの暗澹とした気持ちを写すように、本都市——いや、ここだけではない。エトリア全体が慌しく、物々しさがより増してきた。

昨年までは、余程、怪しくなければ、初対面でも大抵の者には挨拶をかけてた彼らは、見慣れない者に対し、疑り深い眼差しを向ける者が多くなった。

地下の喧噪をどこ吹く風の態度には気に食わない思いを抱いてたものの、なんだかんだ、血生臭くて危険な生物と疑り合う場所から離れて、心を休めるには、あれぐらい呑気な方がちょうどバランスが取れていたのだと知った。今では、地上に出ても、一目でわかるほど一変して張りつめた空気のせいで、すぐには安心感が得られず、身体の緊張が自然と脱けるには少し時間を要した。

近々、民族大移動の話ギルド長から聞いた。酒場の女将も、シリカも、遅れてだが、いずれ去ってしまう。ギルド長は直前まで残ると本人が言っていた。残ると決意はしたが、空っぽの場所で望みが薄い場所に居るのか。そう思うと、そう思うと、自らの弱い部分が勝手に悪魔の囁きとなり、上手い言い訳を思い付けと語りかけてくる。

そして、数日が経ち、マルシアが帰ってきた。

マルシアは気負いも憂いもなく、いつもどおりであった。反対はされなかったのとアクリヴィが聞く。

「できれば、私たちと一緒に逃げてほしい。戦火はここにまで及ぶ可能性はある。だけど、エトリアではきつと、多くの怪我人が出るはず。一人でも多くの手があるでしょう。あなた自身で選びなさい。そう言われて、来たの。これを持ってね」

薄く濁った液が入った小瓶。まさか。コルトンとジャンベは顔を見合わせた。

「おいそれと飲む気は無いわ。母さんがね、とても悲しげな表情で渡してくれた。まあ、好きでもない、乱暴な人たちに言い様にされるぐらいなら、それもありがたもね」

アクリヴィはぎゅつと、マルシアを優しく抱き締め寄せた。

「あんたって大馬鹿よ。そのまま帰って来なくても、誰も責めない。あなたは優しいんだか、冷たいんだか、わかりやしない。でも、死ぬときは一緒よ。私は薬ではなく、剣か。矢か。鉄砲弾のいずれになると思うけどね」

「ええ、本当。私って馬鹿だと思う」

マルシアはとても嬉しそうに微笑んだ。アクリヴィがそつと離れたら、マルシアは語った。

「ここに来て、初めて、あなたやコルトン、ジャンベ。ここにはいないけど、エドワードにロデイルム。それと、女将さんやシリカ、アテラとか、沢山のひと親しくなった。私ね、実は子供の頃、友達と呼べる子がいなかったの。高嶺の花というか、みんな一歩距離を置いて、憧れるか。妬まれるかのどっち。でも、ここでは、全部ではないけれど、大抵は包み隠さず自分を出して、女や男とか余所にして、接してくれる。私も遠慮なく自分を出せる。私を変えてくれて、私が愛しく思う人たちが集えるこの場所を守りたい。だから、戻ってきた」

マルシアは笑みを絶やさないが、笑顔の裏から強い意思と覚悟が感じられた。コルトンは恥ずかしくなった。

あれだけ、かっこつけといて、まだ心が揺らぐ自分を嫌悪し、しつかりしろ。肩の力を落とせと励ます。

ただ、マルシアが戻ってきたところで、五階層には行くには不十分。もう一人、戦闘に長けた者に帰ってもらわなくては。

その一人、ロデイルムは三週間（二一日）を過ぎて、二四日にやっと戻って来た。垂れた鼻水を指でさつと払い、馬鹿面で笑いかける。

ロデイルムが帰還した頃、エトリア全体は静かになっていた。荷物をまとめて、いよいよ民族大移動の日が刻一刻と迫りつつあった。

「母さんと別れて、寂しくなかったか？」

コルトンは茶化すように言う。意外にも、ロデイルムは落ち着いた様子で答えた。

「いや、寂しくなんかねえよ。鍬くわや鋤すきを手に、一生土いじりなんざごめんだ。俺以外の兄弟は良い子ちゃんが多いし、一人欠けた程度で困ることなんぞない。俺は俺の道に行く。盗賊や王様なんてどうでもいい。邪魔するなら潰す。駄目なら、殺った奴の悪夢として死ぬまでつきまとう。それだけだ」

さすがはロデイルム。さっぱりしてる。感心した様子で見られて、天狗になった。

実際は、ぐずぐずと滞在してた。あくる日、母親にちよつとどうようしかなく口を滑らしたら、優しい母親の形相が鬼へと一変。根性無しのため飯ぐらいに用はない！ 偉そうな態度や言葉は飾りかい！ さつさと出て行けと鍋で尻を引っ叩かれてしまい、周囲にらしくないと言われる形で帰ってきたことを話せるはずがない。

ロデームは伸びかけた鼻を仕舞い込んだ。

こうして、五人揃った。一応、五階層の探索に出向けるが、コルトンは心許なかった。他の四人も同じ思いを抱いてた。後一人、ホープマンズの結成者にして、リーダーでもある彼が帰還しないことには、パーティは完成しない。彼に限らず、他のメンバーもだ。六人が揃ってこそ、ホープマンズという一組が完成するのだ。

しかし、全く情報がない。エドワードの母エウドラの葬儀翌日、弔問のオルレスに尋ねたが、私もわからない。ただ、中小連合へのメッセージ伝達は完了したことだけは分かった。先週は冒険者窓口で会えたが、返ってきたのはわからないの一言だけ。もはや、本人の行方を直接知る誰かから聞く以外に手立てはない。一番は本人が帰還すること。安否はようとして知れない。

往復、計六千キロ以上の旅路は計り知れない。

彼の代わりに、エトウ王賊軍の行軍の情報は大量に知れた。王賊軍は近隣の村々と町、地域に一時的な食糧供給を約束させる代わりに、手出しは一切しない。多くは大軍と空飛ぶ怪獣を見て、戦意を喪失し、素直に提供したが、中には食糧を隠す所、反抗的な所もある。そういう地域は、情け容赦なく叩き潰されて、地図から姿を消した。だが、それだけでは留まらなかった。ときには、予告なく、少数に分けた部隊で奇襲をかけて、交渉や予告なく村や町を焼き払う時もあった。無力な人々にできることといえば、いち早く察して、かつ、敵の大軍の目が及ばぬ遠くまで行くこと。それしかなかった。

一方的な攻撃は経済や営みなどの活気を瞬時に奪い去り、他国との交流も減り、そのせいでエトリアは余計に沈んでいた。

二日後。寒気は相も変わらずだが、風もなく、比較的、陽光な日。遂に民族大移動の第一陣が出発した。本都市周囲に拠点を構えてた冒

険者の半数以上もこれに加わり、各々、故郷への旅路を往く。

残った衛兵たちは、家族と友人たちに別れを告げていた。父と思しき者が幼子を抱いてる。ぺたりと膝を付き、涙を湛えた眼で産まれ育った地を眺める老人。好いた女に思いの丈を語る青年。

ホープマンズ、グラデイウス、ゲンエモンら、ヴァロジヤら、ドナ達、ダルメオとフィリ、レッドユニティ。

見送る側に見知った者もいれば、見送られる側に知った者も多く見られた。パスカル、ダマラス、ティツグロ、ヤルヴィネンは去る方を選んだ。

パスカルも少なからず、人望があり、多くの者と挨拶を交わしてた。「あんたがいなくなるのは寂しいな」とコルトン。

「俺もだよ。まあ、金は十分あるし、懇意にした方達の紹介もあるから、良い機会かもな。もしも……戻れる機会があれば、そんなときは、もう少し続けるよ」

パスカルは、コルトンの近くにいたダルメオとフィリを目敏く見つけたら、いきなりこらと叱った。

「てめえら！ まだ、いたのか。悪い事は言わない。お前らも早く故郷へ帰れ。ここの望みは薄い」

最後の言葉は小さく言った。

「どうしたんだよ？ あんたらしくもない。残るのは自由だろ」

「それもそうだがよう」パスカルはコルトンに耳打ちした。すると、コルトンも二人に帰れと言った。フィリは抗議した。

「ちよつとちよつと、それは酷いでしょう。ダルメオも何か言つてよ」「お二人の気持ちはありがたいですけど、僕らは自分の意思でここに残ると腹を括りました。お互い、大切な片割れ。彼女は二割れを失いました。何ができるかわかりませんが、納得できるまで進むと決めました。僕がフィリと結婚したことは関係ありません」

ダルメオは弟。三つ子の次女フィリは、長男と三女が四階層での対マンティコア防衛戦で落命した。この二人は、互いに失った者を埋めるように傍に寄り合い、傍目から見ても、恋人同然なのは知ってたが、婚約した事実初めて知った。

未熟な頃、パスカルに資金援助をしてもらった付き合いで、密かな婚約の儀の仲人として彼を選んだ。

ダマラスが嫁フィリに付き添い、ティツグロが指輪を運び、ヤルヴィネンが演奏。小さくも、暖かな結婚を最近したらしい。パスカルではなくても、二十代半ばの新婚男女二人が参戦するのを喜ぶ者はいないだろう。しかし、二人の決意は固い。この場で事を荒立てる意味はない。それでも、パスカルとコルトンは多少、説得を試みたが逆に折れた。

パスカルは溜め息を吐き、二人を見据えた。

「良いか。死ぬんじゃないぞ。仲人した直後の葬儀なんぞ、ごめんだぞ。では、達者でな」

「あなた方もお気をつけて」とダルメオ。

四人は大きく手を振り、それきり、振り返らず歩んだ。軍隊バチ狩り専門のハンター四人が去って行った。

ギルド長はじつと腕を組んだまま、傍観してた。近くにいたオルドリッチが話しかけた。

「おやっさん。柄にもなく、寂しいなと思ってるのかい」

「そうかもな。昔のことは知らないが、俺が知り得る限り、現在のエトリアには、最高に腕扱きの冒険者が集ってたと思う。迷宮の深みに到達するのも夢じゃない。夢を託すとか、そんな迷惑なことじゃねえが、俺や多くの馬鹿が追い求めてた物を見つけられる実力者がこんなにも去るのは、惜しい気がしてな」

大移動は三陣に別けて発つ。一陣で大半は陸路を往く。

第二陣は三日後。エトリアでも選りすぐりの知識人・職人・技術者たちを姉妹都市である港に連れて行き、時期を見計らい、出航する。最後の第三陣は、各町村を運営する上で必要最低限に残しておいた者たちを避難させる。ギルド長、シリカ、女将は第三陣である。本来ならば、シリカと女将は第一陣で行く予定であったが、本人たちの強い希望で最後になった。

エクウスの一族も当然、大移動に加わった。彼らにとって、移動は慣れたものであり、速やかにゲルと荷物を畳み、大移動の助力も

行つてた。ここに来て、エトリア人の多くは本当の意味で彼らを見直し、今までのいわれなき非難を詫びて、感謝した。

「あの人が見たら、喜ぶでしょうね」

ジャンベの言葉に、四人は同意した。

数万の人間は丸一日かけて、決戦の場である本都市の高台から遠見して、後列が豆ぐらいにしか見えないほど離れた。今朝まで賑やかだった都市は、しんと静寂した。代わりに、残された兵士たちによる靴の擦れ。接近用、弓、鉄砲、大砲を扱う訓練の音。指導者の怒声に、兵士がおうと応える声が幾重にも木霊する。

三日後の第二陣に見送りはいなかった。何故なら、彼らは第一陣に混ざつて、既に港町へ滞在してた。残つた仕事を片付けたり、荷物をまとめた少数が本都市から去つた。

そのうちにも、賊共来訪の情報は寄せられて、二月か三月の中旬には到達する見込み。第三陣は二月の下旬。遅くても、二月の中旬以内には出発。

残る冒険者たちは探索を打ち切り、世界樹の迷宮における樹海生物の動向監視。衛兵たちの訓練に付き合つた。特に四階層以上に達する冒険者となれば、精鋭数名以上の強さがあり、戦力として大いに期待された。

三日後。第二陣が出発。それに伴い、五百名ほどの人員が各地の国境や空つぽになった町村にゲリラとして配置された。いざとなれば、放火や爆破をしてでも、侵攻を防ぐ。

数百程度だが、またしても、都市部から賑わいが失われた。二月に入り、近隣の国にも慌しい動きが見られた。エピザ・トーティ、メティルリクも自国の民を一時避難させていた。そして、かの軍勢にもたらされる悲報ばかり届く中、にわかにも明るいニュースが入つた。

「二国が増援を出してくれるぞ！ 我が国は決して、見捨てられた訳ではない」

居残る者たちの歓喜が迸る。増援の報が届いて四日後の二月八日に到着。

二月八日の正午前。歓迎のファンファーレと五千名以上に出迎え

られて、上は黄、下は茶で中央に大きな白い菱形が中央に染め抜かれたメテイルリク国の旗。黒、赤、緑、青とカラフルに飾られて、太く赤い剣に繋がる黄色い三日月が目立つエピザ・トーティの旗が西の大門を通る。

エトリア同様、様々な人種で構成されて、土木工事と採掘で鍛えられた体躯を持つメテイルリクの戦士団百名。隊を率いるのは、真つ暗な洞窟の闇が形となって出てきたと思うほど黒い肌の隊長タイロン・パッチュリオ。黒い瞳は研ぎ澄まされて、鍛えられた鋼を連想させる。ディアドルゴ將軍閣下の親戚でもある。

対するエピザ・トーティは、赤髪と金髪の日焼けした白人で固められてた。狩りと農耕で陽に焼けて、不屈な面構えをしてる。なによりも武勇伝を好み、鍛え、戦いに関することを尊ぶ彼らもまた、メテイルリクに引けを取らず立派である。隊長は驚いたことに英雄エキアロモ。見るも赤い毛に覆われた大男であり、ざんばら髪をぎゅつと一つにくぐり、顔は彫刻のように彫りが深く厳めしい。片手で楕円形の刃の形をした槍とも戦斧ともつかぬ変わった形状の長物を携えてた。こちらは、百五十名だった。

オルレスとミルティユーゴ総隊長が各代表二名に歓迎の意を述べた。盛大にかつ、短く済ませた後は、執政院ラーダを会談の場にして、人払いをした。二人は単刀直入に問いかけた。

「して、お二方の本国から、今後、更なる増援の予定はありますか？」とミルティユーゴ。タイロンが先に答えた。

「可能性があると申しとおきましょう。総隊長殿」

「可能性とは、いかに」

「此度は、かつての二国間同士における争いの規模とは違います。敵はあまりにも強大。更に軍を送ったところで、見込みは薄い。故に、決死隊を募り、我らを派遣された。エキアロモ殿も同じでしょう」

エキアロモは顎鬚を撫でて、うむと頷いた。

「我らは言うなれば、担保であり、謝罪でもあるのです。つまりはこういうこと。いざという時には、我らを迎えるために大軍を差し向けるかもしれないが、状況が相当、酷である場合。私を含む集いし勇士百五

十からなる決死隊のみでも、命運尽きるまでお伴します」

誠意の証あかしに最低限の増援を送る。だから、仮にこれ以上の増援が送れないことがあったとしても、許してほしい。

仕方ないことだと、オルレスは自らを説得した。内心、もつと来るのを期待してたので、事情は痛いほど理解できても、微かに裏切られた思いが掠める。

ともあれ、微増であつても、来て頂いただけでも幸い。代表二人には礼を申し上げておいた。

「話は逸れますが、ご子息エキモロノはいかがに」

「あれには、わたくしの任を継がせました。知略はあちらが上。力も私と同等。何年と経たないうちに、私を超えてしまうでしょう。我が子といつても、競い相手の一人。認めたくない気持ちがある反面、嬉しさも隠せないのは、親馬鹿でしような」

ははと、エキアロモは破顔した。厳めしさはどこへやら、屈託のない笑みにつられて、オルレスも微笑んだ。

「失礼」と言つて、タイロンが割り入った。

「エキアロモ殿が申したとおり、私と部下も同意した上で馳せ参じました。また、今この場をお借りして、申し開きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？ オルレス殿」

「是非とも、お聞かせください」

タイロンはひざまずき、弁明した。

「今回の増援の件。このような少数にて、申し訳がない。叶うことならば、大軍を差し向けるが、状況が厳しければ、そちらに派遣した勇士百名でどうか許していただきたい。そして、非常に身勝手な言い分だが、遠方の地に住まわれることになつても、メテイルク国とエトリアの交流が継続することを願います。そのときには、当方、最大限に尽力いたすのを約束します。我が元首からの伝言です、オルレス殿。御返答お願い致します」

すると、エキアロモもひざまずき、タイロンの横に並んで同じことを述べて、ご返答お待ちしておりますと締めた。さてと、オルレスはミルティユーゴの顔を見た。総隊長は二人を見た後、無言でオルレス

に頷いた。

「本来ならば、他二名と相談の上で決めなければならぬことですが、私が責任を以て裁量しましょう。エトリアは、これからも、メティルリク国とエピザ・トーティ国の二国と変わらぬ交流存続を望みます。我らは決して、あなた方に見捨てられたとは思いません。此度の窮地の折、少数の派遣に留めたこと、十分な苦慮の末に出されたのを理解しております。どうか、このことを国王と元首にお伝えくださいませ。それぐらいの猶予は残されてるはず」

二名は深く頭を垂れた。

外で待機してたそれぞれの側近に訳を話し、早馬で、早急に本国へエトリア代表からの返事を伝えるに向かった。

これ以上の援軍が望み薄なのは、士気に関わると伏せておくことにした。援軍のあてが無いと知れば、たちどころに戦意を失う。逆に、味方が来ると知った籠城は、たちどころに難攻不落の要塞となり、いかに少数や弱小の手勢が守っていたとしても、簡単には陥落しない。しばらくは、来るだろうと思わせておく。エキアロモとタイロンもそのことは理解しており、部下には、援軍の有無については迂闊に話さないよう厳命した。

すっかり寂れた空気の中、相も変わらず明るい雰囲気の店が少なからずあった。金鹿の酒場だ。

以前は殆ど冒険者で占められてたが、今、過半数は兵士たちで埋まった。

本都市や近くに住まう者ならいざ知らず、離れた町村に住まう事情を知らない者は女将をくどいたりして、周りの冒険者や兵士から青痣以上の物を貰い、それを見た者たちはこの酒場での礼儀を身に付けた。

「勇敢だねえ、女将さんは。おらの知る女ではかか並に肝っ玉で、容姿はおらが知る中で一番上だね」

国境沿いの村で農作業をしたという青年兵士の言葉に、女将は笑顔で応えた。

「ありがとう。でもね、私はそんなに勇敢じゃないわ。自分の住み慣れた場所に少しでも長くいたい。それだけよ。武器を持って戦おうというあなたには敵わないわ」

「んだども、周りに流されず自分で残ろうとしただけでも、大したもんさあ」

ふふと笑みを絶やさず、女将は客の対応をした。本当に、あとどれくらい、あの人の笑顔を見てられるか。コルトンはロデイルと薄めた酒をちびちびすすりながら、そう思った。

翌日。シリカ商店で磨くよう頼んでおいた装備一式を取りに行った。店では、自分以外に沢山の受け取り待ちの者が多くいた。

エトリアの兵士は戦闘以外にも、鍛冶や建築。料理や化学など、一定の分野における技術が求められてた。大半は建築系だが、鍛冶や料理を習う者もいる。鍛冶屋や武器屋を頼らずとも、自ら、ある程度の鑄造や

製錬はできるのだが、やはり、より専門的な技術者が良いと、腕の良い者が集うシリカ商店など、冒険者御用達卸売店に頼む者もいた。

コルトンはヴァロジャとすれ違った。一目でわかる巨大な体躯といかつい顔に、称賛の眼差しを向ける者もいた。彼と一味が残った理由はただ一つ、戦うため。戦場で勝ち残る。駄目なら、名誉ある死を。そこに一切の迷いは微塵もなかった。

他に何人かと会い、最後にコウシチと出会った。彼は鍛え直した二本の太刀を腰帯に差した。鞘をよく見たら、鯉口の刃にあたる部分から鞘の上部付近にかけて一筋の溝があり、研ぎ澄まされた白刃がきらりと光りを反射した。ゲンエモンの刀には見られたが、コウシチの刀には無かった。コルトンの視線に気付いたコウシチが教えた。

「認められたのだよ。私はもう立派に跡を継げる。冒険時以外にも、常に流派の跡継ぎとわかるよう、鞘から抜刀しやすくするため、このようにしたのだ。まあ、この刀もいずれ、実戦で使う日が近いだろうな」

「ということとは、冒険用とそうじゃない刀があったのか？」

「無論だ。戦闘においては致し方なく使ってたが、それ以前は、それが

し、正式に弧自戦流を継いだ訳ではないから、こういう鞘を使わなかった」

「そうか。しかし、まあ、なんだ。恩義ある師が残るからといって、お前さん残る必要はあったのか」

「あの人には返せぬ借りが山ほどある。だが、仮に師がエトリアから去ったとしても、拙者は残るよ。仇のためにな。既に聞いておろうが、それがしを育ててくれた二親は賊によって殺された。血は繋がっておらぬが、我が子のように可愛がってくれた。そのときの賊と、これから来る者たちに関係した者がいるか定かではないが、同じ穴の貉。やってる事は同類。逃げる道理はない。同じ目に遭った者らの無念を晴らしたい。今こそ、この鍛え上げた心身を以てして、幼き日の無力と後悔に決別できる日が来た。それがしはそう思うておる」

他の面子は知らないけど、彼は絶対に思うところがあり、エトリアに残ったのでは。

コウシチの過去は掻い摘んで知ってたが、そんな思いを抱いていたのかと、三白眼で無言で重圧を与えがちであり、人を寄せ付けにくい侍の意外な一面を知った。

考えてみれば、グラディウスと付き合いがあるといっても、癖が強い面はあるものの、自ら他者によく話しかけるオルドリッチ、ベルナルド、カールロの三人が主で、シシヨーとキアーラ、コウシチとはそんなに会話した記憶がない。基本、喋らないからだ。

「何を考えておる」

「よく考えたら、俺はお前さんとあんまり話したことがなかったなあ、て。それが急に、こんな喋ってくれて、何故だ」

「そうだな。強いて言えば、お主の口から師の言葉が伝えられたからな。師が信じて、内密にされてることを教えた人物だからかな。一つ、良い事を教えておこう。さきに語ったこと、師にも言っておらぬ。もつとも、あの方は見抜いておられるようだが」

「それじゃあ、秘密だとはいえないな」

確かにと言って、コウシチは微かに口元を綻ばせた。

それから、大体三十分待ち、やっとこさシリカから受け取れた。受

け取った際、シリカにこつそりと耳打ちされた。

「明日の夕方、ロデイル君を連れて、店の裏に来て。四回ノックをして、『良き日和が訪れますように』と合言葉も忘れず」

なにがなんだかわからないが、背と腕に一杯の物を背負って宿に戻った。

次の日の夕方。コルトンはロデイルと共に、シリカ商店の裏に周り、四回ノックした後、合言葉を告げた。シリカの祖父がドアを開けて、二人を招き入れた。裏口の玄関は結構広い。鉄粉や泥、煤で汚れた跡が沢山ある。道具は片付けられて、隅っこには雑にぶった切られた細い丸太が何本も転がり、真ん中の台には同じ太さの丸太が置かれてる。

「一体なんなのですか？ 別れの挨拶を告げるためだけとは思えない」

「そこの青いの、ロデイルだな？」

ロデイルはおうと返した。

「お前さんに渡したい物があるんだ。これをな」

黒い鞘に納められた長剣を見て、思わず目を丸くした。ロデイルは何かわからず、首を傾げた。

「なんだこれ」

「馬鹿！ ドヴェルグの魔剣だよ。あの骸骨みたいなドラゴンの骨を加工して作られた剣。店にある最高級品の一つだ」

ついでに値段も教えたら、ロデイルは目を剥いて剣を注視した。ロデイルはそのままにしておいて、コルトンは訳を尋ねた。

「奴に譲るといいますか」

「あほう。ただでやれるか。半額近くで五万エン貰う。要らないなら、黙って出て行け。要るといふのなら、やる。利子はつけない。すぐに返せとも言わない。金は戦いが終わった後、じっくりと返してくれば良い。要らなければ、例え壊れててもいい。現物を返してくれたら良い。もしも、勝って功績を挙げたのなら、祝いにただでやる。悪い条件じゃあるまい」

「頑固でけち臭いあなたにしては、珍しいな」

「けつ！一言余計だ。どうせ、国が無くなれば、商売上がった。俺も長らくこの地に留まる人間として、何かしたいが、俺には戦う術や力もない。できるのは、腕利きの冒険者や兵士に武器を提供する。そんだけ。おめおめと敵に高価な戦利品を与えるのが嫌というのもあるがな」

シリカ祖父はぼけつとするロデイムにどうすると聞いた。はつと目覚めたロデイムは、喜んでいただくぜと答えた。

「そうか。早速だが、物は試しに俺の前でそれを抜いて、あれを斬ってみてくれ」

試し切りというわけか。隅にある丸太の意味もわかった。ロデイムは、すらりと刀身を抜いた。真ん中に溝が彫られた両刃の剣。溝と波紋は黒く塗られて、切っ先と刃はとてつもなくエッジが効いている。よく伐れそうだ。ピュツと振るう。丸太の上半分がずると動き、斜め右にごろりとずれ落ちた。ロデイムの力と技。剣の軽さと堅さ。鋭い切れ味も加わり、見事にすっぱりと切断された。

「こいつはすげえな。軽すぎず重すぎず、手にも馴染んで、振れば正に風も切れそうだ」

シリカ祖父は鼻を高くした。

「そうだろう。うちの職人技と質の良い材料があれば、ほら、このとおりよ。じゃ、一先ずお前に譲る」

へへと自慢気にコルトンを見て、ロデイムは剣を鞘に納めた。

「コルトンといったな。悪いがお前さんにやれる物はねえ。だけど、昨日、修繕した鎧や盾を見たか。ほぼ新品同様にしておいた。それで勘弁してもらいたい」

道理で、修繕した割りには、いやに綺麗すぎると思った。ロデイムとは役割が違い、新品に等しい状態にもらったので、そこは拘らなかつた。

「あそこまで綺麗にしてもらえただけで、俺は十分だよ。こいつとは役目も違うしな」

二人で改まって礼を述べて、二人は裏口を出た。他に誰が貰ったか判るかなと思ひ、適当に人が集まる箇所を散策したら、わかりやすい

装飾のおかげもあり、一目で判明した。

まず、ゲンエモンは八葉七福。鞘と柄頭に幸運の証である緑の八葉紋が彫られた刀。かつて、ホープマンズが撃破した怪物巨大蟻クイーンアントから入手した、純正の鉱物に等しい二対の頑丈な顎を素材に精錬された業物。コルトンとロディムを見たら、感謝するぞと言いたげに刀を掲げた。

他、ベルナルドは鞭。カールロは五階層の青熊と怪獣鱔を素材にした弓。カースメーカーやアルケミストたちには、新調した杖や棒。鎚を持つ者もいた。ヴァロジヤはアーマービーストなど、やはり五階層で堅い殻を持つ生物を素材にした斧を背に抱えて、アデラはロディムと同じ、ドヴェルグの魔剣をじっくりと眺めてた。アデラは別の店から譲られた物だった。証拠に「ロイドズ素材精製専門店」の頭文字である三角に囲まれた“L”マークがある。衛兵たちにも、ちらほらと強力な装備を持つ者が見られた。

シリカ商店を含む、エトリアの樹海生物素材取扱の認可を受けた五店舗が協力しあい、自店を御贖員にしてくれる冒険者や兵士の中でも、これと思える人物に出来の良い物を無償で提供してた。渡し方は様々だが、条件は五店舗でも年長者であるシリカ祖父が中心となり決められた。

二国からの増援部隊が到着して三日後。二国からの情報伝達員がそれぞれ報告をして、侵略軍の状況を報せた。エトウ軍はエトリアが近づくにつれて行軍速度が増してゆき、昨夜未明、メテイルクの国境に到達した可能性があるとの報せは矢火の勢いで本都市守備隊、国境警備隊と各町村付近に隠れたゲリラに伝えられた。いよいよ、本土決戦が目前に迫る。大方の予想では、早くで一週間。遅くとも、二週間以内には確実に到達する見方が立てられた。

この一報が来た頃、世界樹の迷宮への立ち入りが禁じられた。日に日に数が増して、もはや、五人少数精鋭で立ち向かうのは不可能とされた。バリケードを使って閉鎖もした。大量の土砂と瓦礫、反り返した棒を埋めて、樹海生物の地上進出を阻む。

とうとう、ギルド長。シリカ。サクヤ女将と別れる日が訪れた。

兵士たちも手伝い、第三陣の避難者らの荷物が大急ぎでまとめられた。

暗闇での移動は危険が伴うため、翌日、陽が昇り次第、即座に出発する。エトリア一の富豪、アウルム家も船出の準備を整えた。

御令嬢であるアルブムは、出立前に、あの三人を呼んでほしいと執事に伝えた。

「私が新たに見た予知夢の意味。私を呪い、そして救ってくれたカースメーカーの御三名ならわかるはず」

第二陣が出発した日から、降雪の日が多く、次の日も薄暗い雪空の中、出発した。厚く服を着込み、最後の移動となる千近い第三陣が雪に足を取られつつ、名残惜しげに本都市から離れてゆく。

ことに酒場の女将には、多くの者たちが寂しげな彼女を見送った。サクヤは皆の恋であり、憧れで、親しき姉にして、良き母のような相談者でもあった。短い付き合いだが、彼女の人柄に惹かれて、店に行った二国の戦士たちの何人かも、女将に別れを告げてた。彼女は、特に親しいシリカ商店の者たちと同行していた。

「女将さんは僕らが守るから安心してね！」シリカが見送る者たちに元氣よく叫んだ。

ギルド長は無言で歩んだ。兵士や冒険者の特に親しい者たちと短く挨拶をすました。門前にいたゲンエモンと会うと、立ち止まった。

「また、酒を酌み交わそうな」

「お前さんのように、がばがばとは飲めない。この年だと、薄めた物をちびりと飲むのが限界だ。それよりも、先に行ったアヤネと会えたら、頼んだぞ」

ギルド長は舌打ちした。

「冗談じゃない。その刀は飾りか。生きてる限りは、てめえでやれ……死ぬなよ」

それ以上、話はせず、じつと互いを見つめたら、ギルド長は背を向けた。

二人の様子をたまたま近くで見てたジャンベは、老いた男同士の友情とは深く、深いなと思った。

第三陣の移民が見えなくなると、本都市から完全に火が消えた。ああ、そうだ。自分たちは離れられない。空を覆い尽くす恐るべき怪物を連れた軍勢と相対しなければならぬ。色んな思いが込められた沈黙を吹き飛ばすように、角笛とファンファーレが吹かれて、ミルティユーゴ総隊長が外壁の上上がった。総隊長に衆目が集まる。「みな、聞くのだ。今より一週間から二週間以内には、必ず奴らがやってくる。エトリア……いや、連合国一帯において、最大規模の戦闘を行う事になる。我らはいまこそ、人種や民族の違いを乗り越え、一つの目的のもとに真の意味で団結する」

一息、区切りを入れて、衆目一人一人を覗くように見回す。

「諸君らの目に、いずれ私をも見舞うであろう恐怖が宿っている。勇気がくじけて、盾は砕かれ、友を見捨て、歴史に幕を閉ざす日が来るかもしれない。だがしかし、それは今ではない！」

恐れを怒りに変えて、戦うのだ!! 我々は戦わずして絶滅はしない! 我々は勝ち残り! 生き残り続ける!

エトリアよ! メテイルリクよ! エピザ・トーティの戦士らよ! 「ミルティユーゴは剣を抜き、高々と天へ向かって突き上げた。「己が信念がため。かけがえのない全てのものに懸けて踏みとどまって戦うのだ、世界樹に集いし強者たちよ!」

一度、消えかけた火に油が注がれて、盛大に燃える。

雪をも飛ばしかねない怒号に近い鬨が木霊し、みな、剣や槍。斧。弓。各々、武器を片手で上げて、咆哮した。

声の振動は近辺の雪を震わせ、屋根からどどどと雪が落ちた。見事な演説だ。武器を持たないオルレスは、ささやかな拍手を送った。

外壁から降りたミルティユーゴとオルレスは、今後について、話し合った。

「私は最期まで残り、自ら一兵卒になろうとも、戦います。あなたはどうされるおつもりで」

「私はご覧の通り、剣よりペンを振るうのが得意です。本都市の中にはおれません。私ができることといえば、決戦の場であるマター・エトリアから安全と思える地まで離れて、そこでしばらくは、戦況を見

届けようかと思えます。もちろん、危なければ逃げますけど。敵に捕えられたり、招待される形ではなく。堂々と大手を振って、帰れることを切に願います」

「わたしも貴方の言ったことが実現できるよう、全力で戦う。勝敗は定かではありませんが、我らの姿を記録してくれる方がいるのは、なによりのこと。我らの勇姿、しかと心に刻んでください」

オルレスとの対話後、ミルティユーゴは軍の配置と動きをどうするか、改めて会議を開いた。各部隊の隊長と相談した結果、兵士の配置は以下とした。

エトリア本都市守護をする四千余名の内、三八〇〇名は外壁を担当。二百名は内壁の警固に当たり、状況によっては、最低でも五十名を残し、百五十名を外壁の防衛に回す。増援した二国の戦士は樹海生物との戦闘経験が無いため、メティルリクは五十に別けて、北南。エピザ軍百五十名は、二五名ずつを南北に配し、百名は激戦が予想される西側に配す。エキアロモとタイロンは同意した。

各方角の責任者も決めた。西側はミルティユーゴとエキアロモ。北は国境沿いの地区隊長が就き、南は中間地点担当の地区隊長が司令に抜擢。タイロンは基本、北としつつ、自ら伝令となり、南北を馬で行き交うことにした。

最後に冒険者についてだが、残った三五二名の内、二百名以上は内壁の守備に就いてもらい、後は各所に就いてもらうので同意していた。だくことになった。隊長の一人が手を挙げた。

「階層にもよりますが、三階層以上に挑める冒険者ともなれば、相当な手練れ。しかしながら、彼らは我が強い者も多い。統率を乱す恐れもあります」

「理由は様々だが、彼らもまた、この国のために残ってくれたのだ。耳を傾けないことはないだろう。それに、彼らを率いる隊長格は既に決めている。ゲンエモンだ。彼の言うことになれば、冒険者は耳を貸すだろう。」

ついで、皆は存しておろうが、彼らの中には、アルケミストやカーズメーカーと呼ばれる、不思議な力を司る者たちがいる。我らの軍に

も、そういう力を扱える者はいるが、彼らと比べたら、実力は歴然。敵の中にも、少なからず、そういった力を持つ輩がいるはず。ことにかの軍勢の親玉は、呪術に長けていると聞く。人智を超えた相手と戦い慣れた協力者がいるのは、心強いと思わないか」

「ご最もでしたと言い、彼は引き下がった。」

「会議は終了。」

ミルティユーゴはゲンエモンを呼び出し、冒険者を率いてもらいたいと頼んだ。

「受け賜りました。ですが、わたくしめは、彼らを率いる気はありません。貴方が私に頼まれたように、私もまた、彼らへ一緒に戦ってくれと頼みます」

ゲンエモンは内壁付近にある間借りした家へと戻る道中、グラディウススの一人、キアラに呼び止められた。

「ゲンさん。不躰ながら、折り入って頼みがあります。その刀を貸して頂けませんか」

「構わぬと言いたいが、訳を話してくれぬか」

キアラは訳を語った。

アウルム家の御令嬢、白き姫アルバムの依頼で偶然にも、エトウがかけたと思しき呪いを解いたこと。エトリア滅亡の危機に関する悪夢。そして、出立前のアルバムから、新たに見た予知夢を伝えられた。「今までに見たことがない予知夢だとおっしゃってました。滅亡に瀕したとき、黒い剣と光る剣が衝突しあい、灰色に包まれた。因みに、光る剣の背後には、フードを被る何者かが応援するように手をかざしてた。白か黒か。良いのか悪いのかわからない。このような予知夢を見た記録は存在しない。初めてのことだと」

「それで、君らはなんと、結論を出したのかね」

「アルバムの話では、白い剣はさぞ切れ味の良い剣に見えた。ただ、片刃か両刃までは判別できなかった。最近、冒険者専門店が武器を配り出した日、この予知夢を出立する今日まで見えたと言っていました。私たちは三人は話し合い、街に残ったカースメーカーを集めて、五店舗から譲られた業物にある力を込めることにしました」

キアラは、エリカから聞いたことを伝えた。密かに同職の者たちと連絡を取り合った結果、判明した事実があった。エトウなる者の素性は不明だが、現役の男性カースメーカーから聞けた話で、禁忌を犯し、追い出された者がいた。大変、優れた才能の持ち主であったが、術のために罪も無い人間を殺めた。幻とされる呪いの竜を呼び出す術に興味を抱き、強大な力を得るための外法にも御執着してた。

「つまり、エトウなる者は、人間以上の力を身に付けたのか」

「ご明察です。正確には、人間の意思を継いだ別のものかも。彼の話では、召喚。自分以外の人間を生け贄に捧げて、その時の恨みと苦痛を糧に力を得る方法があった。外法とされて、極一部に口伝で語られてるのは知ってましたが、彼は独自で見つけたのでしょうか。だけど、代償もある。失敗すれば、数多の恨みつらみに憑り殺されて、その身を操り、自ら本人になりきり、その者に備わった力を増幅させて、善かれ悪しかれ、大勢の人間を巻き添えにしてしまうこともある」

ゲンエモンはうむと頷いた。

「あまりにも突然で、本音を明かせば、にわかには信じがたい。ただ、そのような術は捨てられるべきだろう」

「おっしゃるとおり。昔、我らカースメーカーと呼ばれる呪術を扱う者に短命な者が多かったのは、正に自業自得。強くはなりたくないけど、そんな唾棄すべき方法は願ひ下げ。自らを律してこそ、真の強さが得られる。話を戻せば、彼が人間であるにしろ、ないにしろ。彼の翼竜すら従える力の源である、己が身に宿したおぞましい術を取り払わなければならぬ」

「斬るだけでは駄目なのか」

「彼がただの強い人間であったとしても、そこまで強烈な力を宿した者を殺めたら、余波というか呪いが漏れて、悪影響があるかもしれない。彼が人間でなければ、斬るだけでは殺せない。だから、我らは話し合い、予知夢を信じて、対抗策を打ち出しました。五店舗から業物を授けられた者たちの武器に我らの力を結集し、術を解除し、同時に呪いを取り払う秘術をかけさせてもらいたい。お願いです、ゲンさん。私たちを信じてください」

キアーラはひざまずき、深々と頭を下げた。

「面を上げい、キアーラ。あいわかった。わしの刀、主らに授けよう。しかし、一つ聞くが、肝心の対象を斬る前に別の者を斬ってしまうことがあれば、大丈夫なのか」

「そこはご安心を。ちやんと考えております。剣を収める鞘に細工をします。剣を抜いて、少しの間なら効果は持続し、収めてまた抜けば、効果は再び発揮されます。長く抜きすぎたり、鞘が傷付いたりすれば、効果は消えてなくなりますけど。もしも、事がすんだら、術は消します」

「それを聞いて、安心した。わしからも、他を説得にあたろう。では、キアーラ。大切に預かっておくれ」

キアーラはもう一度、頭を下げて、刀をしかと受け取った。ずんと刀の重さが両手にくる。キアーラは体をもじらせて、顔を背けた。やがて、ゲンエモンの瞳をじつと覗き、お礼を述べた。

「あの、ありがとうございます。こんな、突拍子もない話を信じて、武器を預けてもらえて」

「正直、今の話を全ては信じきれてない。ただな、キアーラ。お前さんやカースメーカーたちのなんとかしたい素直な思いと熱意は信じられる。だから、預ける。ほれ、行くのだ」

二人を知らない者が見たら、祖父と孫娘に見えたかもしれない。仲間内でも滅多に見せない笑みを浮かべて、キアーラは刀を携えて、本都市のいずこへと向かう。

ゲンエモンは空を見上げて、雪は止まないか。遠方の地に、たった一人で赴いた愛弟子が帰還しないかと思う。

三七話 大いなる影

真つ黒い夜空と等しく、地上はうごめくもので黒く被い尽くされた。

何千もの松明がそれらを照らし、金属が光を反射する。

メテイルリクとエトリア国境付近にて、大規模な軍勢が来襲。樹海生物対策とかつての隣国との内紛による飛び火を防ぐための深い空堀は埋められたり、橋をかけられて、次々と渡ってくる。

門と柵の内側から、警備隊が大軍を前に懸命な抵抗を試みる。矢を射て、鉄砲を撃ち、火薬を張子の紙で包んだ爆弾を投げ付けて応戦するものの、敵の勢いは止められない。死体や負傷者がその場にいないかのような足取りで、前進する。

多勢に無勢。それでも、踏み止まろうとする警備隊に絶望がもたらされた。

悲鳴が聞こえたからだ。それも、普通ではない。男や女、子供や老人。動物。ありとあらゆる生ける者たちの苦痛と悲鳴が混じった、正に聞くに耐えられないもの。地獄に堕ちた何万人分者もの声を凝縮したかのような総毛立つおぞましい咆哮が上空の巨大な影から発せられた。体中に声の振動がぶるぶると伝わる。正確には、一番大きなワイヴァーンを一人で操るかの人から発せられたのだが、そんなのはどうでもよかった。凄まじい絶叫を聞くや、メテイルリク側の国境を守る一六〇からなる警備隊員の勇気は消し飛び、ただただ我先にと逃げける。

上官と兵士は十五頭の馬に飛び乗ろうとしたが、馬たちは恐れでいなくなき、暴れて、背に乗ることができず、馬を捨て置いて徒歩でゆく。無下にするものかと、勇気が残っていた十数名が決死隊となり、数十メートル離れて掘った穴に蓋をして隠しておいた火薬を詰めた樽の導火線に引火。

たつぷり油で浸し、燃えやすい火薬を厚い皮で包んだ導火線はしゆるしゆると火花を散らし、爆発。

血眼で警備隊を殺しにかかった前列の部隊は瞬く間に、火と爆風で

吹き飛ばされて、後方の列に血と肉の雨を浴びせた。

しかし、爆炎の煙がたちこめてやまぬうちに、すぐにまた、侵攻を開始した。置き去りにされた馬たちの叫びが微かに届いた。

そして、撤退する国境警備隊の上空を覆う黒い影あり。雲から洩れた明かりすら消し去り、互いの姿が見えなくなる。羽ばたきによる強い風が表層の雪を飛ばし、軽い地吹雪を起こす。

「影だー。翼が生えた蛇が襲ってくるぞー！」

言うが早いか。叩きつける音がしたと思いきや、影が晴れて、何名もの悲鳴が上空を漂う大いなる影から木霊する。離着陸のときに、翼で弾かれた者もいた。

ぐつたりと身を伏して、体が地面にめり込んでる。鉤爪でさらわれた者たちは、ぱっと放された。ぱらぱらと黒い塵芥ちりあくたが捨てられる。押し寄せる軍勢の中に落ちて、それっきり、悲鳴は途絶えた。

一方。広範囲に轟いたおぞましい悲鳴と爆発音は、各町村や森に隠れた伏兵に、いよいよ恐るべき者たちが来訪してきたことを告げた。

敵軍勢の来襲をただちに本隊が駐屯する本都市へ通達せよ。手筈通り、早馬に乗った数名が本都市へと急行。

エトウ王賊軍は勢いよく歩を進めながら、突如、エトウという単語が繰り返して叫ばれた。

繰り返すたびにどんどんと大きくなり、彼らの気持ちも昂つてくる。

気のせいかな、歩も速まり、撤退する警備隊との距離を縮めてゆく。

国境警備隊はわざと町村をとおる。伏兵に期待するも、必死の抵抗も虚しく、伏兵たちは次から次へと黒い波に吞まれてしまう。

国境警備隊が通らなかつたほうにいる者たちは、少数を敵軍の斥候に向かわせて、他はしばらく待機とした。

「このまま、決戦の場と化す本都市に向かうのは危険。それよりも、安全と思える場所において、敵の穴を探り、本隊に反撃の機会を与える隙を作るのだ」

国境警備隊は死にもの狂いで速度を上げた。敵は大軍故に、思うように動けないこともあり、なんとか振り切れそうである。警備隊の任

に就き、決死隊にも加わり、いまだ無傷なナザルは、警備隊長に妙で
すなと言った。

「我らを殺すことだけが目的なら、それこそ、あの忌まわしい化け物
か。弓や鉄砲でも使えば済む話。何故、使わぬのでしょうか」

「我らを本都市の前まで案内した後にも、見せしめとして眼前でな
ぶり殺しにするためかもな。自分達の強さと恐ろしさを知らしめる
ために」

ならば、踏みとどまって抵抗しようかと進言する前に、口を閉ざ
した。

閉じぎるをえなかった。上空から、またしても絶叫が聞こえたから
だ。一気に恐れが全身を駆け巡り、足が敵とは反対方向に向かわせ
る。ナザルと警備隊長も微かに残された勇気が無くなり、ひたすら、
本都市を目指して懸命に駆ける。

四頭のワイヴァーンは一つに合わさり、国境警備隊を悠々と追いか
ける。

ジャンベはがばつと毛布を払い、起きた。冷や汗が流れてる。

エトリア本都市にまで聞こえる距離ではないが、横向きで耳元を枕
に付けてたジャンベの耳には、ほんの僅かだが、咆哮による振動が達
した気がした。

始めは空耳だと思い、しばらくは無理に眠ろうとしたが、耳にこび
りつく。何ができるわけでもなく、確信もないが、いてもたってもい
られない。

冷たい夜気で身を縮こませる。さつさと厚着とマントを羽織り、寝
ぼけまなこで、なんだーと両目を擦りながら起きるコルトンにトイレ
行ってきましたとだけ言って、長鳴鶏の館から飛び出す。

街を歩く衛兵をかわして、多くの者に踏み荒らされたぬかるんだ芝
生があったところに来る。外壁と街の間にある芝生に建てられた宿
舎用や武器を収めた幾つもの大テントの間を抜けて、ジャンベはアジ
ロナ外壁を登った。外壁には多くの見張りが立ち、籠松明かごたいまつの火が仄か
に顔を照らし、温かさをもたらす。

衛兵は誰何をしなかった。ジャンベの顔は見慣れてるからだ。火に寄り添いながら遠くを見るジャンベに、声をかける二人がいた。カール口とベルナルドだ。二人は内壁ではなく、外壁担当であった。ベルナルドが話しかける。

「珍しいね。見張りを交代してくれるのかい」

「申し訳ありませんが、違います。ただ、胸騒ぎがしたのです。声が聞こえたような気がして。普通の声じゃないんです。なんとさえいえばよろしいでしょうか。僕はその声を聞いて、気持ち良い眠りが一変に覚めてしまい、怖くなつて、確かめずにいられなくなつたのです。何か異変はありませんでしたか」

「ある」カール口が答えた。「恐らく、メテイルリクの国境側だろうか。爆発音と奇妙な声のようなものが微かに聞こえた。下をご覧、そろそろ騒がしくなるだろう」

カール口の言う通り、外壁より内側では、テントと街の建物を間借りして寝泊まりしてる兵士たちのざわめきがある。何時間と経たないうちに、兵士達が集結するだろう。ジャンベは遠くを見ながら、話した。

「お二人の動機は聞きませんが、怖くはないのですか」

「あるとしたら、拷問は嫌だね。すばつとやられるか、ぐさつとやられた方が嬉しいね」とベルナルド。

「今は語れないが、俺の先祖は昔、あるものから逃げて、不名誉を背負った。戦いや狩りから、使命を帯びて退いたならまだしも、先祖は恐怖に負けて逃げた。俺は俺と家族の名誉のため、先祖が逃げ出したほどの獲物を狩りにエトリアへ来た。あれらと戦うことは関係ないが、逃げ出せば、先祖に加えて俺の不名誉まで伝えられる。なにより、こいつとあいつらを見捨てて、一人で逃げたくない。そういう君は、なんのために戦うんだ」

ジャンベは俯き、難しい問題に対する答えを逆に聞きたげだった。「僕の第二の家族と故郷がここにいるから。ただ、わからないのです。僕は何故、戦うのだろうか。僕はあなた方二人や、自身の所属するパーティの人たちほど、武勇に秀でてるわけではありません。多少、

体力はあり、武術に覚えはあるものの、僕ぐらいなら、掃いて捨てるほどいる。では、僕の役割はなんだろうか。

「もしも、この戦でエトリアに勝利があつたとしても、僕に取り立てた勲いさしはありません。人を助けるといつても、お手伝いや音楽で慰めるぐらい。今後、冒険を続けても、僕自身はサポートして付いて行くだけで、特別、大きな相手を倒す手柄はないでしょう。最近ですか。僕の冒険者バード以外での役割はきつと、見聞きし、覚えることにあるのだな、と、そう考えるときがあります。僕はエドワードさんや他の方達の活躍を記憶して、人々に正しく伝える役割があるのではないか。そして、そのとき感じた喜びや悲しみを音楽として遺す。だから、僕に勲しは要らないし、欲しても得られない。とまあ、長々と述べましたが、どんな残酷な相手であれ、僕は人を殺めるのを躊躇する言い訳をしているだけなのかもしれません。モリビトの時も、武器を向けられなかった」

「俺は誰彼に教えられるほど偉くもないし、ゲンさんのように人が出てくるわけでもないが、君の言を借りれば、人には役割がある。そして、エドワードに言われたことがあるかもしれないが、人を殺すうんぬんに勇気という言葉を当てはめてはいけない。俺やベルナルドは戦うだけだが、君は傷付いた人の介抱をして、戦いで病んだ人の心を音楽で癒し、君のバードとしての才能で冒険をサポートする。君には俺と違う方法で、君にできることが沢山あるじゃないか。確かに、君の性格的にも職的にも直接手柄は立てられないが、君の助けがあつたことを決して無視はしないはず。英雄や偉人と呼ばれる者たちが必ずしも、武勲を挙げた者とは限らない。何かを発見した、発明した、君みたいに良き歌や音楽を遺した者たちもいる。これ以上、難しいことは言えないが、それで良いじゃないか」

ベルナルドはひゅーと口笛を吹いた。

「えらく難しく良いこと言うねー。あんたがそこまで饒舌に言うとは思わなかった」

「あなたは仲間が残るからですか」

「私からも聞いておこうと思うのは、殊勝だね。だけど、私は特にない

よ。底が浅い人間だからね。スリルを求めてるのだよ。命を懸けて賭けるとき、生きてるのを実感する。つまるところ、私はどこか普通の人以上にここが壊れるてるのだろう」

自らの頭をとんとんと叩き、ははと笑うベルナルドを、ジャンベは驚き、この人らしいと呆れた様子で見た。多くは無いが、誰もが平穏を求めるわけではない。こういうのに生き甲斐を見出す人間がいるのも当然だろう。

ベルナルドはぴたりと笑うのを止めて、西南の方角を睨んだ。ジャンベ、カールロ、見張りの者たちも西南を見つめた。音が聞こえる。ひとつやふたつではない、沢山の角笛と喇叭。戦太鼓の音が木霊し、西南の空からけだものと思しき咆哮もかすかに届く。

ベルナルドはジャンベの肩を押した。

「君は戦うのが仕事じゃないと言ったね。では、ここから離れた方がいい。君の担当はここではないしね。距離と聞いた人数からして、後二時間か三時間と言ったところか。ゆっくり行けば、半日なのに、觀光する気もないのかね」

「そうですね。だけど、しばらくはここで、成り行きを見守らせてください」

時は過ぎていく。にわかには明るくなる。久々に太陽が顔を出すようだ。それにつれて、軍勢が上げる音はいやましてゆき、遠方の処々方々から敵の軍容が迫りつつあるのが目視できる。西側、メティルリクやエピザ・トーテイなど隣国との主要な道であり、肥沃で広大な草原地帯で農地でもある。広沃ヶ原は踏み荒らされた。

警鐘の鐘が鳴らされる。テントと街の家や屋敷から、慌しく準備をする兵士達の音がする。

更に時が過ぎて、赤い夕陽を思わせる陽が昇り、辺り一面の降雪を朱に染める。その頃には、不要と思われたテントは畳まれて、続々と兵士たちが集結してきた。

この景色は既に血が流れたか。これから、血が流れることを示してるのか。ジャンベはそう思った。

敵軍を先行して行く隊があった。百を超える部隊であり、遠くから

でも、疲れて、足並みを大きく乱してるのがわかる。あの部隊は何かがおかしい。歩哨たちが叫ぶ。

「国境警備隊の連中だ！ 追いつかれそうだぞ！」

外壁に立つ者たちは警備隊の退却を目にすることができた。小さな群れが幾つか算を乱してやって来る。無我夢中で先陣を走る者もいる。

カールロが矢筒から矢を抜き、弓の弦にかけた。ジャンベは、ベルナルドの方に聞いた。

「離れてでも攻撃できる武器を何故、使わないのでしょうか」

「見せしめのためかもな。獲物を動き回らせて、疲れたところを仕留める。狩りの常識だ」

外壁側のざわめきも大きくなる。いよいよ、戦が目前まで迫ったことを改めて実感した。おいと、外壁の階段を駆けながら、コルトンが来る。少し怒った様子だ。

「こら、ジャンベ。なにがトイレだ、嘘つくんじゃない！ お前の持ち場はここじゃない。内壁の守護及び、バードとしてのサポートや負傷者の介抱と運搬がお前の役目だろう。話は持ち場に行く最中で話してもらおう。ほら、行くぞ」

ではと、ジャンベは二人に頭を下げて、コルトンと共に行った。カースメーカーの者たちともすれ違ったが、特に疑問は抱かなかった。

ベルナルドとカールロは、退却部隊の様子を見続けた。退却部隊はどンドンと距離を詰められた。雲の暗がりから、太陽の光を消す四つの影が出現した。ワイヴァーンだ！ エトリアの守備隊は驚愕と畏怖の念を込めて、太陽を遮ろうとする四つの影を注視した。

そして、最後まで抵抗を試みようとした国境警備隊を即座に退却へと向かわせた、ジャンベが聞いたおぞましい咆哮が発せられたのを合図に、退却する部隊への攻撃が開始された。隙間を縫い、小規模な騎馬隊が疾駆する。長槍を持った手強そうな軽装歩兵が躍り出る。世界樹の迷宮にいる樹海生物、地上を徘徊する“魔物”と呼ばれたりする通常の生物とは異なる外見や力を持った怪物たちが風のように寄

せて襲いかかる。ついで、四つの影でも、一番小さいものが飛来する。退却は算を乱した敗走に変わった。

警備隊は激しく列を乱し、めちやくちやに分別も失って逃げ惑い、武器を投げ捨てて絶叫し、次から次へと捕らえられて、切り刻まれた。数名が鉤爪で乱暴に掴まれて、上空からぽいと捨てられる。朝日を放射して朱色になった雪が赤く染まる。

咆哮を聞いて、コルトンとジャンベは振り返って、四つの影に半ば覆われた太陽を見やった。二人は心臓が縮む思いがした。親に怒られるのが怖くて背を丸めた子供みたいに、ジャンベは耳を押さえて震えた。

「これが、外出した理由ですよ。僕は寝ているとき、あの声の余波が聞こえた気がしたのです。気になって、なんだか確かめたくなかった。だけど、はつきり聞いて思うのは、聞くのではなかったという後悔が大きいです。モリビトの歌姫たちが僕らに聞かした、美しくも恐ろしい歌が優しい子守唄に聞こえてしまいますよ」

「俺は今の今まで、エトウがなんだと思ってたが、やっと、他の国があれらを素通りさせたのを理解できた気がした。あの声を聞いて、俺はただ、怖かった。あんな声はこれからも聞きたくもない。だが、戦いが終わるまでは、絶えず聞くことになるだろうな」

巨大なワイヴァーンに一人乗るエトウの咆哮は、本都市の守備隊の目を覚まさすと同時に、彼への恐ろしさを抱かせた。

外壁から落雷のごとき轟音がする。敵の大砲か、かの者の魔術かと思構えたが、二人はすぐに違うと気付いた。

警備隊を救援するための砲撃だった。鉄で作られた鑄造砲ちゅうぞうほうが火を噴く。国境警備隊の頭上を遙かに越して、追跡する敵の前後を砲弾が直撃する。炸裂砲弾も混じり、固まって追いかけてた敵をまとめて吹き飛ばす。偉大なる主のため、目の前の生け贄を屠ることしか念頭になかったエトウの奴隷共は不意を突かれた。ワイヴァーンの小柄な一頭が高度を上げて、一目散に逃げる。何者も持ちえない貴重な空の戦力を開戦早々、失う事態は避けたかった。

地上の軍は執拗に追い、退却する部隊を血祭りに上げようとする

が、砲撃は激しくなり、巻き上げ装置式の弩砲と投石器も使われる。追跡者は完全に浮き足立ち、今度は自分達が逃げる側に回り、負傷者を置き去りにして、一時退散。見せしめで、警備隊を全員仕留めることが叶わなかった。

西の大門は退却部隊が一定数集まるまで開かれなかった。敵軍は阻止され、一旦は追いやれたが、西南から大軍が続々と流入している状況では、おいそれと門を開けなかった。

開かれた大門から、警備隊の者たちがよろよろと倒れ込むように入ってくる。生存者が全員入ったのを確認したら、門は再び、堅く閉ざされた。

警備隊長が槍を支えに立ち上がり、点呼を取る。血と汗、泥と雪にまみれ、息も切れ切れで返事を返し、負傷者は代わりの者が答えた。五九人。一六〇いたはずのメテイルリク側の国境警備隊は、その数を三分の一まで減らした。

西の大門守護を任された指揮官が警備隊に指示を出した。

負傷者はただちにケフト施薬院に運搬。歩けぬ者や重症者はテント内にて治療を行う。軽傷の者、無傷な者は、鎧を脱いで四時間休んだ後、再び鎧を着用するように。ただし、戦闘への参加は折り入って連絡する。

手の空いている者が協力して、負傷者を施薬院へと運ぶ。まだ、芝生を遮る石段を登ったばかりのコルトンとジャンベも手伝った。街の中央付近にある施薬院へと向かう二人に、おーいと、剣以外は何も身に付けてないロディムが駆け付けた。

「お前ら、怪我人を置いたら、来い！」

「なにがあつたんだよ」とコルトン。

「怪物だよ！」ロディムはくわつと口を開けた。

「偵察班とカスメの連中が、そろそろ樹海生物が来てるのを告げただ。凄い数らしい。お前らのような、まだ来てないのろまに呼びかけてやってるんだ。」

浅層ならまだしも、深層の怪物相手にあんなバリケードで持つわけない。人手が要するということか。俺は他を当たると、ロディムはさっ

と踵を返した。

二人は怪我人を載せた担架を預けたら、急ぎ、トルヌウーア内壁へと向かう。

内壁の外にある見張りの宿舎で、狭い個室に置かれた小さな床几に座るゲンエモンがいた。

彼はときに目を閉じ、物思いにふけた。

ゲンエモンは重圧と後悔に苛まれていた。

表面は良しと胸を張って引き受けたものの、本当は躊躇い。微かに自信も無かった。だが、誰が引き受けられよう。年齢と経験を重ねて、皆が耳を傾けてくれる人物といえ、ドナが相応しいかに思えた。しかし、所詮は女と侮られるかもしれない。とすれば、自分が承諾するほかない。ただ、ずつとではない。自然とドナへ従う流れを作つていきたいと考えてた。彼女なら、それほどの実力はある。

ふうと羽虫の立てる羽音よりか細い鼻息をもらす。

無駄に長く生きて、現役を続けるべきではなかった。数年間、命の危機に瀕する場面は何度かあった。そのときにでも、死ねばよかった。気楽に、親しい者たちと世界樹の迷宮探索を進めたかった。若い頃から、ただ長く真面目にやっていただけで、周囲から長老やゲンさんと呼ばれて、こんなにも頼られる日が来るとは思いも寄らなかった。

百や二百の命を預かるとなれば、重さが大分違う。モリビト大戦下での冷静さを欠いた無様な姿、自分を信じて付いてきて、失われた命。辞めざる負えなくなった者たちのことは到底、忘れらず、今でも、そのことに思い悩むときがある。

なにより、一番の後悔と悩みは、大切な者に素性を明かせないこと。

いまとなって、明かせるはずもない。余計な悩みと苦しみを与えるだけ。胸の奥にしまっておこう。といつても、オルレスには既に明かし、コルトンや一部の者には明かすつもりだ。心ではつと叫び、喝を入れる。いつの間にか前のめりがちな体をしやきと伸ばす。年相応

の老人の陰は無くなり、若造に負けず劣らずな冒険者ゲンエモンがそこにいた。

外が騒がしくなってきた。個室のドアの前で、誰かが立っているのが気配でわかる。一人ではない。

ノックされるよりも早く動き、ゲンエモンはドアを開けた。太陽が顔を出しかけている。これから起こるであろう事を思えば、似つかわしくない良い天気になりそうだ。

キアラとピエルパオレだった。キアラは七福八葉をゲンエモンに返した。七福八葉の鞆には、絵や文字とも取れる黒と白の模様が描かれてた。

「水や血が被っても、大丈夫かの？」

ピエルパオレが自信ありげに答えた。「小娘だけではそうなるでしょうが、私をはじめとした優秀な者たちがかけた呪法です。鞆を武器に壊れるぐらい叩かねば、多少の汚れを被っても問題ないです」

お馬鹿さんと言いたげに、キアラはせせら笑う。

これこれと、ゲンエモンは間に入り、二人のしようもない喧嘩を未然に防いだ。

「では、二人は何の用があつてここへ？ 外の騒がしさから察するに、敵が来たかな」

「ご察しのとおり」ピエルパオレは西南の方角を見やった。「間もなく、大軍が参りましょう。そして、地下からは血に飢えた数多の怪物共が地上侵入を目指しています。だけど、それよりも」ゲンエモンは西南を指した。

「主らカースメーカーが持つ特別な力は無いが、長年の経験と勘でわかる。地上に加えて、空から奇怪で不気味な者らがやってくる」

「正確には、四つ。内三つはただの獣けだものにしか過ぎませんが、一つはとびきり生命力に充ち溢れ、背にはただ一人、かの者が搭乗しています」

キアラはピエルパオレの話を遮り、結論を述べた。

「あれは危険です。私やこの女など、腕の良い呪術師十人がかりでも全く問題にならない力を秘めてる。あれの力は人智を超えてる。我らにも影響を与えます。残された時間は僅かながら、我らは各方面の

守りに就く者たちに警告へ参ったのです」

「して、どうすればいいのだ」

「エトウの姿を見て、あれの話や声を聞いても、惑わされないこと。心をしつかりと保ち、静かに怒り、空を飛ぶ傲慢な者を睨みつけてやること。残念ながら、それぐらいです。我々にできることはあまりありません。もちろん、彼が直接、呪いをかけてくることがあれば、全力で対抗します。呪いにかげられたら、できる限りのことはします。ああ、それとご安心を。鞘に込められた効力は確実です。絶対の自信があります。近づいて、彼を斬れたらの話ですが」

「彼を斬るか……ならば、一対一の戦いを申し込んでみようかな」
「あれも、そこまで愚かではないでしょう」

そうだなと言ったが、ゲンエモンは内心、試す価値はあると思った。それならば、最小の犠牲で済む。

「わしは内壁に登るが、そなたらはどうする」
「二手に別れ、各方面に警告を済ませた後、急ぎ舞い戻ります」とピエルパオレ。

ゲンエモンは二人と別れ、内壁に向かう。

まず、浅層を辺りをうろつく冒険者の八割は内壁の任に就かせた。残す二割に、深層を往く冒険者の半分は北南西に派遣し、もう半分は内壁に配置。

ホープマンズは四人、アクリヴィを西側へ。グラディウスはオルドリッチ、シシヨー、キアラ、コウシチは内壁。ドナとサヤは内壁、ピエルパオレとパウヴォは北。ヴァロジャたちは全員、激戦区と予想された西に向かわせた。三つ子と双子の生き残り、レッドユニティも内壁。

リカルドなど、浅い階にいる若い者たちはほぼ全員、内壁の守護に就かせた。自身はヘンリックと共に残り、ブレンダンも西へ、ラクロワとニツツアは南の外壁へ向かわせた。できれば、同じパーティで組ませたい気持ちはあるが、適材適所で分けなければならなかった。

命ある限り、仲間を失った責めはわしが全て受けようと腹を括る。ゲンエモンは西を見た。連続して大きな音がしたからだ。太鼓や

笛か。ついで、雲の影から四つの影が出現。

四つの影は一瞬だが、太陽を隠し、エトリア本都市を闇で被い、身の毛もよだつ絶叫が影から発せられる。ゲンエモンは握り拳を固めて、空を飛ぶ影を睨んだ。少しして、絶え間ない砲撃が繰り返された。内壁はメンバーが揃いつつあった。こちらも、落ち着かない様子だ。それは、咆哮のせいだけではなかった。

ゲンエモンさん！ カースメーカーたちが呼ぶ。

「二時間としないうちに、樹海生物が来ると思います。そんなに強い力は感じませんが、人を集めた方がよろしいかと」

ゲンエモンはロディムなど、若く元気で足の速い者を集めて、身を軽くして、まだ来ない者たちに呼びかけるよう頼んだ。

ゲンエモンは内壁を上がった。いざ、決戦の前に、武者震いがする。恐怖や迷いは去り、四つの影を一瞥し、バリケードが築かれた世界樹の迷宮入口を見据える。

三八話 攻防戦

ゲンエモンは妙な胸の高ぶりを感じた。

視線を内壁から外壁の方へと向ける。空を飛び回る四つの影でも、一際巨大であり、これだけ離れていても、良からぬ空気が伝わってくる。

何人か乗せてる他三頭とは異なり、一人しか乗ってない。あれが大將エトウなのは明白であった。

他三頭が西、南、北へと下降する中、ぐるぐると旋回しつつ、羽ばたきながら西側へと降りてゆく。ただし、先の一頭より、明らかに距離が近い。

胸騒ぎがする。長年の経験から来る勘。多分、自分か誰かが、一時的にここを離れなければならない。では、指導者はどうするかといえば、もう決まってる。

「みな、聞いてくれ。わしは今から、西門へ赴く。どうにも嫌な予感がある。カースメーカーの諸君が対エトウ用の呪術付き刀剣を使う時がきた。剣を見た奴の反応も確かめたい。すぐに舞い戻ってくるが、代理は必要。そこで、ドナを内壁担当指揮官代理としたいが、みなは異存はあるか？」

反対の声は特になく、賛成の声がまあまあ。

「無言の者は勝手に賛成と解釈するが、よろしいかな。だが、わし一人だけではない。わしに加えて、何人か連れて行くこうかと思う。それも、カースメーカーたちの術で守られた剣を持ち、乗馬に心得がある者がいい」

内壁のすぐ傍には、即席の厩舎があり、本都市の連絡用として数頭の馬が置かれてた。

ゲンエモンは、それぞれのパーティから了承をもらい、ドナのメンバーである同じブシドーのサヤ、シシヨ、コウシチも連れてくことにした。四人は馬にまたがり、西門へと馬を駆る。その頃、西の大門にある見張り台からは、自衛軍総隊長ミルティユーゴは西南の方角を睥睨した。

何万もの敵が集結し、徐々に包囲網を広げてくる。

東を除き、北と南の方角に通じる道も閉ざされるだろう。敵はエトリア側にある兵器の威力に加えて、打って出るほどの余裕が無いのを知ってるので、遠く距離を保ちつつ、ゆったりとした速度で拡散している。

国の自慢である広大な牧畜と農作地帯の広沃ヶ原が踏み荒らされるのを指をくわえて見るしかないのは、怒りに思うも、現状では迂闊に攻撃できないのが歯がゆい。

エトリア本都市の外壁は丈夫にして、鉄板や鉄を溶かした物を塗って滑りやすい。急な傾斜面のおかげで砲弾を逸らして、直撃による被害を減らして、最新式の優れた造りといえる。

アジロナは先見の明があったのだ。深い堀もあり、簡単には侵入できない。しかし、外壁の裏側にはなにもない。遮るものがなくて無防備なのだ。裏を返せば、一度、壁を壊されて道を作られたら、呆気なく落ちてしまう。堀と、厚く丈夫ながらも一つしかないこの壁をなにがなんでも死守しなければならない。

思えば、警備隊のあからさまな虐殺行為は、こちらの攻撃力と対応を計る策の可能性もある。かといって、あのまま見捨てれば、皆殺しにされて、士気にも関わる。

食料はたっぷりある。一ヶ月、豪華に食事会を開けるほどには。きちんと配分して、節約すれば六カ月保てる。互いに距離を取り合い、しばらくは睨み合いが続くだろう。

しかし、意外なことに、敵から動きが見られた。三頭が三方向に別れたのに対し、一番巨大な翼竜が近くといても、数キロと大砲が届かない距離に降り立った。

翼竜の手綱を握る銀色の鎧を身に付けた、真つ黒い仮面を被る不気味なエトウと思しき人物は、周りの者になにかを命じたのか。

翼竜の左右から旗を掲げた四人の騎手、先頭に行くのは兜を脱いだ乗り手。交渉の使者であることは明らか。今更、何を話し合うのだと憤りつつ、こちらも応じなければならぬと思ひ、総隊長は側近を率い、自らが交渉の場に出ることにした。

橋を下ろし、門を内に開き、棘を付けた分厚い鋼鉄の落し格子を巻き上げ装置で上げて、ミルティユーゴは十人の徒歩を引き連れて、五人の使者を出迎えた。

先頭の代表者である男は、陽で肌ばかりか髪まで焼けたようなざんばら髪。何度か戦場を経験したかと思わせる険しく精悍な顔付き。昔の物語に出てくる英雄か、前線へ常に自ら赴く風情の武勇猛き將軍の雰囲気を漂わせた。相手から名乗り上げた。

「俺の名はカセレス。総大将エトウの右腕、副官を勤める者。命令により、交渉の使者として参った」

「私はミルティユーゴ。エトリア自衛軍総轄隊長。総隊長とも呼ばれてる。現在、エトリア国内にはまつりごとを行う代表者は不在のため、目下の所、私が国の責任者代行となる。急なため、このような立ち会見となるのを理解していただきたい。それでは、早速で申し訳ございませぬが、本題に入りましょう」

総隊長は先方からの意見を求めた。

「では、我らと総大将エトウの望みをお伝えさせていただく」そして、カセレスは側近の一人に紙を持ってこさせて、エトリアへの条約を読み上げた。予想はしていたが、先方の望みは到底受け入れられない内容であった。

エトリアは今後、本国サンガットの従属国となり、庇護する代わりに毎年、サンガット基準で七割の税を徴収。世界樹の迷宮における探索を完全に開放し、そこで取れた様々な物品は全てサンガットへの貢物とすること。

エトリアの土地・財・技術をサンガットへと寄与し、現地に留まる在留サンガット軍の衣食住並びに武器装備の類はエトリア側の負担とする。

更には、エトリアは近隣の中小各国に対し、サンガットへの積極的な協力を強く要請することを義務にする。

エトリアは各国の監視を行い、逐一サンガットへ報告。近隣の中小各国で不穏な動き。明確な当方に対する軍事的行為が見られた場合、エトリアの管理不届き。もしくは反逆行為とみなして、二年間、税を

一割増しの八割徴収。

エトリア国で謀反が起きた場合、関係者は即座に死罪とし、親類縁者も死罪、もしくは数年間の重労働を負わせる。

エトリア国全体で謀反を起こした場合、サンガットは縁がある国々に呼びかけて、全力を以てエトリアを灰燼に帰す。

他、細々とした決まりが読み上げられたが、大まかな内容はこうであつた。

次に、ミルティユーゴが意見を述べた。

「我らの望みをお伝えさせていただこう。当方の望みは、無用な争いを避けて、これ以上、無辜の血が流れる事態を終わらすこと。先の望みは到底、聞き入れられるものではないですが、我らの国にはこんな諺があります。

“ 留まりたい者には我らの心遣いと土地で安らぎを与え、武器を向ける者には武器を”。あなた方が真の交流を望むなら、双方で起きた争いによる互いの死者を手厚く弔い、帰るために必要な資金と幾何かの食糧を譲るので、どうか軍を退けてもらいたい。

そして、発展に繋がる交易を行いましよう。さすれば、長い年月を要しますが、エトリアとサンガット間でいずれ友好が築けましょう。しかし、先の考案で一切妥協や曲げることが良しとしないとおっしゃるなら。当方、エトリア国は戦の経験は無きに等しいものの、無理に奪おうとすれば、我らは内に秘めた牙を剥きだして、サンガット軍へ多大なる損失を与えるほど果敢な抵抗になると申し上げておきます」

カセレスは総隊長を睨みつけた。修羅場を潜り抜けてきた者にかできない、普通の者なら委縮して、身動きが取れなる冷たく光る眼差しを彼は平然とした顔で受け止めた。伊達で指導者の立場に就いたわけではないかと、カセレスは口端を微かに歪ませた。

「エトリアの所存、エトウ様に伝えておこう。だが、あまり多くを期待しないことだな」

五人は一旦、引き下がった。総隊長はその間、小さな椅子に座り、成り行きを見守った。

翼竜に佇むエトウの下まで戻ると、話し合っている。距離もあり、

聞こえないが、カセレスの態度からして、開戦に多少の躊躇いがあるのを感じられた。できれば、期待したいところ。そうして、同じ五人が来て、カセレスはエトリア側の使者に伝えた。

「エトリア側の要求は一切、受け入れないとのこと。断るようなら、手始めに本都市在住の諸君らを殲滅した後、他国へと向かうエトリアの民抹殺を図るとおっしゃられた。だが、我らの総大将は寛大な一面もある。一時間の猶予を与える。よく話し合い、考えられよとのお達し」

「二時間では短い。三時間ほしい。私より立場が上の方が近辺におられる。その御方の意見も合わせて、返事を待つてほしい」

「よかろう。だが、それ以上の延期はあなた方が反抗の準備を整えるための時間稼ぎとみなして、攻撃をする。それでよろしいかな？」

総隊長は同意した。実際、時間稼ぎにしか過ぎない。それでも、建前は外交の態を見せなければと思い、部下の一人に白旗を持たせて、早馬に乗ってオルレスの下へ参じるよう命じた。遅々とした時間が過ぎる。総隊長たちは中に引っ込み、カセレスらは自陣に引っ込んだ。

エトリア軍同様、サンガット軍にも動きがあり、次々とテントが建てられて、袋や物を担いでえっちらおっちらと右往左往し、即席の攻城櫓こうじょうやぐらも作られる。

とつくのとうに西側の外壁へと着き、ゲンエモンら四人はヴァロジャにも声をかえて、事態を静観した。

「仮に私が国主でも、あんな奴隷になれとしか書いてない事は断りませぬ」とサヤ。

サヤの言葉に肯きつつも、ゲンエモンはこうも言った。

「そのとおりだろう。ただ、国を存続させることをなによりとするなら、理不尽な要求も甘んじて受け入れなければならぬときもある」
「そうなったときは、ドナには申し訳ないけど、私はエトリアから離れます。誰かの奴隷になってまで冒険者をしたくない。ましてや、あれらの為に刀を振るのは真つ平ごめんです」

「個人の自由だ。わしは留まるがな」

「ならば、弟子であるそれがしが残るのも道理」

しかし、ゲンエモンはコウシチの言ったことを否定した。

「ならん。第一、お主は弟子ではない。近い内、孤自戦流を受け継ぐ者であり、既にわしの手から離れた一人前の冒険者でもある。古い先短い者の余生に付き合うことはない」

「あなたは個人の自由とおっしゃいました。それなら、私が残ることに問題でも」

「わしの教えとそなたが培ったことを以てして孤自戦流を世に広める役目がある。それには、自由無き地から離れなければならん」

口論に達する前に、ヴァロジャが割って入った。

「あんたらが口げんかをするのは勝手だが、当面の問題を無視して続けるなら、俺は本来の持ち場に戻るぜゲンさん。くだらないことを目の前でやられるのは鬱陶しい」

「いや、すまん。うヴァロジャ。コウシチよ、このことは時間があるときに話そう。良いな」

不承な思いがコウシチの顔に現れてたが、これ以上ごねるのは自分が子供であり、場を乱すことにも繋がるかと理解し、勝手な発言をお許してくださいと頭を下げた。シショールは内心、首を傾げた。コウシチらしくない、なにか拘ってるような気がした。

とはいえ、師の言葉を借りるなら、時間があるときに話そうと思いい、今は無言を貫きとおした。日差しは良いが、風は冷たい。マントや厚着を被り、寒さをしのぐ。

二時間半経過。白旗を持った早馬の使者が舞い戻る。西側の大門から総隊長以下十人の使者、サンガット側からは同じ五人が来る。ミルティユーゴの決然とした表情から、カセレスは聞く前から返答を察した。

「ラーダ長代理オルレスと私ミルティユーゴ以下、十数人で考慮した末の結論をお伝えします。当方、エトリアはサンガット側の理不尽で傲慢極まりない条約を全て拒否する。エトリアはサンガットと剣を交えて、徹底的に抗戦する所存。このことは、そちらが折れぬ限り、曲げる気はない」

「しかと聞いた。では、先の条約は無効とし、俺がエトウに伝え次第、エトリアへの総攻撃を開始する。覚悟しろ」

「私個人の本音を申し上げれば、剣ではなく、和平の証さかすきに杯を交わしたかった。こうなったことを残念に思う。だが、逃げはしない。我らの内に秘めた牙の鋭さ、凄まじいものになることを覚悟したまえ」

カセレスはわかっていると聞いたげに頷き、落ち着いた足取りで五人は踵を返した。ミルティユーゴは手を挙げて叫んだ。

「開戦だ！ 火縄に火を付け、石火矢の最終確認を行い、武器を構えよ！！ だが、礼儀として使者を攻撃してはならぬ。五人は無事に自軍へと返してやれ！」

カセレスが半ばまで過ぎて、ミルティユーゴと十人の側近が引き返そうとしたとき、エトウが騎乗するワイヴァーンがばさりと翼を広げて、咆哮を上げるや一直線に総隊長目がけて飛びかかった。

唾然としたカセレスら五人には目もくれず、エトウとワイヴァーンが襲いかかる。

十人の徒歩の者は悲鳴上げて下がり、西の門付近の衛兵たちはいきなりの攻撃にあわたふためいた。また、背に乗るエトウその人の身体から黒々とした靄のような煙がかつた物が洩れ出ていて、おまけに例の決して聞き慣れることはないおぞましい声も出した。声と黒い靄はエトリアを守る兵士達に様々な恐れを抱かせた。それなりに剛のある者すら、立つのがやつと。火縄銃の火は消え、矢も風で押されて勢いが弱まり、硬い皮膚に阻まれて弾かれる。

総隊長は橋を渡りきる直前だが、ワイヴァーンは橋の前まで迫っていた。

体から電流をばちばちと爆ぜらせてる。雷を落とす伝説は本当のようだ。間に合わない。ミルティユーゴは剣を抜き、勝ち目は無いのを知りつつ立ち向かう。

「ああ！ 誰か、誰かー！ 総隊長を救うのだ！ あの方を今、失ってならない！ 誰かー！」

ワイヴァーンが橋まで迫ったとき、篝火を掻き消し、旗が千切れんばかりに両の翼を大きくはためかせる。翼竜が空へと後退する。

救いの声に応えて、ゲンエモンとヴァロジャが背後から剣を抜き放ち、西の大門の上ではコウシチ、シシヨ、サヤが微かに光り帯びた刀を向けていた。おぞましい声は途切れ、靄は消え去り、光を見た者の内側から恐怖が去った。

三人はしつかりとした足取りで門の内まで引き返す。衛兵たちは急ぎ、門を固く閉ざし、跳ね橋を上げて、鋼鉄の格子を落とす。

ゲンエモンと落ち着きを取り戻した十人の徒歩が総隊長を指して、こちらにも負けじと声を張り上げる。

「皆の者、総隊長の剛勇をご覧あれ！ 自衛軍総轄隊長ミルティユーゴの気迫に押されて、翼竜とエトウめが尻尾を巻いて逃げた。弱輩な将率いる軍に勝ち目なし」

直後にミルティユーゴも応える。「エトウなる者は所詮、野蛮な動物使いにしか過ぎない。恐れは敵ではなく、自らの内にある。拙い呪いごとましなに囚われて、戦いを放棄してはならぬ。声に惑わされるな。大きさに臆すな。立ち向かえ、皆よ！」

一人が総隊長万歳と叫ぶ。そこから連動して、万歳合唱が広がり、ゲンエモンらにもよくやったと褒める者もいた。久しく静まり返っていたエトリア本都市に、再び活気の火が灯る。

総隊長はゲンエモンらにお礼をささやいた。

「あなたが何を考えて、ここへ来たのかわからなかったが、不問にします。私は今まで、カースメーカーという者たち誤解してたようだ。あなた方の勇気と先見の明には感謝しきれない」

「いえ、あなたもよう立ち向かわれた。ともかく、あれがわしらが持っている物が苦手なのがはつきりした。とはいえ、今後、あれはわしらにも普通とは異なる武器があるのを知り、不用意に近づかないはず。対決の機会はそうないでしょうな」

「私もずっと、本都市に籠もりきりなつもりはない。いずれ、もしくはいつかか。機があれば、こちらから打って出て攻撃する。そのときは、あなた方と同じく術をかけられた剣を持つ者を必ず連れて行く」

ミルティユーゴとゲンエモンらはそこで別れて、ゲンエモンら四人

は持ち場である内壁に引き返そうとした。しかし、意外な者に呼び止められた。

胃を被って、初めは誰か判らなかったが、じつと顔を見て気付いた。「これは、フリスト殿。元氣にお過ごししておいでかな」

声をかけたのは、元副隊長フリストであった。所在なさげに目をきよろきよろとさせて、自分より立場が弱いか強いか値踏みする目付きは相変わらずだが、以前のような虚勢は無くなり、より自信が無い印象になっていた。

国境の警備に飛ばされたとは聞いてたが、有事のおり、配置転換で本都市警固に回されたのかとゲンエモンは思った。ゲンエモン以外の者は、彼を無視し、冷たい視線を送った。彼の傲慢で無能、部下に慕われてない一面を嫌ほど見たことは決して忘れられない出来事。仲良くなりたいたいと思う者はいなかった。

「い、いえ、まあ。元氣といえば元氣です。だけど、さすがというか。あなたの豪胆さには驚かされるばかりです」

「それで、何か用で。わしは急いで、内壁に戻られねばいけないのです
が」

「ああつと、そうでしたね。実は、あなたに渡したい物があるのです。父に言われて、渡すよう言われたのですが、機会に恵まれず」彼は懐から、小さい物を出した。小ぢんまりとしたルビーがきつく縫い付けられた、質の良い糸で織られた正方形のお守りのようなもの。「あなたへの謝罪と武運を祈り、お渡ししなさいと言われてました。どうか受け取っていただけませんか」

元副隊長はへこへここと頭を下げた。ゲンエモンは彼が可哀想になった。

実を言うと、アヤネから貰ったお守りがある。

新しいお守りを貰えば、前のお守りの効力が無くなる。彼の故国にはそのような言い伝えがあるのだが、なに。それはそれ。人を想う気持ちに古い新しいもない。下手に波風を立てることもあるまい。彼と彼の父君の顔を立てて、もらっておこう。

ゲンエモンはフリストから謝罪の品を受け取った。元副隊長はあ

りがとうございまずと頭を下げた。

ゲンエモンらが去った後、彼が密かに薄ら笑いを浮かべて、小さくガッツポーズをしているのは誰も気付かず、気にもしなかった。

道半ばで、シシヨーはゲンエモンに話しかけた。

「彼はあまり信用できない人間だと思えます。彼の性格からして、あなたに対して逆恨みを抱いてもおかしくない。そんな良い物を今になってくれるのは、どうも変だ。なにか良からぬ想いを込めてるのかもしれない。こつそりと捨てても、問題は無いはず」

「そうかもしれないが、悪戯に波風を立てる意味もない。彼の心理がどうあれ、無下に断り、こじらす必要もない。仮に、お守りに良からぬ想いが込められてるからといって、わしの心臓が止まることもあるまい。彼と手を繋ぎ合う日は来ないだろうが、一先ずは一件落着と見てよからう」

彼は深刻に思うときもあるが、結構、気楽に考えるときもある。といっても、その場合は、深刻に考えるだけ無駄な物が多いのも事実で、シシヨーは師の判断に同意した。

ゲンラモンらが戻ると、冒険者と衛兵は歓呼で勇敢な四人を迎えて、カースメーカーたちの術が本物であると称賛した。ドナは指揮権をゲンエモンに返した。

「あなたが生きてる間は、私が指揮者になることはありえませんよ。そう残念そうな顔をしないでください」

ゲンエモンはぶつぶつと不服を呟きながら、内壁の上に登り、雑に閉ざされた世界樹の迷宮出入り口を見下ろした。

「さつさときやせんかね」

ロディムが指で斧の柄を弄んだ。

「わしの勘だが、外での戦闘は今日は無いと思える。というのも、敵軍は先ほど、大将の無様な撤退を見たはず。それと、異様なまでに血気盛んだが、彼らは疲れておる。今日は休んで、戦闘は明日になる可能性がある。また、お主の望む内壁での戦闘も、今日は無い。あるとすれば、明日か明後日か。いずれにせよ、そう遠くはない」

ゲンエモンの推察どおり、開戦日となる二月一四日は短い戦闘が二

回（五人対エトウの件を含めれば実質三回）行われたただけだった、その日、エトリア側は動向を見守り、王賊側はマター・エトリアの北と南、西に通じる道やなだらかな丘などに一日かけて陣地を張り、周りの雪に埋もれた田畑を荒らし、エトリアの領土を多く占める広沃ヶ原を制圧した。要所で塹壕も掘られてた。

各守りに情報伝達の馬が駆ける。内壁側は何もなしと答えた。カースメーカーたちが気配を知らせてくれるが、数は多いけど、目立った動きは感じられないとのこと。

ゲンエモンには、エトリア本都市を攻囲する敵軍の数を知らされた。旗の数、配置、将と思しき者を取り巻く人数から推察して、総勢六万半ばから強。十万の内、残す四万が道中で死んだとは考えずらい。遅れたというよりかは、遅らせて到着させるつもりだろうといった。幾らかは、エトリアに通じる中小各国の大きな道に見張りを置いてるのではとも付け加えられた。

つまり、八万強から九万を超す軍勢がエトリアに訪れる可能性は高い。最後に、北と南には一万ずつ、残す四万以上は西側に集結していると告げられた。

「明日、西側は眠ることもままならず、北と南もあまり休める機会はないだろうと総隊長がおっしゃられました」

伝達係は一礼して、馬に乗って自らの持ち場へ戻った。

真っ暗な夜の七時頃。数名の見張りを残して、他は近隣の民家を借りたり、邪魔にならない位置に張った大テント内で本日二回目となる食事を取った。

食事の回数には決まりがあり、何も無い日は二回。無い日が二日続けば、三日目からは一回のみ。戦闘がある日は三回、戦闘の中身、兵士達の疲れと空腹状況によっては四回。ただし、戦闘中だと、迅速かつほおぼりやすい物となり、その場合だと四回を超えても致し方ないとされた。

「やれやれ。食事も少なく、何も無い日が続くのはご免だね。そんなきや、配置転換させてもらおうかね」とロディム。

そう言うなどコルトンは諫めたが、ロディムの言うことに少なから

ず同調してた。何日も続けば、配置転換もありかもしれない。退屈な上、食事が減らされるのは嫌だな。逆に考えれば、生き延びられるチャンスも高い。むしろ、幸運と考えようとコルトンは思った。

二月一五日早朝。

夜も明けぬうちに、サンガット軍の攻撃が開始された。

松明は良い的になるので、灯りもなく、ぞろぞろと進んでくる。夜目が利く歩哨たちが警戒の笛を吹き鳴らす。猛禽類を思わせる笛の音が響き渡る。各隊長たちが激を飛ばし、兵士達は手に手に武器を持つ。

外壁の稜堡りょうほの角には大砲が据えられて、外壁の内側には外に開く窓式の銃眼があり、大砲用と弓矢や鉄砲用と大小の銃眼が作られてた。そこから、砲と銃が先を覗かせる。

稜堡は広く、大砲より離れた位置では兵士がひしめきあう。

鉄砲隊は二列並び、いつでも点火準備は万端。また、長弓と弩いしゆみを持つ兵士もいて、二組とも鉄砲より後方だが、鉄砲に交じって弩を持つ兵士も二列目に配置されてた。全員に行き渡るほど鉄砲は無かったのだ。

真ん中と最後方には大きな盾を持つ兵士もいた。敵の矢や弾を防ぐためである。他、鋼板も要所に張り巡らされて、飛び道具への防御を高めてた。

陣地とまだ浅い範囲の塹壕から敵が這い出てくる。

初めに長弓部隊の攻撃が開始された。暗い夜空を矢が覆い尽くす。暗いのでわかり辛いのが、多くの者に傷を与え、確実に何十名もの敵兵を倒した。

倒れない兵士も多くいた。盾を構える者もいれば、小ぢんまりとした櫓に隠れてる者もいた。

高台と望遠鏡でできる限り探りを入れたところ、櫓は二層建て。前面は厚い石膏が塗られてる。屋根は木の板を被せられて、数人が搭乘。上よりも下がメインらしく、大量の土砂を盛る様子が観察された。

中の土を掘にぶちまけて、埋めようというのだ。櫓と盾を持つ兵士たちの背後では、長さ数十メートルもある巨大な鉤梯子が支えられてた。見える範囲では、袋を担ぐ者たちも結構見られる。明らかに土を詰めてるのは明白。

エトリアの堀は深さ一四m、幅三十mもあつて普通には渡れない。あれほど長い梯子を何本も重ねれば、橋替わりにするのも容易いはず。

「櫓と塹壕を破壊しろ！」

狭間と銃眼にある石火矢の角度が目一杯下げられる。気を付けろとの喚起と共に、鋼板、大盾と壁の背後に射手と狙撃手が身を隠す。敵が応射したのだ。

外壁の背後にも落ちた。殆ど弾かれたが、数えられるほどだが的になる者もいて、当たり所が悪く、深手を負う者もほんの少しだけいた。大砲の装填が整い次第、必要な人員を残して離れた。矢雨を盾で防ぎながら、第一波が発射される。

真冬の夜に幾重もの落雷が轟き、足元と全身にびりりと振動が伝わる。ぬかるんだ箇所泥と雪の飛沫を盛大に上げて深く埋まったり、何にも当たらない砲弾も幾つかあったが、大抵は直撃した。盾を持つ兵士とその後ろの兵士も巻き込んで吹き飛ばす。

地面に当たって止まると思いきや、地面すれすれに何回も滑るようバウンドして、何人もの敵を弾いたりするのもあれば、そのまま櫓に直撃して前面の装甲をぶっ壊して、土砂と人がドバっとこぼれる。

ひゆるると真つ直ぐ飛んで、櫓や梯子、塹壕から這い出て袋を担ぐ者らにも直撃もした。炸裂砲弾も少し混じり、直撃は無くとも、こちらには鉄片と爆風による衝撃で確実に被害を与えた。

そして、外壁の背後に設置された高台からは、砲撃の第二波が点火されて、弩砲と投石器による射撃も加わり、エトリア陣営の抗戦は激しくなる一方。

王賊軍も遠距離からの攻撃を試みたが、彼らの砲は持ち運びを考慮してエトリアより小さく、大きな物は少なかった。そのため、殆どが壁に到達せず、精々が堀の中に没するのが少し見られたくらい。

何台かの櫓は土砂を流し込み、何十個か袋を投げ入れられたものの、掘の水を埋めるには到底量が足りない。

梯子を架けても鉤縄で奪われたり、改良式火縄銃の弾丸で碎かれて、そもそも渡ろうにも、鉄砲と弓の良的にか過ぎなかった。

攻撃が開始されてから四十分過ぎ、サンガット側は一時退避の合図を出した。待つてましたとばかり、兵士は塹壕と陣地へ帰ってゆく。

ベルナルドはどうだと、カール口に聞いた。

「三発とも命中した。一発は必殺。二発は当たった奴の戦う力を奪えた」

ミルティユーゴが鬨を上げる。

「見よー。敵の無様な姿を。昨日の初陣に続き、我らの勝利だ。サンガット恐れるに足らず！」

真冬の寒さも吹き飛ばしかない歓声が本都市に木霊する。しかし、ミルティユーゴを含め、聡明な者は首を傾げてた。

敵の攻撃は間違いなく本格的だが、昨日と異なり、鬼気迫る熱気が感じられない。何か足りない。こちらを寝かせないためか。

しばらくは硬直状態が続き、昼になつても、敵は攻撃を仕掛けてこず、塹壕掘りに注力してる。とうとうその日、敵は早朝を除き、攻撃をしなかった。

もつとも、決して警戒は怠らず、哨戒の数を増やしておいた。ミルティユーゴは好意で借りえた商人ギルドを会議室とし、エキアロモとタイロンを交えて早朝の攻撃を話し合った結果、こちらの攻撃力と対応力を図ったという結論に達した。

「であるからこそ、塹壕掘りに注力してるのだろう。長期戦になるかも」

「いや、それはどうでしょうか。敵はあれほどの人数の割りに、長期を過ごすには食料や燃料となる薪が足りない可能性がある。数日は掘れるだけ掘ったら、短期決戦を仕掛けてくるかも」

喧々諤々と物議を交わし、敵の出方と集められる限りの情報で考え得る対策を練り、会議は終わった。

しかし、大方の見方としては、敵に食料と燃料の余裕はない。精々、

切り詰めたとしても、一ヶ月足らずで食料は尽きるはず。そうなる前に、ある程度の下準備を整えたら、死にも狂いで攻めてくる。特に、空を飛ぶ忌まわしい蛇と男の存在が一番不気味で厄介であり、早朝の本格的だがいまいち勢いが劣る攻撃は、一重に彼の後押しが無かった故。

とすれば、今度の攻撃では、彼の存在もあり、一際激しい攻撃が予想された。

彼らは口に出さなかった。言えば、臆病者と見下されるのが嫌だというのもあるが、口に出せば、敗北を認めてしまい、もう立ち向かうことができなくなると考えてた。

世のどんな不快な音や音痴も、あれと比べたら、天国へと誘う天使の優しいさえずりに聞こえてしまうほど、おぞましいこの世ならざる声。心中、誰もが二度と聞きたくないと思っていた。ミルティユーゴと老練な勇者エキアロモでさえ、あれの絶叫には相当参っていた。

—————

カセレスは不満。いや、憤慨すらしていた。

自分が戻る途中で勝手に攻撃をして、無様に逃げたこと。今日の攻撃命令といい、しかも、後押しをしなかったのが立腹した一番の理由。例の兵器が到着するまで待てば良い物を。彼からすれば、自分も一介の奴隷に過ぎないのは理解してたが、エトウも自分以外で自ら考え動く存在が必要なのはわかった。

エトウの名の下、自由な意思を以て動けてたので、だからこそ、やるせない思いを抱くものの、今ある地位も手放したくなかった。

所詮、盗賊の身。ここから落ちぶれれば、二度と先はない。進むも引くも地獄なら、地獄の果て目指して突き進むのみ。奴はくそ恐ろしいが、ここまで成り上がったのは素直に尊敬するし、一応は感謝してるよ。

カセレスはともかく、エトウに問い質した。彼は久方、翼竜から降り立っていた。

翼竜すら、ぼろ布をまとい、身体をまとめて暖を取ろうとしているのに、彼はマントと鎧、いつもの不気味に微笑む黒い仮面以外は何もま

とわず、椅子に座ってエトリア本都市を見据えてた。

カセレスが知る限り、彼は食事はおろか。眠りや排泄など、生き物に必要な行動を取る場面が一切ない。

人々は、神に選ばれたる者だから当然というが、カセレスや以前の彼を知る者は、今の彼を気味悪く思い、良い意味でも悪い意味でも人間ではないと考えてた。

「なにかな？ カセレス」

とうに接近に気付いてたのか、エトウは振り返りもせず話しかけた。カセレスはびくりと身を震わせて、寒さと震えを隠すようにマントで体をきつく締めた。

「総大将よ。あんたが何を考えてるかわからんが、夜も明けぬ内にあんな攻撃をするのは無茶じゃないか？」

彼はくぐもった笑いを出した。まだエトウの声だが、その時々により、彼は老人や子供、女の声を出したりする。

「お前は余の名の下、軍を動かしてればよい。それより聞こえぬか？ 見捨てられた哀れな隷属共が上げる怨嗟えんさと余に救いを求める声がある。あれらの声はきつと、心地よい断末魔を上げさせるだろう」

彼はまたくくと笑った。カセレスはゾツとし、思い出した。

七年前、サンガットへ反旗を翻した国での鎮圧戦。彼が味方を無駄に殺すだけの無茶な攻撃をさせた。当然、千をも超える甚大な損害を出したにも関わらず、翌日には決着が付いた。彼の声の魔力が一層増してたのだ。

砦を守っていた敵兵は狂い出し、何名かが勝手に門を開け放ち、味方は声に押される形で砦の兵と背後に控えた民衆へ殺戮の限りを行った。最強の砦は崩れ、国王は斬首。身分の高い者たちの大半も処刑された。

カセレスと常人の意思を保つことが許された者は、悲惨な光景以上に自軍の兵士達の表情と有り様。それを押すエトウを恐れた。ああ、そういうことか。勝利への布石、尊い犠牲というわけかい。

エトウ自ら、この事に関する口外へ戒厳を命じた。

だが、知ってる者は殆どが身分の高い者であり、当事者である兵士

達からは記憶が抜け落ちてた。敵方に生存者はない。噂が噂を呼び、他国は彼を匿った大国を恐れ、国内では彼の地位と尊敬を決定的にして、大手を振って表舞台へ立つに至った。

「そろそろ、地底にうずくまる者共が動き出すだろう」

カセレスがなんのことだと聞いてもエトウは答えず、次の命令だけを言った。

「四日後。朝日が明ける頃、内と外で総攻撃を行う」

「内と外だと!? あれが到着日時に合わせてなのはまだわかるが、内とはどういう意味だ。説明しろ!」

「楽しみにしてるがよい」

内心、くそと怒って引き返すカセレスを見ながら、エトウのくぐもった密やかな嘲笑が風に吸い込まれてく。

*
*
*

アクリヴィは哨戒の任に就いてた。女だから遠慮するなど申し出た。鎧は来てないが、男勝りの性格と体格で、男装したら女性と見抜ける人は少ない。

彼女の隣には若い男がいた。弓の腕が立つ、金髪の男。エドワードではない。しかし、パツと見、彼女は彼のことをエドワードだと思った。雰囲気似てるからだ。だが、よく見れば一目で違うとわかる。

まず、エドワードと比べて背が低く、引き締まってるが彼より華奢だ。顔に幼いところが見られる、エドワードより数歳年下の青年。そう、彼はチノスだった。

雰囲気と長弓の扱いが上手いので、初めはエドワード? と思ったが、すぐに別人。チノスだと気付いた。

こちらと叱ったものの、後の祭り。この状況で逃がせるはずもない。こうなったのも何かの縁、アクリヴィは彼の傍にいたことにした。

「僕はあの人ばかりに頼ってました。エドワードさんが望んでないのは承知ですが、僕も騎馬民族の端くれ。あの人以外で、戦う勇気がある者がいることを証明したかった」

若さゆえの果敢さと愚かさ。だけど、どうこう言ったところで始まらない。目、いや手の届く範囲でなら守ってやりたい。母親に加え

て、彼の死を聞いたら悲しみは増すだろう。

「二向に手を休めませんね」

ときおり、砲撃を行うが敵は怯まず、懸命に塹壕を掘り進めてた。今の所、距離的に問題はないが、掘り進められて、大砲の射程距離が届く範囲に来られるのは不味かった。さりとて、物資補給もままならぬ現状で、塹壕破壊で撃ち尽くすわけにもいかない。タイミングを計らえ、無駄撃ちするなと総隊長は命じた。

内壁からの戦闘報告はなし。男二人は馬鹿なことをのたまってるだろうが、取りあえずは四人とも無事なのを聞いてアクリヴィは安心した。

アクリヴィは空を見た。まだ陽が良い日だ。ただ、雲の流れからして、またいつ雪が降ってもおかしくない。

その内壁では、暇を持て余してた。二回目の食事も終わり、じつと世界樹を見るだけの退屈な日が過ぎる。

ゲンエモンは多少の遊戯は許したが、節度をもってやれときつく言い付けた。遊戯に没する者もいれば、装備や身の回りの点検をしたり、腕が鈍らないよう打ち合う者もいた。

本当に来るのかねえとロデイムのぼやきに、カースメーカーの一人が答えた。

「すぐにはない。だけど、そろそろ近いな。例えれば、湯を沸かしてるやかんか。沸騰には時間を要するが、時が来れば、出入り口から似すぎて鍋からこぼれ出した湯水の如く大量に出現してくるよ」

「それは何時になるんだい」

「明日か、一週間後。とにかく、そんなにかからないよ。そのときは君の斧と剣捌きを存分に鑑賞させてもらおう。その前に、投槍や鉄球で応戦することになるけど」

内壁での戦いは、外壁と同じく飛び道具を主体とした。といって、弓や鉄砲の多くは外壁に回されてるため、柄の最後方に輪をつけ縄を通した物と、鎖付きの鉄球を地底世界から侵出してきた怪物共へ投げつけて、回収。これの繰り返しとなる。白兵は追い詰められたとき、内壁にまで怪物が上があるような事態に限られた。

昼が過ぎ、夜に二回目の食事が奢られる。内壁防衛の任に就く者以外でも、マルシアなど、医療班の者も数名作りに来ていた。役に立ちたい思いから、ジャンベは炊事雑用係に志願した。ジャンベは皮を剥きながら、マルシアと喋った。

「戦う力と技術、度胸。それが一番に求められる今となつては、歌を吟じられることに意味が無くなりましたね」

「あら、そうかしら？　音楽は退屈をしのげるし、傷付いた心を慰められる。私はあなたが地下世界で皆を鼓舞したことを忘れないわ」

「そうですけれど、僕は性格上、うじうじと悩んで考え込んでしまうのですよ。今だって、不安でしようがない。いまいる状況が夢が現実と区別がつかなくなるような、ぼやけた感じ。視界がくらくらと揺れる感覚。そういうことがたまにあるのですよ」

「恥じることはないわ。私も戦場味わうのは……モリビトさんたちもいれたら二回目かしら？」

まあ、とにかく。戦場ではいるだけで激しいストレスを感じる。現に、私たち医療班のところへ特に怪我したわけでもない人が来るのだけれど、そこまで寒くは無いのには身体の震えが止まらないとか、引きつった笑みを浮かべて軽い混乱に陥った人が来るわよ。

あなたのは普通の感覚。恥ずかしいなんて思うことはない。むしろ、心の内を開けてくれて嬉しいわ。四六時中付き合うのは無理だけど、あなたはあなたをしていることに自信を持ちなさい、ジャンベ」

「マルシアさん、ありがとうございます。僕の胸中を聞いてくれたのは、カールロさんとベルナルド氏を入れて三人目です」

「元氣になつてくれてなにより。でも、あなたは音楽以外にも沢山のことができるじゃない。弓矢の扱いも上手くなってきたし。それに、あなたは自身が思う以上に勇気があるわ。きつとまた、地下世界の時のように、些細だろうけど、あなたの行動がきつかけになって、何か動きが生まれるかもしれない」

まさかそんなことは笑顔で否定しつつ、ジャンベは心の中で喝を入れた。

いつまでも甘えていれられない。困り、悩んでいる者は他にもい

る。自分の足元ばかり見ず、背を伸ばして、周りも見つめなければ。そうして、敵が塹壕を掘り、威嚇と妨害の砲弾がたまに発射される以外、比較的、静かな三日間が過ぎた。

「戦だからといって、ずっと戦う訳ではない。数年間に渡る戦も歴史にあるが、硬直状態。要は睨み合いじゃな。実際に戦闘があつた日数は意外に少なかったようだ。だからといって、だらけて良い理由にはならん。せめて体を動かせ」

ゲンエモンの言葉に、暇を持て余してた者たちは武器を取り、稽古をした。

ゲンエモンは静かすぎると思った。ゲンエモンに限らず、聡い者は後少して事が動き出すのを感じ取つた。鍛冶屋で例えれば、エトリアは金床に横たわる金属であり、金槌がサンガットならば、正に強烈な一撃が振り下ろされようとしていた。

結局、三日目を過ぎても食事は二回供されたが、量を減らされてた。三日目の前から、量が減らされており、この減量に不満を露にする者もいた。ゲンエモンは諭した。

「慌てるな。焦るな。明日か数日以内には、戦いがある。そうなれば、量と回数も増える。むしろは戦闘してない。その事実を認識して、食事が供されるだけありがたく思うのだ」

物見台からの報告で、サンガット西方陣営で動きがあり、九km地点に四角形の更地が作られた。野営地からは離れた戦線寄りの位置。兵器を設置するかと思われたが、物を置いたり工事をする事も無く、整備だけ行われた。首を傾げつつ、監視は続けられた。

早朝の戦闘があつた一五日を過ぎて四日。真夜中に差し掛かる頃、カースメーカーたちが飛び起きて、警戒を促した。

キアラはシンシヨールや周りの者へ起きてと叫んだ。

「起きて！ 噴火寸前。後数時間としないうちに来るわよ」

冒険者たちと衛兵は武器を身に付け、眠い目を開けて、不気味に聳え立つ世界樹を見上げた。ゲンエモンは数名の偵察を冒険者から派遣。二十分後、偵察の者らは慌てふためいた様子で舞い戻った。剛のある者が答えた。

「翠緑ノ樹海全体がざわついている。一足踏み入れた瞬間、四方八方から殺意を向けられて、奥へ進めば確実に殺られていた。少し先へ行つてみたが、明らかに深層の樹海生物がいた。姿は見えずとも、ひしひしと気配と息遣いが伝わってきた。命からがら、一本の糸を頼りに綱渡りでもしてようでしたよ。もう偵察はごめんできあ」

こうなると、冒険者たちの眠気とだらけは一気に吹っ飛び、迷宮探索モードへ移行した。険しい緊張で内壁が包まれる。

夜が明けた。僅かに筋枝が緩んだ者も出始めたとき、彼らの股をギョツと閉めることが起きた。

塞がれた出入り口の奥から、怪物たちの咆哮が轟き、世界樹の出入り口をぶると揺らした。時を同じくして、外壁側。西の方角で動きが見られた。明け方の少し前から、サンガット陣営から歓呼が上がった。

アクリヴィイはチノスを高台まで連れて、遠くを覗かせた。

「申し訳ありませんが、こう暗くては僕の眼でも見通せない。ですが、明るくなれば、あなたにも敵が歓呼を上げて出迎えたものが判るでしょう」

陽は差さなかった。雪は無いが、どんよりと曇ってた。夕方から大雪が降り注ぎ、二、三日止まない予測が立てられた。大雪の雲が過ぎれば、久方に晴れて、そこから気温が少しずつ上昇する。

「だが、予測は予測。何日も降り続けて、陽は差さないことは十分ありうる。春の到来を前にして、我々は冷たく凍えた大地に身を横たえるかも」

こう言う者も少なからずいて、決して否定できるものでもなかった。

やがて、曇り空に覆われたエトリアの大地へ運ばれたガレオンなるものの正体が判明した。

離れた南の高台からでもわかるほど巨大な大砲が千人に牽引されてた。後方では、交代のためか二千人が控えてた。距離と方向からして、九km地点にある四角形の更地へ設置されるのは明白。サンガットからエトウの名に加えて、ガレオンの名が叫ばれた。

「エトリアの大砲よりもつとでかい!? あれはなんですか」

「ガレオン砲!」アクリヴィは高台から身を乗り出して、砲の名を呼んだ。アクリヴィは興奮した面持ちでチノスに尋ねた。

「ガレオン船は知ってる?」

「ええ、名前ぐらいは。最新式の大きな船ですよね」

アクリヴィは肯き、うんちくを語った。チノスは気圧されて、黙ってうんはいと頷いた。

「そう。見聞きした程度で、あのガレオン砲は実物を見るのは私も初めてだが、名前の由来は単純。ガレオン船に載せられないほど巨大だから。世界でも数個しかないと言われてる。

何度も言うけど、大きすぎるのが欠点。船はもちろん。陸での運搬も困難だから、遠征よりかは防衛向け。

しかも、一発撃って、次のを撃つまで冷却するのに時間がかかる。頑丈だけれど、ファルコネット砲より連発には向かない。その分、威力は絶大。奴らがシーランの沿岸国家に停泊したのは聞いてた。あそこにガレオン砲があるのは知ってたけど、あんな化け物大砲を引張ってくるとはね。見たところ、さすがに一台だけか」

エトリア軍は騒然した。あそこまで巨大な大砲はエトリアにすら無い。エトリアにも通常の規格より巨大な砲が二台あり、それぞれ北と西。南と西の中間地点に配備されてた。その砲ですら、最大飛距離は八km、有効射程距離は四km。通常のは最大四km以上。つまり、どう頑張っても、エトリアにガレオン砲を壊すに至る距離が出るほどの兵器は存在しなかった。

なに、一台だけで何ができるとたかを括る者もいたが、不安になる者も多い。

知識が無い者は、世界樹を破壊するとか、一発で外壁の周囲を木端微塵にするぞと思う者もいた。

二人は外と内の壁を見渡した。正念場かと、アクリヴィが呟く。場面は変わり、遂にトルヌウア内壁での戦いが勃発した。

出入り口の奥から、怪物たちの咆哮を上げて、土を掻きむしり、物を破壊する音が段々と大きくなってゆく。

来るぞ来るぞと意気込むロディムに、静かにしるとコルトンがツツコミを入れる。

破壊音は増してゆき、隙間から小さな樹海生物たちが飛び出してきただ。ただ、それらは森ネズミやモグラなど浅層の者で、怯えて飛び出したといったほうが正しく、壁に近付いても戸惑った様子だった。幾つか鉄球を投げ付けたら、慌てて下がっていった。

雑魚は無視して、肝心の方が来ないか注視した。

隙間から、今度は何個もの液体がするりと出てきた。ウーズの群れだ。

「あれは毒を持つてる。今度は無視できない」

ウーズたちはまとめて、門を目指してきた。

今度は容赦なく、先に槍を投げ付けて、難を逃れたのは鉄球で潰した。ぴーと悲鳴を上げて、ウーズたちは全滅した。ゲンエモンは油断するなど言った。

「前哨戦にもならん。大物が来るぞ。壁から四十m以内は槍で応戦。十m以内では鉄球を投げ付けよ。アルケミスト諸君はわしが号令したら、盛大に放ってくれ。弓や銃を持つ者はどこでもいい、怪物が集中する箇所を撃て。飛ぶような奴は即座に撃ち落とせ。カースメーカー諸君は各自の判断で任す」

出入り口付近の杭が内からぐいぐいと押されて、土が飛び、石膏の破片が散る。限界に達した堰が崩壊するように、出入り口を被う物が膨らみ、盛大な破壊と共に大型の樹海生物が湧き出る。

白き魔狼。白いカマキリ。大蜘蛛。人喰いの大ナマケモノ。火を噴く梟。両手から剣のごとき鉤爪を生やした黒熊の獣人。五階層に生息する赤と黄が体色が派手な鉤爪モグラ。茶と金の凶悪猛牛。青と金の甲虫。怪物ヤンマたち。三階層のアリども。大サソリ。うごめく毒樹。目障りな大型の吸血蝙蝠と怪鳥の群れ。

放ての号令で、真つ先にゲンエモンは番えた矢を放った。金の羽根を持つ怪鳥一羽仕留めた。一斉に矢と銃弾が飛ぶ。怪鳥、蝙蝠、怪物ヤンマが地に落ちてゆく。

空を飛べる怪物たちは内壁の上にいる、餌であり敵でもある人間に

向かう。今度はアルケミストたちが盛大に術式を放つ。火と雷が内壁の周囲を被いつくし、黒焦げたものが地を埋める。空を飛ぶ怪物たちの第一陣は掃討された。

内壁の上空が火と雷で被われた際、地をゆく怪物たちは足を止めた。火と雷がなりを潜めたら、慎重な足取りで進み始めた。

三五mのラインまで近づいたとき、一斉に槍が投げられて、矢が撃たれる。甲虫や甲殻の皮膚を持つ者には弾かれたが、大抵は刺さり、一発目が急所に当たって倒れるのもいた。

凶暴な猛獣たちが唸って、一つの塊になって壁へと突進する。

多少、槍や矢が刺さっても、物ともしない。十m圏内まで接近したのを境に、槍と、持ちやすい先端が幾つか付いた鉄球があらん限りの力で投げつけられる。ロデームは剣を振れない不満も込めてぶん投げる。

これには、硬い皮膚や殻を持つものでも耐えられず、破られた。仮に表面上は大して傷を負ってないように見えて、凄い衝撃で下の筋肉を著しく傷つけていた。

ロデームの投げた鉄球は、先頭を走る黄金猛牛の頭を粉々に砕いた。頭から脳髓と血を撒き散らして、猛牛は壁を前に前転して、腹を向けたら右へごろんと横たわった。

青熊だ！ 大鰐だ！ 冒険者たちが警告を発する。

五階層、三階層で多くの者を屠った強敵が現れた。こと、青熊には畏怖の念を抱く者もいた。これの凄い生命力は知られてた。大鰐が三頭、熊は二頭ずつ。

獯猛な勢いで来ること三十m。槍を一斉に投げるが、深くは刺さらず、致命傷には至らない。

お次は、錬金術師たちによる攻撃。金や銀の錬金籠手から火と雷が獣人と大鰐を包み込む。

鰐と獣人は苦しんでたが、獣人はばたばたと転げて火を消し、黒く焼かれた直視し難い姿で来る。遂に装填が完了した鉄砲の掃射が行われた。鰐には五発。青熊には十発以上の弾丸が浴びせられた。

大鰐は術式の時点できつくに事切れてた。頭と心臓に穴を穿たれ

た青熊は数歩動いて、ずしんと倒れた。汗を拭ってコルトンが言う。「相変わらずしつこいな」

樹海生物による地上侵出は二度も試みられたが、最初の襲撃と比べ、数や質は圧倒的に劣るので、迎撃は容易かった。三度目の攻撃が開始されかけた頃、例の絶叫が以前にも増して大きく響き、エトリア内部から建築物が豪快に壊れる音が内壁にまで届いた。樹海生物たちは泡を食って引き返すか、壁にまで寄って、片付けられた。

内壁の防衛者たちは外壁側を見やる。

再び、一際大きな空飛ぶ長虫の背から号令がかかり、アジロナ外壁へ総攻撃が開始された。

術をかけられた剣を抜けと言い、ゲンエモンは七福葉八をかざした。仄かな光を浴びて、ゲンエモンは胸のざわめきを静めた。落ち着かなさそうにしていた者らも、刀剣類から発せられる光を見て、安堵した。

ゲンエモンは刀を鞘に収めると、キアラに尋ねた。

「前とは異なる。わしはさきのを聞いて、言い様のない不安に陥った」「彼は哀れな奴隷の死を糧に、一時的に力を増幅させた。あんな惨く、怖い呪術師を私は知らない」

いつもは動じないキアラが、俯いて怖いと言った。

ゲンエモンは険しい面持ちで空を飛ぶ翼竜四頭を見やった。開戦時のあの日より、悪い事が起きそうでならない。

ゲンエモンはカースメーカーらに、地下の様子はどうかと聞いた。三十人ものカースメーカーが手を繋ぎ、精神を地下深くへ根下ろし、迷宮の浅層で徘徊すら存在を感知する。一人が告げた。

「それなりに深いところにいる。が、数や強さは今日の比ではない。いずれ来る。そのときは、この内壁で防ぐのは難しいだろう。それらは、かの者が発する大呪の咆哮たいしゅうを聞いても、怯えないはず」

彼らは口を閉ざした。外壁で非常事態が起きてた。翼竜三頭の背から外壁へ向かって、槍や短剣に混じって、何かが網から大量に落とされてた。

外壁から衛兵たちの恐怖に満ちた悲鳴があちこちから上がる。何

が起きてるか確かめるため、ゲンエモンは西南北へ二人一組、馬と徒歩で向かわせた。

アクリヴィとチノスはしばらく、南の外壁にある高台から西側の動向を観ていた。

数百人がかりで迅速に巨砲を設置し、発射する準備をした。誰もが、ガレオン砲の発射準備が整い次第、攻撃が開始されることを予測していた。

内壁では人と怪物が戦っていたが、注目は外に向けられてた。西、北と南にいるワイヴァーンに何人も搭乗し、巨大な翼竜の背には、贅沢にもたった一人だけで乗る敵の総大将がいた。同じく、高台に上ってきた南外壁担当の司令が呟いた。

「一番絶望に強いられた日かもしれん」

内壁での戦いはどこ吹く風で、外壁の者たちは王賊軍の出方を待った。

やがて、来たるべきことが到来した。ガレオン砲が発射された。盛大に火を噴き、ガレオン砲の弾は外壁より遙かに越えて、後方にある民家数軒を貫通した。直撃した屋根や二階、一階部分は大破。もうもうと木屑と煙の粉が立ち込める。

直後、翼竜たちが飛び立ち、死を呼ぶ声の本都市に行き渡る。ガレオン砲の凄まじい威力に驚愕する思いは消えて、守備に就く者たちは一様に大きくなった声を聞いて慄いた。

翼竜の背に乗る者たちは、上から槍と短剣を次々と放り投げた。僅かに火炎瓶もある。何人もの兵士が貫かれる。誘爆を防ぐため、早急な消化活動が行われる。

槍と短剣、火炎瓶の次は、別の物が投じられた。これらは盾や板で簡単に防げる威力の低い物だが、醜悪で残忍な行為を示す物であった。

武器でもないのに投げ入られた物とは、生首。

開戦日にて討ち取られた警備隊と思しき者の首もあるが、白人黒人黄色人種と問わず、大半は老若男女だった。サンガット軍がエトリア

の道中に至るまでの間、襲われた者たちの哀れな果てた姿だった。

首はどれも傷痕が目立ち、酷い恐怖と苦しみの表情を浮かべてた。残り少ない余生を思い思いに過ごす年寄り、汗水たらして働く男、恋に憧れる乙女、未来を夢見る少年少女。かつて様々な想いを抱き、生きていた者たちは死んだ後も惨たらしい辱めを味わわせられた。空から大呪の咆哮が発する。

兵士達の中にはやめてくれと泣き叫ぶ者もいれば、武器を捨て、胃を脱いで頭を掻きむしる者。何を思ったか身体を広げて自ら投げ槍や短剣の餌食となる者、自殺をしようとする者まで出た。

破邪の術がかけられた剣を持つ冒険者が走り回り、カースメーカーたちが落ち着かせようとする。

アクリヴィとチノスがいる高台の狭間にもひとつ、小さな首が落ちた。日数を経て腐っていたためか、追突時に顔の三分の一がぐちゃりと弾けた。

腐肉がたれて付着し、趣味の悪い飾り物と化したのは赤子の首。殺される前か後かは知りようもないが、目玉をくり抜かれており、青ざめた毛も薄い幼き顔は、真っ黒い虚空の眼窩を二人に向けた。

チノスは跪き、吐いた。アクリヴィはじっと見つめたら、自ずと逸らして空を見上げた。

後ろから悲鳴を上げる兵士がいた。アクリヴィは振り返ると、恐怖に呑まれた一人が槍で赤子の首を突き飛ばして、自らの身を投げようとした。

「やめろー」とアクリヴィは彼の肩を掴んだら、膝に蹴りを入れた。彼は足をさすりながら転げた。

「自殺したいのなら、私が見てないところでやれ」

冷静さを取り戻した彼は済まないと言って、立ち上がった。翼竜三頭は補充の為、一時去った。

地上の侵攻部隊は当然、留まってはおらず、全力で外壁を目指してた。首と危険な飛来物に気を取られてたが、サンガット軍の兵士一人一人の顔も異常なことに気が付いた。生首と咆哮に負けず劣らず、ぞつとする光景。

彼らは常人では決して作れない、複雑怪奇な表情を見せてた。怒っていて、泣いて、苦しみ、笑ってるような、どれとも言い難い不気味な顔つき。目立つのは、笑顔。楽しみ、嘲り、誤魔化し。色んな感情が入り混じってる上、笑顔はどれとも取れて、取れにくい。しかも、顔をぴくぴくひくつかせてるため、余計に気味が悪い。

エトリア勢は、世にこれほど忌まわしい集団を見たことが無かった。

空襲を受けてるときも、エトリア軍の中にはなんとか平静を保ち、地上部隊に攻撃を仕掛ける者も多かったです。

しかし、彼らは四日前と違っていた。

体に矢や弾が当たっても躊躇せず、砲弾で腕が千切れても表情を変えず、無言で進んでくる。

カールロは引き絞った弓弦を放した。矢は真っ直ぐ飛び、軽装歩兵の心臓に深々と刺さった。それにも関わらず、その歩兵は顔をさーつと青ざめながらも、二十歩ほど歩み、その表情のままどさりと倒れた。ベルナルドが軽口を叩く。

「やあ、凄くきんもい奴らだね。あの長虫もうざったい。僕も君みたいに、弓の扱いがもつと上手ければ、あの面に一発お見舞いしてやったのに。ここまで来るか、こっちから仕掛けたとき、鞭と短剣で刻んで、あいつらの顔を見れないものにしてやるのを楽しみにとっておこう」

当のカールロは相方の変わらぬ態度にやれやれと呆れた思いを抱くも、微かに恐れを抱いてしまったので、半ば救われた気もした。

敵は一糸乱れず行軍している。規律の取れた軍隊と表するよりは、見えない糸でがんじがらめにされて、傀儡師が人形を無理矢理規則正しく動かしてるようだ。

全員がそうではなく、将官クラスの他、北側にいる白い肌が目立つ北方の傭兵、南側にいる浅黒い肌の南方出身の戦闘部隊などは、エトリア勢と同じく緊張に満ちた顔付きの者ばかりで、不気味な表情を浮かべてなかった。

咆哮を合図に、軍の進軍速度が加速し、翼竜三頭も飛来した。以前

とは打って変わった強烈な攻撃。空からの支援。ちよつとやそつとじゃ倒れなくなつた敵兵に、ガレオン砲の脅威も加わり、空を我が物顔で席卷するかの者が発する声の強さも増した。開戦から五日で陥落するのか、絶望に囚われてそう思う者も出てきた。

各司令が立ち上がれと叫び、とにかく攻撃するよう促した。

矢と弾が飛び交う。土砂を積んだ櫓が破壊される。梯子が粉碎。誰かが倒れても、手を差し伸べる者はおらず、無情にも踏み付けた。

空からは槍と短剣に火炎瓶が落とされて、またしても生首がばら撒かれる。壁を転がるのもあれば、民家の屋根や壁、窓を破って入り込み、ぎやつと悲鳴を上げさせた。

更には、火炎瓶が大砲の火薬に当たり、間に合わず炸裂した。西と北の大砲が一個ずつ暴発して、爆風と鉄の破片で死人と負傷者が続出。

そうして、恐れてた事態が起きた。ガレオン砲が発射されて、西側の大門右寄りに直撃した。

幸い、大門と落とし格子に自体に被害は無かつたものの、右側にある跳ね橋の巻き上げ装置が壊れた。砲撃のショックにより、跳ね橋は半ばまで落ちかかり、左側の装置のみで支えられてた。衛兵たちは左の装置と鎖を懸命に引つ張り、鉤縄が何十本もかけられて、大門に寄せようと引つ張る。

不気味な表情を浮かべる集団も迅速に動いた。彼らも縄を引つ掛けて、人がぶら下がり、重しに梯子がかけられた。鉤縄が斬られていく。ミルティユーゴが号令を発す。

「人を集め、大門を死守せよ！ 集まる敵は一人残らず殺せ」

敵の攻撃に負けじと、エトリアは奮闘した。

西の大門へ集結するサンガット軍へ、夥しい矢と弾が降り注ぐ。戦闘開始から一時間半を上回る頃、エトリアのしぶとさにサンガット側がやつと諦めて、自陣へ退いた。

跳ね橋が大門へ傾けられて、修復作業が急ピッチで開始。

多くの者が身も心も疲れた。生首には憐憫の目が向けられて、守り倒れた者たちの死を嘆き、勝利の鬨は叫ばれなかった。

それでも、臨戦態勢を整えた。今日はまだ、昼も過ぎてない。敵の熱気は冷めやらず、もう一度、攻撃を仕掛ける可能性は高かった。疲れと傷も癒えぬうちに、エトリアへ動揺をもたらすことが遠方で起きた。西南と西北、メテイルリクとエピザ・トーテイの山から大きな煙が立ち込めた。

サンガットの襲撃か。偶然の山火事だろ。まことしやかな噂が流れる。目敏い者は、両国から派遣された兵士達が真剣に考え込むような眼差しで煙を眺めているのに気付いた。

重たい空気が漂う中、何人かが立ち上がり、状況を打開する為の案を携えて総隊長の下へと馳せ参じていた。

三九話 抵抗

チノスにここで待てと言ひ、アクリヴィは決然とした足取りで総隊長の下へ向かった。少なからず、戦意を失わず、恐怖に打ち勝ち怒りに燃える者もいた。

アクリヴィもその一人だった。

人類の歴史において、合戦で首級を上げたり、死体に惨い仕打ちをするのは知っていた。師ヘルメスと共にいた頃は、戦後間もない地域を通り、野晒しにされた山ほどの遺体を見たことがある。恐れや嘆きよりも先に、その光景を見て抱いた感情は怒り。彼女は激昂していた。

人間がしたとは思えぬ下品で最低な行為を目の当たりにして、怒り震え、空を飛ぶ生意気で腹立つ長虫を叩き落としてやりたかった。そこで、一つ案を提出することにした。

彼女以外にも、なんとかしなければと立ち上がり、対抗策を携えて総隊長に向かう者らがいた。

西側の陣地にある大将たちが泊まる幕舎に行き、前に立つ兵に面通りを願おうとしたところ、無言で幕を上げて、通るよう促した。まるで、既に来るのが解っていたようだ。

アクリヴィが来たら、ミルティユーゴも解つていると言いたげに、君はここへ行くのだと冒険者専門店の一つを指した。

「君以外にも、何人が来ていた。そして、同じことを述べた。私としても、陸より、まずは空の脅威をなんとかせねばと思つていた。君も同じだろうか？」

アクリヴィは肯いた。

「イアンの雑貨商へ行くのだ。そこで、飛竜対策のための武器を作つている。まあ、一種の花火のようなものだが、詳しくは先に行つたドナやブレンダンなど、君と同職の者たちに聞けば早いだろう」

やはり、自分以外にも立ち上がった者はいて、考えていることも同じきたものだ。

「その前に、一つお聞きしてもよろしいですか」

「なにかね」

「あの大きな煙です。二国の山から、大きな煙が立ち込めていました
が、総轄隊長殿はご存じであられますか」

ふうむと顎鬚を撫でて、ミルティユーゴは一瞬、考え込んだ。

「君はエドワードと共にするものだな。ならば、口が堅いと信じ、教え
よう。あれは、二国が援軍の要請を考えてくれた合図だ」

「考えて、くれたですって？」

「そう、確実に来るわけではない。来る可能性が以前より高い報せだ。
だから私も悪戯に流布して、ぬか喜びさせたくない。来ないとわかっ
たときの失望は大きい。折を見て、いずれ来るとは言うつもりだが
ね」

やれやれと心で呟くも、これほどの大軍だから仕方ないとも思っ
た。それにしても、同盟国がここまで苦しんでいるのに、どこも抵抗し
た話を聞かない。殆ど素通りさせている。

個人ならともかく、大きなものになれば、所詮、その程度の繋がり
か。一国が犠牲になって、自分達が助かると思っているなら、呑気
な考えと言わざるをえない。アクリヴィはすぐに、もやつとしたイラ
つく思いを振り払い、自らのすべきことに集中しようと切り替えた。

アクリヴィは一礼して、幕舎から出た。すると、ゲンエモンとすれ
違った。あの人も同じ要件か？

今はそれよりも、生意気な飛竜を落とすための武器を作ることであ
が一杯で、ゲンエモンを呼び止めなかった。

ゲンエモンを見て、あなたもかと言った。

「しかし、失礼だが、あなたに細かな作業を要する武器の製造ができる
とは思えない」

「なにか、勘違いされておりますな。わしは、こちらから打って出る提
案しにきたのです」

ミルティユーゴはゲンエモンの顔を見、どうぞと椅子を勧めた。ゲ
ンエモンは先に総隊長が座ってから、自身も着席した。

ミルティユーゴには、アクリヴィらと同じく、飛竜への対抗手段を
考えてた。だが、壁を出て、攻撃する案は無かった。あるとすれば、そ

これは、絶対に追い詰められたときであり、華々しく散る時になるだろうと考えてたので、ゲンエモンの打って出る案は興味深かった。

「それでは、是非ともお聞かせください。我らには不可能と思われた攻撃案を」

ではと、ゲンエモンは語った。

初めは、はいと聞いていたミルティユーゴも、見る見る気色ばみ、最後は立ち上がり、わざとらしく頭を振り、失望した表情を見せた。

「馬鹿げている。妙計奇策みょうけいきさくは必ずしも、誉められるとは限りません。冒険者が冒険に向かう際の安全人数とされた五人の十倍である五十騎を囿にして、数日以内に来る深層の強力な怪物を引き連れて、外にいるサンガット軍などと戦わせるなんて」

「だが、価値はある。内の敵が外の敵と戦ってくれる」

「危険が大きすぎる。万が一にも、いいえ、高い確率で何体かは列から離れて、壁を守る兵士達に襲いかかる。成功すれば、確かに当方のメリットは大きい。失敗のデメリットが巨大。最悪、半数以上が本都市の中を徘徊させてしまうことになる。そうなれば、その日にエトリアは陥落するでしょう。無理な物を認めるわけにはいかない」

「だから、入念に安全策を講じる必要がある。ルートを決めて、そのこの通路に障害物を置き、伏兵を配する。五十騎には、人馬の身に新鮮な血や肉を下げれば、効果的に引き寄せられます」

「勝手に進めてもらいたくない。エトリア自衛軍の大将はあなたではなく、私です。最終的に決めて、責任を負うのは私です。勝手に動くような軍は軍ではなく、烏合の衆。武器を持った危険で厄介な集団ではない」

「無謀は承知の上です。ですが、わしは空の脅威と同じくらい、陸の脅威。それも、両方の壁をなんとかするしかないと考えております。それには、樹海生物を利用する手はない。どうかご一考を。もしも、認可して頂いた場合、囿役の先鋒は私めをご指名していただければ幸いです」

ゲンエモンは詫びるように深く頭を下げた。

ゲンエモンが去った後、総隊長は思案した。両方の壁を対処したい

のは同意。

ただし、樹海生物を連れて、敵に戦わせるといふ発想は非常に豪胆だが、危険が大きく、不明な点も多い。

長い歴史において、調査の名目で卵や樹海生物の幼生を持ち帰ったことはあつても、成長した。

ましてや、深層の生物を壁の外まで連れ出したことは一度もない。危険とわかりきっているからだ。更に、現状では、道の障害物を作るための人員を割ける余裕も無ければ、時間もない。

怪物を外のサンガット軍と戦わせるメリットは魅力的だが、実現には、余りにもデメリットが大きく、人と時間を割かなければならない。しかも、五十の人馬を実質、犠牲にもする。

表面では強く否定こそしたが、ゲンエモンの案に少々、惹かれてたのも事実。自分一人で煮詰まる。

今日を切り抜けられたら、将官たちを集め、提案者も呼び、会議を行うことにした。そう、今日の攻撃を凌がなければならぬ。その為にも、イアンの雑貨商に向かわせた者たちが一刻も早く、武器を完成させることを願った。

東側にあるイアンの雑貨商に着いたアクリヴィは早速、中に集まる数十名と共に作業にとりかかった。

家主であるイアンは不在だが、役立ててくださいと事前に彼が許可を出したからこそ、自由に使えるのだ。眼鏡をかけた文学青年風なほそっこい男で、武に長けているわけではないが、モリビトを許し、家と仕事を無償で貸したりして、器の広い立派な方だと感心した。

イアン雑貨商で色んな物を取り扱っており、打ち上げ花火もある。雑貨商では取り扱うのは僅かな物だが、エトリア生誕祭の折に打ち上げたりする。

アクリヴィ、他。雑貨商に集った者たちの対飛竜用兵器とは、花火だった。

ただの花火ではなく、中身は鍛冶鑄造の際に使用後に出てくる不要な鉄粉てつぶんや、所々に唐辛子や胡椒こしょうが飛び散るよう設計された特別な花火を作っていた。幸い、数は少ないものの、完成品や作りかけの物もある。

り、それらをドナなど、花火に詳しい指導者の下、慎重にかつ素早く改造していた。

作りながら、話し合いも行われた。粉の分量はどうするか？ 幾つ作れる？ 臼砲で飛ばせるか？

「昔、臼砲で何度か飛ばしたところを見て、イアンさんや職人と一緒に飛ばしたこともあります。そこは大丈夫でしょう」

ドナは最後の疑問に答えた。

「ただし、数に関しては、代用品となれる物を作れるでしょうが、沢山は無理。エトリアにある大砲の内、一門に付き一個程度で、それも半分ぐらいがやつと」

ドナは最初に完成した特製粉花火玉を指先で撫でた。

その後も話し合われたが、結局、ワイヴァーンが飛来する地点をいち早く見定めて、筒を運ぶかその場にある臼砲で打ち上げる手立てしかなかった。

残念ながら、イアン雑貨商には、花火を打ち上げるための筒は二つしかなく、西南北に一個配置は無理だった。時間が許す限り、打ち上げ用の筒も生産した。

数時間経ち、時間にして、午後の三時か四時頃。外からけたたましい喇叭の音が響く。二度目となる敵の攻撃が始まったのだ。十名ほど残り、各々、筒と花火を持って、西南北の壁へ戻った。時間までに、四個の筒と計十一個の粉花火が完成した。激戦区であろう西に五個、南と北に三個ずつ運ばれる。

大丈夫だろうが、急造した筒を使うのが不安なら、臼砲で打ち上げることにした。

外では、飛竜はまだ飛んでないが、大量の踏み鳴らす足音と怒声、鎧や武器ががちやがちやと鳴る音が何百何千にも重なって聞こえる。

数名で筒と玉を抱えて、アクリヴィは南の壁へ駆ける。

「待っていないさい。すぐに撃ち落とすよ」

開戦を報せるようにガリレオ砲が火を噴き、西側の壁に直撃し、大きな穴を穿つ破壊音がする。

「知らないのもいれば、知っているのもいるね」

ベルナルドが遠く指して言う。彼の指した方向には、怪物たちは砲弾が届かないぎりぎりの距離で鎖を繋がれて、硝煙に混じって色濃く漂う血と肉の臭いに興奮していた。

アジロナ外壁は今の所、一人の侵入者も許していなかった。しかし、午前の戦いでは、大橋が落ちかけて、危うかった。

おまけに、喇叭が吹かれるや静まっていた敵陣地が賑わい、またしても例の不気味な表情を浮かべて、行軍してきた。エトリア勢は嫌な予感がした。不気味な集団を橋替わりにして、怪物たちを渡らせるのか。

不安に慄く周囲に対し、ベルナルドは嬉々としていた。

「やあ、あれら相手なら、なんも躊躇う必要はないね。探索の時と同じ対応をしてやればいいだけだ」

どおおんと一際大きな発射音を上げて、ガリレオ砲が発射される。相当な衝撃に固定していたネジが飛び、砲台がひび割れて、ガリレオ砲は後ろへとずれた。

そのせいで、目標が逸れて、西の大門から、ちょうどベルナルドとカールロがいる壁の方に大きな穴を穿いた。カールロは咄嗟に伏せて助かったが、着弾のショックでベルナルドはおっと、転んだ。幸い、カールロが受け止めたので、事なきを得た。

黒煙をゆらめかせながら、ずれたせいでやや上を向いて、見当違いな方向を巨大砲は見つめていた。

悪態をつきながらベルナルドは立ち上がり、ざまあみると嘲笑った。

ベルナルドはあつと指した。

「見かけないなと思ったら、あいつあんなどこにいやがった」

なんのことだとカールロはベルナルドが指す方向を見るや、裏切ったかと舌打ちした。

そこには間違いない、脂ぎった顔のむさい赤髭の男モンパツイオがいた。奴隷や市民兵に混じって、遠くで微かにしか見えないが、彼だった。他にもヌナなど、彼の仲間もいた。

カールロとベルナルドは彼がいた思しき方を睨んだ。

「同じ穴の貉というわけか。いや、元の巣穴に戻っただけか」

「どちらにせよ、やる気が増したね」

盗賊に堕ちた男がいた方から、眼前を迫る敵へと視線を戻した。

二人がそうこうして居るうちにも、いくら攻撃を受けても怯まず、中々倒れず、誰かが倒れてもわき目も振らない。迅速な速度を保ったまま集団は接近していた。

ここに来て、敵は圧倒的な物量と人員で強引に攻めてきた。悪いことに、以前とは異なり、敵の兵士は一人一人が明らかに異常であり、死や傷付く恐れも無く無言で近寄ってくる。

守備側はただでさえ人が少なく、防戦で手一杯であったが、こうも躊躇なく攻められては、人数の差が当然出てしまい、必死に攻撃するも手が足りず、敵は囲いの輪を狭めるばかり。応射もエトリアを上回ってる。

長梯子が対岸に次々とかけられる。敵兵が来る！

槍を構え、剣を抜き、接近戦に備える。だが、兵士達はこなかつた。代わりに、兵士達がぎざつとあちこちに隙間を空けると、怒涛の勢いで鎖から解き放たれた怪物たちが突撃してくる。

主に四足歩行の哺乳類や爬虫類、両生類に属する怪物たちで、大半はオオトカゲだった。背中には敵兵も乗っている。

守備側は戦々恐々した。特に、樹海生物の類を見慣れないメテイルク、勇猛で知られるエピザの戦士たちすら、恐れのみより自然と後ずさってた。

突撃のタイミングを見計らい、エトウ以下四頭の翼竜が大空へと飛翔し、一番大きなワイヴァーンに一人で乗るかの者エトウが例の恐るべき声を上げた。

兵と怪物の勢いを後押しして、エトリアの守備隊から戦意を奪う。

冷静に狙えば、橋を渡るまでに大分、片付けられたはずであろう怪物たちは思ったよりも数を残し、重ねかけられた橋を渡る。

オオトカゲたちは吸引力のある足で易々と橋や壁を登ってくる。

登ってくる前に片付けられたのも多くいたが、遂に壁を越えて、守

備隊の兵士にオオトカゲと敵兵が襲いかかる。

何頭か壁へ登れたのを機に、敵兵も慎重な足取りで渡ってきた。ただ、殆どのオオトカゲと敵兵は大して時間もかからないうちにやられた。

盾と槍袵で囲まれて、隙間からはときに矢も撃たれて、壁で縦横無尽に暴れ回ることは敵わず、瞬く間に片付けられた。それよりも、オオトカゲに気を取られてるうちに、次々とかけられる長梯子と堀に放り込まれる土砂が問題であった。

前よりも、より膨大な土砂が放り込まれる。一日もあれば、掘のどこかが埋まりそうな勢い。

更には、ワイヴァーンが壁の上を飛び回り、容赦なく上空から攻撃を仕掛ける。怪物たちの第二陣が迫る。空からの援護もあり、先ほどの二倍近い数の侵入を許し、空の攻撃もあり、鉄壁の陣に隙間が出来て、そこを突かれてしまう。壁のあちこちで剣戟がする。

急いでくるアクリヴィたちの前に、盾の壁を乗り越えて壁の裏へと来たオオトカゲと五人ぐらいの兵士がいた。五人は全員、あの表情を浮かべてる。

数十メートル手前だったのに、邪魔ね。アクリヴィは前に出ると、鍊金籠手を着けた両腕を伸ばし、術式を放った。敵が浸入したときに備えて、事前に術式を放つための力を溜めていた。

籠手の透明な部分が鈍く青い光を発し、今体験している寒さの数倍はあるかという冷たさを帯びた風が叩きつけるように敵に吹き荒び、五人とオオトカゲは数メートル吹っ飛び、不格好な氷の彫像たちは石を敷き詰めた地面に落ちると、あちこちがばきんと砕けた。

「さあ、急ぐぞ」

アクリヴィは運び手の一人に戻り、数名は急ぎ、壁まで戻った。白兵戦はエトリアが優勢で、あらかた駆逐されていた。空と眼前に迫る敵軍が厄介であった。

邪魔されないよう、高台に上る。チノスは無事だった。

彼らは素早く発射準備を行う。台を置き、重石や縄や縛るなどしてできる限り固定し、打ち上げ用の火薬など細々とした物を詰める。七

分もして、準備を終えた。その七分の間にも、空の猛襲はいやまし、大量の土砂が放り込まれる。

まだ、どこからも花火が上がった音がしていない。極力、翼竜が近い位置で打ち上げたいのだ。アクリヴィイはチノスと一緒に翼竜の動きをつぶさに見て、打ち上げる頃合いを計る。

「いい、私とチノスが来たと言ったら、導火線を点火してくれ」

失敗は許されない。チャンスは一度限りだと思え。アクリヴィイはなにがなんでも、憎たらしい空を飛ぶ長虫の息の根を止めてやりたかった。

武器を補充した翼竜が三度目の襲撃に来る。アクリヴィイは槍を突き上げ、高台の狭間の上に立つ。橙色のコートを着た長髪ストリートな金髪の槍を持った女は目立ち、翼竜は惹かれるように高台を指指して飛ぶ。今だ！ アクリヴィイは叫び、飛び降りて目をぎゅつと閉め、耳を押さえる。微かに傾けた筒から、真昼間にも関わらずしゅるしゅると花火玉が火を噴いて飛んでゆき、翼竜が旋回するよりも早く盛大に炸裂した。

酷く黒い星が咲き誇り、翼竜ごとぶわつと空を黒っぽく染める。翼竜は泣き叫び、げげえと呻き、しゃにむに首を伸ばし、翼をばたつかせる。

高熱を帯びた鉄粉は翼竜の濡れた眼と鼻、開いた口や牙に舌へと付着し、著しく傷つけた。耳以外の五感を瞬時に奪われて、混乱し、酷い痛みで苦しんだ。

背中から乗り手の兵士達が悲鳴を上げて、振り落とされる。

翼竜は滅茶苦茶に飛びまわり、エトリアの本都市上空を飛ぶ。遅れて、各所からも花火が打ち上げられる。

もつとも、これは、今しがたの翼竜を見て、離れていたのです。効果は無かったものの、エトウの乗る翼竜が悔しげに吠えて、遠のく。エトウが離れたて行くと、敵兵の間で異変が起きた。ざわざわとし、傷を痛む声が上がリ、表情が段々と普通の人間のものに戻って行く。攻撃の手も緩んだ。

この機会を逃すはずもない。エトリア勢は攻勢に転じ、激しく攻撃

をした。

サンガット軍は泡を食ったように撤退した。弓と鉄砲、砲弾が着弾しない安全と呼べる地点へ引くまでに、多くの者が倒れた。

外壁から歓呼の声上がる。

一方、肝心の翼竜は本都市を飛び回った挙句、着地しようとして失敗。南側の壁付近にある民家の二階へ頭から衝突。必死にもがき、抜けようとする。そこへ、アルケミストやカースメーカー、腕の良い射手と銃兵が集まり、一斉に攻撃。

呪術で体を封じられて、何十発もの銃弾と矢が翼と背中を襲い、止めに数人がかりでよく火力が増した氷の術式でがちがちに凍らされてしまい、最期は力のある者たちが精一杯ハンマーを振るい、翼竜の身体を粉々に砕いた。

首から上と翼は、冒険者たちが砕くのを止めさせた。これほどまでに強力な怪物なら、きつと良い武器が精錬できるはずと考えたからだ。

アクリヴィは満足気に首と翼以外は粉々に砕けたワイヴァーンを見やった。

戦いはまだ終わったわけではないが、空を飛び、すっかり支配者気分な奴らの傲慢な鼻っ柱を叩けて、少し気が晴れた。

その後、サンガット陣地では目立った動きはなく、一五から過ぎて四日、二月一九日における攻防戦でも決着は付かなかった。そして、夕方を境に大雪が降り出して、ひとときの平穏をもたらした。

「二九日に至るまでの具体的な戦死者。軽傷者。重傷者の数は。民家は何件壊れて、幾つの砲が駄目になった。弾薬と矢、食料、火薬の在庫は」

陽が落ちて、大分過ぎた頃、ミルティユーゴは予定した通り会議を開いた。各将を交えて、今日の戦火による被害を踏まえた上で今後を話し合う。

ミルティユーゴは口を真一文字に結び、険しくひそめて尋ねた。
補佐官は敬礼して、答えた。

「まず戦死者は、エトリア出身の兵士が一九六名。メテイルリクは七名。エピザ・トーティは八名。軽傷者は一三七名。重傷者は七五名で、三九名に關しては個人にも異なりますが、一ヶ月や二ヶ月。爆発で視力を失った者、一生歩けない可能性もある者もいるとのこと。その内、十人は非常に危ない容体のようです」

実質、二五〇名が戦闘不能。一五日の数十倍という甚大な被害。一四日における国境警備隊の者たちを含めば、三百を超える。戦える者が四千を下回った。

食料はしばらく問題なし。続いては、武器弾薬の在庫だ。改めて知ると、胃が重い。

「十五日における規模の戦闘を想定した場合、使用量にも異なりますが、後七回。より注意し細かく分配して、精々後八回戦って持てば、良いほうとのこと。今日十九日における戦闘の使用量だと、半分になります」

食料に余裕はある。が、肝心の弾薬・矢・砲丸・火薬の在庫が少々厳しくなってきた。何倍もの数を以てして攻め入る敵に対し、防ぐにはその分の量がいる。国家予算を注力して得た大量の武器弾薬だが、敵の数が多すぎて、苛烈すぎて思った以上に使わなければならなかった。

閉じ込められた状況下で補給もままならない。

反し、敵は食料事情が厳しく、あれやこれやと手を変え品を変えて、しつこく攻めてくる。敵の別働隊も気になる。別働隊が到着して、たつぷり食料と武器を持って来れば、更に不利となる。元から不利だが。

ミルティユーゴは敵の撤退を、ワイヴァーンを撃ち落としても喜ばなかった。

奥歯を噛み締めて、すぐに現実を見据えてた。一時凌ぎにしか過ぎん。余計なことを言わず、兵士達は喜ばせておいた。

弾薬と矢が尽きれば、防ぐ手立てはない。無駄な足掻きで数日持てば、良い方だ。

このことを予見していたからこそ、総隊長はゲンエモンの案に多

少、惹かれた。

総隊長は迷った末、此度の会議でゲンエモン自らに突撃案を話させた。

将たちの半分以上は惹かれて、エキアロモは一番興味深そうだ。対して、タイロンはあくまで慎重といった様子。

「正直なところ、私は迷っている。敵の真つただ中に特攻して、華々しく散りたい追い詰められた末の下手な英雄騎士願望にとらわれたのではないかと問いかけてもした。樹海生物を外の敵と戦わせる案自体は良いと思える。だが、外へ連れて行くまでが最大の問題だ。そこで、皆に聞きたい。今すぐではないが、三十分以内までには、各々よく考えた上で可否を決めてもらいたい。エキアロモ殿とタイロン殿もお頼み申す」

一時、解散。幕舎に残る者もいれば、外に出て、冷たい夜雪に身をさらす者もいた。ミルティユーゴは幕舎の奥に引込み、思念した。彼は一人きりになり、一息つくつと、目を閉じた。他の妙案、逆転の一手を。

やがて、ふつと笑みをこぼしたら、筆を取り、真つ白な書状に文を書いたためた。

三十分後、ゲンエモンの突撃案に対する可否の取り決めが行われた。当然、ゲンエモンに可否の権限はない。

紙に可なら「○」、否なら「×」を書く。

側近の者が一枚ずつ集めて、箱の中に置く。結果、賛成が七割で決まった。エキアロモとミルティユーゴ、意外にもタイロンも可に投じていた。

「皆の意思は固まった。反対の者も従うように。では、具体案に入る前に、皆には証人として聞いてもらいたいことがある」

総隊長は自らしたためた書状を取り出し、読み上げた。その内容に殆どの者が驚きを隠せなかった。

「私、自衛軍総轄隊長ミルティユーゴと賛同者の下、ゲンエモンの提案を可決する。ついては、此度の案を執行するに至り、誰が責任者になるかという点において、以下に読み上げる。責任者の一人はゲンエモ

ンであるが、彼は五十騎を率い、死地へ赴くので既に責任は果たしたといえる。

であるからして、もう一人の作戦における最高責任者は私ミルティユーゴと致す。

無事成功を強く祈り、実行するまでに入念な準備を重ねるが、万が一にも失敗し、守備する者たちに多大な被害をもたらす最悪な結果となった場合、私自らを処することで責任を取る。先に述べた最悪の事態が起きた場合、兵士並びに諸君らの采配により、私の処遇を決めるものとする。その場で四肢を裂くなり、私の首を刎ねて、敵の総大将に差し出して、降伏しても良し。しつこいようだが、私の処分は将と兵に任せる。

その代わり、私が責任を全て引き受けて突撃案を採用するに至り、将と兵士は作戦を実行に移すための準備を入念に行い、命令通りこなすこと」

書状には総隊長直筆のサインと印鑑も押されていた。タイロンが異を唱えた。

「責任を取る必要がある。ですが、軍の頭。総司令がいなくなるのは、一兵を失うのとは訳が違います。いまからでも遅くない。あなたはまだ失うには惜しい」

左側に座る中間の町村や交通を守る地区隊長がわたくしをと立つた。

「作戦を推した責任者を私の名に替えてください」

ミルティユーゴは左手をゆつくりと降ろし、座るよう示した。

「諸君らの言いたい事はわかる。私も理解している。理解した上でのことだ。普段、大将は安全な所に居るものだ。だからこそ、ここぞという状況で兵士達に覚悟を示さねばならん。私はエトリア自衛軍の全権を託された。どうせ、負ければ全て終わる。」

ならば、この命、今こそ使わねばどうする。私の覚悟を兵士達に伝えてくれ。多かれ少なかれ、兵士達は私の決意表明を受けとり、大いにやる気を出して、作戦を成功へ導いてくれるはずだ」

ミルティユーゴは静かな口調だが、口調や顔付きは硬く。がんとし

たものが滲み出て、作戦に対しての強い意志がおのずと伝わる。

ゲンエモンは危うく感涙しそうになり、ぐっと堪えた。

この御方になら、身を捧げてよい。一介の侍風情の自分だが、素直な気持ちで大将と呼べる人物と出会えた。

タイロンや冷静な者などは、ミルティユーゴは熱に浮かされてない。時間をかけて、よく思慮した上での決意とわかり、総隊長の命令通り動くことにした。

「作戦決行は昼夜問わず、深層の怪物共が出現次第とする。やるべきことは山ほどあるが、時間は残されてない。今夜はすべきことをまとめよう。激戦を潜り抜けたばかりで申し訳ないが、もうしばらく話し合いは続くぞ」

東にある世界樹から西側の大門までは、多少、曲がるが比較的直線と呼べた。西と東の中心地にあるベルダの広場にある噴水が問題だが、雪で固めることになった。

いきなり、五十騎ではいかず、初めに十騎か二十騎ほどで行く。血を滴らせた肉を携えて。角を曲がる際、要所で待機していた数騎が合流し、常に樹海生物の気を惹き付けて、できる限り多くの個体を壁の外へと連れ出す。

大小様々な道路に関しては、積もり積もった雪を利用し、道に天然のバリケードを築く。伏兵は基本、雪壁の裏で待機。囚役の騎兵は壁の前。道が大きく防ぎにくければ、土を入れた袋も使う。

最後に、突撃に赴く兵士だが、エピザとメテイルリクから五騎ずつ出し、残す四十騎はエトリアと冒険者から選抜する。エトリアは各隊長の判断で、冒険者からは最低ゲンエモン一人だけでも良しとした。騎兵を率いる長はゲンエモンで決定した。

「実は既に何人かに目を付けております。半分にも満たないでしょうが、話し合ってみます」

今回の作戦に当たり、軽傷を含む残すところ四千余名の内、千は外への防備と監視。千五百は待機（休憩）で、もう千五百名で除雪や壁作りを行うことになった。

一通りのことが決まり、ミルティユーゴは会議を解散。翌日に備え

て、よく休むようにと言った。

*

*

カセレスは翼竜の顎を撫でた。

翼竜は大丈夫だと言いたげに舌をちろちろと動かした。

強制的に従う三頭とは異なり、カセレスが乗る二番目に大きなこの翼竜との間には、それなりに友好関係が築かれてた。

カセレスは忌々しげに雪で白くなったエトリアを見やる。

エトリアにまさか、あのような飛行対策の武器があるとは思わなかった。上から数えて三番目ぐらいの個体。あの一頭は既に死んだと思われるが、他は無傷。それだけで済んで良かった。

彼が忌々しく思うのは他にもあった。

総大将エトウの秘策とやらが、未だ行われた試しがない。具体的にどうやるかは知らないが、エトウの言う通りなら、エトリアの指揮系統は崩れてるはず。

だが、ミルティユーゴを始めとする重要な将はまだ生きている。そのことを問い質したとき、殺気が込められた声で黙れと言われて、大きな父親に叱られた幼子のように怯えて翻したことは気にしまい。

苛立つのはエトウも同じだった。

彼は、内部に潜ませた者から、秘策の仕掛けを施した合図がまだ来ないことに腹が立っていた。

しばらくは待つが、敵に大きな動きが見られた場合、たとえ合図が無くとも秘策を使うつもりだった。それで潜ませた者が死んでもどうでもいい。

簡単な使命を果たせない愚図は要らん。勝手にくたばるがよい。

エトウが普通の人間かはともかく、彼は元冒険者のカースメーカーであり、常人とは異なる方法で物事や生き物の動きを察知できる術に長けていて、数日以内に大きな動きがあることを感じていた。

エトウはそのとき、潜入者の合図が無くとも、秘策を使おうか考えてた。

四十話 決死隊

体を動かせば、温かくなると考えたがそうでもない。

ほぼ一箇所に留まった状態でシヤベルを動かし続けるだけなので、多少熱くなれても、芯までは温まらない。

地味な作業だとぶつくさ言いつつ、ロディムは懸命にシヤベルで雪をすくい、軽く叩いて固めた。大雪が降り、風も吹いて、多少の音は遮断されてしまう。無駄に声を出さず、黙々とシヤベルを振るう。

ジャンベは休憩中。マルシアは怪我人の治療で大忙し。コルトンは……。彼は余計なことを頭から振り払い、がむしやらにシヤベルを動かした。

突撃誘導作戦を決行するに至り、雪で簡易的な障壁を造り上げてた。怪物の攻撃を防げるとは全く思っていない。少しでも、樹海生物の目を五十の人馬以外へ向かないようにするため。

作戦に乗り気な者は多くないが、総轄隊長が命を賭したとあつては、従わざるをえない。彼は激励をかけつつ、自身も一兵士としてシヤベルを手にとった。

下士官は控えた方が宜しいのではと止めたが、彼は笑顔で断った。「なに、まだ死にたくないからな。今はじつとこもるより、体を動かした方が落ち着く」

彼はそう言つて、兵士達と共に懸命に働いた。

その様子は風のように広まる。

滑稽。演出だろ。無様だと言う者もいれば。国を想う気持ちに身分はない。あの方なりに戦つていらつしやると思う者もいた。

最高責任者が命を賭けて、一兵士達と共に働く様を悪く捉える者はそうおらず、否定的に考えても、心底嫌と思う者はそんなにいなかった。

いずれにせよ、彼を慕う者は多かった。

外で働く者たちがいる一方、世界樹の付近にある小さな館で暖を取り、寛ぐ者たちもいた。

エピザ・トーティの戦士五名、メテイルリク兵士五名。エトリアの

者たちが数十名。冒険者もいる。

これらは、誘導作戦に参加する決死隊五十名のメンバー。他、秘密裡にオルレスや遠方の避難民に状況を伝える役目を仰せつかった三人の騎手もいる。

突撃の混乱に乗じて、包囲網を切り抜ける。

決死隊の者たちは突撃までは体を養い、思い思い過ごしても良いと言われた。

彼らはゆつくりと温かい館の中で過ごし、恐らく最期となる生の余韻に浸っていた。挨拶回り、親しい者の元へ行く者もいた。外を手伝う者もいた。もつとも、体を養えと追い返されたが。

冒険者からは、ゲンエモン。シシヨー。ブレンダン。ドナ。ラクロワ。そして、他二人に、コルトンの計八人もいた。ついで、三人の内、一人はコウシチだったのだが、そのことでゲンエモンと揉めていた。「納得できませんー！」

窓ガラスがびしと震えた。コウシチの声で震えたかと思ったが、強い風で叩かれただけだった。

「師よ。私はあなたを尊敬しております。幼き頃、行くあてもない私を育ててくれて、感謝もしております。あなたの願いや言葉はできる限り、承りたいと思っています。しかし、今回のことは承れませぬ！

何故、私が決死隊から外されたのですか。仲間のシシヨー殿はいるのに、私だけ外された理由をお教えください」

ゲンエモンは努めて、冷静に答えた。

「さつきも言った通り。適材適所。お主には決死隊の任に就くよりは、密かに馬を走らせる技能と身軽な動作は秘密裡な仕事にはもってこいなのだ。その後は、遠方からエトリアの動向を見守り、避難民を守る任に就いてもらう。これはもう、決定だ」

「しかし、しかし……」

コウシチはなおも食い下がる。彼は師のゲンエモン、仲間のシシヨーと共に往きたかった。

ゲンエモンの影響と彼の性質から、彼は仲間が良いと言っても、自分一人だけ助かることは頑として断った。

自分が認めた、心を許した者たちが居るエトリアに最後まで留まり、散るときは共に。コウシチはそう思っていた。

それだけに、師の命令であっても仲間や他の者たちを置いて行くことは、彼の性分に反し、到底、受け居られなかった。コウシチは痛みを堪えるようにじつと下を見つめた。色気も無い、白一色の雪に埋もれた地面しか見えない。

「面を上げい、コウシチ」

言われたまま、前を向いたコウシチの顔を見て、ゲンエモンはハツとした。

コウシチは薄らと両目に涙を湛えてた。

コウシチが最後に泣いたのは、十代半ばの少年の頃以来、見ていない。彼は心身共に逞しくなった。その彼が、十数年ぶりに、ゲンエモンの前で泣いている。寂しさと、疑問と憤りを込めて見つめている。「私がこれほどまでにこだわるのは、共に行けぬという理由だけではありません。師よ、あなたは色々とそれがしに隠しておられる。私はあなたの命ぜられたとおり、使者として赴きます。ですが、代わりに、あなたがそれほどまでに隠す通していることを明かしてください。さもなければ、私は心に一生靄を抱えたままになる」

ゲンエモンは逡巡した。

今こそ、明かすべきではないか。ゲンエモンは口を微かに開け、閉ざした。いざ、言おうとしたら、長い年月の重みがずしりとのしかかり、ゲンエモンの口を閉ざさせた。

やがて、ゲンエモンはのろのろと口を開き、明かした。

ただし、内容はエドワードに打ち明けた事と同じであった。コウシチはなんと驚き、そうでしたかと肯定こそしたものの、長らく付き合ってゆえか、鋭く勘付き完全には納得してなかった。

「師よ。あなたはまだ、全てをおっしやられてない。私にはどうも、始めに物を申されようとしたとき、まるで喉に詰まったように奥へ引つ込めた。そんな感じがしました。それは、今しがたあなたが言われた内容とは異なる」

「今語ったことが全てだ、コウシチ。これ以上はお前に話せることは

無いのだよ」

「そうですか」

もういいです。そんな風にも聞こえた。

「ご迷惑をおかけしました。さあ、中へ入りましょう。お体を冷やしてはなりません」

気を使ったように聞こえるが、どこかよそよそしく。他人行儀。ゲンエモンはコウシチとの間に溝ができたのを肌で感じた。

これで良いのだ。彼は私に拘らなくていい。

ただの他人と思われて死ぬのは惜しいが、仕方ない。全ては自分の罪と臆病さゆえに招いた事。そう思いながらも、後悔が滲み出る。寒さで凍えて、雪で髪と髭の白みが増し、沈んだ顔のせいでゲンエモンはより老けた。

館に入ると、コウシチはシショウの居る二階へと上がった。

外に出る前、話し終わった後は飲もうと約束していたが、今となっては気まずい。ゲンエモンは玄関を上がり、角にある居間へ入った。

寒暖差でむわつと熱くなり、思わず身が震えた。

ランプの光を反射して照れる禿頭が目に付く。

おっさん、飲むかいとラクロワが振り向き、ブレンダンも続いた。

暖炉の傍に置かれた爛かんをつける酒が差し出された。

「しけた面を見せてくれるなよ、じじい。まだ死んでもないのに、通夜に行った顔をするな。酒が不味くなる」

開口一番、ブレンダンは憎まれ口を叩いた。

陰気な灰色の目でゲンエモンを見上げ、黒いコートを羽織り、短く刈り込んだ赤茶の頭髮が人目を引く。

本人はあんまり口を開かないので、影が薄いと思われるがちであるが、開けば悪口か、ついつい嫌味がかった口調で物を言ってしまうので、中々喋らない。

ねっとりとした喋り方が余計に相手の神経に触り、彼自身、相手のそういう反応を楽しんでる節がある。

ああいうのも必要だ。稀に意外な盲点を突いたり、鋭いところもある。まあ一番は術式の腕前だな。

ゲンエモンはそうした理由で彼を受け入れたが、彼やパスカルのよ
うな人間でなければ、ブレンダンを引き入れたいと思う人間は少な
い。とはいえ、決死隊に入るのを引き受けたあたり、表面上冷たいだ
けの人間でないのはゲンエモンとラクロワもわかつていた。腹が立
つときはあるが。

「おう、そうだな」

ゲンエモンはラクロワから杯を受けとり、くいと一気に飲んだ。濃
度が高い酒が体中を駆け巡り、喉から身体の芯にかけて体をかーつと
熱くする。

「強いな。飲み過ぎて二日酔いをおこしてくれるなよ」

わかっていますと、ラクロワはからからと笑った。

「師弟喧嘩とは随分と呑気なものだ。悔やんだ面した大将に先を行か
れちゃ、やる気がそがれる」

「しつこいぞー」と、ラクロワがきつく言う。

数分間、ゲンエモンは部屋で暖めた。しかし、心は落ち着かない。
ゲンエモンは用があると立ち上がり、部屋を出たら、向かいの部屋に
入り、コルトンを呼んだ。

「すぐに終わる。来てくれ」

ゲンエモンは部屋に居る者に、自分がコルトンと会ったことをコウ
シチに話さないようにと喋っておいた。二階への階段と辺りを注意
深く見回し、コルトンを人気の無い台所まで連れだ。

「用とはなんですか、ゲンさん」

「これから話すことに、あつとか、おつとか、驚きの声を上げないでく
れ。それと、このことは総轄隊長も存じておられる。わしらが突撃し
た後、コウシチに話す手筈になっておる」

「では、俺に言う必要はないのでは？」

「ああ、そうだ」ゲンエモンはあつさり言った。

「だが、わしの心は迷っておる。だから、死地へ赴くのに気持ちよくと
いう言い方も変だが、哀れな老体が心置きなく行くための気持ちの整
理だと思い、黙って聞いてほしい」

コルトンには、はいと答えるしかなかった。ゲンエモンはコルトン

に、コウシチに明かさなかつたことを教えた。事前に驚くなど言われていたが、コルトンはなんですと叫ぶのをぐつと堪えた。

「今からでも話してはどうです？ 奴もきつと、そこまで依怙地にはならんでしよう」

「そうかもしれない。だがな、話したら、今度は付いてくると言うはず。わしらを見捨てておけない、共に行かせてくださいと前より意地になる。お前さんも奴の性格はそれなりに存じておろう。あれはこうと決めたら、てこでも動かかん。」

わしはコウシチに跡を継いでもらい、アヤネを守り、愛する女ひとを見つけ、幸せに生きてほしい。だけど、エトリアにいる限り、それも難しい。不幸を良いと言うのは憚られるが、良い機会だった。これで、冒険者を辞めてくれる」

「仲違いしたままでいいのですか？」

ゲンエモンは悲しそうに首を振った。

「良い。わしに拘る必要はない。さつ、年寄りの長話に付き合わせて悪かった。部屋に戻って温まろう」

コルトンはいまいち納得しかねたが、当人の方がもつとだろう。俺が入れる領域ではない。当人たちの問題だ。そう割り切り、コルトンは階段の所でゲンエモンと別れて、部屋にある安楽椅子の上で足を伸ばした。

二十日は特にこれといった動きは見当たらず、双方の陣営は静かだった。雪の協力もあり、障壁は自ずと高く積み上がる。カースメーカーたちの感知と、偵察班によれば、確実に近づいてること。大型のが浅層をうろつき、早ければ明日か、遅く見て数日後には来る可能性がある。

二一日。この日も動きは無かった。大雪は止みそうにはないが、夜に僅かながら弱まった。

ただし、決死隊には動きがあり、メンバーはそれぞれ配置に着いた。カースメーカーと偵察班の報告により、いよいよ目前に迫っているとのこと。深夜か。遅くて、明日、日の出前に出現する可能性が大。

思ったよりも早かったな。コルトンは不思議と怖くなかった。いざ、直面したら、恐ろしさのあまり脱兎のごとく駆けるだろうがな。適度な緊張感を保ちつつ、心は平静。やるだけやるしかないさと悟っていた。

コルトンはホープマンズの面々を長鳴鶏の館に集め、一人一人に別れを告げた。

「あばよ、ロディム。無駄に突っ込むなよ。怪我を治してくれて、ありがとなマルシア。アクリヴィ、皆を頼んだぞ」

アクリヴィは無言でコルトンを見つめた。

「ジャンベ、見送りを頼むぞ」

ジャンベは沈んだ表情でええと頷いた。

突撃の際、大門から出る直前、大量のラツパや吹奏楽器を用いる。エトリア側からの攻撃という意外性で敵を驚かし、威嚇するためでもあるが、決死の行程を往く五十名に対するせめてもの手向けの意味もあった。

ジャンベは西の外壁で吹き鳴らす一人に選ばれた。

「こんなこというのもなんだけど、彼に会えるかしら」とマルシア。

「さあね、わからんよ」

コルトンは肩を竦めた。昨年、エドワードは出立する前、コルトンに戦場で馬上の人として合い間見える予感がすると言った。現実はないと、エドワードどころか、遠方や他国の援軍の当ても情報ない。「会えたらいいし、もちろん嬉しいさ。だけど、会えなかったとしても、仕方ない」

「会えると信じれば、会えますよ」

ジャンベの言葉に、コルトンはそうだなと返す。今はただ、来ると信じるしかない。自分が参加する突撃作戦が上手くいくことも強く信じて駆ける。大変なのは馬だが。

コルトンは名残惜しく彼らと別れた。コルトンが他のメンバーと十分離れたのを確認して、こっそりと物陰から動向を窺っていた者が正体を現した。全身をフードとマントで被い、コルトンは身構えた。拙者だと、コウシチは正体を現した。

「俺をおどかすために来たんじゃないよな?」

「無論。はつきり言おう、コルトン氏。主は師ゲンエモンから、何か話を聞いたはず。それを聞くべく参った。隠しても無駄だ。主と同室の者たちに聞いたら、素直に教えてくれた者が何人もいた」

やれやれと、コルトンは呆れた。といつても、衛兵や他国の兵士からすれば、ゲンエモンにそこまでの義理もないので、仕方ない。

「少し待ってくれ」

コウシチは今にも噛み付きそうな勢いでかかった。

「少しとはどのくらいだ?! 五分か、一時間か? それとも、作戦決行直前か、奇跡的に生還を果たせた後か。主の少しでは時間がかかると思う。勝手に申し訳ないが、それがしが時間を決める。その前にコルトン氏から話してくれるのを待つ」

コウシチはフードを被り直し、じっと立ち尽くして目を閉じる。侍がよくやる“座禅”とやらの立ち版か。瞑想自体は宗教家やカーズメーカーのような者たちがするのをたまに見る。

それはともかく、コルトンは迷った。ゲンエモンとの約束もある。一方で、コウシチへの同情も強い。第一、隠し立てする意味があるのだろうか。さっさと話せばいい。そんな思いもあった。

考えるほどにこんがらがり、靄が生じる。どうすればいい、どうすればいい。そうしているうちに、コウシチから時間だと告げられた。

「さあ、時間だ。もう、少しも待つ気はない」

コルトンは逃げようかと辺りを見たが、即座に追いつかれるだろう。コウシチの表情は硬く、なにがなんでもコルトンから聞きだそうとしている。コルトンは重い溜め息を吐くと、コウシチに真実を明かした。

コウシチは三白眼を見開き、俯き、コルトン以上に動揺した。やがて、何度も小刻みに頷いたら、コルトンに背を向けて、すまなかったなど詫びた。

「足止めしてすまぬ。そして、ありがとう。おかげで、我が意は固まった」

コルトンは聞こうとしたが、コウシチは足早に去ってしまった。我

が意とはなんだ。自分がやれと定められたことをやるのか。今更、止める資格もない。ごめん、ゲンさんとコルトンは心の中で申し訳なさにげに呟いた。

僅かな篝火以外、明かりが一切ない深夜も大分過ぎた頃。いよいよ、五十騎による突撃誘導作戦が決行される。

カースメーカーと偵察の報告から、いつ来てもおかしくない。暗く沈んだ一階で、深層の怪物と思しき巨大な陰影が幾つも目撃されたとのこと。

入口から、怪物たちの咆哮が絶え間なく響き、世界樹を微かに震わし、浅い部分の雪が落ちる。

門の前で三十騎配置。残す二十騎は、要所で三騎から五騎ずつ配し、最後は芝生と石積みの傾斜左右から四騎が飛び出す。肉汁に浸した水気たっぷりの牛や羊肉をつるし、突っ走る。

道路はできる限り舗装されて、雪解け用に溜めておいた海水をまんべんなく撒いたかいあり、一応、凍結は防げた。

先頭に行くゲンエモンは真紅の鎧具足で身を固めていた。

冑から生えた一对の銀光りの大きな鹿角が目を惹く。彼自身の物ではなく、アヤネの先祖が付けていた物。アヤネから許可を貰い、シリカ商店の職人に頼み、外見の面影を残しつつ、新しい技術が取り入れられていた。その際、馬上で振るうのに適した黒塗りの槍も新調した。

ゲンエモンはそれぞれに別れを告げた。

「ヘンリック、数多の怪我を治してくれてありがとう。ニツツア、熱くなりがちだが、時にそなたの若さと勢いに押されて上手く行くこともあった」

「別れの言葉がそれですかあ？」

ニツツアはふてくされた面をして、悲しい顔を見せまいと努めた。「わしらは仲良しこよしなパーティーではなかった。なんかつるんで、なんか上手く行けた。そんな感じだが、このような年寄りを一員として扱ってくれて、感謝しておる。頼もしい奴らと思うとる。だから、

還れたら、また探索に赴こう」

もちろんとニツツアは満面の笑みを浮かべ、ヘンリクは小さく会釈した。

ゲンエモンは西側を守るヴァロジャを呼び、彼に冒険者を率いてくれと指揮権を譲った。

「この中では、お主にしか頼めない」

「まあ、お任せあれ」

どんと胸板を叩き、ヴァロジャは不敵な笑みを浮かべた。

怪物たちの咆哮が増して、間近に迫るのを知らせてくれる。

内壁の門を全開、少しでも早く呼び寄せるため、内壁の冒険者と兵士達がわざとらしく叫び、喋る。幾人か入口にまで行き、大声を上げる。

肉汁入りスープを入口と付近にぶちまける。多少、生臭いものの、良い匂いがする茹だつスープの香りが一面に漂い、ごくりと生唾を飲む音が聞こえる。匂いと声に誘われて、狂暴な樹海生物たちの声と足音が激しくなる。

不要な人員は離れて、伏兵は雪壁の裏に隠れて、二十の馬に人が乗る。馬はどれも訓練されており、少しの物音では怯えないが、相手が相手だから、不安気に足踏みをするのもいた。

乗り手は優しくさすり、声をかけ、馬を落ち着かせようとした。

ゲンエモンは栗毛の馬。エドワードとの乗馬訓練で何度も付き合っている、旋風せんふうと名付けられた牡馬に乗った。旋風は一番、落ち着き払っていた。

ゲンエモンが頼んだぞと言ったら、了解したという風に両耳を上下させた。

入り口付近にいる者たちが悲鳴を上げて、後ずさった。樹皮を乱暴にかきむしり、狭い出入り口から自らを押し出すように出てきたのは森の王ケルヌノス。

山羊を思わせる頭と派手なたてがみ、鍛えた成人男子の胴回りよりも太い腕、全身に生える分厚い毛皮、辺りを睥睨する狐のごとく赤い両目、人間めいた上半身の下は筋骨逞しい山羊か馬のような四つ足。

二階建てぐらいの大きさ。

真つ赤な巨象すら捻り潰してしまう強さを秘めた二階層最強の生物。三階層に通じる階段を守護するかのように、十階にある森の回廊に出没することが多い。

予想外の大物出現に多くの者は狼狽えた。一階層の白き魔狼と異なり、ケルヌンノスは深層へ挑む冒険者でも危ない。

その後も、続々と深層の怪物が現れる。青熊、大サソリ、怪物鰐、冷たい凍りつく息を吹きつける大亀、骨みたいな鱗を生やした別名“死を呼ぶ竜骨”と呼ばれる白い地竜。大型級の怪物たちが大量に這い出してくる光景は悪夢としか言い様がない。怪物たちは予想に反し、真つ直ぐ突撃隊には向かわず、地上の寒さと雪に戸惑った様子であり、ケルヌンノスなどは忙しなく首を回してた。

ゲンエモンが槍をかざして命じた。

「皆、叫べ！ 注意を引くのだ」

こつちへこーい！ おーい、おーい！ ウドの大木！ かかってこいー！

突撃隊が叫び回り、軽く手綱も引いて、足音を鳴らす。

突撃隊を助けるため、投石と弓矢による支援も行われた。大した傷は与えられないが、怪物たちは疎ましく篝火に照らされる突撃隊を見やる。肉汁スープが突撃隊と門の間にぶち撒かれる。ついで、一人の放った強弓がケルヌンノスの肩に刺さり、厚い皮膚を貫き微かに痛みを与えた。

ケルヌンノスは肩の矢を引っこ抜き、握りつぶすと、天を仰ぎ、一声吠えたら、突撃隊へ突進を仕掛けた。

ケルヌンノスの突進が引き金となり、他の怪物たちもつられて、あれよこれよと突撃隊の後を追いかけて始めた。

「進め、世界樹に集いし強者共よ！」

轡をとよもすが一斉に鳴り、二十騎が怪物に負けず劣らず疾走する。

ゲンエモン、コルトン、シシヨー、ドナ、ラクロワ、ブレンダン、騎士たちの面々は捕まらず、まずは門までたどり着けることを願いつ

つ、ときに鞭を入れ、細心の注意を周囲と後方、道路に向けて、手綱をしつかりと握って転ばぬよう心掛けた。

背後の威圧感言葉で表せない。ただただ、懸命に駆ける。迫る怪物たちはさながら巨大な荒波。呑まれたら最後、二度と戻れない。

確認している暇はないが、要所の通路に隠れた騎手たちがちらと見える。多分、背後で合流しただろう。確認している暇はないが、そう思うことにする。

ベルダの広場付近にある、数本の松明が吊るされた問題の曲がり角が来た。上から見たら、三角形になっており、がくがくと曲がらなければならぬ。

ゲンエモンは前方を見据えた。彼の心に最早迷いはなく、集中力は鋭敏に研ぎ澄まされてた。

彼はここぞというところで馬首の向きを変えた。先頭の馬に倣い、後列の馬たちも旋風の後を付いてゆく。だが、最後列から一つ、短い人馬の悲鳴が上がり、断末魔と思しき声は怪物たちの騒音に掻き消された。

誰かが転んだと告げた。もちろん、助けられるわけない。突撃隊は最後尾の彼をいない者として突き進む。

角を曲がり、ベルダの広場にある噴水も避けた。

怪物たちは問答無用で広場にある噴水を叩き壊して、家の屋根や壁をどれだけ壊そうとも一向に構わず、無我夢中で未知の生物に乗る良い匂いがする奴らを捕えようとする。

橋が下ろされて、西の大門が開かれた。敵の注意を引く為、僅かに角笛と喇叭が吹かれる。

石積みの傾斜が見えてくる。

前列右を走るコルトンは、右で待機する二騎の存在に気付いた。

傾斜を下った際、何気なくちらと振り返り、左から三騎来たような気もしたが、すぐに前を向いた。左右は雪の壁で覆われており、壁の裏で何人潜み、何が行われてるか視認できない。

今度ははつきりと悲鳴が聞こえた。最後尾の一人が森の王に捕まったのだ。馬は主人の足が手綱に絡まったせいで宙に上がり、首を

握りつぶされた。

捕えられた者は無抵抗ではやられず、握り潰される直前に短剣を爪に刺した。森の王は痛みで手をぐっと握ると、ぱつとゴミのように手放した。また一人、道半ばで斃れた。

門に迫ると、盛大に喇叭と角笛が吹き鳴らされた。

音はどこまでも、どこまでも野放図に響き渡り、突撃隊には活気を与えて、怪物たちは不快な音を避けようと足を速めた。気付く者はいなかった。二人減り、四八騎のはずが、四九騎なのは誰も。

突撃隊が門を潜ると、橋の前には千は下らない敵が詰め寄っていた。

しかし、彼らは絶叫し、突撃隊に背を向けた。怪物を味方にして率いたと思う者もいれば、突撃隊も入れて、一つの巨大な怪物が出現したと恐怖した。

狂ったように突撃隊を追いかけた怪物たちは進むにつれて動きが鈍くなり、やがて、好き勝手に動いた。餌であり敵でもある人間達、王賊軍でありサンガット軍でもある者たちがいる塹壕に接近した。

各地で警戒と悲鳴が上がり、人間対怪物。とはいうものの、エトリアの予想だしにない襲撃で浮き足立ち、相手は自身が連れて来た怪物より遥かに凶暴で手強いこともあり、怪物たちによる一方的な殺戮ショーが行われた。

また、どういうわけか、惨劇から離れた陣営の奥からも大きな騒ぎが起きていた。

遮二無二繰り出す槍や剣の刃は大して通じず、血飛沫と肉片、砕けた武器があちこちで飛び散る。

この惨状もあり、突撃隊に構う者はあまりいなかった。いても、呆気なく馬上の荒武者たちに片付けられるか、背後に控えた未だ執念深く追いかけるケルヌノスを見て、縮こまるかのいずれかだった。

ゲンエモンが先導する突撃隊は塹壕の合い間を抜けた。

塹壕に潜んでた兵士達は突撃隊を攻撃しようとしたが、最後尾に回ったドナが雷の術式を撃ち、前の数人が弾かれて足を止める。

更に運悪く、標的を突撃隊から眼前のサンガット軍へと切り替えた

ケルヌノスに目を付けられた。

サンガット軍兵士は武器を放り投げ、森の王からの逃亡を試みる。森の王は塹壕に飛び込もうとした一人を握り潰して、その者の遺体を固まって逃げる者たちへ投擲した。森の王が歩む。ドミノ倒しのごとく倒れた者たちは、一瞬にして半数近くが物言わぬ肉塊と化した。

突撃隊は敵の合い間を縫いながら、怪物が来たぞと喚起した。

助ける気は毛頭ない。ただ、周りが見えにくい混乱した状況で敵が来たぞと促して、敵軍からの攻撃を少しでも防ごうという考えがあった。

たまに誰何^{すいか}する声は無視して、彼らは一直線にガリレオ砲のある方向を目指した。

離れた陣営にある微かな灯りで巨大な金属の全容が明らかになってくる。十歳にも満たない子供なら、容易く飲みこめそうな太い長い砲身がある。

厳戒態勢が敷かれてるかと思いきや、意外なほど人が少ない。

突撃隊は西の陣営で尋常ではない火の手が上がり、剣戟の音が響くことに気が付いた。何か起きて、そちらに人が取られてるのだろう。柵やテントを越えて、右往左往する兵士が数多い。

それでも、こちらを上回る騎兵と歩兵が警備していた。隊長と思しき騎手が突撃隊に何奴と問いかける、ゲンエモンは無言で進み、槍を構えた。

「おのれー！」

歩兵が周りを固めて、間から数人が出てくる。彼らが両手をかざすと、信じられないくらい冷たい風が吹きつけてきた。敵のアルケミストだった。馬首を止めるしかない。

「大したことないな。一、二階層の並の冒険者程度ってところかな」ブレندانがにやりと怪しく笑う。

「同感」とドナ。

二人のアルケミストは前に行くくと、敵アルケミスト数人がかりで放つ氷の術式より強大な炎の術式を放った。敵の歩兵とアルケミストたちが後ずさる。目の前の雪が融けて、水蒸気が漂う。

その隙を見逃すはずもない。

鉄壁の陣にできた綻びへ突っ込み、ゲンエモンは槍で叩き、突き、払う。他の者も負けじと武器を振るい、コルトンは手当り次第、剣で切りつけて、叩いた。

ゲンエモンは陣を強引に突破すると、体長格の男を目にも止まらない速さで突き刺した。

旋風がいなき、背後から迫る敵兵の顔を蹴り飛ばす。たまに攻撃を受けても、厚い鎧に阻まれて、大した怪我を負わずに済んだ。

ゲンエモンの勢いはとどまらず、近くにいる者を凄まじい槍捌きで薙ぎ倒し、あつという間に三人の騎手と五人の歩兵を屠ったら、体長格の傍にいた旗手へ馬首を転じる。

旋風が後ろ脚で立ち上がり、どんと前足を付く。旗手の男は慄いて、槍を横にして、受け止めようとする。旋風の勢いを利用して、ゲンエモンは上段から旗手を旗ごと斬り捨てた。

国の現状を示すように、ばさりとサンガットの国旗が泥雪に塗れる。

真紅の鎧具足という出で立ちもさることながら、命知らずな特攻に加えて、鬼神の如き強さ。全身全霊、この身が燃えよと言わんばかりなゲンエモンの裂帛れっぱくの気迫に押された。

おまけに、強力なアルケミスト二人が躊躇いも無く炎の術式を撃ってくるので、巨砲付近にある火薬が引火するのではと自然に後退し、体長格も死んで、眼前で広がる塹壕辺りでの惨状も後押しして、ガリレオ砲を守る兵たちは四散した。

右往左往してた兵士達は訳も分からず、あっち行き、こっちへ行き、少なからず立ち向かう者もいた。

「これを吹っ飛ばすぞー」ゲンエモンが向かってくる敵を仕留めながら叫ぶ。

巨砲から三十m離れた位置に、多少の砲弾と火薬。油も置いてあった。

篝火が無くて、仄かに視界が良くなってる。目が慣れたのではなく、朝日が昇りかけていた。

彼らは迅速に動いた。時に来る相手を露払いしつつ、油を巨砲へ塗りたくり、全ての火薬を砲身へぶち込む。

準備が整うと、突撃隊は大分離れて、ラクロワなど、数名の腕が立つ射手が五十m辺りに立ち、馬が駆けると同時に振り返り、大きな火を点した矢を撃つ。

弾かれたり、外れる矢もあったが、ラクロワともう一人が放った矢は見事に砲身へ入り、ガリレオ砲は内側から盛大に爆裂した。エトリアを脅威に陥れた要因の一つ、ガリレオ砲は破壊された。

爆発音は戦場に奇妙な静けさをもたらした。

人も、怪物も、戦いの手を止めて爆発の中心地から昇る黒煙を眺めた。

そのとき、ゲンエモンは急に胸が苦しくなった。息が切れ、心臓を驚掴みにされた感覚。疲れたのかと思ったが、なにか違う。

僅かな静けさが過ぎると、エトリアから声援が湧き上がった。突撃隊へのも含まれているが、どちらかと言うと、西側の陣営に居る者たちへと送られてた。

「メテイルリク！ メテイルリク！ 逞しき鉦石掘りたち」

「エピザ・トーティ！ 勇猛果敢な戦士たち」

「やっぱりね」とドナが言う。

突撃隊には確認できないが、外壁に居る者たちははつきりと見えた。

気持ちの良い澄み渡る空から差しこむ陽光の下、風で二国の旗がはためいている。サンガット軍西側の陣営からは火が上がり、テントは薙ぎ倒されて、数え切れない敵兵の亡骸が横たわる。

とうとう、二国から援軍が送られて、エトリアと時を同じくして夜襲を仕掛けたのだった。

「逆転勝利っすね」

ラクロワは笑顔でゲンエモンに話しかけた時、ようやく、ゲンエモンの容体に気が付いた。

気持ち悪い汗が体中から流れて、手足が先から痺れてくる。鼓動がどンドン早まる。

「大丈夫ですか？」

ゲンエモンは口の中をきつく噛み締めて、痛みで誤魔化そうとした。

「へ、平気だ。それに、あの大将が生きてる限り、まだ終わらぬ……。みよ！」

ゲンエモンが空を指した。西と北の陣営の間を影が飛び立ち、激しい怒りを籠めて、最大のパワーで信じられないほど大きな恐怖の音が戦場に覆いかぶさる。

エトリアは怯え、二国の援軍は声の想像を絶するおぞましさと恐ろしさに動揺した。怪物たちは混乱状態に陥り、無駄に地団駄を踏み、情けない声で吠え返した。

反対に、逃げ惑うサンガット兵士達の足取りが落ち着き、素早く隊列を組み直し、例の不気味極まりない表情を浮かべて、二国の援軍と怪物へ向き合い、突撃隊を包囲した。

そして、最大の翼竜に騎乗するエトウは、あろうことか突撃隊の方を目指してくる。

さしもの不気味な者たちも、恐ろしくも偉大な主人の飛来には面食らったのか、慌てて散る。突撃隊の者たちも、人はまだしも、馬が恐怖に耐え切れず、乗り手の声や手綱、鞭も無視して、逃げ去る。乗り手たちは振り落とされまいとしがみついた。

ゲンエモンと旋風は逃げなかった。いや、動けなかった。旋風はかの者と翼竜の視線が注がれてるのを肌身で感じ、さしもの勇敢な牡馬も恐怖が限界に達し硬直してしまった。

馬上のゲンエモンはというと、手足が益々重くなり、心臓の鼓動が高まり、息もし辛く、ぜいぜいと切れ切れな呼吸をしていた。

外壁に居る者たちの見方は違っていた。

「見る、ゲンエモンが一人、エトウに挑んでるぞ。さすがは冒険者の長だ」

頑張れとゲンエモンに応援が送られた。当人にその応援は届かず、耳障りに聞こえた。

不自然な容体の変化に困惑するも、意識はしっかりと空から迫りく

る敵を定めてた。

ゲンエモンは残る力を振り絞り、刀を抜いた。微かに体調の急変が治まる。名刀七福八葉を恐るべき二体へ向けるが、そこまでであった。

全身が鉛のように重くなり、目の焦点が定まらない。

枯れかけた老兵が持つ破邪の術を掛けた一本の刀剣では足りなかったのか、二体、正確には背に乗るかの者は怯むことなく襲いかかった。

*
—————
*

オールドリッチは施薬院の窓から、外を眺めた。突撃が間近に迫る。シシヨーどうなるかはわからないが、早いか遅いかの違い。成功を願うしかない。

そこへ、急いで訪れた者がいた。

黒いフードを頭から被り、赤い鎖から身体に巻き付けて、金の鈴をぶら下げている。紫髪のお下げを二つ伸ばした少女と見紛う美しい幼顔の女は、間違い様がなく自身のパーティに属するキアラだ。

判断に迷ったのは、キアラは淡い青色の瞳から涙を流してたから。キアラが泣いたのは初めて見る。らしからぬ彼女の態度に、オールドリッチは冗談を控えた。

「落ち着いて答えろ」

キアラは目を閉じて、ふーっと一息吐くと、大きな声で話した。酷く興奮している。これもまた、彼女らしくない。

「オールドリッチ、来て！ コウシチを探して！」

「何故、探すのだ。別れを済ました」

「説明は後。いいから、来て！」

オールドリッチは近くにいた看護師に訳を話し、キアラと共に、施薬院を出た。

「一体どうしたんだ。別れは済ませただろう」

「違う、そうじゃない。そうじゃないの。聞いて」

「聞いている。だから、話せ」

「つ、ついさつき。彼に呼び出されたの」

「それで」

キアーラはそこから言いよどみ、小さな声でそつと呟いた。

「私が……私を、一人の女として好きだって」

ひゅーと口笛を吹くオールドリツチの足をキアーラは軽く蹴った。

「いてて、悪かった」

「私、ぼうつとしたの。だから、彼が直後に言った言葉が頭に回らなかった」

「何を言ったんだ」

「ありがとう。これで、心置きなく師ゲンエモンと共に行けるつて」

始めはなんのことだと思ったが、はっとオールドリツチは顔を上げた。
た。

「あいつ」

「そうよ。許可なく突撃隊に加わるつもりなのよ。お願い、コウシチを止めて」

オールドリツチとキアーラは二手に別れて、突撃隊の配するところへ向かうが、既に時遅く、怪物たちの咆哮が地上で鳴り響き、突撃が開始されたことを自ずと告げた。

オールドリツチは壁に行こうとしたが、兵士達に止められた。

「二人、使者として赴く者が加わってるかもしれないんだ。確かめてくれ」

「ならん。一刻の猶予もない。お前の言うことが本当だとしても、代役を立てれば済む話」

「こつちには深刻なんだよ！」

オールドリツチはコウシチの名を叫び、壁に押し付けられた。

「声を立てるな！ 怪物がこつちへ来たら、作戦はばあで、エトリアは今日で陥落するかもしれないのだぞ」

オールドリツチは兵士の手を振り払い、別の地点へ向かう。どこもとてもしゃないが声をかけられる状況では無かった。障壁の前を大型級の樹海生物がぞろぞろと進んでる。

オールドリツチはあらん限りに走り、キアーラと合流した。

「彼は多分、最後の合流地点にいる」

必死の思いと追っかけも虚しく、二人は間に合わなかった。

その場にいた者の話から、少し前に来て、増員として来たと告げる者が一人いたと教えられた。以前、モリビトに捕まったときもそうだが、ブシドーなる連中はこれだから。

「死に急ぎやがって、馬鹿野郎」

オルドリッチは崩れそうなキアラを支えて、その場を立ち去った。

四一話 広沃ヶ原の合戦

サンガツトの大軍を指揮していたのは、賊崩れでもなければ、お山の大将でもない。

しかし、今の所は戦況はエトウの思つた方向に転ばず、全てが彼を拒んでいるかのよう。

勝利は彼がそれを掴もうと手を差し伸ばしても、その握つた手から何度も零れ落ちてしまつていた。だが、彼は依然として常人よりも遙かに強く、強大な力を有し、しぶとく、自らの力を遠くまで及ぼせた。

エトリアの必死の足掻きを見聞きしたとき、彼は空へ昇り、力を蓄えて、秘術を用いる準備も始めた。仮に、これで彼の奴隷が死に至つたとしても、彼にとっては最早どうでもよかつた。勝手に死ぬがいい。

彼は一人、翼竜にまたがり、あくまで抵抗を試みる非常にしぶとい者たちが守備する大都市を見下ろした。

久方の眩しい朝日が顔を出し、正にエトリアと援軍、突撃隊が勝利の予感で絶頂に達したとき、彼は吼えた。

愚かな怪物共と勝利に浮かれる人間達を蹴散らし、再び、ふ抜けた自軍を自我の無い優秀な殺戮人形へと変える為。

勝利を敗北へ。萌え出た希望の芽を貪欲に激しく摘み取つて自らの手中に収め、敵を絶望の淵に突き落とす為、彼は強大な力を振るつた。

彼は秘策の術もそつと唱えた。

思つたとおり、大都市の内部、妙に一箇所へ集中している。子供のお使い程度の使命すら果たせぬ奴隷を腹た立だしく思うも、彼の興味は外へ移つた。壁の外からも一つ、反応がある。ガリレオ砲があつた地点の付近。彼は確かめるべく、ゆるやかに下界へ降りた。彼へ逆らおうとする意思を持つ者などいないと考えていた。

*

オールドリツチとキアラは、戦鬪が西の外壁へと登つた。

今しがた、侵入を試みようとした敵兵と留まる一部の怪物を撃退す

*

る戦いが起こり、大門辺りにいたカール口とベルナルドはいつの間にか外へ、同じく大門で喇叭を吹いてコルトンらを見送ったジャンベは戦いを避けよう慌てるうちに、外へ出て行ってしまった。

二人は彼らを見つけ、救うべく、西の外壁へと登ったのであった。薄らと朝日が昇り、何が起きてるか見えやすくなった。

三人以外にも、数名が流れで外へ出たらしく、途方に暮れていた。二人は手当り次第に声をかけて、縄を投げるなりして、外にいる者たちを助けるよう求めたが、危険極まりないので駄目だと言われた。

オールドリッチとキアーラは、歯痒い思いで外へ流された不運な者たちを見守った。

そこへ、想像を絶する、何万人どころか何十万人もの悲鳴と苦痛の呻きを凝縮したかのような今まで聞いたどれよりも一段と大きな恐るべき声が一面を被いつくし、援軍の奇襲と到着で歓ぶエトリアを一瞬にして黙らせた。

エトリアの者たちは怯えながらも、期待と羨望の眼差しでゲンエモンを見つめた。

ゲンエモン以外にも、立ち向かおうと暴走しがちの馬から跳び降りた二人の騎手を気にかける者はいなかった。

他の騎手たちが振り落とされまいとしがみつく中、彼と彼の愛馬である旋風はたった一騎、空を旋回する忌まわしい長虫を相手に立ち向かう。

オールドリッチとキアーラは、アウルム家の白き姫アルバムが去り際、言い残した予知夢の内容を思い出した。

滅亡に瀕したとき、黒い剣と光る剣が衝突しあい、灰色に包まれた。光る剣の背後には、フードを被る何者かが応援するように手をかざしてた。白か黒か。良いのか悪いのかわからない。

迫りくる影に対し、ゲンエモンは刀を抜き払い、迎え撃つ。正に予知夢のとおり。

キアーラは、おかしいと言った。

「なにがだ」とオールドリッチ。

「刀を抜くのが早すぎる。あれでは、エトウが来る前に、刀の効力が薄

れてしまう。戻さない」と

「注意を自分に惹きつけてるんだろ」

とはいうが、オールドリッチはゲンエモンが刀を挙げたまま、肩を落として微動だにしないことに気が付いた。

更には、カールロたちがゆつくりと二人の元へ行こうとしていた。オールドリッチは呼び止めようと叫んだが、彼の必死の呼びかけも空しく、かの者の声と戦場の騒音に吸い込まれた。

段々と彼が近づくにつれて薄い靄にゲンエモンと彼は包まれてゆき、刀の光が弱まってゆき、遂に光はふつと消えた。暗闇がゲンエモンの周りに立ちこめる。灰色の光は生じることなく、光は闇に吞まれた。

そして、彼が仮面を外すと、不思議なことが起こった。エトウを中心にして、範囲数十メートルの空間がすっぽりとなにかに覆われたような気がした。

そこにあるのに、目を逸らせば、消えてしまいそうな幻覚か。目の前にあるはずなのに、仮面と鉄兜を外したエトウのいる範囲数十メートルだけ変に浮いた光景に見える。全く以て筆舌に尽くしがたい奇妙な領域があり、エトウと翼竜の他、ゲンエモンと既に立ち入ったカールロたち以外は、入るのを避けようとしてた。

「一体なんなんだよ、あれは」

キアラは青ざめた表情で答えた。

「わからない。ただ、彼はとても怒って、全力を出しているのがわかる」

キアラの言ったとおり、エトウは怒りに打ち震えていた。

エトリアの抵抗もさることながら、恐らく、奴隷が本来の目標とは異なる者に呪いの媒体を与えたことだけ分かった。

怒りのつぼを刺激したのはそれだけではない。術にかかりながら、派手な赤鎧の武者は自らにとつては避けたい術がかけられた剣を抜いて、愚かにも迎え撃とうとした。

エトウは鎧武者への声援を聞き、彼が特攻の中心であり、今やエトリアの希望を担った存在と知るや、愚凶な奴隷への不満が微かに和ら

いだ。少しは役立ったようだな。

彼はゲンエモンを見下し、ワイヴァーンを真つ直ぐゲンエモンへ向かわせた。もがき苦しむ者に止めを刺し、エトリアが英雄とみる者を呆気なく葬り、自らに勝利をもたらす。

西の大門に集う者たちとカールロたちがゲンエモンの名を呼ぶが、当人には届かなかつた。ゲンエモンの苦しみは頂点に達し、体中から気持ち悪い汗が流れて、刀は手から落ちそう。

エトウは笑みを浮かべた真つ黒な仮面を外した。

黒いマントを羽織り、あまりにも分厚い鎧を着込んだ者。異様なまでに白い萎びた顔に反し、黒々しい髭に覆われた口元。一番注目すべきはその眼球。無限の闇の中央に一点、らんらんと光る濁った小さい粒みたいな紅い瞳孔が死のような光を湛えている。

冥界から地上へと迷い込み、生ある者の死を貪ろうとする死神と呼ぶに相応しい存在が目の前にいた。

死神はゲンエモンへ誘いの言葉をかけた。

畏れよ、我を。命ず、言動能ず。

ゲンエモンの身内から生氣と勇気がすっぱりと抜けて、老いさらばえる哀れな老体だけが残された。彼だけではなく、周囲の者から戦う意思が失われた。

カールロ、ベルナルド、ジャンベは立ちつくし、ジャンベはぎゅつと目を閉じ、顔をしかめた。

エトウはゲンエモンを嘲笑った。

「派手な面頬と胃で顔を隠しても、俺にはわかるぞ。醜く老いさらばえし者よ、お前は自らに力があると勘違いした愚者にしか過ぎぬ。偉大なる余の覇道を妨げたことをいつまでも後悔せよ。お前の肉体を切り刻み、生暖かい血が滴る心臓を食らい、魂を永劫なる苦しみの牢へと繋いでやろう。さあ、死ね！」

エトウの言葉に従い、ワイヴァーンは彫像と化したゲンエモンと旋風に襲いかかった。ワイヴァーンの巨大な顎あぎとが迫っても、一人と一頭は動こうとせず、その身を捧げた。

旋風の首にワイヴァーンが噛み付き、一撃で噛み千切り、ゲンエモ

ンの刀を持つ腕も挟んだ。

ワイヴァーンは首を前方へ力一杯ならせて口を開け、ゲンエモンの身体を投げ飛ばしたら、地面に激突する前に大木ほどもある太い尻尾で叩きつけた。もう一度、今度は鋭い棘が生えた尻尾の上部分で叩いた。衝撃でカール口たちの足元がふわりと浮く。

西の大門に着く者たちは失意のどん底に堕ちた。

果敢なる冒険者の長ですら、彼には敵わなかった。追い風は向かい風に変わり、二国の援軍も不気味な集団相手に一歩引いていた。

「頼もしい我がしもべよ。その者の身を食らうがよい。見せつけるようにな」

ワイヴァーンは口に挟んだ旋風の首を噛み砕いて飲みこみ、次なる獲物へ向かった。

ゲンエモンは鎧より赤い鮮血を口からごぼと吐き、視界が見えなくなり、鼓膜も破れて耳が聞こえなくなった。ただ、全身からワイヴァーンの一步一步が伝わり、緩慢な死ではなく強烈な痛みに充ちた死が与えられようとしているのは理解した。

だが、ゲンエモンは完全に見捨てられてなかった。

誰もが気にも留めなかった馬から跳び降りた二人の内、上手く受け身を取れた一人がやっと立ち上がった。

重たい鎧を脱ぎ捨てながら駆け、ゲンエモンの後方にまで飛んだ七福八葉を拾い、ゲンエモンに失礼つかまつると言うと、鞘を取り、自らの腰に付たら、ゲンエモンとエトウの間に立ちはだかった。

籠手や膝当て、冑など最小限の防具しか身に付けておらず、紺色の着物と袴を履いている。冑も脱いで、彼の正体がやっと判明した。

恐るべき敵の前にして、ゲンエモンを守ろうと自らの身を盾にして立ちはだかる者はコウシチであった。

彼は冑を捨て去り、刀に光を取り戻すため、鞘へ一度収めた。

コウシチは泣いていた。両目からは大粒の涙が流れ落ちている。それでいて、激しい憤怒と挫けることのない闘志で眼が燃えていた。コウシチは抜刀し、翼竜の上に佇むエトウへ刃を向けた。

「立ち去れ、けがらわしい悪霊めが！ 極悪非道の頭よ。この方に手

を触れるな!!」

とても静かな、冷たい声が返ってくる。

「余とそのしもべの餌食を邪魔立てするな。無用な横槍を入れるようなら、きさまはその老いぼれよりも、惨たらしい苦痛と死を長い年月をかけてあたえてやるぞ。」

よく考えるがよい。お前は若い。このような老い先短い者に命を賭して守る理由などない。這いつくばり、精一杯、許しを請えば、見逃してやろう」

「理由なら、ある」

コウシチはきつぱりと胸を張った。

「拙者の実母はアヤネ。その夫である者の名は————ゲンエモン！ 父をこれ以上、傷付けさせない。二枚舌で嘘吐き、残酷なきさまの薄汚れた手に二度と触れさせるものか。もしも、来るのならば、お前に鍛え上げたそれがしの剣術と我が父の太刀の一撃をきさまの身へ存分に刻んでやろう」

エトウが怒りの声を上げると、翼竜は翼をはためかせた。巨体をまざまざとみせつけて、ゲンエモン同様、一本限りの棘を持った小さく、ひ弱な存在へぐんと首を伸ばし、血塗れの喙を開いた。

コウシチはたじろがず、刀を収めた。鍛え、磨き上げられた侍は混雑の中でも、そこに人がいないかのように身をかわせる。攻撃を避ける本能的とも取れる動作が自然と身についている。

若く逞しい剣豪は、紙一重というべきか。狂暴な喙をするりとかわした。ワイヴァーンは虚しく宙を噛み締めた。

コウシチは素早く、重い、熟練した孤自戦流の抜刀術。居合切り初撃の力と速度を保ったまま相手を何度も切り裂くブシドーの極みとされる必殺技、つばめ返しによる最高三撃をワイヴァーンの首に叩き込んだ。細身の刃のように尖り、修羅のごとく荒ぶる若武者の凄絶なこと。

一撃目で矢すら弾く鱗を裂き、二撃目で七福八葉の刃は首の骨にまで達し、最後は上段からの三撃目にて、ワイヴァーンは首の骨を断たれた。

劍豪がささつと後ろへ跳びずるや、巨大な翼竜は音を立てて崩れ落ち、大きな翼をくずおれさせたまま、びくびくと切れ落ちそうな首を震わして、手足を所在なさげに這わせてる。

返り血を浴びたコウシチは、槍の代わりに鉾を持ち、火を背負い悪を払う闘神毘沙門天がその身に宿ったかのような神々しさと阿修羅の凄惨な印象を見る者に与えた。

翼竜の亡骸から、エトウが身を起こした。彼の右手には太く長い長剣が握られて、左手には何メートルもある鎖付きの鉄球が伸びていた。エトウは脅すように立ち上がり、巨大な身から跳躍するや、刺すような鋭い憎しみの声を上げて、コウシチに斬りかかった。

コウシチは飛び退いて一撃目を避けたが、二撃目はさけられなかった。彼は鉄球を棒切れのように軽く振りまわした。コウシチは直撃を避けたが、利き手ではないほう。右手の籠手に当たった。

籠手は吹き飛び、右手の骨が砕ける。コウシチは悲鳴を堪えて、刀を鞘に収め、今一度、総大将に一撃を加えるべく、燃えるような熱い痛みを耐えて鞘を握りしめ、左手で柄を握る。

エトウは耳障りな哄笑を上げて、一思いに頭を潰してやろうとした。

そこに、またしても、立ちはだかる者がいた。

「コウシチー！」

もう一人はシシヨ。彼女は受け身に失敗して、コウシチより立ち上がるのが遅れた。

彼女は恐怖していた。彼女の剣は普通の物で、特別な術はかけられていなかった。

それでも、彼女は立った。愛すべき師の仇を討つため、師が遺した忘れ形見であり、仲間のコウシチをパラディンとして守る。

勝てなくてもいい、隙を作る。シシヨは走った。エトウの鉄球へ盾を投げ付ける。シシヨご自慢の大盾は真真ん中からぐしやりと凹んだ。シシヨは右手の長剣を受け止めて、エトウの身にしがみ付いて少しでも動きを封じようとした。

しかし、エトウの一撃を受け止めた瞬間、彼女の剣は折れた。シ

シヨールは鉄球の柄を持つ左手で殴りつけられた。胄ごとシシヨールは吹き飛び、麗しい金髪の女人の顔が露になる。がはつと吐血して、彼女は倒れた。

エトウは苛立ちを益々募らせた。ごく稀にいる、自分の素顔を晒して本気を見せつけても揺るがぬ者たち。ゴミ同然の者たちから度重なる邪魔が入り、他にいないかと見回し、離れたところで立ち尽くすカール口たちを見やり、視線を忌まわしい若侍へ戻した。

彼は絶対な自信に満ちて、自らの力に溺れてた。もう少し、注意していれば、離れた位置にいる者たちから一人欠けていることを見抜けていたはず。

コウシチは覚悟を決めて、気合い一声、エトウへ突進した。

「見苦しい特攻をしてくれるわ」

エトウは嘲笑い、正に鉄球を振り下ろそうとしたとき、後ろから何者かに体当たりを仕掛けられて、鉄球の勢いも相まって、よろめき膝を付いた。鉄球は大きく逸れた。

エトウは紅く濁った瞳孔を驚愕で見開いた。エトウは微かに後ろを振り向いた。青い服を着た、黒人の青年がふらつく足取りで走り去ろうとしてた。エトウに体当たりを食らわしたのはジャンベだった。

彼はゲンエモンに対し、コウシチはもちろん、エドワードほど親愛の念を抱いてるわけではなかったが、ちらと見開き、あの親しい老人がいたぶられるのを目撃した。

なんてことだろうと思いつつ、心は恐怖で埋め尽くされて、身動きが取れなかった。

そんなとき、父の仇でもある恐るべき敵と立ち向かうコウシチの姿を見て、ジャンベは今にも失いかけてた勇気の欠片を一粒、すくいあげた。同情と強い驚嘆が彼の心を捉えた。

この人は死んではいけない。たった一人で挑み、ワイヴァーンの首を落とした勇者！ あの人を置いてゆくことはできない。エドワードにとって師であり、第二の父でもある人の息子を一人死なせてはならない。

手に楽器は無いが、心で猛き闘いの舞曲を歌い、絶望に陥ったマン

テイコアとのお戦いを思い出し、ジャンベは動いた。

ジャンベの足取りは鈍かった。まるで、見えない鎖で繋がれてるようだ。一步ずつ、着実にワイヴァーンの翼に隠れ、そっと様子を窺った。

シシヨーが立ち、エトウに向かう。殴り飛ばされた。エトウが辺りを見回す。見つからないようにと祈る。コウシチの気合一声を聞いて、決着の時が来たのを知った。コウシチが叫ぶや、ジャンベは飛び出て、鎖を千切らん勢いで走り、エトウの背後へタツクルをかました。

堅い鎧へ突撃した衝撃と痛さで肩と腕が痺れ、目はややぼやけて足元も覚束ないが、ジャンベは即座に踵を返し、エトウから離れようとした。

コウシチの目にジャンベは入らなかったが、この大きなチャンスを逃すわけがなかった。

エトウは前を向き、目前に強力な修羅が接近してるのを知り、絶句した。

長剣を振るおうとするも無駄なあがき、激情に駆られた死を恐れぬ人間の前には、如何なけだものや怪物とて容易に勝てない。コウシチは自らの力、シシヨーと誰かの助け、父の刀と父へ注がれた全ての想いを込めた渾身の一撃！

伝説に謳われる剣士たちの一撃すら上回りそうな凄まじい一刀でエトウの胄ごと頭を真っ二つに切り裂いた。

刀の光と黒い靄が合わさり、灰色の光が生じた。すぐに灰色の光は強い白光へ変化し、強烈な光がエトウの頭と刀から、かっつと発生。

エトウはぶると全身を揺らすと、のけぞり一声、甲高く泣き叫んだ。

周囲どころか遠方の大気まで震わしたかと思うと、次第に力を失つてか細くなり、最期は徐々に風へ吸い込まれて、それっきり、二度とこの世界にかのおぞましい死を呼ぶ遠吠えが聞こえることはなくなった。

が、エトウは執念深かった。

今際に彼のマントや鎧からどす黒い靄が這い出て、僅かの間、コウシチを包み込み、散り散りに消えた。痛みと疲労の所為か。コウシチは受け身も取らず、仰向きに倒れた。

束縛から解かれたようにカール口たちは、敵総大将の周囲に横たわる三人の元へ駆けよった。ジャンベはもう一度退き返し、真つ先にゲンエモンの容体を確かめた。

穴が開いた真紅の鎧は、止めどなく流れる血で赤黒い色に変色してた。ゲンエモンは震える手でジャンベの手を掴んだ。老人の目は血で濁ってた。

「どなたか存ぜぬが、その心ある御方よ。無理かもしれぬが、我が願いを聞いていただきたい。妻のアヤネに耕七という名の息子とがいるのだが、もし会うことがあれば、伝えてほしい。臆病な故、苦しませてすまない。すまなかった。だが、愛していた、幸せを祈ってる、と」

ゲンエモンは苦しい息の下から必死に口を利いた。ジャンベが強く握り返すと、安心したのか、自ずと手を離れた。

ゲンエモンは物を言わず、そのまま動かなくなった。

「ゲンエモンさん、ゲンさん……。あなたの、あなたの子はお傍に——」

ジャンベはとぎれとぎれに言おうとした時、彼を呼ぶ声がした。ベルナルドだった。

「悲しんでるところすまないがジャンベ君。言えた義理ではないが、生きている者を優先するんだ。コウシチとシシヨーはまだ生きてる。二人を運ぶのを手伝ってくれ」

ジャンベとベルナルドはゲンエモンの遺体に一礼して、コウシチとシシヨーの運搬にかかった。

二人を運ぼうとして、運び手たちはエトウの死体を見やり、啞然とした。

エトウの死体は音と白い煙を立てて肉と皮が溶けて、虚空の暗い眼窩も溶け沈み、鄙びた二つに割れた顔面は骸骨へ風化した。エトウの骸骨と身に付けていた物はとんでもなく臭い墨のように黒く溶けた

腐肉の液体がべつとりと付着し、運搬者たちは吐き気を堪えて、急いだ。

かれらは二点、あることに気が付いた。

一つは、怪物であれ、人であれ。エトウのいた範囲数十mには近づこうとしなかった。

二点目が実に厄介。

総大将を討ち取った。戦は終了かと思われたが、カセレスと名乗る隻眼の男が触れ役に、合戦の続行を命じさせていた。

「総大将の代理カセレスが命ずる。エトウの仇を取れ、サンガットよ。敵を滅し、豊かな未来、豊穡なエトリアの大地をその手で掴み取れ」カセレスにはエトウの恐ろしさも無ければ、力も無かったが、一定の指揮力があり、彼がいる南側を中心にして、陣形がまとまり、混乱していた西側の兵士達は惹き付けられるように南へ集結しつつあった。

南への攻撃が激しくなるのは誰の目にも明らか。サンガットの攻撃地点は西から南へと変更。

最後に残された二番目に大きな翼竜がカセレスらを乗せて飛翔し、吠える。

一番小さな個体は、エトウが死ぬや束縛から解き放たれたのか。背中に騎乗しかけてた人間たちを振り落とし、大きな牙と鉤爪で近づく者を適当に殺したら、何処へと飛び去って行った。

非常に騒がしい叫びや物音があちこちから響く。間もなく交えられるであろう大合戦の渦中に巻き込まれる恐れがあることに気付き、運搬者たちは歩を速めた。門は固く閉ざされてる。

「けど、怪物はいないし、敵兵は構おうとしない。手頃な橋を渡そう。壁に戻るチャンスはこれが最後だね。これから、多分、最後の戦いが行われるよ」とベルナルド。

メテイルリクとエピザ・トーティの援軍は進捗が芳しくなかった。

広沃ケ原の西側は二国により席巻されて、サンガットの主力ともいふべき野営地は壊滅できたが、エトリア本都市の周辺は敵がひしめき合い、門にも達しておらず、西には劣るが北と南の戦力はいまだ健在

であり、二国と西の大門から率いられた怪物たちの進撃を阻止していた。

堀の前で一度立ち止まり、手頃と思われる物を探した。

幸い、付近に無傷の梯子があり、これを橋替わりにすることにした。武器は重たいので、武器以外は全て外した。始めにコウシチを三人で運んだ。

橋を渡るのは、慎重を喫した。とても不安定で、人を背負ってるので余計に揺れる。段の感覚も大きく、さしずめ綱渡りをしてるかのようで、生きた心地がしない。

壁のふもとまで着くと、数本のロープが投げられて、体を縛るよう言われた。

担架代わりのマントにコウシチを包んで、一人が背負い、もう一人が後ろから支える形で壁を登った。一人はただ運ばれた。何十人も引いてくれたので、案外、壁はすぐに登れた。

シシヨーも三人で運び、一人が背負い、ジャンベは支えた。

次に残された八人が渡り、壁から吊り上げられる中、ベルナルドとカールロは梯子を蹴飛ばし、水に沈めた。

何故と壁から叫んだジャンベに、カールロは笑顔で応えた。

「敵さん、こつちに気付いたようだ。全員は無理だ。大丈夫、上手くやるさ」

二人はある者を目指して、全力で走った。南側へ行くこうとする奴隷兵士たちに混じって、モンパツイオの一味がいたからだ。

人混みを掻き分けて、オールドリツチとキアーラも来た。キアーラは悲痛な声でコウシチとシシヨーの名を呼んだ。オールドリツチは舌打ちして、交互に壁の内と外にいる二人を見やった。

「全く、どいつも勝手な行動ばかりを。リーダー失格だぜ！ 俺、そんな威厳ないかねえ。まあいい。キアーラ、泣いてないで運ぶぞ」

「泣いてなんかない」

キアーラはきつと、オールドリツチを見上げたが、目元からは薄らと涙が零れかけている。

二人は、それぞれ数人がかりでケフト施薬院へと運ばれた。

カセレスは雷で撃たれたように立ち上がり、ガリレオ砲が置かれてた近くを一瞥する。

最大のワイヴァーンが首を斬られた。翼竜の残骸が邪魔をして見えないが、総大将が跳躍して、翼竜の首を落とした者へ攻撃を仕掛けたのはわかる。時折り見える、振り回される鉄球。最後に、この世ならざる慟哭が戦場にある一切の物音を吹き飛ばしたのを聞いて、カセレスはエトウが死んだことを感じた。

そうか、奴めは死んだのか。これほどの大軍を率いて、散々、大口を叩いておきながら、無様なことよ。

カセレスは笑った。

人目もはばからず笑いながら、彼は自分が泣きかけてると知り、袖で目元を擦った。

やっと、気付いた気がする。自分が選ばれたのは、単に以前からの右腕ポジションでもなければ、それなりに指揮力があるからでもない。彼は心の奥底でエトウを真に敬っていた。

恐怖ではない、見せかけでもない、本当の信仰心に近い形で彼を崇めてた。

表面上ではときに悪態を吐き、こんな奴の下でと嘆き、異常な思考と行動に辟易もしていたのは事実だが、根底では彼の指導力と強大な力に惹かれて、素直に尊敬してた。それを見抜いたからこそ、自らを高い位に就けたのだろうとカセレスは考えた。

本人がそこまで考えたか定かではない。

今となつては確かめようもないが、カセレスはエトウの意思を継ぎ、なによりも、このまま自軍を見捨て置けない思いもあり、彼の一瞬、揺らぎかけた意志を強固に再び、エトリア攻略へと向かわせた。一番小さいのが逃げ去ったようだが、元より無関係。近づくようなら殺す。そうでなければ、捨て置く。

カセレスは選りすぐりのライダーたちと騎乗した。一旦、空を飛び、状況を把握したい。

触れ役に攻撃続行を言うよう命じて置き、飛翔する。飛行限界、雲

が漂う近くまで来て、目を凝らす。配下の一人が叫ぶ。

「カセレス様、あれを！」

配下の叫びがなくても、カセレスの目にも見えた。どうやら、勝利の女神が微笑みかけてくれるのは、エトリアではなくこちらのようだ。カセレスは歪んだ笑みを浮かべた。

賊時代、豪華な物を手に入れた時、勝利を確信した時、よくみせた正に悪漢の笑顔。

*
—————
*

コルトンは頭を振り、目の前に集中した。

ゲンエモンの死は誰のせいでもない。自分ができることを考える。

突撃隊の指導者はドナ・A・トルヌウーアに交代した。彼女は真っ先に馬を御し、方々に散りかけた突撃隊をまとめた。ゲンエモンと落馬した二人、怪物と敵兵へ突っ込んだ不運な一名を除けば、集まった。彼女はラクロワ、ブレンダンも含め、ゲンエモンを助けることを許さなかった。もっとも、拘ったのはラクロワだったが。

「混乱してるとはいえ、敵が多い。非情だが、西側の敵戦線の薄い箇所を突破し、二国のどちらでもいい。陣に加えてもらうのだ。その方が長く戦えて、生き残れる可能性もある」

「救出に向かうべきだ」とラクロワ。
「賛成だ。じじいも全て承知してんだ。行くぞ、禿げ。見苦しく無駄死にするな」

ブレンダンとドナにラクロワは殴り掛かりそうになったが、乱れつつも、こちらへ迫ってきてそうな一団を見て、涙を飲んで、ゲンエモンのいる方向へすみませんと頭を下げた。自らの勝手で他を死なすわけにはいかない。

一見、冷たく固そうに見えて、彼女の瞳には罪悪感が宿ってた。それでも、今生き延びられる可能性がある者らを優先して、彼女は心を鬼にした。

ドナは先頭を走り、邪魔立てする者には容赦なく術式を浴びせて、斬り倒した。女傑アジロナの再来に突撃隊は励まされて、敵は慄き、道を開けた。コルトンは馬の背に揺さぶられながら、敵兵の会話を聞

いて、思わず顔がにやけた。

自分を指して、身分の高いあれらを討ち取れと聞いては、何故か笑わずにはいられない。

かつて、傭兵の時、豪華な鎧を着けた騎士を倒したことがある。

名のある者に違いないと思ひ、数人で挑む。高笑いする騎士を打ちのめし、期待して、死体を運んで返ってきたのは叱責と嘲り。

騎士の鎧を着た者は、身分の低い者の中でも体付きが良い者であり、領主の身代わりにわざと目立つところ走っていたのだ。つまり、なんの値打ちもない。

あの兵士達が自分を倒したら、きつと喜ぶだろう。特に高貴な生まれでもなし、高い役職に就いた訳でもない、一介の冒険者にしか過ぎないと知り、肩を落とすだろう。今なら、あの時の身代わり男が笑ったのも理解できる。

自分のような立場の低い人間を豪華な物を身に付けてるぐらいで、きつと偉い人間だと思ひ込み、血相を変えて、ご苦労なこつたよ。

もちろん、おいそれとこの身をくれてやらない。コルトンはかかってくる敵兵を返り討ちにした。

途中、恐ろしい断末魔が轟き、全ての音と動きも止まった。コルトンはぶると芯から冷えた。だが、突撃隊を率いるのはうら若き戦の乙女。ドナが号令をかけると、突撃隊は奮い立ち、茫然と立ち尽くす敵兵を散らす。

破れた柵を抜けて、壊れたテントの群れに着くと、メテイルリク兵士達に止められる。

「待て。無用に通すわけにはいかん」

「ならば、時間を取らせないでほしい。我らはエトリアの騎馬隊。馳せ参じるために血路を切り開き、ここまで来たのだ。大将にお目通し願いたい」

メテイルリクの者たちは顔を見合わせた。

先導は女だが、立派な出で立ち。後方の者たちも中々に身分も低くなさそうで、自国の者も五名ほど見受けられる。歩兵の隊長格は彼らを通すことにした。この現状で下手に騒ぎを起こしたくなかった。

突撃隊は二列で整然と進んだ。メテイルリクの戦線まで行って、一旦、停止。

騎乗した身分の高そうな軍の将校に問いかけに対し、ドナは毅然とした態度で答えた。

女だからと下に見てた将校は、ドナの媚びない、動ぜぬ強く頼もしい姿勢に目を張り、しばし待たれよ、デアアドルゴ将軍に意見を仰ぐと馬首を転じた。

将校は意外とすぐに戻り、兵士達に道を開けさせた。

「あなた方は我が軍の騎馬隊の補佐に付いてもらうことになる」

狼狽した警戒の声上がるも、自分達に対してではなく、どうやら、西の方を指してた。

「敵増援部隊出現！」

メテイルリクの戦列が騒ぐ。

「敵増援部隊接近！ 凄い数だぞ。 巨大な地竜もいる。 南方人と北方人、サンガットの軍もいるぞう！」

各個迎撃態勢を取れと叫ばれる。

四六騎の隊は列を潜り、中央にいる将軍の下まで馳せ参じた。タイロンと同じくらい黒く、彼に一層の威厳と年齢が加わったかのようなデアアドルゴ将軍がいた。エトリアの騎馬隊は将軍に頭を下げた。

「お目通しと同時に、お役目をいただき感謝いたします」

「よい。 僅かでも、味方が増えるのはありがたい。 見よ」

デアアドルゴは更なる西の方角を指した。 突撃隊は言葉を失った。

西では敵の新手、優に二万か三万はあろう一大増援部隊が進軍していた。

恐るべきは先頭をゆく怪物たち。 間違いなく、死を呼ぶ竜骨である。

ただし、大きさは世界樹の迷宮に生息する個体の比ではない。 数倍はあり、四足歩行で安定した移動を行っている。

背には、これまた巨大な櫓が載せられて、褐色肌の南方人たちが操縦している。 この巨躯な生物が十頭もいる。 背後では、敵軍が白銀の広野に密集している。

あれらの怪獣に戦える手立てが思いつかない。一難さってまた一難。巨大な怪獣たちは難攻不落の様相、攻める気は起きず、それは自殺行為にも等しい。

部下たちが動揺を隠せない中、ディアドルゴと一部の者たちは不安に眺めつつ、なにかを期待してた。

「なにか打開策があたりで」

コルトンは恐る恐る話しかけた。

相手は將軍。身分の違いに気圧されつつも、コルトンは聞かずにいられなかった。

「残念ながら、エトリア同様、我らにも打って出る力はあまりない。だが、勝負は時の運。意外なことが起こるかもしれん」

援軍の出現は風のように伝わり、味方は絶望に陥りかけ、敵は狂乱乱舞。

潮の流れは我々にあり。

大将を失い、退路も断られたとあって半ば捨て身にもなり、カセレスに促されて、自らを追い立てて南へ集結した軍勢は留まるところを知らず、不気味な表情を浮かべたときよりも過激な勢いで南外壁への堀と壁を攻め立てて、大量に梯子や即席の橋がかけられ、倒した櫓を梯子にして渡り、侵入されていた。

また、北と西の敗残兵が二国の方へ迫り、増援部隊と挟み撃ちすべく、距離を縮めている。怪物たちは一部の大型を除き、あらかた討伐された。

角笛が吹かれ、喇叭が鳴り響く。コルトンは辺りを見回す。この晴れた空の下、真正銘の決戦が行われる。

当初から望みなきと考えられて、いざ始まれば一進一退と思われてた戦いはやはり、予想通り、サンガットの勝利に終わりそうだった。

望みはついた。敵総大将を討ち取ったのも束の間の安息、後は死が襲うまで戦うのみ。

いぎ、進め！ いぎ、進め！ エトリアへ向かって突き進め！

我らの敵を滅ぼせ！

いぎ、進め！ いぎ、進め！ エトリアへ向かって突き進め！

増援部隊、巨軀なる怪物たちの背後でこのような関が木霊してた。随分とやる気なこと、コルトンは乾いた笑いをもらった。

エドワードを責めまい。奴は奴なりに懸命にしているのだろう。コルトンは覚悟のほどが定まり、剣を持つ手を力強く握り締めて、遙か西方の増援部隊へ挑戦的な鋭い眼差しを送る。

ところが、こはいかに。驚天動地！

全く以て予想外の事態が発生した。

木霊する関に合わせて、大量の火矢が放たれた。しかし、それは二国の援軍に対してではなく、先頭をゆく十頭と前列の部隊へ撃たれたのであった。

火矢は着弾するしないに関わらず、人一人を吹っ飛ばす爆発が起こり、地竜の鱗を傷付け、櫓に穴を開け、戦列をゆく地上部隊を散らす。間髪入れず、二度目の一斉攻撃が行われた際、四頭の地竜は倒れ、一頭はシヨックで暴れ、傾いた櫓の重さに耐えきれず、右両足が折れて転んだ。

残す五頭は別々に向かい、暴走し、逃げ惑う戦列の者たちを尻尾や足で踏み潰した。訳も分からず前列の者たちは反撃して地竜を余計に怒らせてしまい、結果、同士討ちにまで発展。

反面、後方に配された、前方の自軍を攻撃した部隊は一糸乱れぬ足取りで増援部隊に対する攻撃の手を緩めなかった。

サンガットの旗は捨てられて、後方の部隊、およそ一万は超える軍勢は色彩豊かな旗をかざした。

エトリアと同盟を結ぶ、エトリア、メティルリク、エピザを除く、二四ヶ国の内の二ヶ国の旗がはためき、右翼の主力部隊かと思われる三千騎が掲げる青い御旗が目に入り、コルトンは思わず叫んだ。周りから正気を失ったかと引かれても、お構いなしに高らかな喜びの笑いを上げる。

コルトンは三千騎を食い入るように見て、エクウウスの民かと思っ

た。遠目からでも、彼らの髪は黒く、明らかに違うのに、そう見えた。彼らの乗馬もさることながら、弓の扱いに長けた様と雰囲気はコルトン

にそう錯覚させた。

三千騎は弓を射ながら敵陣中央を突き進み、真つ二つに別けた。有象無象と化した、取り乱した二つに別れた軍勢を二国の軍勢がそれぞれ迎え撃つ。間近まで蒼き旗の騎馬軍が来た時、コルトンの疑念は確信へ変わった。

二騎、蒼い旗とエトリアの国旗を掲げたのが来る。一人は他と同じく黒髪だが、もう一人は肩までかかった金髪。

鷹のように鋭く澄んだ碧眼、長旅でくたびれた緑のマントを羽織るも、当人には一切の疲れや気後れは感じない。手には強力な白い長弓を持ち、黒い悍馬かんばに騎乗している。戦闘意欲で燃え滾り、尚且つ、冷静に相手と状況を捉えようとする眼差しは、間違いないホープマンズのリーダーであるエドワードであった。

エドワードと思しき人はディアドルゴ將軍の傍に行くとき、一礼した。

「私は此度、カルツバスの者たちの案内並びに各国の使者を勤めさせていただきました、エドワード・ウォルと申します」

「その節はご苦労であった。して、それだけの用事で参られたかな？」
「実は、將軍閣下のお傍におられるその者と話をするために参りました。実を言うと、私は冒険者であり、彼と共に世界樹踏破を目指しております。許可を願えませぬか。すぐに終わります故」
「手短にな」

こうして遂にエドワードとコルトンは、エドワードの予言したとおり、戦場のさなか互いに馬上の人として再会を果たした。

ディアドルゴは更なる援軍の到着を知った風な口ぶりだったが、どうでもよくなった。コルトンは半ば歓び、半ば探るような目付きを送った。

「どうしたんだ？ 喜んでると思つたら、疑つたりして、戦場の狂気とやらに飲まれておかしくなつたか」

エドワードは砕けた口調で話しかけた。コルトンは笑みを隠せなかった。

「いや、敵の大将さんが厄介な術を色々使ってくれたから、あんたはま

やかしの類じやないかと一瞬、疑ったんだ」

「それは大変だったな。さあ、時間を取り過ぎた。共に山ほど語り合いたいが、まずは邪魔者を蹴散らし、俺たちが多く支払わされた損失の代償をたっぷりと支払わせてやろう！ 今度はこつちが狩りたてる番だ。モンパツイオたちも動く頃だろう」

「どういうことだ!？」

「聞きたきや、生き残ってみせろ」

エドワードは笑顔で言う、きりつと険しい表情を作り、騎馬の列へ戻った。

情緒もなにもない、出会ったばかりで判らないことを増やしてくれて、あんにやろと言いたくなかったが、危機的状況から脱したわけでもないのにコルトンは安堵すら覚えた。

そして、エドワードの言ったことはすぐに実現した。

西から来る増援部隊で二国の援軍を挟み撃ちにしようとしてた一万以上の師団にて、奴隷と身分の低い者たちの間で蜂起が起きた。

「時が来た！ 時が来たぞ！ いまこそ、自由を得るために戦え、本当の敵と戦うんだ」

モンパツイオ以外にも、あちこちで蜂起が呼びかけられる。奴隷と身分の低い者たちは、後列にいたり、自分達を盾にしようとしてた市民兵や正規兵へ武器を向けた。

最大の恐怖で象徴でもあったエトウ亡き今、彼らを縛り、止められる者はいない。

サンガットの混沌と混迷はそこだけでは止まらず、橋となった櫓が爆破されるや、南側でも同士討ち、敵前逃亡。エトウ率いる王賊軍、もとい、サンガット国軍は周章狼狽してなすところを知らなかった。

増援部隊に多くの敵が紛れて、しかも、奴隷や自国でも人間扱いされてるか怪しい位の無い者たちが反旗を翻すとは夢にも思わず、暗澹たる恐怖に襲われた。

潮の流れは大変不利な方向に変わり、掴みかけた勝利は離れて、金床に横たわるのは自分達へと代わり、巨大な鉄槌が振り下ろされる。

エキアロモの息子エキアロノ将軍が自ら前線へ赴き、北へ先陣を切

り、蜂起した者たちを支援する。

南はディアドルゴ將軍指揮下の規律取れたメテイルリクの軍勢が進み出る。コルトンとドナ、ラクロワは雄叫びを上げ、ブレンダンは冷徹に敵を討つ。

蜂起した者に混じり、モンパツイオとその一味が戦い、隻眼のヌナは確かな狙いで矢を射る。近くでは、ベルナルドが鞭をしならせ、剣で刺して斬り、カールロも負けじと弓弦を引く。本都市では黒き名剣を持つロデウムが、赤髪のアデラが存分に剣をふるい、サヤは鋭い一閃で侵入者を斬り伏せ、若いリカルドも奮戦し、ブルーナとパーヴォらパラデインは敵を盾で防ぎ、ヴァロジヤは怪力で敵を捻じ伏せる。キアラとピエルパオレら、カースメーカーたちはケフト施薬院に近づく不屈き者を呪言で縛り、アクリヴィはレイピアを抜き、隙あらば術式を浴びせる。

各国から派遣された精銳の戦士団と長槍の扱いに長けた手強い傭兵部隊が増援部隊を食い止めて、一致団結した固い包囲網で敵を逃がさず、追い立てる。

陽で色濃く焼けた黄色人種、黒い髪と瞳、かつての騎馬大国の末裔であるカルツバス族三千騎は戦場を縦横無尽に駆け廻り、百発百中ともいえる命中率で敵を屠る。強力な弓アーチドロワーを持つエドワードは、確かな目で兵を指揮する将や隊長を次々と狙撃していく。矢は弾丸の勢いで飛んでゆき、厚い鎧と盾すら貫く。

サンガット軍は段々と追い詰められる。上空を成す術なく飛ぶカセレスは自棄になり、手綱を引いて、翼竜に地上への攻撃命令を与えた。狙うのは、規律正しいメテイルリク軍の中心にいるディアドルゴ將軍。

迫りくるワイヴァーンに対し、さしものメテイルリク軍も統率が乱れた。

しかし、カセレスと翼竜は見落としてた。メテイルリクの近くにカルツバス三千騎がいたこと。將軍の元へ、凄腕狩人で戦士でもあるエドワードが来てることに。

エドワードは迫りくる巨大な存在へ躊躇いなく矢を放った。矢は

風圧で押されず、翼竜の鼻づらに刺さった。

翼竜は悲鳴を上げ、首をもたげて上へ逃れようとしたが、間に合わない。エドワードの愛馬であるブケファラスは、手綱を引かずとも主人の思った方向へ赴く。

エドワードは地上近くにいる翼竜へ、連続して三本の矢を射かけた。喉、顎へ刺さり、最後の一本は口の中、上顎の柔らかい部分を通して脳天にまで至った。

ワイヴァーンはぐるんと白目を剥き、手足と翼をじゃじゃ馬のようにばたつかせたら、激しく旋回して、地響きを立てて地面へめり込んだ。

エドワード、デアドルゴ將軍と側近、メテイルリク軍がカセレスと難を逃れたライダーの生き残りを捕縛。

エドワードは、カセレスが口や鼻から血を流し、目が回っているとお構いなく、厳しくカセレスの身を將軍の前まで引っ立てた。

デアドルゴ將軍は彼の口から全面降伏の言葉を聞き出そうとしたが、その必要は無かった。

何故なら、カセレスが乗るワイヴァーンが墜落した時、サンガットにおける最後の戦意の糸も切れて、彼らは戦いの手を自ずと引いた。それでも、將軍はカセレス本人から聞かねばと、居丈高に問いかけた。「武装解除して、全面降伏をしろ。命までは奪わん、手荒な真似はしない」

「対等とは言えんな」

カセレスは冷笑した。

「俺から言えるのは、もう一つしかないだろう。負けだよ、俺たちの完敗だ」

將軍は納得したように頷き、側近と兵士達にも伝えさせた。

「聞け。お前達の大將が降伏を申し出た。最早、争う意味はない。武器を捨てよ。生命は保障する」

戦場は静まり返った。だが、一人、また一人と武器を捨て、盾を投げ、冑と鎧を脱いだ。

サンガット、南方と北方の生存者は暗い面持ちで武装を指定された

箇所^{箇所}に捨てていく。立ち尽くす者もいれば、あまりの疲れで泥土と雪、血で汚れた地面で服が濡れるのも構わず息を吐いて座り込む者もいた。

彼らは途方に暮れて、次に何かあるのだろうかと手をこまねく。

エトリア史上初の合戦。広沃ヶ原と本都市で繰り広げられた攻防戦は終結。

二月一四日の開戦日から今日で二二日。短くも長い八日間^{ようか}であった。

エドワードとコルトンは西の大門に向かって馬を進めた。

二人の剣はそれぞれ異なっていた。

血糊が付きすぎて満足に切れない。もしくは、折れたり、投擲にも使ったので、二人が持つのは敵や味方の武器を鹵獲^{ろかく}した物。

コルトンは三本、エドワードは五本。エドワードのサーベルは長旅の疲弊が出たのか、戦って間もない内に折れ曲がった。

ドナ、ラクロワやブレンダンなど、冒険者の乗り手も加わった。彼らは喜びも悲しみも感じられないほど疲れ切っていた。

馬に乗り、時に降りて、戦った。彼らは掠り傷一つ負わなかった。技と力が優れてたのもあるが、強い武運に恵まれてたのもあった。

エトリア本都市とその周辺は、人間の嘆きと血、無造作に転がる死体、戦いにおける殺戮行為から来る罪の意識、鬱屈した思いと酷い疲労に覆われた。

冒険者たちはまず、彼らの会いたいと思う者たちと会うため、向かっていった。

大門を潜る前に馬から降りる。エドワードはできる限り、しっかりと前を向く。

ジャンベ、アクリヴィイ、ロディム、マルシアが人混みを分けて進んでくる。他にも突撃隊へ加わった冒険者の同パーティの者たちが迎えに来る。

「え、エドワードごあん！ コルトンさん！ ほんとに……うう、よかった」

ジャンベは脇目も振らず泣きじやくる。ロデイムは自慢気に二十人倒したとほぎく。

「おい、どうした」とコルトン。

ロデイムは頭に包帯を巻いてた。

「ああ、最後の奴に頭を槍で小突かれたのさ。なに、大したことはねえ」

ロデイムは自ら頭をばんと叩き、いててと擦った。

そんなロデイムを見て、マルシアは微笑んだ。

「ロデイムつたら……。でも、安心するには早いけど、良かった」

マルシアは両手で顔を押しさえ、肩を震わして泣いた。彼女は直接戦わなかったが、白衣には戦傷者の血があちこちこびりついてる。彼女もまた、別の形で戦っていた。

アクリヴィはいつになく優しい表情で手をマルシアの頭に添えて、軽く撫でて、妹を労わる姉のように接する。

コルトンはエドワードの背を小突いた。わざとらしいにやけ面のコルトンを、エドワードは訝しく思った。

「約束は覚えてるよな、エド。帰ってくるまでは、俺がリーダーだったよな」

「気に入ったのなら譲る」

「冗談じゃない。もうお断りだ。細かいことはおいおい話すとして、リーダーはもうこりごりだ。お前に返すよ」

それは残念とエドワードは笑顔で返した。

冒険の再開はもう少し先だが、エトリア在住の冒険者パーティが一組、エドワードとメンバーは数か月。いや、一年越しとなる再会を果たして、今日、ホープマンズは再結成をした。